眠狂四郎無情控

柴田錬三郎



新潮文庫

柴田錬三郎
Shibata Renzaburô
(1917—1978)

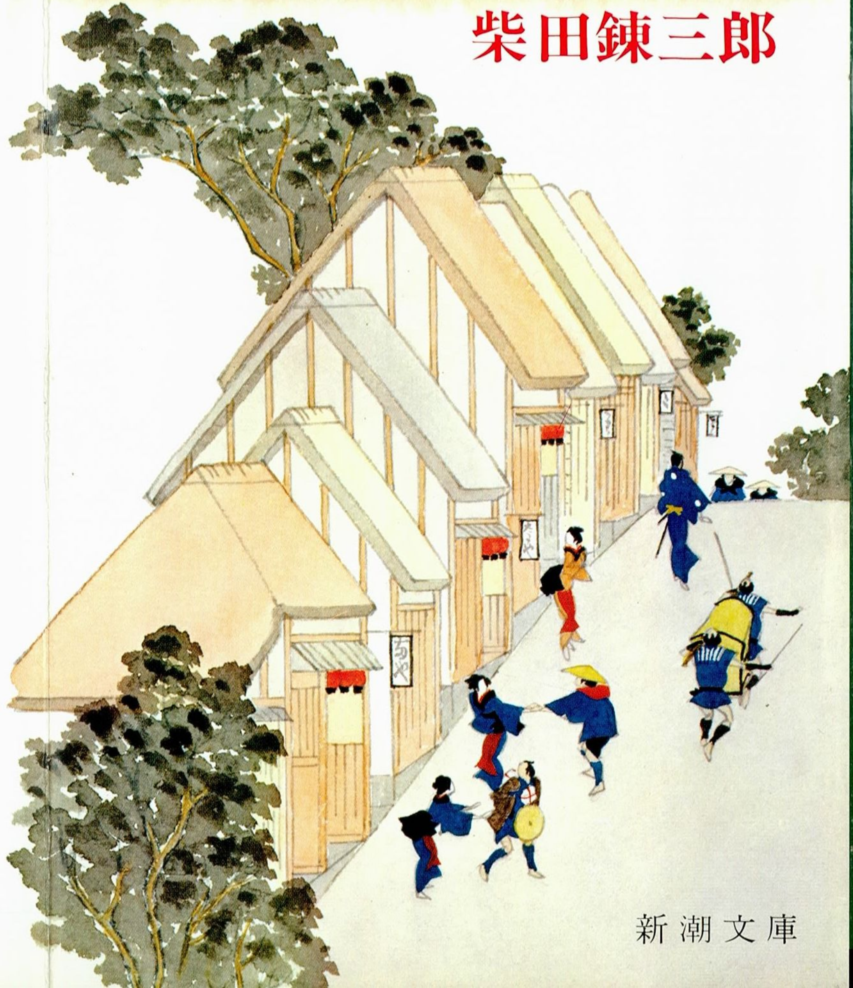


岡山県生れ。慶応大学支那文学科卒業。在学中より「三田文学」に現代ものの短編を発表。戦後、「書評」の編集長を経て、創作に専念。1951(昭和26)年、『イエスの裔』で直木賞を受賞。以後、時代小説中心に創作し、'56年より連載開始の『眠狂四郎無頼控』は、一大ブームとなった。主な作品に『剣は知っていた』『赤い影法師』『運命峠』『御家人斬九郎』『剣鬼』『決闘者 宮本武蔵』等。享年61。

カバー 東啓三郎

眠狂四郎無情控

柴田錬三郎



新潮文庫

眠狂四郎無情控 柴田錬三郎 し 5 23 新潮文庫 ¥743

9784101150239

1920193007435

定価：本体743円(税別)

大坂城落城の際に、運び出され、いずこかに隠匿された太閤の御用金百万両をめぐる異変——黄金を求めて、安南の日本人町から鎖国令下の母国へ、決死の覚悟で潜入してきた人々に同調した眠狂四郎は、老中、若年寄をはじめ、いずれも己れのものにしようとして暗躍する勢力とまんじ巴えになって、死闘をくり返す。秘剣円月殺法で、窮地をくぐり抜け、宝探しに挑む狂四郎の活躍。

ISBN4-10-115023-0

C0193 ¥743E

新潮文庫
柴田錬三郎の本

カバー印刷 錦明印刷　デザイン 新潮社装幀室

新 潮 文 庫

眠狂四郎無情控

柴田錬三郎著

新 潮 社

新 潮 文 庫

眠狂四郎無情控

柴田錬三郎著

新 潮 社 版

2697

眠狂四郎無情控

伊豆（いず）の燈台守（もり）

一

伊豆の山に、早春の暮色があった。

中天には、昼からかかっている上弦の月があり、下方に棚引（たなび）いた積雲の光冠を、鮮やかに白く彩っていた。

樹影を濃いものにした岬（みさき）の彼方（かなた）にひろがった凪（なぎ）の海に、二つ三つ漁火（いさりび）が、あかりを増していた。

無想正宗を落し差（ざし）した、ふところ手の眠狂四郎の辿（たど）って行く坂道は、伊豆半島最南端石室崎（いろう）（現在の石廊崎（いろう））へ向って、あるいは千仞（せんじん）の断崖（だんがい）に沿い、あるいは、松と橅（ぶな）の密林を抜けて、一上一下していた。

狂四郎は、韮山（にらやま）代官江川太郎左衛門英竜（ひでたつ）（坦庵（たんあん））の役宅に数日逗留（とうりゅう）して、一昨日そこを辞し、天城（あまぎ）六里の山越えをして、下田へ出、そこの古刹（こさつ）に一泊して、昼すぎ、南へ向って、道をひろったのである。

べつに、為（な）さねばならぬことがあったわけではない。

伊豆半島最南端の石室崎には、燈明台が設けられていた。

その燈明台の守が、狂四郎の知己だったのである。

三年ばかり前まで、江戸神田お玉ヶ池で岡っ引をつとめていた佐兵衛という老人で、隠居してから、自ら願い出て、石室崎の燈明台の守になったのである。

十手をあずかって四十年、ただの一度も世間にも自身にも慙じる行為をしなかった老人と、かぞえきれぬほど人命を奪った無頼の浪人者と、本来ならば敵同士であるべきものが、どこでどうまが合ったか、互いに、ごく限られた親しい知己の一人にかぞえていたのである。

いま——。

昏れかかった伊豆の山と海を、べつに愛でるでもない暗い眼眸を宙に置いて、坂道を踏んで行く狂四郎は、いつぞや、佐兵衛と交わした問答を、思い出していた。

狂四郎は、佐兵衛に年齢を訊ね、丁度六十になった、という返辞に、

「当人も他人も、あまりいい仕事とは思っていない稼業でも、四十年もつとめあげると、お前さんのように、慈味あふれた顔や態度になるのか」

と、云い、次いで、この男としては珍しい述懐を、口にしたものであった。

「……迷えば煩悩、悟れば菩提——というが、わたしのような悪業の徒は、どう悩んでみたところで、風を繋ぎ、影を捕えるというやつだ。……尤も、凡夫盛りに神祟めなしで、当分は図迂々しく、生きて行きそうだが……」

この言葉に対する佐兵衛の返辞は、次のようなものであった。

「悟ろうと思うも迷い、と申すではございませんか。あっしは、無学文盲で、むつかしいことはよくわかりませんが、だんだん年をくらうにつれて、苦しいことや悲しいことは、なるべくその日のうちに忘れてしまうようになりました。どうせ、てめえのようなごみ屑にひとしい野郎が、じたばたしたところではじまらねえ。起きて半畳、寝て一畳、天下取っても二合半、公方さまも、

てめえも、食って寝ることにちがいはありやしねえ――とまあ考えて、仰せつけられた御用を、なんとかつとめ終えて、せめて畳の上で往生させて頂けりゃ、これで思いのこすこたアない、と自分に云いきかせて居ります」

女房も子供もいない孤独な老人が、十手を返上しておいて、えらんだのが、伊豆半島の末端にある岬の燈明台であったとは、いかにも終の栖にふさわしい、と狂四郎には思われた。

――佐兵衛は、四十年の岡っ引稼業で、おそらく多くの人間を、流人として、伊豆七島へ送ったに相違ない。その流人船が航行した海を、照らす役目を、余生の仕事としたのは、罪ほろぼしの料簡であろうか。

この虚無の男が、自ら進んで足をはこんで人に会いに行くのは、曽てないことであった。

下田の湊を発って、およそ二里を歩いたか、と思われる。

坂道は、勾配の急な下りになった。

地下の者らしい影が、行手に現われた。

十歩あまりの距離にせばまって、男は、足を停めた。

狂四郎も、立ちどまった。

総髪で筒袖に軽衫をはいた無腰の男の双眼が、鋭く光るのを、狂四郎は、みとめた。

――郷士か。

狂四郎は、すぐに歩き出した。

男も、登りはじめた。

二歩にせばまると、男は、再び足を停めた。

「卒爾乍ら――」

「…………」
「どちらへ、お行きなされる？」
「燈明台へ参る」
「燈明台へ――？」
狂四郎は、対手(あいて)の不審の視線を受け乍ら、すれちがった。
三歩ばかり下った瞬間、背中に殺気が来た。
「お主――」
狂四郎は、背を向けたなりで、呼んだ。
「わたしを、何者かに思いちがいをしているらしいが、ただ燈明台の老人に逢いに行く者だと信じてもらってよい」
「…………」
返辞は、なかった。
次の瞬間――。
宙を截(き)る異常な唸(うな)りが生じ、狂四郎は、それに合わせて、身を沈めざま、左手で脇差を抜いて、飛来したものを払った。
無想正宗を抜かなかったのは、とっさに、対手に意外の飛道具と迅業(はやわざ)があると測って、第二撃に備えるためであった。
脇差に手ごたえはあった。
しかし、襲って来た黒い武器は、鳥の速影にも似て、宙高くはねあがるや、放った者の方へ、翔(か)けもどって行った。

それきり、第二撃は来なかった。
脇差は、鎺元から三寸あまりのところを、両断されていた。

二

狂四郎が、石室崎の突端に建つ燈明台に到着したのは、それから四半刻のちであった。
ここの燈明台は、江川坦庵が蘭学の知識によって工夫したもので、灯こそ菜種油で点火していたが、雨風を防ぐのは、油障子ではなく、玻璃で、これが反射鏡として、廻転するしかけになっていた。
もとより、後代の洋式燈台に比べれば、燈器も簡単で、燭光は弱かったが、江戸へ向う船、また江戸から去る船にとって、煌めくこの明りは、浬程をはかる標識として、この上もなく有難い存在となっていた。
燈明台にならんで、ごく粗末な小屋が建ち、佐兵衛は、そこに、江戸から連れて来た白犬とともに、住んでいた。
狂四郎が、小屋の前に立つと、犬は激しく吠えたてた。
「これ、しろ……、なにに気を立てて居るのだ」
板戸を開けた佐兵衛は、燈明台と月の光を受けて、うっそりと佇む痩軀を見出し、
「これは！」
と、おどろきの声をあげた。
囲炉裏端に招じて、濁酒をすすめ乍ら、佐兵衛は、あらためて、嚙みしめるように、
「あっしに逢いに、わざわざ、ここまで、足をおはこび下さいましたとは――」

と、云った。
「気まぐれだ」
「なんの——、気まぐれにしても、小田原のご城下からだけでも、箱根、天城の両山越えで三十余里はございます。うれしゅう存じます」
「韮山代官に、前から、招かれていて、約束をはたしたついでなのだ」
蘭書を読める狂四郎を、坦庵江川太郎左衛門は、市井の無頼の徒としてうちすてておくのを、惜しんでいたのである。
二年前、太郎左衛門は、代官職を継いだが、その時、出府して来て、狂四郎に逢い、是非とも韮山に来てくれるように、とたのんでいた。
太郎左衛門は、かなり以前から、大砲鋳造のために、鉄を溶かす反射炉を建設する意嚮（いこう）を抱き、幕府に対して建議していたのであった。
その反射炉の蘭書を、幾冊か手に入れていたが、太郎左衛門にはまだ読みこなす語学力が乏しく、そのためにも、狂四郎を呼びたかったのである。
「お代官は、さぞかし、およろこびでございましたろう」
佐兵衛は、太郎左衛門を、いくたびか、ここへ迎えていた。
「おれに蘭書を読ませようとしたが、どうやら、役立たずであったらしい」
狂四郎は、濁酒を飲み干してから、
「ところで、この近くの浜辺に、他所者（よそもの）を近づけぬ村でもあるのか？　岡っ引を四十年もつとめあげたお前さんに、何やらくさい、と思わせるような村がだ」
と、訊ねた。

「どうなさいました？　途中で、何事かございましたので――？」

「わたしを、公儀隠密とでも思いちがいをしたらしい」

　狂四郎は、両断された脇差を抜いて、示した。

　宙をとばして、白刃をま二つに斫っておいて、また手元へとびもどらせる異様な武器を使った者がある、ときいて、佐兵衛は、

「はて――？」

　と、首をひねった。

　思いあたるところはなかったのである。

「四五日うちには、それが何者かつきとめられると存じます。お待ち下さいまし」

「いや、明日の午には、おいとまする。韮山代官に、ひとつたのまれごとをして、鎌倉へ行かねばならぬ」

　江川太郎左衛門は、狂四郎が訪れた日、江戸から、早飛脚がもたらした書状を受けとっていた。

　差出人は、江戸城本丸同朋・沼津千阿弥であった。

　江戸城には、御数寄屋坊主はじめ、奥御小道具役坊主、御用部屋坊主など、さまざまの役廻りの坊主が、数百人いた。同朋は、その坊主衆の監督役であった。

　同朋は、御用部屋にあって、老中、若年寄の諸用を足し、幕閣より諸大名、諸役人へ伝達する公文、また諸役人、諸大名から幕閣へ上申する書類を、その手で経由させる務めをはたした。

　閑職とみえたが、実は、政治の裏面をのぞく職種であったので、かなりの羽振りであった。

　沼津千阿弥は、寛永時代からひきつづいた同朋の家に生れ、幼少から天才のほまれが高く、いずれは同朋頭となって、老中はもとより、将軍家に対しても、意見を述べる威勢を得るのではな

いか、と噂(うわさ)されたものであった。

それが、二年前、何を考えるところがあったか、沼津千阿弥は、病気と称して出仕をやめ、青山に書塾を設けて、坊主衆のうちから、血気の若者をえらんで、門下とし、陽明学を講義しはじめたのであった。

千阿弥は、少青年期には、蘭学に熱中し、二十歳頃には、天文暦数では一流と目されるようになっていた。江川太郎左衛門と胸襟(きょうきん)をひらく仲になったのは、その頃からであった。

千阿弥は、太郎左衛門の知らぬうちに、蘭学を放棄して、陽明学に凝るようになっていた。

三

江川太郎左衛門は、千阿弥が書塾をひらいてからは、なんとなく疎遠になり、ほとんど文通もしていなかった。

千阿弥が韮山へ便りを寄越したのは、まことに久しぶりのことであった。

文面は、無音にうちすぎたことを謝罪してから、いきなり用件に入っていた。

来る二十七日正午、鎌倉鶴岡八幡宮境内の入口にある赤橋まで、何卒(なにとぞ)御来駕(らいが)下されたく、伏してお願い申上げ候。

当日そこにて、何事が起るか、いまはお打ち明け申すことは、はばかり申し候えども、拙者が意図するところは、ひとえに憂国の至情より出(い)でたることにて、たとえ、傍目(はため)には狂気の沙汰とみなされ候とも、決して決して、その場に至るまで、一瞬たりとも正気を喪(うしな)うものには御座候わず。拙者が、衣(い)を千仞(せんじん)の岡に振(ふる)ったことは、すでにご明察の通りと存じ候えば、死生は命なりと知りて、正々の旗の下、義に就(つ)かんとする志を、お見とどけ下されたく、伏して願い上げ奉り候。

もとより、生の身なれば、生も我が欲するところ、義もまた我が欲するところ、ただ、二者を兼ぬるを得べからざれば、いさぎよく生を舍てても、義を取るのみ。紫が朱を奪う邪曲の時世に、一匹夫が必死の覚悟にて、知行合一、良知を致さんとするものなれば、何卒当日正午、御来駕の程を——。

こうした内容の文面を、太郎左衛門は、狂四郎に読ませて、

「それがしは、この日、出府して、評定所に於て、海防の儀に就いて、閣老へ述べることに相成って居る。ついては、貴公が、鎌倉におもむいて、千阿弥が、いったい、何を為そうとしているのか、見とどけてくれまいか」

と、たのんだ。

狂四郎は、沼津千阿弥と、一面識があった。

ある時、ある場所で、千阿弥は、狂四郎に云ったものであった。

「御辺は、城にいる坊主の沿革をご存じか？」

と、訊ねた。

狂四郎が、知らぬ、とこたえると、千阿弥は笑い乍ら、

「坊主を城内に住まわせているのは、茶をたてさせたり、雑用をつとめさせたりするのが目的ではなく、合戦となった時、いざ出陣にあたって、この坊主どもの首を刎ねて、軍神を勇めるためでござるよ。いわば、生贄として、飼いごろしている次第。われわれは、そういう惨めな身分でござる」

と、教えたものであった。

その言葉を思い出して、狂四郎は、江川太郎左衛門に代って、沼津千阿弥が何を為そうとする

のか、見とどけることにしたのである。

その二十七日とは、明後日であった。

「明日の午までに、貴方様(あなた)を襲った下手人をさがしあてるのは、これア無理でございますな」

佐兵衛は、云った。

「べつに、さがしてくれとは、たのんで居らぬ。忘れてくれてよい」

「これでまだ、岡っ引根性は抜けて居りませんので、そのようなお話をうかがうと、急に、老いの骨が鳴って参ります。明朝でも、はやく、近くの浜辺へ行って、嗅(か)いで参りましょう」

佐兵衛は、腰を上げると、燈明台へ、菜種油をつぎ足しに、小屋を出て行った。

ほどなく、戻って来た佐兵衛は、

「妙なことになりました」

「……………?」

「何気なく、遠目鏡で、沖を眺めて居りましたら、江戸行きらしい菱垣(ひがき)廻船から、小舟が一艘(そう)おろされて、こっちへ、漕(こ)いで来るのが、見わけられました」

「………………」

「ただの小舟ではなく、ひどく早いやつでございます。……それ、三国志の講釈などに出て来る——なんと申しましたかな」

「軽舸(けいか)か」

「それでございます。ああいうはやぶねは、あっしなど、まだお目にかかったことがありません。……近づいて来たのを、遠目鏡で、見下ろすと、人間が二人、乗って居りましたが、夜になって、こっそり、上って来ようとするのは、どうもこれア、貴方様が襲われなすったことと、何か、目

に見えぬ糸でつながっているのじゃございますまいか。あっしのカンでございますがね」
「うむ――」
狂四郎も、うなずいた。
「もうそろそろ、このさきの入江へ、着く頃でございます。あっしが、降りて行ってみることにいたします」
「要心したがいい。……わたしが、行ってもよいのだが――」
「なアに、旦那にご足労をわずらわすまでもありませんや。腰に十手がねえだけで、嗅ぎかたを忘れているわけじゃございません。失礼ですが、尾行にかけちゃ、旦那よりもあっしの方が、一枚上手でさ」
佐兵衛は、出て行った。
狂四郎は、炉端に横になった。
「良知を致す、か」
沼津千阿弥の書状の中にあった言葉を、ふっと、呟いてみた。
――この言葉を、以前、しばしば、口にしていた者がある。おれの旧知の中にいた……？
しきりに思い出そうと努めているうちに、不意に、ひとつの貌が目蓋の裏に泛んだ。
――そうだ。あの人物が、よく口にしていた。
それは、大坂天満与力・大塩平八郎であった。（作者註。この時は、まだ天保のはじめで、大塩平八郎は、ただの良吏でしかなかった）
――知行合一、良知を致す、とは？
狂四郎にも、これは、朱子の格物致知を排撃する王陽明の主張であることは、判ったが、王陽

明については、その門下の徐愛が筆録した『伝習録』を、ひろい読んだ程度の知識しかなかった。
——たしか、王陽明は、老荘の講究に力を尽し乍らも、その煩悶を釈き得ず、室を陽明洞に築いて、長生の術を練った人物と、きいたことがあるが？
不意に、狂四郎は、身を起した。
不吉な予感が、脳裡を掠めたのである。
遠くで、犬の激しく吠える声が、つたわって来たような気がしたからであった。
狂四郎は、いそいで、小屋を出た。
どこに浜辺へ降りる小径があるのか、判らぬままに、道をいそいだ。
ようやく、浜辺に降り立った狂四郎は、月光に照らされた静寂の夜景へ、鋭く視線をまわしてみた。
——あれだ！
近づいてみると、渚に斃れているのは、佐兵衛の飼い犬であった。
「佐兵衛っ！」
狂四郎は、大声で呼んでみた。
「佐兵衛っ！　どこだ？」
「……ここでさ」
かなり遠くから、返辞があった。
そこは、岩と岩が凭りかかりあって、洞窟のかたちをつくっている場所であった。
佐兵衛は、その中に、身を横たえていた。
狂四郎が、扶け出そうとすると、佐兵衛は、

「このまま、寝かせておいて、おくんなさい。右腕を、肱から、すっぱり、やられて居ります。手当をして居りますから、動かぬぶんには、血が止って居ります」
と、云った。
「なんで、やられた？」
「それが、さっぱり……、なんで、やられたんだか――。つまり、旦那を襲ったしろものと、同じじゃござんすまいか。……びゅん、と飛んで来やがったら、もう、その時は、六十三年も使い馴れた腕が、ふっとんじまやがった」
「お主を、来させるのではなかったな」
「旦那、あっしが、岡っ引だったことを、お忘れなすっちゃ、困りますぜ。……くたばった、と思い込ませておいて、ちゃんと、行先は、つきとめておいたんでさ」
佐兵衛は、云った。
これが、眠狂四郎をまき込んだ異常な騒動の発端であった。

異邦の娘

一

「夜明けまでには、ここへ、ひきかえして来れるだろう」
眠狂四郎は、洞窟に身を横たえた佐兵衛に、云いおいて、出て行こうとした。
「なんの、その頃までには、あっしは、燈明台へ戻って居りますよ」

佐兵衛は、並の老爺(ろうや)ではないところを、激痛にくじけぬ明るい声音に、示した。

「あっしのことよりも、ご自身のことを、充分にお気をつけなさいまし」

狂四郎は、美しい弧線を描いた渚に沿うて、東へ向って、歩み出した。

この長津呂(ながつろ)海岸は、小さな岬が、ひとつ乃至(ないし)ふたつの小さな湾を抱き込んでいる地形になっていた。そして、それらの湾は、のこらず、削られたように立った断崖絶壁の下にかくれていた。

砂地のある湾には、数軒ずつ漁師の小屋があったが、隣りの湾内に住む者とのつきあいもない、孤絶したくらしぶりであった。

沖あいから、夜蔭(かげ)にまぎれて、こっそり上陸するには、絶好の場所といえた。

佐兵衛は、上陸して来た怪しい人影ふたつが、巨岩をへだてた隣りの湾へ、消えて行くのを、見とどけていた。

「砂浜は、この湾だけで、むこうは、崖(がけ)の下は岩だらけで、舟の着けようがないので、ここへ上って来たのでございましょう……。むこうに、人の住める場所が、あったかどうか――？」

怪しい人影のひとつは、どうも女のようであった、と佐兵衛は、告げて、

「むこうへ移って、どうしたか、こっちに岩を越える力がなくなっていたので、見とどけられなかったのは、くやしゅうございます」

と、云ったものだった。

狂四郎は、その巨岩の蔭に、乗りすてられた小舟を、発見した。

――佐兵衛が、軽舸と看てとったのは、鋭かったな。

月明にすかし視た狂四郎は、はじめて接するその異様なかたちに興味をそそられた。

鷺(さぎ)が頭をまわしたような舳先(へさき)を、一瞥(いちべつ)しただけでも、これは、日本にはない舟であった。

その巨岩を越えてみると、大小の岩の集塊が、大きく口を開いた巨大な怪物に似た暗い渓谷から、いま吐き出されたように、湾内をうめつくしていた。

じっと、眸子(ひとみ)をこらしてみたが、渓谷の樹林は、闇に溶け込んでいて、視力を働かせるすべもなかった。

その暗黒の世界へ、身をはこび入れるよりほかはなかった。

跳び移って行く岩の集塊は、ところどころ、月の光をうつして、白い輝きを放っていた。

——あの奥にいる者には、こっちの影が、はっきりとみとめられることだな。

そう思いつつ、狂四郎は、しだいに、渓谷の口へ、近づいて行った。

はたして——。

あとふたつの岩を渡れば、そこに達するところまで近づいた時、暗黒の夜気を截って、えたいの知れぬ兇器が、襲って来た。

それは、まぎれもなく、燈明台へ至る途中の坂道で、こちらの脇差を両断した飛道具であった。

狂四郎は、岩と岩の間へ、身を伏せた。

兇器は、頭上を越えたが、飛燕(ひえん)が身をひるがえすように、再び、樹林の奥へ、翔(か)けもどって行った。

と——その時は、狂四郎もまた、身を躍らせて、そこへ突進していた。

闇の中に、小屋をみとめた。

瞬間——樹蔭から、猛然と、槍がくり出された。

身をひねって、螻蛄首(けらくび)から両断した狂四郎は、

「こちらは、公儀の隠密ではない。但し、そちらの出様で、敵にまわる者だ」

と、云って、白刃を鞘に納めた。
対手は、しかし、押し黙ったまま、腰から一刀を抜くや、上段にふりかぶった。
その折、小屋の板戸が開かれて、灯かげが流れ出た。
板戸を開けたのは、女であった。若く、しかも、彫のふかい異邦の貌を有っていた。衣裳は、日本の小袖をまとうていた。
狂四郎がその貌へ一瞥をくれた刹那、それを隙と看てとった対手は、地を蹴って斬りつけて来た。
狂四郎の方には、対手を、坂道で出会った男とは別人であるのを見分ける余裕があった。
斜横にとび躱して、
「おちつけ！　殺しかかって来なければ、こちらからは、斬らぬ」
と、云った。
対手は、肯こうとはしなかった。まだ、二十代に入ったばかりの血気とみえた。これは、面貌も骨格も、日本人にまぎれもなかった。
但し、槍の使いかたも刀の使いかたも、流儀に則ったものではなく、実戦で会得した戦場武者というものは、こうであろうか、と思わせる凄まじい我流ぶりであった。業を知らぬ腕前が、横溢した心気の奔騰するままに、おのれ自身にも測られぬ一瞬一刹那の業を生んでいる——そんな獰猛をきわめた攻撃であった。
狂四郎は、その攻撃を躱しつづけているうちに、
——やむを得ぬ。
と、自身に云いきかせた。

二

無想正宗が、腰から鞘走った時、もう対手の片腕は、肱から斬り落されていた。

呻(うめ)いてころがる者の上を、跨(また)ぎ越した狂四郎は、小屋へ向って、歩み寄った。

戸口に立っていた異邦の女は、狂四郎が前に立った刹那、背中にかくしていた短剣を、突きかけた。

狂四郎が、手刀で、手くびをひと搏(う)ちにして、短剣をとり落させると、女は、鋭くひと声叫んで、小屋の中へ、駆け込んだ。

狂四郎が、土間に踏み込むと、荒壁ぎわにしりぞいた女の手には、短銃(たんづつ)がにぎられていた。

「いけない！」

女は、狂四郎が板敷きに上ると、叫んだ。

「近づくと、撃つ！」

はっきりと、日本語を口にした。

狂四郎は、薄ら笑って、一歩進んだ。

「ほんとに、撃つ！」

女は、必死の表情で、叫んだ。

「撃ってよい」

狂四郎は、云った。

「しかし、撃ち損じたら、そなたのからだを奪(と)るぞ。よいな？」

「…………」

「それとも、銃をすてるか。すてれば、手もふれぬ」
「…………」
狂四郎が、さらに一歩進むと、女は、銃口を胸もとに狙いつけた。
距離は、わずか五歩しかなかった。
「どうする？」
狂四郎が、問うた。
「…………」
女のゆたかな胸が、喘いだ。
数秒間の息詰る沈黙の対峙があった。
一瞬――。
狂四郎の左手がおどった。同時に、女が、引金を引いた。
轟然と、銃声が、小屋をふるわせたが、狂四郎は、依然として同じところに、立っていた。
短銃は、女の前に、落ちていた。そして、その銃身は、飴のように曲っていた。
狂四郎が放った小柄が、銃口を刺した刹那、女は引金を引いたのである。
狂四郎は、迫ると、
「約束だ」
冷然と云いはなっておいて、双手を摑み、それを背中へまわして抱いた。
女は、上半身を弓なりに反らして、熱い息を吐いた。
――まだ二十歳前であろうか？
灯に映えた肌の白磁さながらのなめらかな白さは、狂四郎の目を奪うに足りた。

額も双眸も鼻梁も唇も、すべてが、名工が精魂こめて彫りあげたような整ったかたちであった。頭髪と瞳の黒いのが、本邦の女に似ているだけで、優美の造形に、みじんの狂いもない彫のふかさは、曽て、狂四郎が長崎へおもむいて、オランダ商館の壁にかけられていたその国の王女の像を仰いだ時の感動を、よみがえらせた。

犯すには、あまりにも美しすぎた。

——伴天連は、おのれらの身近にこうした容姿があるゆえに、その美の粋を集めて、聖母の貌をつくりあげたのか？

異端者に与えられたこれは生贄のような気がした。

——おれには、この美しさの前から、ひきさがるなんの理由もない。

胸に云いきかせておいて、狂四郎は、女を、その場へ倒した。

抵抗はなかった。

女は、日本の女とちがい、なめらかな肌ざわりの下穿で、腰を掩うていた。

狂四郎の手が、それにかけられると、女は、ひくく、意味は判らぬが神にすがる言葉を口にした。

その祈禱が、かえって、狂四郎の指の動きを、残忍なものにした。

女は、狂四郎のからだがふれるすべての皮膚で、羞恥に満ちた拒絶の反応を示し乍らも、何故か抵抗しようとしなかった。

下穿を脱がされた腿と腿が、ひしと合わされて、残忍な圧力を必死に拒否している肉のたしかさは、彼女の純潔を示していた。

徐々にひらかされた下肢の間へ、男の下肢を容れた時、女は、そむけていた顔から——灯のゆ

らぎで翳を濃いものにしていた長い睫毛の蔭から、泪をわきあがらせた。

狂四郎は、容赦なく、白い豊かな下肢を、放恣なかたちに乱れさせておいて、上半身を起すと、襟に手をかけて、胸もとを寛げさせた。

濃霧が散り、なめらかに起伏する白雪の丘陵が浮きあがるように、ふたつの乳房があらわになった。

狂四郎は、それを双の掌の中に納め乍ら、無言で哭く女の優美な貌を、凝視した。

その時、すでに、柔々とした襞は、破られて、奥深く、男の力を加えられていた。

三

狂四郎が、その上からはなれても、女は乱れた姿のまま、死んだように微動もしなかった。

狂四郎は、裾を合わせてやると、あらためて小屋の内部を見まわした。

ごく近頃建てられたものであった。妙なことに、荒壁ぎわに据えられている長櫃とか、葛籠などは、ひどく古びた品であった。

女に訊ねてみたところで、何ひとつ返辞がなされる筈もあるまい、と考えて、狂四郎は立ち上ろうとした。

その時、戸口を、人影がふさいだ。

狂四郎は、それが、坂道で出会って、こちらの脇差を両断した男にまぎれもないのを、みとめた。

「…………」

「…………」

鋭く瞶め合う瞬間が過ぎて、狂四郎は、男が殺気を放棄するのを、いぶかった。
男は、口をひらいた。
「それがし、いま、燈明台へ参り、手負うて戻って来た老爺から、貴公が、公儀の隠密衆ではないことを、たしかめて参り申した」
「おそかったことだ」
「いや、おそうはござらぬ。……それがしの仲間が片腕を喪ったのは、やむを得ぬ仕儀、とあきらめ申す」
「そのことではない。わたしは、この娘を、犯した」
「存じて居り申す」
愕然となるものと思っていたのに、対手は、いささかの動揺も示さぬのであった。
「どういうのだ？」
「すでに起ってしまったことは、悔いてもはじまらぬことでござる。ついては、禍いを転じて福にいたしとうござる」
「……？」
「この娘を、貴公に、江戸までお連れねがえまいか？」
男は、意外の申し出をした。
「江戸へ——？」
「おたのみ申す。すでに他人ではなくなったのでござれば、それぐらいのつぐないをして頂いてもよろしいか、と存ずる。……是非とも、このご依頼、おききとどけ下され」
男は、頭を下げた。

日本の言葉も自由に喋れるように教えてあるし、着物の着こなしも不自然でないように習練させてあるから、顔を頭巾で包ませれば、道中疑いの目を向けられるおそれはない、という確信がある、と男は云った。
「江戸へともなって、どうしろ、というのだ？」
「若年寄小笠原相模守殿に、お引渡し下され。もとより、世間には絶対に知れぬよう、極秘裡に――」
「ひとつだけ、うかがっておこう」
狂四郎は、引き受ける前に、訊ねた。
「お主らの為そうとしていることは、庶民にとって迷惑なことかどうかだ」
「いや、庶民のくらしとはなんのかかわりもない、われら一統のみの願い事でござる。なお、この願い事は、公儀にはもとより、諸大名、旗本、町人、農民――誰人にも、もれてはならぬ儀にござれば、その旨ご承知置き下され」
「公儀にかくさねばならぬ事情であり乍ら、若年寄の一人には、大事を打ち明けて、この娘を送り込もうというわけか？」
「いや、小笠原相模守の人となりを看込んで、いまより、味方になって頂くべく工作いたす所存でござる」
異邦の美女を呈上して、いったい、何を企てようとするのか？
そのことは、狂四郎は、訊ねなかった。
こちらがどういう人間であるか、佐兵衛からきき出して、対手は、敢えて、仲間のつとめるべき任務を依頼したのである。

――泥でつくった舟に乗ることになるのかも知れぬが……？

狂四郎は、そう思いつつ、

「参ろう」

と、女をうながした。

四

砂浜の湾へ出るまで、狂四郎と女とのあいだには、会話はなかった。

渚に沿うて歩き出した時、狂四郎は、はじめて、うしろを跟（つ）いて来る女に、声をかけた。

「そなたは、何故わたしの暴力に、抗（あらが）わなかったのだ？」

「わたくしは、死んではいけない身です。だから……」

「わたしは、銃をすてれば、手もふれぬ、と云ったはずだ」

「貴方を、殺せると思いました」

「…………」

「貴方は、強いおひとです。いまは、わたくしは、貴方を信頼します」

「…………」

「貴方は、かならず、わたくしたちの味方になって下さるおひとです。わたくし、信じます」

「…………」

狂四郎は、それきり、燈明台に戻るまで、口をきこうとはしなかった。

佐兵衛は、炉端に仰臥（ぎょうが）して、狂四郎を迎えた。

「先程、男が一人、たずねて参りました」

「うむ。逢うた」
「どうなさいました？」
「あの娘を、江戸まで連れて行くことになった」
「なんですと?!」
佐兵衛は、首を擡げて、土間に立つ異邦の女を視た。
「どうしたわけでございます？」
佐兵衛は、不審の視線を、狂四郎にかえした。
「お前さんが、わたしを信頼できる人間だと、あの男に教えたらしい」
「それア……、場合によっては、ご公儀をむこうにまわしても、一歩も退かぬ御仁だ、と申しておきましたが……、それにしても、妙なことになりましたな」
「お前さんに、教えてもらわねばならぬことが、ひとつ。江戸へともなったこの娘の身柄を、一時、安全な場所にかくしておきたいが、心あたりはないか？」
佐兵衛は、ちょっと考えていたが、その場所を、指定した。
「とんだ疫病神が舞い込んだために、お前さんを片端にしてしまった」
「ご自身を疫病神と思っておいでなさるのは、旦那のわるいくせでございますよ」
「いままでがそうであったし、これからも、そうだと思われる」
「旦那――」
佐兵衛は、天井を仰ぎ乍ら、一刻前に片腕を喪ったとは思えぬおちついた表情で、云った。
「あっしは、ここへ来てから、海でくらしている生きものを、眺めているうちに、面白いと思うことを、いくつか見つけました。……同じ海でくらし乍ら、海の底の岩などにくっついて、動か

ずに一生を送る奴が居ります。うにとかあわびとかとこぶしとか、なまこ、ひとで、いそぎんちゃくなどのたぐいでございます。こいつらを、岩からひきはなして、水の中にうかべてやると、いかにも不安そうに、おちつかない様子をみせます。岩の上に置いてやると、すぐにそれに吸いついて、まずこれでひと安心、といった様子になります。……そうかと思うと、くらげのように、海面にふわふわと浮いて一生涯をすごし、浮いたままで死んで行く奴が居ります。くらげには、ひとでやなまこが岩にしがみついている時の安心した気持は、すこしも判りますまい。まして、岩からひきはなされた時の不安感など、全く想像もつかないに相違ありません。……あっしは、岩を毀されて採られて来たとこぶしが、あい変らず岩に吸いついて安心しているさまを眺めると、地位身分や金銭の上に坐って安心立命を得ている人間に似ているような気がするのでございます。……それに比べて、くらげという奴は、東風が吹けば西に流され、西風が吹けば東に流され、定まったすまいもなく、浪の間に間に浮いて、平気で居ります。どこへただようて行こうが、なんの不安もなく生きている。これほど結構な生涯はないような気がして居ります。……そうではありますまいか、旦那――」

「風にも波浪にも、さからわずに、ただ浮いて、ただようてくらす一生か。成程、安心立命も知らずに生きている方が、生きやすいことは、たしかだな」

「旦那ならば、いまからでも、そのくらしがおできになります」

佐兵衛は、じっと、狂四郎を仰ぎ視た。

狂四郎がこれから為そうとしていることは、石を抱いて淵に入るようなおそろしい危難を身に遭わせることになる不吉な予感をおぼえたに相違ない。

狂四郎は、佐兵衛に、微笑をかえした。

「あいにくだが、わたしが、くらげとちがっているのは、腰に兇器があることだ。これをすてられぬ宿運が、わたしを、危険な道へさそうようだ」

異邦の娘は、その言葉をきき乍ら、虚無の翳の濃い横顔を、まばたきもせず見まもっていた。

赤　橋

一

眠狂四郎が、千華（ちか）という日本名を持った異邦の娘をともなって、小田原へ着いたのは、翌々日の夜明けであった。

小田原から鎌倉までは、十二里余ある。

江戸城本丸同朋・沼津千阿弥が、何事かを為さんとして、韮山（にらやま）代官・江川太郎左衛門に、鎌倉の鶴岡八幡宮まで来て欲しい、と願った日時は、この日正午である。

膝栗毛（ひざくりげ）はもとより、駕籠（かご）をとばしても、正午までに、そこへ到着するのは、不可能であった。

馬を疾駆させるよりほかに、すべはなかった。

狂四郎は、千華にその旨を告げて、この小田原に、信頼できる比丘尼（びくに）寺（鎌倉・東慶寺別院）があるゆえ、二日ばかり、そこで待つように、命じた。

千華は、しかし、

「わたくしは、馬に乗れます」

と、こたえた。

お高祖頭巾の蔭の双眸には、必死の光があった。
「……？」
じっと視かえす狂四郎に対して、千華は、言葉を継いだ。
「わたくし、遠乗、庭乗、下乗、輪乗――みんなできます。……十三の時、もう、乗尻ができました」
乗尻、というのは、手綱にたよらずに、巧みに馬に乗ることをいう。
「そなたは、千鳥も立鼓乗もできる、というのか？」
狂四郎は、訊ねた。千鳥というのは、みの字を二つ続けたかたちに乗りまわし、立鼓というのは、鼓を立てたかたちに乗りまわす技であった。
「はい」
千華は、うなずいてみせた。
――面妖しい！
戦国時代ならばいざ知らず、徳川期に入っては、武家の息女であっても、馬術の修練は禁じられている。
高等馬術は、徳川期に入って大いに発達したとはいえ、千鳥とか立鼓乗は、元禄頃までで、その後の馬責めは、きわめて尋常の修練になっていた。
馬場というもののつくりかたがきまってしまい、細長いばかりになったので、馬は、地道、乗り、駆けという三品の足なみだけを、おぼえて、右へ左へ、さっと折りかえしたり、瞬時に足なみを替える技を知らなかった。
戦国時代の馬場は、相広（縦横同じ広さ）だったので、手綱をはなして、長槍や薙刀をふりまわ

し乍ら、馬の足なみを自由自在に乗り替える修練を積むことができたのである。当然、曲乗の技も発達した。『大友興廃記』には、大学兵衛尉（ひょうえのじょう）という武者が、馬の四肢を縮めさせて、碁盤の上に乗ってみせたり、五丈余の堀を悠々と躍り越えた、と記してある。

この時世に於ては、馬術に長じた武士といっても、千鳥や立鼓乗のできる者は、きわめてすくないであろう。

まして、婦人となれば、乗りかたを知る者すらもいない、といってよい。

この異邦の娘は、戦国時代をもって廃（すた）れた曲乗も習っている、という。

——海の彼方（かなた）のどこかの土地に、戦国時代そのままの武芸修業を、いまなお、つづけている一団が存在するというのか？

狂四郎は、長津呂海岸へ、千華とともに上陸して来た若者の猛撃ぶりを、思いうかべた。その槍の使いかたも、刀の使いかたも、流儀に則ったものではなかった。実戦で会得した戦場武者というものは、こうであろうか、と思わせる凄まじい我流ぶりだったのである。

「そなたが、わたしから、どうしてもはなれぬ、というのであれば、やむを得ぬ」

狂四郎は、二頭の馬を用意した。

「おくれるな！」

云いおいて、狂四郎は、馬腹を蹴った。

千華は、おくれるどころか、狂四郎と、馬首を竝（なら）べた。

横目で一瞥した狂四郎は、千華の言葉が嘘ではなかったのをみとめた。

肩を落して、肱を脇へつけて力をこめ、顔を仰向（あおむ）けず俯向（うつむ）かず、左右へ傾けず、眼眸（まなざし）を山間（やまあい）（馬の耳と耳との間）から二三間むこうの宙へ据えている。馬術の書に教える「四面の鞍（くら）」そのま

まの見事な姿勢であった。
狂四郎と闘って、短剣を搏ち落され、短銃の狙撃にも失敗すると、生きのびるために、敢えて操を破られるにまかせたこの異邦の娘は、馬を疾駆させるその姿勢にも、なみなみならぬ覚悟のほどを示していた。
狂四郎の胸中に、ある種の感動がわいた。

二

この日――一月二十七日。
鎌倉・鶴岡八幡宮に於て、遠い昔――承久元年に、ひとつの悲劇が起っている。
将軍右大臣源実朝は、新年拝賀の礼を行うために、参詣した。
牡丹雪が霏々として舞う暮れがた、実朝は、北条義時を剣持ちにし、扈従一千騎をうしろに行列させて、六十二級の石段をのぼって、楼門に至った。
その時、一匹の白狗が、影のごとく、実朝の前を横切った。
北条義時は、一瞬、心中に不吉な予感をおぼえて、捧げていた剣を、文章博士の源仲章にゆずっておいて、後方へ退った。
神宮寺（薬師堂）で休憩ののち、実朝が石段を降りようとしたところを、雪中に身をひそめていた者が、突如として、躍り出て、一閃裡に、その首を刎ねた。実朝は、行年二十八歳の若さであった。
下手人は、当宮の別当阿闍梨公暁であった。
実朝の首をひっかかえた公暁は、おのが名を高らかに名乗り、

「父の敵を討ち取ったり！」
と、叫んでおいて、姿をくらました。
忽ち、境内は騒然となり、扈従一千騎は、数手にわかれて、公暁を追ったが、ついに、発見することができなかった。
公暁が住む雪下の本坊へ、討手が押し寄せると、門弟の悪僧らは、内にたてこもって、頑強に抵抗した。
長尾新六定景の子息太郎景茂・次郎胤景の兄弟が先登を争い、悪僧ら大半を討ち取ったが、公暁の姿は、ここにはなかった。
公暁は、雪下北谷のおのが後見人備中阿闍梨の家に、遁げ込んでいた。
膳部をすすめられる間も、公暁は、実朝の首を、しっかとかかえ込んでいた。
公暁は、使者を、三浦義村に趨らせて、将軍実朝の亡きいま、おのれこそそのあとを襲うべきである、と告げさせた。義村の子息駒若丸が、公暁の門弟に列していたので、公暁は、その好みを恃んだのである。
義村は、しかし、有為の資を抱き乍ら、わずか二十八歳で非業の最期をとげた実朝のために、落涙した。
義村は、公暁の使者に、わが蓬屋に光臨ありたい、お迎えの兵士を献じましょう、という手紙を持たせておき、その直後、使者を趨らせて右のおもむきを、北条義時に告げた。
義時は、一族を召しあつめて、評議ののち、長尾新六定景を討手の将とし、膂力二十人力の雑賀次郎ほか五人の勇武の士を従わせた。
公暁は、備中阿闍梨の家を出て、義村邸へおもむくべく、鶴岡の後ろの峰を登りかかって、不

運にも、討手六人と、出逢った。

雑賀次郎が、公暁に組みついたところを、定景が、その首を斬り落した。

公暁は、実朝の兄頼家の子息であった。

建仁三年、頼家は、不行跡の咎を受けて、二十二歳で廃され、弟実朝が、十二歳の弱年で将軍職に就いた。

頼家は、父頼朝が在世中は、目立った悪業を行わなかったが、父親が逝くや、たちまち悪性を発揮した。たとえば、安達景盛の妻が非常な美貌であるのを視て、これを奪いとり、景盛がこれを怨んでいるときくや、景盛を殺そうとした、など——。

実朝は、兄にひきかえて、秀れた人となりであった。将軍となった十二歳の頃には、すでに、寿福寺の荘厳房行勇律師について法華経の読誦を授けられて、寿福寺の禅室で、結跏趺坐の修行をしていた。

歌人としての実朝は、まさに天才であった。一代の歌仙で、めったに人に許さぬ藤原定家をも敬服させたくらいである。

十四歳の時には、すでに新古今集をことごとくそらんじ、自らも歌を詠じていた。

その遺作『金槐集』から、二三を挙げてみれば——。

わが宿の八重の紅梅咲きにけり
　しるもしらぬもなべてとはなむ

心うき風にもあるかな桜花
　さくほどもなく散りぬべらなり

深山には白雪ふれりしがら木の

まきのそま人みちたどるらし
山颪のさくらふきまく音すなり
吉野の滝の岩もとどろに

古今集、新古今集を摸した少年期を経て、やがて万葉集の影響を受け、その千古の詩美を達観し、その爛然たる表現の光芒を、四百年後の世に再び輝かした実朝であった。

のみならず——。

実朝は、文学に耽り、風雅の道のみを求めた文弱の徒ではなかった。

政治上に於ても、確たる見識をそなえていた。

その一例を挙げれば——。

相模川の橋が朽ちて、落ちた時、大江広元や北条義時は、一種の御幣をかついで、この再建を拒んだ。先年、この橋が落成した際、これに臨んだ頼朝が、乗った馬があばれて、落馬し、それが原因で逝去したからである。また、この橋を修造した稲毛重成も天寿を全うしなかった。広元も義時も、橋には不吉がつきまとっているようであるから、再建せぬ方がよい、ときめたのである。

しかし、二十歳の実朝は、笑って、

「父上の逝去は、武家の権柄を執ること二十年、官位を極めてからのこと。また稲毛重成は、おのれの不義によって誅戮を蒙るにいたったもの。橋とは、なんのかかわりもない不幸である」

と云い、再造を実行した。

父頼朝、母政子には、残忍冷酷な半面があったが、実朝は、その血をいささかもうけついではいなかった。

「このおとどは、大かた心ばへうるはしく、たけくも、やさしくも、よろづめやすければ、ことわりにもすぎて、もののふのなびきしたがふさまも、父にもこえたり」

『増鏡』にも、そう記されてある。

その英邁にして閑雅な貴公子が、惨殺されたこの日に、江戸城から、将軍家の代参として、その世子または猶子が、美々しい行列をつらねて、鶴岡八幡宮へ参詣するならわしがつくられていた。

三代家光の時からであった。

三

源頼朝が、はじめて鎌倉に入った時、為したのは、鶴岡八幡宮を拝し、次いで、瑞籬を小林郷に遷すことであった。

八幡大菩薩が、武神の権化であり、八幡太郎義家が八幡大菩薩の権化であるという考えは、当時しきりに行われていた。

源氏は、八幡大菩薩（すなわち応神天皇）を、その祖先と仰いでいた。源義家が八幡太郎というのは、八幡宮の祠前で、元服したことに由る。

徳川家は、鎌倉将軍にひきつづいて足利将軍も、八幡宮を尊信したのにならって、三代家光以来、社壇の造営修築をしばしば行い、実朝が最期の日に、将軍代参者を参詣させる行事を、毎年欠かさなかったのである。

この日を狙って、江戸城本丸同朋・沼津千阿弥は、いったい、何を為そうというのか？

狂四郎が、千華とともに、鎌倉に到着したのは、正午にまだ半刻近くあった。
狂四郎は、二階堂村の覚園寺境内にある、俗に謂う火焼地蔵の地蔵堂の堂守をたずねて、その小屋に、一時、千華をあずけた。堂守は、佐兵衛の弟だったのである。
その頃すでに、八幡宮から由比ヶ浜に通じる松並木の若宮大路は、塵ひとつとどめず、きれいに掃ききよめられ、一般庶民の通行は禁じられていた。
将軍家代参——西丸大納言家慶の到着は、未刻（午後二時）ときめられていた。
西丸老中のほか、本丸老中では、水野越前守忠邦が、家慶の補佐であるからには、剣役をつとめるに相違あるまい。とすれば、その側用人武部仙十郎も、供揃いに加わっているであろう。
狂四郎のその予想は、あたっていた。
武部老人がいなければ、一介の素浪人が、若宮大路の三つの鳥居をくぐって、境内に入ることは、絶対に許されぬことであった。
さいわいに、由比ヶ浜の一の鳥居の周辺を守備しているのは、水野家の家中であった。狂四郎とは顔見知りの者も二三いた。
武部仙十郎は、三の鳥居わきの社務所にいて、狂四郎を迎えた。
「お主の方から、出向いて来るとは、どうした風の吹きまわしだな？」
五尺足らずの、額と顴骨が異常に突出した、およそ風采のあがらぬ古稀を越えた老人は、けげんな視線を、狂四郎に、あてた。
狂四郎は、黙って、韮山代官宛の沼津千阿弥の手紙を、渡した。
老人は、一読すると、
「わからんのう。何をしでかそうというのか？」

首をかしげていたが、藩士の一人を呼んで、

「同朋は、境内のどのあたりに控えるならわしか、見て来てくれぬか」

と、命じた。

すぐに、同朋が控えるところは、境内入口にある赤橋と、赤橋から石だたみをすこし進んだ二王門の正面にある、石段下の神楽殿（かぐらでん）である旨が、報告された。

沼津千阿弥は、江川太郎左衛門に、赤橋まで来て欲しい、と記している。

「あの同朋は、二年ばかり前から、病気と称して出仕をやめて居ったが、どういうつもりか、急に願い出て、わし達と一緒に、ここに参ったのを、ちょっとふしぎに思うて居ったが……、さて、いったい、どんなこんたんを抱いて居るのか？」

老人が、腕を拱（こまね）いた時、正午を告げる梵鐘（ぼんしょう）の音が、ひびいた。

狂四郎は、座を立った。

武部仙十郎は、見上げて、

「もし、血迷うた企てをひそめている、と看て取ったならば、その場で、斬りすててもらおう」

と、云った。

他の場所ではなかった。武神の権化をまつる八幡宮の境内であり、対手（あいて）は、戦国時代には出陣の血祭りにするために城内にやしなった、という沿革を持つ同朋であった。これを、斬りすてても、べつに、境内を血でけがすことにはならぬのであった。

足利義満が十歳の時、父義詮（よしあきら）を喪（うしな）うと、細川頼之が執事となって、その養育にあたった。頼之のはからいで、法師六人をえらび出し、これに奇妙な衣服をつけさせ、佞坊（ねいぼう）、あるいは童坊と名づけて、さまざまのたわけ事を演じさせ、面白可笑（おか）しいたわ言をしゃべらせて、殿中を歩きまわ

らせ、諸ざむらいのなぶり者にした。

これは、義満に佞人を憎むように教える頼之のはからいであった。

諸ざむらいのうち、もし佞人があれば、これを侍童坊とあだ名をつけて、さげすむならわしができた。この童坊が、いつの頃からか、同朋と書きかえられたのである。

戦国時代に入ってから、どこかの武将が、同朋の首を刎ねて、軍神の血祭りとし、各国の武将が、それにならった、という事実がのこっている。

「ご老人――、あいにくだが、わたしは、刀を握ったこともない坊主頭の人間を斬る料簡は毛頭ない。ことわるまでもなく、これは、貴方の方が先刻ご承知のはずだ。……また、生きた人間の首を刎ねて、軍神の血祭りにする、などというばかげた振舞いが、いまの時世でも為されてもよい、という考えが、貴方の性根のどこかにあるならば、ただ今限り、こちらは貴方と無縁の徒になろう」

四

狂四郎は、赤橋上に立つ沼津千阿弥を見出した。

足のくるぶしまでとどく丈の短袴をはいた小素襖姿で、烏帽子はいただかず、きれいに剃りあげた坊主頭を、正午の陽ざしにさらしていた。

太い眉の下で、まばたくことを拒否しているように、大きくみひらいた双眸が、異様なまでに光っていた。額は広く、鼻梁も高く盛られ、やや歪んではいるがひきしめられた厚い唇など、同朋衆には惜しい凜々しい風貌であったが、やや蒼い荒い肌理に、蛇を連想させる冷たい光沢があった。

いずれにしても、鋭利な頭脳を、じかに顔面にむき出して居り、看る人によっては不快感を催すに相違ない。

狂四郎が前に立つと、沼津千阿弥は、一瞬の凝視ののち、

「貴殿、江川殿の代りとして、拙者に逢いに参られたのか」

と、云いあてた。

「左様、本日、ここで、お手前が、知行合一、致良知とやらを実行されるのを、見とどけに――」

とたんに、千阿弥は、皓い歯をみせて、笑った。

「かぞえきれぬほどの人命を奪った眠狂四郎殿に、この沼津千阿弥が、生を舎てて、義を取るさまを、見分して頂くとは、ははは……皮肉なことだ」

「こちらは、無学ゆえ、問答は苦手だが、お手前は、どうやら、死神にとりつかれている様子とお見受けする。その理由を、うかがおうか」

「心すなわち理！」

千阿弥は、即座に、声を張って云った。

「…………」

狂四郎は、対手の表情を瞶めた。

「その心に私欲の蔽いなければ、すなわちこれ天理。外面より一分だに添うるを須いず。天理に純なる心を以て、これを発して、君に事えれば、これすなわち忠、これを発して友に交わり民を治むれば、すなわち信と仁。……その心、私欲を去り、天理に純なるをもって、知と行を合一す。知りて行わざるは、只だ是れ未だ知らざるなり。知はこれ行の主意、行はこれ知の功夫、知はこれ行の始め、行はこれ知の成れるなり。……良知良能は愚夫も聖人と同じ。ただひとり聖人は能

くその良知を致すも、愚夫は致す能わず。節目時変も、聖人それ豈に知らざらんや。ただ専らこれを以て学と為さず。而して、そのいわゆる学なる者は、その良知を致し、以てこの心の天理を精察なるものにす。……それ良知の節目時変に於けるは、なお規矩尺度の方円長短に於けるがごとし。節目時変のあらかじめ定むべからざるは、なお方円長短の勝げて窮む可からざるごとし。……故に、規矩まことに立てば、欺くに円を以てすべからず。而して天下の方円、勝げて用ゆべからず。……良知、まことに致せば、欺くに節目時変を以てす可からず。……毫釐千里のあやまり、わが心、良知一念の微に於て之を察せずんば、また将に何のところにか、その学を用いんとするか！」

滔々と述べる若い同朋の顔貌は、しだいに朱を帯び、眼光はさらに鋭くなり、狂四郎ほどの男に、微かな戦慄をおぼえさせた。

檄

一

沼津千阿弥が、いったん口を緘じた時、眠狂四郎は、しずかに云った。

「この素浪人に、王陽明の哲理を説かれても、理解は不可能だ。……わたしの知っているのは、程朱の学に疑いを抱き、老荘の講究に智力をしぼったのち、煩悶を釈き得ず、陽明洞にとじこもって、長生の術を練った人物、ということだけだ。お手前は、蘭学をすてて、その王陽明に傾倒した模様だが、長生の術を練って、事実、肺を患い乍らも五十七歳まで必死に生にしがみついた

人物に惚(ほ)れ込み乍ら、どうして死神にとり憑(つ)かれたか――それが、判らぬ」

「ははは……」

沼津千阿弥は、不意に、金属的な哄笑(こうしょう)を噴(ふ)かせた。

その笑いを消した瞬間、面貌には、無気味なまでに妖(あや)しい鬼気を刷(は)いた。

「眠殿、御辺も二刀をたばさむ身ならば、この時世が、武辺の面目を一片もあまさず、地からはらっていることを、知らぬはずはござるまい。われらは、江戸城内に在って、三千の礼儀、三百の威儀に屈した武士どもが、虚偽に満ちた法式にしばられて、魂というものを喪ったさまを、つぶさに見とどけて居り申す。貴殿も、およそは察して居られようが、四時の定礼――小笠原流の礼式にしばられた武士の行住坐臥(ざが)の窮屈煩瑣(はんさ)さが、いかに、人間としての暢達(ちょうたつ)の気、鷹揚(おうよう)の風(ふう)を奪い去って居るか――。殿中足袋の紐(ひも)の長ささえ、二寸五分ときめられ、これを三寸にあらためるには、目付衆の許可を仰がねばならぬほど、一挙手一投足すべて、これ儀礼に縛られて居ることをご存じであろうか。……武人とは、豪壮勇武、恩義を推し、廉恥を守り、名節をもって心身をみがき、死を視ること帰するがごとく、法刑いまだ加えざるに、まず自ら刃に伏した源平の武辺の気概は、いずくにのこれるや！　想起されよ。保元の乱に、源義朝が勅命によって、やむなく諸弟を失わんとした際、わずか十三歳の乙若は、九歳の弟鶴若が生命を惜しむ言葉を口にするや、笑って、あな心憂きの者どもの言いがいなさや、われらが家に生るる者は幼けれども、心は武(たけ)しとこそ申すに、かくも不覚なることを申すものぞ、と云って従容(しょうよう)として死に就いたことを――。まず、武士は、名節を尚(たっと)ぶ――その面目を汚さぬためには、すすんで死をえらぶ――この心意気が、われらの先祖の五体には、脈々として流れて居ったではござらぬか。……方今、眺め渡すに、白も黒も色を別たぬ混濁の風潮がはびこり、三民の上に立つ武士は、一種の魔睡に罹(かか)っ

て、夢かうつつか、酔醒の間にうろつき、ただひたすらに、押しつけられた故例旧慣の法式に身を縛られて、四六時中汲々として虚偽の振舞いを為して居るのみ。……この濁世に一陣の清風を送らんと志した武士ならぬ同朋が、えらぶは、唯一つ——死あるのみ！」

「正気による狂気の振舞いか」

「左様、まさに、それでござるよ」

沼津千阿弥は、頭をあげ、胸を張ってみせた。

狂四郎は、それを阻止すべき立場に、おのれがいないことを思った。

しかし——。

狂四郎は、あまりにも明晰な頭脳を具備した者が、敢えておのれ自身を、追い込んだ世界に、苛立たしさをおぼえずにはいられなかった。

「お手前は、いつの間にやら、仮面をかぶって居るうちに、それをはずせなくなった苦しさを、内心の片隅に蔵して居るのではあるまいか？」

と、云わずには、いられなかった。

すると、千阿弥は、あきらかに、侮蔑の色を、表情にした。

「眠殿、貴殿は、これまでに、何百人、人を斬ったか知らぬが、おのれ自身の腹を切ることはできまい。さかしら気に業を背負ったようなその暗さをたたえた顔もまた、素面とは申せぬ」

「ひとつ、うかがおう。お手前は、出仕を止めてから、ひそかに、剣を習うたのか？」

「左様——」

千阿弥は、みとめた。

「しかし、一人も人を斬っては居るまい」

「いかにも、拙者は、一人も人を斬っては居り申さぬ。さればこそ、おのが腹をかっさばけるのだ！」

「剣は、おのれを守るためにあって、おのれを斬るためにつくられては居らぬと思うが……」

「ははは……、おのれを守る、か。この卑しさ！」

かぞえきれぬほど人命を断った男と、軍神を勇めるために生贄（いけにえ）として江戸城内に飼われていた僧体の男との眼眸（まなざし）が、宙で、しばし、刺し合っていた。

やがて、狂四郎が、ひくくかわいた声音で、云った。

「お手前の死にざまを、見分いたそう」

「お見せいたそう」

千阿弥は、踵（きびす）をまわして、赤橋を降りかけたが、ふと思いかえして、

「眠殿に、ひとつだけ、お願いがござる」

「遺言なら、うかがっておこう」

「拙者は、出仕を止めてのち、書塾に、およそ百人の門弟をやしない申した。……拙者亡きのち、渠（かれ）らが、拙者の志を継ぐことに相成るが、その際、貴殿のお力をおかりする場合もあるやも知れ申さぬ。その儀、お心のうちに、とめておかれたい。お願い申す」

「…………」

狂四郎は、肯（うなず）きもしなかったが、拒絶もしなかった。

二

それから約半刻が過ぎて――。

鶴岡八幡宮境内は、騒然たるものになった。

将軍代参――西丸大納言家慶が到着する時刻をあと半刻後にひかえて、突然、異常な事態が、起ったのである。

運慶・湛慶の作と称せられる仁王を安置した二王門の正面に、朱塗りの円柱に支えられた神楽殿があり、そのむかし、源頼朝及び夫人政子の見まもる中で、義経の妾静が、ここで、「しづやしづ、しづのをだまき、くりかへし、昔を今に、なすよしもがな」と、舞ったという故事がのこっている。

この神楽殿に、突如として、切腹の座が設けられたのである。

切腹の座を設けたのは、江戸城内の坊主たちであった。

境内の警護にあたっていた役人たちは、坊主たちが、白革縁刺模様の敷皮とか、表裏も白張の屏風とか、大根の香物をのせた土器や、銚子や盃や膳部や三方を、神楽殿へはこぶのを、この日、拝賀をとりしきる奉行に命じられて、何か新しい行事でもするのだろう、と何気なく眺めていた。

神楽殿の中央に延べられた敷皮上に、同朋沼津千阿弥が端坐し、九寸の脇差をのせた三方を前に置いた時、はじめて、警護の役人たちは、愕然となって、そのまわりへ馳せ寄った。

瞬間――。

正面左右の円柱へ、二流れの幅六尺あまりの布が、さっと垂らされた。

それは、檄文であった。

馳せ集まった数百人の役人たちは、朱絹の鉢巻をした同朋が、切腹の座に就き、四本の円柱の間に、四人の坊主が、同じく朱絹の鉢巻をして、携えた刀を抜きはなって身構えたのを仰いで、

色を変えた。

「同朋、乱心したか！」

「なんのための狂気の行状だっ！」

「止めろっ！」

「たわけ者っ！」

「狼藉は、許さんぞ！」

呶鳴りたて、喚きたてた。

　しかし、一人として、神楽殿へとびあがって、その行為を阻止しようとする者は、いなかった。

　刀を持つことを許されぬ——おそらく、刀の使いかたも知らぬであろう——坊主わずか四人に、白刃を構えられて、公儀役人数百人が、これを討ち取ることが叶わぬさまは、人垣の後方に立つ狂四郎を、苦笑させた。

　——成程、千阿弥があざけった通り、いまの武士は、腰が抜けている。

　そう思い乍ら、じっと、千阿弥を、見まもった。

　千阿弥は、昂然として上半身を立て、

「さわぐなっ！　黙って、われらが、檄文を読め！」

　と、叫んだ。

檄

　我、柳営同朋の家に生れて、今日二十八歳。班固が志にならいて、八歳にして小学に入り、

十五歳にして大学に入り、二十歳にして一芸に通じ、ようやく今日五経終れり。然れども、古人の学を識る日きわめて短く、節義に暗し。而して、同朋衆なるいやしき家に生れし故に、士道に謂う「覚悟」を修むること能わず。

方今、天下を見るに、東照神君が御世を治め給いしより茲に二百有余年、太平の間に、士は士道をかえりみざること、弊履を棄つるがごとし。

凡そ天地の間、陰陽二気の妙合を以て人間の生々を遂ぐ。あるいは耕して食を営み、あるいは工みて器物を作り、あるいは互いに交易利潤して天下の用を足せり。これら農工商の上に立つ者こそ、士なり。士は耕さずして食らい、造らずして用い、売買せずして利せり。しからば、士は、農工商の者どもと、何を以て区別するや。

三民の首となる士は、上は君に事え、下は民に臨むものなれば、その風正しかるべきなり。即ち礼儀廉恥を旨とし、驕奢を抑え、懦弱を排し、剛毅木訥の風を尚ばざるべからず。されば、士風を正すためには、士気を養わざるべからず。士気を養えば、おのずから士節満ち、士道を行うを得べし。

士道とは、なんぞや。

「大伴の、遠つ神祖の、その名をば大来目主と、負い持ちて、仕えしつかさ、海ゆかば水づく屍。山往かばくさむす屍、大君の辺にこそ死なめ、かえりみはせじ、と言立て、ますらおの清きその名を、古より、今の現に、流される、祖の子どもぞ、大伴と、佐伯の氏は、人の祖の、立つることだて、ひとの子は、祖の名断たず、大君に服うものと、いいつげることのつかさぞ、梓弓、手にとり持ちて、つるぎ太刀、腰にとりはき、朝まもり、夕のまもりに、大君の、みかどのまもり、吾れを措きて、また人はあらじと、いや立てておもいしまさる」——斯かる道志

を行うことこそ、武士にあらずや。
　我、同朋の家に生れて、文を学ぶことのみを強いられ、武を学ぶことを禁じられたり。然るに、武家が士道を忘れたる今日、同朋たる身が、文武両道を明らかにせんと心に決したるは、濁世を清らかにせんとするためのものにして、みじんの私心を含むものに非ず。
　そもそも、文武の道は、二にして一なり。世俗には、歌をよみ詩をつくり、文筆に達し、気立てもの柔らかに華奢(きゃしゃ)なるを文といい、弓馬兵法軍法を習い知り気立てたけく荒きなるを武と、思うならわしなり。然らず。天地の造化一気にして、陰は陽の根となり、陽は陰の根となる如く、武なき文は真実の文にあらず、文なき武は真実の武にあらず、天下を治めて五倫の道を正しゅうするを文といい、天命を恐れざる悪逆無道の徒ありて文道をさまたぐる時は決然起ってこれを討つを武というなれば、文は武の根となり、武は文の根となるは、自明の理なり。
　想いみよ。漢の高祖は、儒を好まざれども、陸賈(りくか)が言に折れ、叔孫(しゅくそん)の議に順(したが)いて、馬上にては天下を治めず。魏(ぎ)の武帝曹操は、千軍万馬の中に在りて、手より書をはなさず、赤壁の舟中、槊(さく)を横たえて詩を賦(ふ)したり。本邦にありては、正統の天子に事えて、精忠大節、万古に秀でし楠(くすのき)中将、備後三郎らこそ、文武両道の人というべし。備後三郎は、戎馬(じゅうば)の間に生れ乍ら、好んで書を読み、大楠公(だいなんこう)は、死に臨んで一子正行(まさつら)に、いよいよ勤学すべきよし遺戒されたり。
　東照神君のご定として、武家諸法度(はっと)の第一に記されたるは文武両道を学ぶべし、とあるなり。
　然るに、方今、士が士道を忘れるさま、目を掩(おお)わしむる惨状なり。信義道心なき者が、閨閥(けいばつ)によりて、公儀の高き地位にのぼり、諸役人は賄賂をむさぼり、大名は一家を肥(こや)すことのみに夢中になりて、閣老に阿諛(あゆ)し、富有の商人に詐術をめぐらし、その領分知行所の民百姓を困窮

の底に苦しませ、旗本は、屋敷風を野暮とののしりて、町人風俗を猿真似し、腰の剣をただの装飾となし、文武のすすめを蚊（か）のうなり声とうるさがる堕落のきわみ、学問も政治も人位の分（ぶん）を知らざること、今日よりははなはだしきはなし。されば、三民の怨気（おんき）、天にのぼりて、この一両年、暴風雨を呼び、地震を招き、山も崩れ、河も溢（あふ）れて、五穀飢饉（ききん）の上に、万人を仆（たお）す疫病の流行と相成れり。

まさに、方今の武士は、祖先の武勲を盗み、主君の禄を貪（むさぼ）りて、生涯ただ盗賊奴隷の生命を送るのみ。

武術は一種の花法に堕（お）ち、時世に阿（おもね）り、浮華に趨（はし）り、文弱に流れる有様、枚挙に堪えず、何を以て、三民の上に立つ士というべきや。

されば、今日只今、武家に非ざるいやしき同朋の我が、文武両道のなんたるかを、天下に知らしめるべく、虚偽を去り、死生を一にする知行合一の良知を致すものなり。凡庸怯懦（きょうだ）の輩（やから）は、双眼をみひらきて、とくと見とどけるべし。

丈夫（ますらお）のふみ入る道に生（お）しげる
　しこの醜草（しこぐさ）　薙（な）ぐはこの太刀

天保壬辰孟春　　沼津千阿弥

三

しかし――。

その檄文を、黙って、読み下す者は、ほとんどいなかった。
ただいたずらに、怒号し、罵詈し、叫喚をあげるばかりであった。
千阿弥は、あるいは、役人たちが、檄文を読み、粛然として、水を打ったごとく、わが最期を見まもることを期待していたかも知れない。
千阿弥は、いくども、「檄文を読め！」と叫んだ。それは、金属をこすり合せるような響きを持ち、悲鳴に近かった。
ついに——。
眉も眦もひきつらせた千阿弥は、ぱっと小素襖を脱ぎすてて、上半身はだかになった。
ひそかにきたえたものであろう、遠目で眺める狂四郎の目にも、筋骨の逞しさがみとめられた。
——すべて、古式に則った屠腹を為そうというわけか。
近頃の切腹の法は、白縁の畳を二畳敷いて、その上を死衣という六尺四方の白布で掩い、着衣のまま、前を押しひらいて切るのを普通としている。
敷皮を敷いて、上半身はだかになるのは、足利期の作法であった。
武士ではなく、同朋であるからこそ、かえって、往昔の作法をえらんだものと推察された。
罵詈雑言のあらしの中で、千阿弥は、切先を五六分ばかり出して奉書紙を逆巻きした脇差を、三方から把った。
二十歳ばかりの坊主が、介錯人として、西面した千阿弥の左斜めの背後に、ぴたりとより添うて北面して立った。
——介錯は、古式にはないことだが……。

狂四郎は、冷やかな光の双眸を、ほそめた。
介錯人にえらばれた若い坊主は、おそらく、その目的を以て、ひそかに、白刃を振る習練をしたに相違あるまいが、全身を石のようにこわばらせている様子がみえて、
——一太刀では、首を落せまい。
と、狂四郎に、看て取らせた。
千阿弥が、脇差を摑み締めて、何か叫んだが、包囲した役人たちの罵詈雑言の中に消された。
しかし、千阿弥が、左の掌で左脇腹をぐっと右へ引いて、切先をそこへ擬した瞬間、不意に、境内には、静寂が来た。
その白昼の静寂をつんざいて、
「やああっ！」
千阿弥は、凄まじい懸声をあげざま、左脇腹へ突き刺し、ぎりぎりと右へ切り裂いた。
すべての者が、固唾をのんで、その光景を見まもった。
千阿弥は、さらに、一文字に切り裂いた衄れた脇差をひき抜くや、胸の下鳩尾へ、刃を下へ向けて突き刺し、柄を逆手に摑むや、文字通り死力をふりしぼって、下腹へ——臍の下まで、縦に切り下げた。
それを待って、若い介錯人が、八双に構えていた刀を、千阿弥の頸めがけて、振りおろした。
狂四郎の予測は、あたった。
刀は、頸を断たず、千阿弥の肩へ食い込んだ。
千阿弥は、下腹へ脇差を、肩へ刀を食い込ませつつ、口腔を一杯にひらき、何か意味をなさぬ叫び声を発した。

坊主の一人が、奔って、千阿弥のからだを支えた。
介錯人は、白刃を千阿弥の肩から抜き取ると、
「南無っ！　八幡っ！」
と、絶叫して、再び振りかぶった。
多くの人々が、目蓋を閉じていた。
二の太刀は、無慚にも、千阿弥の後頭部をなぐって、にぶい音をたてた。
千阿弥は、がくっと首をたれた。
からだを支えていた坊主が、その額へ片手を押しあてて、擡げさせると、千阿弥は異常な意志力で、苦痛に歪んだ顔をまっすぐに立てた。
三度、白刃は、千阿弥めがけて、振りおろされた。
千阿弥の首は、かんまんな重みを示しつつ、前へ落ちた。
どよめきが、潮騒のように、役人の群れにひろがった。
狂四郎は、しずかに踵をまわした。
数歩のむこうに、武部仙十郎が立っていた。
「…………」
「…………」
二人は、黙って、視線を合わせた。言葉はなかった。
二王門をくぐり、赤橋を渡りかかって、老人が、はじめて、口をきいた。
「ののしることしか、しなかったの、役人どもは――」
「…………」

「ののしった役人どものうち、幾人が、あのように、十文字に腹を切る勇気を持って居るか？」
「…………」
「いや、たぶん、一人も、ああはやれまい。……あっぱれな最期であった、と云わざるを得ぬ」
「…………」
狂四郎は、老人の独語を、わずらわしいものにおぼえ、微かな嫌悪感にかられた。
「あの同朋、なぜ、お主という男が逢いに来たのに、介錯をたのまなんだのか。お主なら、のど皮一枚のこして、抱き首に介錯できたものを――」
「…………」
――千阿弥は、数知れぬほど人を斬ったこの無想正宗で、介錯しようと申し出られたならば、どんな軽侮の顔つきをしたことだろう？　人を斬ったことのない門下の坊主だからこそ、介錯させたのだ。
武部仙十郎に別れた狂四郎は、由比ヶ浜の渚へ出ていた。
薄紗に似た繊細な、まばゆいほど白い巻雲のちらばった青空の下に、穏やかな冬の海が、ひろがっていた。
濃い緑の平面から、幾段にも起って、打ち寄せる白い波は、淡い泡沫をのこして、黒い砂地をなめらかに撫で乍ら、引き去り、そしてまた次の波を、送りつけて来る動作を、あくことなく、くりかえしていた。
――この波は、永遠に死ぬことはない。
ふところ手の、黒の着流し姿は、なおしばらく、砂地に立ちつくして、動かなかった。

刺客

一

——どの谷（やつ）を抜けて行くべきか？

眠狂四郎は、覚園（かくおん）寺境内にある火焼地蔵の堂守小屋から、千華を連れて出てから、迷った。

鎌倉から戸塚宿（しゅく）へ出るには、由比ヶ浜から江ノ島を経て藤沢を通る海沿いの街道のほかは、すべて、坂を越えて切通（きりどおし）を通って行くことになる。

いわゆる鎌倉の七切通——七口をえらぶわけであった。

西からかぞえると、極楽寺の切通、大仏の切通、仮粧（けはい）坂、亀（かめ）ヶ谷（やつ）、巨福呂（こぶくろ）坂、朝比奈の切通、名越の切通である。

極楽寺の切通は、腰越・片瀬を経て、東海道に出る。大仏の切通、仮粧坂は藤沢に通じている。亀ヶ谷の坂は山之内庄へ抜ける。巨福呂坂は、山之内より大船へ至る。朝比奈の切通は、金沢へ出ることができ、名越の切通は、三浦郡を過ぎることになる。

将軍家代参——西丸大納言家慶は、明日、江戸へ還る。

鶴岡八幡宮境内にある神楽殿（かぐらでん）に於（お）いて、江戸城内同朋の沼津千阿弥が、檄（げき）をかかげて、割腹自決する異常の事変が、起ったいま、帰還道中の警戒は、厳重をきわめることは、目にみえていた。

狂四郎一人ならば、べつに、どうということもないが、連れている女子が、人目をはばかる異邦の娘なのであった。

狂四郎は、最も警戒が手薄であろうと思われる巨福呂坂から山之内庄へ至る旧道を、えらんだ。七つの切通のうち、これが、最も道路が嶮難(けんなん)だったからである。

のみならず――。

新道と旧道と二筋があった。旧道は、八幡宮の裏門のすこし南から西へ登る。二筋は、建長寺の前で、出合うが、そこからまた、岐(わか)れる。

旧道はすでに、ほとんど人跡を断って、けものみちにひとしくなっていた。

建長寺の前を過ぎる頃、狂四郎は、尾行者がいるような予感がした。

はっきりと察知したわけでもなく、べつに振りかえりもしなかったが、これは、無数の死地をくぐり抜けて来たこの男独特の、異常なまでに磨(と)ぎすまされた神経につたわって来る、音もない秋波のようなものであった。

「そなた――」

二歩ばかりうしろを跟(つ)いて来る千華を、狂四郎は、呼んだ。

「はい」

「長津呂で、そなたの仲間たちが、わたしに放って来た飛道具は、なんという武器だったのか？」

「ぶうめらんと申します。……鳥やけものを殺すのと、合戦で使うのと、二種類があります」

「そなたも、いま、所持しているか？」

「はい」

「もしかすると、この切通で、使わねばならぬかも知れぬ。その心づもりでいてもらおう」

「誰か、襲って来るのですか？」

「まだ、わからぬ」

凪もない、佳(よ)い日和(ひより)であった。

峰の彼方(かなた)に、遠く淡く、海原がかすんでいた。

枯草と落葉に埋もれた山道に、静寂がこめて、雉子(きじ)が二羽はばたいたほか、二人は、音というものを耳にしなかった。

狂四郎の胸底には、沼津千阿弥の自決が、重いものになって、澱(よど)んでいた。

檄文の内容は、狂四郎にとっては、遠い無縁のものであった。しかし、正気による狂気沙汰として、その凄絶(せいぜつ)の行為を、彼方に押しやってしまうには、あまりにも、これは、この市井の無頼者の認識の外にあった。

――あれは、まさしく、諫死(かんし)であろうが、諫死というものには、怒りがともなっていなくてはなるまい。

檄文には、いかにも邪曲の時世を責めたてる激しい文章がつらねてあったが、その行間には、沼津千阿弥の肚(はら)の底からの憤りは血噴(ちぶ)いてはいなかったように感じられる。

経験によって形づくられたこちらの認識が、浅すぎるゆえであろうか。

――沼津千阿弥は、天才である、と評判が高かった。おのが天分に充分の自負を持っていた男に相違ない。おのれの主観を、正確な分析によって予見できた男ということになる。……巫女(みこ)の霊感のような、曖昧(あいまい)もことしたものを、天分の裡(うち)からきっぱりと排除できた男なのだ。諫死などという行為が、いかに無駄であるか、知っていたに相違ない。にも拘(かかわ)らず、あの男は、死んだ。

――わからぬ！

二

狂四郎は、ふっと、なんの脈絡もなく、杜甫の「狂夫」という詩を、思いうかべた。

　万里橋西一草堂
　百花潭水すなわち滄浪
　風はふくむ翠篠娟娟として浄く
　雨はつつむ紅蕖冉冉として香ばし
　厚禄の故人は書を断絶し
　恒飢の稚子は色凄涼
　溝壑にうずめんとするも唯疎放
　自ら笑う狂夫、老いて更に狂なるを

　おのが草堂の景色を眺め、おのが知己、おのが家族のことを考え、そして、時勢に会わず世事にうといおのれ自身を顧みて、みずから狂夫と呼んだ詩人の心境が、この詩には、滲み出ている。

「溝壑に塡む」というのは、史記の〝范雎伝〟にある「身死して収葬するものなきは、犬馬の斃るるがごとくにして、尸を溝壑に棄つ」を指す。いわゆる野垂れ死である。

　杜甫ほどの天才が、老いさらばえて、このようにうたうからこそ、この悲痛が、後世の者の心にも、そくそくとつたわって来るのではあるまいか。

　源実朝が二十八歳で斃れた同じ日、同じ二十八歳で、同場所をえらんで、諫死のかたちで、割腹という行為をえらんだ——そのことは、どこやら、正義というものから、はずれているように思われる。

——あの男は、正しい魂——正義というものを、いかなる経験も排して、ただおのれの力のみでつくりあげた定義に則ったものだ、と思いきめたのではあるまいか？

——伝統とみせかけた儀式にしばられ、あらゆる秘密をたたえ、嫉妬を匿し、凡夫の将軍家が君臨して、世間から表裏をとざした江戸城内でくらしているうちに、あの男は、まことの孤独をあじわうようになった。その孤独が、おのれ流の正義をつくりあげた。その正義を、世間に示すために、割腹をえらんだのか？

嶮路のむこうに、洞門の昏い口がひらいている地点に来て、狂四郎は、おのれの予感が的中したのをさとった。

尾行者が、迫って来たのである。

狂四郎は、路傍に建つ鼻欠けの風化した地蔵尊を、何気なく一瞥した。

仁治元年、と背負うた石面に刻んである。洞門を掘りぬいた時の犠牲者のために、建てられた石仏に相違ない。

「そなたは、そのほとけの蔭にいるがよい」

狂四郎は、命じた。

足をはやめて、迫って来たのは、三人の武士であった。

踵をまわした狂四郎は、公儀庭番衆と看てとった。

距離が、七八歩に縮められると、対手がたは、立ち停った。

「この素浪人を、討ち取りに来た模様だが、その理由は？」

狂四郎は、問うた。

「貴公が、八幡宮赤橋上で、同朋沼津千阿弥と逢うて、何か相談するところがあった、と相判っ

た。沼津千阿弥には、老中若年寄を暗殺し、御大城（江戸城）内を乗っ取る企計があった、と推測される。……貴公は、生き残った坊主どもを率いて、沼津千阿弥の遺志を継ぐことを約したものであろう」

狂四郎は、その口上を、滑稽なものにきき乍ら、

「そのようなばかげた妄想を、起したのは、お手前がたを手足にして動かせる人物——といえば、さしずめ、お目付ということになるが、ついでのことに、その名をうかがっておこう」

「問答無用っ！」

三人は、一斉に、白刃を鞘走らせた。

この眠狂四郎に対する討手として、さし向けられただけあって、いずれも、なみなみならぬ手練者であることを、その構えから看てとり乍ら、脳裡をちらと横切ったのは、沼津千阿弥がのこした若い門下百人が、一人のこらず斬られる悲惨な光景であった。

この瞬間——はじめて、狂四郎は、青山書塾の坊主衆を守ってやりたい気持が、湧いた。

一人が、正面から肉薄し、二人が左右へわかれて、草の中へ踏み込んだ。

地蔵尊側へ踏み込んだ者が、ものの一間も進まぬうちに、

「あぁっ！」

叫びをほとばしらせて、のけぞった。

地蔵尊の蔭から飛来した黒い鳥の迅影に似た武器に、顔面を両断されたのである。

その時——ほとんど同時に。

狂四郎は、正面から猛然たる突きを放って来た敵を、袈裟がけに、血煙りをあげさせていた。

次の刹那——。

最後に残った者が、横あいの叢中（そうちゅう）から、五体を路面へたたきつけるような意外な攻撃をしかけて来た。
五体を地面へたたきつけるようにして、狂四郎の腹部めがけて、電光の薙（な）ぎあげをくれた。
狂四郎が、間一髪の差で、跳び退るや、その敵は一回転しざま、地蔵尊へ体あたりをくれた。
地蔵尊が、ひっくりかえった瞬間には、千華は、公儀庭番の猿臂（えんぴ）の下に在った。
「眠狂四郎、刀をすてろ！」
千華ののどもとへ、白刃を当てて、庭番は、叫んだ。
「…………」
狂四郎は、敵の計算を看破れなかったおのれの不覚を自嘲（じちょう）した。

三

「刀をすてろっ！」
庭番は、再度叫んだ。
狂四郎は、やむなく、無想正宗を鞘に納めて、それを腰から抜くと、こじりをつかんで、さし出した。
「把れ！」
「その手には乗らぬ。地べたへ投げろ」
庭番は、要心深かった。
一瞬——。
狂四郎が、こじりをつかんだ右手を、目にもとまらぬ迅（はや）さで、宙を旋回させた。

無想正宗は、生きもののごとく、鞘から抜け出るや、つばめがえしに、矢のごとく、庭番めがけて、手裏剣となって飛んだ。
「おっ！」
庭番が、午後の薄ら陽をはねて襲って来た白刃を、ぱあんと払った瞬間、千華は、すばやく、その手から遁れていた。
狂四郎は、地を蹴るや、はねとばされた無想正宗が、落下して来る地点へ、奔駆していた。
そして、わが手にもどった愛刀を、地摺りに下げると、
「勝負は、みえたが、まだ、死にいそぎをするのか？」
と、冷たい眼眸を、対手に当てた。
「後日に――」
庭番は、意外なほどあっさり敗北をみとめて、後退した。
「参ろうか」
狂四郎は、ふところ手になると、千華をうながした。
千華は、感動を、表情にあふらせたが、それを言葉にして口に出すことができぬようであった。
洞門へ、歩み入ろうとして、狂四郎は、薄暗い中に立つ者がいるのを、みとめた。
中年の町人ていで、ごくありきたりの面貌の持主であった。
「眠狂四郎の旦那、水際立ったお腕前を、拝見させて頂きました」
そう云って、頭を下げた。
「………？」
男は、狂四郎から鋭い眼光を射込まれると、あわてて、首をすくめて、

「てまえは、そこのお庭番のように、べつに死にいそぎをしているわけじゃございません。……おねがいしたい筋があって、一足さきに、ここに参って、お待ち申して居りましたので――」

と、云った。

「わたしが、この切通をえらぶと、予想した、というのか？」

「へい。カンでございましてね、中りました」

「なんの用事だ？」

「てまえ、弥之助と申す」

男は、名のってから、

「店者の恰好をして居りますが、旦那の目をごまかせるとは思えません。正直に申し上げます。夜働きを稼業にして居る者でございます」

「盗っ人が、わたしに、たのみごとがあるのか」

「へえ。……是非おききとどけねがわしゅう存じます」

「…………」

「失礼でございますが、てまえ、さきに歩かせて頂き乍ら、お話し申し上げとう存じます。ちょいとばかり、急いで居りますもので――」

弥之助という盗賊は、二歩ばかり先に立って、洞門の中を進み乍ら、言葉を継いだ。

「昨年の秋のことでございました。青山のご同朋のお屋敷へ、忍び込みましてね、なにしろ、ご同朋ってえのは、ご城内で、お大名お旗本衆から、たんまりと頂戴ものがあるときいていたので、こちらにも、おすそわけをして頂こうと存じましてね。……ところが、忍び入ってみると、勝手がちがっていたのでございます。てまえが、匍いつくばった天井裏の、その下では、沼津千阿弥

と仰言るお若いご同朋が、ちょうど、お坊主衆を五六十人集めて、ご講義のまっ最中でございました。……大層むつかしいことを講義なされて居りまして、平仮名さえまんぞくに書けねえ夜働き風情には、はじめのうちは、ちんぷんかんぷんでございましたが……」

なんとなく耳を傾けているうちに、弥之助にも、沼津千阿弥の述べることが、おぼろげ乍ら、判って来た。

それよりも、沼津千阿弥の全身全霊をこめた熱情と、その講述に耳をかたむける血気の若者たちの必死な態度がつくる雰囲気が、無学文盲の盗賊の心を、ひきしめさせた。

「てまえにとっては、これァ、生れてはじめての感激でございました。……そこで、てまえは、次の日も、その次の日も――天井裏へ忍び込んで、沼津様のお話を、ぬすみぎきした次第でございます」

十日ばかりのち、弥之助は、思いきって、沼津家を、玄関から訪れて、千阿弥に会うと、ありのままを白状して、自分のような下賤な人間にも、なにかお役に立つことがあれば、骨を粉にしても働きたい、と願い出たのであった。

千阿弥は、べつに、何をせよ、と命じはしなかったが、弥之助に自由に出入りすることを許した。

年の暮になってから、千阿弥が門下の中から数人をえらんで、わが道をあきらかにするためには、死をえらぶよりほかはない、と申し渡すのを、弥之助は、ぬすみぎいたのであった。

盗賊ずれが、その死を阻止することなど、できる筈もなかった。

四

「で——つまり、本日、ああいうことになってしまったのでございます」
「…………」
「沼津様のご切腹は、これはもう、ご門弟衆も、止めて止められることじゃございませんでした。てまえ自身も、あれが、あの先生の寿命だったような気がいたして居ります。……ただ、てまえが、おそれて居りますのは、あとにのこされたご門弟衆のことでございます」
「…………」
「ご門弟衆のうち、二十人ばかりが、神奈川宿まで、参られて居るのを、てまえは、知って居ります。その御仁(おひと)がたが、どんな肚づもりで居られるか、てまえには、およそ、見当がついて居るのでございます」
「…………」
「つまり、その、先生のあとを慕うて、ご一同うちそろって、切腹なさるのではあるまいかと……」
「将軍家代参の帰途をはばんで、街道上に列座して切腹する、というわけか」
「左様でございます」
弥之助は、その時、足を停めて、向きなおった。
「てまえは、貴方様(あなた)が、八幡宮の赤橋の上で、沼津様と逢うておいでのところを、遠くから、拝見いたして居ります。……貴方様なら、お坊主衆の切腹を、お止め下さるのではあるまいか、と存じまして、ここで、お待ち申し上げていたのでございます」
「…………」
「お願いでございます。ご坊主衆のあと追い腹を、どうか、おひきとどめ下さいまし」

「…………」

「判って居ります。貴方様が、これ以上、このことに、かかわりあいたくはない、と考えておいでなのは、よく判って居ります。……けれども、貴方様も、あのお坊主衆の、若々しい、純な心に満ちた姿を、ごらんなされば、生かしてやろう、というお気持になりになるに相違ございませぬ」

「…………」

狂四郎は、しかし、返辞をせずに、弥之助のわきを、行き過ぎて、先に立った。

「眠様！」

弥之助は、必死の声で、呼んだ。

「お願いでございます！　何卒——」

狂四郎は、急勾配の坂路を、黙って降りた。

谷と谷をつなぐ新しい切通にさしかかった時、狂四郎は、はじめて、口をひらいた。

「弥之助——」

「へい」

「お前に、ひとつだけ、きいておこう」

「仰言って下さいまし」

「お前は、沼津千阿弥に、心酔していたらしいが、実は、ほかに、なにかの仔細、事情があって、青山書塾の面々に、味方しようとしているのではないか、どうかだ」

「滅相もない。てまえは、ただもう、純な心を持った若いかたがたを、なんとか、おたすけしたい、とそれだけを願っているばかりでございます」

不吉な死神

一

今日も、冬空は、美しく晴れわたっていた。

これから下界にどんな異変が起ろうと、なんのかかわりもない良い日和であった。

広重の『東海道五十三次』のうちの神奈川は、緩やかな坂になった街道に、旗亭が竝び、留女が旅人の袖をひいて居り、旗亭のすぐ裏手から、海原がひろがって、幾艘かの白い布帆が浮いている。

遠く、黛のようにかすんでいるのは、上総房州の山である。

神奈川湾は、街道まで浪を打ち寄せていたのである。

湾が埋めたてられ、市街地となったのは、明治初年になってからであった。横浜の豪商高島嘉右衛門が、鉄道の敷設を請負うて、湾を一変させたのである。

天保のはじめのこの時代は、旗亭の竝ぶ台地のほかは、浜辺にわずかの漁師小屋がちらばっているだけであった。

程ヶ谷宿とは、わずか一里九町はなれているにすぎぬ。

前夜から、神奈川宿に泊っていた坊主頭の血気の若者二十人が、旅籠を出たのは、今日も良い日和と判る夜明けて程ない頃あいであった。

それぞれが、かなりの荷物を、背負ったり、かついだりしていた。

程ヶ谷宿の帷子(かたびら)川に架けられたかたびら橋を渡ってから、渠(かれ)らの姿は、忽然(こつぜん)として何処かへ消えた。

恰度(ちょうど)、その時刻に、役人たちが、地下(じげ)人たちを動員して、街道の清掃をはじめた。午後になって、鎌倉の鶴岡八幡宮へ参詣(さんけい)した将軍家代参——西丸大納言家慶が、江戸へ還る行列が通るためであった。

すでに街道沿いの人家は、昨夜から炊煙をあげるのを止めていたし、軒下店先から見苦しい物は、とりのぞいてあった。

地下人たちが、路上を掃ききよめた頃には、一般の通行も禁じられた。

程ヶ谷から、西へ二十町ばかり行った地点を、境木といった。すなわち、武蔵(むさし)と相模の国境である。

ここは、険しい坂路になり、品野坂といい、江戸と箱根の間にある一嶮路と称されていた。

正午を期して、品野坂の密林の中にひそんでいた江戸城お坊主衆が、街道上へ出現した時、いずれも純白の死装束姿になっていた。

坂の頂上は、断崖(だんがい)が切りひろげられて、かなりの広さになっていたが、渠らは、予(あらかじ)め分担したおのおのの仕事を、あっという間にやりあげた。

すなわち。

街道上に、切腹場をしつらえたのである。

広さ六間四方、北側に修行門、南側に涅槃(ねはん)門、そして正門として、山門に似せた八尺幅六尺高の門をつくった。これら三つの門は、青竹に白布を巻きつけたものであった。

場内のまわりは、幅四尺の白無地の幔幕(まんまく)をめぐらし、四隅に、「倶会一処(ぐえいっしょ)」と記した、長さ六

尺の弔旗が、立てられた。
場内には、白縁の畳を、丁字形に据え、その上を白布で掩うた。
地下人の報せで、数人の役人たちが、そこへ馳せつけた時には、凄絶な儀式にふさわしい舞台は、完全に設備を終了していた。
切腹畳のうしろには、白張の屛風も立てられ、その蔭には、棺も首桶も手桶も、目立たぬように置かれてあった。
そして――。
切腹を決行する十人は、すでに座に就いていた。
介錯の役目にまわった十人は、白刃を抜きはなって、正門前に竝んで、役人たちを睨みつけた。
役人たちは、すでに、昨日、鶴岡八幡宮の神楽殿で、同朋沼津千阿弥が檄文をかかげて屠腹自決を遂げた異変をきき知っていたので、この血気の若者たちが、その門下であることを、看てとった。
「止めい！　たわけた犬死は止めい！」
「西丸様のお道中を、おのれらの血でけがして、何になる！」
「一家九族までが、罪になるのだぞ！」
この土地を守備する役人たちとしては、おのが首がとぶことにもなりかねぬ落度になるので、血相を変え、全身を顫わせて、喚きたてた。
一人などは、見栄も外聞もなく、いきなり土下座して、
「た、たのむ！　止めてくれ！」
と、額を地べたへすりつけた。

若者たちは、きわめて冷やかな無表情であった。
「こ、この通りだ！　無謀な振舞いを、思いとどまってくれ！」
土下座した役人が、合掌すると、若者の一人は、高らかに、
「三軍すでに陣成り、士は死を視ること帰するが如し！」
と、韓非子（かんぴし）の言を、口にした。
死を決した若者たちの、鋭くきびしくひきしまった態度は、役人たちを絶望させた。
いたずらに、
「たのむ！」
「お願いだ！　止めてくれ！」
と、悲鳴をあげるばかりであった。

二

同じ日の朝――。
東海道の松並木を、三町ばかり彼方に望む戸塚の間道は、いつもは、地下の者だけが時たま通るのであったが、今日は、旅客の姿が、たくさん見受けられた。
昨夜のうちから、街道は掃ききよめられて、もうこの時刻は通行を禁止されていたからである。
街道沿いの腰掛茶屋は、閉じられて、間道の方に、葦簀（よしず）で囲った臨時の休み所が設けられていた。
眠狂四郎は、千華と弥之助という夜盗をつれて、そこの床几（しょうぎ）に腰を下ろした時、
「坊主衆は、神奈川宿に泊って居るのだな？」

と、弥之助に念を押した。
「へい。昨夜からでございます」
「すると……」
宙に冴えた眼眸を置いて、
「さしあたり、屠腹の場所をえらぶとすれば、境木の品野坂か」
と、呟いた。
「…………」
弥之助は、狂四郎の冷たい横顔を、見まもった。
「坊主衆が勝手に死をえらぶのを、阻止しなければならぬ理由は、ないが……」
「旦那！　一途に思いきめていなさる若いかたがたの生命を救ってさしあげるのは、旦那のような御仁だからこそ、おできになるのじゃございますまいか？」
「おのれに降りかかった火の粉は、払うが、こちらから進んで、よけいなお節介をやいたことは、まだない男だ、わたしは——」
「そう仰言り乍らも、旦那は、いまから境木まで行く時間を、はかっていなさる」
弥之助は、狂四郎の胸中を看抜いたように、云った。
狂四郎は、千華へ、視線を移した。
「行くとすれば、そなたを、この男にあずけることになる」
「…………」
千華は、お高祖頭巾の蔭の双眸を、まばたきもさせずに、狂四郎を瞶めかえしている。
「そなたの味方から、わたしが信頼されたように、わたしも、この男を一応信頼して、そなたを

あずけて、江戸までともなってもらわねばならぬ」
「はい」
千華は、うなずいた。
「旦那、有難う存じます」
弥之助は、頭を下げた。
「弥之助、お前はすでに気づいて居ろう。この娘は、このお高祖頭巾を、はずせぬのだ」
「南蛮のお娘御であることは、鎌倉の谷で、見とどけさせて頂きました」
「実は、わたしも、この娘が、なんの目的で、海を渡って、忍び入って来たのか、きいて居らぬ。江戸のさる大名屋敷へ送りとどけることだけをひき受けたのだ。……お前も、そのつもりでいてもらおう」
「かしこまりました」
狂四郎は、品川宿はずれの場所と時刻を指定しておいて、葦簀囲いから、出た。
その時、ふっと、
——弥之助という男、信じてよいのかな？
その疑念が、脳裡をかすめた。
しかし、いまは、信じてみるよりほかはなかった。
沼津千阿弥の遺言が、耳にのこっていたからである。
「拙者は、出仕を止めてのち、書塾に、およそ百人の門弟をやしない申した。……拙者亡きのち、渠らが、拙者の志を継ぐことに相成るが、その際、貴殿のお力をおかりする場合もあるやも知れ申さぬ。その儀、お心のうちに、とめておかれたい。お願い申す」

千阿弥は、そう云いのこしたのである。
こちらは、その時は、諾否いずれとも言葉にも態度にも示さなかった。
千阿弥に対して友情を持った間柄ではなかった。韮山代官江川太郎左衛門にたのまれて、千阿弥が何を為すか、見とどけに、鎌倉へおもむいただけである。
千阿弥が、自ら諫死をえらんで、門弟をあとに残したにすぎないことであった。
尤も、門弟たちが、あと追い腹をするのは、おそらく、千阿弥の命ずるところではないであろう。
——死ぬ奴は、勝手に死ぬがよかろう。
その冷酷な気持も、狂四郎の脳裡の片隅には、ある。
にも拘らず、狂四郎は、坊主衆の屠腹を阻止すべく、歩き出した。そうしなければならぬ、とおのれ自身に云いきかせたわけではなかった。
——あの同朋の正気による狂気の沙汰は、おれという男を、門下の味方にするだけの凄絶さがあった、ということか。
何百人、人を斬ったか知らぬが、おのれ自身の腹を切ることはできまい、とあざけった千阿弥の侮蔑をこめた表情を思い泛べ乍ら、狂四郎は、次第に足どりを速いものにした。
「おーい、眠殿。……眠狂四郎殿ではないか」
その呼び声が、後方からかかったのは、数町をひろってからであった。
振りかえると、編笠をかぶった、着流しの、いかにも尾羽打ち枯らした風体の浪人者が、追って来た。
「やあ、久闊！」

編笠をあげたその面貌は、額も頬も頤も、刀痕凄まじく、常人なら、思わず、目をそむけざるを得まい。

死神九郎太。

自身がつけたのか、他人から称ばれるようになったのか——いまでは、自身の口からそう名のるこの男とは、三年前に、土佐の宿毛で、知りあっている。それから、どういう巡りあわせか、これまでに、思いがけない場所で、幾度か、出逢っているのであった。

江戸とか、京大坂とか、そういう繁華な土地ではなく、天草の海辺とか、木曽の山中とか、津軽のさる湖畔の温泉宿とか——知り人とは全く出逢わぬような場所で、この男は、ひょっこり、面前に姿を現わしたのである。

しかし、出逢った、というだけで、べつに双方の間に、敵になるか味方になるかといった切迫した何事かが起ったことは一度もなかった。津軽のさる湖畔の温泉宿では、数日間部屋をとなりあわせたが、交わした会話も記憶にとどまってはいない。

縁があるといえばあり、ないといえばない、そんな間柄であった。

こちらから、面貌がそのように変りはてた時の仔細をきいたこともないし、対手も語ろうとはしなかった。ただ、肩をならべて釣糸をたれたり、街道をひろったり、同じ宿ですごしたりしたにすぎなかったのである。

「江戸へ戻られるのか？」

死神九郎太は、その凄まじい面貌におよそふさわしくない明るい声音で、問うた。

この男の取柄は——はたしてそれが本性かどうか不明であるが——きわめて態度が快活なことであった。

「それがしも、江戸へ参る途中でござるよ」
「…………」
「実は、眠殿だから、打ち明け申すが、夢のような金儲け話がござってな。その金高たるや、百両や二百両ではござらぬ。……もしかすると、数千両――いや、一万両も、このふところへ……」
死神九郎太が、そこまで云った時、狂四郎の視線は、急に鋭いものになって、彼方の街道へそそがれた。
数騎が、疾風の迅さで、東へ向って掠め去るのをみとめて、狂四郎は、
――はてな？
不吉な予感をおぼえたのである。
奇妙な暗示だが、この死神九郎太と出逢ったことが、不吉な予感の確率を、狂四郎に測らせた。
「ここで、失礼しよう」
「なんと――？」
「お主の儲け話は、この次に出逢うた折に、うかがおう」
狂四郎は、云いのこした。

三

品野坂の切腹場に於ては――。
役人たちの嘆願もむなしく、十人の坊主衆は、師の沼津千阿弥がそうしたように、朱絹の鉢巻をして、三方から脇差を把って、抜きはなっていた。

同数の朋輩が介錯人として、その背後に北面して、立った。
あとから想いやれば、渠らは、直ちに、腹へ切先を突き立てればよかったのである。
渠らは、昨夜相談したに相違ない。
脇差を腹へ突き立てる前に、師が作成した檄文を、声を張りあげて、斉唱しはじめたのである。
「我、柳営同朋の家に生れて、今日二十八歳。班固(はんこ)が志にならいて、八歳にして小学に入り、十五歳にして大学に入り、二十歳にして一芸に通じ、ようやく今日五経終れり。然(しか)れども、古人の学を識(し)る日きわめて短く、節義に暗し。而(しこう)して、同朋衆なるいやしき家に生れし故に、士道に謂(い)う『覚悟』を修むること能(あた)わず……」
檄文は、長かった。
ようやく、終りに近づき、
「……まさに、方今の武士は、祖先の武勲を盗み、主君の禄を貪(むさぼ)りて、生涯ただ盗賊奴隷の生命を送るのみ……」
そのくだりに至った時、坂下からせわしく高鳴る数騎の馬蹄(ばてい)の音が、ひびいた。
いまはただ、為すすべもなく、血気の坊主衆の最期を目撃しようとしていた役人たちは、それをきいて、再び、われにかえったように叫びをあげ喚きたてた。
そこへ疾駆して来たのは、五騎であった。いずれも、きわめて無表情な、尋常の風貌の所有者ばかりであったが、たづなを引くやいなや、地上へ跳び降りて、切腹場へ躍り込む迅さは、一陣の旋風(つむじ)に似ていた。
役人たちが声を立てるいとまもないくらい、一瞬裡の修羅場が、そこに現出した。
五人の武士は、抜刀するがはやいか、座に就いていた切腹人たちを、一人が二人ずつ、凄まじ

い業前で、あるいは袈裟がけに、まっ向唐竹割りに、斬り仆した。
つづいて、背後に立つ介錯人たちに対しても、容赦のない凶刀を加えた。
坊主衆のうち、抵抗しようとしたのは、わずかに三四人であり、それとても、刃で受けとめることさえも叶わなかった。
遁げようとした者は、一人もいなかった。
今日の時間ではかれば、十秒もかからなかったであろう。
またたく間に——という形容通りに、公儀をあなどる行為をとろうとした江戸城お坊主二十人を片づけた五人の武士は、いずれも眉毛一本動かさぬ無表情で、馬のところへ戻って、さっとうちまたがった。
指揮格らしい一人が、冷たくかわいた声音で、茫然自失している役人たちに、
「早々に、死体を取りかたづけい。血汐一滴も、地面にとどめては相成らぬ」
そう命じた。
五騎は、江戸の方角へ向って、来た時と同様、疾風の勢いで、駆け去った。
眠狂四郎が、はだか馬をとばして、そこへ到着したのは、その直後——役人たちが、死体を路傍へひきずって、ならべようとした時であった。
——しまった！
狂四郎は、馬上からその光景を眺めやって、胃痛に似た悔いを疼かせた。
弥之助という夜盗が告げた通りの出来事が、ここで演じられようとしたのである。そして、こちらの不吉の予感は、的中した。
狂四郎は、鎌倉の谷で、自分を襲撃して来た公儀庭番たちの仕業と看てとり乍ら、ならべられ

た死骸へ近づいた。
いずれも、ただの一太刀で仕止められていた。
役人たちは、通行禁止の街道を、馬をとばして来た狂四郎を、公儀の隠密とでも思いちがいをしたのか、それとも、咎める余裕もないくらい気持を動転させているのか、黙っていた。
狂四郎は、二十個の屍が、いずれも、二十歳を越えたばかりの若さであるのをみとめて、この若者たちをここまで一途に思いつめさせた沼津千阿弥という一人の天才に対して、微かな憤りをおぼえずにはいられなかった。
――死生を一にする知行合一の良知を致す、か。
狂四郎は、はだか馬をそこに乗りすてておいて、歩き出し乍ら、檄文の中の一節を、口のうちに呟いた。
――死生を一にする、などということが、あり得るものか。生きている時のおのれには死はないし、死んでしまったおのれには生はないのだ。死と生が一になる、というのは言葉の綾にすぎぬ。
「あ――もし！」
役人の一人が、あわてて呼びかけた。
「街道を往かれるのは、お避けねがいたい」
「…………」
狂四郎は、返辞もしなかった。
二十人を斬り仆した公儀庭番の面々は、おそらく、江戸の青山にある沼津千阿弥の書塾をめざしたに相違ない。

千阿弥の門下は、まだ七十人以上が、残っている。それらを一人残らず斬れ、という命令が、下されているものと思われる。
――どうする？
狂四郎は、おのれに問うていた。
七十余人の若者の味方になって、闘うかどうかである。
武部仙十郎ならば、薄ら笑って、
「無駄だの」
と、云うであろう。
こちらにも、士道に謂う「覚悟」もなければ、義心が燃えた次第でもない。
無縁の世界の異変として、冷やかに眺めるのが、こちらの生きかたなのだ。
にも拘らず、狂四郎は、
――どうするのだ？
と、おのれに問うている。
答えの出ぬままに、その足は、江戸へ向って、瘦身（そうしん）をはこんでいた。

虜囚

一

「おう、おう、おうっ。きいてびっくり、泣いてしゃっくりだあ。おどろくな、同朋のかっぷく

だぞ」
若い衆が、南北の紺屋町をつなぐ京橋川出口に架けられた比丘尼橋の橋袂の髪結床へ、息せき切って、とび込んで来た。
隣りが山くじらの店（猪、熊、鹿、猿の肉）で、そのにおいが、ここにも、流れて来ていた。
順番待ちの客は、大半が威勢のいい大根河岸の連中であった。
「どうぼうって、なんでえ？」
「同朋は同朋だい」
「作麼生！　友達のことを同朋といい、居候なら同房で、三水をつけて洞房と書けば女郎屋のことだが……」
横丁の隠居が、云った。
「おめえの職は、訛って、どろぼうだ。上に、こそとつかあ」
「うるせえやい。お城のお坊主がしらのことだい、同朋ってえのは——」
「その同朋が、どうしたってんだ？」
「割腹だあ」
「わしのことかあ」
将棋をさしていたでっぷり肥えた近くの寺の住職が、王手飛車取りの高い音をたて乍ら、
「身の丈六尺、体重三十有五貫、膂力は二十と八人力、関羽張飛の再来か、威風堂々押し出したる——この恰幅は日本一」
「置きやがれ。かっぷくはかっぷくでも、腹をかっさばいたんだぞ、腹を——」
「割腹、切腹、屠腹に自刃、自害に自裁に、愚妻に負債、これに天災と来ると、ぞっとせんのう」

「まぜっかえすねえ。てめえら、お城のお坊主がしらが腹を切ったのを、おどろかねえのか」
「おどろくのう。さぞ、痛かったであろうて、自腹を切るのは」
「ちぇっ！　当節、さむれえだって、腹を切る度胸のある奴は、一人もいねえんだぞ。それがよう、お城のお坊主がしらが、十文字にかっさばいたんだぞ、ちったあ、びっくりしやがれ」
「十文字とは、びっくりだのう。花魁道中なら八文字で、この前、その八文字を踏みそこねて、ひっくりけえって、裾がぱあっと、観音びらきになったが、見せたかったのう」
所詮は、庶民にとって、同朋一人が切腹したぐらい、遠い無縁の出来事であった。
報せに馳せつけた若い衆は、むかっ腹を立てて、
「むかしは、赤穂義士が切腹した時は、日本中が、ひっくりけえる大騒ぎをしたんだぞ。いまは、女郎がひっくりけえるのに舌なめずりしてやがる。末世だ、こん畜生。……同じ坊主でも、そこで将棋をさしてやがる生臭坊主とは、月とすっぽんだあ。ざまアみやがれ」
毒吐いておいて、出て行った。
その折、片隅に手枕していた男が、むっくり起き上った。金八であった。吉原からの朝帰りで、宿酔いの大あくびをした。
それを見やって、寺の和尚が、笑い乍ら、
「同朋は切腹、巾着切はここで、潜伏」
と、云った。
「そういうてめえは、お布施で満腹だろう」
そう云いかえした金八は、何気なく往還を見やって、
「おっ！」

と、叫びをあげた。
「なんだ、だしぬけに大声を出しやがって――」
「糞坊主、どけどけっ！　おいらの親分が、お帰りだあ」
金八は、鶴を描いた窓の半障子をひきあけて、首を突き出すと、
「へい、待ってやした。金八、ここに罷り在りっ」
と、黒の着流し姿へ、呼びかけた。
眠狂四郎は、一瞥をくれると、なにを思ったか、鶴床の土間へ、すっと入って来た。
「去年の秋から、行方をくらまして、いってえ、どこへかくれていなすったので？」
訊ねかける金八へ、
「いま、旅の薬売りが、ここへ入って来る。わたしが出て行ったら、そいつに、難癖つけて、時間をかせいでもらおう」
狂四郎は、そう云いふくめておいて、順番を無視すると、床へ腰をおろし、
「親方、顔をたのむ」
と、云った。
金八は、客一同を見まわして、
「おめえら、合点だな？」
と、味方になることをもとめた。
「わかってら」
一人が、胸を叩いた。
大根河岸の連中は、眠狂四郎と顔見知りであったし、金八とも親しかったのである。つゝ、うとい

えば、かあとこたえるイキのいい江戸っ子たちであった。

二

狂四郎の予告通り、親方が狂四郎の顔を剃りはじめた時、背負い荷の薬売りが入って来た。
どこといって胡乱な点は感じられなかったが、狂四郎の後ろ姿へ、ちらと呉れた視線に、鋭さがあった。
客たちは、将棋をさす者、色里の噂をする者、小唄を口ずさむ者——それぞれ、何気ないていをよそおい乍ら、ひそかになりゆきをうかがった。
やがて——。
狂四郎は、頤下から頸根まできれいに剃りあげさせると、下剃に小銭を渡しておいて、すっと、おもてへ出て行った。
十歩も遠ざかった頃合をはかって、薬売りも腰を上げた。
とたん、
「おう、待ちねえ！」
金八が、その袖をつかんだ。
「ここをどこだと思ってやがる。比丘尼橋の鶴床は、江戸で五本の指にかぞえられる親方のやっている店だぜ。いったん、入ったからにゃ、ちゃんと男っぷりをあげて出て行ってもらおうじゃねえか」
「それが、ちと、急ぎの用事を思い出しましたので……」
「思い出すなら、入る前にしやがれ。入ったからにゃ、どうでも、月代を剃って、髪を結ってや

らあ」

薬売りは、無言で、金八の手をもぎはなした。

しかし、その時すでに、若い衆二人が、すばやく、火鉢にかけてあった銅(あかがね)の大薬罐(やかん)から、にえたぎった熱湯を、小盥(だらい)に汲みとって、表の腰板障子ぎわに、立ちふさがっていた。

どうでも出て行こうとするなら、ぶっかけるぞ、という気勢をあげてみせた。

流石(さすが)の尾行者も、一瞬、ひるんだ。

「郷に入っては郷に従え、といわあ。いいから、そこにおとなしく腰かけて、順番を待ちな」

金八は、勝ちほこって、云った。

と――一瞬。

別人のように鋭い面相と化した薬売りは、金八の右手の指三本を摑(つか)んで、後ろへねじあげると、ぴたっと寄り添って、

「出ろ！」

と、命じた。

掏摸(すり)が、指を折られては、商売あがったりである。

小盥を持った若い衆たちが、たじろぐ隙に、薬売りは金八を先に立てて、往還へ出ると、ぱっと突き倒しておいて、狂四郎が渡ったであろう比丘尼橋を、脱兎(だっと)の如く奔(はし)った。

金八は、起き上って、

「おう痛えっ！　おっそろしい力を持ってやがるぜ、あん畜生。日本一の名人芸のこの指を折ってでもみやがれ、草の根わけてもさがし出して、のど笛を食いちぎってくれら」

ぶつぶつ云い乍ら、土間へ戻って来て、

「へえ！」
と、目をみはった。
いつの間にか、狂四郎が裏口から入って来ていたのである。
「親方、二階を借りるぞ」
ことわっておいて、階段をのぼって行った。
あわてて、あとをついて来た金八が、
「あっしが、吉原から、つけ馬をつれて来るのも毎度のことだが、旦那も、よく、尾(つ)けさせなさるねえ」
と、首を振った。
頭のつかえるほど天井のひくい、うすぎたない四畳半に、寝そべった狂四郎は、
「ひとっ走り、使いをたのまれてくれ」
「へいっ！　水の中でも、火の中でも――」
「小伝馬上町の千代田稲荷(いなり)裏手に、去年まで岡っ引をつとめていた久七という男が、子供対手(あいて)の南蛮菓子屋をひらいているはずだ。その店に、わたしの預かった娘が、到着したかどうか、たしかめて来てもらおう」
「なんだ、そんな使いですかい」
「ただの娘ではない。海のむこうからはるばる密入国して来た娘だ」
「そいつはまた、とんだしろものを引き受けなすったもので――」
「犬も歩けば棒に当る。おれが歩けば、必ず血なまぐさい異変に出会うことは、お前も知って居ろう。……昨日、その娘を、鎌倉の谷で、弥之助という夜働きに身柄をあずけて、品川宿はずれ

の場所と時刻を指定しておいたが、そこで落ち合えなければ、久七の店へ連れて行ってくれ、とたのんでおいた。こちらは、お前が見た通り、昨日から尾けまわされたので、品川の宿場女郎を対手に油を売って来た」

昼までそこにいて、出て来たが、尾行は執拗であった。のみならず、尾行者は一人ではなく、さまざまに姿を扮えた者が、つぎつぎとひき継いだので、一瞬の油断も許されず、わざと、方角をかえて、尾けまわさせた挙句、偶然、ここへさしかかったのであった。

時刻は、そろそろ七つ（午後四時）になろうとしていた。

「へへ、有難え。旦那が江戸にいなさらねえと、朝から晩まで、うだらぐだらとすごして、いい加減、うんざりしているんだが、旦那が帰っておいでになると、たちまち、こう、ぴいんと、脳天から足の爪先まで、ひきしまって来やアがる」

金八は、髪結床をとび出して行った。

三

同じ時刻——。

高輪北町から二本榎に至る台地一円には、高野寺、東禅寺、泉岳寺はじめ、無数といってよいほど、たくさんの寺院が、土塀をつらねていたが、その中の庚申堂と太子堂をかかえた来成寺という古刹の方丈に、千華は、虜囚となって、一室へとじこめられていた。

弥之助に連れて来られたのは、昨夜更けてからであった。

未知の土地であったが、千華は、その一室に入れられた時、疑惑をおぼえ、

「眠狂四郎殿が告げられた場所と、ここはちがっています」

と、云った。
すると、弥之助は、笑って、
「江戸の町筋は、夜ぶんの方が、貴女のようなおひとは歩きにくいのでございます。見まわりのお役人がたが、どの辻にもいますのでね。夜盗のてまえが申すのですから、まちがいございません。……明朝、人の往来がせわしくなった頃あい、ご案内申し上げます」
そう説明したものであった。
弥之助が、出て行ってから、千華は、こころみに杉戸を開けようとしたが、ビクともしなかった。とじこめられたのである。
夜が明けたが、弥之助は、入って来ようとせず、いたずらに、時刻が過ぎていた。
弥之助にだまされたことは、もはや、疑う余地はなかった。
千華は、ひたすら、待つよりほかにすべはなかった。
必死の使命をおびた千華は、これぐらいの危難にうろたえたり、あせったりする娘ではなかった。敵わぬと知れば、操までも眠狂四郎に与えて、味方にすることに成功した千華であった。
物心ついた頃から、日本の戦国武士の娘として育てられ、心構えから、作法、そして武芸を身につけて来たのである。
当世の、形式に律せられ虚礼にしばられた旗本や藩士の娘とは、おのずから異なった性情の持主といえる。
ようやく――。
跫音が、近づいた。
杉戸の一枚に、小窓がつくられていて、それがひらかれた。

二つの顔の眼眸が、竝んで、千華にそそがれた。
「南蛮絵そのままの美しさだな」
「左様で――」
こたえたのは、弥之助にまぎれもなかった。
弥之助が案内したのは、武士であった。かなりの年配であることは、半分しかのぞいていない貌(かお)からも、察しられた。
「娘御――、どこから参った？」
「…………」
千華は、まばたきもせず、視かえしているばかりであった。
「何を訊ねても、こたえぬ、という意志をみせて居る。……そなたが、逃げようとしなければ、こちらは、そっとしておく。尤も、逃げ出しても、その容子では、身のかくしようもあるまい。……何かの目的がなければ、わざわざ、海を渡って忍び入っては来ないであろう。その目的を、こちらがつきとめるまでは、そなたは、ここに、当分逗留(とうりゅう)することに相成る」
武士の顔は、消えて、弥之助だけが、視線を千華にあてた。
「お嬢さん、眠狂四郎の旦那には、申しわけなかったが、てまえは、あるじ持ちの男でしてね、不運だったとあきらめてもらいましょう。……貴女は、途方もないおそろしい武器を持っていなさるのでね、しばらくは、はれものにさわるように取り扱うことにいたしますよ。……そこの、踏込み床の右の壁を押すと、厠(かわや)と湯殿があります。喰べたいものは――いままで、どんなものを喰べておいでだったか知らないが――仰言(おっしゃ)って下さりゃ、なんとか、ととのえてさしあげられると存じますよ。……それじゃ――」

小窓からはなれようとする弥之助を、
「待って下され」
千華は、呼びとめた。
「なんでしょうな？」
「うかがっておきます。貴方の主人は、幕府のおさむらいですか？」
「そのことは、貴女が口を割ったあとで、判ることだ」
急に冷たい語気になって、云いすてると、弥之助は、小窓を閉じた。
千華は、じっと宙へ眸子を据えた。
眠狂四郎の俤を、思い泛べた。
――わたしは、あの御仁を信じよう。あの御仁を信じていれば、必ず、ここから脱出できる！

四

「なに？　まだ、到着して居らぬ？」
狂四郎は、鶴床の二階で、むっくり起き上った。
宵闇が来ていて、敷居際に膝をそろえた金八の顔も、おぼろになっていた。
「へい。南蛮娘を拝みたさに、宙をすっとんで行ったところが、久七爺さん、わしも待っているんだが、って――伊豆の石室崎の燈明台の守をしている佐兵衛親分から、ちゃんと、早飛脚で、報せがあったそうなんで……、首をかしげて居りやした。……途中で、なにか、あったのじゃござんせんか？」
「ふむ」

狂四郎は、弥之助という夜盗の態度や言葉を、あらためて、記憶によみがえらせていたが、
「あの男を信じたのが、こっちの不覚であったかも知れぬ」
「そいじゃ……どうなるんで？」
「どうなるか、わたしにも、皆目わからぬ」
「おちついていなさる場合じゃござんすまい」
「あわてても、しかたがあるまい。なるようにしかならぬ」
「なるようにしかならぬって、じれってえな。旦那、出かけやしょう。あっしがお供だ。いよいよ、これから本舞台。幕はあいてまさ」
「………」
しばらく、腕組みしていた狂四郎は、
「金八」
「へい――」
「たとえば、公儀のお目付が、夜働きを手下に使う、というような話を、耳にしたことがあるか？」
「へえ？……どうもね、公儀のおそろしいお役人衆のやることなどは、こちとらにゃ、さっぱり、なにがなんだか……」
と、首を振ったが、
「旦那、南蛮娘の身柄を預けなすった夜働きってえのは、なんという野郎なんで？」
と、訊ねた。
「弥之助、といった。四十年配の、ありきたりの顔つきをした男であった」

「ようがす。あっしが、つきとめてやります。陽が落ちてからうろつき出る蝙蝠野郎どもに、片っぱしから、あたってみて、その野郎の首根っこを、おさえてくれらあ」

「その男が、はたして夜働きかどうか、それも判らぬことだが……、浮世の裏街道を歩いている者独特のカンをそなえていたことはまちがいない」

もし、弥之助が、公儀隠密であったならば、この眠狂四郎の目をごまかせなかったはずである。公儀隠密の手先——と考えるのが、いちばんあたっているように思われるのである。

「待っておくんなさい。ここは一番、この金八の働きどころでさ。すこしも、はよう、おお、そうじゃ！」

金八が立つと、狂四郎も、無想正宗を携げて起った。

「旦那は、どちらへ？」

「ちょっと、のぞいてみたい屋敷がある」

「今夜一晩ぐらいは、じっとしていなさらねえと、またぞろ、尾けまわされて、小うるせえことになりやしませんかね」

「久七の家へ行くには、尾けられるのは迷惑であったが、こんどの行先は、尾けられても一向にかまわぬ」

「へえ——？」

狂四郎は、鶴床を出ると、すぐに金八と別れた。

向ったのは、西であった。

芝の増上寺門前を通り過ぎて、麻布に入り、六本木町へ出る芋洗坂をのぼりはじめた頃、はたして、尾行者が、後方にいることを、直感した。

——江戸中に、おれを尾ける者が、ばらまかれているあんばいだな。
狂四郎は、苦笑した。
明白となったのは、それを指令した公儀お目付が、異常なまでに、執拗な人物である、ということであった。
もうひとつ。
鎌倉の谷（やつ）で襲撃して来た庭番衆は、「沼津千阿弥が老中若年寄を暗殺して江戸城を乗っ取る計画を樹（た）てたと推測される」と云い、この眠狂四郎がその遺志を継いだものとみなす、と斬る理由を口にしたが、その時は、こちらは、ただばかげた妄想（もうそう）を起したことだ、と冷笑したのであった。
——どうやら、これは、ばかげた妄想ではなく、これほどしつっこく、おれの生命を尾け狙うのは、別に何かの理由がある、と受けとってよさそうだ。
その理由をあばくためにも、狂四郎の今夜の行動は、中止できなかった。
行先は、沼津千阿弥がひらいていた青山の陽明塾であった。

空家決闘

一

眠狂四郎が、麻布竜土（りゅうど）町を抜けて、青山大膳亮（だいぜんのすけ）の下屋敷をま二つに切ったかたちで、北へのびている往還へ出た時、時刻は五つ（午後八時）をまわっていた。
青山大膳亮邸ととなりあわせて、教学院があり、そこを中心として、大小の旗本屋敷が、無数

にならび、町家が広く占めた地域は、わずかに、久保町だけとなる。

沼津千阿弥の書塾は、その久保町と旗本屋敷と実相寺という寺院が、踵（きびす）を合わせたような窪地（くぼち）に、在った。

辻に立った狂四郎は、旗本屋敷側に、組合辻番の高張（たかはり）が、あかあかと地面を照らしているのをみとめて、そこへ、足を向けた。

菖蒲革（しょうぶかわ）模様の袴（はかま）の股立（ももだち）を取った番人が二人、式台で、将棋をさしていた。

狂四郎が、土間に入ると、番人たちは、あわてて脇にたてかけた六尺棒を把（と）ったが、対手が素浪人と見ると、

——なんだ？

と、胡散（うさん）くさそうな顔つきになっただけで、べつに腰も上げようとしなかった。

大名が一手持ちの辻番所は、番人もその家来がつとめるが、旗本が数家乃至（ないし）十数家で持った組合辻番は、番人を町家から雇い入れているので、町方の自身番ほど風儀がだらしなくはないにしても、武家の体面を保とうとするきびしい勤務ぶりには程遠かった。

狂四郎は、いくばくかの金子を、式台へ投げると、

「むこうの同朋の家で、昨日——たぶん、夜だろうが、何事かが起ったはずだ。教えてもらおう」

と、云った。

番人たちは、顔を見合せた。

「お主ら、口を封じられているわけではあるまい」

「それァべつに……」

一人が、かぶりを振ってみせ、もう一人は、疑わしげに、

「知ってどうなさろうというので？」

と、見上げた。

「どうもせぬ。知りたいだけだ」

「………」

「留守居の坊主衆が、斬られたろう？」

云いあてた狂四郎を、番人たちは、薄気味わるいものに感じて、また互いに視線を交わし合った。

「幾人、斬られた？」

「三人……斬られました」

「ただの三人か？」

「留守居をしていたのは、それだけだった模様で……」

「まちがいないか？」

「手前どもが、屋敷へ呼ばれて、死骸のとりかたづけを命じられましたから、たしかに――」

狂四郎は、辻番所を出た。

――沼津千阿弥の門下は、鶴岡八幡宮で四人、品野坂で二十人、ここで三人――合わせて、二十七人が斬られた。あとまだ、七十三人生き残っていることになる。……七十三人が、各処で斬られていれば、噂になっているはずだ。渠らは、まだ、刺客の目をのがれて、何処かに身をひそめている。

狂四郎は、沼津家の門前へまっすぐに進んだ。

そこは、辻番所からは、死角にあたっていたが、番人たちが、おもてへ出て、こちらの行動を

見まもっていることは、背中に感じていた。
それに――。
ずうっと尾けて来た者も、辻のどこかの物蔭(ものかげ)から、目を光らせているに相違ない。
狂四郎は、しかし、振りかえろうともせず、凍(い)てついた地面を踏んで、門前に至ると、なんの逡巡(ためらい)もなく、潜戸(くぐりど)から、すっと入って行った。

二

寛永以来の同朋頭(どうぼうがしら)の家ともなると、屋敷もかなりの構えであった。
沼津千阿弥は、その檄文で、「同朋衆なるいやしき家に生れ」と記しているが、実際には、決していやしい勤めではなかった。同朋は、お坊主衆の監督であり、御用部屋にあって、老中、若年寄の命ずる諸用をはたし、将軍家が出行の場合は必ず供奉(ぐぶ)しているし、公文書受け渡しの役目を務める。
当然、政務の裏面をのぞくことになり、同朋頭ともなると、諸役人から一目(いちもく)置かれ、ひそかな賄賂(まいない)もすくなくないのであった。
禄高は、同朋が百俵十人扶持、頭はその倍の二百俵であったが、実際の収入(みいり)は、その数倍になり、新御番組や大御番組の俵取り旗本とは比較にならぬゆたかさであった。
狂四郎は、音もなく母屋(おもや)へ忍び入ってみて、沼津家の裕福ぶりをみとめた。
闇に目の利く男であり、雨戸上の連子(れんじ)から洩れ入る月のあかりだけで、造りを判別できた。部屋の調度の立派なことも、観わけた。
――三千石の大身にも劣らぬ住居だな。

これだけの屋敷を、弊履のようにすてることのできた沼津千阿弥の覚悟のほどが、いまさらのように、胸に重くひびいた。
奥に入ろうとして、廊下を鉤の手にまわったところで、狂四郎は、障子に灯かげをうつした部屋を見出した。
——忍び入ったのは、無駄ではなかったようだな。
狂四郎は、跫音を消した。
別棟になっていて、母屋とつなぐ渡廊下が一段高くなり、そこの鴨居には、
『陽明黌』
という扁額が、かかげてあった。
沼津千阿弥が、百人の門弟に、陽明学を講義した広間が、そこにあった。
千阿弥が端坐したであろう古風な藺編みの莚の前に、ひとつの人影が、うなだれて、坐っていた。
若い武家娘であった。
幾筋か、ほつれ毛をまつわらせた横顔を、窶し事の儚い美しさをたたえたものに視た狂四郎は、そのまま、しばらく、見まもった。
ゆらぐ灯かげを受けて、濃い陰翳をそよがせる頰に、泪がひかっていた。
その泪をぬぐおうともせず、武家娘は、坐りつづけている。膝の前には、懐剣が置いてあった。
やがて——。
娘が、懐剣を把りあげた時、狂四郎は、障子戸を開いた。
はっ、となった娘に、黙って近づいた狂四郎は、その手から懐剣を取りあげた。
「よけいな邪魔だてをなさいます！」

娘は、さからいはしなかったが、覚悟をきめた者の物静かな態度で、狂四郎をとがめた。
「この家に、かかわりのある者は、男も女も、いささか死に急ぎしすぎるようだ」
「見知らぬ貴方が、邪魔だてなさる筋合ではありませぬ」
「…………」
「おひきとり下さいませ」
「そなた——」
狂四郎は、冷やかに見下ろして、云った。
「懐妊しているのではないのか?」
「…………」
娘の表情が、変った。
「やはりそうか。……ただ、そんな気がして、自害をさまたげてみた。腹で息づいている子供まで、まき添えにすることはあるまい」
「貴方は、どなたです?」
「そなたが慕うている同朋が、鶴岡八幡宮の神楽殿で、割腹するのを、見とどけた者だと思ってもらおう」
「どうして、ここへ?」
「沼津千阿弥のあとを追う不心得者がいるのではあるまいか、と予感して——と申したら、嘘になる。……昨夜、ここへ刺客が押し入って来たかどうか、それを、たしかめに来たが、はたして留守居の坊主衆が三人、斬られている。門弟百人を、一人残らず、片づける肚(はら)をきめたお目付がいることは、もはや疑う余地はなくなった。……これは、閣老たちが、評定によって、命令を下

したのではなく、お目付のうちの誰かが、隠密裡に為そうとしている殺戮だ。その残忍さに、臭気がある。くさいと嗅いだこちらのカンは、十中八九はずれては居るまい。……沼津千阿弥と門弟たちは、公儀に対して謀叛を起したわけではない。側近の奸をのぞく、といった企てを持った気配もなかった。ただ、檄をかかげて、黄泉の道をえらんだにすぎぬ。にも拘らず、そのお目付は、鏖しのほぞをかためた。これには、蔭に何かある。何かが、かくされている。その考えが、わたしをそそのかせて、夜道を歩かせて来た。……ことわっておくが、わたしはまだ、生き残った者たちに味方する肚をきめているわけではない。野次馬根性が半分、といってもよい。……どうやら、ここへやって来た甲斐はあったようだ。門弟たちよりも、もっと沼津千阿弥に近い者に、出会うたのだ。そなたの口から、思いあたることをきかせてもらえるのではあるまいか」

そこまで語ってから、狂四郎は、急に、神経を、外へ配った。

「どうやら、客が入って来たらしい」

「え——？」

「動かずにいてもらおう。そなたを送って行く役目を引き受けた」

そう云いのこしておいて、すっと、廊下へ出た。

母屋とつなぐ渡廊下まで歩いて、狂四郎は、中庭に佇立する黒い影を、みとめた。

目ばかりに覆面した男は、すでに、こちらが出て来るのを待ち受けている気色であった。

「刺客は、お主一人か？」

狂四郎が、訊ねると、対手は、

「左様、一人だ」

と、こたえた。

「おかしなことだ。お主に命じた人物が、この眠狂四郎の業も業も知らぬはずはない。すくなくとも、五人以上は、寄越してもよかったろう」
「拙者の知ったことか。討手を命じられたから、参ったまでだ」
「どうかな？」
「眠狂四郎！　はじめて、雌雄を決するぞ！」
対手は、云いはなちざま、抜刀して、青眼に構えた。
狂四郎は、
——どこかで、きいた声だな。
と、思った。
しかし、即座に思い出すのは、むりなようであった。

三

渡廊下には、欄干がつけられていた。
対手は、こちらがこれを越えて、中庭へ跳び降りるのを、待ちかまえている。
尋常一様の使い手ではないことは、その青眼の構えに示されていた。
——まず、おれの脚を一本薙ぐ、という肚づもりでいるらしい。
数秒を置いて、狂四郎は、痩軀を跳躍させた。
両手を空けたままであった。
欄干をただ跳び越えることはせず、それにいったんとまって、ひと蹴りの反動をつけて、宙へ高く翔けたのであった。その高い空間から、無想正宗をふるうことは徒労である代りに、敵の白

った。
狂四郎の速影と、刺客のそれが、二間余の距離を置いて、ぴたっと停止するのに、遅速はなかった。
刺客の方は、地上を掠めて、渡廊下の下へ奔り入った。
と——同時に。
刃もとどかぬ計算であった。
但し——。
対峙した両者の占めた地歩には、目に見えぬ差があった。
狂四郎の立ったあたり一面には、夜目には見分けがたい鋭い菱形の鉄鋲が、無数に、撒かれていたのである。その一個は、すでに、狂四郎の左の素足の爪先に食い込んでいた。
対手は、それだけの周到な備えをして、狂四郎を待ち受けていたのである。
「拙者の勝ちだぞ、眠狂四郎！」
対手は、渡廊下の下から、あびせた。
「さあ、どうであろうか」
進退谷まり乍ら、狂四郎は、平然として応じた。
「身動きできぬお主が、どうして、拙者に勝てる？」
「やってみなければ、わかるまい」
狂四郎の答えがおわらぬうちに、対手は、矢つぎ早に、手裏剣を放って来た。
狂四郎は、五本の手裏剣を、ことごとく、地面へ、搏ち落した。
「噂にたがわぬ強さだな、眠狂四郎は——」
対手は、渡廊下の下にかくしておいた長槍を携げて、姿をあらわした。

ゆっくりと迫って来ると、ひとしごきして、穂先を、ぴたっと胸へ狙いつけた。
「参るぞ！」
「…………」
狂四郎は、すべもなく、攻撃を待つばかりであった。
じりじりと肉薄して来て、間合を見切った刹那、
「やあっ！」
凄まじい懸声をほとばしらせた。
しかし——。
電光の突きで襲うことをせず、いきなり、びゅんと脚を薙いで来た。
もし、狂四郎の方に、この意外の攻撃を予測できていなかったならば、両脚とはいわぬまでも、片脚は刎ねられていたに相違ない。
身動きできぬこちらに対して、突くと思わせて、脚を薙いで来るのではあるまいか、という予測が、狂四郎をして、それに応ずる反射神経の働きを用意せしめていた。
穂先は、柄を一尺ばかりつけて、空中へ刎ね飛ばされて行った。
「こんどは、どんな得物を使うのだ？」
足の自由を奪われた狂四郎の方が、あざけるような言葉を投げた。
すると、対手は、思いのほか、いさぎよく、
「当方の攻撃方法は、これで終った。お主は、たしかに、強い。しかと、見とどけたぞ」
と、みとめておいて、
「では、後日、あらためて——」

と、闇の中へ溶けようとした。

「待て！」

狂四郎は、呼びとめた。

「お主は、どうやら、お目付に命じられた刺客ではなさそうだ。別の立場から、この眠狂四郎を仕止めようとした一匹狼（おおかみ）ではないのか？」

「なんと想像しようとも、そちらの勝手だ」

「そうだ、ときめるぜ、死神九郎太」

狂四郎は、対手の通称を、ずばりと云いあててみせた。

云いあてられた対手は、なにか云いかえそうとしたが、闇を截（き）る狂四郎の眼光の鋭さを、なにやら、わずらわしそうに、首を振って、無言裡に睨（にら）みかえしておいて、身をひるがえした。

四

狂四郎が、広間に戻って来ると、武家娘は、畳に両手をつかえて、

「わたくし、佐喜（さき）と申します。微禄の御家人のむすめでありまする」

と、名のった。

廊下の端から、中庭での決闘を見まもっていたに相違ない。その興奮を、おもてに滲（にじ）ませていた。

狂四郎が、二三歩進むと、佐喜は、

「あ——血が！」

と、畳に点々とついた足指の跡を、指さした。

「すぐに、手当をしてさしあげます」
勝手を知った者の身軽さで、佐喜は立とうとした。
「手当をするほどの傷ではない。それよりも、きかせてもらおう」
「…………」
「沼津千阿弥には、檄をかかげて切腹する覚悟をさだめる以前に、何か企てるところがあったか、どうかだ」
「わたくしは、妻ではありませぬし、月に一度か二度、ほんの短いあいだ、逢うだけでありましたゆえ……、それに、たとえ妻であっても、女子などに大事を打ち明けるような御仁ではありませんでした」
「一切なにも、そなたには、語らなかったというのか？」
「はい」
「どんなことでもよい。千阿弥が、ふともらした言葉があれば、思い出してもらおう」
「…………」
狂四郎は、腕を組んで、待った。
夜は、更けていた。静寂があまりに深いゆえか、どこからともなく、キーンというひびきが夜気をふるわせて来るようであった。
膝で合わせた白い細い手の美しさを、狂四郎は、なんとなく、あわれなものに視ていた。
時刻が、移った。
「そう申せば……」
ようやく、佐喜が、口をひらいた。

「去年の秋の頃でありましたか……、あのひとが、こんなことを、ひとり言のように、申されました。……百万両以上の大金が、日本のどこかの土の中に、かくされている。それだけの軍資金があれば、天下をくつがえすことも可能だが――と」

「…………」

「わたくしは、夢のようなお話だとき流して、べつに、そのような大金がどうしてかくされたのか、うかがいもいたしませんでした。……そのほかには、あのひとが、どのような企てを胸にひそませておいでだったのか、思いあたることは、ありませぬ」

「…………」

狂四郎は、佐喜の話をきき乍ら、たったいま決闘をした男が、しゃべった言葉を思い出していた。

戸塚の間道で巡り逢った時、死神九郎太は、問わず語りに、こちらにきかせたものであった。

「……夢のような金儲(かねもう)け話がござってな。その金高たるや、百両や二百両ではござらぬ。……もしかすると、数千両――いや、一万両も、このふところへ……」

その時は、でたらめな法螺(ほら)話と、ききすてたことであった。

もしかすると、死神九郎太の云ったことは、沼津千阿弥が佐喜にもらしたことと、なにかの関連があるのではあるまいか？

「そなたを、家まで送って行こう」

「わたくしは、もう、家へは戻れませぬ」

佐喜は、云った。

不義の子を――しかも、沼津千阿弥の子を――腹に宿した身では、男を喪(うしな)ったいま、あとを追

って死ぬよりほかはない、と覚悟をきめて、家を出て来たものであろう。
――また一人、若い女子を、引き受けることになるのか。
狂四郎は、苦笑して、俯向いた佐喜を見下ろしたが、
「乗りかかった船だ。乗るのを止めることもできまい」
「え――？」
「跟いて来るがよい。当座のねぐらは、こちらでさがす」

一節切

一

遠くから、明け六つ（午前六時）を告げる梵鐘の音が、ひびいて来た。
眠狂四郎は、その音が鳴りおわった時、佐喜という貧乏御家人の娘をうながして、沼津家の玄関を出た。
夜明けを待ったのは、闇の中から刺客に襲撃された場合、佐喜が足手まといになるからであった。
江戸の朝は早く、明け六つには、すでに、武家屋敷も町家も、家の前の往還を、きれいに掃き、水を打っていたし、人の通行も繁くなっていたのである。
門へ向って歩き出すと、門前から、尺八の音が、きこえた。
沼津千阿弥の悲愴な自決をつたえきいて、その霊に一節を手向ける者が現われたとしても、べ

もほつれた虚無僧を見出した。

しかし、狂四郎は、一瞥しただけで、合点すると、わきを通り抜け乍ら、

「お坊主、麻布新堀端の、三之橋ぎわにある肥後殿茶屋で、待って居る」

虚無僧にだけきこえる小声で、云いのこした。

狂四郎が、そのぼろんじを、千阿弥門下のお坊主衆の一人、と看破ったのは、吹いているのが、普化尺八ではなく、一節切であるのをみとめたからである。

尺八は、その名称のごとく、長さは一尺八寸であった。まれには、二尺三寸とか、一尺五寸とか、標準はずれのものも、箏曲との合奏に使われているが、虚無僧は、一尺八寸の普化尺八しか持たないのが、常識であった。

一節切は、長さ一尺一寸一分——竹の節一個の尺八である。これは、古代尺八が滅びたのち、室町時代中期（九代将軍足利義尚の頃）中国福州の禅僧蘆安によって伝えられ、桃山時代の大森宗勲によってひろめられ、元禄のはじめ、すたれて、普化尺八にとって代られた。

一節切を吹く虚無僧は、この時代には、皆無であった。

狂四郎は、夜明けを待つあいだ、沼津家の各室をしらべて歩き、千阿弥の居間の遺品のひとつに、一節切があったのを、記憶にとどめていた。

虚無僧は、返辞をするかわりに、一節切を、喨々と吹きつづけた。

狂四郎が、佐喜を連れて、麻布へ向ったのと同じ頃合、金八もまた、芝口から源助町、露月町、

柴井町、宇田川町と、とっとと駆け抜けていた。
横丁から、道具箱をかついで出て来た顔見知りの大工が、
「おっ、どうしたい、金――着切。朝っぱらから、岡っ引に追われているんじゃねえだろうな」
「へへへ……。朝になろうが、陽が昇ろうが、恋の闇路に迷うたこの身、と来らあ」
「岡場所なら、方角がちがうぜ」
「春だあ。花が咲いているのは、吉原や辰巳ばかりじゃねえや」
「どこに、高嶺の花が、咲いているってんだ？」
「きまってらあな。滅多に行けねえ危ねえところよ」
金八は、やぞうをきめて、
　恋のかけ橋ゃ
　丸木橋
　渡らにゃ逢えず
　渡るには
　危なさ、怕さ、谷の底
　上へ廻れば三里半
　下へ廻れば七里と八丁
　踏むもあぶなき
　丸木橋
　渡ってみしょうぞ
いい声を、晴れわたった早春の空へひびかせ乍ら、増上寺の表門の前を駆け抜けた。

恋の橋

二

麻布に流れる古川に架けられた三つの橋は、北から一之橋、二之橋、三之橋とかぞえる。三之橋は、俗に肥後殿橋と称ばれていた。東側に、松平肥後守の下屋敷があったからである。

その橋袂にある茶屋もまた、肥後殿茶屋と称ばれて、茶汲み女が腰元風の扮装をしているのが評判になっていた。

「おう、ごめんよ」

暖簾をくぐって入って来た金八を、茶汲み女の一人が、

「あら、金八つぁん、いらせられませ」

「いらせられませ、と来るんなら、あら金八つぁん、はねえだろう。これはこれはお殿様、お忍びにて、ようこそ——とかなんとか、ぬかしやがれ」

女は、噴飯して、

「お殿様だなんて、巾着切を……」

「どっこい。もしかしたら、十万石のお大名のご落胤かも知れねえんだぞ」

「同じらくいんでも、お前さんは、焼きじるしの方で、烙印を押されているひとじゃないのかえ？」

「嘘だと思って、おいらと寝てみな。……一夜明ければ、また気もかわる、花の盛りは梅屋敷、初音ひと声、ほうほけ今日のご身分は、十万石のご正室、うれしい仲ではないかいな」

金八は、女により添うと、耳朶をちょいとひっぱって、二階を指さした。

「おいらが、ご落胤であることを証明して呉(く)れる旦那が、ひと足さきに、ご到着あそばされているはずなんだが——」
「あと半刻(はんとき)ばかり待つんだねえ」
「どういうんでえ？」
「梅にも春の色添えて……遠音神楽(かぐら)の数取りに、待つ辻占(つじうら)やねずみなき、逢(お)うてうれしき酒機嫌(ささきげん)、ちょうどいま頃、しっぽり濡れてる最中さね」
「なに？　旦那が、女をくわえ込んだと——」
金八は、わざと階段を跫音(あしおと)高く、駆けのぼった。
「濡れたか濡れぬか、春雨に、濡れて色よし今朝の藤、その仇咲(あだざ)きも君ゆえと、姿つくろう水かがみ、ゆかりの色もなかなかに、うれしい縁じゃないかいな。へい、ごめんなすって——」
いきなり唐紙をひき開けた金八は、狂四郎とさし向っている貧しい装(なり)の武家娘を、視た。
「こいつは、あきれたねえ。南蛮渡来だなんて、人をかつぐのもいい加減にして頂きてえや。これァただの御家人の……」
「昨夜はじめて出会った別の娘だ」
「旦那は、ちょいちょい、女をひろいすぎらあ」
「お前の方は、どうした？」
「夜っぴて、足を棒にして、駆けずりまわって、とにもかくにも、弥之助って野郎の正体をつきとめるには、つきとめたんだが、そん畜生、三年ばかり前から、江戸から姿を消しちまった、ということでさ」
捨てかまりの弥之助、といえば、夜盗仲間では、知らぬ者のない、風のように素早い働きをす

る忍びの名人であった。狙ったのは、もっぱら、大きな商家であった。武家屋敷よりも商家の方が、かえって、警戒厳重で、土蔵など絶対に破れぬように、二重三重に仕掛けと工夫がほどこしてあるのだが、弥之助は、ひとたび狙ったならば、決して失敗しなかった、という。

捕えられたことはおろか、忍び込んで発見されたことさえもない、人間ばなれした働きぶりを、仲間どもでさえ、おそれるようになっていたそうである。

それが、三年前に、ぷっつり、夜働きを止め、それきり、消息を断ってしまい、いまだ杳（よう）として行方が知れないのであった。

「捨てかまり、か」

狂四郎は、首をかしげた。

——そのむかし、関ヶ原で、薩摩（さつま）勢が、東軍に加えた兵術に、捨てかまり、というのがあった、ときいたが……。

かまりというのは、忍者（すっぱ）用語で「かがむ」という意味である。やがて、それが、かがんで潜んでいる伏兵という意味に転じた。すなわち、捨てかまりというのは、要所要所に、捨て石のように配置された、近代戦で謂（い）う狙撃（そげき）兵のことであった。

関ヶ原役に於（お）いては、敗走する薩摩勢を、追撃した井伊直政は、捨てかまりの狙撃兵に撃たれて、落馬した。直政は、その鉄砲傷が原因で、翌年二月に、四十二歳の壮年で歿（ぼっ）している。

家康が、忍法を最新の兵術として活用し、甲賀・伊賀の忍者を採用して、江戸城守備に就かせて以来、各大名もこぞって、忍者を手飼いにした。

薩摩にあっては、忍者の術を、山くぐりと称した。薩摩忍者独特の凄（すさ）まじい修業によって成されたその術は、ただの一度も公開されぬまま、神秘な恐怖すべきものとして、伝えられている。

「弥之助は、薩摩の男ということになるのか」
狂四郎は、腕を組んで、呟(つぶや)いた。
その時、階下から、
「お客様ですよ」
という呼び声が、きこえて来た。
「おいよっ」
金八は、おどり場へ出てみて、
「うすぎたねえぼろんじですぜ」
「上げろ」
狂四郎が、部屋から、云った。
虚無僧は、狂四郎の前に坐ってから、深編笠(てんがい)をぬいだ。
金八が、目をみはって、
「へえ。普化ってえのは、頭に髪毛が生えているから、ひっかくと、ばらばらっと落ちるもんだ、と思っていたら、つるつる坊主の普化僧がいるとは、こいつは、お釈迦(しゃか)様でも、いやさ、ご存じあるめえ」
と、云った。
狂四郎の直感通り、虚無僧は、江戸城お坊主衆の一人であった。
まだ二十歳ばかりの、眉目の整った色白の美男であった。

三

「宗因と申します」
両手を畳につかえて、正しく挨拶する若者に、狂四郎は、
「この娘を、お主、知っているか？」
と、訊ねた。
若者は、佐喜へ視線をやったが、
「いえ、存じませぬ」
と、かぶりを振った。
「沼津千阿弥の隠し妻だ。千阿弥の子を、みごもっている」
「…………」
若者は、愕然となって、あらためて、佐喜を見つめた。佐喜は、おもてを伏せた。
「ところで、お主は、わたしを眠狂四郎と知っていて、ここへ来たのだな？」
「はい！」
若者は、うなずいてから、
「沼津先生は、ご切腹直前に、われわれに対して、遺言状をしたためられ、門弟の一人に持たせて鎌倉から江戸へ戻されました。その中に、お手前様を、味方としてたのめ、と記してありました」
沼津千阿弥は、鶴岡八幡宮の赤橋上で、狂四郎と問答したのち、急に、考えるところあって、その遺言状を、つくったものであろう。

「その遺言状の内容をきこうか」
狂四郎は、さりげなく、もとめた。
しかし、宗因は、頑な面持で、
「いえ、お手前様が、味方をして下さることが、明白とならぬ限り、うかとは打ち明けることはできませぬ」
と、こたえた。
「尤もなことだが、何も知らさずに、ただ味方にしろ、とたのむのは、これは、いささか虫のよすぎる話ではないか」
「お手前様は、ご自身好むと好まぬとに拘らず、すでに、ご公儀を敵にまわしておいでになります。いえ、ご公儀と申さずとも、われら坊主どもをのこらず暗殺しようと企てている刺客団を、共通の敵になされておいでです」
「…………」
「お願い申します。沼津先生のご遺志を継ぐわれら七十三人の同志に、何卒ご助勢を、お願い申し上げます」
宗因は、両手をつかえて、平伏した。
「老中若年寄を斬って、江戸城を乗っ取る——といった計画なら、こっちの性分に合わぬから、ご免を蒙ろう」
「決して、そのような大それた謀叛の企てなど、蔵しては居りませぬ。ただ……」
「ただ——？」
宗因は、顔をあげて、狂四郎を視かえした。双眸が、きらきらと光った。濁りのない、澄みき

った美しさであった。

「……われわれは、十年後、二十年後の日本のために、生き抜かねばなりませぬ」

「十年後、二十年後に、日本が、どう変る、というのだ？」

「われわれの手で、変えるのでありまする」

「…………」

「御大城（江戸城）を乗っ取るがごとき、無謀の手段をとらずとも、必ず、祖国を新しい国に変えるてだてが、われわれにはあるのでございます」

「沼津千阿弥が、教えたのか？」

「はい」

「そのような目的のために、お主らと一緒になって踊るには、およそふさわしくない男だ、わたしは――」

狂四郎の言葉に、若いお坊主は、あきらかに、軽侮の色を、顔に刷いた。

「但し、お主らが、これ以上、刺客に殺られるのは、黙視できぬ、という気持はある。お主らの目下のかくれ場所を教えておいてもらえば、こちらも、防ぎの思案が、うかぶかも知れぬ」

宗因は、すぐには、教えなかった。

ややあって、

「われわれは、陸ではなく、水の上に、身をひそめる場所をえらんで居ります」

それだけ、告げた。

宗因が立ち去ると、金八が、ふうっと、ひとつ、溜息をついて、

「水の上か。うめえかくれ場所をえらんだものだぜ。……何にも遠慮は船頭ばかりあとはお前と

わたし船、と来た。これから、どうしやす、先生？」
「お前にしてもらいたいのは、この娘のかくれ場所をさがしてくれることだ」
「合点――。やっぱり、水の上がようがすかねえ」
「この娘も、いずれ、刺客に狙われよう。安全な場所をたのむ」
「なアに――他人まかせの船さえ岸に渡る世間に鬼はなし、と云いまさ。まかしといておくんねえ」
金八は、胸をぽんと叩いてみせた。

四

同じ日の朝――。
お目付下条主膳は、出仕時刻よりも半刻ばかり早く、辰下刻（午前九時）に、大手門を入っていた。
眦が切れ、鼻梁の高い、いかにも切れ者らしい美丈夫であった。
諸門衛士の下座を受けて、傍目もふらずにまっすぐに表玄関に進む姿は、颯爽としていた。
式台を上ると、当番の徒目付、組頭ならびに加番が、左右に列座して、主膳を迎えた。
ここで、お目付は、昨夜からの城内保安の状況を聴聞するしきたりであったが、主膳は、ただ一言、
「よい」
と云いのこして、奥に入った。
虎ノ間徒士番所前を過ぎ、紅葉間の前で、主膳は、咳払いした。

自分が登城したことを知らせる合図であった。
目付部屋に入った主膳は、前の当番と交替した。
若年寄小笠原相模守から呼ばれたのは、その直後であった。
小笠原相模守長貴は、目も鼻も、顔の輪郭もまん丸な、見るからにのびやかな風采の若年寄であった。
「主膳、わしは、其許に、沼津千阿弥の門弟どもを、一人残らず討て、などとは命じなかったぞ」
相模守は、おだやかな表情と音声で、云った。
「お坊主どもの処断は、身共におまかせ下さいますよう――」
主膳は、冷たくかわいた語気で、応えた。
お目付は、若年寄の耳目となって、監察する職業である。当然、若年寄の命令なくしては、動けぬ、と考えるのは、まちがいであった。お目付自身、将軍家に対して、直に言上する権を与えられていたので、時と場合によっては、上司の若年寄の意見を無視して、行動を起すこともできたのである。
お目付は、老中の耳目である大目付に対してさえも、何かの悪事、失態があれば、これをも容赦なくあばく監察の力を与えられていた。大目付は、故老の隠居級がつとめる閑職であったが、お目付は、同役を蹴落し乍ら、凄まじい目を光らせて監察する激務の実行者であった。
職業柄、近親以外とは一切交際をせぬ公私ともにきびしい日常を送っているだけに、その権力の行使ぶりは苛烈であり、直接の上司である若年寄も、お目付に対して一目を置いたのである。
「根絶やしにせねばならぬ明白な理由があるかな？」
「あります。……沼津千阿弥には、ご公儀顚覆の謀叛の企計があった儀、疑いを入れませぬ」

「証拠は——？」

「証拠は、お坊主どもに、遺志として残されて居ります。彼奴らが姿をかくして居ることが、これをあきらかに示して居ります。……刺客を放って、次つぎに討ち取るうちに、恐怖に堪えられず、生命乞いをするお坊主も現われると存じます。その手から、証拠の品をさし出させます」

「其許の苛酷な処断ぶりは、閣老がたの耳に入って居る。逮捕いたすのはよいとしても、暗殺して根絶やしにするのはどうであろうか、という意見がある」

それをきくと、主膳は冷笑した。

「それは浜松侯（水野忠邦）のご意見でありましょう……お坊主どもの処断など、閣議を仰ぐまでもない小事。身共におまかせ下さいますよう——」

「其許が、どうでもやる、と申すのであれば、やむを得ぬ仕儀じゃが……、あの若い同朋に、謀叛の企計があったとは、どうも考えられぬのう」

「いずれ、証拠の品を、お目にかけます」

主膳が、さっさと退出して行ったあと、若年寄は、急に別人になったように、眼光を鋭いものにして宙に放ち、何事かを、思いめぐらしはじめた。

人身御供

一

江戸に、初午が来ていた。

当時、江戸の街には、大名旗本の屋敷をはじめ、大町人の庭さきにも、どんな貧しい裏長屋の入口、露路にも、必ず、稲荷社があった。

初午が来ると、それらの稲荷社は、染幟一対を左右に立て、前日から、太鼓の音をひびかせ、江戸中がその音に満ちた。

むしろ、裏長屋の方が、初午祭に夢中になり、木戸の屋根に、武者を描いた大行燈をかかげ、棟割の戸毎に、地口絵、田楽燈籠をつるし、児童たちは、夜明けから太鼓を打ち鳴らして、うかれさわいだ。

尤も、見物人の蝟集するのは、やはり名高い稲荷社で、王子稲荷、妻恋稲荷、烏森稲荷など、江府屈指のそれは、芋を洗うような雑沓を呈した。

芝日陰町の日比谷稲荷は、燈籠に工夫があって、いまでは、同じ芝の烏森稲荷の盛況を追い越していた。

酒樽や水瓶のような、巨きな重い物を応用して、燈籠にしたて、これに華やかな武者絵を描いて、紙一枚で吊り下げ、そのしかけを看破らせなかったのである。

あいにく、この年の初午は、朝から、しとしとと、小雨が降っていたが、それでも、日陰町通りは、平常の数倍の人の往来があった。

眠狂四郎が、番傘をさして、この通りにさしかかったのは、午すぎで、恰度人の出盛りであった。

日陰町通りは、西側は大名や旗本の屋敷がつづき、町家は東側だけで、その名称のごとく、芝口の広い往還の蔭になったあんばいで、平常は、人影もまばらな静かな道筋であった。

今日ばかりは、武家屋敷の塀ぎわにも、露店が竝び、呼び売りの声が、かまびすしく、目路のとどく限り、傘の波であった。

狂四郎は、愛宕下(あたごした)の大名小路から、この通りへ抜けて来たのであった。雑沓ぶりを眺めて、そのまま、露月町の方へ、それようとした。

その時――。

手拭いを吹流しにかぶった若い女が、褄(つま)をとって、ひらりと、身軽く、狂四郎の傘の下に、入って来た。

からげた裾の下に、緋縮緬(ひぢりめん)がなまめいて、黒塗りの駒下駄をつっかけた素足を、鮮やかな白いものに浮き立たせていた。

「……？」

狂四郎の冷たい視線を受けとめて、女は、手拭いの蔭の細面を、にこりとしてみせた。

切長の双眸が、澄んでいたし、鼻梁も唇もかたちがよく、すっきりと際立った粋(いき)な着こなしとともに、男の好き心をさそう色香を湛(たた)えていた。

「お願いがございます、眠狂四郎の旦那」

「……」

「どちらまでいらっしゃるのか存じませんが、そこまで、お供をさせて下さいまし」

「どういうのだ？」

「あたしは、掏摸(すり)でござんす。お妻と申します」

「……」

「貴方(あなた)様が、お行きになる先まで、お供して、そのあいだに、ふところの財布を、すらせて頂きとう存じます」

「予告しておいて、盗(と)るのが、お前のやりかたか？」

「いいえ、こんなこと、あたしも、はじめてでござんす」
「なんのこんたんだ？」
「貴方様を、眠狂四郎の旦那とお見受けして、賭をしてみたくなりました」
「首尾よく、すり取ったら、どうするというのだ？」
「旦那も、大した御仁じゃない、とさげすませて頂きます。財布はお返しいたします」
「仕損じた時は――？」
「あたしのからだを、さしあげます」
「何者かに命じられたことか？」
「いいえ、あたしひとりの思案でござんす」
狂四郎は、女を傘に入れておいて、露月町へ出ると、芝口へ向って、足を進めた。
「どちらまで、お行きなさいます？」
「まだ、きめては居らぬ」
「なるべく、遠くまで、お供をさせて下さいまし」
お妻は、媚を含んだ流眄を、狂四郎へ送って、吸いつくように寄り添うた。
首尾よく盗ったら、財布を返す。仕損じたなら、からだを与える。挑戦の条件としては、ばかげていた。裏に何か、こんたんをかくしているに相違ない、と思われる。しかし、狂四郎は、べつに、訊ねようとしなかった。

二

汐留橋を渡って、北へ――木挽町七丁目からまっすぐに、六丁目、五丁目、四丁目、三丁目と

通り抜けて行き、やがて一丁目から左折して、紀伊国橋を渡りかかった。
と――、
「あ!」
お妻が、小さな悲鳴をあげて、よろめいた。
駒下駄の鼻緒が、切れたのである。
「どじだねえ。みっともないやら、縁起でもない。……旦那、ちょっと、お待ち下さいますか」
お妻は、蹲んで、手拭いの端を裂くと、器用に、鼻緒を箝げた。
お妻が、立ち上った時、狂四郎は、傘をたたんだ。雨は、あがっていたのである。
銀座を過ぎて、弓町に入ると、狂四郎は、とある横丁にあるうす穢ない川魚屋を、えらんだ。
食通には、その名を知られている店であったが、その代り、蒲焼を一刻以上も待たせられる。
狂四郎は、親爺とはむかしからの懇意であった。
「二階を借りる」
その一言で、親爺は、合点して、別の客をことわってくれるのであった。
狂四郎は、床柱に凭りかかると、手拭いをとりはらったお妻の顔を、正視した。
「見事に、すり取ったな」
「あい」
お妻は、笑顔をかえした。
「わざと、鼻緒が切れるようにしておいて、よろけた――そのとたん、おれに隙が生じた、というわけか」
「流石の旦那も、油断がござんしたね」

「返してもらおうか」
「お返しします」
お妻は、古風な本国織（ほんごくおり）に紺博多（こんはかた）の帯のうしろへ、片手をまわした。
すり取った財布を、文庫崩しの結びの中へ、かくしておいたのである。
「あら！」
結びへ手をさし入れてみて、お妻は、眉宇（びう）をひそめた。財布がなかった。
狂四郎は、冷やかに笑うと、
「財布は、おれのふところへ、戻って居る」
そう云って、それを、とり出してみせた。
お妻は、目をみはって、
「旦那が、とりもどしなすった？」
「うむ。お前が鼻緒をすげて、立ち上った際に――」
勝手に、すり取らせておいて、また、奪（と）りかえしたのであった。
「負けました」
お妻は、すこしも、くやしそうな表情をみせず、頭を下げた。
「旦那は内心、おれに挑戦するなんぞおこがましい、とあざわらっておいでだったんですね。……あたしは、はずかしくなっちまった。おゆるし下さいまし」
「お妻――と申したな」
「はい」
「お前は、はじめから、仕損じるのが、わかっていたのではないのか？」

「……………」

「お前は、おれに、からだを呉れるために、小細工をした。そうではないのか？」

「……………」

お妻の白いおもてが、さらに、血の気を引いた。

「おれに、操を呉れようとする。その理由を、きこうか」

「旦那。理由は、あとで申し上げます。……どこへなりと、おつれ下さいまし」

「この鰻屋の二階でよかろう」

「……………」

お妻は、じっと狂四郎を瞶めかえしていたが、黙って、その場に、仰臥すると、袂で顔を掩った。

路考茶の糸で細く小さく碁盤格子を織り出したお召縮緬を、莫連らしく、婀娜っぽく着崩した寝姿を、黙然と見まもり乍ら、

──この細い腰や胸には、稚さがのこっている。

狂四郎は、そう看てとった。

しかし、稚さは、狂四郎に冷酷な行為を手控えさせる力はなかった。

猿臂がのびて、上着の裾を、ひらいた。

緋縮緬の長襦袢は、ゆっくりと、脛から膝へ押しあげられた。

あらわになった滑らかな嫩らかい脚線は、やはり、はっきりと稚さを現わしていたし、男を拒否するはじらいも示していた。

膝と膝を、ひしと合わせ、そこまでの短い白い湯具をはさみ込んで、奥をのぞかせまいとしている様子を、狂四郎は、ふっと、いじらしいものに感じた。

――女が理由を打ち明けるのをあとまわしにする上は、正念が情念に克つ必要はあるまい。
狂四郎は、容赦なく、湯具に、指をかけると、裂くように剝いだ。
「……あっ！」
袂の蔭で、お妻が、小さな悲鳴をあげた。
そこへそそがれた狂四郎の眼眸が、光った。
蟬の翼のように薄い翠の茂みのまわりに、無数の赤い小蟹が、匐っていたのである。
小蟹どもは、かくれ場所を、あばかれて、一斉に動いて、茂みの中へ匍い込もうとするか、とみえた。
そんな錯覚を起させるほど、見事な彫りものであった。
内腿の嫋々とした繊細な線は、一握りに足らぬほどの清楚を湛えていて、
――これは、まるで未通女だが……？
と、狂四郎に不審をおぼえさせつつも、彫りものはまさしく莫連以外の何ものでもないのであった。

三

狂四郎は、しばらく、そこへ視線を置いていたが、つと、一指をさしのばして、茂みの蔭にある、春の筍が萌すにも似た秘部へ、ふれてみた。
瞬間――。
「いやっ！」
お妻は、電流でも通されたように腰をねじって、緋と白の布で、前をかくした。

「やはり、そうだったのか。これで、お前が、まだ男を知らぬ季女(むすめ)であることが、はっきりした」
狂四郎が、云った。
「…………」
お妻は、喘(あえ)いだ。
「未通女の身が、このような、みだらな刺青(いれずみ)をしているのは、どうしたことだ？」
「旦那っ！」
お妻は、はね起きざまに、狂四郎に、しがみついた。
「お願いでございます！　あたしを、女にして下さいまし！　後生一生のお願い！」
「こちらは、その理由を、問うている」
「理由は、あとで……。あたしは、貴方様のような、強い御仁(おひと)によって、女にして頂きとうござんす」
「据膳(すえぜん)を食わぬとは云わぬ。しかし、お前が未通女ならば、ここは、抱くにふさわしくない。場所を変えねばなるまい」
狂四郎は、立ち上った。
お妻は、仰ぎ視て、
「あたしに、いや気がさしたのでござんすね、旦那――？」
「…………」
「だって、こんなあさましい彫りものをしているんですもの」
狂四郎は、さきに、階段を降りた。
それから、半刻ばかり後、狂四郎とお妻は、なまめいた雰囲気(ふんいき)の部屋にいた。

銚子（ちょうし）を二本ばかり空にしておいて、狂四郎は、奥の間に入り、そこに延べられた花模様の夜具の中に、身を横たえた。
緋縮緬の長襦袢姿になったお妻が、そっと、わきに添い臥（ふ）してから、しばらく、狂四郎は、動かずにいた。
お妻のせわしい鼓動が、つたわって来た。
「ひとつだけ、さきに訊（き）いておこう」
「はい」
「はじめての男として、おれを、どうしてえらんだ？」
「二年ばかり前、旦那は、谷中（やなか）の感応寺の境内で、意趣討ちにお遭（あ）いなされたことがありましょう」
「そんなことがあったかも知れぬ」
「あたしは、恰度その宵、亡くなった母親の墓詣（はかもう）でをして、その果し合いを、物蔭から、うかがって居りました。……貴方様は、三人の男に刀をつきつけられ乍ら、平然として、こう仰言（おっしゃ）ったのでござんす。自分は、昨日までのことはことごとく忘れることにして居るし、また明日の為に今日を生きては居らぬ、いつでも無縁仏になれる男ゆえ、お主らが、どのような意趣を抱いて居ろうが、平気で斬れるし、斬りすてたあと、すぐ忘れることもできる」
「………」
「貴方様は、そう仰言っておいて、一太刀ずつで、三人を斬ってすてられました。……あの宵から、このかた、あたしは、一日に一度は、貴方様を、思い出して居りました。だから……」
お妻は、口をつぐんだ。狂四郎の腕の中へ、抱き取られたからである。

……やがて、お妻は、痛みに堪える小さな叫びをあげた。

四

狂四郎が、座敷に出て来て、膳に就いてから、かなりの時間が経った。
お妻は、長いあいだ、褥の中に、じっと仰臥して、声もなく泣いていたようである。
身じまいをととのえて、狂四郎の前に坐った時には、あかるい表情をとりもどしていた。
両手をつかえて、
「ありがとう存じました」
と、礼をのべた。
「女にしてやって、礼を云われたのは、はじめてだ」
「旦那、あたしは、これから、人身御供にあがるのでござんす」
「………？」
狂四郎は、お妻を視かえした。
「あたしは、今年二十四になります。……はずかしい刺青をされたのは、恰度十年前十四の時でした。彫政というきちがいじみた名人が、同じ町内に住んでいて、あたしに、ねむり薬をのませておいて、彫ったんです。……その当座、いくど、死のうと思ったか知れません。いえ、ほんとうに、両国橋から、身を投げようとしたんです。救ってくれた相手がいけなかった。黒元結連、という江戸一番の掏摸組の親分だったんです。それから三年経たないうちに、あたしは、一人前の掏摸にしたてあげられて居りました。……でも、あたしは、泥沼にはまり込んでも、からだだけは清く保とうと、自分に誓って、今日まで、守り通して来ました。それァ、犯されようとした

ことは、二度や三度じゃありませんでした。死にもの狂いで、危ない瀬戸際を遁れたこともあります。……二十四にもなって、人様の懐中を狙う稼業の女が、未通女だなんて、自慢にもなんにも、なりやしませんが、守り通した挙句に、この珍しい未通女を、人身御供にしようという悪い奴が、現われたのも、因果な話でござんす」

「…………」

狂四郎は、腕を拱いて、お妻の話をきいている。

お妻は、黒元結連の親分に呼ばれて、どうかたのみをきいてくれ、と頭を下げられたのであった。

お妻は、いやだ、とかぶりを振った。

親分は、もしお前がきき入れてくれなければ、黒元結連は、一網打尽になって、佐渡の金山送りになる、と云った。

「……つまり、公儀の役人が、お前を、人身御供にさし出せ、と命じたのか？」

「はい。下条主膳というお目付が、どこで、あたしのことを、耳にしたのか、さし出せ、とお命じになったそうでござんす」

「お前をさし出す対手は、何者だ？」

「ご公儀のいちばん偉いお方だとか……」

「公儀で一番上にいる者は、将軍家を除けば、老中だが……、老中の中に、そんな物好きがいるのか？」

「…………」

「もしかすれば、将軍家自身かも知れぬ。無類の好色漢が、老いて不能に陥れば、お前のような

珍しい未通女をえらんでみることも、考えられる。当人が躍起になっているというよりも、側近が、機嫌とりに、いろいろえりあさって、さし出してみるのだろう」

「旦那、あたしは、たとえ、人身御供にあがるのが、公方様だろうと、今日まで守って来た操を、見も知らぬ男に破られるのは、死んでもいやだったんです。でも、きかなければ、仲間が一人のこらずつかまって、佐渡送りになるし、思いなやんだはてに、あたしは、旦那をはじめての男として、えらびました」

「………」

「これで、あたしは、思いのこすことはありません。……人身御供になります」

「その――下条主膳というお目付の屋敷へ行って、御殿女中に化けさせられるのか？」

「いいえ、小笠原相模守という若年寄のお屋敷へ、明晩、あがるように、申しつけられて居ります」

「小笠原相模守?!」

狂四郎は、ききとがめた。

――伊豆の石室崎で会ったあの男は、千華を、若年寄小笠原相模守に、引渡してくれ、とたのんだ。

世間に絶対に知れぬよう、極秘裡に、異邦の娘を、引渡すさきが、幕府の要人であることに、その時、こちらは、

――いったい、何を企てようとするのか？

と、強い疑惑をわかせ乍らも、敢えて訊こうとはしなかったのだが……。

――千華は、この女掏摸と同じ目的で、人身御供にあげられようとしたのか？

しかし、石室崎の男たちは、こちらを、公儀隠密と思いちがいして、襲撃して来たではないか。
「お妻——」
「はい」
「人身御供になる前に、べつの役目をひき受けてもらおうか」
「なんでござんしょう？」
「この眠狂四郎の間者になってくれることだ」

救いの神

一

翌朝——。
本丸老中水野越前守忠邦の上屋敷を訪れた眠狂四郎は、表長屋の側用人宅に入って、書院で、武部仙十郎と対坐するや、挨拶ぬきで、唐突に、
「将軍家は、もはや不能者であろうか？」
と、問うた。
「なんのことだな？」
老人は、怪訝の視線を返した。
「風聞によれば、将軍家は、七年前に、第五十五番目の子をもうけたのを最後に、その生殖作業を熄った由——」

天明六年九月、千代田城の主となった十一代家斉は、在職実に五十年に及ぶ間に、一妻二十一妾を擁し、五十五人の子女を、その系譜に登録していた。

「たしかにの、泰姫様のご誕生をもって、打ち切りにされて居る。その年、上様は、たしか五十五歳であらせられた」

「六十を越えたいま、ようやく、不能に陥っていることは、容易に想像がつく」

狂四郎は、冷やかに、云った。

「さての？　そこまで見とどけるのは、老中の役分にはないことだ」

「しかし、当人としては、四十余年つづけた作業ゆえ、骨になるまで営みたい、とのぞむのは、人情であろう」

「ふむ――」

老人は、じっと、狂四郎を、見かえしている。

「夜毎あせった挙句、ただの小綺麗な娘ではなく、おのが不能をなおしてくれる女ならば、乳房を三個も所有している化物であろうが、茣蓙をかかえて二十年も鼠鳴きした夜鷹であろうが、すこしもかまわぬ、とあさましい料簡になっている、とも考えられる」

「左様な事実は、まだ、わしの耳には入って居らぬ」

「若年寄の一人が、せっせと珍奇な女をさがしている事実は、ある」

「若年寄の一人？　誰じゃな、それは？」

「小笠原相模守」

「ほう、相模守がのう」

老人は、小首をかしげた。

「女を献上して権勢を得る、という常套手段は、他人の例を挙げるまでもなく、ご老人、貴方の主人もやったことだ」

水野忠邦が、文政十一年十一月に、京都所司代から西丸老中に昇進し、将軍家世子家慶附きになり、家慶の嫡男家祥（のちの家定）の傅役になったのは、尋常ならぬ蔭の工作がなされたからであった。

その工作のひとつとして、美女献納があった。

南鍋町の菓子舗「風月堂」の長女きんは、美女の評判が高かった。忠邦は、隠密に風月堂を訪れ、きんの容姿を眺めて、肚をきめると、その父親からもらい受け、実弟の跡部山城守良弼の女とし、さらに、竹本安芸守の養女にする、という面倒な手続きをとってから、西丸へ上げて、家慶の側妾の一人に加えたのであった。

この人身御供工作には、武部仙十郎の働きが、大いに、あずかって力があったはずである。

忠邦は、加判の列に加わって、やがて老中首座に就き、天下の政治を掌る、という初一念を貫くためには、いかなる非常手段でも辞せぬ肚をきめ、それを実行して来た人物であった。

水野家は、長崎御固め十八家の首である肥前唐津の城主であった。公称は六万石であったが、実収は二十六万石といわれ、物成の収益は日本随一と、他家から羨望されていた。また、長崎御固めの首であるために、他の諸役（日光修築とか、勅使饗応とか、河川工事とか——）を免じられたので、その台所はきわめて裕福であった。

しかし、長崎御固めの大名は、閣老に登用されないのが、幕府の慣例であった。

忠邦は、それを不服とし、加判の列に加わるためには、唐津六万石をすてなければならぬ、とほぞをかためて、国替えの事を申請した。その結果、文化十四年九月に、遠州浜松六万石に移封

の沙汰があった。
この儀を耳にした水野家の老臣たちは、激しく諫めたが、忠邦は、肯き入れなかった。そして、ついに、閣老にのし上ったのである。
昨年——。
忠邦は、西丸老中から本丸老中に進むために、将軍家斉の第一の寵妾おみよの方に、欧羅巴各国から密輸した家具調度品を、贈って機嫌をとりむすんでいた。その総額は十万両を越えた、といわれている。
この主人を持つ武部仙十郎が、将軍家の不能ぶりを座視しているはずはない、と狂四郎は、考えたのである。
——小笠原相模守に、女を漁らせているのは、もしかすれば、越前守かも知れぬ。
そうも推測して、この上屋敷を訪れた狂四郎であった。

二

狂四郎は、腕を組んで、狡猾無類の側用人を凝視し乍ら、
「ご老人、わたしに、しらばくれても、はじまるまい」
と、云った。
老人は、さも大儀そうに、身を二つに折って、肝斑だらけの皺手で、頬をはさんでいたが、
「わがあるじは、もうすでに、本丸老中の座に就かれて居る。大奥の閨事にまで、気を配る必要はなくなったわ。……小笠原相模守が、雌漁りをしていることなど、一向にかかわり知らぬの」
と、こたえた。

「相模守は、わがあるじのまね事をやって居る、と云われるのか？」
「………」
「左様さな。……しかし、これは、手おくれだの。どうせ、美女を献納するなら、西の丸様にすればよかろうに——。ご本丸と西の丸が、入れ替るのは、あと二三年のうちであることは、目に見えて居る。それを実現してみせるのが、わがあるじだから、これほどたしかなことはない」
そう云ってから、老人は、上目使いに、狂四郎を視た。
「それにしても、珍しいの。お主が、たのまれもせぬのに、そんな事柄に、首を突っ込むとは——」
狂四郎は、しかし、それにこたえる代りに、宙に眼眸を置いて、
「貴方が関知せぬ、というのがまことならば、公儀の内で——別の場所で、ひそかな陰謀がすすめられている、ということになる」
と、云った。
「陰謀？　なんのことじゃな、それは？」
「沼津千阿弥が割腹したのち、その門弟百人を、一人残らず斬ろう、と躍起になっているお目付がいることは、貴方も、すでに耳にされて居ろう」
「うむ」
「なんというお目付か、ご存じか？」
「下条主膳だの」
老人は、教えた。
「やはり、そうであったか」

狂四郎は、合点して、

「下条主膳は、小笠原相模守の耳目。……沼津千阿弥の門弟たちを根絶やしにしようとしていることと、将軍家の不能をなおすために珍奇の女を献納しようとしていることと、一見なんの関聯(かんれん)もないようなこのふたつの事実が、蔭で深いつながりを持っている模様だ。これは、わたしのカンだが、十中九まで、狂って居らぬ自信がある」

「その話、もっと、くわしく、きこうか」

老人が、強い興味をそそられたことは、すっと上半身を立てたことで、明らかであった。

狂四郎は、語った。

伊豆の石室崎で、えたいの知れぬ男から、信頼されて、密入国して来たらしい異邦の娘をあずかったこと。これを、江戸にともない、若年寄小笠原相模守に引渡すはずであったこと。鎌倉の鶴岡八幡宮で、沼津千阿弥が割腹する異変があったのち、千華というその娘をつれて、巨福呂坂(こぶくろ)の谷(やつ)を抜けようとした際、公儀庭番衆に襲撃されたこと。そして、その直後、弥之助という夜盗が現われて、千阿弥の門弟二十人が、将軍家代参の帰途をはばんで街道上で列座切腹する企てがあるゆえ、阻止して頂けまいか、とたのんだこと。こちらは、迂闊(うかつ)にも、弥之助を信用して、千華をあずけたところ、それなり、千華が何処かに拉致(らち)されてしまったこと。

江戸へ戻って来て、一夜、沼津千阿弥の青山の書塾へ忍び入ってみると、そこに、千阿弥の隠し妻がいて、その口から、千阿弥が去年の秋にもらした言葉——百万両以上の大金が、日本のどこかに隠匿されている——ときかされたこと。

「……つまり、お目付下条主膳が、沼津千阿弥には、幕府顚覆(てんぷく)の謀叛(むほん)の計画があったとして、門弟たちを根絶やしにしようとしているのは、表向きの名目であって、実は、お目付自身、大金が

隠匿されていることをかぎつけて、その事実を知らされている沼津門下を、この世から消さねばならぬ、と躍起になっているのではなかろうか」

「………」

「弥之助という夜盗が、お目付の手先になっている、という推測が、わたしに、こういう想像力を働かせた、とお思い頂こう」

「ふむ。面白いの」

老人は、大きくうなずいた。

「美女の献納は、上様の不能をおなおしするため、というより、大金をさがし出す目的によるもの、とお主は云いたいのじゃな？」

「貴方が関知せぬ、ときいて、急に、そうむすびつけたくなった」

「お主の想像力は、あっぱれな働きをする、とほめてよい。しかし、面白すぎる話というやつには、しばしば、肝心の点に、大嘘がある」

「百万両の大金が隠匿されている、という黄金伝説を、貴方は、あたまから信じない、と云われる？」

「考えてもみるがよい。たかが同朋(どうぼう)づれが、そのような黄金伝説を知ったとすれば、たぶん、ご城内の富士見櫓(やぐら)の文庫からであろうが、左様な貴重な文献ならば、文庫に納める前に、すでに、事実の有無が調べられて居ろうし、根も葉もないことと判れば、破棄されて居るにきまって居る」

「富士見櫓の文庫以外の場所から、沼津千阿弥が、偶然、発見したことは、考えられまいか？」

「考えられぬの。柳営内のことには、わしは、通暁しているつもりだ」

「大奥を除いて、ではないのか、ご老人？」

「…………」

老人は、狂四郎の冷然たる態度に、いまいましげな表情をかえした。

三

高輪の来成寺の方丈に於ては――。

捨てかまりの弥之助が、虜囚の部屋を、一寸余の厚さの杉戸に設けられた小窓から覗いていた。

「お嬢さん、ねばりなさるものだ。そろそろ、こっちが根負けするくらいですぜ」

千華は、弥之助の視線を受けとめて、身じろぎもせずに坐りつづけている。

「てまえの主人は、あんたが、若年寄小笠原相模守様の許へ、送りとどけられようとしていたことを、看破っておいでだ。つまり、あんたは、公方様へさし出す女子なんだね。そこまでは、はっきりと判った。……何者が、いったい、あんたを、この日本へつれて来たか――それは、あんたに口を割ってもらわなけりゃ、ならねえ謎だが……、どうだろうね、そろそろ、観念する汐どきじゃないのかねえ」

「…………」

「ひとつ、きかせておこうか。……てまえの主人は、お目付の下条主膳と申されて、実は、若年寄小笠原相模守様の片腕なのさ。それなら、自分を、さっさと、小笠原邸へ、つれて行けばよいではないか、と云いたいだろうが、どっこい、そうはいかないのだな。……あんたが、何者に、何の目的で、公方様に献上されようとしたのか、それがはっきりと判らぬ以上は、小笠原邸へ、つれては行けないのだ」

「…………」

「ものは相談、という文句を、あんたは、知っていなさるか。これは、あんたとこの弥之助の二人だけの相談さ。主人には、内証にして、そっと、てまえにだけ打ち明けて下さることは、できませんかね。そうすりゃ、てまえは、この胸にあんたの秘密をたたんでおいて、主人の方には、うまく話をつけて、若年寄に会わせてさしあげる。こういう相談に乗って下さるわけには参りませんかね？」

「…………」

「このままじゃ、あんたは、ここに、一年が二年、いやもしかすれば、顔に皺のできるまで、とじこめられていることになるんですぜ。……目的は遂げられず、容色はおとろえて、つまり、あんたは、見知らぬ異国で、乞食（こじき）になるよりほかはない、というおそれもある。てまえは、場合によっては、あんたの味方になってもいい、と考えを変えたのだ。どうだろうね。ものは相談だが……」

そこまで、しゃべって、弥之助は、急に、鋭い気色になって、雨戸をへだてた庭へ、神経を配った。

——ただの気配じゃねえ！

弥之助は、小窓を閉めると、座敷牢（ざしきろう）からはなれた。

廊下を幾曲りかして、座敷へ戻って来た弥之助は、そこに、いつの間にか、一人の男が坐っているのを見出した。

一瞥（いちべつ）して、弥之助は、ぎょっとなった。額にも、頬にも、頤（あご）にも、刀痕（とうこん）が走って居り、人相も年齢も、その刀痕でかくされてしまっていた。

「捨てかまりの弥之助――そうだな？」
浪人者は、声音だけは明るく、そう云いあてた。
「お前様は、どなた様で――？」
「死神九郎太、と人から称（よ）ばれて居る」
「なんの御用で、ここへ、おいでになった？」
「見物に来たのだ、南蛮娘をな」
「…………」
弥之助の表情が、険しいものになった。
主人の下条主膳と自分のほかには、この寺院の住職、納所（なっしょ）二人を除いて、誰一人、南蛮娘を虜囚にしていることを、知らぬはずであった。
――どうして、この浪人者が知っているのか？
「まあ、そんなに、食いつきそうな様子になるな、捨てかまり」
「何者なんだ、お前さんは？」
「べつだん、お前に、素姓を教えなければならぬ義務はない」
「お目付とは、どういう間柄でいなさる？」
「ごく親しい知己、ということにしておこうか」
「信じられるものか！」
「信じてくれ、とはたのんでは居らんぞ。そっちが訊くから、こたえたまでだ」
「去（い）んでもらいましょうぜ。ここは、下条主膳様から、あっしが、まかされてる城なんだ」
「あいにくだったな、捨てかまり。その城あずかりの男が、主人を裏切る相談を、南蛮娘にしか

けているのを、拙者は、きいてしまったぞ」

「あれは、泥を吐かせるための手だ。なんで、この弥之助が、主人を裏切るものか」

「はたしてそうかな。……お前が、お目付に心服して、忠実な走狗になっているとは、受けとれんぞ」

「なんだと！」

「余人はだませても、この死神九郎太を、たぶらかすのは、すこしばかりむつかしい。……捨てかまり——即ち、薩摩の忍び者。実は、お前は、島津家から放たれた曲者ではないか、という疑惑がわくぞ。お目付下条主膳も、いまだ、お前の正体を看破って居らぬのではないのかな」

「でたらめなあて推量は、止してもらおうぜ。冗談じゃねえ」

「ははは……、こっちの勝手な揣摩臆測であれば、さいわいだが、ことわっておく、この死神九郎太は、日本六十余州——壱岐、対馬の果てまで、歩きまわった男だ。見そこなうな！」

最後の一句に凄味をきかせて、別人のように一変させた九郎太の形相は、流石の弥之助を戦慄させるに足りた。

「ははは……、悪党は悪党同士、小むつかしく云えば、桀を助けて虐を為す、と史記にもある。お互いに利用価値があるあいだは、扶け合おうではないか、捨てかまり。……云っておくが、お目付下条主膳も、決して、公儀のおん為に、奉公第一に、私を無にして、残忍な行為をやっているわけではないのだ。我欲は人一倍旺盛な人物であることは、拙者が一番よく知って居る。お前は、お目付から全幅の信頼を受けているつもりだろうが、なアに、利用するだけ利用したら、夜盗ごときを走狗にしたことが、上司に知れるのはまずいので、頃合をみはからって、闇から闇に葬る肚を持っていることは、火を見るより明白だ」

「………」

「どれ、ひとつ、南蛮娘に、拝顔の栄に浴そうか」

「そ、それは――」

「いやだとは、云わせぬぞ」

九郎太は、立ち上った。

座敷牢へ向って進む九郎太の幅広い背中を、三四歩はなれて、睨みつけ乍ら、跟いて行く弥之助が、鉤の手に曲るところで、一瞬、懐中へ片手を入れた。

とたん――、振りかえった九郎太が、にやりとした。

「無駄だな、捨てかまり。拙者は、後頭にも目がついている男だ。お前の生命を寄越せ、と所望しているのでもないし、せっかく手に入れた走狗の立場をすてろ、と脅迫しているのでもないぞ」

「…………」

弥之助は、あきらめて、立ちどまった。

九郎太は、座敷牢の前に立つと、小窓をひらいた。

「成程――これは、尤物だ」

九郎太は、首を振ると、いきなり、錠前の釘を、ひと引きに、引き抜いた。おそるべき膂力であった。

「な、なにをする！」

弥之助が、走り寄ろうとした。

「捨てかまり、そこを一歩も動くな！」

「娘を、拉致するのか！　お目付が、許さねえぞ！」
「お前が、ちょっと留守したあいだに、拉致された、と報告いたせばよかろう」
「そ、そんな……」
「お前は、必ず、そう報告する」
「ば、ばかなっ！」
「拙者に、よけいなことを云わせるな。薩摩の忍び者であることを、お目付に知らされたら、お前は、どうなる？」
「………」
弥之助は、息をのんだ。
九郎太は、重い杉戸をひき開けた。
「娘御、出なされ。救いの神が参った」

夜の客

一

江戸の街には、昼間は春が来ていたが、夜半はまだ冬の寒気が占めていた。
その夜は、之に加えて、風が強かった。
子刻（午前零時）――。
眠狂四郎は、その風に、袂や裾をあふられ乍ら、御曲輪内の大名小路に入っていた。

大名小路に入るには、数寄屋橋御門はじめ、八つの御門のうちのいずれかを、渡らねばならぬ。素浪人風情など、夜更けてから、御門の番士が黙って通してくれる筈もなかった。

どうやら、狂四郎は、日本橋あたりから、小舟を漕ぎ出し、一石橋をくぐり、まっすぐに、闇にまぎれて水の上をすべり込んだ模様である。

もとより、大名小路の各処には、台提灯であかあかと往還を照らす辻番所があって、不寝番が目を光らせていたし、また二人が肩を並べて、自邸のまわりを廻って居り、これに見咎められるのは、避けねばならなかった。

狂四郎が、めざしたのは、若年寄・小笠原相模守の屋敷であった。

あらかじめ、絵図面で調べた狂四郎は、外濠からその屋敷に至るのに、辻番所を避け得る通過方法を思いついていた。

小笠原家の南隣りは、御作事方の屋敷であった。その敷地内を、横切って、塀を越えれば、小笠原邸の裏手の往還へ出られる。その通りには、辻番所は、設けられていなかった。

「金が、かかっている」

高塀を越えて、邸内の深い木立の中に立った時、闇に目の利くこの男の口から、その独語が洩らされた。

小笠原相模守長貴は、越前国大野郡勝山・二万七千七百余石の小大名であった。いかに若年寄の地位に就いているとはいえ、夜目にも美しく庭に手入れをゆきとどかせるほど、台所が裕福であるとは、考えられなかった。

狂四郎は、夜風にゆらいでいる松の枝ぶりを眺めただけで、

——別途の大きな収益があるようだ。

と、推測した。

水野忠邦が老中となっても、大名としては、たかだか浜松六万石の小さな城主である例が示しているように、幕府の閣老は十万石以下という、家康以来の仕癖によって、資力と権力を同時に持たせられぬ不文律であった。

六万石の城主水野忠邦は、前田とか島津とか、数十万石以上の国主を、「その方」と呼びすてる権威を得ているが、内証は窮迫して、その下屋敷はおろか上屋敷の庭を手入れする余裕さえも、ないのであった。

まして、城も持てぬ二万七千石の小領主に、庭を美しく飾る財力があろう道理がないのであった。

——一夜や二夜、忍び込んでみたところで、別途の収益を、どうやってあげているか、つきとめられはすまいが……。

狂四郎は、跫音を消して、木立から抜け出すと、苑路へ降りて行こうとした。

とたんに、

——先客がいる！

と、鋭い視線を、高麗燈籠の蔭へ、投げた。

黒影がひとつ、そこにうずくまっていた。

狂四郎は、夜空を仰いだ。雲が流れていた。

十三夜の月が、雲間からのぞくまで、狂四郎は、待つことにした。

黒影は、自身も石と化したように、微動もせぬ。狂四郎もまた、立木と化したように、身じろぎもしなかった。

　やがて、月光が、地上を染めた時、苑路を見廻りの番士が二人、通り過ぎて行った。
　黒影が、燈籠の蔭から、すっと立ち上ると、狂四郎も、動いた。
　苑路へ降りた黒影は、その時はじめて、背後の気配をさとって、ぱっと向きなおった。
「こんなところで、めぐり逢おうとは思わなかったな、捨てかまりの弥之助」
「…………」
　固唾をのんだ弥之助は、二間のむこうにうっそりと立つふところ手姿を、この上もなく無気味なものに、見まもった。
「どうした、夜働き――。おどろきで声が出ぬほど肝が小さくはあるまい。……おれが、あずけた南蛮娘を、どこにとじこめたか、教えてもらおうか」
　と、迫られると、弥之助は、悪びれずに、
「旦那、あっしは、まだ、胴から首がはなれたくはねえので、娘御をお返しいたしたいのは山々でございますが、どじを踏んで、鳶に油揚げをさらわれてしまいました」
「闇の中なら、ごまかせる、と思っているのなら、料簡ちがいだぞ」
「旦那をだませるのは、たった一回だけだと心得て居ります。娘御をさらわれてしまったいま、嘘をついてもはじまりません」
「お前は、お目付下条主膳の手先だろう。かくすな！」
「へい、たしかに――」
「鳶に油揚げをさらわれたお前を、酷薄残忍な性情できこえている下条主膳が、そうかんたんに許したとは、考えられぬ。もういま頃は、お前は、三途の川を越えているはずだぞ」
「あっしも、覚悟して居りましたところが、娘御をさらって行った曲者の名前を、つたえますと、

あの男ならお前ごとき者では太刀打ちできぬ、と許して下さったのでございます」
「その男は、何者だ？」
「死神九郎太、と人から称ばれているとか……」
「死神九郎太——、そうか。あの男に、奪われたか」
「旦那、あいつを、ご存じなので——？」
狂四郎は、それにこたえる代りに、
「人身御供を拉致されたお前が、一人で、この屋敷に忍び込んだ理由を、きこうか」
と、もとめた。

二

「へい、……もしかすると、死神九郎太てえあの曲者は、若年寄様手飼いの隠密じゃなかろうか、と思いましてね」
「どうして、そう思った？」
「下条様は、若年寄様の下においででございますが、実は、決してその片腕になってはいらっしゃらねえ。時と場合によっては、若年寄様のご存念をさし措いて、独断で事を進めておいでの模様なのでございます。……そこで、若年寄様の方は、手飼いの隠密を使って、下条様のやりかたを、さぐっておいでなのじゃないか——そう思いましたもので……」
「お前はお前で、下条主膳に命じられたわけでもないのに、勝手に、この屋敷へ、何かをさぐりに忍び込んだ、というのか？」
「へい、まあ、そんなところで……」

「それもまた、妙な話だな」
「へえ……」
「ついでだから、訊いておこう。お前が、わたしをだまして、あの娘を拉致したのは、お前の一存でやったことか？　それとも、下条主膳の命令によるものか？」
弥之助は、この質問に、ちょっと返辞をためらった。
「どうした、こたえぬか？」
「あっし一存で、やったことでございます」
「何故だ？」
「へい、つまり……、下条様が、いろいろさまざまな女をえらんで、こちらへお連れなさるのを、知って居りましたので……」
「異邦の娘を連れて行けば、よろこばれるだろう、と思った、というのだな？」
「へい、左様で——」
「その実、お前は、わたしがあの娘を、この屋敷へともなうことを、あらかじめ知っていたのではないのか？」
「い、いえ、そんなことは、夢にも存じませせなんだ」
「そうかな」
無断侵入者同士の、闇の中での問答であった。
狂四郎も動かず、弥之助も動かぬが、それぞれが、時刻をはかり、次の行動を案じ乍ら、向い合っているのであった。
「いよいよ妙な話だ」

「なにが、でございます？」
「あれから、すでに、十日以上が過ぎている。下条主膳は、とっくに、この屋敷へ、あの娘を連れて来ていなければならぬはずだ。……ところが、連れて来ずに、どこかへとじこめていた。お前の話がまこととすれば、いたずらに監禁をながびかせていたために、死神九郎太に、横あいから、さらわれたことになる。面妖しいではないか。下条主膳は、なぜ、さっさと、あの娘を、ここへ連れて来なかったのだ？」
「それが……、つまり、娘御が、日本へ忍び込んで来たのは、何か、深い仔細があるに相違ない、と看て、そいつを、白状させようとしていたわけなので——」
「弥之助！」
狂四郎の声音が、鋭いものになった。
「へい」
弥之助は、月明りにもはっきりと判る戦慄を、肩に示した。
「お前は、下条主膳が、沼津千阿弥の門弟たちを一人残らず斬ろうとしている理由を知って居るな？」
「いいえ、なにも……」
「知らぬ、とは云わせぬ！」
狂四郎は、わざと、凄まじい殺気をあびせた。弥之助は、思わず、一歩退った。
「云え！　云わぬと、斬る！」
「旦那！」
弥之助は、その場へ坐った。

「あっしは、ただ、下条様のご命令で、ご同朋のお屋敷へ、さぐりに、忍び込んでいただけなので……。忍び込んでいるうちに、ご同朋のご立派なお志に、感激したことは、全くの事実でございまして——。それで、お坊主衆の切腹を、なんとかしてお止めしたい、と願ったのも、嘘いつわりのない本心からのことなんで……」

「お前の弁解を、きいたところではじまらぬ。……どうやら、一筋縄ではいかぬお前に、この場で、全部泥を吐かせようとするのが、無理のようだ。ひとつだけ、正直に白状してもらおう。今夜をえらんで、この屋敷に忍び込んだまことの理由が、はっきりとあるはずだ。それを云え。死神九郎太が若年寄の手飼いの隠密ではないかと疑惑を抱いた、などというそらぞらしいこじつけなど、おれには通用せぬぞ」

弥之助は、追いつめられた者のていで、しぶしぶと、

「あっしは、本石町二丁目の阿蘭陀屋嘉兵衛が、このお屋敷へ参ったのを、尾けて参ったのでございます」

「いまから、どれくらい前だ？」

「まだ半刻も経っては居りません。夜分おそく、阿蘭陀屋が、こっそり訪問したのを、なんとなく臭い、と思いましたので……、へい」

「相模守と、なにやら密談する、と嗅いだか？」

「へい」

「これで、明白となったことが、ひとつある」

「へえ——？」

「若年寄小笠原相模守も、お目付下条主膳も、死神九郎太も、そして、お前も、いずれも、同じ

道を歩いて居る、ということだ」
「同じ道と申しますと？」
「欲の道、というやつだ。もらさじと花を尋ぬる山々の頂もなき欲の道かな――これだな」
「…………」
「弥之助、今夜はおとなしく引きあげるがよかろう。若年寄と阿蘭陀屋の密談は、わたしが、代って、ぬすみぎいてやろう」

三

この夜更けに、その部屋からは、烏鷺（うろ）の争いの音が、高くひびいていた。
主人と対局しているのは、五十年配の苦味走った眉目の町人であった。その皮膚が、地なのか、焼いたのか、異常に黒いのが、特色であった。
江戸で、阿蘭陀の品物を、一手にとりしきっているのが、この商人であった。
鎖国政策は、時にゆるめられ、時にきびしくされ乍ら、なお、長崎出島のオランダ商館を窓口にする以外は、諸外国との交易を厳しく拒否している時代であった。
鎖国の禁を犯すことが、いかにおそろしい行為か、次の一例でも判る。
一時代前――明和二年に、後藤梨春という医師が、『紅毛談』という書物を出版したが、その中に、阿蘭陀文字を、たった二十五文字載せていた。すると、幕府は、これを不都合であるとして、絶版を命じた。
その後、安永に入って、阿蘭陀の書物や品物を手に入れることが、黙許されるようになったのは、老中田沼意次（おきつぐ）のおかげであった。

田沼意次は、幕府の全権を握ると、奢りに長じて、和漢の品物は珍しくない、と振り向きもせず、もっぱら、長崎出島のオランダ商館に命じて、時計、寒暖計、硝子細工、望遠鏡、顕微鏡などをとり寄せて、翫んだ。

上の好むところ、下これより甚だし、のたとえ通り、たちまち、大名も旗本も富有の町人も、われもわれもと、阿蘭陀の品物を手に入れることに躍起になった。

一時期、日本橋の通町の左右には、長崎なになに、阿蘭陀なになに、という看板が、ずらりとならんだものであった。

古い薬種屋でさえ、「ウルエス」という、いかにも阿蘭陀製らしい薬を、売った。ウルエス、は阿蘭陀語でもなんでもなく、「空」の字を分解して、これに「ス」をつけただけであった。すなわち、「空しくする」という意味で、腹の痛まない下剤で、腹中を空にする、という次第であった。

これほど左様に、阿蘭陀流行の一時期があった。

しかし、田沼意次が失脚して、松平定信が老中首席を襲ってから、再び、阿蘭陀の品物は、江戸市中から追放されてしまった。

とはいえ、禁制品となればなるほど、これを私有したいのが、人情であった。

現在、江戸で、たった一軒だけ、オランダ商館との取引を公に許されている阿蘭陀屋が、蔭でどれだけの巨利をむさぼっているか、想像に難くない。

阿蘭陀屋嘉兵衛は、どうやら、前身は船乗りのようであった。本石町二丁目に、店をひらいたのは、文化十年頃であったが、爾来一度も、密貿易のボロを出さずに、巧みに、幕府要人にとり入って、あきないを繁昌させている。

ひそかな噂では、阿蘭陀屋嘉兵衛は、加賀の銭屋五兵衛が、二千五百石積の船十数艘で密貿易して来た露・米・英・仏四国の品物の大半を、引き受けている、といわれている。

「……時に」

阿蘭陀屋嘉兵衛は、盤面をにらんで長い熟慮をつづけている若年寄に、何気ない口調で、云いかけた。

「北には、オロシャ船、南には、イギリス船、ポルトガル船が、どんどん、やって来て居りますな。つい去年の暮も、イギリス船が、水戸の大洗沖へ現われた由ではございませんか。ご時世でございますな。浦賀の警固船が、うろうろと巡廻したところで、はじまりますまい。……そろそろ、ご公儀も、肚をおきめなされて、伊豆のどこかの港を、お開きになったら、いかがなもので――」

云いたいことを、ずけずけと云ってのけた。

「そうかんたんには参らぬ。……第一、公儀が開港すれば、さしずめ、内緒の利益が薄くなるのは、阿蘭陀屋、お前ではないか」

「なんの、開港ともなれば、その港で、てまえの店を開かせて頂き、南蛮各国の品物を、一手に引き受けさせて頂きます。また、てまえ自身も、欧羅巴に渡って、世間があっと目を剥くような大きな交易をやってのけてみたいもので……」

「申し居る」

相模守は、苦笑した。

「ところで、公方様へ献納の尤物は、ひとそろい、おそろえになりましたか？」

阿蘭陀屋は、訊ねた。

「まずの」
「そのうちで、きっと公方様がご満足なさる、と自信をお持ちの女子が、居りましょうか？」
「さて——、それは、さし上げてみぬとのう……」
「どういうたぐいの珍しい尤物か、参考のため、おきかせ下されませ」
「未通女(むすめ)の掏摸が居る」
「べつに、そんな女子は、珍しゅうはございますまい」
「ところが、陰部のまわりに、四十九ひきの小蟹(こがに)を彫って居る」
「成程、それは、ちょっとばかり珍しいしろものでございますな」
「まず、そこいらあたりが、上様のお気に召すのではないか、と思うて居る」
相模守に、そう云わせておいて、阿蘭陀屋は、薄ら笑い乍ら、
「てまえにも、さし上げたい尤物が、一人いるのでございます。いえ、本日、おうかがいしたのは、もうご当家へ、ともなわれているのではあるまいか、と——その用向きもございました。明日にも、必ず、お目見えするはずでございますよ」
「どんな女子だな？」
「いつぞや、阿蘭陀国の貴族の娘御の肖像画を、大奥に献上いたしましたが、それとそっくりの生きているしろものを、公方様に——」
「まことか？」
「べつに、てまえが、欧羅巴から買い入れたわけではございませぬ。……むこうの方から、内密に、献納しようとしているのでございますよ」
「むこうの方とは？」

「若年寄様は、南洋各処に、いまなお、日本人町が、ちらばっていることをご存じでございましょう。呂宋（ルソン）、交趾（コーチ）、柬埔寨（カンボジャ）、暹羅（シャムロ）、咬𠺕吧（ジャガタラ）、ポルトガル領澳門（マカオ）など、いずれの土地にも、朱印船で押し渡った勇ましい先祖がつくりあげた日本人町を、末裔（まつえい）どもが、立派に守って居ります。これら末裔どもが、ひたすら、願っているのは、祖国との自由な交通でございますな。……日本人町は、鎖国によって、祖国との交通の手段を失っても、なお、祖国の慣習風俗を守り、その土地の者との婚姻を厳しく拒絶して、大和民族の血脈を保ちつづけて居ります。しかし、なにさま、祖国からあらたに加わる者は皆無とあっては、漸次（ぜんじ）死に絶え、元和（げんな）寛永の頃、五千とも一万ともかぞえられていた町も、今日では千か二千に減って居ります。……そこで、きわめて最近になって、ご公儀に、鎖国を解いて頂けぬまでも、せめて、日本人町にだけは、自由な交通をお許し頂こうと、決死の覚悟をきめた者どもが幾人か、いまだ見知らぬ祖国に、潜入して参ったとお思い頂きましょう」

「…………」

相模守は、阿蘭陀屋の意外な言葉に、じっと、耳をすませている。

「その者どもは、尋常一様の手段では、とうてい、ご公儀のお許しが叶（かな）わぬ、とみて、南蛮の美女を一人、公方様に献納することにしたのでございます」

「…………」

「偶然、てまえは、その者どもの企てを、耳にする機会があり、蔭から援助をしてやる肚をきめて、たまたま、長崎へまわしていたてまえの持船をひとつ、わざと、その者どもに、盗ませてやったのでございます。……てまえの使っている者が、たしかに、南蛮娘を潜伏させたその船は、長崎を出て、江戸へ向った、と早飛脚を寄越したのが、七草明けでございましたから、南蛮娘は、

もうとっくにこの江戸に忍び入っていなければならぬのでございます。……これア、公方様も、お目を細めて、ご賞味あそばすに相違ないと存じ、てまえも、心待ちにしている次第なので……」

そう語って、阿蘭陀屋は、若年寄の反応を、待った。

莫連（ばくれん）慕心

一

小半刻（こはんとき）が、過ぎた。

「それでは、これで、おいとまを――」

阿蘭陀屋は、密談をうちきって、いったん、立ち上ったが、急に鋭い表情になると、二の間との仕切り襖（ぶすま）を、睨んだ。

小笠原相模守は、はっとなって、阿蘭陀屋の視線を追った。

阿蘭陀屋は、懐中からすっと、短銃（たんづつ）を抜き出し、跫音をしのばせて、襖へ近づいた。

阿蘭陀屋が襖をひき開けるのと、そこにひそんでいた者が、ぱっと跳び退るのが、同時だった。

「お殿様は、女子の間者を、それと知らずに、飼っておいでなさるらしい」

阿蘭陀屋は、銃口を曲者に狙いつけ乍（なが）ら、皮肉まじりに云った。

相模守は、うすくらがりの中をすかし視て、

「つまと申す掏摸（すり）だぞ、そやつ」

と、云った。

「では、陰部のまわりに、小蟹を匍わせているという——？」
「そうだ。まだ、それを見とどけては居らぬが……」
「ちょうどいい機会だから、拝見させて頂きましょう。……おい、女、こっちへ出て来てもらおう」
阿蘭陀屋に促されて、お妻は、観念すると、座敷へ入って来た。
「これア、佳い女だ。天性の麗質というやつだ。それが、よくみがかれている」
阿蘭陀屋は、にやりとすると、
「そこへ、仰向けに寝てもらおうか」
と、命じた。
「いやだ、とこばんだら、どうなさいます？」
お妻は、度胸をきめた者のおちつきをみせた。
「いやだ、とは云わせぬ。お前は、ただの鼠じゃなかろう。誰かにたのまれて、進んで、このお屋敷に上って来た。そうだろう？」
「だれが、自分でのぞんで、人身御供にあがるものですか。人様のふところを狙ういやしいぬきいにだって、意気地はござんすのさ。……あたしが人身御供にならなけりゃ、あたしの仲間の黒元結連が一人のこらず召し捕られて、佐渡の金山送りになる、というから、唇を噛んで、いけにえになることにしたんだ」
歯切れのいい伝法口調で、立板に水を流すように云ってのけた。
「奥から抜け出して来て、その部屋に忍んだ理由を訊ねる。表書院ではなく、この座敷で、わしが客と対坐していることをかぎつけるのは、只者ではない証拠だぞ」

相模守が、きめつけると、お妻は、明るい笑い声をたてた。

「お殿様、あたしは、かたぎの女じゃござんせんよ。奥で、おとなしくしていろ、と云われたって、はい、さいでございますか、とかしこまっているのは、性分に合いませんのさ。生れてはじめて上げられたお大名のお屋敷を、見物させて頂いても、べつに罰はあたるまいと思って、奥から抜け出して来て、あちこち歩いているうちに、犬も歩けば棒に当って、つい、お話をうかがっちまった、というわけでございます」

「わしとこの阿蘭陀屋の話を、のこらず、きいた、と申すか？」

「はい、あらましは、うかがいました」

「許せぬのう」

「片づける、と仰せられます？」

「やむを得ぬ」

「生命を奪(と)るのは、もったいない、とお思い下さいまし」

そう云うやいなや、お妻は、すっと仰臥(ぎょうが)すると、目蓋(まぶた)を閉じた。

足袋をきらって、お妻は、素足のままであった。深爪を取って紅をさした白い美しいかたちが、相模守と阿蘭陀屋の視線を惹(ひ)き寄せた。

阿蘭陀屋は、相模守にことわりもせず、裳裾(もすそ)に、指をかけた。

燃え立つ緋色(ひいろ)の腰絹も、容赦なくはだけられて、すらりとのびた白い繊細な脚線が、夜の光に浮きあがった。

阿蘭陀屋は、その片足くびを摑(つか)むと、押し拡げつつ、膝(ひざ)を立てさせた。捲(まく)れていた腰絹が音もなく紊(みだ)れて、太腿(ふともも)から滑り落ちると、女の秘部が、恣(ほしいまま)に露(あらわ)になった。

二人の男の好奇の眼眸（まなざし）が、そこへそそがれた。
その瞬間であった。
「ごめん！」
ことわりの声とともに、廊下から、ひとつの人影が、さっと押し入りざま、小柄（こづか）を、天井めがけて、放った。
眠狂四郎であった。

二

小柄は、あやまたず、天井裏にひそむ者のどこかを刺したとみえて、血汐が小柄をつたって、畳へぼとぼとと、したたった。
狂四郎は、お妻が発見された時、すでに廊下に佇立（ちょりつ）していた。
間者にした者が、煮て食われようが焼いて食われようが、これを見すてておくのは、操る者のとるべき冷酷さであった。間者とは、そういう宿運を負わされているのである。遁（のが）れるのも死ぬのも、間者自身の智慧（ちえ）の働かせかた如何（いかん）であった。
——お妻は、羞恥（しゅうち）と屈辱をすてて、遁れようとしている。
狂四郎は、黙って、見すてるつもりであった。
ところが、もう一人、天井裏から偸（ぬす）み視ている者がいることを、狂四郎は、障子をへだて乍らも、察知したのである。
立ち去れ、と命じておいたにも拘（かかわ）らず、捨てかまりの弥之助が、そこにひそんだ、とさとった狂四郎は、自身の姿を、相模守と阿蘭陀屋の面前にさらすことにしたのであった。

「おのれは、何者だ？」

相模守から、詰問されると、狂四郎は、冷やかに薄ら笑って、

「若年寄の上屋敷であり乍ら、空家同様に、曲者を自由に出入りさせるとは、いささかなさけない、とお見受けする」

と、云った。

「何者だ、と申して居るのだ」

「あの曲者が——」と、天井を指さして、「ご当家へ忍び込むのを発見して、あとを追って来た者、ということにして頂く」

「名乗れ！」

「かりに、お手前様の手飼いの隠密が、他家へ侵入して、発見された際、正直に、名乗りますかな」

「…………」

相模守は、狂四郎を睨みつけて、烈しい苛立ちの形相になった。

阿蘭陀屋の方は、さほどの驚愕も示さず、短銃を、狂四郎の胸もとへ狙いつけて、

「いずれの隠密か存じませんが、神妙にしてもらいましょう」

と、おどしかけた。

狂四郎は、それを無視して、相模守に、

「天井裏の鼠は、どうやら、手負い乍らも、音を立てずに、ご当家から脱出するだけの体力をのこし、修練を積んでいる模様です。ご家中の手配りをされるがよい」

と、忠告しておいて、その座敷に、おのが座をきめて、坐った。

瞬時にして、邸内にあわただしい動きが起った。

相模守自身も、狂四郎の方は阿蘭陀屋の短銃で動けぬものにしたと思って、捕物を指揮すべく出て行った。

狂四郎は、腕組みして、平然たる態度であった。

短銃をつきつけている阿蘭陀屋の方が、かえって、薄気味わるいものをおぼえているくらいであった。

お妻は、ずっと下に控えて、狂四郎を見まもっていた。

――この御仁(おひと)の為なら、いのちなんぞ惜しくはない！

双眸(そうぼう)のかがやきは、女心の炎を燃やしていた。しかし、この屋敷内では、見知らぬ他人であるように、よそおっていなければならなかった。

庭で、曲者を発見した叫びがあがり、そこへ向って殺到する跫音がきこえ、そして、その騒擾(そうじょう)が遠のいてから、しばらくして、相模守が、座敷へひきかえして来た。

「とりにがされたようですな」

狂四郎が、云い当てた。

相模守は、こわばらせた童顔を、狂四郎の視線からそむけて、

「女！」

と、お妻を呼んだ。

「逃げた曲者は、そちの仲間であろう？　どうだ？」

と、訊問した。

「あたしの仲間は、ぬきしばかりで、夜働きなんぞ、しやしません。お思いちがいをなさらない

で下さいまし」

「しらばくれるな！」

「お疑いなら、どうなと、勝手になさいまし。どうせ、人身御供になるからだなんだ。突くなり、斬るなり、そちら様の気随になさるがいいんだ」

莫連らしく、居直ってみせた。

相模守は、視線を狂四郎に移した。

「その方、素姓をあきらかにせねば、当屋敷からは出られぬぞ」

「無断で押し入った者ゆえ、無断で退散させて頂く」

「この阿蘭陀屋が持っている短銃は、玩具ではないぞ。また、飛ぶ燕を撃ち落す腕前も持って居るのだぞ」

「後日の語り草に、こちらの業もごらんに入れてもよい」

「高言を、ほざくものぞ。……阿蘭陀屋、かまわぬ、撃ち殺せ！」

この曲者も、密談をぬすみ聞いた上からは、生かしておけぬのであった。

「味方にすれば、たのもしい御仁のようだが、やむを得ませんな」

阿蘭陀屋は、にやりとした。

その手が、引金を引くのと、狂四郎の前に、畳が生きもののように、はね立つのが、同時であった。

阿蘭陀屋が、つづけさまに、五発を放つ間に、畳もまた次つぎにはねあがって塀状に立ちならんだ。

あと一発を残して、阿蘭陀屋が、突っ立とうとするや、畳の一枚が、宙を躍って、襲って来た。

躱すいとまもなく、その角を肩にくらって、阿蘭陀屋が、がくっとのめる隙に、狂四郎の痩軀が、そこへ跳躍した。

目にもとまらぬ素早さで、阿蘭陀屋の右手から、短銃をもぎ取った狂四郎は、

「勝負あったな、阿蘭陀屋」

と、銃口を背中に当てた。

「たしかに、お前様の迅業は、人間ばなれしていなさる」

阿蘭陀屋は、悪びれず、肩をさすり乍ら、坐りなおした。

狂四郎は、相模守に向って、

「ごらんの通り、阿蘭陀屋は、観念いたした。若年寄殿も、今夜のところは、黙って、わたしとこの女が立ち去るのを、見のがして頂こう」

と、云った。

三

ほどなく――。

三梃の駕籠が、小笠原邸の裏門から、しずしずとかつぎ出された。

常磐橋御門を通るにあたって、先頭の駕籠から、阿蘭陀屋が顔をのぞけて、

「お役目、ご苦労に存じます」

と、挨拶した。

つけとどけがしてあるとみえて、挨拶をかえす番士には、笑顔があった。

本石町一丁目にさしかかると、二番目の駕籠から、狂四郎が声をかけて、停めさせた。

降り立った狂四郎は、
「阿蘭陀屋、近いうちに、また逢う機会があろう」
と、別れを告げた。
首を出した阿蘭陀屋は、
「仕損じたてまえを、さわやかな気分にするとは、貴方様は、ふしぎな御仁ですな」
と、夜目にも皓い歯をみせた。
「お主とは、敵同士にはなっても、味方になる日は、あるまい」
「どうして、そんな予想をおたてなさる？」
「お主は、たぶん人一倍我欲の旺盛な男だろう。そういう男とは、金をたくわえるすべを知らぬわたしは、肌が合わぬ。それだけの話だ」
狂四郎は、踵をまわすと、しんがりの駕籠から降りたお妻を促して、歩き出した。
「お名前を、うかがっておきましょう」
阿蘭陀屋が、訊ねた。
「眠狂四郎、とおぼえておいてもらおう」
ふたつの影は、本銀町を横切って、神田に入り、鍋町の横丁にある小ぢんまりとした旅籠に、あがった。
二階の一室で、さし向うと、お妻は、畳に両手をつかえた。
「間者のつとめもはたせなかった上に、旦那に、いのちまで救って頂いて、面目次第もございません。かんにんして下さいまし」
「お前は、相模守と阿蘭陀屋の密談を、のこらず、ぬすみぎきした。間者の役目は、立派につと

めたことになる」

「でも、旦那が現われて下さらなけりゃ、いま頃は、もう三途の川を渡って居ります」

「一樹の蔭に宿り、一河の流れを汲む、皆これ他生の縁、前世の契りとこそきけ、と何やらの説法にもある。……まして、お前が、はじめて肌を許した男が、救いの神になっても、べつにふしぎはなかろう」

「うれしい！」

お妻は、両手を胸にあてた。

「ことわっておく。お前を、今夜、再び、抱いたからとて、明日を約束したことにはならぬ」

「そんな……、旦那、あたしは、明日のことなど……」

「いや、お前の目の色は、おれに惚れているようだ。これまで、おれに惚れた女は、すべて、不幸な最期を迎えている。お前だけが、例外とはなるまい。……明日、別れたなら、お前は、おれのことを忘れるように努めるがいい」

「旦那！」

お妻は、狂四郎の胸に、身を投げ込んで来た。

「いいんです、明日のことなんか、どうなったって――」

狂四郎の異相や態度に滲む孤独な寂寥の翳が、心中に溶け入って、永劫消しがたいものとなっているのを、お妻は、小笠原邸へ上ってから、はっきりと意識したのであった。恰度、その矢先に、こちらの祈念に応えるように、狂四郎が救い手として、出現してくれたのである。

女として、この上の悦びはなかった。

お妻は、今夜だけを、生きて、燃えれば、それでよかった。夜が明けた世界は、自分のもので

はなかった。

四

阿蘭陀屋嘉兵衛は、店に帰ると、まっすぐに、居間に入った。
卓子も椅子も、置時計も箪笥も硝子瓶も、絨緞も燭台も、すべて異国製であった。
椅子にどっかと腰を下ろした阿蘭陀屋は、卓上に置いた硝子瓶から、紅い酒を、酒鍾についで、ひと息に、飲み干した。
それから、しばらく、宙を睨んでいたが、
「ふん。人一倍我欲の旺盛な男か。……我欲の旺んなことは、さげすむにあたいすることか。ばかな！」
と、吐き出した。
廊下を跫音が、近づいて来て、この部屋の檜戸の前で、停った。
その声が、ひびいた。
「死神九郎太、参上」
阿蘭陀屋は、眉宇をひそめた。
——この夜更けに、あの男、なんの用件だ？
三年あまり前から知りあったえたいの知れぬこの漂泊の浪人者とは、利になるいくつかの取引をしていた阿蘭陀屋であるが、顔を合わせるとまず嫌悪感が先立ち、煩わしさをおぼえさせられるのであった。
阿蘭陀屋は、鍵をはずして、檜戸を開いた。

「やあ、久闊（きゅうかつ）！」
洋燈の明りをあびた刀痕だらけの面貌（めんぼう）は、一層凄味（すごみ）をおびた。
「午（ひる）に一度、宵に一度、訪ね申したが、三度目の勝負で、もう一度、参上いたしました」
「よほど急ぎの御用とみえる」
「急ぐといえば急ぐし、考え様によっては、べつに急がぬ」
「うかがいましょうかな」
九郎太は、椅子に就くと、
「美女を一人、買ってもらいたい」
「女衒（ぜげん）におなりなされたのか」
「左様――」
九郎太は、にやにやして、
「まんざら、お主とは無縁の美女ではない」
「と仰言（おっしゃ）ると？」
「海を渡って来たオランダ娘だ」
「…………」
「密入国には、お主が、一役買った模様だな。かくすな、かくすな。この死神九郎太、万事見通しだ」
「その娘を、どうして、お前様が、手に入れられた？」
「いちいち説明するのは、面倒だ。……買うか、買わぬか、どっちだ？」
「買いましょう」

阿蘭陀屋は、ためらわずに、こたえた。

「高いぞ」

「いずれ、ただで手に入れなすったものを……」

「ははは……、阿蘭陀屋、お主だから、高くふっかけるのだ。買って損はせぬことを、お主の方が先刻承知だろう」

「さてな」

「オランダ娘が、密入国して来た理由を、お主が知らぬ、とは云わせぬ。人身御供となって、大奥の褥に入り、将軍家に、何を願おうとしているのか？　いや、もしかすれば、将軍家を口説くのではなく、別の目的をもって、大奥に入ろうとしているのかも知れぬ。……阿蘭陀屋、お主が密入国に一役を買ったからには、その理由、その目的を、およそ推測したからだろう。この死神九郎太に、しらばくれようとしても、そうは問屋が卸さんぞ」

「大層自信たっぷりに、押して来なさるが、実は、こちらも、手さぐりしているところでね。お互いに、同じ立場にいることとですよ」

「おいそれと、口を割る男ではないことを、承知の上で、申して居る。……娘をお主に売りつけるのは、拙者と組まぬか、という意味もある」

「成程——、牛は牛づれ、馬は馬づれ、というわけですか。てまえ同様、お前様も、我欲は人一倍旺盛らしい」

「お主や拙者のまわりに、我欲を持たぬ奴が、一人でも居るか」

「ところが、一人だけ、居るようで……」

「誰だ」

「ご存じありませんかな。眠狂四郎という浪人者を――」
「なに?!」
九郎太の双眼が、にわかに、狂的な光をおびた。

袋小路

一

浅草鳥越明神裏の講釈師・立川談亭の家では、階下の茶の間に、町内の隠居や芝居茶屋のあるじや、鳶の親方、湯屋のおやじなどが、車座になって、連環をやっていた。
談亭は、長火鉢の猫板を、煙管の雁首で、ぽんぽんと叩いて、
「さあ、よござんすかい。……こんどは、小粋に、うしろ影、といきやすかな。うしろ影、をば見送る目から、道のぬからぬ雨が降る」
と、つくってみせた。
右隣りの者が、それを受けて、
「雨が降る、か。雨の降る夜の首尾するまでは、幾夜ひでりの草の様」
「草のようなる根を掘り葉掘り、鎌をかけては聞いてみる」
「聞いてみるにも、雲間にかくれ、迷い込んだる月の路次」
「月の路次をば忍んで行けば、梅も笑うて憎らしい」
「憎らしい、と来たか。ええ、と……、憎らしいぞえ、朝日がのぞく、月もまだある首尾の蚊

帳」
「首尾の蚊帳から話がもれて、蚊ほどうるさい人の口」
「人の口をば苦にする時に、罪を気がつくおのが口」
「おのが口から哀れをまして、秋を音になく虫の声」
「虫の声にも気を置く戸口、夜のうちより籠の内」
ひと巡りして、談亭にもどって来た。
「籠の内、と来たか。
籠の内をばのがれし鳥の思うままなる枝うつり」
一同、しゃんしゃんと、手をしめた時、おもてから、虚無僧の吹く尺八の音が、ひびいて来た。
座の中で一番若い芝居茶屋のあるじが、
「尺八や吹かなきゃ、音を出さない、法螺も吹かなきゃ、だませない、赤貝ゃ吸わなきゃ、濡れますまい。おひねりゃ五文で、もうやらない」
と、云い乍ら、五文を紙にひねって、虚無僧に渡そうとした。
「あ――お待ちを」
二階から、いそいで降りて来た者が、とどめた。
「へえ、どうなさるんで？」
芝居茶屋のあるじは、近頃、この家に来た美しい居候を、見上げた。
沼津千阿弥の隠し妻・佐喜は、金八にともなわれて来て、この家にかくれていた。
「ぼろんじの吹いている尺八が、一節切でありましたなら、二階へあげて下さらぬか」

佐喜は、たのんだ。
「へえ、承知しました。ぼろんじ、ごろうじ、主(ぬし)ゃ色男、持った尺八、太くて長いか短いか」
芝居茶屋のあるじは、格子戸を開けて、
「成程、こいつは短けえ方だ。……虚無僧さん、二階でお呼びだよ」
と、促した。
虚無僧は、黙って、頭を下げると、入って来た。
談亭が、茶の間から首をのぞけて、
「上げるか上げぬか、火加減手加減——天麩羅(てんぷら)のコツは、主人の思案ひとつでな。大切なあずかりものを、そうやすやすと食わせるわけにはいかないが……」
と、じろじろと、虚無僧を眺めやった。
「談亭殿、わたくしが会ってみたい御仁なのです」
階段から、佐喜が、云った。
「貴女(あなた)が会いたいと仰言っても、眠狂四郎の許しがないと、そこは、どっこい、疑心は暗鬼を生じ、人を見たら泥棒と思え、虚無僧を見たら曲者と思え」
「眠狂四郎殿もご存じの御仁なのです、この虚無僧殿は——」
「それをさきに仰言って下さいよ。……しかし、ちょいと、その天蓋(てんがい)をとって頂きたいもので——」
「仔細(しさい)あって、ここではご容赦を——」
虚無僧は、一礼しておいて、佐喜のあとについて、二階へ上って行った。
談亭は、眉宇をひそめ乍ら、見送って、

「天蓋——孤独の顔を見せられないとは、はて面妖な。大丈夫かねえ？」
と、呟いた。

二

虚無僧は、部屋に入って、深編笠をぬいだ。
宗因というお坊主であった。
「金八と申す巾着切に出逢うて、貴女様が、こちらにかくれておいでになることをきき及びまして……」
「一節切の音を耳にして、すぐ、そうではなかろうか、と思いました」
「佐喜様、と申されましたな？」
「はい」
「眠狂四郎殿は、貴女様が沼津先生のお子をみごもっている、と申されました」
「相違ありませぬ」
「佐喜様、われら陽明書塾の門下一同、沼津先生を喪って以来、要がなく、このままにては、次つぎと脱落者が出るおそれがありまする。義盟を誓い、党を組む上に於ては、仰ぐべき頭首がなければなりませせぬ。……われら一同、貴女様をお迎えして、お生れになるのが男児ならば、そのお子を、頭首に仰ぎたく、協議一決いたしました」
「…………」
「何卒、お願い申し上げます」
宗因は、両手をつかえた。

「眠狂四郎殿に、相談いたしませぬと……」
「佐喜様、これは、貴女様ご自身のご決意次第でありますれば、この場にて、何卒おきめ頂きとう存じます。……お生れになるお子を、われら門下一同が、頭首と仰ぐのは、沼津先生のご遺志にも叶うことかと存じられます」
「…………」
「生き残った者ども七十三名の同志が、必死のお願いをいたすのでございます。何卒、おききとどけ下さいますよう、伏してお願いつかまつります」
宗因は、平伏した。
しばらく、部屋には、沈黙があった。
佐喜は、膝に重ねたおのが両手へ、じっと眸子を落していたが、やがて、顔をあげると、
「参ります」
と、承諾の一言を、宗因に与えた。
「忝のう存じます！　門下一同、この上の悦びはござりませぬ」
宗因は、満面に喜色をあふらせて、礼をのべた。

階下の茶の間では――。
「師匠、はじめて、居候のおかんばせを拝んだが、佳い女だねえ。まさか、吉原の花魁を足抜きさせて、かくまっているんじゃないだろうね」
湯屋のおやじが、云った。
「一年三百六十五日、女の裸を見ているくせに、玄人と素人の見わけがつかないとは、やれ、な

さけない湯屋だのう」
　鳶の親方が首を振った。
「湯屋が、女の素っ裸に、いちいち、生唾をのんだり舌なめずりしていちゃ、商売にならないからね、わたしゃ、婆さんの裸も娘の裸もひとしなみに八文のねうちに眺めているだけさね」
「左様その通り――。一糸まとわぬ生れたまんまなんざ、色気がねえやな。ちら、と緋縮緬から、脛がこぼれるから、野郎どもは、ぞくぞくとなって、むらむらと来るのさ。見ぬようにしても目に立つ緋縮緬、というやつだ」
「そういえば、むこう横丁の小間物屋のお内儀の、初湯に出かける姿は、目の毒だねえ。いくら、白粉を安く仕入れているからといって、内股まで、塗りかけて、外八文字に歩くから、股の奥まで見えちまう」
「それアいかんな。脛（萩）と腿（桃）が一緒に見えてしまっちゃ、気（季）が合わねえ」
「その内股まで、覗いているお前さんの方が、よっぽど、だらしがないやね。見とれて、うっかり、ひっくりけえりでもしたら……」
「お内儀が、振りかえって、あら親方、あたしゃ、また、てっきり久米の仙人か、と思いましたよ」
　どっと笑いの渦が起った時、佐喜が降りて来て、
「談亭殿――」
　と、呼んだ。
　町内の衆は、急に、しんとなって、佐喜を見まもった。
「お願いがあります」

「はい。ただ今参上――」
佐喜について、二階に上った談亭は、虚無僧が丸坊主であるのをみとめて、
「成程、これア、天蓋孤独で脱げぬが道理――」
と、呟いた。
「談亭殿、わたくしは、この御仁と一緒に参ります」
佐喜は、云った。
「藪から棒に、そう申されても、これア、預け主の許しがないと、はいどうぞ、とは申し上げかねますな」
「眠狂四郎殿には、置手紙をいたします」
「預かったてまえは、貴女が出て行きなさるのを、指をくわえて、眺めているわけで――？」
「師匠、わたくしは、さる一月二十七日、鶴岡八幡宮の舞殿で割腹自決を遂げた沼津千阿弥の門弟の一人で宗因と申します」
宗因は、名のった。
「その坊主頭を見て、およそは、察していたんだが……」
「沼津先生を喪ったわれら門下は、盟主を仰がねばなりませぬ。この佐喜様は、やがて、沼津先生の忘れ形見をお産みになります。そのお子が男児ならば、われら門下の盟主に――」
「そのお気持は、わからぬわけじゃありませんが、盟主にされた嬰児が、お手前がたに命令を下すようになるには、ずっとずっと先の日になりますよ」
「われわれは、十年後、二十年後の日本を、われわれの手で変えてみせる覚悟でござれば――」
「気の遠くなるようなお話だ」

「師匠、何卒、お手前の俠気をもって……」

「俠気があれば、講釈師などにならずに、博徒の大親分になっているところだが……、こっちは、せいぜい、博覧強記というところで、張扇を鳴らしているんでね。ついでに、云わせて頂けりゃ、ご同朋の割腹は、狂気の沙汰、と市井ではもっぱらの噂ですよ」

「断じて、狂気の沙汰ではござらぬ！　沼津先生は、天下大改革の烽火をうちあげられたのでござる。……徳川幕府の制度、法令、一切の物を破壊せしめ、才幹ある者は、たとえ、町人、農民であっても、政治の要職に就ける世の中に、できぬことはない、と確信され、まず、おのが生命をすてて、天下を聳動せしめ……」

宗因の声音が、思わず知らず、激しく高くなるのを、談亭は、あわてて、手を挙げて、制した。

「壁に耳あり、障子に目あり、ここは、野中の一軒じゃありませんよ。どだい、講釈師風情に、経綸を説きなすっても、糠に釘——。さて、どうしたものかのう」

談亭は、腕を拱いて、首をひねった。

三

——袋小路だな。

眠狂四郎は、その時刻、青山の沼津家の庭に、再び、立っていた。

主人を失った庭にも、春がおとずれていた。

狂四郎のすぐ目の前に、山茱萸が、葉に先立って、ごく細かい黄色の花を、咲かせていた。

美しい、というより、禅味をおび、俳味がかったこの気品のある花は、庭に、ただ一本あることによって、早春の静かさを感じさせてくれる。

春を告げるこの花へ、眼眸を当て乍ら、狂四郎は、袋小路に入ったおのれを感じていた。

珍しく、この男が、動きのとれない焦躁にかられていた。

鶴岡八幡宮境内の赤橋上に於て、沼津千阿弥と知行合一の問答を交わして以来、起る異変に対して、後手に後手にとまわされた狂四郎であった。

後手にまわるまいと、自ら進んで足をはこんだ若年寄の屋敷に於ても、得たのは、漠とした臆測だけであった。

少年の日から、おのれ一個の力で、降りかかる火の粉を払うべき宿運を与えられて生きて来たこの男が、三十余年の半生で、得たのは、その一歩を右するか左にするか、わずか一尺の幅をちがえただけで、行き着くところは千里の差がある、という運命の終始に関する残酷が現実というものである、ということであった。

薄暮に臨んで頤を支えて坐す平穏な日々を、願う心などみじんもない狂四郎は、何かの出来事に出会うた瞬間、おのれの予感に重い比重をかけて来た。

そして、えらんだのは、常に、おのが運命の途上、大きな重荷になる方であった。

そして、危機が去る毎におそって来る云おうようのない倦怠と疲労の中に、狂四郎は、虚無というものを看た。その時、奇妙なことに、生きている実在感がわいた。

敵に対してただの一度も背中を向けなかったのは、危亡を避け得る立場に置かれていなかったためもあるが、生きている実在感をもとめる意識が働いていた、といえる。

しかし——。

このたびのように、濃霧の中へ誘い込まれたあんばいとなり、気づいてみると袋小路に立たされている、という状況は、この男の性分に合わなかった。

どの方角かに突破口があるに相違ないが、手さぐり状態に置かれているもどかしさは、やりきれなかった。

再び沼津家を訪れたのも、何かの手がかりを得たいためであった。

「どこに、出口があるのか？」

独語して、頭をまわした狂四郎は、いつの間にか、母屋(おもや)の縁側に、一人の男が立っているのを見出した。

巨漢であった。風貌も魁偉(かいい)であった。

こちらを、見据える双眼の光の鋭さが、敵として現われたのを示していた。

――この男が、おれに出口を教えてくれるか？

望みになりそうもない望みを、かけてみた。

巨漢は、ゆっくりと、庭へ降りて来た。

十歩あまりをへだてて立ち停ると、

「眠狂四郎氏(うじ)ですな？」

と、たしかめた。

「左様――」

「身共は、刺客でござる。但し、立ち合ってみて、身共が、貴殿に及ばぬ、と知ったならば、刀を引き申す。無駄死はいたしたくありませんからな」

「わたしを斬る代金はいくらか、うかがっておこう」

「二十両でござる」

「安いな」

「いや、身共にとっては、有難い大金です」
——同じ刺客でも、死神九郎太とは、人間の出来が、だいぶちがうようだ。
「百両とふっかけても、よかったことだ」
「身共が及ばぬ、と知れば、さっさと刀を引く、と虫のいい条件をつけ申したゆえ、二十両で結構なのです。……身共は、志村源八郎と申す。三代前からの浪人者でござる」
そう名のって、巨漢は、あらためて、一礼した。すがすがしい言辞挙措をみせるこの男は、どうやら、狂四郎に、袋小路からの突破口を教えてくれる者ではなさそうであった。
「参る！」
志村源八郎は、大小二刀を鞘走らせた。しかし、その二刀を構えにせず、だらりと下げて、
「いざ！」
と、呼んだ。さきに狂四郎に構えさせておいて、おもむろにおのれの構えをみせる、というのであった。
狂四郎は、一瞥しただけで、
——及ばぬのは、おれの方らしい。
と、さとった。
数年前、狂四郎は、子竜平山行蔵の秘蔵弟子と真剣試合をした際、おのれが敗れる、とはっきりさとったことがある。
「正しい剣」を敵にしたのは、その時以来であった。
正しい剣——これは、口にするは易く、行うは難い。口にすれば、華法に流れるだけである。
黙々として、実戦に活用する剣の業の鍛錬にいそしみ、日常坐臥すべての行動を「常在戦場」

の心得で、励行した兵法者が、当世、平山行蔵以外にいるとは、知らなかった。
狂四郎は、志村源八郎の静止相を視て、平山行蔵のほかに、もう一人、ここにいたのを知らされた。
正剣の前に、おのれのそれが、いかに邪剣であるか、狂四郎は、みとめるにやぶさかではない。
「いざ！」
再度促されて、狂四郎は、やおら、無想正宗を抜くと、地摺（じず）り下段にとった。
志村源八郎は、その構えを視て、
「貴殿の円月殺法を破る工夫が、身共にはあり申す」
「………………」
「その剣が、円月を描きおわるまでに、よく堪えた対手（あいて）は、これまでに、いなかった由、きき及び申すが、身共は、貴殿が中段まで挙げた時、破り申すぞ」
はっきりと、そう予告した。
正剣を使う者の自信といえた。
狂四郎は、沈黙を守ったなりで、動かぬ。
源八郎は、おもむろに、自身の構えをみせた。
まず――。
右手の大刀を左手に、左手の脇差を右手に、さっと持ち換えると、左腕を左方へ水平にのばして、大刀をその一線上の宙に横たえ、脇差の方を頭上に、大上段にかざした。
――三心刀か。
と、狂四郎は、看た。

尋常の二刀流は、長剣を右手に、短剣を左手に持つ。これを逆に持って、業前を発揮するのを、いつ頃、誰が名づけたか、三心刀という。

三心、とは、もともと仏教から、出ている。一には至誠心、二には深心、三には回向発願心――これである。

至誠心とは、真実の心。真実の心とは、未来に三悪道に堕ちることをおそれ、浄土へ参って、疾く成仏せんと願って、念仏するをいう。深心とは、深く本願を信ずる心。何ひとつ取柄のない悪人といえども、阿弥陀仏は慈悲を加える――これを本願といい、その本願を信じる心を、信心とも深心ともいう。回向発願心とは、真実に往生を願って疑うことなく、日々となえる念仏功徳を以て、必ず往生せしめ給え、と願う心をいう。

この三心のことは、円光大師の〝選択本願念仏〟に、観無量寿経を引いて、具に述べられている。

三心刀は、その教理から、何者かが剣の体の用として生んだのである。

贋隠遁者

一

……風が、落ちていた。

春光のみが、うららかにかがやく、全くの静寂の庭園の一隅で、対峙する二個の姿は、いっさいの生存感覚から、解放されていた。

眠光のみを合わせた眠狂四郎と志村源八郎は、真空の世界に身を置いている、といえた。
双方の構えは、構えた刹那から、微動だにせず、およそ半刻が過ぎていたが、移行させたその時間は、真空の世界では、無意味なものでしかなかった。
もとより――。
不動の姿勢とは別に、その心中に於ては、体内で絶え間なく心臓が働き、肺が働き、胃も腸も動いているごとく、敵に対する闘いの意志が、思慮を生んで、冷たく冴えた活動をつづけていた。
狂四郎が、大小二刀を逆に持った源八郎の構えを看て、
――三心刀か。
と合点したのは、その清気が、正剣を会得した者のみの湛えるものだったからである。
但し、至誠心・深心・回向発願心を合わせた三心刀なるものを、観るのは、いまがはじめてであった。
およそ、秘法というものは、表現し難く、三心刀なる業も、言葉にすれば、むしろそらぞらしく、理屈に流れるきらいがある。
その三心を、剣術の体の用として、真実を旨とするのを、三心刀といい、真実とは何かといえば、右にて敵の刀を払うとか、左にて斬ろうとか、そのような念を全く起さぬことをいう、などと述べたところで、きわめて初心の教えに過ぎない。
狂四郎に、はっきりと判るのは、源八郎の右手に握られて頭上にかざされた脇差が、敵を斬る白刃ではない、ということのみであった。陽剣としてかざす小刀が己が身を守るものであり、陰剣として左方へまっすぐ水平にさしのべた大刀が、一筋に往生を願うがごとく、一撃を放つものであるところに、三心刀の奥旨があるに相違ない。

——長剣の方が、いかなる一撃を放って来るか？

地摺り下段にとったまま、円月殺法を起す汐合（しおあい）にいたらぬ狂四郎は、心中に於て、測りつづけている。

さまざまの二刀の業が、脳裡（のうり）に、湧（わ）いては、消えていた。

——そうか！

一瞬、狂四郎は、さとった。

——この長剣は、無拍子を生むに相違ない！

無拍子とは、その名のごとく、敵と太刀を撃ち合せぬ極意である。拍子というのは、和名鈔（わみょうしょう）に云う、笏拍子（しゃくびょうし）を指す。笏の板を打ち合せて、節を出す。

剣の無拍子は、敵と撃ち合うことなく、電光のごとく、音もなく勝つ刀路を示している。

源八郎が左方水平に横たえた大刀が、無拍子を生む、と看破した狂四郎は、それが薙（な）いだり、逆斬ったり、右旋左転する業を放って来るのではなく、ひたすら、突きの一手を以て襲って来る、と知った。

——よかろう。無拍子の突きに対して、こちらも、円月殺法の突きで返す。

狂四郎は、無想正宗の切先を、地面から、目に見えぬほどのゆるやかさで、宙に描く円の軌道にのせた。

二尺三寸の氷刃が、きらっ、きらっ、と煌（かがや）き乍（なが）ら、すこしずつ、上って来た。

源八郎のみひらいた双眼が炬（おき）となって燃え、狂四郎の切長な眸子（ひとみ）は、冷たく細く一文字に翳深い。

初心の者が、この眼光を視比べただけでも、おのずから、両者の剣の認識が異質であることが、

明白である。
無想正宗が宙を截(き)って、円を描くにつれて、源八郎の長剣もまた、ほんのわずかずつ、切先を狂四郎の方へ移行させた。
無想正宗の刀身が、さしのべた双腕とともに、水平の線上に上った——その瞬間であった。
「ええいっ！」
源八郎は、満身の猛気を炸裂(さくれつ)させ、寸毫(すんごう)の狂いもなく、一条の長い閃光(せんこう)に、鍛えぬいた三心刀の奥義を、発揮した。
その必殺の力点を砕くことは、狂四郎といえども、不可能であった。
凄(すさ)まじいその突きを、避けも躱(かわ)しもせず、狂四郎もまた、無想正宗に、目にもとまらぬ突きを生ませた。

二

結果は、次の通りであった。
源八郎の長剣は、狂四郎の無想正宗の鍔(つば)を貫いて、黒羽二重の袖へ縫い込ませた。そして、無想正宗の方は、源八郎の上唇わきから頬を刺し通して、切先を耳朶(じだ)までとどかせていた。
その時、距離をへだてて、声がかかった。
「勝負、それまでじゃのう。双方、引かれるがよろしかろう」
その仲裁の言葉に応じて、狂四郎と源八郎が同時に、跳び退った。
「眠狂四郎氏、身共の負けでござる」
源八郎は、頬から血汐をしたたらせ乍ら、意外にさわやかな声音で、云った。

「身共は、敵わぬとさとれば、いさぎよくひき下がると、やとい主に条件をつけ申したが、しかし、敗れてみて、急に欲が出て来ましたぞ。もう一度、挑んで、円月殺法を破ってみたい、という欲が――」
「所望ならば、いつでも……」
狂四郎は、こたえた。
「では、後日」
源八郎は、一揖して、踵をまわした。
狂四郎は、声をかけて来た者へ、視線を向けた。
泉水に架けられた石の太鼓橋の上に、その者は、佇立していた。
年配は、すでに還暦を越えているらしい。無腰で、筒袖に軽衫をはき、釣竿を肩にしていた。
風貌は、ごく尋常で、野羊鬚をたくわえていた。
のこのこと、近づいて来ると、
「無住屋敷で、こっそり、晩のおかず盗りをしに来たところ、思いがけなく、斬り合いの醍醐味をあじわわせて頂いた。いや、なんとも、凄まじい限りであった。お礼を申し上げる」
気軽く、話しかけて来た。
狂四郎は、無言で、ふところ手になると、歩き出そうとした。
「失礼乍ら、わしの家は、すぐ近くでな、お礼に、粗茶でも一服、進ぜたいが……」
老人は、誘った。
「見知らぬ御仁と談笑するのは、性分に合わぬ、とお思い頂こう」
狂四郎が、にべもなくことわっておいて、遠ざかろうとすると、老人は、すかさず、

「沼津千阿弥のことに関して、語り合おう、と申しても、おことわりかな？」
と、背中へ投げて来た。
「………………」
狂四郎は、足を停めて、頭をまわした。
老人の顔には、意味ありげな微笑があった。

『出万死而遇一生』
閑静な雑木林にかこまれて、いかにも隠者の住居にふさわしい一屋の、柿葺き（こけらぶき）の土庇（つちびさし）のふかい玄関にかかげられた舟板の額には、その七文字が刻まれてあった。
——万死に出でて、一生に遇う（あ）、か。
狂四郎は、いささかの不審をおぼえた。
ふつう、こういう隠宅には、「雅心亭」とか「無明庵（あん）」とか、俗世を避けている住居にふさわしい扁額（へんがく）が、かかげられているものである。
死、という不吉な文字などは、使わぬのがならいである。
この一文は、『貞観政要一』にみえている。
「太宗曰く（いわ）、玄齢昔我に従い天下を定む、備に（つぶさ）艱苦（かんく）を嘗（な）む、万死を出でて而して（しこう）一生に遇う」
風雅な隠宅にかかげるには、かなりなまぐさい文句である。
——どういうのか？
狂四郎は、ちらと、老人の横顔を、視やった。
老人は、その視線を感じるでもない表情で、

「只今、戻った」

と、奥へ声をかけた。

出迎えたのは、まだ十七八歳の娘であった。見目麗しい、という形容のあてはまる面立ちであったが、気の毒に、一歩毎に上半身を大きく右へ傾ける不具者であった。

「おもどりなされませ」

両手をつかえて、狂四郎には、「おいでなされませ」と挨拶したが、楚々とした風情に、いちまつの暗い翳をひいているのは、不具者であるせいであろうか。

「小銀、この御仁を、茶室でおもてなしいたせ」

老人は、命じた。

茶室には、それぞれ好みというものがある。古田織部好み、小堀遠州好み、織田有楽好み、細川三斎好みなど——。

——これは、有楽好み、というのか？

紫竹詰打ちの窓や、ごくせまい躙口や、点前畳向うの火頭口のある板壁や、床脇の三角板などを、眺めやって、狂四郎は、この茶室が大層古いのを、看てとった。

おそらく、寛永か元和か、その頃に建てられたものに相違あるまい。

床の間には、

『義』

の一字の朱拓がかけてあり、その下に、縄文式甕形の土器が、傾いて、据えられてあった。

湯は沸いて、松風をつたえている。

藤蔓をからめた竹棰を栃木板に張った化粧屋根裏の下で、しずかに、点前をみせたのは、ある

じの老人ではなく、小銀と呼ばれた不具の娘であった。

その作法ぶりは、一分の隙もなく見事であった。

「どうぞ——」

膝の前に置かれた黒筒茶碗を、把りあげて、喫した狂四郎は、それを返してから、

「ここには、いつ頃から、おすまいか？」

と、訊ねた。

「来月で、恰度まる三年に相成りまする」

小銀は、こたえた。

「ずっと永く住まわれていたわけではないのか？」

「はい——」

「ここに住みつかれる前は——？」

その問いに対して、娘がこたえようとした時、老人が入って来た。

三

娘をさがらせた老人は、対坐して、狂四郎を、じっと見据えると、

「さしでがましいことを申すが、お手前の面相は、その若さにも拘らず、ちと、暗すぎる」

と、云った。

「わたしの面の暗さなど、ご懸念無用だ。……ご老人、沼津千阿弥のことに関して、語り合おうと申されたが、うかがおう」

「お手前は、沼津千阿弥の割腹について、どう考えられるな？」

「不可解、と申すよりほかはない」
「たとえば――」
老人は、微笑し乍ら、
「沼津千阿弥が、あと一年か二年の寿命であったとしたならば、納得されるかな？」
「あの男に、不治の病痾があった、といわれるのか？」
「千阿弥の父親には、骨が徐々にぼろぼろになる不思議な病痾があり、三十を過ぎたばかりで逝き申したが、千阿弥自身にも、父親と同じ症状があらわれ申した」
「…………」
「千阿弥は、それを知って、坐して死を待つよりも、天下を聳動せしめる諫死の道をえらんだのでござるよ」
「…………」
「わしは、医師ではござらぬが、若い頃、いささか西洋医術を学び申してな、沼津父子を診て居ったのでござる」
沼津千阿弥が、あと一二年の生命であったとすれば、割腹の理由として、これぐらい明白なものはない。
狂四郎は、半ば疑いをのこし乍ら、老人の視線を、受けとめた。
「いかがかな？」
「貴方の云われるのが真実ならば、沼津の死を理解に苦しんだ当方が、道化であったことだが……。ご老人、なぜ、わたしと、沼津のことに関して、語り合おうと、誘われた？」
「お手前が、眠狂四郎という御仁であり、沼津千阿弥の割腹に立ち合ったために、隠密どもに、

つけ狙われて居ることを存じて居るのでな」

「隠遁者としては、俗世間のことに、いささかくわしすぎるようだ。……ご老人、貴方もまた、我欲の旺盛な一人であろうか？」

「ほう、我欲のう……、左様、我欲とまで申さずとも、俗念は熾んであることは、みとめずばなるまい」

「人の世の無常を知って、ここで閑雅な日常を送って居られるわけではないようだ」

「いかにも、その通り――。このくらしは、ただ、隠遁者に見せかけているだけのこと。……どうであろうな、眠殿、この爺さんの相談相手になって頂けまいか？」

「…………」

「申しおくれた。わしは、佐賀闇斎と申す。さて、どうかな？」

「貴方が、わたしの素姓を知って居り、乗りたくもない船に乗せられていることにまでくわしいのは、仲間か、手下を擁していると、推測できる。そういう御仁が、どうして相談相手を必要とするのか？」

「ははは……、野に人材が稀であることとは、お手前の方で、先刻ご承知であろう。命令のままに動く者は居っても、軍師役をつとめる御仁は、池中から針をさがし出すようなものじゃて」

「相談といわれるのは、どのような内容か、まず、それをお教え頂こう」

「それは、ちとせわしい求め様じゃな。味方になる、という確約を得て、それから、ゆるゆる、と打ち明け申そうか」

「…………」

「とりあえず、今日は、この茶室にお泊り下さらぬかな？」

「……………」
「お手前は、べつにさだまった住居をお持ちではあるまい。二日や三日、当家に逗留されても、さしつかえはござるまい」
「ご当家で二夜三夜をすごすのは、味方になると確約したことには相成るまいが……」
そうこたえる狂四郎を、佐賀闇斎と名乗る老人は、じっと見据えていたが、
「小銀と申すあの娘に、お手前の伽を申しつける」
と、云った。
「そういう籠絡条件は、これまで、いくたびも申し出られたたし、遠慮なく据膳もくらって居る男だが……」
狂四郎は、あまりにありふれた老人の言葉を、冷笑した。
すると、闇斎は、にやにやした。
「小銀は、ただの娘ではござらぬよ。男に奉仕するための女として、幼い頃から、もっぱら、そのようなからだに仕上げるべく、わしが、丹精した娘でござる。もとより、まだ未通女じゃが、ひとたび抱けば、お手前を羽化登仙の恍惚境にさそい込み申そうよ。決して、誇張ではない。抱いてみられるがよい」
「……………」
「わしの申すことが、いつわりであったならば、事の終った直後、さっさと、当家を立ち去られても、一向に異存はない」
「……………」
「ためされるがよい」

闇斎は、立って、茶室を出て行った。

ばかげている話に思われたが、腕を組んだ狂四郎は、すぐに座を起とうとしなかった。

——隣邦に於ては、支那帝国の創始者である黄帝以来、房術をきわめ、これはと目をつけた幼女をえらんで、十年二十年の歳月をかけて、男子をよろこばせるからだにつくりあげる、という話がいくらでもころがっているらしいが……？

脳裡を、その想念がかすめたため、狂四郎は、もう一度、小銀という娘を観たい意嚮(いこう)を持ったのである。

四半刻を置いて、小銀が入って来た。

「夕餉(ゆうげ)に、ご所望の品がございますれば——」

そう申し出る小銀を、冷たく正視した狂四郎は、

——さて？

と、迷った。

小銀を、本邦の娘ではなく、唐土生れかも知れぬ、と疑って、その風貌容子から、看とどけようとしたのだが、どうもはっきりと判別し難かった。

こちらは、唐土の娘を、まだ眺めたことがないのであった。

一瞥した限りでは、顔の造作に異邦の血を匂わせる点は、どこにもなかった。しいて疑うとすれば、双眸(そうぼう)の切長な美しさが、一種の妖(あや)しさをふくんでいる印象であったが、これとても、公卿(くげ)の息女などに、見出されなくはない。

「……お申しつけ下さいますれば、できるだけ、叶(かな)えてさしあげたく存じます」

小銀は、狂四郎の冷やかな視線を、怯(お)じずに受けとめていた。

「そなたが、生れた国の惣菜（そうざい）をたのもうか」
「はい」
小銀が、うなずくや、狂四郎は、すかさず、
「唐土には、五万種類の料理がある、ときいたおぼえがある」
と、云った。
小銀は、一瞬、大きな眸子をみひらいたが、
「わたくしは、佐賀に生れて居ります」
と、こたえた。
「佐賀ではなく、海の彼方（かなた）であろう」
「いいえ、佐賀でございます」
「かくさずともよい。べつに、素姓をあばいて、どうしようというのではない。正直に、こたえてもらおう」
「わたくしの生れは、佐賀でございます」
小銀の態度は、きっぱりとしたものであった。
「佐賀で、そのからだをつくられたというのか」
「…………」
小銀の表情は、もう動かなかった。
「闇斎殿は、そなたのからだを、男をして羽化登仙の恍惚境にさそい入れるように、つくりあげてある、と云われた」
「…………」

「ためす前に、そなたの口から、あらかじめ、どのような丹精のしかたをされたか、きいておこう」
狂四郎の眼光は、刃物のように鋭利なものとなって、小銀の眸子を刺した。

太閤(たいこう)遺産

一

茶室の隅ずみが、昏(く)れなずむ時刻になっていた。
眠狂四郎は、杉桁椽(すぎげたえん)に身を移して、有楽窓(うらく)に凭(よ)りかかり、腕を組んでいた。
洞床(ほらどこ)のある三畳台目席には、いっぱいに臥牀(ふしど)が延べられてあった。
小銀という娘は、狂四郎から、男をして羽化登仙の恍惚境にさそい入れるようなからだを、どのようにしてつくられたか、と訊(たず)ねられたが、それにこたえる代りに、黙って、夜具をはこんで来て、そこへ敷いておいて、出て行ったのであった。
一刻——それ以上の時間が、経っていた。
狂四郎は、小銀が戻って来ぬまま、しばらくの間は、惘然(もうぜん)としていたが、そのうち、ふっと、
——娘の片脚は、わざと不具にされたのではないのか？
と思い、それをきっかけにして、むかし、つれづれに読み散らした淫書の文句を、脳裡によみがえらせた。
蚕纏綿(さんてんめん)（女仰臥、両手向上抱男項、女両脚交男背上）

竜宛転（女仰臥屈両脚、男跪女股内）
魚比目（女側屈両脚、以一脚置男上）
鳶同心（女仰臥展其足、男騎女伏臍上）
翡翠交（女仰臥卒脚、男狐蹲踞両脚、置一脚於男上）
鴛鴦合（令女側臥捧両脚、安男股上、男於女背後給女下脚之上）
翻空蝶（男仰臥展両足、女坐男上正面）
玄蟬附（令女伏臥而展足、男居股内屈其足）
白虎騰（令女子伏面跪脚、男跪女後、両手抱女腰）

その他、丹穴鳳遊とか吟猿抱樹とか、猫鼠同穴とか九秋句とか、さまざまな男女交合の姿態が、狂四郎の脳裡に、うかんだり消えたりした。

退屈しのぎとしては、いわゆる四十八手を思い泛べるのが、手頃の時間つぶしになった。

「破瓜か」

狂四郎は、なんとなく、呟いた。

とたんに、有楽窓の外で、打てばひびくように、

「いずれ、三悪道を辿る無頼者が、破瓜の妙齢をくらう、とはおこがましい」

その声が、きこえた。

そこに、何者かがひそんでいることに、狂四郎は、気がついていなかった。全く気配は、なかったのである。

狂四郎は、べつに、誰何しようとはせず、

「春の宵だ。海棠色の柔肌を拭って、新紅をみたい、と願うのは、男ならば、誰しものぞむとこ

ろではないか」
と、云った。
「黙れ！　鼎（女陰）は、神丹（精神）を鍛錬する器具だ。真を温め、気を養う炉だ。まして、当年いまだ破瓜せざる清俊潔白の真鼎を、破る資格など、おのれごとき無頼者にあろうか！」
対手は、激情を抑えかねた語気で、責めて来た。
「お主、惚れているようだな、あの小銀という娘に――」
「小銀殿は、わしの宝玉だ」
「抱きたいか？」
「……お！」
「抱くことを許されぬ立場に置かれている男らしい。気の毒な――」
「うぬが……、うぬっ、おのれを知って、身を引け、眠狂四郎！」
「わたしが、小銀を所望したのではない。闇斎老が、わたしに呉れた」
「たとえ、そうであっても、貴様は、身を引くべきだ」
「闇斎老が、なぜわたしを味方につけたがるのか――その理由が判明すれば、小銀には一指もふれぬ、と約束しよう」
「…………」
「お主が、教えるか？」
「……う、う――」
窓の外にいる者は、ひくく呻いた。
その時、廊下に、衣ずれの音がした。

入って来た小銀は、白羽二重の寝巻をまとうていた。
その純白の絹に、柔肌が競うて、無瑕の臈たけた美しさを、宵の薄闇の中に浮きあがらせて、思わず、狂四郎に、息をのませた。

二

小銀は、臥牀の裾に坐ったが、いつまで経っても、狂四郎が、杉桁椽から、こちらの三畳へ移って来ないので、顔をあげて、視かえした。
狂四郎は、口をひらいた。
「そなたは、いま、生贄の覚悟でいるのか？」
「いえ――」
小銀は、ためらわず、かぶりを振った。
「女子は、いずれは、破身の時を迎えなければなりませぬ。いまが、その時と思いきめて居ります」
「破身は、終世の良人とさだめた男によって為されるものだが……」
「貴方様を、その御仁と思いきめます」
「抱くとしても、ただの一度だけだ。わたしは、女房などを持つ料簡はみじんもない」
「わたくしも、他の男へ嫁ぐ気持は毛頭ありませぬ」
「仕込まれたものだ。闇斎老に操られるまま、その木偶のからだを、以後つぎつぎと、男どもに弄ばれることになろう」
狂四郎は、やおら立つと、臥牀に近づいた。

掛具を足ではねのけて、

「ここへ――」

と命じた。

小銀は、ためらわずに、仰臥した。

「さて、瓜を破るに、どの体位でやろうか」

狂四郎は、容赦なく、寝巻の裾をはぐった。

水色の腰巻をまとうていた。

その端をつかんで、するすると捲(まく)りあげ乍ら、狂四郎は、わざと声をあげて、

「竜宛転でゆくか、翡翠交でゆくか、それとも偃蓋松(えんがいしょう)でやってのけるか」

と、云った。

下肢が剥(む)かれるにつれて、その奥から、微(かす)かな芳香がただよい出て来た。

このような稚(おさな)い肌を、清癯衣(せいくころも)を重しとする、というのであろう。

狂四郎の冷やかな視線が落ちたところに、蛾(が)が匐(は)ったように、薄い恥毛が陰翳(いんえい)を映えさせていた。その蔭(かげ)に、梔子(くちなし)のつぼみのように、幽香を含んで、ひっそりと花弁を閉じている秘部があった。

男の一指が、ためらわずに、それへのばされた。

「…………」

狂四郎の眉宇(びう)が、動いた。

小銀は、盥浴(かんよく)の後で、薔薇(そうび)を数匙(すうひ)掬(く)みとって、その秘部にすり込んだのであろうか。

花弁の内は、濡れていて、さらに一層、ふくいくと匂うた。

指頭が、そこにふれた瞬間、狂四郎が後日にまでその人差指に残した触覚では、花弁がすばやくひらいて、咂い容れて、再びぴたっと閉じたのである。

支那の淫書では、そこを紫芝峰、という。関は常には閉じて開かず、男子の力によってはじめて開き、気を泄すとともに、婬津を溢らせる。もとより、その刹那には、女は、顔を紅潮させ、声を顫わせ、気遠くなるほど官能の波のうねりに乗っている。

ところが——。

小銀は、無表情のまま、宛然虫取り花のように、花弁を開いて、狂四郎の指を吸い込むと、再び閉じたのである。

のみならず、紫芝峰は、かたく指の根を締めて、抽くことをこばんだ。

——どういうのだ？

闇斎の言葉がいつわりでなかったのを知りつつ、狂四郎は、万人に一人もいようと思われぬ奇蹟の秘部をそなえた娘の寝顔を、凝視した。

有楽窓を貫いて、一本の手裏剣が、飛来したのは、その瞬間であった。

狂四郎は、その瞬間を待っていた。

小銀の股間から抜きとった右手を刀にして、手裏剣を搏ち落した。

手裏剣には、結び文がついていた。

すばやく、披いてみると、

「元和元年五月八日、大坂城陥落せし際、右大臣殿（豊臣秀頼）、火中にて自害に及び候儀、真っ赤な嘘にて、ひそかに、城を脱出し、船にて薩摩に遁れしこと、真実也。これよりさき、冬の陣の終れる慶長十九年十二月下旬、大坂城内より、太閤遺産のうち、慶長大判小判、お

よそ百万両ぶん、地下道より、何処かへ運び出されたり。すなわち、右大臣殿には、落城後、薩摩に身をひそめて、再挙の秋をはかられたる模様なるも、ついに、その秋を得ず、莫大なる軍資金は、地下にねむりて、今日に及び居り候。佐賀闇斎は、この軍資金を手中にせんと狙う者にて、遺策なきを期し、眠狂四郎を味方につけんと欲するもの也」

三

——そうか。やはり、闇斎も、黄金伝説に、とり憑かれて、躍る一人だったのか。

狂四郎は、結び文を、袂に入れ乍ら、袋小路から一歩脱け出た自分を、感じた。

大坂城が、陥落した際、どれくらいの太閤遺産が残されていたか、いまとなっては、臆測するしか、すべはない。

家康は、大坂役の直後、城内から奪った金銀財宝を、荷駄三百頭分、駿府に運んだ、という。これは、たしかな事実である。

家康が、豊臣秀頼を滅ぼしたのは、太閤遺産を手に入れる目的だったことは、まぎれもない。

太閤遺産がいかに莫大なものであったか。それは、遺児秀頼が、大坂役前十数年にわたって、畿内四方のあらゆる神社仏閣を、建立し、再建し、修築したことでも、想像がつく。

生母淀君が、秀頼の幸運を祈願して、畿内のありとあらゆる場所に、社寺を造営したものであろうが、それは、いくら費用を投じても、城内にたくわえた軍資金が、ビクともせぬだけ、莫大であったことを、示している。

慶長五年に、大坂四天王寺及び醍醐三宝院金堂を造営したのをかわきりに、河内叡福寺に寺領

を寄附し、河内誉田八幡宮を再興し、東寺南大門、横川の中堂、三条曇華院、摂津勝尾寺、石山寺及び東寺金堂の造営。三宝院仁王門、杵築社、多田院本堂、中堂、御影堂、そして相国寺法堂の建立。南禅寺法堂、北野経堂、石清水八幡宮祠、生国魂神社、上醍醐御影堂、五大堂、如意輪堂、及び楼門等の造営もしくは修築。さらに、淀川はじめ各河川に橋を架けたりした挙句、慶長十七年には、それが生命取りとなった東山方広寺に大仏を再建した。

この大仏再建の資金には、秀吉が遺した大法馬金が改鋳されて、あてられた。大仏堂には、百八十本の柱が立てられたが、その一本の費用は銀子十六貫目であった。

『当代記』は、

「太閤の御貯えの金銀、この時払底あるべし」

と記しているし、『日本西教史』も、

「家康は、秀頼をして、宮殿、堂宇の建築、華美なる饗宴、大仏像の修理等によりて、つとめてその資材を浪費せしめ、軍資の匱乏を醸成し、以て後日挙兵の心髄を除かんとした」

と、書いている。

しかし、大坂城も、淀君はじめ重臣らは、それほど間抜けではなかった。

神社仏閣の造営再建に、どれほど巨費を投じても、秀吉が別にたくわえた軍資金に手をつけるには及ばなかったからである。

天文学的な数字であったかも知れない。

秀頼が大仏再建のために溶かした法馬すなわち分銅は、俗に千枚吹きと称され、大判九百六十枚を得た、といわれている。その法馬が、大坂城内には、どれくらい秘蔵されてあったか。

家康は、大坂落城の際、関東方に没収したのは黄金二万八千六十枚、銀二万四千枚、と公表し

たが、実はその数倍を得たに相違なかった。

曽て――天正十七年五月、聚楽第で、大茶湯を催した時、秀吉は、集うた公卿一族諸将に、金銀合計三十六万五千両を、分け与えて、世間をあきれかえらせたものであった。

その日、秀吉は、大政所には黄金三千両と銀一万両を、北政所には黄金一万両を、前田利家には銀一万両を、家康には黄金二百枚と銀一千枚を贈った。

この一事から推し測っても、秀吉が秀頼に遺した軍資金が、いかに莫大であったか、わかる。

そのうちの百万両が、大坂城から運び出されて、どこかの地下に隠匿されている、という。

事実とすれば、餓狼が、寄ってたかるのは、当然である。

――ようやく、判って来たな。

狂四郎は、薄ら笑った。

――若年寄小笠原相模守も、お目付下条主膳も、死神九郎太も、捨てかまりの弥之助も、阿蘭陀屋嘉兵衛も、沼津千阿弥の門下の坊主どもも、そして、この草庵のあるじ佐賀闇斎も、その百万両の太閤遺金を狙って、躍起になっている、というわけだ。

――ついでに、この眠狂四郎も、餓狼の一匹として、この争奪戦に加わる。いや、もうすでに、首を突っ込んでいる。

狂四郎が、立ち上ると、小銀は、はじめて目蓋をひらいた。まだ、下肢をあらわにされたまま、かくそうともしていなかった。

「わたくしを、このままにして、お立ち去りになるのは、あまりにむごい仕打ちでございます」

「窓の外に、ひそむ者がいた」

「…………」

「闇斎老がわたしを味方にしようとする理由を教えたなら、そなたを犯さぬ、と約束した」
「…………」
「そなたを宝玉と想うている男だ。……約束したからには、守らねばなるまい」
小銀は、それが何者か、すぐに合点したらしく、目蓋を閉じた。

四

狂四郎が、宵闇のこめた庭へ降り立った——一瞬、その暗い夜気を截って襲って来たのは、鳥のような飛器であった。
身を沈めた狂四郎の頭を翔けたそれは、宙を旋回して、むこうの闇の中へ戻って行った。
——闇斎の手下が、ぶうめらんを使う。闇斎もまた、異邦から密入国して来た男だったのか？
再び、鋭い唸りを発して襲って来た飛器を、脇差で撃ち落しざま、狂四郎は、疾駆した。
三度、飛器が、宙をつらぬいて来た。
これを無想正宗で両断しておいて、狂四郎は、まっしぐらに、敵の面前へ奔り寄った。
敵が、背中から抜きはなったのは、夜目にもはっきりと、青竜刀とわかった。
「おい、こちらは、約束通り退散しようとしているのだぞ。いったい、どういうのだ？」
「おそいっ！　おのれは、もう、小銀殿を犯したのだ」
「犯しては居らぬ」
「犯したと同じことだ。生かしてはおかぬぞ！」
青竜刀を、風車のように旋回させつつ、肉薄して来た。
四肢の躍動を、首も尾もなく流動する白刃の舞いに合わせて、迫って来る敵に対して、狂四郎

は、一歩一歩後退の円を描いた。
青竜刀の業は、五体をその旋回に合わせるために、体力の消耗がきわめてすくないのである。
しかし、こちらからは、待ち受けていては、きりがないのであった。
狂四郎の方で、容易に斬り込む隙が見出せなかった。
いたずらに後退しつづけ乍ら、狂四郎は、対手がまだ二十歳あまりの若者であるのをみとめた。
——なるべくは、斬らずにすませたいが……。
こちらの気持を、読みとって、それを侮辱と憤ったらしく、若者は、一瞬、猛然と斬りつけて来た。
斜横に、一間余を跳んだ狂四郎は、
「止せ！　お主を、斬る気にはなれぬ」
と、云った。
若者は、無言で遮二無二に襲撃して来る。
やむなく——。
狂四郎は、首刎ねを狙って来た横薙ぎの一撃を、身を沈めてかわしざま、胴わきを滑り抜けた。
若者は、呻きもたてず、地面へのめり込んだ。
狂四郎が、ふと気づくと、二間ばかりむこうに、黒影が佇立していた。
闇斎と視わけた狂四郎は、白刃を腰に納めると、しずかに近づいた。
「わしが最も力と恃む若い奴を、殺したのう」
闇斎は、かわいた声音で云った。
「やむを得なかった。斬らねば、斬られた」

「左様、やむを得なかった。こやつ、わしを裏切ったであろう？」
「裏切ったことになるのか」
「小銀に恋慕して居ったことは、うすうす察していたが……、お手前に小銀を抱かせぬために、わしを裏切ったであろう」
「わたしは、貴方がわたしを味方にしようとする理由を訊ねたまでだ」
「こやつは、それを教えた」
「教えても、べつに、さしつかえはなかろう」
「お手前が、小銀を抱かずに、立ち去ろうとするのは、味方になるのを拒否している証拠だ。……教えたのは、まずかった」
「どうする？」
「どうもせぬ」
「…………」
「わしが、ここへお手前をともなったのが、失敗であったのじゃな。ただいまからは、敵同士でござるよ」
「うかがっておこう」
「なんじゃな？」
「太閤遺産が、どのあたりに隠匿されているか、貴方はすでにご存じか？」
「それが判っているくらいなら、お手前を味方になどせぬわ」
「成程――、つまり、互いに、まだ、同じ道を踏み出したばかり、というわけか」
狂四郎は、一揖して、歩き出した。

その背後へ向って、闇斎は、殺気をこめた睥睨(へいげい)をあびせた。
とたん、振りかえった狂四郎は、
「あの小銀という娘御のことだが……」
「む――？」
「たしかに、万人に一人といっても誇張ではないからだに仕立てられている。……この指が、たしかめた」
「それを抱かずに、立ち去るのを、惜しいと思わぬか？」
「そこが、この眠狂四郎という男のひねくれた生きかた、と受取って頂こう」

海の火柱

一

春であった。
淡い、あたたかな陽ざしに、家も人も犬も影を溶かれて、いかにものどかな景色になった街中を、やぞうをきめた金八が、楊枝(ようじ)をくわえて、足どりも軽く、ひろって往く。
首を振り乍ら、口ずさんでいるのは、お俊伝兵衛「堀川の段」であった。
　更けゆく鐘も哀れをさそう、頃しも師走(しわす)十五夜の、月は冴(さ)ゆれど胸の闇、過ぎし別れの云いかわし、死なば一緒と伝兵衛が……
前を歩いていた十徳に宗匠頭巾の隠居が、金八と肩がならぶと、

「春や春、巾着切のおらが春。同じ、するのでも、賭場でするのと、人のふところをするのとでは、こうも機嫌がちがうものかのう。今日は、これで（と、人差指を曲げてみせて）たんまり儲けたとみえる」

「へへ……、見当が狂ったぜ。するはすったが、上に、この字がつかあ。後朝だぜ。鐘がつらいか、鴉がいやか、帰る帰るの声がいやや、って、すがりつかれてよう」

「千両、千両――、三十年前を思い出すのう」

「羽織きせかけ、頬すり寄せてだ、あとは苦労にぬけるも知らぬ今朝はうれしきみだれ髪、と来た」

「そうそう、いい気分で、店を出て……つらい別れに、あと振り向けば、ひとつ眼で、舌を出す」

「置きゃあがれ！」

やがて、金八が、入って行ったのは、鳥越明神裏の立川談亭の家であった。

談亭は、読み台を張扇で叩き乍ら、講釈の練習をやっていた。

「……そうれ、つらつら、おもんみれば、国の滅亡、家の傾覆、すべてこれ、女禍にして……、風雲を叱咤し、天下を席巻する英傑も、ひとたび閨房に入って、美女の柔肌を抱かんか、海鼠のごとく骨なしに相成り、猫のごとく媚び、犬のごとく護り、目尻を下げて、よだれをたらし、嗚呼やんぬるかな、二十二史の語るところ、諸子九流百家の教えるところ、治乱興亡のあとにみる、背徳乱倫の色の道のおそろしさ――乱は天より降るに匪ず、婦人より生ず、とは詩経の看破するところ……」

「おうおう、もう齢だねえ。講釈が、そんなしかつめらしい儒者の文句じみちまっちゃ、いよい

よ、小屋が閑古鳥が鳴かあ」
　金八が、からかうと、談亭は、かぶりを振って、
「若い女を居候させたり、大判小判をざくざくつかむ儲け話をきいたりすると、立川談亭ならずとも、釈迦でも孔子でも、だんだんおかしな気分になるものよ。好色、好金は、男の本能。これを断つには、まず、おのれの張扇を正しくせねばならん。ところで、巾着切の方は、いやに、さっぱりした、いい血色をしているが、なにかいいことでもあったかな？」
「後朝って、いいものにきまってら」
「また、どこかの後家をだましたか。おめえの悪い癖だ。この人にしてこの疾あり、とちゃんと論語にもあるて」
「巾着切だぜ、うまいものには、つい手が出らあ」
「擂木に鞘なし、擂鉢に蓋なし——当分、性懲りもなく、こすりまわすがいいさ。三たび肱を折りて良医となる、というたとえもある。そのうち、ひどい目に遭ってな、落ちたあとで高処を恐れる」
「駄講に、色の道を戒めてもらいに来たんじゃねえや。……ところで、後朝ってえのは、いい文句だが、なんの意味あいだい？」
「きぬかつぎは里芋の子で、きぬごしは豆腐で、きぬずれは、息をつめて待っている野郎の胸をわくわくさせる音で、さて、きぬぎぬとは、男と女がその夜はすっ裸で抱き合い、朝になって、それぞれの衣を着て、右と左へはいさようなら。……尤も、きぬぎぬには、別の意味もあるな。首と胴とが別々になるのを、きぬぎぬ、という、と武道伝来記にもみえて居る」
「首と胴が、別々になる、といえば……」

金八は、二階を指さして、
「同朋の隠し妻は、どうしたい？」
「それだ。出て行っちまったよ」
「なんだと？」
「おめえがいけねえんだよ。宗因というお坊主に、佐喜さんがここにかくれている、と教えたろう」
「きちげえじみた面つきになって、教えてくれ、としつっこくたのむから、つい……。それで、師匠は、黙って出て行かせたのか？」
「そこはそれ、張扇を四十年も叩いて居ると、六韜三略虎の巻、おのずから胸にあってな、わざと、ひきとめずに、出て行かせておいて、こっそり、あとを尾けてみた」
「どこへ行った？」
「今戸橋までは、首尾は上々と北叟笑んでいたんだが、お坊主め、橋下に舟をかくしていやがった。あわてて、こっちは、猪牙をさがしたんだが、あいにく、春でおぼろで御縁日、一艘のこらず出はらっていて、じだんだ踏んだが、間に合わず、沖のくらいのに舟漕ぎ出して、あと白浪と失せにけり」
「ちぇっ、だらしがねえ。なにが、六韜三略だ」
「しかし、舳先を向けた方角は、しかと見とどけた」

二

金八が、眠狂四郎をさがして、両国界隈を駆けずりまわりはじめた宵の口――。

本石町二丁目の阿蘭陀屋から、主人の嘉兵衛が、一人の浪人者と連れ立って、出て来た。
浪人者は、宗十郎頭巾で顔をかくしていたが、死神九郎太にまぎれもなかった。
二人は、これから、遊里で夜桜でも愉しむような様子で、歩き出したが、向った方角は、北ではなく、南であった。
京橋を渡って、三十間堀に入り、一丁目から下って、六丁目で、左折し、木挽橋を渡ると、木挽町五丁目へ出た。
「まさか、オランダ娘を、西本願寺にかくしている、などとは、申されぬのでしょうな？」
阿蘭陀屋嘉兵衛は、云った。
「ふふふ……」
死神九郎太は、含み笑いをもらした。
嘉兵衛は、九郎太から、オランダ娘を意外な場所にとじこめてあるゆえ、そこへ案内する、と誘い出されたのであった。
向っている方角には、西本願寺のほかには、大名旗本屋敷しかないのであった。
「高い売りものなら、こっちに足をはこばせるのは、いささか失礼な話と思われるが……」
「その場所を、いずれ、お主に利用してもらいたいゆえ、一度見ておいて欲しいのだ」
九郎太は、こたえた。
「と、申されると？」
「お主が、密貿易で、はこび入れた品を、かくすには、恰好の場所、ということさ」
「この阿蘭陀屋が、隠し倉をどれくらい持っているか、ご存じないとは、お前様らしゅうありませんな」

「まあ、ついて来てもらおう」

仙台橋を渡って、尾張家蔵屋敷の幾棟かの土蔵の高壁に添うた河岸道に出ると、九郎太は、とある地点に立ちどまった。

すると、一艘の舟が、音もなく、寄って来た。

「乗ってもらおう」

九郎太は、阿蘭陀屋をうながした。

「海へでも、出なさるので？」

「いや――、ともかく、いそぐ」

舟を漕いでいるのは、豆しぼりで顔をつつんだ、漁師ていの男であったが、二人が乗り組んでも、挨拶もせず、口もきかず、非常な速さで、堀割を抜けた。

空には、十三夜の月が、かかっていた。

その月かげを映した大川は、小波（さざなみ）をたて乍ら、汐（しお）を満たしていた。

舟は、流れにさからって、浜御殿の東側へ出た。

沿うて行く石垣の上には、丈余の巨巌（きょがん）が、いくつかの児岩をはべらせて、くろぐろとわだかまっていた。もとより、樹林も深い。

漕ぎ手が、急に、艪（ろ）を大きくまわして、舳先を向けかえた。

石垣が、一箇所だけ、凹部（おうぶ）をなして、庭へ堀割を通じさせていた。

たしかに、堀割であった。しかし、それは、巨巌をえぐった洞窟（どうくつ）になり、ものの十間も漕ぎ進むと、鉄扉（てつび）がおろされてあった。

奥から灯かげが流れて来て、岩天井を無気味に照らしていた。

九郎太が舳先に立って、鉄扉を押した。
満ちて来る波に乗って、舟は、奥へすべり入った。
「なるほど、これは、面白い場所だ」
阿蘭陀屋は、呟いた。
浜御殿の敷地内は、江戸城内よりも、人士の目がとどかぬところであった。まして、一般庶民にとっては、どんな建物や庭が設けられているのか、見当もつかない一廓であった。
海からの水路がつくられているなど、御殿守備の番士らも、知らされていないに相違ない。
舟からあがると、石段が通じていた。
登りついたところで、阿蘭陀屋は、目をみはった。
乏しい灯火が、左右にならぶ鉄格子を浮きあげて、地獄のような印象を与えた。
地獄――まさしく、これは、巨巌の洞窟を利用した秘密の牢舎であった。
「これは、大奥で罪を犯した女中どもを監禁するために、設けられた。つい十年あまり前まで、囚徒がこの中で、一年中陽の目に会わずに生きていたようだ」
九郎太が、説明し乍ら、先に立った。
阿蘭陀屋は、陰惨としか云いようのない地下牢を、覗いて歩いた。
いずれも二坪あまりの室であった。土中に深く打ち込んだ鉄杭と、鎖が、見分けられた。どのような罪を犯して、ここにつながれたものか、大奥の女中たちが、けもののように、うごめき乍ら、死を待つだけの幾年かの歳月をすごした、そのむごたらしい光景が、およそ十数室の、がらんとした空間に、怨恨と憎悪と悲愁の息吹きをのこして、遠い過去のものになっている。
九郎太の足が停められた。

一番奥の牢室の鉄格子を覗いた阿蘭陀屋は、壁ぎわに正坐した囚徒の、胸で合掌して、瞑目(めいもく)している横顔の妖(あや)しいまでに彫の深い美しさに、思わず、息をのんだ。

「どうだ、阿蘭陀屋、この売りものは——？」

「まさしく、尤物(ゆうぶつ)ですな」

「高く買ってもらおう」

囚徒の顔が、まわされて、眸子(ひとみ)がひらかれた。

灯火に映えた白磁さながらの肌理(きめ)こまやかな面貌(めんぼう)は、とらえられて間もないので、窶(やつ)れの翳(かげ)をかえって風情(ふぜい)あるものに添えていた。碧(あお)く澄んだ瞳(ひとみ)は業苦に堪える不屈の意志を湛(たた)えて、きらきらとかがやいている。

——どう道を迷うて、この化物浪人の虜(とりこ)になったのか？

阿蘭陀屋としては、もともと、この異邦の娘を大奥へ送り込もうとする計画に、一役買って、手筈をととのえてやったのである。

しかし、眺めるのは、いまがはじめてであった。

——これほどの美女なら、蔭から援助をしてやるまでもなく、わし自身が、身柄を引き受けて、江戸まで連れて来てやるのであった。

胸の裡(うち)で、そう呟かずにはいられなかった。

「死神さん、代価はいくらだ、と云いなさる？」

「左様——、お主がやがて手に入れようとしている百万両の半分、と云いたいところだが、まあ、二十万両が、折れ合うには、手頃のねだんであろうか」

「百万両?!　なんの思いちがいをしていなさる？」

「しらばくれるな、阿蘭陀屋。お主も地獄耳なら、おれも地獄耳——いまさら、そらとぼけても、はじまるまい。どこかにかくされている太閤秀吉が遺産——慶長大判を詰めた櫃のことよ」

九郎太が、そう云った瞬間、美しい囚徒が、はじめて、表情を変えた。

三

「なに？　佐喜が、宗因と一緒に、出て行った？」

両国橋の袂の舟宿の二階で、寝そべっていた眠狂四郎は、金八の報せをきいて、むっくり起き上った。

「談亭のもうろく爺いが、あとを尾けるには尾けたんですがね、今戸橋から舟で逃げられやがって、泡をくらったり、指をくわえたりして、見送っただけでさ」

「どっちの方角へ行ったか、談亭は見とどけたろう？」

「西の海へさらりだかするりだか——闇に消えちまったそうでさ」

「…………」

狂四郎は、宙へ、冷たい視線を据えた。

「そういや、あの時、宗因は、陸ではなく、水の上に、身をひそめる場所をえらんでいる、と云ってましたぜ」

「うむ」

「佐喜さんを、談亭の家へ連れて行ったのは、あっしでさ。あのお坊主に、むざむざさらわれて、黙ってすっ込んでいるわけには、いかねえや。……先生、佐喜さんをとりかえすから、手だすけしておくんなさい」

「………」
狂四郎は、しばらく無言で、身じろぎもせずにいたが、ひえた酒を、茶碗についで、ひと息に飲んでから、
「手おくれかも知れぬ」
と、云った。
「おねげえします、先生！」
金八は、頭を下げた。
「先生が、すてておく、と仰言るんなら、あっしだけでも、乗り込んでやりまさ。場所だけ、見当つけておくんなさい」
「舟を用意しろ、金八」
「合点！　一緒に行って下さるんで――へへ、有難え、鬼に金八だあ」
金八は、階段を駆け降りて行った。
――ひそんでいるのは、佃島あたりではなかろうか、と思っていたが、やはり、そうだったのか。
狂四郎は、床の間から無想正宗を把って、腰に落し差し乍ら、暮色濃い隅田川へ、眼眸を送った。
――沼津千阿弥は、船を一艘、買い入れておいたものらしい。お坊主衆七十三人は、その中に、かくれて居る。
階段を降りつつ、狂四郎は、ふっと、不吉な予感をおぼえた。

佃島。

鉄砲洲に傍うた孤島である。そのむかしは、向島と称ばれていた。

家康が、遠州浜松城にいた頃、京都へ上る途次、摂津国の多田の御廟と住吉大明神に参詣した時、佃村の漁夫が、神崎川の渡しに船を提供し、また食膳の魚を奉った。

家康は、江戸城を定めてから、佃村の漁夫三十四人を出府せしめて、江戸湾内の漁業権を与えた。

これらの漁夫の子孫たちは、寛永年間に、鉄砲洲の東の孤島向島を賜わって、故郷の佃村の名をとって、佃島と名づけた。

江戸城には毎年十一月より三月まで、白魚を取って、献上する掟が設けられ、その間は、漁夫たちは、他の猟を禁じられた。この掟によって、四手網で白魚を取るのは、佃島の漁夫の特権となり、他の浜辺の漁夫は遠慮した。

したがって、佃島には、佃村から出府した漁夫の子孫のみが所得顔に住みついて、他国者を寄せつけなかった。

ただ、弥生の汐干狩りには、大奥から女中たちが、たくさんの舟で渡って来て、春の一日を興じた。

一般庶民は、大奥をはばかって、佃島へはやって来なかった。

いわば、佃島は、漁夫たちの天国であり、その意味では、お坊主衆が、船に身をかくすには、絶好の場所といえた。

しかし――。

狂四郎の考えでは、そういう場所だからこそ、お坊主衆の潜伏は、かえって危険なのであった。

――宗因が、佐喜を連れて行ったのは、無謀というほかはない。お目付下条主膳配下に、見つけられたおそれがある。そうだとすれば、一挙に全滅させられる運命にある。
金八が漕ぐ小舟で、隅田川を下り乍ら、狂四郎は、かれらがいまだ健在であることを、祈った。
宗因から、沼津千阿弥の遺志を継ぐ七十三人の同志に、何卒助勢して欲しい、と願われ乍ら、ついに返辞をしなかった狂四郎であったが、すでに、好むと好まざるに拘らず、異変の渦中にわが身を置いているのであった。
お坊主衆が、刺客に襲撃されることから、防いでやる気持は、強かった。
「先生、場所は、どこだと見当つけなすった？」
「佃島だ」
「へえ、あそこにね。……あそこの、どこにひそんでいるんですかねえ？」
「御用船や問屋船の風よけ場であろう」
「船にかくれている、というんですかい？」
「たぶん――」
「うめえ場所をえらんだものだ。……あっしが心配なのは、七十三人の血気者の中へ、たった一人、若い女が交って、匂いをぷんぷんさせる、ということだあ。こいつは、野郎どもにとっちゃ、居たたまれねえ毒になりますぜ」
「…………」
「宗因は、佐喜さんに、かいかしらになってもらう、と云ったそうですがね、かいかしらなんてえものは、髭っ面で、熊の皮でも羽織っているから、手下は服従するんで、あんな色香を、ほやほやとまきちらす別品に、かいかしらになられちゃ、たまったものじゃありませんぜ。冗談じゃねえや、全く

「――」
「…………」
「それぐれえのことが、わからなかったのかねえ、佐喜さんは――」
小舟は、やがて、深川寄りを、永代橋をくぐり抜けた。
夜の海がひらけた。波浪が、月光を砕いて、汐風はかなり強かった。
行手に、黒く、海原を割っている影が、佃島である。
金八が、漕ぐのにせわしく、沈黙を守った。
小舟は、高くひくく、もまれはじめた。
と――。
黒く浮いた孤島の一隅から、轟音（ごうおん）とともに、火柱が、噴きあがった。
「なんだ、あれア――。花火にしちゃ、ばかでかすぎらあ」
轟音は、つづけさまに起り、火柱の下から次の火柱が噴き、火の粉が八方へ、美しく散りまかれた。
「金八――」
「へい」
「佃島へ行ってみる必要はなくなったようだ。……ひきかえすがいい」
「畜生！　あれが、やられた証拠ですかい」
「そういうことだ」
「罰だあ！　七十三人の男の中へ、女一人を連れ込むから、船霊（ふなだま）が――住吉明神が、慍（おこ）っちまやがった」

救いの神

一

「金八、浜松町へ、舟をまわせ」
狂四郎は、佃島を白昼の明るさに照らした火柱が、消えて、再び月闇にもどった時、そう命じた。
韮山代官江川太郎左衛門が、出府して来ていて、浜松町の役宅に在る通知が、昨日とどいていたのである。
大砲鋳造のための、鉄を溶かす反射炉設備の建議が、どうやら、幕府評定所の許可するところとなった模様であった。
「先生、いいんですかい、あのどかんの跡を見とどけなくても――？」
「あとの祭りへ出かけて行っても、はじまるまい」
「だって、二人や三人、逃げ出したお坊主が、いるかも知れませんぜ」
「逃げ出した者は、待ち受けた隠密どもの刀の贄になった、と考えてよい」
「可哀そうに、同朋の隠し妻も、木っ端みじんになっちまったのかねえ」
金八は、柄にもなく、しんみりと、声音を湿らせた。
狂四郎が、敢えて、その生地獄の跡を観とどけるのを避けたのは、沼津千阿弥とその門下に対するおのれの立場が、いつも、後手にまわって、為すすべのない無能なめぐりあわせになっていることを、思ったからである。

沼津千阿弥が、鶴岡八幡宮舞殿で割腹自決を遂げた時、こちらは、腕を拱（こまね）いて傍観していただけであった。その門下二十人が、武蔵と相模の国境の境木の街道上で、師のあとを追おうとして、公儀庭番の面々に、一人残らず斬られた時、こちらは、一歩おくれて、間に合わなかった。

そして、いままた、舟で佃島へ近づこうとした矢先、坊主衆七十三人がひそむ船が、爆破されたのである。

後手にまわされたことに、狂四郎は、ひとつの宿運をおぼえている。過失を犯せば、そこに宿命めいたものを感じるのは、人の常であり、そこに、神仏の審判の権威が加わって、人々は屈服したり、絶望したりする。

易者の予言にしろ、巫女（みこ）の譫言（うわごと）にしろ、それがもし外的な固定した原因に由来しているならば、徴候の一段と進んだ認識となろう。徴候に気がつくきわめて鋭敏な感覚も働くし、あるいはまた、偶然によって、的中することも、しばしばあり得る。

人間の弱さが、そこにある。狂四郎も、例外ではなかった。

ただ――。

この時代には、予言者の権威を容易に地に墜（おと）させないために、神仏信仰が、豊饒（ほうじょう）な背景を背負っていた。さまざまの教理や諺（ことわざ）に従って、人それぞれが、おのれ自身に就いての予言者となっていた。

因果応報とか、勝つも負けるも運次第とか、槿花（きんか）一日の栄とか、縁と生命は繋（つな）がれぬとか、人を呪（のろ）わば穴二つとか、憂患は粗忽（そこつ）によって生じ禍いは些事（さじ）から起るとか、禍いも三年おけば福の種とか、ころばぬ前（さき）の杖（つえ）とか、袖すり合うも他生の縁とか――。

しかし、狂四郎が、余人と異なるのは、狂気や卑怯（ひきょう）や恐怖の行為を避ける上手な手段を心掛け

ようとせず、欺瞞や嫉妬や残忍から救われるのを望んだことのない男であることである。野心とか虚栄心とか、そうした目的のある姿態を示したことは、一度もなかった。めいめいが目的とする生きる流儀から背を向けたこの男は、利得打算の判断は必要としてはいないのである。

希望の筋道は、この男にとって無縁であった。おのれの裡に、教理はない。したがって教理の迂路を辿る人生を生きてはいない。

狂四郎の予感の的中は、生きる目的のない世界の中から生じている。人がおのが手足の中に、おのれを前進させる神を感じる現世のせわしいたつきの埒外に置かれた者の、これは、まさしく虚無の直感力といえた。

小舟は、まっすぐに海へ出て、御浜御殿の石垣に沿い乍ら、浜松町をめざした。舳先にうずくまった狂四郎は、石垣の一角が凹部をつくり、くらい穴をぽっかりとあけているのを、何気なく眺めやり乍ら、

——明日を生きる気のないおれが、明日もまた生きているのか。

と、投げ出すように、胸の裡で呟きすてた。

と——その折。

狂四郎の視線が、海面の一箇所に止められた。

汐が満ちていて、おだやかに見える海面も、映している月光をせわしく砕いていて、流れの速いのが判るのであった。

その砕けた月光の破片を、さらにかき擾しているものが、そこに、みとめられた。

二

「おい、金八、舳先を右へまわせ」
「どうなさるんで——？」
「人間らしいものが、流れている」
「え？……土左衛門なら、まっぴらでさ」
「生きているらしい。……あそこだ」
狂四郎に指さされて、すかし視た金八は、
「成程——、生きてやがる。だけど、御浜御殿の番士か何かが、水練の稽古でもしているのなら、なにも、救いあげることはありませんぜ」
「泳いでいるのは、女らしい」
「へっ！　女?!　まさか、御殿の女中が、身投げしやがったわけじゃあるめえな」
狂四郎は、こちらの小舟へ向って来る者が、冷たさにもめげず、巧みな泳ぎ手であるのをみとめた。
と同時に、石垣の凹部の奥から、一艘の舟が、非常な速力で漕ぎ出されて来るのを、見分けて、
「金八、急げ！」
と、せかした。
「合点！」
金八は、必死に、艪をあやつった。
狂四郎は、棹を、泳ぎ手へさしのばして、つかまらせた。

「うえっ！　女だ！　若(わ)けえや。足はあるんでしょうね、先生——」
金八が、艫(とも)から叫んだ。
狂四郎は、その片手をつかんで、引き上げてやり乍ら、
「金八、三十六計だ。根かぎりに漕げ」
と、命じた。
「へいっ！　あの舟は、追手かあ、こん畜生、追って来やあがれ。金ぴら船ふね追風(おいて)に帆あげて、シュラ、シュッシュだあ！」
金八は、死にもの狂いに、漕ぎ出した。
狂四郎は、救いあげた女の顔を一瞥(いちべつ)して、はっとなった。
「そなた！」
驚きの声をあげた。
「千華ではないか！」
「あっ！」
女は、べったりとまつわりついた髪毛をひとふりすると、月光に、その白いおもてを照らして、歓喜の表情になった。
次の一瞬、狂四郎にしがみついて来た。
その口からほとばしったのは、意味の不明な母国の言葉であった。
あまりにも偶然な、この邂逅(かいこう)を、神の手によってなされたものと、感謝する言葉であったに相違ない。
「先生、ご存じの女ですかい？」

「これが、お前の会いたがっていた南蛮渡来の娘なのだ」
「へっ！　こいつは、面白えことになりやがった。鼻高屋（五世松本幸四郎）の時代物だって、こうはうめえ筋書には、いかねえや。……あっ、野郎っ、来やがった！」
追手の舟が、みるみる距離をせばめて来たので、金八は、悲鳴をあげた。
漕ぎ手の腕の相違であった。
狂四郎は、やむなく、千華をもぎはなすと、
「まわせ、金八――」
「ま、まわして、ど、どうするんで？」
「こっちは、立役だ。幸四郎なら、さしずめ四つ花菱(はなびし)の紋どころを、ぱっとみせて、大見得をきるところだ」
「大丈夫ですかい。舟の大きさがちがいますぜ。まともにぶっつかったら、こっちは、ひっくりけえっちまう」
「ぶっつかる前に、つらねをやる」
金八が、ぐるっと舳先をまわした時、すでに、追手は、二間の近くに迫っていた。
むこうの舟にも、舳先に、一人、武士が、すっくと立っていた。
覆面をしていたが、じっとすかし視た狂四郎は、
「ほう、これも、奇遇だな」
と、呟いた。
対手(あいて)もまた、こちらが何者であるか、さとった驚愕(きょうがく)の様子を、示した。
狂四郎は、声をあげて、

「海上の戦法には、どんな意外の手があるか、みせてもらおうか、死神九郎太」
と、云いかけた。
九郎太は、要心深く、漕ぎ手に舟を停止させると、
「無念乍ら、お主が出現しようとは、神ならぬ身の知る由もなかった。したがって、無策。と相成れば、当方には、船を沈め釜（かま）を破る猪突（ちょとつ）猛進の闘志は、持ち合せぬ」
「手中にした玉を、むざむざ、呈上するというのか」
「なんの、一時、預けるのみ。いずれ、とりもどす」
「ことわっておく、死神九郎太。……この異那の娘は、もともと、わたしが、その仲間から預かった。のみならず、他人ではなくなって居る」
「なんと？」
「すでに抱いて居る。あるいはもう、わたしに惚（ほ）れているのかも知れぬ」
「ばかなっ！」
「嗅覚（きゅうかく）は大層発達しているお主らしいが、そこまでは、かぎわけられなかったようだな」
「眠狂四郎っ！　この死神九郎太を、愚弄（ぐろう）するか！　許せぬぞ。……拙者に狙われて、生き残った者は、これまでただの一人もいなかったぞ。文字通り死神となって、とり憑（つ）いてくれるのだ。覚悟せい！」
「喋（しゃべ）りすぎたようだな、九郎太――」
「なにっ！」
「お主を、これまでは、我欲の旺盛（おうせい）な一匹狼（おおかみ）と、考えていたが、どうやら正体がはっきりして来た。……一匹狼というやつは、飢餓のためには、人間や家畜に噛（か）みつくが、狙った獲物でも、

それが、逃げれば深追いはせぬものだ。……お主が、死神となってまで、とり憑く、ということは、何者かの指令によって動いているからだ。一匹狼ではなく、走狗であろう、お主は――」
「黙れっ！……眠狂四郎をあの世に送るのは、拙者ときまったぞ。見ておれ！　必ず仕止めてくれる。待って居れ！」
「それほどたけり立ち乍ら、いま襲いかかろうとせぬのは、よほど訓練された走狗らしい」
狂四郎は、嘲笑した。

三

半刻後――。
狂四郎は、水野邸内表長屋の側用人宅の書院にいた。
のこのこと入って来た武部仙十郎は、座に就くなり、
「荷厄介なしろものを、はこび込んで参ったの」
と、云った。
「ご老人も、異邦の娘を見たのは、はじめてではないのか。目の保養になろう」
「この年寄りをからかうのは、置けい。生涯、無妻ですごして参ったわしだぞ。……お主が、はこび込んで来たしろものゆえ、無下にもことわれぬが、どうしろ、というのだ？」
「当分、かくまってもらうだけでよい」
「ふふふ……」
珍しく、老人は、含み笑いをした。
「……？」

「せっかくの珍品、もしかすれば、西の丸様へ、献上するかも知れぬぞ。そのおそれはあるまい、などと甘くみくびって居ったのなら、眠狂四郎もやきがまわったと申すものだて」
「そうさせぬために、土産を持参した」
「土産？」
「百万両の黄金伝説が、まぎれもない事実である、ということだ」
「ほほう……、お主までが、とうとう、山吹色に目くらんだか」
狂四郎は、懐中から、皺だらけの一枚の紙片をとり出して、老人の膝の前に置いた。
老人は、袂から眼鏡をとり出すと、身を二つに折った。
「元和元年五月八日、大坂城陥落せし際、右大臣殿（豊臣秀頼）、火中にて自害に及び候儀、真っ赤な嘘にて、ひそかに、城を脱出し、船にて薩摩に遁れしこと、真実也。これよりさき、冬の陣の終れる慶長十九年十二月下旬、大坂城内より、太閤遺産のうち、慶長大判小判、およそ百万両ぶん、地下道より、何処かへ運び出されたり。すなわち、右大臣殿には、落城後、薩摩に身をひそめて、再挙の秋をはかられたる模様なるも、ついに、その秋を得ず、莫大なる軍資金は、地下にねむりて、今日に及び居り候。佐賀闇斎は、この軍資金を手中にせんと狙う者にて、遺策なきを期し、眠狂四郎を味方につけんと欲するもの也」
読み了えた仙十郎は、すぐには、身を起さなかった。
眼鏡をはずしてからも、しばらくは、近頃の癖である、肝斑だらけの皺手で頬をはさむ姿勢をつづけた。
「…………」
狂四郎は、無言で、見まもっている。

実は、狂四郎は、この一文を読ませても、老人が、決してうなずかぬもの、と予想していたのである。老人を合点させるためには、かなり時間のかかる説明を必要とするであろう、と考えていた。

ところが――。

武部仙十郎は、ふかい沈思の時間を持ったのである。

しびれがきれるほどの長いあいだ、同じ姿勢を保っていた老人は、ようやく、身を起すと、

「お主、この佐賀闇斎という人物に、会ったのじゃな？」

と、訊(たず)ねた。

「会った」

「素姓を、打ち明けたかな？」

「いや――。ご老人は、ご存じか？」

「知って居る」

「うかがおう」

「琉球(りゆうきゆう)人じゃよ、あの人物」

「琉球人！」

「左様――。しかも、ただの琉球人ではない。琉球国王の叔父――つまり、前の国王の弟じゃよ」

「……………」

「もう二十年ほど前になろうかの、中山王が隠居代替りすることになり、島津斉宣殿が、使者を召し連れて、出府して参ったことがある。……これは、慶長十五年に、島津家久が、中山王を帯

同して、駿府に参り、家康公に拝謁せしめて以来のしきたりじゃが——、その際、琉球王代理正使として、豊見城王子（とよみぐすくわんす）、副使として沢紙（たくし）親方が、参った。……その一行中に、たくさんの随行者がいたが、佐賀闇斎は、その一人であった。讃儀官という役目で、普天間親雲上（ふてまばいきん）と名のって居った」

「…………」

「上様に拝謁、琉球音楽吹奏、献上品拝領、諸向廻礼、上野東照宮参詣など、とどこおりなく終って、さて帰国の途につこうとした時、何を考えたか、讃儀官のかれが、江戸にとどまりたい旨を、評定所へ願い出て、許されたのじゃな。つまり、これからは、五年に一度の割で、中山王使節が、出府して、将軍家ご機嫌うかがいをいたしたく、ついては、公儀と琉球国との間の連絡係として、江戸にとどまりたい、という名目をたて居ったのだ」

「…………」

「で——、佐賀闇斎と日本名をつくって、江戸に屋敷をかまえ、一年に一度ぐらい、琉球と往復している模様であったが……。ふうむ！　この琉球人が、太閤遺金を狙う目的を持っていたとはのう」

老人は、宙を睨（にら）んで、首を振った。

オランダ娘千華は、女中の衣類を与えられて、武部家の別室で、牀（とこ）に臥（ふ）していた。大きく眸子（ひとみ）をひらいて、天井を仰ぎ乍ら、まばたきも忘れたように、虎口を脱した悦び、眠狂四郎に救われた喜びを、じっとあじわっていた。

あの地下の地獄牢内から、遁れ出ることができたのは、奇蹟（きせき）であった、といえる。

もとより、千華自身の必死の働きもあった。

死神九郎太に対して、隠し持っていた飛器ぶうめらんを投げつけ、もう一人の町人に体あたりをくれておいて、地下道を奔り、水中へ身を投じたのであった。

泳ぎは、千華の得意の技のひとつであったが、春浅い海原へ、あてもなく泳ぎ出て、たすかるものとは思われなかったし、舟で追跡されては容易に捕縛されることも判っていた。

千華は、天にある神に祈りつつ、洞窟から泳ぎ出たのであった。

奇蹟は、海で待っていた。

「へい、ごめんなすって——」

廊下から声をかけて、金八が、障子を開けた。

千華は、潤んだ眸子を、向けた。

「後光がさして、目がくらむ、ってえのは、このことだ。どうして、こうも、南蛮国の娘御は、顔の造作やら肌色が、ちがうのかねえ」

金八は、かぶりを振り乍ら、膝を進ませると、

「この家の女中が、貴女さんを、どうとり扱っていいか、とまどって、あっしに、もてなしかたをきいて欲しい、とたのむものでござんすからね、失礼かえりみず、まかり出た次第なんで——へい」

「わたくしは、日本のご婦人のくらし、知って居ります。同じように、とり扱って下さい」

「つまり、食いものも、入浴も、なにもかも、同じでかまわねえ、と仰言るんで——？」

「はい。……わたくし、一刻でも二刻でも、正坐していることができます」

「へへん、おどろいたね。いってえ、どこで、そんな修業なすったのですかい？」

「海のむこうにも、日本人だけでつくっている町があります」
「あきれたねえ。貴女さんは、そこでくらしなすったので――?」
「はい。わたくしは、三歳の時から、日本人の手で、育てられました」
そうこたえて、千華は、微笑してみせた。

故事調べ

一

「豊臣秀頼が生存したというのが、真説らしいと申すのか」
その宵、下城して来た水野越前守忠邦は、居室に於て、武部仙十郎と眠狂四郎の説明をきいて、しばらく沈黙を置いてから、独語するように、云った。
決して、一笑にふしはしなかった。
忠邦は、勉学の徒であった。ごくつまらぬ野乗のたぐいにまで、目を通していた。
元和元年五月八日、大坂城が焼け落ちた時、二十三歳の秀頼が、母淀君の死を見とどけておいて、ひそかに、地下道を抜けて、落ちのびた、という説が、その当時からあったことを、忠邦は、幾種類かの書物で、見ていた。
大坂落城の翌年、すでに、平戸にあった英国人リチャード・コックスは、記している。
「秀頼は、大坂城内で焼死したといわれているが、実は一部では、薩摩か琉球に遁れている、と信じられている」

また、耶蘇会の師父らが、母国に送った報告にも、
「秀頼は、母とともに逃亡して、いまも生存しているという噂もある。その実否は不明であるが、秀頼ほどの人物が、敗戦後今日まで永い間、匿れていることは、すこぶる難かしい、と想像される」
と、ある。
宣教師の書翰を材料にした『日本西教史』にも、秀頼の蹤跡はいまだ判明せず、あるいは辺隅の小名の許に寄寓している、という風聞はしきりである、と述べている。
秀頼生存説は、後世にいたって作ったものではなく、当時から行われていた。
明の朱国禎もまた、
「説あり、秀頼は、城を焼いて後、遁れて薩摩に入る、と」
と、記録している。
『慶長見聞書』は、次のように述べている。
秀頼と淀君は、大坂城天守閣に火をかけたのち、大野治長を介して井伊直孝へ、
「徒歩にて城を出るのは、いかにも面目を失うことゆえ、駕籠二つをたまわりたい」
と、申し入れた。
直孝は、
「陣中には、駕籠はひとつしかござらぬ。淀君に差上げますゆえ、秀頼公には、騎馬にて退城されよ」
と、返辞をしておいて、二人がひそむ糒倉へ大砲を撃ちかけた、という。
『筱舎漫筆』は、この話を伝えて、「実は、その時、秀頼は、遁れ去っていて、いまだ糒倉にひそむと思わせるために、わざと、そう申し入れたということである」とつけ加えている。

『耶蘇天誅記』には、キリシタン信徒であった大野治長が、京橋口に碇泊していた南蛮船に、秀頼を乗せて、巧みに、日本を遁れ去った、と書いてある。

「爺い、お前は、どう思う？」

忠邦は、仙十郎に、訊ねた。

「さて――悲劇に終った若者を、生かしておきたい世間の人情は、源九郎義経以来のことでござるが……、身共が、生存説を読んだのは、厭蝕太平記とか、玉露証話とか、備前老人物語とか、あまり信用できぬ俗書ばかりでござれば……」

仙十郎がこたえると、忠邦は、微笑して、

「信ずべき史書にも、生存説は記されて居らぬわけでもない」

と、こたえた。

「と、仰せられますと？」

「唐津に在った頃、薩摩の当主から、面白いものをみせよう、と読まされたことがある」

忠邦が、島津重豪からみせられたのは、寛永六年五月十一日付の島津家久の老臣伊勢貞昌の書状であった。

> 御屋形の内へ不思議なる者、忍び入り、搦め取り候ところ、彼の者申す分には、秀頼様、御国へ御座成られ、真田（幸村）も生命ながらえ、紀伊国に罷り置き候などと申す儀是非なく候（中略）ここ許にて討ち果し候ては如何かと存じ候間、大炊頭殿（老中・土井利勝のこと）へお渡しなされる可き由、ご尤もと存じ奉り候

しかし、土井利勝に、伺いをたてると、

「それは、気違い者であろう、用に立つ事ではないゆえ、成敗無用」

との返辞であった、という。

「島津家のみならず、毛利家にも、秀頼生存を裏づける実録がのこされている」

忠邦は、云った。

毛利家の重臣智庵（ちあん）貫通の日誌に、次のような箇処がある。

父方の祖父馬田九郎兵衛こと、内藤修理（しゅり）一同御密事にて、大坂城に罷りのぼり、元和元年五月七日、御落城につき、すぐさま薩州鹿児島まで参り候て、同年萩へ帰り候、宗瑞（そうずい）様（毛利輝元）にお目見仕り候て、同年十月朔日（ついたち）、御判物を頂戴仕り候、今以（もっ）て所持仕り候こと、右かれこれ相考え候ところ、秀頼様薩州に御座成られ候儀まぎれもなき事にて、種島蔵人とは秀頼様の別名也、しかれども、格別御詮議（せんぎ）もこれなきものと相見え申し候

二

秀頼が、どうやって、大坂城を脱出したか――そのことをくわしく述べた記録ものこされている。

平田平蔵という士がいた。もとは、豊前（ぶぜん）小笠原修理亮長胤の家臣で、平田権左衛門と名のっていた。長胤が滅亡したのち、牢人となって、やがて長崎奉行大岡家に与力として仕えた。平田平蔵の先祖は、摂州茨木（いばらき）の城主茨木弾正で、秀頼の近臣であった。

大坂夏の陣が敗北濃くなった時、大野治長らが相謀（あいはか）って、秀頼を落ちのびさせることに一決した。織田有楽にたのんで、ひとまずその陣にかくまうことにして、秀頼を素裸にし、薦（こも）でぐるぐる巻きにして塵芥（じんかい）のようにみせかけると、織田有楽の陣のうしろめがけて、濠（ほり）へ突き流した。秀

頼は、九寸五分の吉光を胸に抱いて、もし敵兵に発見された時は、自決する覚悟であった。

さいわいに、発見されずに、川口の辺まで流れ着いた。かねて申しあわせていた事とみえて、そこに加藤肥後守忠広が、水船で待ち受けていた。船底を二重にして、秀頼を、その下にかくした。

ここまでは、秀頼と同じく薦で身をくるんだ近侍が六人、供奉していたが、途中で二人が討たれたか、遁走したか、加藤家の船に入ったのは、茨木弾正、直森与兵衛、前出彦八郎、そしてもう一人（姓名不詳）であった。

無事に海上に出てから、秀頼と四人の従者は、福島正則の使者船に乗りかえて、肥後に落ちのびた。その時、秀頼は、菊丸自斎と名のっていた。有徳の商人のはからいで、山里にかくれ住むことができた。

その後、従者の一人直森与兵衛が、京へ上って、そこにのこしていた妹をともなって、戻って来ると、秀頼の妾とした。女子一人、男子一人をもうけた。姉はたつ、弟は菊丸といった。

加藤忠広は、家が断絶した際、軍用金の一部一万両を、秀頼こと自斎に贈った。肥後が、細川家のものとなるや、自斎は、薩摩国へ移った。

その頃、茨木弾正は、平田と改名していた。その妹の息子に、権左衛門という者がいて、はるばる、薩摩まで伯父をたずねて行き、そこで妻をめとって、一男を得た。のちに、小笠原信濃守に仕えて、島原の乱に、功名があった。その息子が平田平蔵で、小笠原家をはなれて、大岡家に仕え、子孫代々与力をつとめた。平田家には、秀頼がまさしく、生存して、薩摩で六十八歳までの寿命を保った記録が、秘蔵されている。

「わしは、その平田家の記録も、読んで居る」

忠邦は、云った。

「では、殿には、秀頼公生存はまぎれもない、と信じておいでか？」

仙十郎は、主君を瞶めた。

「遠いむかしのことだ。大坂城で焼け死んだか、落ちのびて薩摩で老いたか——もはや、いまとなっては、どうでもよいことだ、と思っていたが……」

そうこたえてから、忠邦は、沈黙を守っている狂四郎を見やった。

「狂四郎、その方は、どうやら、豊臣秀頼の生存を信じはじめたようだな？」

狂四郎は、薄い微笑を含めた眼眸をかえして、

「黄金伝説に、とり憑かれた者の一人としては、生存説を信じた方が、動きやすく存じます」

と、こたえた。

「きこう」

忠邦は、狂四郎の言葉をうながした。

「琉球人佐賀闇斎の手の者が、それがしに呉れた一文によって、およその推測がついたことは、太閤遺産の秘事を、知っている者が、あちらにも、こちらにも、いる、ということであります」

「ふむ」

「知っている者は、公儀内にも居ります。おそらく、若年寄小笠原相模守も知って居りましょう。ただいまのお話をきけば、豊臣秀頼がたしかに生存した、という記録を持つ平田平蔵が仕えた主人は、すなわち、小笠原相模守の先祖。とすれば、相模守が、秀頼生存説を信じた、としても、べつにふしぎではありますまい。……また、沼津千阿弥も、どうやら、太閤遺産のことを、知っていた、と想像されます。佐賀闇斎の話によれば、千阿弥は、宿痾によって、ここ一両年の生命であった由。そこで、おのれは、天下を聳動せしめる諫死の道をえらんでおいて、その門下百人

に、太閤遺産をさがしあてて、それを軍資金とし、幕府を覆滅せしめて、新しい世をつくれ、と遺命を与えたものと、思われます。……ところで、海の彼方(かなた)に在る日本人町から、密入国して来た者どもの目的でありますが、かれらもまた、太閤遺産を狙って居るのではなかろうか、と推測されます」

「ほう、ただのあて推量ではなく、か？」

「この老人から、佐賀闇斎が琉球人、ときかされた時、急に脳中にひらめきました。……豊臣秀頼は、薩摩に於て、薨(こう)じたかも知れませぬが、その子菊丸が琉球へ渡ったかも知れぬ。秀頼は、死に臨んで、その菊丸に、太閤遺産百万両が、何処(いずこ)かにかくしてある、と遺言した。……菊丸は、豊臣再興の志を抱いて、琉球へ渡り、さらに、海の彼方の各処にちらばる日本人町をたずねて行った――」

「これは、大層面白い推測だな――」

「呂宋(ルソン)や暹羅(シャム)や咬𠺕吧(ジャガタラ)に在る日本人町の面々は、いずれも、朱印船で押し渡った勇猛の士の子孫どもであれば、戦国の余風を承(う)けて、勇武を最も誇るべきものとしているに相違ないことは、容易に想像されます。げんに、それがしが預かった日本人町育ちのオランダ娘は、武芸を修め、馬術までも身に備えて居ります。……豊臣菊丸としては、それら、異邦各地に在る日本人町の面々を糾合して、一大軍船を組んで、祖国へ攻めかえって来ようという壮図を胸に抱いたのではありますまいか」

「考えられぬことではない」

忠邦は、大きくうなずいた。

「しかし、その壮図は、あるいは菊丸の夭折(ようせつ)かなにか、是非ない理由によって、挫折(ざせつ)した。……

そうして、二百年を経た今日、いずれかの日本人町の末裔が、菊丸の書き遺したであろう太閤遺産のことを発見して、これを手に入れるべく、決死の者を幾人かえらんで、母国へ潜入させて来た。……如何でありましょうか、この筋書は？」

「ふむ！」

忠邦は、大きく吐息した。

三

「殿――、狂四郎の申し述べたこと、これを裏づける資料が、当家の文庫蔵にありましたわい」

武部仙十郎が、不意にそう云って、古稀ともみえぬせかせかした身ごなしで、出て行った。

忠邦は、狂四郎に向って、

「沼津千阿弥が、太閤遺産のことを、どうしてかぎつけたか――？　その方が、推測は？」

と、訊ねた。

「佐賀闇斎が、沼津千阿弥とその父親と懇意であったことは、ただ、家が近所であっただけではありますまい。意図するところあって、沼津家に近づいたに相違ない、と存じます。あるいは、千阿弥は、闇斎から、太閤遺産のことを、きかされたかも知れませぬ。……ついでに申し上げれば、闇斎が同朋である沼津父子に近づいたこと、また、いま、密入国して来た異邦の日本人町の者が、オランダ娘をえらんで、小笠原相模守の許に送って、大奥へ人身御供に上げようとしたこと――この二事から推し測って、あるいは、太閤遺産が何処にかくされているか、江戸城内に、その謎を解く鍵が、かくされているのではあるまいか、と考えてもよかろうか、と存じます」

ほとんど断定にひとしい狂四郎の明快な推理であった。

「ご城内にのう……。富士見櫓の文庫の内には、ないことは、明白だぞ」
「柳営内で、ご老中といえども、一歩も入れぬのは、大奥のみ」
そう云って、狂四郎は、にやりとしてみせた。
「大奥か。……さて――、太閤が遺した巨額の軍用金が、何処かに隠匿されている、という事実の有無が、大奥内をさがせば、判る、と申すか。……とすれば、その方が連れて参ったオランダ娘は、大奥のどのあたりに、その鍵がかくされているか、見当をつけて居るのかも知れぬの」
「御意――」
「ひとつ、その方の口から、吐かせてみせるか」
「さあ、それは、いかがかと存じます」
「容易に吐かぬか？」
「生命を守るために操はすてても、おいそれとは口はひらきますまい」
「その方ならば、吐かせることができるのではないか」
「なかなかもって――」
狂四郎は、かぶりを振った。
仙十郎が、一綴りの書類を持って、戻って来た。
「ございましたぞ。殿が、先年、オランダ商館から召し上げられたしろものでござる」
忠邦が手渡されたのは、元和年間に、平戸に在った英国東印度商会の平戸館長リチャード・コックスの日誌の訳書であった。
「ここ……、これに記してあるくだりでござる」
仙十郎が指し示すくだりへ、忠邦は、目を落した。

『十月三十日（元和元年九月十八日に当る）……支那頭人の予に語りしところによれば、昨夜、かれの弟は、陸路飛脚を遣して、権六殿（長崎奉行長谷川権六）が、小なるジャンクを、長崎に抑留せし由を、報ぜり。該船は、われらの用件につき、支那に派遣する考えなりしが、今は支那に近き高砂（台湾）に、兵士を送る手筈なり、という。しかれども、予は、むしろ、琉球におもむくものならんと考う。皇帝（家康のこと）は、該地に、豊臣秀頼殿の潜伏せるものと認めしなるべし』

忠邦が、黙読するのを待って、仙十郎は、

「次は、翌年の五月五日の日づけの項でござる」

と、云った。

忠邦は、その頁をめくった。

『五月五日（元和二年三月三十日のこと）長崎の村山東庵殿、兵士を乗せたる船十三隻を率いて、高砂島占領のため出帆せり。この島を、かれは右のごとく呼べども、われらはイスラ・フエルモサと称す。また、かれは、五島に留りて、京都より来るべき援兵を待つ由なるが、一般に、豊臣秀頼殿捜索のため、琉球におもむくならん、と思わる』

『六月十三日。当地に行わるる風聞によれば、秀頼殿はなお生存して、薩摩の王の保護下にあり、皇帝死去（家康は元和二年四月十七日薨去）により、この事、世に公にせられ、秀頼殿は皇帝となり、再び大坂に還るべき由なり』

『七月七日。薩摩の王は、生存せる由なる秀頼殿の権利を復すべく、新皇帝（秀忠）に対して、開戦せんと肚をきめ、まず長崎を攻めんとす、と伝えらる』

忠邦が、つぎつぎと頁をめくってみると、日記には、随処に、秀頼生存とその捜索のことが記

されてあった。

四

狂四郎は、忠邦の前に武部仙十郎をのこしておいて、老人の役宅へひきかえして来た。

書院に、千華を呼ぶと、

「当家の主人から、そなたの口を割らせるように、たのまれた」

と、云った。

「…………」

千華は、狂四郎の冷たい面貌を、じっと瞶めかえした。

「そなたが、若年寄の許におもむく目的は、江戸城へ上って、大奥に入り、将軍家の褥の伽をつとめることであった」

「…………」

「将軍家の寵愛を得、中﨟の地位を与えられておいて、そなたが、命じられた仕事を為そうとする、その仕事だが……」

「…………」

「大奥のどこかに、太閤秀吉が遺した百万両の隠匿場所が記されている秘文が、かくされているのを、さがす――それが、そなたの任務」

「…………」

千華は、唇をかたく閉じたまま、身じろぎもせぬ。

「どうだ、当らずといえども遠からずか？」

「…………」

「気の毒だが、そなたに命じた者は、江戸城大奥が、どういう場所か、知らぬようだ。そなたの育った異邦の日本人町の者たちは、戦国の城や館（やかた）の知識しか持ち合せては居るまい。徳川家も十一代に及んだ江戸城の、女ばかりが何百人も住む大奥というところが、いかに奇妙な牢獄か、存じては居るまい。そなたが、たとえ、そこいらの武家娘であっても、この牢獄に入れば、一挙手一投足も、おのが身の自由にはならぬ。まして、異邦の娘ともなれば、まわりの目は、一瞬たりとも、そなたから、はなれまい。……あきらめたがよい」

「いいえ！」

千華は、つよくかぶりを振った。

「わたくしは、大奥へ上ります」

「そなたが上らずとも、欲するものを、手に入れればよかろう。……さいわい、当家のあるじは、老中だ。老中にたのんで、大奥の中から、信頼するに足りる女中を一人、えらべばよいのだ」

「いいえ！　わたくしは、大奥へ上ります、わたくしのこの手で、さがし出します」

千華は、細い長い美しい十指を、さし出してみせた。

女子（おなご）の意地

一

怨恨（えんこん）と憎悪をあふらせた蒼白（そうはく）な面貌（めんぼう）が、無数に、重なりあいつつ、次第に、こちらに迫り寄っ

て来た。
一人のこらず坊主頭であり、そのうちの半数は、朱絹の鉢巻をしていた。
一人が、こちらを指さして怒号すると、一斉に、全員が、罵詈の叫びをほとばしらせた。
凄まじい形相に包囲され乍ら、こちらは、黙然として堪えるよりほかにすべはなかった。
そのうち――。
面前で、白刃が閃いた。
閃かせた者は、
「見たかっ！」
と、叫びあげるとともに、むき出した腹のまん中へ突き立てた。
血汐が、視界いっぱいに撒かれて、総身にふりかかり、その冷たさが、眠狂四郎を目ざめさせた。
「どうなすったのですか、旦那？」
不安をこめた眼眸と問いが、顔へ落ちた。
いつの間に、たずねて来たのか、素通りと二つ名を持つ掏摸のお妻が、枕もとに坐っていた。
「……………」
狂四郎は、起き上って、酔いの残った視線を、庭へ向けた。
陽ざしはまだそこにあって、樹木の影を長いものにしていた。
その彼方に、日暮里の野がひろがっていた。
道灌山を背負うた宗福寺という古刹の庫裡を、狂四郎は、当座のねぐらにしていた。
お妻が、そばに倒されている朱塗りの七合樽を把りあげて、

「まあ、空になっちまってる。全部お飲みになったのですか、旦那？」
　と、あきれ顔になった。
「住職が、うわばみで、非時には、おれにも、毎日、それをとどけてくれる」
　手枕で、うたた寝して、みた悪夢が、沼津千阿弥門下の坊主たちの怨恨と憎悪をこめた罵詈であった。
　若年寄小笠原相模守邸から、お妻を救い出して、神田鍋町の小さな旅籠で、抱いて、別れてから、もう一月あまり経っていた。
「明日、別れたなら、お前は、おれのことを忘れるように努めるがいい」
　そう云っておいたのだが、どうやってさがしあてたか、お妻は、再び、姿を現わしたのである。
「なんの用だ？」
　狂四郎は、顔をそ向けたなりで、冷たく訊ねた。
「…………」
　お妻は、顔を伏せて、おのが膝をそっと撫でた。
　狂四郎は、その女心を汲みとり乍ら、
「お前にまで、かぎつけられるようでは、仮住居を、また移さねばなるまい」
　と、云った。
「旦那！」
「おれは、敵が多い。……真っ昼間から、酔いつぶれていて、お前がたずねて来たのも気づかぬような油断をみせられぬ身だが……」
　そこまで云って、突如、狂四郎は、お妻を突きとばすとともに、畳の上を一回転した。

矢が三本、同時に飛来して、壁に突き刺さった。
狂四郎は、お妻を視やってにやりとすると、
「お前が、連れて来た連中だ」
「旦那！　あたしが、旦那を、裏切るなんて、そ、そんな――」
「お前が裏切ったのではない。尾けられていることに、気がつかなかっただけのことだ」
狂四郎は、無想正宗を腰に落し差すと、床の間に、立った。
「そこを、動かずにいろ」
お妻に命じておいて、壁を切った丸窓から、すっと、縁側へ出て、戸袋の蔭に立った。
庭に忍んだ刺客たちは、いずれも、松や楠や欅の幹に、身をかくしている。次の矢をつがえているに相違なかった。
――暮れるまで、待つことになるか。
こちらも動かず、敵がたも動かぬ四半刻が、過ぎた。
と――。

二

部屋の片隅にうずくまっていたお妻が、すっと起った。
「お妻、動くな！」
狂四郎が、鋭くとどめたが、お妻は肯かずに、なんのおそれ気もなく、縁側へ出た。
「あたしを尾けておいでなすった御仁たちに、申し上げます」
お妻は、樹木の蔭にひそむ面々に向って、凜とした態度で、呼びかけた。

「あたしも、素通りお妻と呼ばれている莫連でござんす。お前様がたを手びきするしまつになったまま、黙ってすっこんでいたのでは、あたしの恥になります。取引させて下さいまし」

刺客がたは、沈黙を守っている。

お妻は、つづけた。

「あたしが、ここで、女子としていちばんはずかしい姿をごらんに入れますから、飛道具をお使いになるのを、止めて頂きとうござんす。……弓矢をすてて、眠狂四郎の旦那と、尋常の勝負をして頂きとうござんす。このお願いを、きキとどけちゃ下さいますまいか」

返答は、なかった。

「お妻、無駄なことだ。そのような取引に応ずる対手がたではない」

狂四郎が云ったが、お妻は、かぶりを振った。

「いいえ、これは、素通りお妻の意地でござんす。意地を通させて下さいまし。このまま、貴方様がたたかって、お勝ちになっても、あたしの気持は、それで、すむというものじゃございません。……あたしの気持のすむように、見すてておいて下さいまし」

お妻は、そう云いつつ、するすると、帯を解いた。

お妻は、恥毛の周辺に、無数の赤い小蟹をいれずみされている女であった。

それを、刺客たちに、見せよう、と思いたったのである。

お召縮緬を肩からすべりおとして、燃え立つような長襦袢姿になったお妻は、

「お前様がた、飛道具をすてて、こちらへ、寄って下さいまし。……女子が、死ぬよりもはずかしい見世物をごらんに入れるのでござんす。この取引、ききとどけて頂きましょう」

と、云った。

ほんのしばしの間を置いて、松・楠・欅の蔭から、刺客三人が、出現した。
お妻は、渠らが縁側へ五歩ばかりの地点に近づくと、長襦袢を脱ぎすてた。
そして、肌襦袢と湯文字を、なんのためらうところもなく、身から剝ぎとってみせた。
流石に、目蓋だけは、ひしと閉じて、胸の隆起を、両掌で掩うた。
刺客たちの視線は、蟬の翼のように薄い翠の茂みへ、いまにも匍い込もうとするか、と思わせる無数の小蟹へ、集中された。
戸袋脇に立つ狂四郎は、羞恥に堪える全裸の立像に、奈良か京都のどこかの寺院で観た勢至菩薩の静けさをたたえているような、一種の感動をおぼえた。
狂四郎が、歩み寄って、長襦袢をひろって、お妻にきせかけてやろうとした——その瞬間、庭の一隅から一矢が飛来して、お妻の裸身が、崩れた。
「卑怯なっ！」
お妻の胸にふかぶかと立つ矢を一瞥した狂四郎は、この男としては曾てないほどの憤怒で、庭へ躍った。
一本の老松から出現した男が、第二矢をつがえるのに向って、まっしぐらに疾駆した。
宙を截って来る矢を、ま二つにして地面へ落しておいて、狂四郎は、七八歩の距離で立ちどまると、
「仲間としめし合せてのしわざか、それとも、貴様一人の残忍か？」
と、訊ねた。
対手は、白刃を抜いて大上段にふりかぶり乍ら、
「使命を帯びた士たる者が、下賤の女づれと、取引などいたすものか！」

と、いずれとも受けとれる返辞をした。
それ以上の問答は、無用であった。
狂四郎は、無想正宗を、青眼につけた。
「眠狂四郎、うぬが円月殺法を破るのは、この雨垣三十郎だぞ！」
「あいにくだが、貴様には、円月殺法はみせぬ」
「なに？」
「貴様の残忍に対しては、こちらも、残忍をもってむくいる」
「ほざいたな！」
雨垣三十郎は、頭上で、手くびを軸にして刀身を大きくゆっくりと旋回させるふしぎな構えをみせつつ、じりじりと進んで来た。
一刀流は、青眼につけた切先を、鶺鴒（せきれい）の尾のごとく、絶えず小きざみに動かすのを、定法としている。刀身を宙に固着させると、切先が居着いてしまって、起りがしらが鈍くなる、という理であった。
しかし、頭上にふりかぶった刀を、旋回させる、という定法は、いかなる流儀にもなかった。
こちらの心気をみだすための工夫に相違あるまいが、意外の業をひそめているとも考えられる。
狂四郎は、青眼につけて、微動だにせず、待つ。
お妻の秘部を視た三人の刺客が、背後にいるはずであったが、渠らが迫って来る気配はなかった。
「参るぞ！」
間合がきまるや、雨垣三十郎は、おのが勝利の不動を確信するがごとく、叫んだ。

「…………」
狂四郎の片頬に、冷やかな薄ら笑いが刷かれた。敵の意外の業を、看破したのである。
「やあっ！」
懸声もろとも、雨垣三十郎が発揮した攻撃法は、おのが五体を地面へたたきつけるようにして、凄まじい突きを放つ——それであった。
同時に——。
狂四郎は、地を蹴って、三十郎の五体の上を跳び過ぎた。
跳び過ぎつつ、無想正宗が斬ったのは、三十郎の帯だけであった証拠には、はね起きた三十郎の前が、ばらりとはだけた。
三十郎は、必殺の突きをかわされた激怒と、帯だけを切断された屈辱で、着物の裾を宙へ一杯に拡げて、猛然と斬りつけて来た。
狂四郎は、斜横に滑走した。
三十郎の口から、異様な悲鳴がほとばしった。次いで、のけぞりざま、むなしく、宙を一閃しておいて、地ひびきたてた。
仰向けに倒れた三十郎の、はだけた股間は、血まみれになり、男根は睾丸とともに、刎ねられて、すこしはなれた地面で、土にまみれていた。
狂四郎が、頭をまわしてみると、三人の刺客の姿はすでに消え失せ、縁側に仆れたお妻の遺体の上には、長襦袢がかけてあった。

三

老中水野越前守邸に於ては――。

奥の一室で、忠邦と武部仙十郎が対坐して、一刻以上も密議をこらしていた。

「かりに、豊臣秀頼が生存したのを、事実といたそう。薩摩へ落ちのびて、菊丸という一子を得たことも、信じるといたそう。狂四郎が推測した通り、菊丸は、海を渡って、異邦各地に散在する日本人町の者どもを糾合して、祖国へ攻めかえって来る壮図を抱いたことも、まこととみとめよう。……さて、問題は、太閤遺産百万両の埋蔵場所を記してある秘文が、豊臣家にとっては敵である徳川家の本城内に、かくされてある、ということだ。面妖(おか)しいではないか。爺い、そうは思わぬか？」

「思いまするな。常識では考えられぬ儀にございまするて」

「爺いの智慧(ちえ)で、推理してみせい」

「さて――」

仙十郎は、主人の前もかまわず、皺手(しわで)で頬をはさんで、身を二つに折る例の癖の姿勢をとった。

忠邦は、脇息に凭(よ)りかかって、側用人の推理の働きを待った。

やおら身を起した老人は、

「これは、あくまであて推量でござるが……」

と、きり出した。

「申してみよ」

「当家文庫蔵に在った英国東印度商会の平戸館長コックスの日記の訳書中に、長崎奉行村山東庵の名が、出て参りましたな」

「うむ。元和二年三月に、高砂島へ、軍船十三隻を率いて、おもむいた人物であろう」

「元和二年と申せば、大坂城が落ち、豊臣家が滅びた翌年でござる。コックスは、村山東庵が、豊臣秀頼殿捜索のために、高砂ではなく琉球へおもむいたらしい、と記して居りまするわい。あるいは、事実であったか、と思われまするな」

「ふむ！」

「さて、その村山東庵なる人物について、身共は、ちょっと、調べてみたところ、これは全く謎の人物でござる」

「村山東庵は、たしか、切支丹宗徒として、その行跡を糺問され、火炙りの刑を受けたのであったな」

「左様でござる。元和五年の春に、品川濤をのぞむ丘の上で、処刑されて居りまするわい。これが、まず、なんとも解きがたい謎と申さねばなりませぬな。……たしかに、伴天連門徒厳禁の法度が下されたのは、慶長十七年八月で、十九年には、大久保忠隣をして、京畿の門徒を検挙し、耶蘇寺を焼きはらわしめて居りまするが、門徒をころばせるために、俵に入れて河原で鉄杖で打ったりなどいたして居りますが、死刑になど一人もいたしては居りませぬ。耶蘇教を禁じたとはいえ、元和四年には、公儀は、長崎奉行に命じて、長崎、平戸の両港を、英国との交易港と為して居りまするし、元和七年には、二代様（秀忠）が、暹羅使節を引見あそばされて居りまするし、すくなくとも、二代様ご存命のうちは、斬首火刑などは行われて居りませぬ。三代様（家光）の世になるや、たちまち、切支丹教徒原主水ら二十数名を火炙りにして居りまするわい」

「そう申せば、切支丹を根絶せんには、諸外国との交通を断たざるべからずと、とりきめられたのは、寛永十年になってからであったな。……切支丹宗を、日本から払うために、伴天連の長崎宿泊を厳禁したのは、寛永五年であったが、まだ外国交易のことはみとめられていた。寛永六年

には、山田長政が、暹羅から方物を献じて、通商の朱印を請うて居り、公儀もこれを許して居る」

「といたせば、元和五年に、村山東庵が、火炙りの刑に処せられたことは、これは、よくよくの仕儀でござった。東庵は、いやしくも、さきの長崎奉行であり、声望は、長崎はおろか北九州一円を圧し、一門は富貴と権勢を誇り、三年前には、高砂遠征という、一大名などとうてい及ばぬ壮挙をやってのけた偉材が、なにゆえに、火刑という無上の恥辱の極刑を受けなければならなかったか――全くの謎に包まれて居りまする」

「町奉行所の記録を調べてみたか？」

「調べてみましたが、東庵は、獄舎では終始口を緘じたきり、切支丹ではないと強く抗弁もして居らず、また、殉教の徒たることをみとめても居りませぬな。ということは、公儀では、他に何らかの理由があって、東庵を火刑に処した、と考えられまするて」

豊臣家が滅びて、まだわずか三年しか経ていない時世であった。

幕府では、士を遇するにひたすら意を致して、その体面を保たしめることに、つとめていたのである。

その刑法にしても、鋸刑とか磔刑とか、獄門、火刑、流刑、追放などの正刑は、士族以上には加えなかった。自刃、改易、閉門、逼塞、遠慮などの閏刑をもって、これに代えていた。

そうした時世に、さきの長崎奉行たる身分の士が、火炙りの刑に処せられたのは、よくよくの理由がなければならなかった。

しかし、それは、町奉行の記録には、一語も、書きのこされてはいないのであった。

「で――身共が、考えますところ、豊臣秀頼生存説と、東庵の火刑は、ひとつのつながりがある

のではあるまいか。東庵は、琉球かあるいは高砂島へ押し渡って、秀頼公と会った。しかし、捕縛して、連れ戻すことをせなんだ。そのことが、露見して、東庵は、火刑に処せられたのではあるまいか。そう考えてみると、なんとなく、合点がゆくようでござる」

「それで――？」

「つまり、東庵が、秀頼公を連れ戻るかわりに、一枚の秘文を持ちかえったのでござる。公儀は、そのことをきいて、東庵を捕えて、責めたが、東庵は、頑として白状いたさず、公儀は、火刑をもってのぞめば白状いたすやも知れず、と一計を案じ申したが、東庵は、薪に火をつけられても、ついに口をひらかなかった、というのが、この爺いめのあて推量でござる」

「成程の――。その秘文を、東庵は、何かのてだてによって、江戸城大奥のどこかにかくした、と想像いたすわけだな」

「御意――」

「東庵という人物については、もうすこし、くわしく調べてみるがよかろう」

忠邦は、ようやく、密談をきりあげた。

老人が下って行くと、忠邦は、机に向って、書類をひろげた。

しかし、すぐに、目を通そうとせず、しばらく、宙へ、双眸を据えていた。

やがて、ふっと、ひくくもらしたのは、

「百万両あれば、明日にも、首座は、わしのものになる」

その独語であった。

去年、本丸老中となった忠邦は、恰度四十歳の働き盛りであった。

西丸老中になったのが、三十五歳の時であった。

——四十歳になったならば、必ず、老中首座に就いている。
忠邦は、加判の列に加わった時、おのれに、そう云いきかせたのであった。
しかし、まだ、その野心は、成就するのぞみは薄かった。忠邦の当面の敵であった水野出羽守忠成は、昨年逝(い)っていたが、なお、忠邦の上には、賢相の名の高い大久保忠真(ただざね)がいたし、十一代家斉は、いまだ、その子家慶(いえよし)に将軍職をゆずって隠居しようとしてはいなかった。
忠邦の脳裡(のうり)には、三十歳にして老中首座に就いた松平定信のことが、あった。
松平定信は、老中首座に就くや、ただちに弊政革新に乗り出している。いわゆる寛政の改革である。
忠邦も、定信にならって、大いなる改革をやってのけたい熱情を、胸中に燃やしているのであった。

村山東庵

一

武部仙十郎が、村山東庵に就いてさらにくわしく調べて、主人水野忠邦に、報告したのは、それから数日後であった。
東庵は、東菴、または東安とも、称(よ)ばれていた。若い頃、切支丹宗徒となり、伴天連から、あんとにおという霊名をもらい、それを安東ともじり、のちに、禁令にふれるのをおそれて、逆に

して、東庵と改めた、といわれる。
村山東庵は、本邦で、はじめて、カステラを作り、売り出した一介の商人であった。
東庵が、何者からカステラの製法をまなんだのか、記録にはのこっていない。おそらく、霊名をくれた布教師からであったろう。
天正十六年、長崎金屋町に、ごく小さな南蛮菓子舗をひらいた。その店で売り出した菓子は、はるご、じやあど、こんぺいとう、あるへる、かるめる、ぱん、おべりやす、ぱあすり、ひくよりす、おぶだうす、ぴすかあと、かすてらぼうる、など——すべて、欧羅巴で売られている菓子を、日本名にせず、そのままの称び名にしたところに、新しさがあった。
これらの菓子のうちでも、カステラの美味は、たちまち長崎はもとより、久留米、熊本あたりまで、その名がひろまった。
店は、三年も経たぬうちに、数倍の規模になり、職人も十数人に増していた。
店が、人気を得た理由が、もうひとつあった。東庵が、ずば抜けた美男であったことである。
長崎の人々は、いつとなく、東庵を、和奴唐と、かげであだ名をつけていた。それは、長崎へ入港する紅毛船の舳の首像に、魔除けとして美しい美神の首の装飾がほどこされていたが、その首像に、東庵の顔が、よく似ていたからであった。おそらく、東庵は、混血児であったろう。
東庵は、太閤秀吉に、カステラを献上した際、秀吉から、
「その方、南蛮人の伜であろう？」
と、下問を受けたが、つよく否定し、
「ただ、物心つかぬ頃、浜辺に捨てられて居りましたのを、豊後臼杵に在った修道士ルイス・ダルメイダ殿に、ひろわれ、育てられました身にございますれば、南蛮の食物によって、かように

紅毛面になったかと存じられます」
と、こたえた、という。
修道士ルイス・ダルメイダは、スペイン人であった。カステラというのは、スペインの古い天国の名の由であり、ポルトガル人などは、スペイン人のことをカステラ人と呼びならわしていた。あるいは、東庵は、そのスペインの修道士の息子であったかも知れない。
東庵が、一躍長崎代官に出世したのは、カステラのおかげであった。
文禄元年、秀吉は、鶏林八道へ日本軍を進めて、自らも、肥前名護屋の垣添城へ、出向いて来た。
それを機会に、それまで切支丹の治外法権の町であった長崎が、秀吉の命令によって、天領にされた。そのお礼言上に、長崎内町の頭人の一人後藤宗印が、代表となって、垣添城へ伺候した。しかし、これが、なにかの手ちがいで、さんざんな不首尾におわった。太閤に拝謁はおろか、本丸の閾の外に、平身低頭することさえも許されず、三の丸の潜門で、そっと、お傍衆へ、献上品をさし出したきりで、すごすごと戻って来た。
このことをきいた東庵が、ひと思案して、長崎を出発すると、名護屋湾の西南岸打椿に陣屋を設けていた長崎奉行寺沢志摩守を、たずねた。
東庵は、志摩守に目をかけられていたのである。志摩守の内室が、東庵の美男ぶりに心ひかれて、お忍びで、カステラを買いに店へ立ち寄った機会をのがさず、東庵は、志摩守に面識を得たのであった。
志摩守は、ただの長崎奉行ではなく、太閤の気に入りで、名護屋陣では、本丸表御門番衆の一人、また後備衆の筆頭であった。明国使節を迎えた時は、使者の一人となったくらいであった。

「てまえを、何卒長崎代表として、ご城内へ遣わされて下さいまするわけには参りませぬか」

東庵に乞われた志摩守は、すぐに承知して、蒲生氏郷へ、添状をつけて、おもむかせた。

東庵は、泊崎陣営へ、氏郷をたずねて行くに先立って、連れていた手代に、四方から、優れた雌鶏を集めるように命じておいた。

手代が、呼子、値賀、鷹島、福島、仮屋などの村々を駆けめぐって、良い卵をうむ雌鶏を百羽ばかり選んで来た時には、すでに、東庵は、太閤に目通り叶うとりなし役を、氏郷にひき受けさせていた。氏郷が、れおという霊名まで持った切支丹大名だったのが、東庵には、さいわいした。

二

七日の後、南蛮菓子を献上したい、という東庵の願いは、秀吉にききとどけられた。

その三日前、東庵は、ひそかに、垣添城の厨膳奉行に賄賂をつかって、当日秀吉が摂る昼食の料理について、注文をつけた。

当日は、なるべく、鴨とか鶴とか猪とか、うなぎ、鯰、すっぽんなどの脂っこいたぐいを避けて頂きたい、とたのんだ。奉行は、それでは鯛の生きづくりに、豆腐とか筍とか白瓜とか楊梅とか、水っぽい料理にいたそう、ときめてくれた。

その日午後——。

東庵が一世一代のカステラ作りは、垣添城三の丸の奥にある、男子禁制の山里丸の内苑で行われた。

東庵と手代の二人は、朝はやく内苑に入って、用意をととのえた。

銅板製の八斤釜を組立てて、炭竈に据えつけ、精選した鶏卵五十個を割って、黄身ばかりを、

大型のとく鉢に入れて、攪拌し、その他、オランダ製のうどん粉一升、高砂島から輸入した白砂糖三斤などの材料をそろえた。

秀吉は、昼食を摂ってからものの半刻も経たぬうちに、淀君ら御中居を左右にしたがえて、大広縁へ、姿を現わした。

東庵は、この時、伊藤小七郎安東、と名のっていた。

秀吉は、カステラとは、どんな材料でつくるのだ、と下問した。

東庵は、ならべた品をひとつひとつ説明してから、

「……このほかに、てまえに伝授いたしてくれました修道士の製法では、片栗粉を混ぜるのでございまするが、てまえは、その代りに、天竺産の蜜を用いまする。片栗粉より蜜の方が、潤いが出まする。総じて、カステラの味は、のどざわりが肝要にて、唾を吸いとってパサパサになるものは下品、とろりとろりと、のど裏を撫でまするのが醍醐味にございまする」

と、述べた。

「よし、やってみせろ」

東庵が、カステラ釜に、材料をつぎつぎと混ぜ、手代が、釜の両側を挟む仕掛けになった炭竈の火の按配に手ぬかりのないように、けんめいになった時、秀吉は、気軽に、大広縁から降りて、庭下駄をつっかけると、つかつかと近づいて来たし、淀君や藤壺も呼んだ。

首尾は、上々吉であった。

半刻も過ぎた頃、釜からたちのぼるなんともいわれぬ芳香が、秀吉ののどを鳴らしたし、東庵の美男ぶりが、淀君はじめ女性たちをうっとりと見惚れさせた。

秀吉は、一片喰べて、

「うまいぞ！」

と、正直に大声をあげたことであった。

秀吉から、この菓子を城内に絶えぬように献上せよ、と命じられ、その代り望みがあればかなえてとらす、と云われた東庵は、いまぞ、とばかり、

「てまえに、長崎二十三町の内町を除く、外町支配をお許し下さいますれば、幸いこの上はございませぬ」

と、言上した。

外町は、長崎奉行の支配外であるため、この新開地には、諸国から無頼の出稼ぎ人が入り込んで、日夜血なまぐさい争いが絶えぬ現状であるが、外町こそ、長崎にとって、諸外国との交易に最も重要であるゆえ、自分は力をつくして、治めてみたい、と考えている。

そういう意味のことを、東庵は述べた。

秀吉は、天晴れの心掛けだ、とほめて、朱印を下した。

一片のカステラが、一介の商人をして一躍代官にのし上らせたのであった。

この噂で、長崎の町は、鼎のように沸いた。

名護屋城へ、お礼言上におもむいて、三の丸の潜門から追いかえされた内町頭人の後藤宗印など、幾夜も睡れぬほどくやしがった。

代官となった東庵が、まず為したことは、まことに巧妙な人心収攬であった。

長崎奉行寺沢志摩守に願って、内町の頭人四人を町年寄というはっきりとした地位に据えてやり、後藤宗印には、猩々緋の陣羽織を拝領してやった。

かれら内町の頭人どもの口を封じたのみか、おのが配下につけたのである。

東庵が、日々に人と家の増している新開地外町を、手中にしたのは、みごとな卓見というべきであった。

櫛比してゆく町家に対して地子銀を徴し、村々からは年貢を上進せしめ、おのれ自身は、運上銀としてわずかに定額二十五貫目を上納すれば足りたのである。

十年を経ずして、東庵は、長崎随一の富豪となった。

秀吉にカステラを喰べさせてから二十余年、村山家は大盤石となり、世は、豊臣家から徳川家のものとなったが、なんらの影響を蒙ることなく、東庵は、長崎町民の信望を、一身に集めて来たのであった。

三

「さて――、元和二年夏、東庵が、十三隻の軍船を率いて、高砂（台湾）を伐った儀でござるが……」

武部仙十郎は、老眼鏡をかけて、膝の前にひろげた絵図面を眺め乍ら、説明した。

「調べてみればみるほど、これは、大変な壮挙でありましたわい」

東庵は、その頃、寺沢志摩守が奉行をしりぞいた後を引き受けて、長崎全市を統治していた。

したがって、東庵が、大御所家康の下命によって、高砂へ遠征する、と布告しても、誰一人反対する者はなかった。

東庵は、幕府から一兵一文の援助も仰がず、独力で、船団を組んだのであった。

長さ五十間横十九間に達する南蛮船ガレマンの構造を模した唐船十三隻を、第一、第二、第三船隊にわかち、それぞれの船将をさだめ、総大将には、東庵の次男長庵を据えた。乗り込ませる

三千八百の兵には、一月間昼夜をわかたぬ訓練をほどこし、オランダより購入した八門の青銅加農砲をそなえ、夥長（航海長）には三十年間も世界の海を押し渡ったポルトガル人をやとった。
この軍船団は、端午の節句――五月五日をえらび、舳艫相銜んで、翔ける鶴の形の長崎の湊から、出帆して行った。
東庵自身は、持舟に乗って、港口女神岬から伊王島をぬけて、沖合まで、見送った。
いわば――。
村山東庵が、その生涯で得意絶頂の日であった。
「……この日を境にして、村山東庵の運は、急転直下、落ちて居りまするな」
老人は、忠邦に、云った。
「壮挙は、失敗であった、とはなにかの書物で、読んで居るが……」
「失敗も失敗、大失敗でござった。……軍船団は、五島沖の男島女島を過ぎ、琉球沖にさしかかった時、凄まじい大時化をくらい、高砂島に流れついたのは、やっと一隻のみ。ところが、その一隻も、蛮人の奇襲をくらって、全員が討死、自決をして相果てて居りまする。明石道友の率いた二隻は、福建沿岸に流され、七隻は浙江へ漂着し、東庵次男の総大将長庵が率いた直属三隻は、遠く安南国へまでたどりつく、という惨たるていたらくでござった」
「ふうむ」
「さあて、ここで、身共が、ピンと来たことがござるのは、ほかでもない、福建沿岸や浙江へ流れ着いた船は、とうとう戻らなんだが、長庵が乗った船一隻のみは、安南から、長崎へ戻って来て居りますると、この事実でござる」
「長庵は、安南で――あるいは、別の国かで――、そこに落ちのびていた豊臣秀頼に出会うた。

爺いは、そう推測するのだな？」

「御意――。あるいは、長庵は、秀頼公と面識があった、と考えられるのでござる」

これは唐突な推測ではない。

東庵の三男寿庵は、霊名ふらんしすこといい、生涯娶らず、俗間司祭として、神父の聖職を与えられていた青年であった。

しかし、その布教ぶりがあまりにはげしかったので、京都に於て捕縛され、オランダ船で高砂へ流刑されることになった。

ところが、その船が、長崎を出て、外海の沖合に至った時、寿庵は、巧みに脱船して、日本へ遁げ戻っている。長崎奉行たる父東庵のひそかな手筈があったからに相違ない。

その翌年、寿庵は、大坂城に入っている。東西手切れとなるや、切支丹武将や信徒ら――明石掃部や高山右近の息子やその旧臣らは、ぞくぞくと、大坂城へ馳せ参じたが、寿庵もその一人であった。

かれらは、秀頼によって約束された信仰の自由を冀ったのである。大坂城内には、聖なる十字架、救世主の像、聖じゃこぼの像を描いた六旒の大旗がひるがえった。

また――。

村山東庵は、大野修理大夫に請われて、ひそかに兵糧、弾薬、大砲を、大坂城へ送った。

この指揮をとったのが、どうやら、次男の長庵であった模様である。

とすれば、長庵が、秀頼と面識があったとしても、なんのふしぎはない。

三男のふらんしすこ寿庵は、夏の陣で、大坂城が焼けるや、討死したが、次男長庵は、長崎へ還っていた。

「その長庵は、父東庵と一緒に捕えられて、江戸まで押送されて居りますが、江戸に到着してほどなく、獄舎内で、死亡いたして居りまする、……ところで、その長庵の妻の妹が、大奥へ奉公に上った、ということが、明らかでござる」
「そうか。長崎奉行の伜の義妹ならば、中臈（ちゅうろう）ぐらいにはなったであろうな」
「まさしく、その通りでござる。中臈となって、三代様の御世まで、大奥でくらして居りまするわい」
「だんだん、謎が解けて参るの。爺いのあて推量ではなさそうだ」
忠邦は、笑った。
「黄金伝説を、さぐってみるのも、面白い仕事でござる」
老人も、珍しく、にやにやしてみせた。

四

夜明けに間近い時刻であったろう。
佐賀闇斎は、目覚めると同時に、枕の下へ、片手をさし入れようとした。
そこに、短銃（たんづつ）がひそめてあった。
「あいにくだが、短銃は、こちらの手に移って居る」
闇に姿をひそめた者は、すかさず、云った。
「ふむ！　忍び入って来たのは、お手前だったか」
「この眠狂四郎が、再訪すると予期されたのではないか」
「いや、一向に――」

闇斎は、牀から出て、有明に、灯を入れた。

明りが闇を隅へ押しやった時、狂四郎は、ゆっくりと牀へ近寄って、枕の下から短銃を、抜き把った。

「一杯食わされたか」

闇斎は、苦笑した。

狂四郎は、短銃から、弾丸を抜きすてて、闇斎の膝の前へ投げておいて、

「貴方が、琉球人普天間親雲上と知って、再訪した」

と云った。

「浜松（水野忠邦）の側用人あたりから、きいたかな」

「貴方は、しかし、琉球からやって来た御仁ではない、とみた。暹羅か呂宋か安南か――いずれにしても、琉球よりははるかむこうの国から、母国を訪れた御仁とみたが、いかがだ？」

「こたえねばいかぬかな」

闇斎は、薄ら笑った。

「こたえて頂こう」

「べつに、こたえなければならぬ義務もないが……」

「貴方の手下が、ぶうめらんという飛道具を使った。琉球には、この飛道具はない。琉球人は、刀を帯びることさえも許されて居らぬ。しかるに、貴方は、短銃を所持して居るし、おそらく、修練も成って居ろう。琉球人ではない証拠だ。……どこかの日本人町の住民と思われる」

「では……、安南あたり、とでもしておいてもらおう」

闇斎は、こたえた。

「安南か。よかろう。……ついでに、もうひとつ、うかがっておこう」
「なんであろう？」
「小銀という、万人に一人と申してもよいからだに仕立てられているあの娘のことだが、貴方が、あの娘をわたしに抱かせようとしたのは、一石二鳥を狙ったことらしい」
「…………」
「貴方は、小銀のからだを、男をして羽化登仙の恍惚境に誘い込むように仕立てた自信があったが、まだ、ためしてはいなかった。……そこで、多くの未通女を犯して居る無頼の徒のこの眠狂四郎を誘って、ためさせることにした。とともに、それを好餌にして、わたしを味方にひき込む心算であった」
「たしかに、左様――」
「さて、貴方の次に考えている計画だが……、もしかすれば、小銀を、大奥へ上げて、将軍家の伽をさせる――それではないのか？」
「…………」
「当ったようだ」
狂四郎は、立ち上った。
「お手前は、それだけ訊ねに、この深夜、忍び入って来たのか？」
「それだけ判れば、充分であろう。……小銀を、大奥に上げるのを、べつに、阻止しに来たわけではない。自由に、計画をすすめられるがいい」
狂四郎は、意味ありげな微笑をのこして、音もなく消え去った。

将軍不興

一

オランダ娘千華を、江戸城大奥へ女中奉公させることが、老中水野忠邦と側用人武部仙十郎によって、きめられた。

その夜更けて――。

眠狂四郎が、老人の役宅の一室へ――千華に与えられた部屋へ、音もなく、姿を現わした。

「そのままに――」

狂四郎は、牀（とこ）から起き上ろうとする千華を、制しておいて、枕辺に坐った。

「明日、大奥へ上るそうだな」

「はい」

「老人は、そなたに、大奥の規模構造、掟（おきて）、慣習について、教えたか？」

「いいえ、なにも……。ただ、満寿（ます）という御伽坊主の指図にしたがえば、万事都合よくはこぶであろう、とだけ申されました」

「ふむ」

狂四郎は、腕を組んで、冷たく薄ら笑った。

おそらく仙十郎は、大奥に就いての知識を、千華に教えまい、と予測した狂四郎であった。

大奥のどこかにかくされているであろう太閤（たいこう）遺産に関する秘文を、千華にさがさせはするが、

千華の手にはにぎらせぬ。それが、狡猾な老人の思案であった。
千華に指図する満寿という御伽坊主は、大奥に於ける仙十郎の腹心に相違ない。
坊主とはいえ、これは、れっきとした女であった。頭髪を剃り落して、尼ていになって居り、年齢は五十前後、全く色気のない存在であった。
そのおかげで、女で、お鈴廊下から出て、中奥（将軍家の官邸）まで行けるのは、この御伽坊主だけであった。たとえば、将軍家が大奥へ入って来た際、中奥の方に何か忘れものをした場合、この御伽坊主が、出て行って、取って来る。
大奥内で、将軍家の寝所にも、御台所の居間にも、それから一番身分のひくい御使番の部屋にも、自由に出入りできるのは、御伽坊主だけであった。
武部仙十郎は、主人が、五年前に西丸老中になった時、西丸大奥の御伽坊主の中から一人、えらんで、腹心とし、去年、主人が本丸老中となるや、満寿というその坊主を、本丸大奥へ移したのである。
――老人は、満寿の手に、秘文をつかませるこんたんだ。
そう看て取った狂四郎は、懐中から、一枚の絵図面をとり出して、千華の顔の上に、ひろげてみせた。
「そなたの脳裡に、大奥に就いての知識を入れさせておく」
狂四郎は、云った。
「はい」
「まず、江戸城の規模だが、本丸・四万七千三百坪、二丸・一万千百坪、三丸・六千四百八十坪、西丸・二万五千坪、紅葉山・二万坪、吹上御苑・十万八千八百坪――。これだけの厖大な地域内

に、世間の目のとどかぬ女だけの世界が、つくりあげられて居る。本丸大奥に二百五十余人、西丸大奥に百二、三十人の女中が、くらして居るのだ」

「…………」

「江戸城の殿舎は、表と大奥に大別されていて、その表は、さらに、表向御殿と中奥に分けられて居る。表向御殿とは、幕府の政庁。中奥は、将軍家が一年の大半をすごす官邸。ここには、女人は一人も住んで居らぬ。……政務から解放された将軍家は、夜はいつも大奥ですごして居るように、一般庶民は、思っているが、わたしがきいたところでは、大奥に入るのは、せいぜい月に数夜のようだ」

次いで、狂四郎は、大奥女中の職名序列を、説明した。

上臈、御年寄、中年寄、御客応待（あしらい）、御中臈——ここらあたりまでが、上位の女中であった。

上臈は、御台所の側近にいて、何小路などと、生家の苗字を名のる。御台所が、京の御所から降嫁された時、多くの公卿（くげ）の息女が、つき添うて来て、この職に就いたためである。上臈は、身分は最高だが、なんの権力も持たぬ。いわば、床の間の置物である。

大奥の実力者は、御年寄であった。老女と称し、御局（おつぼね）とも呼ばれている。表向御殿の閣老に比すべき権力を与えられて、大奥万端をとりしきっている。その人数は、六人。

中年寄は、老女の下にいて、いうならば、老中を扶（たす）ける若年寄の役をつとめる。

御客応待は、将軍家が、大奥に入って来た場合、一切の用務をはたす。

御中臈——これは、若く、美しい。将軍家附きと、御台所附きがいて、将軍家附きの中から、将軍家のお手つきが出る。将軍家の手がつかぬままにすごす中臈を、お清（きよ）と呼ぶ。

「中臈の中から、えらんで、将軍家の寝所へ送り込んでお手つきにするのは、老女のうちの御用がかり——老女の中の首座——が、きめる。ということになって居るが、これは形式で、当代は、将軍家自身が、中臈を庭にならべて、えらんでいたようだ。……お手つきになる中臈の身分は、親許が旗本衆にかぎられて居る。しかし、これも、裏があり、八百屋や菓子屋の娘でも、大層な美女ならば、これを、旗本の家へひき取って、実の娘のようにみせかけて、さらに、別の旗本の養女にする手続きをふめばよいのだ。おそらく、そなたも、どこかの旗本の娘にされ、養女にされて居ろう」

二

「御中臈になれば、必ずお手つきになる機会がめぐって来ますか？」

そう訊ねる千華の表情は、必死であった。

「どうやら、将軍家は、六十を越えたいま、不能者になっているらしい。……男は、不能に陥れば、あきらめる者ともう一度たちもどりたいとあせる者と、ふた側へわかれるようだ。将軍家は、後者と思われる。したがって、おのが不能をなおしてくれる女子を、もとめて居るに相違ない」

「…………」

「さて——、上位女中の下には、御錠口、表使い、同格御祐筆頭、御祐筆、御錠口助、御次頭、御祐筆助、御次、御切手、呉服之間頭、御広座敷頭、御三之間頭、それらそれぞれの御次、それから、御伽坊主がいる。その下に、呉服之間、御広座敷、御三之間、御末頭、御火之番頭、御使番頭、仲居、仲居助、御火之番、御茶之間、御使番、とつづく。末席が、御半下、ということになる。御三之間までが、お目見の資格だ。つまり、将軍家に対して、挨拶することができ、じか

に、口をきくことが許されて居る」
「わたくしは、すぐに、御中﨟になれるのでしょうか？」
「老中がとりはからうことだ。十日も経たぬうちに、将軍家へ目通りできるはずだ。……但し、将軍家が、そなたを、えらぶかえらばぬか——そこまでは、わたしも、予測できぬ。南蛮娘を抱く好奇心が、不能者にあるかどうかだ」
「…………」
「そなたは、是非とも、将軍家の寝所に入って、お手つきにならねばならぬ、という命令を受けているようだ。尤も、将軍家の側妾になるのが目的ではなく、お手つき中﨟にならねば、秘文を手に入れることができぬ、と教えられて居るらしい。……こちらも、大奥の長局ぐらしがどれほど窮屈なものか、覗いたわけではないが、お手つきになればなったで、かえって、一挙手一投足の自由まで、奪われて、身動きできなくなることが、容易に想像できる」
「…………」
千華は、どんなに忠告されても決意をみじんもかえぬ気色を示して、沈黙を守っている。
やむなく——。
狂四郎は、大奥の説明をつづけた。
大奥女中は、すべて、長局に住む。
長局は、一の側、二の側、三の側、四の側、下の側と区別され、一の側に老女（御年寄）、二の側に御客応待、御錠口、三の側、四の側に表使いなどが住み、御火之番とか仲居とかお末とか身分のひくい者が、下の側に住んでいる。
老女ともなると、十室以上も持ち、湯殿も上下ふたつ、台所も完備し、部屋方（使用人）も、

局一人、側六人、下女四人、他にゴサイ二人がいた。ゴサイというのは、男であるから部屋には入って来られず、毎日、御広敷の裏にある七つ口という番所の勾欄に詰めていて、お下（老女の実家）への使い、町への買物などの外用を働いている。

大奥女中のうちで、最も身分のひくい御使番でさえ、使用人を一人乃至二人つかっている世界であった。

すなわち、十五人以上使っている上﨟から、御使番まで、女を主人とする世帯が、寄り集まって、一大団地をつくっているのが、大奥であった。

「そなたが、中﨟となれば、たちまち、七八人の使用人がつけられる。それらの者の目からのがれるのは、瞬時も不可能、と覚悟するがいい。……身動きできぬ状態となったそなたが、秘文のかくされた場所へ、どうして辿りつけるか。そなたは、武部仙十郎の腹心の御伽坊主——満寿とやらに、たのむよりほかにすべはないだろう。満寿が、首尾よく、秘文を手に入れた、としよう。そなたに渡すであろうか。渡しはすまい。この家の狡猾な老人に渡すことになる。そう考えて、まず、まちがいはなさそうだ」

「いいえ！」

千華は、掛具をはねて、起き上った。

「わたくしは、あやつり人形になど、なりはしませぬ！」

叫ぶように云ってから、不意に、千華は、狂四郎に、抱きついた。

ほとんど、口へ唇がふれるばかりに顔を迫らせて、

「貴方が……貴方様さえ、味方になって下されば、きっと、やりとげます！……お願いです！味方になって下さりませ！」

「………」

「今夜は、わたくしから、すすんで、このからだを、貴方様に、さしあげます。……どのように、もてあそんで下されても、かまいませぬ。どうぞ、思うさま、もてあそんで下さいませ。……そのかわり、味方に――」

狂四郎は、しかし、冷たく、千華を押しのけた。

廊下に、人の立っている気配をさとったからである。

それは、この家の主人に相違なかった。

同じ夜――。

狂四郎と全く同じことをしている男がいた。

佐賀闇斎であった。

小銀の前に、江戸城の絵図面をひろげて、大奥に関するすべてのことを教えて、

「よいな、肝心なことは、お前が、将軍家の目にとまって、伽を命じられねばならぬ――それじゃよ。お手つき中臈えらびは、たぶん、吹上御苑で、なされるだろう。あちらこちらの四阿に、えらび出した女中を、接待に置いて、将軍家が、散策し乍ら、これらの娘の中から、気に入ったのがいれば、黙って、扇子を渡す、というやりかただ。……お前は、必ず、将軍家から、扇子を渡されるように、仕向けねばならぬ」

「どうすれば……？」

「これじゃよ」

闇斎は、かたわらに置いた小函を把って、蓋をあけた。

つぎつぎとつまみ出されたのは、さまざまの宝石でつくられた耳飾り、首飾り、そして指輪であった。

「このような品は、まだ、この国には、もたらされては居らぬ。大奥の女中どもといえども、身を飾るものといえば、簪だけに限られて居る。耳を飾り、胸を飾り、指を飾る品があることさえも、知っては居るまい。この翡翠の耳環をつけ、この千顆の真珠でつくった披肩をかけ、この紅玉の指輪をはめて、将軍家の面前に立てば、必ず、目を奪う。……将軍家が、ふらふらと近づいたならば、お前は、この香水瓶の口をひらいて、頸のあたりに撒くがよかろう。この香気もまた、将軍家が生れてはじめてかぐ匂いじゃ。あまりのかぐわしさに、将軍家は、小鼻をひらくであろうて。はっはっ……」

三

その日――。

十一代将軍家斉は、大奥に入っていた。

家斉が、しげしげと大奥に入っていたのは、十年ばかり前までのことで、ここ数年は、お鈴廊下をへだてた中奥で、ずうっとくらして居り、大奥へ入るのは、月のうちせいぜい二三日であった。

将軍家が、中奥から大奥へ入るのは、四つ（午前十時）であった。

入る時は、あらかじめ報される。

すると、御台所はじめ、御年寄、中年寄、御中臈など、ずらりとお小座敷に居竝んで、出迎える。

将軍家と御台所は、まず、お清の間（歴代将軍の位牌をまつった部屋）に入って、そこで、挨拶を交わす。

御台所が、

「ご機嫌よう……」

と、頭を下げると、将軍家は、

「うむ」

と、うなずくだけの挨拶であったが、六十歳を越えた家斉は、そんなしきたりさえ、面倒くさく感ずるようになっていた。

中奥よりも、大奥のくらしの方が、しきたりがきびしく守られて居り、それが、家斉には、わずらわしかった。

たとえば——。

入浴にしても、中奥では、入りたくなければ入らなくてもよかったが、大奥では、そうはいかなかった。

毎日、七つ（午後四時）になると、入浴しなければならなかった。

のみならず、ただ、ざぶっと入って、さっさと上る、というわけにいかなかった。

女中二人がかりで、じっと動かぬ将軍家の全身すみずみまで、糠袋でこすった。

濡れたからだは、手拭いで拭かず、白木綿の浴衣をきせて、水気を吸いとったが、当然一枚だけでは間に合わず、五枚も六枚も、着せかえさせた。

そういうしきたりが、家斉には、やりきれなくなっていたのである。

お清の間を出て、お縁座敷に入り、着流しになって、くつろいだ家斉は、煙草をくれ、と命じ

たが、それははこばれず、中年寄がしずしずとささげて来たのは、梨子地へ御紋散らしで、内側へ銀を延べたのが嵌めてある蓋物のおもく茶碗であった。
それは、薬用の茶碗であった。
家斉は、露骨に不愉快な面持になった。
煙草を、と命じたのに、煎じ薬を三方にのせて来たのである。
これも、しきたりであった。
しきたりだから、家斉は、吺鳴ったりはしなかったが、薬を嚥むことは拒否した。
中年寄は、将軍家がおもく茶碗を把りあげるまで、いつまでも、そこに坐りつづける様子を示した。
「下れ」
家斉は、吐き出すように命じた。
昼食ののちには、いったん、中奥へもどって政務をとらねばならなかったが、その日は、家斉は、お縁座敷を動かなかった。
動かぬことが、しきたりに対する唯一のレジスタンスであった。
日が暮れて来たが、家斉は、黙然として、脇息に凭りかかったなりであった。
あたりがくらくなれば、当然、女中が、燭台へ四十匁蠟燭をつけて、持って来ることになるが、将軍家が、
「あかりを――」
と、命じない限り、それをはこぶことは許されなかった。
これも、しきたりであった。

したがって、家斉は、自分が口をひらかぬ限り、宵闇の中に坐っていることができた。
家斉の姿は、すっかり、宵闇に溶けた。
部屋のあちらこちらに据えられた火鉢の切炭の火が、ぼうっと赤く、闇に滲(にじ)んでいた。
いつまで経っても、家斉が、「あかりを――」と命じないので、女中たちは、不安をおぼえた。
このことが、御年寄に報された。
さぐり足で、入って来たのは、菊岡という老女であった。
「上様――」
「………」
「上様！」
「なんだ？」
家斉は、小うるさげに、返辞した。
「いかがあそばしましたか？」
「なにが、だ？」
「おあかりを、お命じあそばしませぬのは、いかがあそばしたことでございますか？」
「べつに、理由(わけ)はない」
家斉は、こたえた。
「おあかりをさし上げても、よろしゅうございましょうか？」
「うむ」
部屋が、あかるくされた。
菊岡は、家斉の顔を、まじまじと見まもって、

「御匙（大奥医師）を、呼んで参りましても、よろしゅうございますか？」
と、問うた。
「わしは、どこもわるうはない」
「でも……、大奥へ入らせられますおん足が、近頃は、さらに遠のかれて居ります」
「菊岡――」
「はい」
「わしに、もう一人ぐらい、子供をつくってみせよ、と申すのか？」
「それは、もう……、それぐらいのお元気がありますれば――」
「ばかめ！」
家斉は、いまいましげに叫んだ。
「わしは、もはや、余命いくばくもない年寄りだぞ。一日一日を、おのが好みにまかせて、くらしとうなって居るのだ。どうじゃ、そうさせるか？」
「は……？　と、仰せられますと？」
「たとえばじゃ。わしに、自由に、市中へ出て行かせて、茶店の女や、大根を洗って居る百姓娘を、えらばせるか、どうかじゃな」
「そのような儀は……」
「ふふ……許されぬ、と申すのであろう。わかって居る。城から出て行きたい、とは云わぬ。……かまってくれるな、と云って居るのだ。わしのことを、すてておけ」
「は、はい」
「本卦還りしてみて、はじめて、わしは、将軍職というのは、つまらぬものよ、とつくづく思う

ように相成った。……六十年のあいだ、わしが、おのれの自由な意志を働かせた日が、一日でもあったか。一日もなかったではないか。まことに、つまらぬ生涯であった。……成程、わしは、みよはじめ、数多くの妾と寝て、五十五人の子を産ませた。しかし、一度として、わしは、女子に惚れて、溺れたことはなかったぞ。添寝の中﨟が、そばに寝て居り、次の間には、お前ら年寄が控えて居ったし、どうして、快楽をむさぼることができようか。……ばかげたしきたりにしばられて、わしは、男子としての愉しみも、あじわうことはできなかったぞ。……そうではないか、菊岡！」

将軍家の苛立たしい声音をあび乍ら、老女は、こたえる言葉もなく、俯向いていた。

大奥

一

江戸の桜が咲き競うのは、三月三日の上巳佳辰――雛祭の前後であった。

そして、雛祭が終ったところで、江戸の往還は、大層あわただしくなった。

まず――。

諸大名の参府・帰国がなされた。江戸へ入る行列、江戸を去る行列で、品川口、千住口、四谷口など、大賑わいであった。

大奥また大名旗本屋敷の奥向から、御殿女中が、宿下りをするのも、この頃であった。

女子の行儀作法が、殊更にきびしい時代であったので、相応のくらしを営む町家では、ほとん

どといっていいくらい、娘を、武家奉公に出した。当時の風潮としては、裕福な町家で、娘を御殿勤めさせないのは、世間に対して恥となった。知能が足らぬとか、不具者とか——そんな疑いの目で見られるおそれがあったのである。

したがって、娘たちは、窮屈でおそろしい御殿へ奉公するのを、女として一度は通らなければならぬ道、と覚悟していた。

奉公前に、芸能にはげむのも、御殿に上った際、その試みを受けて、堪能を賞せられるのを、栄誉としたからである。これを、「お首尾をした」といった。

旗本直参の娘が、大奥に上るのは、終身奉公が多かったが、町家の娘は、たいてい三年奉公であった。

雛祭が終った頃、宿下りをして来るのが、彼女たちの唯一の愉しみであった。宿下りを待ち受けていた両親のよろこびは、たとえようもなく、御殿髷（まげ）の姿を世間に見せるのが大自慢であった。宿下りの期間は、五日間乃至十日間であったが、その間、親戚（しんせき）知己を集めて馳走饗応（ちそうきょうおう）につとめて、わが娘が奉公のおかげで、どんなに品位を修め、行儀作法を正しくわきまえたか、披露した。また、娘自身は、御殿髷を町方風に結い直して、芝居見物するのも、愉しみのひとつであった。

ちなみに——。

大店（おおだな）では、奉公人が出替りするのも、ちょうどこの頃であった。故参が、のれん分けをしてもらって去り、新参の小僧が迎えられた。

宿下りした御殿女中たちが、短くあわただしい実家ぐらしを了（お）えて、つぎつぎに、大奥や大名旗本の奥向へ戻って来ている——そうしたある日。

南鍋町の菓子舗「風月堂」の娘さんが、五日間の宿下りを了えて、大奥長局に、帰参した。

「風月堂」の長女きんは、水野忠邦にその美貌をみとめられて、西丸へ上り、将軍家世子家慶の側妾の一人となっていた。

さんは、姉ほど美貌ではなかったが、利発さでは姉をしのぎ、姉の出世も手つだって、奉公して三年目で、表使いになっていた。

表使いとは、御年寄の指図を受けて、さまざまの買物をし、また、御広座敷詰の役人と行事の打合せをしたりする、いわば大奥の外交をつかさどる役目で、才智のある者が選ばれた。

さんは、二棹の長持を持って、帰参して来た。表使いであるから、大荷物を携えて戻って来ても、べつにふしぎはなかった。

大奥長局の唯一の出入口は、七つ口であった。七つ（午後四時）になると、そこが閉鎖するので、そう称ばれていた。

七つ口番所には、締戸番という小役人がいて、出入の品物の検査をした。

長持などは、秤ではかる掟になっていた。曽て、女中が長持に入って忍び出て、男と逢曳するとか、また、役者がその中にかくれて大奥へ忍び入ったりなど、しばしば行われたからであった。しかし、いまでは、長持を秤ではかったり、蓋を開けて調べることは、ほとんどなかった。まして、表使いの持ちかえった荷など、締戸番は、手もふれなかった。

さんは、自分が使っている御半下を呼んで、二棹の長持を、長局の奥へ、しずしずとはこばせた。

おのが居間に、長持を据えさせたさんは、人払いをしておいて、その錠前をはずした。

蓋を開けると、中から現われたのは、二人の人間であった。

ひとつの長持からは眠狂四郎が、もうひとつからは四十年配の職人姿の男が、出て来た。

狂四郎がひき連れた男は、吉五郎という、数年前までは、鼠小僧と異名をとった次郎吉と、夜働きの腕前を競った男であった。

いまでは、縁日の夜店をひらく植木屋になっていた。吉五郎は、もともと、十代の頃は、大名屋敷出入りの庭師の弟子だったのである。

二

さんは、狂四郎と吉五郎が長持から出ると、大奥の絵図面をひろげて、まず、おのが居間の位置を指してから、

「宇治の間は、ここにあります。御仏間の隣りにあたります」

と、教えた。

江戸城も、二百余年を経ると、彼処此処(かしこここ)に、怪談が生れている。

幽霊という存在が信じられた時代であった。

大奥も、二百余年を経れば、自殺した女中の数もかぞえきれぬほど、多い。

咽喉(のど)を突いて果てた部屋、身を投げた井戸から、うかばれぬ亡魂が、怨恨(えんこん)をこめた凄(すさ)まじい姿で、夜な夜な、さまよい出る怪談が、つぎつぎと生れたのも、大奥という特殊な世界が、縦のつながり、横のつながりが乱麻となって、複雑奇怪な人間関係をつくりあげ、そこに、女性特有の陰惨な欲情・嫉妬(しっと)・憎悪をあふって、肌の粟立(あわだ)つような淫虐な行為をまねいた結果であろう。

宇治の間も、幽霊の出現する場所のひとつであった。

五代綱吉の頃、宇治の間は、御台所の御座所であった。

その御台所鷹司(たかつかさ)氏が、宝永六年正月に、良人(おっと)綱吉を、宇治の間で、毒殺したという風説が立

って以来、不用の部屋になった。

いわゆる「開(あ)かずの間」にされたのである。

勿論(もちろん)、宝永以後、大奥はたびたび改築されたが、当然不用の部屋となった不吉の宇治の間は、とりはらわれるべきであったろうに、先例旧格を重くみる大奥では、そのまま、宇治の間を建てかえて、のこしたのであった。

そうでなくてさえ、殿中の夜は、人気(ひとけ)がなく、静寂をきわめている。

まして、御仏間のまわりとなれば、深更は無気味な闇の底に沈んでいる。

幽霊のさまよう宇治の間などへ、近づく者は、一人としていなかった。

大奥へ忍び込んだ狂四郎たちが、身をひそめるには、おあつらえ向きの部屋であった。

「ここよりは、天井裏を辿れば、まっすぐに、宇治の間まで、参ることができます」

「忝(かたじけ)ない」

狂四郎は、礼を述べてから、

「ついでに、雛祭の日に、あらたにお手つき中﨟を命じられた二人の女中の部屋も、教えて頂こう」

と、たのんだ。

三月三日、将軍家斉は、吹上御苑に於て、彼方此方(かなたこなた)の四阿に控えた二十七人のお目見女中の中から、二人の娘へ、お手つきにするというしるしの扇子を、渡したのであった。

家斉の目にとまったのは、オランダ娘千華と、宝石で身を飾った佐賀閣斎養女小銀であった。

その首尾までは、狂四郎は、武部仙十郎から、きかされていた。

しかし――。

千華または小銀の柔肌を抱くことによって、はたして、老いた将軍家が、不能をなおしたかどうか――そこまでは、狂四郎も、知るすべはなかった。
御伽坊主・満寿から、武部仙十郎に、
「上様は、千華ならびに小銀を、つぎつぎに、御寝所に召されました」
という報告がなされていたが、結果については、音沙汰がなかったのである。
というのも――。
家斉が、寝所の規則を破ったからであった。
将軍家が、お手つき中﨟と寝る場合、必ず御添寝の中﨟と御伽坊主が、寝室にはべる規則であった。
御添寝の中﨟は、将軍家とお手つきの男女の営みを、しかと見とどけておいて、翌朝、御年寄に向い、
「しかじかのお話をなさり、おん睦びは斯様に為されました」
と、ことこまかに報告したのである。
御伽坊主もまた、御年寄に問われれば、見とどけた一部始終を述べた。
家斉は、この規則を破って、御添寝の中﨟と御伽坊主を、寝室から、遠ざけたのであった。
家斉は、老女筆頭菊岡に、
「そうしなければ、わしの不能はなおせぬ」
と云い、わがままをみとめさせたのであった。
したがって、閨房に於ける家斉と千華、家斉と小銀の営みのさまを目撃した者はいなかった。
流石の仙十郎腹心の満寿も、千華と小銀の口から、どのような仕儀であったか、きき出すこと

は、叶わなかった模様である。

「吉五郎――」

狂四郎は、さんから、千華と小銀の部屋を教えられると、連れを呼んだ。

「へい」

「お前は、ひと足さきに、宇治の間に行ってくれ。わたしは、千華を問うことにする」

「承知しました」

吉五郎は、長持を台にして、身軽く、天井裏へ消えた。

狂四郎は、あらためて、さんへ、冷たく冴えた眼眸を当てると、

「この大奥には、はじめて成った頃から、そのままに、残されている建物があるかどうか、そなた存じて居ろうか？」

と、訊ねた。

「わたくしのきき及ぶところでは、そのような古い建物は、ひとつも、のこされては居りませぬ」

「では、建物でなく、寛永の頃から、そのまま、改築されずに残っているものがあれば、心がけておいて頂こう」

「かしこまりました」

三

――ここだな。

狂四郎は、長局の天井裏を、音もなく進み乍ら、幾つかの部屋を覗きおろした挙句、ようやく、

張りじまいの天井板をそっとずらして、親しい者の寝顔を、発見することができた。
狂四郎が、畳へとび降りると、千華は、敏感にその気配をさとって、ぱちりと双眸をひらいた。
亥刻（午後十時）——すでに、長局内は、しんと更けて、小さな物音ひとつたてても、遠方までひびきそうな静寂が占めていた。
狂四郎は、千華へ一瞥をくれておいて、次の間との仕切襖を開いた。
そこに、千華附きの部屋方二人が、枕をならべて、睡っていた。
狂四郎は、腰から、印籠の代りに携げていた小さな瓢をはずした。吉五郎が呉れたものであった。
瓢の栓を抜いた狂四郎は、容れた酒を、二三滴ずつ、部屋方の唇の隙間へ、したたらせた。
酒には、強い睡眠薬がまぜてあったのである。
狂四郎は、中﨟部屋へひきかえして来ると、褥から出ようとする千華をとどめておいて、枕元へ座を占めた。
「ききにくいことを、訊かねばならぬ」
「…………」
千華は、大きく双眸をみひらいて、狂四郎を仰いでいる。
「将軍家は、そなたを、寝所へ呼んだそうだが……、不能者ではなかったか？」
「…………」
千華は、なにかこたえようと、口をひらいたが、急に、目蓋を閉じ、唇もかたく合わせてしまった。
「こたえてもらおう」

「…………」
「将軍家は、添寝の中﨟と御伽坊主を遠ざけた由。……好色の老人のことだ。そなたの肌身を、せっせと弄んだに相違ない」
「…………」
「その結果はどうであったかだ。……不能はなおったか？」
「…………」
「そなたは、小銀という娘と二人、お手つきとしてえらばれた。どちらが、将軍家の不能をなおしたか、そのことは、こちらにとっても、重大なのだ。……それとも、二人とも、将軍家の不能をなおすことが、できなかったか？」
狂四郎の訊問に対して、千華は、なおしばらく、沈黙を守っていたが、やがて、小さな声音で、自分を抱いて欲しい、ともとめた。
狂四郎が大小をすてて、褥に横になると、千華は、不意に、物狂おしく、すがりついて来た。
狂四郎が、口をその唇からはなすには、かなりの時間を費やした。
顔ははなしたが、女の秘処をまさぐる指は、かえって、濡れた柔襞の奥へ、吸い込まれるように内れていた。
「さ——こたえてもらおう。将軍家の陰は、痿えて、ついに起たなかったか？」
「いえ——」
千華は、小さくかぶりを振った。
「起ったか？」
「最初は、駄目でしたけど、二度目には……」

「二度目？　日をへだててか？」
「三日置いて……」
「三日か。そなたと小銀と、いずれがさきであった？」
「わたくしが――」
「そなたをさきに呼び、その夜は、不能で、三日を置いて、不能ではなかった、というのか？」
「はい」
――次に呼んだ小銀が、不能をなおらせた。そこで、自信を得て、この千華を三日後に呼んで、この千華とも営むことができた。
「で――その後、幾度、呼ばれた？」
「二度だけで、その後は、沙汰がありませぬ」
「呼び出されないとは――？」
「………」
千華は、にわかに喘いで、身もだえはじめた。
狂四郎の方は、逆に、冷静になり、
――小銀の許にも忍んで、吐かせなければなるまい。
と、思った。
もしかすれば、小銀の方は、三度が四度も、呼ばれているのかも知れなかった。

四

宇治の間では――。

夜働きの吉五郎は、屏風の蔭で、往生していた。

「開かずの間」であって、実は、そこは、大奥長局の淫虐を、まざまざと見せつける秘密の場所にされていたのである。

吉五郎が、忍び込んでほどなく、ひそやかに、二人の女が、入って来た。三十年配の中年寄と四十を越えた御伽坊主であった。

中年寄は、御台所の座である上段の縁に腰かけて、脇息に凭りかかった。

御伽坊主は、その前へ、するすると進むと、中年寄が立てた膝から、まとうた衣裳を、左右へ剝ぎ拡げて、最後の白羽二重の腰巻もはだけさせた。下肢をくまなくあらわにされた中年寄は、御伽坊主にそうされる前に、立膝を思いきりひろびろと開いた。

御伽坊主は、その股間へ、顔を埋めた。

屏風の蔭に身をかわしていた吉五郎は、

――途方もねえ景色を眺めさせやがる。

と、首を振った。

目蓋をひしと閉ざした中年寄が、しきりに身を弓なりに反らし乍ら、怺えきれずにもらす呻きと、御伽坊主が秘処をむさぼる淫靡な舌音は、およそ半刻近くもつづいて、吉五郎を、うんざりさせた。

この二人が、出て行って、

――やれやれ。

と、吐息したのも、束の間であった。

また二人――こんどは、いずれも二十歳を越えたばかりの若い女中が、忍び入って来ると、い

きなり、畳の上へ、逆抱きに寝ころび、対手の衣裳の前をひきむしるようにひらかせると、息づかいもせわしく、互いの丹穴へ唇を吸いつけ、あふれる津液を嚥みはじめた。

しかし、この烈しい嬉戯は、ほんの短い時間裡に、同時に、二人とも、ひと叫びとともに、相果てた。

彼女たちが出て行くと、ほとんど入れちがいに、吉五郎は、三組目を迎えなければならなかった。

一人は、疾くに五十を過ぎたとみとめられる老女であり、もう一人は、まだ二十歳に満たぬういういしい娘であった。

老女は、部屋子を仰臥させると、

「よいかえ、なにも、おそれることはありませぬぞ」

と、ささやきかけておいて、その下肢を押し拡げさせた。

脛や腿は、いたいたしいばかりに、稚い細さであった。

老女がおのれもまた、下半身をあらわにして、仰臥した部屋子の膝の間へ入るのを、吉五郎は、目撃して、

——おっ！

と、思わず、胸中で、唸った。

老女の股間には、黒光りする逞しい男根が在ったのである。

——鼈甲製だぜ、あれは！

十数年の長い期間、大名旗本屋敷へ忍び込んで、盗みを働いた吉五郎も、御殿女中が、偽物をこのように使用する光景を、見せつけられたのは、はじめてであった。

——むごいことをしやがる！
疼痛(とうつう)に呻きつつ、ずるずると、背を摺(す)りあげる部屋子のあわれな、いたましい姿を、吉五郎は、眺めつづけてはいられなかった。
とび出して行って、老女を蹴(け)とばしてやりたい衝動にかられ、それを抑えるのに、吉五郎は、あぶら汗をかいた。
偽物が完全に、体内に嵌(は)まった時、部屋子の閉じた目蓋の蔭から、泪(なみだ)が噴きあがっていた。
吉五郎は、三組目が去ると、豆しぼりで、顔やら頸(くび)やら胸やらの汗を拭き乍ら、
「なにが、開かずの間だ。とんだ幽霊だぜ」
と、いまいましく、呟(つぶや)きすてたことだった。
狂四郎が、天井裏から姿をみせたのは、それから、半刻も経った丑刻(うしのこく)（午前二時）であった。

万年忍び

一

「旦那——、この大奥ってえ女護ガ島は、想像以上に、乱れて居りますねえ」
吉五郎は、この「開かずの間」で目撃した淫靡な光景を、眠狂四郎に、告げた。
「女の本性に反する世界が、二百年以上もつづけば、乱れるのは、当然だろう」
「旦那の方の首尾は、如何(いかが)でございました？」
「二人の女は、ともに、お手つきになっていた。小銀という娘の方は、今宵も、将軍の褥(しとね)に入っ

ているらしい」

狂四郎は、千華の部屋を抜け出したその足で、小銀の部屋へ忍び入ってみたのであった。小銀の姿は、そこになかった。牀(とこ)がのべられていなかったので、将軍家の伽(とぎ)におもむいたと判断されたのである。

「で——どうなさいます？」

「うむ」

狂四郎は、腕を組んだ。

千華も小銀も、将軍家斉のお手つきとなって、褥の中で、なにかをねだろうとしているのであった。

そのなにかが、こちらには、予測がつかぬのである。目的は明白なのであるが、それを手に入れようとする方法(てだて)を、千華・小銀の口からきき出すことが、叶(かな)わぬ以上、こちらは、こちらで動かざるを得なかった。

狂四郎は、思慮の時間を置いてから、さんのくれた大奥の絵図面をひろげた。

なお、しばらく、沈黙をつづけていた狂四郎は、

「吉五郎、お前にやってもらうのは、ここ（と指さして）へ忍び込んで、大奥の旧事録の中から、元和帖(げんなちょう)を盗んで来る——このことだ」

と、云った。

狂四郎の指さした処(ところ)は、大奥に関するさまざまの書類が所蔵されている倉庫であった。

儀式典礼、年中行事、日常のしきたり、女中法度(はっと)と分限、そして、大奥が成って以来の歴史を記しとめた旧事録などの書類が、そこに、ならべられているはずであった。

大奥の女中は、奉公出仕に際して、誓詞をさし出すが、その条項のひとつに、大奥内に起った如何なる出来事も、たとえ親に対しても絶対に口外せぬ、というのがあった。

この誓詞は、かたく守られつづけ、柳営上下の女中は、大奥の見聞を、人に語ったり、自記したりしてはいなかった。

大奥の旧事が、記し残されているのは、その倉庫だけであった。

旧事録は、慶長帖、元和帖、寛永帖、正保帖、慶安帖、と年代を区切って、綴られている、ということであった。

狂四郎は、吉五郎に、その旧事録の中から、元和帖を盗んで来るように命じた。

吉五郎が、天井裏へ消えると、狂四郎は、床柱へ凭りかかって、目蓋をとじた。

この大奥には、幾度か忍び込んだ経験を持つ狂四郎であった。しかし、それは、なにかの異変が起り、それを解決するためであった。

このたびは、なんの異変も起ってはいなかった。

その有無もたしかではない一通の秘文を、手に入れようと、犬のように嗅ぎまわる役割であった。この男にとっては、最も苦手な仕事であった。

どこかに正体の知れぬ敵がひそみ、その敵が姿を現わすのを待つ——といった忍耐力は、異常なまでにきたえられていたが、八丁堀の役人方のまねをする行為には、嫌悪がともなった。

その嫌悪を抑えて、敢えて嗅ぎ犬になったのは、鎌倉の鶴岡八幡宮の神楽殿で、割腹自殺を遂げた同朋沼津千阿弥のことが、いまもなお、脳裡の片隅にこびりついているからであった。

邪曲の時世を責めたてる檄文をかかげ、古式に則って十文字腹を切り、その門下生に、首を撃ち落させる凄絶な儀式を演じてみせた沼津千阿弥は、市井の無頼者の認識の外にあった。

諫死（かんし）などという行為に、嘘のにおいをかぐ者が、目前で、その無駄な死を見せつけられて、受けた衝撃は、小さなものではなかった。
狂四郎の脳裡には、いまもなお、赤橋上で千阿弥と交わした問答が、時と処をえらばずに、よみがえって来る。
「剣は、おのれを守るためにあって、おのれを斬るためにつくられては居らぬと思うが……」
「ははは……、おのれを守る、か。この卑しさ！」
千阿弥の表情は、軽侮をこめたものであった。
――人を一人も斬ったことのない男が、おのれの腹を切ることができた。無数の人命を断ったおれには、自身の腹を切る勇気はない。
あの時以来、おのれにくりかえしている独語が、狂四郎をして、敢えて嫌悪をともなう八丁堀の役人方のまねをさせている、ともいえる。

二

檜戸（ひのきど）がしのびやかに開けられるのを視て、狂四郎は、すばやく、屛風の蔭へ、身をかわした。
しかし、
「眠狂四郎殿は、そこにおいでか」
と呼びかけられて、苦笑がわいた。
五十年配の御伽坊主を、そこに見出して、
「千華に指図する満寿というのは、そなたか？」
「はい、左様でありまする」

「わたしが、今夜、ここに忍び込んだことを、たちまち、気がつくとは、流石だな」
狂四郎は、武部仙十郎には無断で、宿下りして来た「風月堂」の娘さんをくどき落して、大奥へ潜入したのであった。
御伽坊主は、表情の動かぬ冷たい態度で、
「無謀なことをなされます」
と、とがめた。
「わたしは、べつに、武部老人の走狗(そうく)となっているわけではない。時と場合では、敵の側にもまわる」
「この大奥内で、わたくしに向って、大層はっきりとした言葉をお口にされますな」
「目下のところは、そなたとは、味方ではないとしても、敵ではなかろう」
「お手前様は、わたくしにとって、邪魔な妨得者(ぼうがい)と申せまする」
「競う対手がいることは、はげみになろう」
「申されましたな」
満寿は、薄気味わるい微笑を、口許(くちもと)に刷(は)いた。
「こちらの動くのを、見て見ぬふりをしていてくれることだ」
狂四郎は、云った。
「しかたがありませぬ。そういたしましょう。お手並のほど、拝見つかまつります」
満寿は、意外にあっさりと、一揖(いちゆう)しておいて、去った。
吉五郎が、戻って来たのは、そろそろ夜明けが近い時刻であった。
床柱に凭りかかって、うとうとしていた狂四郎は、天井裏からとび降りて来る気配に、目蓋を

ひらいた。
「これでございますか？」
さし出された部厚い書類を一瞥して、
「うむ」
と、うなずいて、受けとった。
『元和帖』
そう記された表紙がつけられていた。
狂四郎は、目を通しはじめた。
まず――。
元和五年正月元旦、今年よりは、御本丸に於ては、きびしく奥と表がへだてられる掟がきめられ、女中は年寄役といえども表へ出ることは叶わず、また、たとえ老中・若年寄であっても勝手に奥に入ることは禁じられた旨が、記されてあった。
「……諸大名衆も、大奥の掟にならう由にて、昨年までは、御三家がたはじめ、仙台中納言殿、薩摩中納言殿も、年寄りたる女中は表向へも自由に立出で、徘徊いたし候。小松中納言殿などは、表の書院に御出の節には、女中が御刀を持ちて附き添い出で候しが、今年よりは、すべて、奥と表はきびしく、へだてられることに相成り候」
次いで――。
奥と表をへだてるのを機会に、大奥内の行事、女中法度・分限が、はっきりと定められたことが、ことこまかに記されてあった。
女中どもは、いかなる理由があるにもせよ、一人で吹上へ出ることは、厳しく禁じられる、な

ど——。

当時、吹上には、尾張・紀伊・水戸の三家はじめ、親藩、譜代の大名の邸宅が建ちならび、江戸城を西側から守備する役割をはたしていた。それらの大名屋敷が廃されて、十三万坪に及ぶ広大な庭苑(ていえん)がつくられたのは、明暦の大火以後であった。

大奥の女中たちが、口実をもうけてそれらの大名屋敷へおもむき、ひそかに、藩士と逢曳していた事実があったに相違ない。

狂四郎は、つぎつぎと頁をめくってゆき、やがて、その年、将軍秀忠が江戸城を発して、上洛(じょうらく)の途に就いた五月上旬のくだりを、読みはじめた。

秀忠が江戸城を留守にした——その翌日のことであった。

一人のお手つき中臈が、行方不明となったことが記されてあった。

秀忠の御台所(みだいどころ)は、嫉妬心の強い女性で、かねてより、梅路といったそのお手つき中臈を憎んでいた。

梅路が、行方不明になったのも、原因はそこらあたりにあるのではなかろうか、と記述者も、ほのめかしていた。

「……あるいは、梅路殿は、万年に身を投げたるや、と思わる。なお、梅路殿は、今年春、品川の丘にて処刑されたる先の長崎奉行村山東庵の次男長庵の妻が妹にあたれり」

そこまで読んで、狂四郎は、ふっと、微笑した。

——梅路は、二代将軍の御台所によって、殺された。

狂四郎は、吉五郎を視やると、

「わたしは、二人の女が、将軍家のお手つきとなって、閨(ねや)の中で、なにかをねだるものと、考え

ていたが、これは、考えちがいだったらしい」
と、云った。
「へえ――？」
「べつに、ねだらずとも、秘文の隠匿場所をつきとめることができる」
「…………」
「吉五郎、お手つきが、閨へ呼ばれて、将軍家にも添寝の中﨟にも、また次の間に控える老女や御伽坊主に、咎められずに、自由に行ける場所が、どこか判るか？　その場所は、たったひとつしかない」
「どこでございます？」
「万年さ」
「厠だ」
「万年、と申しますと？」
「厠を万年というんで？」
「将軍家、御台所、そしてお手つき中﨟の入る厠は、非常に深く掘ってあって、永久に汲み取ることがない。表御殿や長局の糞尿は、葛西船が汲み取りに来るが、この三つの厠は、万年と称ばれて、一生に一箇所なのだ」
「成程――」
「将軍家の寝所に附属しているお手つき中﨟の厠の位置、といえば、このあたりの見当だな」
狂四郎は、絵図面の一点を指さして、
「どうだ、吉五郎、お前は、庭から、この厠の底へもぐり込むことができるか？」

と、訊ねた。
「やってみましょう」
「たのむ」

三

四半刻ののち、狂四郎は、再び、千華の寝室へ、降りていた。
千華は、ねむっていなかったらしく、狂四郎が畳に立つのと同時に、起き上った。
次の間では、狂四郎に睡眠薬を嚥まされた部屋方二人が、なお、正体なく昏睡状態をつづけていた。
狂四郎は、端坐すると、千華を冷たく凝視して、口をひらいた。
「元和のむかし、長崎奉行村山東庵の次男長庵を総大将とする、高砂遠征隊が、琉球沖で大時化をくらって、軍船団はばらばらになり、長庵の率いた三隻のみ、安南に流れ着いた事実がある」
「…………」
「その安南に、日本を脱出した豊臣秀頼とその子菊丸が、住んでいた。村山長庵は、秀頼に再会し、再挙の相談を受けた。秀頼は、長庵に、大坂城からひそかにはこび出した軍用金を隠匿してあることを告げ、自分あるいはその菊丸が、日本へ還ったあかつきには、その軍用金をもって、再挙する旨を、語った。そして、秀頼は、軍用金隠匿の場所を記した一枚の秘文を、長庵に手渡し、再挙の秋にそなえるように、命じた。……長庵は、その秘文を持って、帰国した。たまたま、このことが、公儀にかぎつけられ、長庵は、父東庵とともに、伴天連狩りの名目で、捕縛された。長庵は、捕縛寸前に、その秘文を、この江戸城大奥でお手つき中臈となっている義妹に、あずけ

た。最も、安全なかくし場所と考えたのだ。そして、その由を、安南の秀頼にも、通報しておいた」

「…………」

「ところが、長庵の義妹梅路も、二代の御台所の憎しみを受けて、殺害された。かくて、秘文は、梅路の死とともに消えて、太閤遺産は、いまだ、何処かの土の中にねむりつづけている」

「…………」

「あれから二百余年を経て、安南にある日本人町の面々は、太閤遺産を手に入れるべく、幾人かの決死の者を、母国へ潜入させた。そなたも、その一人」

「…………」

「そなたは、梅路がどこに秘文をかくしたか、およその目当をつけて、大奥へ上って来た。お手つきとなって、人目にふれずに、自由に入ることのできる場所に、それはある、と推測が成っている」

「…………」

「その場所とは、万年と称ばれる厠だ」

千華は、大きく双眸（そうぼう）をみひらいて、狂四郎を瞶（みつ）めかえしている。

「そなたは、将軍家寝所へ、二回呼ばれている。そのたびに、万年に入ったであろう。しかし、秘文を手に入れることは、できなかった」

「…………」

「秘文は、たぶん、夜が明けぬうちに、わたしが、手に入れる」

「え?!」

千華は、白い頬をふるわせた。
「しかし、そなたには、渡さぬ」
「…………」
「そなたを監視している御伽坊主満寿が、いるからだ。そなたは、満寿をだまさねばならぬ。……わたしは、秘文を手に入れたならば、至急に、贋(にせ)の秘文をつくる。それを、そなたに渡す。そなたは、それを、満寿に、取り上げられるがよかろう」
「…………」
「そなたが、大奥からひまを取って、下って来たならば、わたしは、秘文をゆずることにしよう」
「はい！」
千華は、頭を下げた。

四

吉五郎は、その万年厠の中へ、もぐり込むことに成功していた。
そこは、ひとつの深い谷間から、およそ二丈余の石垣が積まれ、その上に黒塗りの建物がそびえていた。
土蔵ともみえず、さりとて望楼のつくりでもないのを一瞥して、吉五郎は、
——ここだ！
と、さとったのである。
石垣をよじのぼって行くと、建物の床下にあたるところに、鉄格子をはめた窓が切ってあった。

吉五郎は、その鉄格子を、苦もなくはずした。
上も下もがらんどうで、仰げば、はるかな高処(たかみ)に、四角に切った孔が、小さくみとめられた。
——ちげえねえ、厠だ！
しかし、臭気が、ここまであがって来ないところをみると、底は石垣よりもさらに何丈も下方のようであった。
壁に数尺間隔で、楔(くさび)が打ち込んであるのをみとめた吉五郎は、それにすがって、するすると登って行った。
四角な落し口が、一間ばかりの頭上に近づいた時、吉五郎は、眸子(ひとみ)をこらした。
落し口からもれる仄明(ほのあか)りをたよりに、闇に目の利く吉五郎は、視線をまわしてみて、
「お！　あれかな？」
と、すかし視た。
落し口から三尺ばかりはなれた床板に、なにか黒いものが、くっつけてあるのが、みとめられた。
「よし！」
吉五郎は、登りつくと、楔を左手で摑(つか)みしめて、右手をさしのばした。
指さきが、それにふれた。鉄の函(はこ)が、床板に鎹(かすがい)で、打ちつけてあった。
「これをはずすのは、ひと苦労だぜ」
並の人間なら、双の腕をいっぱいにのばしての作業に、これは不可能とあきらめるところだが、そこは、大名旗本屋敷専門に夜働きを十数年間もやってのけた吉五郎のことであった。
鎹を、素手でひき抜く技術も身につけていた。

「うむっ！」
渾身の力をこめて、函を、床板からはずした——その時。
灯火がゆれて、人の気配が、落し口からつたわって来た。
はっと、五体をこわばらせた吉五郎は、蝙蝠のように壁に吸いついて、息をころした。
落し口から、ひとつの顔が、のぞいた。
——小銀という娘だな。
吉五郎は、闇に身を溶け込ませて、落し口の顔を、睨みあげた。
しばらく、のぞいていた顔が、やがて、ふっと消えた。
——見やがったかな？
吉五郎は、ほっとし乍ら、見られたかどうか、不安をのこした。
壁をつたって降り、鉄格子をはずして、窓から匐い出た時、夜はしらじらと明けそめていた。
「やれやれ——」
吉五郎は、懐中から、函をとり出して、かざしてみた。
「この中に、百万両の秘文が、かくされてあるとすると、こいつは、ごうぎだぜ」

安南日本人町

一

日暮里・道灌山の宗福寺に、武部仙十郎が、駕籠を乗りつけて来たのは、それから十日あまり

後のことであった。
月がかわっていて、灌仏会（かんぶつえ）が近づき、宗福寺も、納所（なつしょ）や小坊主が、灌仏堂の屋根を葺（ふ）く牡丹（ぼたん）や芍薬（しゃくやく）や百合（ゆり）の花を集めたり、唯我独尊の御像を洗ったり、その用意にいそがしく立ち働いていた。
山門をくぐって、駕籠から降り立った仙十郎は、雨もよいの朝空にそびえる本堂を仰いで、
「狂四郎め、こんなところにねぐらをきめて、なんのこんたんを練って居るのやら……」
と、呟いた。
この老人が、狂四郎の寓居（ぐうきょ）を訪れたのは、曽（かつ）てないことであった。
狂四郎は、まだ庫裡（くり）で、寝ていた。
仙十郎は、珍しく焦躁（しょうそう）の気色をかくさずに、狂四郎が書院に出て来るや、いきなり、
「この年寄りに、一杯食わせるとは、許せぬ！」
と、大声で云うと、袂（たもと）からつかみ出した一枚の古紙を、狂四郎の膝（ひざ）へ投げつけた。
「こんな贋ものをつくって、わしにつかませるとは、何事じゃ！」
「………」
狂四郎は、ただ、薄ら笑いを返したばかりであった。
吉五郎が、お手つき中﨟の「万年厠（がわや）」から盗んで来た函の中には、たしかに、元和のむかしつくられた秘文が、かくしてあった。
狂四郎は、宇治の間で、それを受けとると、あらかじめ用意して来た古紙に、それを巧妙に写しとった。勿論（もちろん）、秘文が明記した地名を変えておいた。
「本ものの方を、わしに渡してもらおう」
「百万両あれば、主人が老中首座に就ける——そう考えている、と正直に打ち明ける素直さは、

貴方には、ないのか」
「わしは、腹を立てて居るのだぞ、狂四郎！　お主ほどの男も、百万両ともなると、我欲がわくとは、見そこなったわい」
「ご老人――。貴方は、海外に於て、祖先がつくりあげた日本人町を、必死に守っている者どものことを、考えてやったことがおありか？」
「……む」
「わたしは、数年前から、蘭書によって、海外に在る日本人町に関して、いささかの知識を持った。……高砂にも、呂宋にも、東京にも、安南にも、柬埔寨にも、老撾にも、暹羅にも、その他、南洋諸島には、いまなお、日本人町が在る」
狂四郎は、鋭い眼眸を、老人に当てて、語った。
曽て――。
呂宋の副総督モルガは、日本人町のわが同胞について、次のように記している。
『日本人は、気概ある人民にして、性質佳良、勇敢なり。……頭に優美なる髷をむすび、腰に大小の刀を佩び、鬚髯すくなく、風采挙措は高尚なり。かれらは、困苦欠乏に堪え、事に臨んで果敢』
英国人ジョン・ダビスも、その航海記に、
『けだし、日本人は、そのおもむくところ、何処なりとも、恐怖を起させる剛直果敢なる人民として知られるため、東印度のいずれの湊に於ても、武器を携えて上陸することを許さず……』
と、書きのこしている。

蘭印総督クーンの施政報告の中にも、日本人はモール人と異なって、非常に気前がよく、豪放である旨が、書き添えてある。

ビルマに於ては、宣教師アンリケをして、

『日本人は、その性、東洋諸民族中、最も傑出し、栄誉を重んじ、生命を賭しても、これを維持する面目、欧州の騎士に比していささかの遜色もなし』

と、賞揚せしめている。

ジャワ島に於ては、原住民は、オランダ人よりも、日本人の方を畏敬した。

日本人がいかに勇猛果敢であったか、次のような事実が、英国海運史に、記録されている。

西暦千六百二十五年（寛永二年）――徳川家光が、三代将軍となって、いよいよ、厳しい鎖国政策に乗り出した頃である。

英吉利に、ジョン・ダビスという高名な航海家がいた。北海航路を発見し、海図製造にすこぶる功績のあった人物であった。

その年、ジョン・ダビスは、数隻の艦隊を率いて、印度洋を渡り、呂宋におもむくべく、航海していた。

たまたま、ボルネオ附近を帆走している折、一艘の見馴れぬ船を発見した。

船首に「八幡大菩薩」の旗をひるがえしているのを、望見したダビスは、これが、南洋諸国を侵して、猛威をふるっている倭寇と知った。

当時は、他国の船と見れば、これを敵とみなして、撃沈するならわしがあった。

ダビスは、日本船に対して、近くの港へ寄るように、命令した。

日本船は、意外に柔順に、命令に服した。それは、せいぜい七十噸ぐらいの船で、七八十人の

日本人が乗り込んでいた。

ダビスは、かれらが海賊であることをみとめたが、大砲も小銃も持たず、ただ、身に大小の剣を佩びているだけを、たしかめた。船には、暹羅や柬埔寨や安南から仕入れたらしい、絹もの、象牙（ぞうげ）、黒砂糖、更紗（さらさ）、鮫（さめ）皮、珊瑚（さんご）珠などを積んでいた。

ダビスは、

——どうやら、海賊ではなく、交易船らしい。

と、思った。

二

その夕刻——。

日本人は、べつに怖れる気色もなく、抵抗する様子もなく、船を取調べに来たダビスに、英国艦隊を見物したい、と申し入れた。

かねて倭寇の勇武を怖れていた水夫の中のある者は、日本人は必ず禍心をひそめているに相違ないゆえ、充分に警戒しなければならぬ、と忠告した。

ダビスは、笑って、その忠告をしりぞけて、日本人の艦隊見物を許可した。

軍艦へやって来たのは、二十数人であった。

甲板に立つやいなや、渠（かれ）らは一斉に、背負うた刀を抜きはなって、数百に及ぶ英国水夫へ斬りかかり、阿修羅の凄（すさ）まじさを発揮した。そして、あっという間に、ダビスを殺して、一時、その軍艦を占拠した。

英国側は、他の三隻の軍艦から、銃撃を雨とあびせて、ようやく、二十余人をのこらず、撃ち

殺した。
次いで、英国艦隊は、日本船に向って、砲撃を加えたが、一人として降伏する者はなく、また海中へ遁走する者もなく、ことごとく壮烈な討死をとげた。
大砲も銃も所持せぬ日本人が、わずか七八十人で、数十門の大砲を備え、千数百人がすべて銃を持った英国艦隊に、なぐり込みをかける無謀を、あえてやってのけたのも、当時、いかに日本人が、南洋の海原をわがものと思いなしていたか、明白である。
その時代、暹羅のアユチヤの日本人町には、三千数百人が住んで居り、日本人切支丹信徒のために、教会堂が建てられたくらいであった。その長が山田長政であり、メナム河にイスパニヤ船が来襲するや、長政は日本兵数百人を引具して、奇略をもって、これを撃沈せしめ、一躍その名をあげた。
寛永五年十一月、長政を信頼したソンタム王が三十八歳の若さで逝去すると、王位継承の争乱が勃発した。長政は、暹羅軍二万、日本兵八百を率いて叛乱軍を鎮圧した。尤も、このために、かえって王位を狙った摂政にきらわれて、六昆の太守として、遠隔の地へ赴任させられた。その際、率いて行ったのは、手勢日本人三百余であった、という。
長政は、それから二年の後、毒殺されたが、日本人の勇猛果敢はいよいよ高く評価された。
暹羅が、隣国と戦う時、必ず、日本人に日本の具足をつけさせ、刀をふりかざさせて、先陣をつとめさせた。ある時は、わずか六人の日本兵が、まっさき駆けて斬り込み、千に及ぶ敵勢を敗走せしめたこともあった。
そして、その祖先の勇武は、いまもなお、各地に残っている日本人町の面々に、承け継がれている。

「ご老人――。方今の旗本や藩士が、泰平に馴れたために、見失った武辺の心意気というものを、日本人町の者たちが、性根の中にとどめていることに、貴方は、思いを馳せたことはないか。……わたしは、べつだん、正義漢面をして、さかしらに云いたてるつもりはないが、もし百万両を手に入れるとすれば、貴方の主人が老中首座を襲う資金として呈上するかわりに、日本人町へ贈ってやりたい、と考える」

狂四郎の言葉をきいて、仙十郎は、身を二つに折る例の姿勢をとって、しばらく沈黙した。

やがて、上目づかいに狂四郎を視やり、

「あの千華と申す娘、どこの日本人町から参ったかな？」

「たぶん……安南、と存ずる」

安南――現代のヴェトナムであった。

「安南には、二つの大きな日本人町があったし、いまも人数は減っても、立派に存在すると考えられる」

「ほう……」

「ツーランとフェフォ。千華は、そのうちのいずれかの町から、やって来たに相違ない」

「フェフォ、というのは、どこかで、読んだ地名だな。……おお、そうじゃ、三浦按針が朱印船を操って安南におもむいた日誌を、読んだが、それに書いてあった地名だわい。その町には、日本橋という橋が架けられ、長崎奉行の手代も駐在していた、とか……」

老人は、ようやく、機嫌をなおして、いつもの表情にもどった。

「で――、手に入れた秘文は、お主のそのふところにあるのかな？」

「秘文は、焼きすてた」

「なに？　焼いた？」
「左様――」
「お主が、脳中におさめた、と申すのか」
「そういうことだ」
「お主に、百万両は、くれてやれぬぞ」
「ご老人、わたしを斬ることのできる手練者をさがすのだな」
狂四郎は、微笑した。
次の瞬間、背後の床柱にたてかけた無想正宗を把りざま、小柄を、庭の一隅めがけて、投げた。
小柄は、木立の中へ吸い込まれたが、そこになんの反応も起らなかった。
「逃げたの」
「まだ、あそこに蹲って居るかも知れぬが……」
狂四郎の脳裡には、捨てかまりの弥之助の姿が、うかんでいた。
弥之助が、数日前から、この庫裡をひそかにうかがっているのを、狂四郎は、気がついていたのである。

三

同じ日、夜も更けてから、本石町二丁目の阿蘭陀屋を訪れた意外な客があった。
佐賀闇斎であった。
あるじの居間に入って、椅子に就くやいなや、闇斎は、挨拶ぬきで、
「先手を打たれたぞ、嘉兵衛」

と、云った。

この二人は、往来で出逢えば、そ知らぬふりですれちがう、あかの他人をよそおった仲間であった。

「誰に、先手を——？」

「まだしかと証拠をつきとめたわけではないが、およその見当はつく。……眠狂四郎、という浪人者を知って居ろう」

「小笠原邸で、仕止めそこねた——あの男のことだな」

「あいつのしわざであろう、と思う」

「大奥の宝さがしの一件か？」

「うむ。お主の周旋で、小銀を、お手つきにするところまでは、うまくこぎつけたが……」

「わしが死神九郎太から買いそこなったオランダ娘も、同じ日に、お手つき中臈にえらばれた。あれは、老中越州の側用人の工作であったな」

「そのオランダ娘と小銀と、いずれがさきに、宝を手に入れるか——興味津々であったが、……まんまと、むこう方に、してやられたらしい」

「どうして、してやられた、と判った？」

「わしは、小銀に、宝は、元和の頃から残っている万年厠の中にかくされてあるに相違ないゆえ、きっとさがし出せ、と命じておいたが……、その万年厠の落し口から、下をのぞいた時、曲者が一人、そこにひそんでいるのを発見したそうだ」

「ふむ！」

「それから、八日後——つまり、一昨日、オランダ娘は、老中越州の願いによって、大奥からひ

まを頂いた」
「小銀の方は――？」
「手紙だけが、とどいた。……上様のおんなさけ、あまりに厚く、当分は、手ばなしてもらえそうもない。……ふふふ、将軍家の不能をおなおし申し上げたが、どうやら、おん生命(いのち)まで縮め奉るかも知れぬのう」
「宝を横取りしたのが、眠狂四郎であろうとどうして判断する？」
「あいつ、わしがお主と相談して小銀を大奥へ上げるときめたのを見通したように、深夜、それをたしかめに来た」
「だからというて……」
「いや。大奥へ忍び込んで、宝を取って行くはなれ業をやってのけられるのは、眠狂四郎を措(お)いて他には居るまい。……あいつが、吉五郎という大名旗本屋敷をあらしていた夜働きと、深川八幡門前の小料理屋で会っているのを、わしの手の者が、見かけて居る。万年厠へもぐり込んだのは、狂四郎の指令を受けたその夜働きであろう」
「眠狂四郎は、その宝を、越州の側用人に渡したかな？」
「おそらく――」
「おそらく？」
「渡しては居るまい」
闇斎は、宙に視線を据えて、云った。
「あの男も、わしらと同様、欲の皮がつッぱった、と思うのか？」
「いや、そうではあるまい。そうではあるまいが……、わしには、どうも、そんな気がするの

だ」

四

その時刻――。
千華は、再び還って来た水野忠邦邸内にある側用人役宅の一室で、闇に眸子をひらいていた。
――どうなるのだろう？
千華は、明日のわが身を思いやっていた。
今朝がた、武部仙十郎が、この居間に顔を見せると、にがにがしげに、
「そなたが、御伽坊主満寿に渡した秘文は、まっ赤なにせものであったのう」
と、云ったのである。
千華が、黙っていると、仙十郎は、
「狂四郎めに、まんまと一杯食わされたわい」
云いすてておいて、さっさと去ってしまったのであった。
老人の、肚の中には、にえくりかえる憤怒がある。
こちらの身の処置を、どうつけるか、すでに、胸裡では、きめたに相違なかった。
千華は、狂四郎の救いを待つばかりであった。
……と。
人が忍び入った気配もないのに、有明に、灯が入れられた。
はっとなって、起き上った千華は、行燈わきに、黒い影がうずくまっているのをみとめた。
「吉五郎と、申します」

ひくく、おのが名を告げた男は、
「これを——」
と、小函をさし出した。
千華が、いそいで、蓋をひらいてみると、奇妙な品が入っていた。
蟬であった。鉄製であったが、掌へのせると、いまにも、飛び立ちそうなほど、精巧につくられていた。
蟬のほかに、一枚の詩箋が入っていた。
それには、
『輪廻生死、空蟬に魂を入れたくば、志摩国賢島なる磯館の女神像に祈るべし』
と、記してあった。
「万年厠にかくしてあった品でございます。……眠狂四郎の旦那から、貴女様にお渡しするように、申しつけられました」
「わたくしが、これを持って、この志摩国へ参るのですか？」
「てまえに、お供をするように、旦那から命じられました」
「忝のう存じます。……眠殿は、どうなさるのですか？」
「旦那は、別に、お一人で、東海道をお上りになる由でございます。なにしろ、つけ狙う敵が幾組もいるので、そいつらの目を自分一身にひきつけておかねばならぬ、と仰言って居りました。
……その磯館で、貴女様は、旦那と落ちあうことになります」
「はい」
「お仕度を——」

吉五郎は、千華に背を向けた。
千華は、いそいで、着換えし乍ら、ふっと、胸の痛みをおぼえた。
狂四郎を恋うている自分を、はっきりと意識したのは、いまが、はじめてであった。
吉五郎は、千華の身仕度が成るのを待って、手ばやく、いかにも千華が寝ているように、牀をつくりあげた。
「お屋敷を抜け出るしかけは、しておきましたので、造作はございません。ただ、どうも、気になるのは、この役宅の警備が、さっぱり、されてないことでございます。貴女様を、四六時中見張っていなければならぬはずなのに……、どうも、これは、くさい。側用人さんは、貴女様が抜け出るのを、わざと、待っているのじゃございますまいか」
「そうかも知れませぬ」
「なにしろ、この一件では、眠の旦那は、側用人さんまで敵にまわしておしまいになったので、よほど腹を据えてかからないと、首尾よく大願成就にこぎつけるのは、むつかしゅうございますよ」
「はい。覚悟はできて居りますほどに、なにぶんよろしゅうたのみまする」
「てまえも、お引き受けしたからには、五体が木っ端になるのは、一向にいといはしませんが……、なにしろ、味方は、旦那お一人だけなので、心細うございますよ」
その言葉と反対に、吉五郎は、不敵な微笑をうかべてから、有明の灯を、消した。
千華は、暗黒の中で、そっと、胸で十字を切った。

伊勢詣(まい)りの犬

一

当時――。

江戸っ子の愉しみといえば、いわゆる「悪所」がよいが、まず挙げられた。「悪所」というのは、吉原はじめ岡場所などの遊女町と、中村、市村、守田の三座をはじめとする芝居小屋を指す。

しかし「悪所」がよいは、庶民のうちの幾パーセントかに限られていた。

江戸っ子の大半が経験する愉しみといえば、祭礼とお伊勢詣りであった。

まず、祭礼だが、江戸の二大祭は、山王祭と神田祭であった。

山王・神田は、祭礼が隔年に行われたため、双方の競争が激しくなった。

山車(だし)の数は、山王が四十五本、神田が三十六本、それに附随する踊り屋台は無数であり、祭りの年番にあたった町では、費用を惜しまず、趣向をこらした。文政に入ってから、殊に盛んになり、同三年の年番が、金持の集まっている日本橋通り一、二丁目にあたるや、その二カ町で、四千八百両を投じた。爾来(じらい)、祭礼は年毎に派手になった。

須田町の大工の棟梁(とうりよう)は、娘を神田祭の踊り屋台に出したが、その借金返済のために、祭りの翌日、娘を吉原へ売った。それでも足りないので、女房も、宿場女郎に売りとばしてしまった。

また、小石川の富坂に住む古着屋は、祭りに出る着物をつくるために、女房を吉原へ売り、当日は思う存分にねり歩いた挙句、この身装(みなり)を見せたい、といって、売った女房を買いに行った、

という。

祭礼に対する熱狂ぶりは、このように異常なものであったが、また、江戸っ子が一生に一度は必ずやらねばならぬ、と思いきめているのが、お伊勢詣りであった。

この費用をつくるためにも、また、女房や娘を、女郎に売りとばす者が、年に二人や三人は現われた。

これは、必ずしも、庶民の信仰のあつさを示すものではなかった。地獄・極楽の仏説があまねく信じられていたわけではなく、因果応報をおそれる気持もうすらぎ、信仰はいわば慣習的なものになっていた。

現世加護の利益を得るために、安産祈念に観音を信じ、育児の安全に地蔵をおがみ、幸福利益を欲して大師を念ずるのは、もっぱら、婦女子のつとめになっていた。

ただ——。

男どもが、伊勢と京畿(けいき)の名祠(めいし)仏閣を巡拝するために、必ず一生一度は、江戸を出るのは、旅の愉しみをもとめたからである。

すなわち。

泊り泊りの宿駅で、道中女を買う——その愉しみであった。

十返舎一九の『東海道中膝栗毛(ひざくりげ)』が、洛陽(らくよう)の紙価をたかめて、二十年間も、続篇を書きつづけられたのも、行くさきざきで、旅の恥はかきすて、という記事を売りものにしたからである。

旅籠(はたご)には、留女(とめおんな)、飯盛がいたし、どんな小さな宿場にも女郎屋があって、小格子から呼びとめていたし、物蔭(ものかげ)には、鼠なきする夜鷹(よたか)・惣嫁(そうか)がいたし、路傍には瞽女(ごぜ)がいたし、神社には巫女(みこ)がいたし、川には船饅頭(まんじゅう)がいたし、湯治場には湯女(ゆな)がいたし、そして、街道には、門付(かどづけ)や巡礼がい

た。

その気になれば、一夜として、一人で寝ることはなかった。

のみならず——。

公娼私娼の中には、おどろくほど眉目(みめ)の整った、肌の美しい女がいたのである。職人・百姓の娘で、まともに嫁入り道具をととのえて、女房の座におさまることのできるのは、その半数にも足りない貧しい時世だったのである。

貧しい家に、眉目整って生れた娘は、むしろ不幸であった、といえる。みにくい容貌の持主であれば、下婢(かひ)になるよりほかはなかったが、才覚次第で、お店者(たなもの)や職人の女房になる幸運もつかめた。なまじ美しく生れたゆえに、宿場女中に売られたのである。

東海道でも、川崎、平塚、小田原、三島、吉田など、美しい女郎がいる宿場として有名であった。

富士の白雪、朝日でとけて、
三島女郎衆の化粧の水

とか、

吉田通れば、二階からまねく、
しかも鹿(か)の子(こ)の振袖で

とか、その殷賑(いんしん)ぶりを示していた。

泊り泊りに、道中女を抱く愉しみは、江戸っ子の生甲斐(いきがい)のひとつともいえた。

期待に胸をはずませて、わいわいがやがや、今日も、どこの町内か、江戸を発(た)って、伊勢参宮をめざす一団があった。

いた。

一行二十人近く、大半は、菅笠に半合羽をひきまわしていたが、長合羽の老人や、天鵞絨の襟をかけ、華奢な竹の杖を持った初老の内儀、そして、深編笠に黒の着流しの浪人姿も、まじっていた。

二

慣習にしたがって、一行は、日本橋を七つ（午前四時）に渡り、高輪の大木戸をくぐってから、しらじらと明けそめる空を仰いだ。

ここから、朱引外（市外地）になり、景色がかわる。

いよいよ旅へ出る、という気分をあふられて、

「へへ、いいねえ、道中は――。さても、浮世のならいぞと、食うて、脱糞して、寝て、起きて、見たり、聞いたり、話したり、旅行くさまのおもしろさだのう」

「御隠居、旅の枕詞を、草枕、というだろう。あれは、どういう意味だね？」

「大昔は、旅籠がなかったのだな。一夜の宿をかす家もなかったので、草を枕に野宿するのがふつうだったのだな。大国主命が、大きな袋を肩にかけているだろう。その袋の中には、食いものと炊き道具が入っていたらしい」

そのうしろでは、生れてはじめて江戸をはなれる若い衆が、

「兄哥、島田髷ってえのは、島田宿の女郎衆が結ったのが、流行ったのだってな」

「そうよ。島田の女郎が、格子の蔭から、大名行列の色小姓の若衆髷を見て、それをまねて、結ったのだ。ついでに、態度も男ぶりで、立膝になり、緋縮緬の蔭から、股奥まで、のぞかせたから、たまらねえや。それが、日本中にひろがって、お武家の娘御までが、立膝をするようになっ

たのさ。いまじゃ、立膝をしているのは、女郎のほかには、鉄火場の莫連だけだが……」
「文金高島田というのは――？」
「それアおめえ、島田髷ってえのは、なにしろ、金が高くつくからよう――」
二歩ばかりおくれて歩いている浪人姿が、編笠の蔭から、
「元文元年、金貨鋳造の年を記念して、改良された高島田なので、文金と称された」
と、教えた。
その折、ずっとしんがりを来ていた菅笠に半合羽の一人が、その半合羽をひらひら舞わせて、
お泊りならば泊りゃんせ、お風呂もどんどん沸いている、畳もこの頃、取りかえた、夜のお伽はまけにして、草鞋の紐の仇解けに、結んだ縁の一夜妻……
と、清元「喜撰」を、ひくくうたい乍ら、追い抜いて来ると、浪人姿と肩をならべた。
「どうなるんです、いってえ？　このまま、ずうっと、お伊勢様まで、一緒に道中なさるんですかい？」
そっと、訊ねかける菅笠の下の顔は、金八のものであった。
「箱根を越える前に、たぶん、この一行から、はなれることになろう」
こたえたのは、眠狂四郎であった。
金八に、お伊勢講の一行を、えらばせて、狂四郎は、金八とともに、それに加わったのである。
その理由を、金八にはまだ告げてはいなかった。
狂四郎がかくれ蓑を必要としていることは、金八にも、おぼろげ乍ら、合点できたが、それにしても、独歩行を好む孤独な男にしては、あまりにふさわしくない行為に思われた。
眠狂四郎が、敵をおそれるはずはないのである。

どうして、お伊勢講の一行にかくれて、江戸を発ったのか？
「ねえ、江戸をこそこそと発った、とあとで判っちゃ、眠狂四郎の名がすたりゃしませんか？」
「武士の面目など、わたしには、保つ必要はない」
「お供をしているこの江戸っ子の面目もありまさ」
「巾着切に、面目などあるのか」
「ありますとも！　大あり名古屋の金の鯱（しゃちほこ）でさあ。これでも、ちゃんと、深川不動に願かけして、ひとつ、義理を重んじ意気に感ずること、ひとつ、生涯女房を持つまじきこと、ひとつ、宵越しの金は使うべからずって、河豚（ふぐ）まで断っているんだから——」
「窮屈だな、巾着切として生きるのも……」
「まぜっかえしちゃいけませんや。……生涯一度しか出会（でくわ）さねえほどの強い敵が、追いかけて来る、とでもいうんですかい？」
「河豚汁や、鯛（たい）もあるのに無分別、か」
「なんです、それア？」
「いまに、判る」
それきり、狂四郎は、金八がいくらしゃべりかけても、返辞をしなくなった。

三

一行は、小田原までは、何事もなく、無駄話に花を咲かせ乍ら、道中した。
「オイ、御隠居、お伊勢詣りは、年をえらばなけりゃ、いけねえんだってな」
「そうだな。午未（うまひつじ）の参拝は大凶だな。巳申（みさる）は凶。凶年、大凶年に参拝したら、道中できっと災禍

がふりかかるそうな」

「あっしは、亥(いのしし)で、今年は戌(いぬ)年だが、どうなんで？」

「大吉だな。わしも、お前さんよりひとまわり上の亥さ。亥年生れが、子丑卯辰酉戌亥(ねうしうたつとりいぬい)の当り年に参拝するのが、大吉さ」

うしろの者が、

「おうおう、おれア戌年生れだぜ。どうなんだい？」

と、訊ねた。

隠居が、ふり向いて、笑い乍ら、

「みごとな犬面だの。母親が犬たわけで、産んだかな」

他の者が、

「犬たわけたァなんだ？」

「おめえのお袋が、犬とつるんで、孕(はら)んだ、ってえことよ」

「ちぇっ、置きやがれ。八犬伝じゃあるめえし、隠居っ！　こけにしやがると、ただじゃすまねえぞ」

「とんでもない。戌年生れが、参宮するのは、前世からのさだめ、というくらい大吉さね。……それ、赤児の宮参りには、近所隣りから、犬張子をくれるだろう。生れたばかりの赤児のそばに、犬張子を置けば、魔除(まよ)けになる、といわれているのを知っているかな。……こういう話がある」

隠居は、語った。

江戸名物のひとつに、犬の糞(くそ)がある。一丁毎に、五六匹の犬がいる、といわれるほど、江戸には多いのだが、年によって、その一匹か二匹が、ふっと、伊勢参宮を思い立つのであった。

諸大名が、帰国するこの季節になると、東海道を上って行く行列に、まとわりついてはなれぬ犬のすがたが、見受けられる。

供ざむらいが、

「これは、伊勢参宮の犬であろう」

と、気づいて、犬の頸(くび)へ、竹筒をゆわえつけて、その筒の中へ、若干の銭を入れておいてやる。

すると、犬は、その行列よりさきに、走って行ってしまう。

往還の家では、竹筒を頸にゆわえつけた犬を見ると、屋内へ入れて、食事を与えてやる。そして、竹筒の中から、食費として、いくばくかを取り、翌朝、犬が出て行く時には、取った銭へさらにすこしばかり加えて、竹筒に返してやる。

こうして、犬は、泊りを重ねてゆくうちに、すこしずつ、竹筒の銭をふやし、やがて、伊勢神宮に辿(たど)り着く。

宮司は、竹筒の銭を、賽銭(さいせん)として受けとり、その代りに、社廟(しゃびょう)の御札を納めてやる。

犬は、やって来た駅路を、再びひろって、まっすぐに江戸へ帰って行く。

「そんな、ばかな！　きいたことがねえぜ。え、うちの町内に、そんな犬がいたって、だれか知っているか？」

一人が、見まわした――その時。

別の一人が、松の並木ぎわを、指さした。

「あ！　あれ――あの犬か！」

一樹の根かたに、竹筒を頸につけて、ちょこんと坐っている一匹の犬を、見出したのである。

隠居の話をきいた矢先に、その犬が出現したのであるから、皆は、一瞬、あっけにとられた。

と――。

犬は、ひょいと起って、一行の中に入って来ると、狂四郎の裾へ、顔をこすりつけた。

「ご浪人さん、お伊勢詣りの犬に、見込まれるとは、縁起がようござんすねえ」

「どうだかな」

狂四郎は、犬にまとわりつかれるままに、歩いた。

酒匂川が、行手をさえぎった。

この川は、冬期（十月から二月まで）には、仮橋が架けられるが、三月からはとりはらわれて、徒歩渡りか、舟渡しになる。

「輦台渡しよりは、舟賃の方が、安いのう」

隠居が云い、それにきまった。

狂四郎と金八は、その舟の艫のちかくに、腰を下ろした。

犬もまた、ぴょんととび乗って来て、船頭の足もとへ、坐った。

「この犬、お伊勢様まで、ついて来るつもりでいやがる」

金八が、呟いた。

狂四郎は、黙って、上流へ視線を向けていた。

海へ出て行くらしい釣舟が、ゆっくりと下って来ていた。

水面にも磧にも、かげろうがもえ、山野は淡くかすんでいる佳い日和の朝であった。

「おい犬公よ、おめえ、いってえ、どこの誰から、お伊勢詣りを教えられたんだい？」

金八は、しきりに、犬に話しかけていた。

下って来た釣舟が、渡舟へ、三間近くまで寄って来た。

一瞬――。

釣舟の舳先にうずくまっている者が、さっと、弓に矢をつがえた。

矢のさきは、焔が燃えていた。

弦音鋭く、射放たれた火矢は、渡舟の艫めがけて、飛来した。

火矢が、犬の頸につけられた竹筒へ、突きささるのと、狂四郎がいつの間にか両手にした棹を一閃させるのが、同時であった。

犬は、宙を躍って、水面へ落ちた。

刹那――。

そこから、凄まじい火薬の炸裂音もろとも、高く水柱が噴き立った。

四

「や、やりやがった！」

金八は、血相変えて、遁走する釣舟へ向って、呶鳴った。

「卑怯だぞっ！　お伊勢講の人たちを、まきぞえにしようとしやがったな、くそっ！」

一行は、顔面蒼白になり、息をのんで、狂四郎を、見まもっている。

狂四郎は、編笠をはずすと、

「ご一同を、おどろかせて相済まぬ。むこう岸に着いたら、別れて、これ以上のご迷惑はかけぬことにする」

と、詫びた。

やがて――。

渡舟は、対岸へ着いた。
人々は、大急ぎで、上って行って、瞬時でも早く、狂四郎から、はなれようとした。
「ご隠居——」
狂四郎が、呼びとめた。
「お主には、話がある」
人々は、怯(おび)えた目つきで、狂四郎と隠居を見くらべた。
狂四郎は、講中の一人に、
「この隠居は、お主らの町内の者ではなかろう？」
と、訊ねた。
「へい。てまえどもは一丁目でござんすが、このご隠居は三丁目だそうで、三丁目のお伊勢講は、三日前に発ったのだそうで、ご隠居だけ、ちょっと加減がわるくて、おくれちまったので、てまえどもに入れてくれろ、というんで、連れになったのでござんす」
「そうか。……では、隠居だけのこして、さきに行ってもらおう」
隠居は、すでに覚悟をきめて、わるびれぬ態度であった。
狂四郎は、一行が土手の彼方(かなた)に消えるのを待って、
「老人——、お主は、誰の手先だ？」
と、問いかけ、
「とたずねても、こたえるはずもないか」
と、薄ら笑った。
金八が、「おっ！　野郎！」と叫んだ。隠居が、懐中から、短銃(たんづつ)をとり出して、狂四郎の胸へ、

ぴたりと狙いつけたのである。
「そうか。お主が誰の手先か、見当がついたぞ。阿蘭陀屋嘉兵衛だな」
「………………」
隠居は、口を真一文字にひきむすんだなり、一歩迫った。
「老人、わたしを殺したところで、なんの得にもならぬ。——阿蘭陀屋に、そうしろ、と命じられていた、とすれば、嘉兵衛も、智慧が足りぬ、ということになる。黙って、わたしの行先を、つきとめればよかったものを、無駄骨を折ったな」
「………………」
「わたしは、子供と年寄りを斬るのは、好まぬ」
そう云いすてると、狂四郎は、しずかに踵をまわした。
「先生っ！」
はなれていた金八が、びくっとなって、呼んだ。
狂四郎は、平然として、磧を歩いた。
弾丸は、飛んで来なかった。
土手下へ来た時、狂四郎は、振りかえって、
「老人、江戸へ戻ったら、阿蘭陀屋へ、わたしがいま云ったことを、つたえてもらおう。あの町人ならば、お主の失敗をとがめるようなけちくさい料簡は持って居るまい」
と、云いのこした。
街道へ出ると、金八が、きょろきょろと、四方を見わたして、
「さあ、いよいよ、行くさきざきが、修羅場になるぜ」

と、肩をゆすった。
「金八、それでも、供をするか」
「ちょっ、これだけ長えつきあいで、まだ、あっしという男を、ご存じねえとは、それが、うらめしいや。……運は天にあり、牡丹餅(ぼたもち)は棚にあり、人間万事運次第、畳の上で怪我もすりゃ、豆腐で歯を痛めることもありまさ。……さあ来い、いざ来い、やって来いだあ。飛んで火に入る夏の虫、片っぱしから、たたき落してくれるぞ！」

火器問答

一

小田原城下は、ごったがえしていた。
町に入ると、金八が、左右を見まわして、舌打ちした。
「ちぇっ！　どの旅籠も、下宿になっちまってやがる」
下宿というのは、本陣に大名が泊り、家臣たちが、その附近の旅籠に泊る——それを、下宿という。
本陣は、宿駅の中央にあるのが普通で、家臣は、本陣に近い旅籠を下宿にする。
本陣からはるか遠いこのあたりの旅籠まで、下宿にされているのは、よほどの大藩か、あるいは、二家がぶっつかったのを示している。
「そこのうめぼし茶屋で、ちょっと、待っててておくんなさい。甲州道に岐(わか)れる辻(つじ)に、あっしの懇

意の外郎屋がありまさ。そこにたのんで、一晩借りて来やす」
金八は、走って行った。
眠狂四郎は、茶屋の落間に入って、床几に腰を下ろした。
となりの床几に、箱根に湯治に行くらしい裕福そうな年配の町人が二人いた。
「本陣の幔幕の紋は、寄九曜だったのう。五十四万石なら、人数は、ざっと千二百人か。江戸と熊本の往復じゃ、途方もない物入りさな」
「どこのお大名も、参観交替のおかげで、首がまわらなくなっているらしいが、細川家なんざ、最も懐ろ具合が、いけねえらしいよ」
「新しい鍋釜に、細川という二文字を書きつけておくと、金っ気が出ねえ、というからのう」
「路銀の工面に、ご領内の百姓をしぼりあげるだけの智慧しかねえんじゃ、一揆も起ろうというものさ」
どうやら、大名の財政窮迫は、すっかり、町人連に、見すかされている模様であった。
——たしかに、参観交替などという制度は、ばかげている。
狂四郎は、思った。
いつか、肥前佐賀の鍋島家の参観交替に費消する金の莫大さを、狂四郎は、きいたことがある。鍋島家は、三十五万七千石、江戸との距離は二百六十余里。片道の旅費は、二千六百両、すなわち、一里に十両の出費である、という。
熊本藩細川家は、五十四万石。その路銀は、三千両にも及ぶであろう。
——細川家は、いったい、どれぐらいの借金を背負っているのか？
はこばれた梅干茶を、把りあげ乍ら、なんとなく、その莫大な負債額を、想像しているうちに、

狂四郎は、ふっと、あるひとつの行動を思いついた。

金八が駆けもどって来て、

「くそ面白くもねえ。外郎屋までが、下宿になっちまってやがるんでさあ。しかも、細川家で一番偉え学者に、離れを貸しているから、あきらめてくれろ、とけんもほろろに、ことわりやがった。……先生、いまいましいから、このまま、箱根へ登っちまいますかね」

と、云った。

「細川家で最も偉い学者が、その外郎屋に、泊った、というのか。……ちょうどよい。会うことにするか」

「なんの用なんで——？」

「学者なら、わたしの質問に、こたえることができるかも知れぬ」

狂四郎は、茶店を出た。

とたんに——。

この男の鋭く研ぎ澄ました神経が、往還の一隅へ向けられた。

「金八——」

「へい？」

「お前は、一足さきに、箱根を登れ」

「……………？」

金八は、冷たい狂四郎の横顔を、ちらと視やったが、そこは、長年のつきあいで、直感が働いた。

なぜ、と問いかえすまでもなく、

「裏筋を登って、底倉で、湯治としゃれ込んでいまさ」
と、ひくい声で告げた。
「気をつけろ。お前も尾けられるかも知れぬ」
「つけ馬にゃ、十七の時から、馴れてまさ」
金八は、狂四郎からはなれると、
「つけがかさんで、つけまわされて
闇が欲しやのこの首尾に
忍ぶ邪魔して、まだあきたらず
蚊帳の中まで、のぞく月。
と来た」
と、とっとと走って行った。

二

裏通りをひろって、幾曲りかして、寺院の土塀のつらなった門前へ出た折であった。
行手に、そして、背後に、あわただしい跫音が迫った。
――おれを討つ追手にしては、余裕のない躍起ぶりだな。
この眠狂四郎を討ち取ろうとするのであれば、音もない奇襲戦法でなければなるまい。
まるで、博徒どもがなぐり込みをしかけるように、殺到して来るのは、どうしたというのか？
不審のままに、足を停めた狂四郎は、幾筋かの横道からとび出して来た討手の群れを、一瞥して、――これは?! と、唖然となった。

追跡して来たのは、総勢十人を越えていたが、いずれも十四五歳の少年ばかりであった。なかには、十二三歳の前髪立ちの者も三四人まじっていた。

いずれも、眉宇をひきつらせ、眸子を血走らせ、歯を食いしばり、極度の興奮状態になり乍ら、一斉に、抜刀した。

こちらの強さを知りすぎているとみえて、土塀や樹木へ背中をすり寄せて、肉薄して来る者は、一人もなく、遠巻きにして、狂気したように眼眸ばかり光らせた。

「どういうのだ？」

狂四郎は、ふところ手のまま、視線をまわした。

「お主らの腕では、わたしは、斬れぬ。命令した者は、それを知っていて、敢えて、お主らにわたしを追わせたのであろうが、いったい、どういうのだ？」

正面の一人が、紅顔をひきつらせて、叫んだ。

「貴殿を殺すか、われら十一人が全員斬死するか——いずれかだ！」

「何者に、そのようなばかげた命令を受けた？」

「眠狂四郎殿、大奥より盗み出した品を、当方に渡して頂きたい。さもなくば、われら十一人、全員斬死いたすぞ！」

「そうか、どうやら、お主らに命令したのが、何者か、判った。お主ら、水野家の子弟どもだな」

狂四郎は、にやりとした。

瞬間——。

「やあっ！」

横あいから、突きとばされたようなあんばいで、突きかけて来た。
狂四郎は、ふところから手を抜き出しもせず、すっと一歩退(さが)って、面前を泳がせた。
次に、正面から、滅茶滅茶に白刃をふりまわして、襲いかかって来た。道場稽古では、朋輩を圧倒している乱暴者に相違なかった。
狂四郎は、その時はじめて、目にもとまらぬ迅(はや)さで、その利腕(ききうで)をつかんで、白刃をもぎ取ると、その腰の鞘(さや)に納めてやっておいて、突きとばした。
「わたしが、お主らのような少年たちを、絶対に斬らぬ、と知って、命令者は、お主らを遣わして来た――そのことが、お主らには、判って居るのか？」
狂四郎の叱咤(しった)がおわらぬうちに、一人が、
「斬ってみろっ！」
と、絶叫した。
その絶叫が、他の少年たちを、恐怖感から解放した。
狂四郎は、慄然(りつぜん)となった。
恐怖感から解放された少年というものは、野性の狂暴性をあふらせる。これは、逆上した知能薄いやくざよりも、しまつがわるい。
無想正宗を峰をかえしてふるうにしても、手加減しかねる。不具者にしてしまうおそれがある。撃ちどころがわるければ、一命を奪うことになろう。
少年たちを対手(あいて)にして、無想正宗をふるうことさえ、おぞましい振舞いなのだ。
狂四郎は、少年たちを討手として送って来た武部仙十郎に対して、勃然(ぼつぜん)たる憤怒をおぼえた。
「ええいっ！」

背後から斬りつけて来たのを、身をひねりざま、手刀で地面へころがした狂四郎は、
「たわけっ！」
と、凄まじい一喝をはなった。
無数の修羅場を経て、かぞえきれぬ人命を奪った者の一喝であった。
当然、少年たちは居竦んだ。
やくざどもなら、それなり、戦意をうしなったであろう。
その一喝は、しかし、次の刹那、少年たちに、逆作用をおよぼした。武家の子弟であった。居竦んだことを、慙じたのである。
一人が、おのれでおのれの闘志をあふる叫びをほとばしらせるや、他の者たちも、それにならった。
——まずい！
狂四郎は、一喝したことのまちがいをさとった。
——狂犬にしてしまったらしい。
どの形相も、もはや少年のものではなかった。
「やむを得ぬ。不具になっても知らぬぞ」
狂四郎が、無想正宗の栗形へ左手をかけた——その時であった。
「殺生八分の損、見るは十分の損！」
その大声が、かかった。
いつの間にか、山門下に、一人の僧侶が現われていた。
「勧善懲悪、殺生なし！　それっ！」

僧侶は、袈裟の下にかくしていた右手を、ひと振りした。
轟然たる音響もろとも、白煙が濛っと地面から噴き、たちまち、あたりを白い闇にした。
煙幕の中で、少年たちは、いたずらに叫びたて、奔りまわった。

三

狂四郎は、その古寺の庫裡にいた。
「やれやれ、子供対手に殺生沙汰とは、文字通り大人気ない仕儀でござったな」
住職が、入って来て、笑ったが、狂四郎は、敢えて弁解はしなかった。
「造作に相成った」
頭を下げる狂四郎を、四十年配の住職は、凝っと見据えて、
「眠狂四郎殿——そうでござるな？」
と、云いあてた。
「………………」
見かえす狂四郎に、首を振ってみせ、
「拙僧は、五年前までは、韮山の代官所の手代でござった。代官のご命令によって、新しい輪燧佩銃——つまり、オランダ附木を応用して、黄燐を使った撃発銃を発明いたした。……次いで雷汞の研究をいたし、三年余の苦心の挙句、発煙硝酸を作り、水銀を用いて、雷汞の製造に成功いたした。ところが、それが、仇となったから、人生とは皮肉なもの。弟子の一人が、雷汞を瓶に入れ、蓋をしようとした時、爆発いたして、その弟子はもとより、そばにいた拙僧の伜もはねとばされて、犠牲になり申した。……そのことが、こうして、遁世の原因となり申したが、おもし

ろいものでござるな、坊主になり乍ら、やはり、火薬いじりが忘れられず、ひそかに、山犬狩りの焔硝玉をつくっておいたところが、はからずも、それが、今日、役に立ち申したとは……」

韮山代官江川太郎左衛門英竜の部下であったのなら、こちらを見知っていたのは、ふしぎではない。

「お手前が、火薬の専門家ならば、ひとつ、うかがっておきたいことがある」

「拙僧の知って居ることであれば、なんでも――」

「本邦の銃砲が、西欧のそれに比べて、どれほど劣っているか、そのことを、うかがいたい」

「左様――、上杉謙信が武田信玄と川中島で戦っていた時代には、府中大友宗麟の居城（現在の大分）などには、鉄砲が三万梃もあった、という記録が残って居り申すな。その後も、耶蘇教の布教師らが、京大坂堺などに参って、日本人が、いかにたくさんの銃を所持しているか、大層おどろいた由。……ところが、文禄慶長頃を、頂点として、火器の発達は、ひどうおとろえ申した。……寛永の頃、播州三木のさむらいで、三木茂太夫という人物が、棒火矢の発明をいたした。これは、先端に、主に焼夷薬を包んだ矢形の弾丸をさし込んで、発射いたすが、発射すると棒火矢は火の尾を曳いて飛び、射程は二十町余、目的物に中って、炸裂する仕掛けになって居り申した。この棒火矢は、西欧の火器にまさるとも劣らぬ飛道具でござったが、その発明も、それきりで、爾来、二百数十年間、なんらの進歩もないまま、先込めの一発撃ちの鉄砲が、飾りだけ美しゅうつくられて参り申した」

「…………」

「方今、欧羅巴では、燧石銃が全盛をきわめて居り申す由。しかるに、わが日本では、いまだ、種子島銃だけを、つくって居るにすぎぬのでござるよ。……口はばったき儀乍ら、燧石から考え

ついて、輪燧佩銃を製造したのは、この拙僧が、はじめてでござる。次いで、拙僧は、雷管銃をつくるべく、苦心して居ったのじゃが、不幸にして、よき弟子と伜を喪うて、出家遁世してしまい申したが……」

「…………」

「もしかすれば、欧羅巴に於ては、すでに、雷管銃が採用されて居るかも、知れ申さぬ。……鉄砲というものは、研究いたせばいたすほど、新たな発明がなされるのでござる。元込めにして、つづけさまに、五発も十発も発射できるおそるべき品も、可能でござる」

「大砲は――？」

「大砲の威力に着目したのは、織田信長公でござったが、太閤秀吉は、これを顧みず、文禄の役に於ては、わが水軍は、一隻の亀船に備えつけられた李舜臣がつくったたった一門の大砲のために、散々な目に遭うて居り申す。……東照権現様（家康）は、かなり、大砲を重視なされた模様でござるが、三代様（家光）に及んで、天下泰平の時世ゆえ、閑却され申した。……欧羅巴に於ては、おそらく、大砲は、改良に改良を重ねて、おそるべき威力を発揮して居るに相違ござるまい。大砲に就いての知識は、拙僧は、乏しゅうござる」

しかし――。

文化五年八月に、英国軍艦フェートン号が、長崎に来航した際、公儀が設けた砲台の大砲は、全くの役立たずであった、という記録がのこされている。

当時、大砲の問題は、砲架の問題であった。砲架の構造如何によって、取扱い不便の重い大砲も、自由自在に、移動させ、砲口を向けかえることができるのである。文化六年に、佐藤信淵が、如意台という砲架を工夫したが、幕府では、一向に、これを採用する気配はない。

幕府は、大砲の威力など、みとめていないのである。泰平の夢は、いまだ破られてはいなかった。

わずかに、韮山代官江川太郎左衛門が、その威力を知って、反射炉設備の急を主張しているばかりであった。

住職の話をききおわった狂四郎は、

「もし、何者かが、いま、一万といわずとも五千の兵に、大砲と鉄砲を持たせて、本邦へ来襲して参ったならば、如何（いかが）だ？」

と、問うた。

「はばかりある儀乍ら、軍艦十隻に、三十門の大砲を備えつけ、五千の兵が元込撃発銃をかまえて、品川湾に上陸して参ったならば、江戸府内は一日にして占拠され、江戸城は、ものの十日も守り通すことは、不可能でござろう」

住職は、断言してみせた。

四

陽が落ちてから、狂四郎は、一念寺というその禅刹（ぜんさつ）の山門から、出た。

ものの二十歩も、土塀に沿うて進んだであろうか。

土塀と反対側の雑木林から、ひとつの黒影が、奔（はし）り出て来た。

「眠狂四郎殿！」

喘（あえ）ぐように、息をはずませて、呼びかけた。

宵闇をすかし視て、狂四郎は、それが、先刻、襲撃して来た水野忠邦邸の定府家中の子弟の一

人と、見わけた。

まだ、前髪立ちである。

「まだ、なにか用か？」

「わたくしは、留守居添役大野木玄蕃が嫡男隆市と申します。側用人様より討手の一人に加えられましたが、お手前様に刃を向ける意志は毛頭みじんもないまま、隊にしたがいました」

「…………」

「お願いでございます。わたくしを、供として、おつれ下さるわけには参りませぬか？」

「ことわる」

狂四郎の返辞は、にべもなかった。

大野木隆市は、その場へ土下座した。

「お願いでございます！　わたくしは、このまま、おめおめとは、江戸へ戻れませぬ。お供をさせて下さるよう、必死のお願いをつかまつります」

「他の者たちは、どうした？」

「側用人様より、仕損じたならば、あきらめて、帰還するように、命じられて居りましたゆえ……」

「お主一人だけ残して、江戸へひきあげた、というのか？」

「はい」

「お主だけが、そう信じて居るのであろう。ひきあげずに、先まわりしたかも知れぬ」

「いえ、そ、そんな……」

「お主は、一人思案で、わたしに、じかにあたってくだけることにしたのであろうが、ひとつし

かない生命を粗末にするな」
「決して、お手前様の一命を狙う存念ではありませぬ」
「足手まといになる、ということだ」
「いえ、断じて、そのような……」
「血のめぐりのわるい少年だ。……わたしをつけ狙う敵は、幾組も居る。それらの敵の中には、お主がわたしの供をしていれば、お主をひっとらえて、わたしを釣る餌にするこんたんを持つかも知れぬ。これは、こちらにとって、迷惑な話だ。……江戸へ帰って、老人に、つたえるがいい。眠狂四郎は、肚の底から、憤りをおぼえている、と」
狂四郎は、歩き出した。
大野木隆市は、立ち上って、
「拒否されるならば、わたくしは、この場で、切腹つかまつる！」
と、叫んだ。
しかし、狂四郎は、足も停めず、振り向きもしなかった。

豊臣菊丸

一

小田原城下の甲州道に岐れる辻にある外郎屋の離れでは、熊本藩細川家の穿鑿所目付役・横井平四郎が、机に向って、料紙に筆を走らせていた。

行列が、小田原城下に到着したのは、まだ陽の高い未刻（午後二時）すぎであったが、横井平四郎は、本陣から、この外郎屋の下宿に移ると、すぐに、書きものをはじめ、いま戌下刻（午後九時）をまわっていたが、その間、筆を把る手をやすめたのは、夕餉をそそくさとすませる時だけであった。

平四郎は、号を小楠といい、熊本藩随一の俊邁であった。五歳にして、すでに、孔子家語をことごとくそらんじていた。十歳で、藩校時習館に入ったが、開校以来の英才と称われた。

まだ二十四歳であった。

出府したのは、去年であったが、江戸遊学を命じられたのは、表向きであった。実は、勘定所物書き江戸詰に、不正があるかどうか、ひそかに、調査するために、去年二十歳の若年であらたに国家老となった長岡是容から密命を受けて、単身出府して来たのであった。

その調査を終えて、帰国の藩主にしたがっているのであった。

細川家では、文化年度にも一度、勘定所物書き江戸詰の者の不正が発覚していた。

天下泰平下に於ける綱紀の弛緩は、倹約令や法制改正・仕法の実施の中で、つぎつぎと現われるのは、やむを得ぬことであった。

大町人が、貨幣経済の実権を握ってしまったいま、貧乏になった幕府と大名が為すべきことは、体制の強化と維持に、全力を挙げることだけであった。細川家も、例外ではなかった。

小楠横井平四郎は、出府して一月も経たぬうちに、勘定所の不正を発見していた。

しかし、平四郎は、不正を犯した者たちを、死罪にしたり、追放したりすることで、一件が落着するものではない、とさとった。

いまこそ、習いおぼえた朱子学を、実践躬行すべき秋だ、と平四郎はほぞをきめたのである。

帰国したならば、若い国家老長岡是容に提出する「時務策」の下書きの起草を、平四郎は、はじめたのである。

その「時務策」は、きわめて具体的なものであった。

富というものは、領主のものではなく、士民の利益に成るものでなければならぬ。

「……およそ、是まで仰せ出されたる節倹は、一口に申せば、上の御難渋を、下より救いたてまつる故に、節倹を行わせらるるものでありしが、これは節倹というものにはあらず、聚斂の政と申すものなり」

料紙には、そのような権力に対する烈しい論難の文章が、したためられてあった。

ふと——。

平四郎は、筆を止めて、顔をあげた。

庭さきに、いつの間にか、黒い人影が、月かげを背負うて佇立しているのを、みとめたのである。

「誰か？」

「江戸の素浪人——眠狂四郎、とおぼえて頂く」

——眠狂四郎？

そんな奇妙な仮名を、平四郎は、いまだ耳にしたことはなかったが、すっと縁側に上って来た姿に滲む異常な冷たい雰囲気に、微かな戦慄をおぼえるとともに、冴えた眼光をあてられて、

——ただの浪人者ではない！

と、直感した。

「無断の参上、おゆるし頂こう」

座を占めて、挨拶する異相の男に対して、平四郎は、次の瞬間、惹き込まれるような強い興味

にかかられた。

「御用向きを、おうかがいいたそう」

「大坂落城に際して、豊臣秀頼が、重囲を脱して、西国へ落ちのび、肥後そして薩摩にかくれた、という風説が、いまだ、その土地では信じられて居ると存ずる」

唐突にきり出されて、平四郎は、眉宇をひそめた。

「たしかに、そのような風説は、ないことはござらぬが……？」

平四郎も、自藩の町奉行斎藤権之助孝寿の日誌の中で、秀頼が生存した、という一文を読んだことがある。

斎藤権之助は、秀頼が、熊本の加藤家にかくまわれたのち、薩摩へ身を移された、という事実の有無をたしかめるために、ある年の春、薩摩国に入った。

あちらをきき、こちらをたずねた挙句、鹿児島城下より南方三十里ばかりの山谿の中の一村落に、それらしい墳墓がある、と耳にした。おもむいてみると、その村落は木下と呼ばれ、故老の一人に、

「秀頼公の墓所に詣でたい」

と、申し入れると、なんのためらいもなく、案内してくれた。

墓所の広さは、一段歩ばかりもあり、中央に、三抱えもある巨大な松が二本そびえ、そのあいだに、香華台が設けられ、香烟がたちのぼっていた。

そこから東へ向って、ゆるやかな斜面をのぼって行くと、一小堂があり、墓石が竝んでいた。まん中に、巍然として据えられているのが秀頼公の墓で、左右に在るのが側臣たちのものである、と故老は、説明してくれた。

銘は、不明であった。
木下という邑の名は、秀頼がそこに住んでから、つけられたもので、けだし、その父が若い日に名乗った木下藤吉郎から、とったものであろう、と故老は、告げた。
秀頼は、ここにかくれ住んでからは、大酒を飲み、しばしば泥酔して路傍に横たわった、という。

二

「お手前は、かりに右大臣が生存した、として、どうしようといわれるのか？」
平四郎は、訊ねた。
「素浪人が、為すこともないまま、つれづれに、むかしのことを詮索している酔狂、と申しては、信じて頂けまい。……寛永九年六月、加藤忠広父子が、幕命によって、肥後を没収されて居るが、その理由はいまだ不明であることは、ご存じであろう」
「…………」
「五十四万石の西国の重鎮が、理由もなくして、とりつぶされたのは、奇怪といわねばならぬ。……それは、それとして、加藤家が没落するまで、豊臣秀頼は、熊本にかくれ住んでいた」
「…………」
「加藤忠広は、寛永九年五月に、突如、幕府から出府を命じられ、急ぎ熊本を出発して、品川宿まで来た時、江戸に入るのを許されず、池上本門寺に於て、待命せよ、と命じられた。そして、六月一日、幕命が本門寺にとどけられた。肥後五十四万石没収、忠広自身は、庄内酒井家へ流謫、その子光正は、飛騨高山金森家へ預けられる、という命令で、父子ともに帰国を許されなかった。……その時、忠広は、家臣の一人を、熊本へ趨り戻らせて、菊丸自斎と名のっていた豊臣秀頼の

身柄を、薩摩へ移すように、指令した」

「…………」

平四郎は、沈黙を守って、じっと、狂四郎の眼眸（まなざし）を受けとめている。

「熊本に在っては、秀頼は、従臣の一人直森与兵衛の妹を妾（めかけ）として、一男一女をもうけていた。嫡子は、菊丸と名づけられていた。……秀頼は、加藤家が滅び、その遺領が小倉三十六万石細川忠利に与えられるや、薩摩国に落ちて行ったが、その際、従臣の一人に、嫡子菊丸をゆだねて、天草へのがした。……菊丸は、天草から、島原を経て、長崎へ出、そこから、南蛮船に便乗して、海の彼方（かなた）の日本人町——たぶん、安南の日本人町へおもむいた」

「…………」

「豊臣菊丸は、父秀頼の命令によって、異邦各地に在る日本人町の面々を糾合し、一大軍船を組んで、祖国へ攻めかえる壮図を抱いていた。しかし、その壮図は、菊丸の夭折（ようせつ）によって、挫折した。……いかがであろう、この推測は？」

狂四郎は、そこまで語って、薄ら笑ってみせた。

「芝居の筋書きとしては、面白うござる」

平四郎も、微笑してから、

「では、こちらから、もうひとつ、筋書きをつけ加えさせて頂きますか」

と、云った。

こんどは、狂四郎が、沈黙する番であった。

平四郎は、云った。

「寛永十四年秋、天草・島原に切支丹一揆が起り申した。天草四郎時貞を総大将として、島原に

籠城した軍勢は二万三千余。そのうちには、大坂城から遁れ出た牢人者どもが、二千余もいた、と申す。……その時、薩摩谷山木下に、豊臣秀頼がかくれ住んでいた、とすれば、まだ四十六歳の壮年でござる。その秀頼が、ひそかに、豊臣旧臣どもに説かれて、かくしていた軍用金を提供して、天草・島原の切支丹住民どもに、乱を起させたのではござるまいか。すなわち、天草四郎時貞は、豊臣菊丸であった」

「………」

「眠狂四郎殿、お手前が、おそらく、秀頼生存の風説を、事実ではあるまいか、とさぐって居られるのは、秀頼が、大坂城からひそかに運び出した莫大な軍用金が、いまだ、どこかに隠匿されているのではあるまいか、と考えられたからに相違ござるまい」

「………」

「芝居の筋書きは、所詮は根も葉もないつくりごとでござろう。……西国の者どもは、徳川家よりも豊臣家に、心を寄せ、右大臣秀頼に同情を寄せて居り申した。……関ヶ原役には、京都以西の大名は、大部分が西軍に属して居り申す。東軍に属した大名も、徳川家の勢力をおそれたか、あるいは石田治部少輔に反感を抱いていたがためであり、豊臣家に対しては、家臣の心情を失ってはいなかった、と存ずる。ましてや、下級の武士や町人百姓どもは、右大臣秀頼に対して、ふかい同情を持っていたに相違ござらぬ。……右大臣秀頼が、弱冠二十三歳で、大坂城内で殺されたのは、あまりにもいたましい。そこで、生きていた、と思いたいのが人情のしからしむるところ。……真田左衛門佐幸村を、孔明にも比すべき軍師にしたてたのも、木村重成が八尾若江で、長曽我部盛親よりもはるかにつたない戦闘をしたけれども、捏造された誓書血判の美談の方をもっぱら喧伝されて居るのも、岩見重太郎とか猿飛佐助とか霧隠才蔵などという者が、つくりあげ

られたのも、庶民というものの心情が、滅びた敗者をあわれんでのことでござろう。……ならば、いっそ、天草四郎時貞は、豊臣菊丸であった、ということにすれば、さらに、同情をそそることになり申そう」

「成程――」

狂四郎は、うなずいた。

「お主は、ききしにまさる英才だ。……どこにもありもせぬ太閤遺産をさがして歩いているこの素浪人が、阿呆とも頓馬とも、目に映るであろう。……ところが」

そこまで云いかけて、一瞬、狂四郎は、平四郎の前の机をつかみあげざま、それを、楯（たて）とした。

机には、つづけさまに、数本の矢が突きささった。

三

「横井平四郎殿、こちらは、太閤遺産さがしで、こういうあんばいに、降りかかる火の粉をはらう立場に置かれているのだ。……太閤遺産の有無をつきとめるまでは、わたしは、拱手（こうしゅ）しているわけにいかぬのだ。太閤遺産が隠匿されている、などというのは、絵そらごと、まっ赤な嘘っぱちでも、一向にこちらは、さしつかえはない。……どこかの土の中に埋められている櫃（ひつ）の中が、からっぽであっても、それで失望はせぬ。ただ、有無をつきとめるのが、この眠狂四郎のつとめになっている、と思って頂こう」

そう云いおいて、狂四郎は、机を楯にし乍ら、ゆっくりと、縁側から、庭へ降り立った。

外郎屋の庭とはいえ、築山もあり泉水もある見事なつくりであった。

塀に沿うて、木立も深く、蹲踞（つくばい）も手水鉢（ちょうずばち）、手燭（てしょく）石、湯桶（ゆとう）石を組んでいたし、織部燈籠（どうろう）や雪見燈

籠なども配されていた。

庭にさまざまの附設物があることは、多勢を敵として、単身で闘う場合の利となる。

狂四郎は、木立の中から、六七人の曲者（くせもの）が奔り出て来るのを眺めやって、

――公儀の庭番らしいが、討ち急ぎしているのは、下条主膳の命令とも思われぬ？

と、不審をおぼえつつ、織部燈籠の左脇に立った。

闕（か）けた月の光を背負うた敵がたは、手槍の穂先と白刃を、いずれも、中段にそろえて、じりじりと肉薄して来た。

狂四郎の左脇には、修竹（しゅうちく）が植え込まれて、敵がまわり込んで来るのをはばんで居り、修竹の前には、柊（ひいらぎ）などの下木が、茂っていて、攻撃のさまたげとなっていた。

狂四郎は、その地歩を占める限り、正面の敵に対してのみ、八分の神経を集める利を得ていた。

まず、最初に迫って来たのは、手槍を構えた者であった。

狂四郎は、ためらわず、まだ両手を空けたなりで、すっと、燈籠の前へ出た。

「おおっ！」

懸声もろとも、電光の突きが襲って来た。

穂先は、そこに――狂四郎の顔が在った宙をはしって、織部燈籠の笠の上の宝珠（ほうしゅ）を、貫いた。

狂四郎の方は、抜きつけにその敵の胴を横薙（よこな）ぎした迅業を、そのまま、次の跳躍に継続させ、冴えた気合に乗せて、次の敵へ、目にもとまらぬ殺刃をあびせていた。

月明の空に、黒い血飛沫（ちしぶき）が、ふりまかれた。

「ええいっ！」

右方の一人が、猛然と、槍をくり出した刹那には、もう狂四郎の姿は、そこにはなかった。

下木の茂みをひと跳びに越えた狂四郎は、そこに布陣した三人の敵めがけて、飛鳥の斬り込みを為した。
文字通り凄まじい狂四郎の迅業が、そこで発揮された。
無想正宗のきえーっという唸(うな)りが、ただひと振りのものとひびいたにもかかわらず、
「うっ！」
「あっ！」
「ううっ！」
三つの口から、同時に断末魔の叫びがほとばしり、それぞれ、下木を鳴らして、落ちた。
全くの一瞬裡に、三人が、一合と交えずに、斬られたのであった。
生き残ったのは、ただ一人であった。
その者は、狂四郎めがけて手槍を投げつけておいて、速影を木立の中にかくした。
無想正宗をぬぐって、鞘にすべり落した狂四郎は、ゆっくりと、縁側に近づくと、
「おさわがせして、申しわけない。……死骸のとりかたづけを、お願いいたす」
と、頭を下げた。
横井平四郎は、立ち去ろうとする狂四郎を、あわてて、呼びとめた。
生れてはじめて目撃させられた血闘に、舌をもつれさせつつ、
「お手前は、ど、どこへ行かれる？」
と、訊(たず)ねた。
「たとえ、これが猿芝居でも、幕があがっているからには、それが降りるまでは、踊らねばなり申さぬ。尤(もっと)も、どういう筋書きになっているのか、こちらもわからぬ。……どういう踊りかたを

するか、遠くから見ていて頂こう」
「眠狂四郎殿！」
平四郎は、燃える眼眸になった。
「それがしは、さきほどは、芝居の筋書きは、所詮は根も葉もないつくりごと、と申したが、いまは、当藩の穿鑿所に残る記録を、正直に、おつたえいたそう」
「………」
「菊丸自斎と名乗る大坂城の落人（おちうど）を、加藤家が、かくまったのは、まぎれもない事実。そして、その一子で菊丸と申す少年が、父親と別れて、長崎へおもむき、オランダ船に乗って、海の彼方へ去ったことも、たしかに、記録書にしたためられて居り申す」
「左様か。お教え下さって、忝（かたじけ）ない」
「それにしても、漠然と、あてもなく、太閤遺産をさがし歩く、というのは、いかがなものか？」
「あては、ないこともない」
「ほう、と申されると？」
「話は、ここまでにしておいて頂く」
狂四郎は、一揖（いちゆう）して、踵（きびす）をまわした。

その頃――。
相模灘（さがみなだ）の沖を、追風（おいて）に帆を上げた船が、快速の航行をしていた。
オランダ商館の持船が、江戸で、将軍家や御台所（みだいどころ）への献上品、その他の南蛮の品物をおろして、代りに、公儀下賜品や江戸名物を積んで、長崎出島へ、還ろうとしていたのである。

オランダ商館の持船は、特別に、幕府から制限枠をはずされていて、廻船問屋のそれとは、比較にならぬ大きさであった。

幕府が、大砲などの火器を、オランダから購入する場合、石制限内の船では、間に合わぬためであった。しかし、大砲を積み込むなどということは、絶えてなく、年に二回か三回、オランダからの輸入品を運ぶだけであった。したがって、長崎・江戸往復の商館船は、いつも、がらがらであった。

天明の頃にいたって、足弱な老人子供、婦人や病人などが、これに便乗できる許可が下りた。

九州・四国・中国地方の藩士や郷士、そしてその家族などは、商館船を利用できるようになって、どれだけたすかっているか知れなかった。

その商館船にも、帰国する老いた藩士、その妻、病んで、東海道の道中に加われぬ者、まだ十歳未満の子供など、三十数人が、便乗していた。

それに交じって、夜盗の吉五郎と千華がいた。

吉五郎は、七十を越えた、いかにも老いぼれ果てたどこかの藩士に化けていたし、千華は、病んでいる娘になりすましていた。

なるべく、他の乗客とは、はなれた場所に、ひっそりとうずくまっていた。

「いま頃、あの御仁は、どのあたりを歩いておいででしょうか？」

千華は、そっと、訊ねた。

「箱根を、まだ、越えては居られますまい。……箱根を越えるまでに、ひと騒動起りそうだ、と仰言っていたんだが……、なアに、あの旦那の不死身ぶりは、てまえが、いちばんよく知って居りますよ」

吉五郎は、笑ってみせた。

笑ってみせ乍ら、内心、

――こっちは、船内で、ひと騒動起きたら、とても、生きて陸へもどれるものじゃねえな。

と、自分に云いきかせていた。

女郎群

一

ところで――。

眠狂四郎と別れて、一足さきに箱根へ登った金八にも、ひとつの出来事が、待っていた。

小田原から、箱根本宿の関所に至る道は、表と裏と二筋あった。

表道は、三味橋を渡って、早雲寺門前の坂より、須雲川を経て、畑村を過ぎ、杉や檜が視界を掩うた密林の中を抜けて、元箱根に達し、蘆の湖のほとりに至る。

裏筋は、ずっと遠まわりになるが、箱根七湯巡りができた。湯本、塔ノ沢、堂ガ島、宮ノ下、底倉、木賀、蘆ノ湯――これら七湯を泊りあるく富有な商家の隠居、また病気療養者などのために、この湯治道は、ゆるやかにつくられていた。

金八が、その夜の泊りをきめたのは、底倉の湯宿のひとつであった。

その湯宿を十年あまり前からひらいているのは、江戸で五指にかぞえられた名人巾着切であった。いわば、金八の大先輩にあたり、還暦を迎えて、足を洗って、湯宿のあるじにおさまったの

である。
「ううっ……ちょいと登って来ただけで、冷え込みやがらあ」
金八は、胴ぶるいして、呟（つぶや）いた。
午後の陽ざしが、薄絹をかぶせたように、渓谷をへだてた向いの峰の片側に、当っていた。
その明るい光が、あざやかであるだけに、こちら側の、杉木立の暗さが、ひどく冷たく感じられるのであった。
「底倉の爺さん、女を飼っちゃいねえかな。飼っていたら、眠の旦那が到着するまでのひとっ刻（とき）を、へへへ……、
　恋の炬燵（こたつ）に、情（なさけ）の蒲団、女郎が持って出る煙草盆、よさこいよさこい
　女郎は二階の格子の小梅、客はうぐいす、来てとまる、ああ、よさこい、よさこい
と来らあ」
その大声に、応えるように、木立の中から、
「金八ぬしい！」
かん高い呼び声がひびいた。
「なんだと?!」
金八は、目を剝（む）いた。
こっちを、こんな呼びかたをするのは、吉原の廓内（くるわうち）だけである。
とたん――。
十歩ばかりむこうに、ぱっと、とび出して来たのは、まさしく、吉原の小格子女郎であった。
のみならず、一人だけではなく、そこに花が咲いたように、七八人が、道をふさいだ。

いずれも、小格子内に坐って、客を呼ぶいでたちそのままであったので、流石の金八も、きもをつぶして、

「ま、まだ、陽は高けえんだぞ。化けて出るには、早すぎらあ、こん畜生！　消えてなくなりやがれ」

と、呶鳴った。

一人が、緋縮緬から脛をちらつかせ乍ら、駈け寄って来ると、

「ああ！　地獄で仏に出逢うた！　金八ぬし、あちきでありんすよ、東雲屋の玉絵」

「わ、わかってら、こんちきが、化かすのに、馴染の女郎になってみせるのなんざ、ありふれた手だ。……対手を誰だと思ってやがる。膝栗毛に出て来る弥次喜多のような頓馬とは、ちがうぜ。木っ葉を入れた財布でも、こっちが、すり取ったとたんに、ずしりと重い小判に変えてみせる、江戸で名うての巾着切のお兄哥さんだぞ」

云いたてているうちに、おちつきをとりもどした金八は、つと一歩出て、緋縮緬の裾をつまむと、すばやく、剝いで、股奥をのぞいた。

女郎は、笑い乍ら、

「あちきが、玉絵であることを、ちゃんと、たしかめなんしたかえ？」

と、云った。

「てめえら、花見にしちゃ、遠出しすぎているじゃねえか」

「くるわから、逃げ出して来たのでありんすよ、わちきら——」

「逃げ出して来た？　そのなりで、どうして逃げ出せたというんだ？」

「一昨夜が、くるわの桜狩りでありんした。そのにぎわいの最中に、隙をうかがって、かねて手

筈をたのんでおいた金太駕籠（かご）に、乗ったのでありんす」
「ふうん！」
金八は、ぞろぞろと寄って来た小格子・切見世のはした女郎連を、あらためて、じろじろと、見まわした。

二

たしかに、吉原の桜狩りは、花魁（おいらん）道中に、数万の見物人を集めるにぎわいを呈する。
扇屋とか丁子屋とか松葉屋など、名代の総籬（そうまがき）の花魁などは、道中させられるので、身の自由はないし、また、大町小見世の部屋持ち座敷持ちの女郎たちも、この夜は、客に買い占められているので、そのかたえをはなれることはできまい。
しかし、小格子・切見世のはした女郎は、桜狩りの最中は、客を呼び込むことを止（や）めていて、見物側に置かれているから、隙をうかがって、逃げ出すことは、可能であろう。
それにしても、その身なりのままで、集団脱走して来たとは、金八をあきれさせるに足りた。
「金八ぬし、ここで出逢うたのも、わちきらにとって、み仏のおみちびきでありんす。お願い！　たすけて、くんなまし！」
玉絵が、両手を合わせると、他の女郎連も、それにならった。
「ちょっ、ここは、中村座や市村座の舞台じゃねえや。大時代な身ぶりは止（よ）しやがれ」
「金八ぬし！　わちきらは、生きるか死ぬかの瀬戸際に追いつめられているのでありんす。どうぞ、お願い申します。たすけて！」
女郎たちは、一斉に、土下座した。

「冗談じゃねえや。平家の落人だって、ひそむ先ぐれえ、きめていたぜ。おめえら、あてもなく逃げ出して来やがったのか」
「いえ、そうではありりんせぬ」
小田原在の材木問屋で、太っ腹の客がいて、かねてから、逃げ出して来たら、かくまってやる、と約束してくれていたのを、あてにして、駕籠をとばして来てみたら、一月あまり前に、急死した、と報されたのだ、という。
吉原へ客を送り込むのを稼業としている金太駕籠の連中は、女郎たちがこっそり貯えた金を、のこらずまきあげておいて、この箱根山中へ、彼女たちをおっぽり出すと、すたこら、江戸へ駆け戻って行ってしまった、という。
途方にくれている矢先、地獄で仏に出逢うた、という次第であった。
「金八ぬし――主も江戸っ子ならば、哀れなわちきらを、救ってやろう、と思うてくんなまし。まんざら、他人の間柄ではないし……」
「置きやがれ。客と女郎は、店の内外へ別れたら、それきりの他人だあ」
「いいえ、他人ではないことをたしかめようと、主は、いま、わちきの湯文字をはぐってみたではありいせんか」
金八は、そう云われて、苦笑すると、
「とんだお荷物を背負っている場合じゃねえんだが、しようがねえや、ついて来やがれ」
と、承知した。
女郎たちは、歓声をあげた。
底倉の湯宿のあるじ万助は、八人の女郎を連れて来た金八を迎えて、眉宇をひそめた。

「いったい、どうしたというんだね？」

「一人二人は、ケチくせえから、まとめて、ごっそり、足抜きさせてやるんだ」

金八が、手短かに事情を説明して、うまい方法はないものか、と相談すると、万助は、かぶりを振った。

「ここに、かくまってやっても、ものの五日と経たぬうちに、ばれてしまうことぐらい、おめえも、わかっているだろう。箱根を越えちまえば、なんとかなるが、出女と入鉄砲に目を光らせる関所の網は、とうてい、くぐり抜けられまい」

吉原では、逃げ出した女郎を捕えるために、カンの鋭い男たちを、数多くやしなっているし、関東一円はおろか、この箱根あたりまでも、早飛脚の一報によって、さっと動くやくざをひかえさせているのであった。

勿論、各関所には、吉原から、毎年きちんと賄賂されている。いかに、かたぎにみせかけ、通行手形を用意しても、必ず看破され、とりおさえられる。

「お前がた、あきらめて、吉原へもどった方がよいな」

万助が、女郎たちに云いきかせるのをきいた金八は、

「ちょっと、待った。……眠狂四郎の旦那が、あとから来なさるんだ。旦那なら、なにか、ほかに、いい思案があるかも知れねえ。それまで、待つことにしようぜ」

と、云った。

三

狂四郎が、その湯宿へ到着したのは、子刻（午前零時）をまわった頃合であった。

万助とは、顔馴染であった。
金八が、吉原の女郎を八人も連れてやって来た、ときかされたが、狂四郎は、べつに表情も動かさず、しずかに、階段をのぼって行った。
金八は、女郎たちを車座に坐らせて、吉原へ売られるまでのそれぞれの不幸な身の上を、語らせている最中であった。
「あ――旦那！」
金八は、狂四郎が入ると、坐りなおして、ぺこりと頭を下げた。
「義をみてせざるは勇なきなり、ってんで、こういうことになっちまったんでさ」
狂四郎は、女郎たちの顔ひとつひとつへ、冷たい眼眸を送って、
――女郎に化けているのは、一人も、いないようだ。
と、たしかめておいて、すっと、奥の部屋へ移った。
金八が、ちょっと間を置いて、入って来ると、
「あっしは、つらつら、考えたんですがね、……旦那も、箱根の関所を、通りなさるのは、危険だと――」
「…………」
「つまり、その……、旦那は、このたびは、武部仙十郎という爺様まで、敵にまわしてしまいなすったのだから、箱根の関所が、おそろしい鬼門のひとつになったことは、まちがいねえ、と考えやした」
「おれに、関所破りをしろ、とすすめるのか？」
「へえ。はやく云えば、そうなんで――」

「あの女郎らを、ぞろぞろとひきつれて、関所破りをするのか」
「旦那！」
金八は、両手をつかえた。
「窮鳥、ふところに入れれば、猟師も、これを殺さず、って――、あっしも江戸っ子であるからにゃ、あとへはひけませんや。……おねげえします！」
「あの中に、お前が抱いた女郎がいるようだな」
「深馴染というわけじゃありません。三度ばかり買っただけの女郎なんで……。ただ、あっしも、旦那と同様に、乗りかかった船だから、乗らざなるめえ、とほぞをきめたんでさ。……夜明け前に、万助が教えてくれた猟師を、たずねて行って、足柄峠を越えるけもの道を、きき出して来ます」
金八が、ひきさがって、四半刻も過ぎた頃、
「主さまえ――」
襖をへだてて、かぼそい声が、かかった。すでに、牀に就いていた狂四郎は、べつに、返辞もせず、目蓋を閉じていた。
小楠横井平四郎の言葉を、くりかえして、思い出していたのである。
細川家の穿鑿所には、たしかに、菊丸自斎と名乗る大坂城の落人を加藤家がかくまい、そして、その一子菊丸が、長崎へおもむき、オランダ船に乗った、という記録がある、と横井平四郎は、打ち明けてくれたのである。
――百万両が、日本の何処かに隠匿されているのは、事実とする。
――安南の日本人町の面々が、その軍用金を手に入れたならば、数千の軍勢を催し、十隻の軍

艦に乗り込み、三十門の大砲を備えつけて、江戸へ攻め込んで来ることになる。
——江戸城は、たった一日にして、占拠される！
——沼津千阿弥は、この革命を実現させる夢を描いたに相違ない。
「主さま、ごめんなんし。……寝酒を持参しました」
襖が、開かれた。
入って来たのは、八人のうちで、最もはっきりと記憶にのこっている女郎であった。
貌のつくりや肢体は、むしろ美しい方であったが、容子ぜんたいにただよう名状しがたい陰気さは、一瞥しただけで、客の気分を滅入らせるに相違ない。もし、その陰気さがなければ、総籬の花魁にもなれたであろう。
年齢は、まだ二十歳にとどいていまい。
「どうぞ、召し上ってくんなまし」
「お前が、敵娼にどうしてえらばれた？」
狂四郎は、訊ねた。
「あみだ籤で——」
おもてを伏せて、消え入るような風情を示した。
あわれをさそうよりも、幽霊じみた陰気さが、嫌悪感を催させる。
狂四郎は、しかし、その暗いしめった雰囲気を、おのが虚無に見合うものとして、起き上ると、さし出された盃を、受けとった。
女郎は、おそれをふくんだ眸子で、ちらと狂四郎を視てから、おずおずと、銚子をさし出した。
「吉原へ売られて、何年になる？」

「半年あまりになりいした」

「それにしては、まだ、泥水の臭みは、肌にしみついていないようだな」

「わちきは、脳が弱おうて……」

「客をよろこばせたことは、一度もないか？」

「あい……。いつも、売れのこって……、たまに、お客がよって来なんしても、正気じゃ、とても抱けぬ、などと云わんして……」

「……………」

狂四郎は、それきり、黙って、女郎がつぐにまかせて、飲みつづけた。

四

銚子を二本、空にすると、狂四郎は、牀に仰臥した。

女郎は、膳をとりかたづけてから、しばらく、牀裾に坐っていたが、

「伽させてもろうても、よろしゅうありんすか？」

と、伺った。

「うむ」

女郎が、そっとかたわらに入って来ると、狂四郎は、訊ねた。

「わたしの陰気さが、お前には、薄気味わるくはないか？」

「………………」

女郎は、返辞をためらった。

「正直に、云ってくれてよい」

「あい、――。なにやら、お気の毒な境涯のおひとのような……」

「一向に、気の毒な境涯ではない。おのれでおのれの歩く道をきめた男だ。お前とは、ちがう」

狂四郎は、片手をのばして、女郎の長襦袢（じゅばん）と湯文字を、はぐった。

ふれてみると、その茂みは、あるかないかの薄さであった。

その時――。

しびれが、その指先から起った。

「………」

狂四郎は、女郎の横顔へ、視線を刺した。

「おい――」

「あい」

「お前が、酒に毒を仕込んで、わたしに飲ませたのか？」

「えっ！」

女郎は、驚愕（きょうがく）の目をみはった。

「ど、毒?!」

「知らずに、飲ませたようだな」

「そ、そんな……、毒だなんて、わ、わちきは――。ど、どうしよう！　だ、だれが、毒を……」

狂四郎は、全身が徐々にしびれて来るのに堪えつつ、

「お前の仲間の一人が、毒をまぜたことになる」

と、云った。

「ど、どうして、そんなことを……。ああっ！」

女郎は、はね起きると、恐怖に顫(ふる)え乍ら、畳をいざった。
襖が、すっと開かれて、姿を現わしたのは、金八と馴染の女郎玉絵であった。
おそろしいことをやってのけた興奮で、肩を烈しく上下させていた。
「か、かんにんして、くんなまし！」
詫(わ)びておいて、膝をがくがくさせ乍ら、迫って来た。
――うまい手だ。ほんものの女郎を、使って、仕止めようとするとは、考えたものだ。
狂四郎は、玉絵を、見上げ乍ら、胸のうちで、呟いた。
玉絵は、わななく手で、ふところから、匕首(あいくち)を抜いた。
「お前を、使った男は、姿をみせず、じかに手を下そうとせぬのか？」
「わ、わちきは、お、お前様を、殺しとうはない。……で、でも、殺せば、きっと、自由の身にしてやると、約束してくれたので――」
「何者だ、その男？」
「………」
「せめて、おれを殺した男の名前ぐらい、知って、あの世へ行きたいものだ」
玉絵は、喘ぎをいよいよ烈しいものにしつつ、
「名前など……、いつも、覆面をしているお客で……」
「そうか」
狂四郎は、合点した。
――あいつか！
死神九郎太の、刀痕凄(とうこんすさ)まじい面貌(めんぼう)が、思い泛(うか)んだ。

狂四郎は、目蓋を閉じた。
玉絵は、匕首を、双手で逆摑(さかづか)みにして、狂四郎の上で、振りあげた。
狂四郎は、微動もせぬ。
四肢は、すでに、動く自由を喪(うしな)っていた。

孤影さびし

一

女郎玉絵は、目蓋を閉じて仰臥する眠狂四郎の胸もとめがけて、匕首を突き刺そうとして、一瞬ためらった。
そのためらいが、玉絵に、狂四郎の寝顔の静けさを気づかせた。
「ぬし！」
玉絵は、声音をふるわせつつ、
「ぬしが、何か大切な品を、身につけていなさんすことを、わちきは、知って居りいす。……そ、それを、渡して下されば、殺すのは止めにする。……渡して下され」
「………………」
狂四郎は、もはや昏睡(こんすい)の底へ落ちたように、目蓋も、口も、開かなかった。
「わ、渡して、くれなければ、殺して、取りいすぞ！」
「………………」

「ぬし！」
玉絵は、匕首をすてて、狂四郎のからだをさぐるのは、おそろしかった。
たしかに、酒に毒を仕込んだが、しかし、眠狂四郎ほどの男が、微動だにできぬほどかんたんに総身をしびれさせてしまうことに、疑惑があった。
匕首をすてて、からだをさぐろうとしたとたんに、逆に、組み伏せられるかも知れぬ、という恐怖感があった。
——殺して、取るよりほかはない！
玉絵は、自分に云いきかせると、こんどこそ、その胸を刺し貫くべく、切先を擬した。
その時、あみだ籤で狂四郎の敵娼にきめられた、幽霊じみた陰気な雰囲気をただよわせている若い女郎が、不意に、玉絵に、とびついた。
「いやじゃ！　殺しては、なりいせん！」
その邪魔だてが、玉絵をして、反対に、殺意をかためさせた。
「阿呆が！　この浪人を殺したら、わちきらは、自由の身になれるのじゃ」
「いやじゃ！　だ、だまして、殺すなんて、そ、そんなことさせん！」
死にもの狂いで、むしゃぶりついて来た。
玉絵は、倒れ乍ら、無我夢中で、匕首を突き出した。
切先は、咽喉（のど）を刺し、ばあっと血汐（ちしお）を飛び散らせた。
絶鳴をあげるいとまもなく、その女郎は、玉絵の上へ、折り重なった。
その重い屍体（したい）を、押しのけた玉絵は、返り血をあびて、凄まじい夜叉（やしゃ）の形相になっていた。
十指は、咽喉を貫いたなりの匕首の柄に、膠（にかわ）づけされたように、へばりついていた。

玉絵は、しかし、咽喉から匕首を抜きとると、
「なむあみだぶつ……」
と、となえる余裕をみせて、こんどこそ狂四郎の胸もとを狙った。

二

編笠で顔をかくした死神九郎太が、幽鬼のように、音もなく、その湯宿に入って来たのは、夜が明けそめた頃合であった。
九郎太が、すっと平土間に立つと、板敷きの囲炉裏のそばで、小鳥の群れが身を寄せ合うように、ひとかたまりになっていた女郎たちが、びくっとなって、一斉に、おびえた視線を、向けた。
「玉絵は、どうした？」
九郎太は、そこに見当らぬ女郎の名を、口にした。
すると、階段の蔭に凭りかかっていた玉絵が、ふらふらと立ち上った。
顔面から、血の気をうしなって、わずか一夜で、頬から肉が殺げ落ちていた。
九郎太は、そばへ寄って、その肩へ手を置くと、
「ご苦労——。どうやら、たのんだことを、やりとげてくれたようだな」
「あ、あい……」
「眠狂四郎は、どこだ？」
「二階に——」
「正体なくなって居るのだな？」
「いえ……」

「なに？　しばりあげてある、とでもいうのか？」
「あちきが、殺して——」
「殺した？……お前の手で、眠狂四郎が一命を落したと！」
九郎太は、爆発するように哄笑した。
「ほ、ほんとうでありんす！　あちきが、殺したんです！」
「検分しよう」
九郎太は、階段を上って行き乍ら、ついて来る玉絵に、
と、訊ねた。
「狂四郎は、身に、何か大切そうな品を、つけていたか？」
「それが、いくら、さがしても……」
「見当らなかったか」
「あい——」
「お前のあたまでは、さがし出せなかった、という次第だな」
杉戸をひき開けた九郎太は、夜具に寝かされている狂四郎の面貌を、一瞥して、
「ふむ！」
と、ひくく唸った。
まさしく、狂四郎は、死んでいた。
「眠狂四郎ともあろう男が、小格子女郎に殺されるとはのう」
九郎太は、自分が企てた策略とはいえ、あまりにあっけない強敵の最期に、一種の物足りなささえおぼえた。

「尤も、考え様によっては、こういう死にざまの方が、この男には、ふさわしいのかも知れぬ」
掛具をはねのけて、遺体へ手をふれかけた九郎太は、ふと、枕もとへならべて置かれてある大小へ目をとめた。
「これが、無想正宗か。こいつにとっては、片刻も、身からはなせぬ白刃であったのだな」
そう呟いた瞬間、九郎太は、おのが独語のおかげで、ひとつの直感が、脳裡にひらめいた。
九郎太は、無想正宗を把りあげると、すばやく目釘を抜いた。
柄をはずしてみると、はたして直感たがわず、刀身の端に、古びた紙が、巻きつけてあった。
「これか！」
ひろげた一枚の絵図面に、九郎太は、ごくりと生唾をのみ下した。
玉絵は、九郎太がそれをたたんで懐中にするのを待ってから、
「わちきらの身を自由にしてやるというお約束は——？」
と、目をすがらせた。
「おう、拙者は、約束したことは、必ずはたすぞ。安心せい」
九郎太は、明るい声音で、こたえた。
「ああ、うれし！……では、箱根を越えさせて下さるので——？」
「越えさせるとも。拙者は、足柄越えの間道には、猟師よりもくわしいのだ。黙って、ついて参ればよいぞ。沼津あたりに、当座かくれ住む場所も、さがしてくれよう」
九郎太は、階下へ降りると、女郎たちを見やり、
「一人、足りぬな」
と、云った。

玉絵が、事実をかくさずに告げた。
「眠狂四郎と心中したのであれば、はした女郎の冥利(みょうり)につきるというものだろう。……お前らを、ここへつれて来た金八という巾着切は、どうした？」
「むこうの部屋で、この宿のあるじと一緒に、倒れて居りいす」
「あるじまで、ねむらせたとは、機転のきく頭脳だ」
「あるじだけではなく、ぜんぶの湯治の客にも、毒酒をのませて居りいす」
「流石(さすが)は、拙者がえらんだだけある。女房にしてやってもよいくらいの、したたかな性根を持って居るぞ、お前は――。はっはっは。……では、参るか」

三

江戸に徳川幕府ができて、東海道の本筋を、小田原・三島間は、箱根越えと改める以前は、もっぱら足柄越えであった。
小田原から、塚原、関本、矢倉沢、足柄、竹ノ下、古沢、須走(すばしり)、甲山(かぶとやま)、佐野を経て三島に達した。
箱根越えを本筋としてから、幕府は、足柄越えの古街道をこわした。
いまでは、よほど足柄峠にくわしい猟師ぐらいしか、通ることはできぬけもの道となってしまっていた。
ところが――。
死神九郎太は、七人の女郎を連れて、底倉を出ると、いささかのためらいもない足どりで、そのけもの道に入ったのであった。

女郎たちは、必死の面持で、黙々として、九郎太のあとにしたがって、登って行った。
陽の目のとどかぬ暗い闊葉樹の密林の中を、一刻近くも辿って、急に、樹木のないひろびろとした柔らかな草山の鞍部に出て、生きかえる思いをしたのも束の間、渓谷から巻雲のように湧きあがって来た濃霧によって視界は三歩さきも、きかなくなった。
女郎たちは、前の者の帯の端をつかんで、歩いた。
九郎太の足どりは、その白い闇の中でも、のろくはならなかった。
霧が消えた時、女郎たちの口から、歓声があげられた。
行手の山岳の緑の稜線の上に、白妙の富嶽が、すっきりとそびえていた。そして、足もとは、野花が、いま盛りであった。なかでも、こいわ桜の群落は、ひときわ目立つ華やかな彩りであった。
九郎太が、その時はじめて足を停めたので、女郎たちは、思いきり澄んだ深山の霊気を、胸に吸い込んだ。
自由！
それを、やっと、自分のものにした――その解放感で、どの顔も、疲れを忘れて、はればれとしていた。
「お前ら――」
九郎太は、女郎たちに向って、
「ようここまで、ついて来た。拙者から、礼を云うぞ」
「旦那、お礼を申し上げるのは、わちきらの方でありんす」
玉絵が、進み寄って、媚をふくんだ眼眸をかえすと、九郎太は、

「いやいや、お前らが、拙者に礼を云うのは、ちと早いぞ」
声音はあくまでも明るく、しかし、双眼の光は、笑ってはいなかった。
「つまりだ、拙者の考えが、霧の中を歩くうちに変った、と思ってもらおう」
女郎たちは、まだ、九郎太が何を云おうとしているのか、判断しかねて、黙って見かえしているだけであった。
玉絵一人だけが、九郎太の眼光をあやしんで、
「あちきらが、足手まといになった、とでもお云いなんすのかえ？」
「いや、べつに足手まといになったわけではない。お前らの死場所を、どのあたりにしてくれようか、と考えていて、此処（ここ）にきめたのだ」
その宣告をきいて、女郎たちは、顔色を一変させると、悲鳴をあげた。
「お前らは、無数の男に肌身を弄（もてあそ）ばれたが、若い女子（おなご）であることに変りはない。やはり、死場所は、このような美しい景色の土地がよかろう」
うそぶく九郎太に対して、玉絵が、
「人非人（ひとでなし）！」
と、絶叫した。
そのひびきがまだ、宙に消えぬうちに、抜く手もみせぬ九郎太の一閃裡（いっせんり）に、玉絵は、血煙りをあげて、のけぞっていた。
「ひやあっ！」
「きゃっ！」
「あっ！」

残りの女郎たちは、ゆるやかに傾斜した草地を文字通り死にもの狂いで駆け出した。
これを追って、一太刀ずつで、斬り仆(たお)す九郎太の速影は、まさに悪鬼であった。
女郎たちは、てんでんばらばらに、四方へ奔(はし)ったのであるが、西へ逃げたのを斬っておいて、東へ向って駆ける者へ追い着く九郎太の脚力は、数倍の迅(はや)さであった。
逃げるのをあきらめて、坐り込んで、両手を合わせて許しを乞う女郎もいたが、九郎太は、容赦なく、一太刀あびせた。
酸鼻、というほかはなかった。

四

一人残らず、草地に横たえさせておいて、ひと息ついた時、死神九郎太は、再び湧きあがって来た霧の中に――二十歩ばかりへだてた地点に、うっそりと佇立(ちょりつ)する黒い人影を、みとめて、愕(ぎょ)っとなった。
「眠狂四郎！」
その名を、口のうちで呟いて、あらためて、眸子をこらすと、黒影は、ゆっくりと、霧の中から、歩み出て来た。
「貴様っ！」
眦(まなじり)が裂けんばかりに瞠(みひら)いて、九郎太は、呻(うめ)いた。
狂四郎は、五六歩の距離で立ち停ると、彼処此処(かしこここ)に仆れている女郎たちの屍骸(しがい)を、見まわしてから、
「死神と異名をとる者らしい所業だ」

と、冷やかに云った。

「貴様っ！　たしかに、あの二階では、死んで居ったが……？」

「左様、貴様ほどの男の目をごまかすほど、巧みに、死顔そのままに、化粧されていた。ことわっておくが、わたしは、貴様が踏み込んで来た時、べつに、死んだふりをしていたわけではなかった」

「なんと?!」

「正体もなく、昏睡の状態をつづけていた、ということだ。貴様が、玉絵という女郎に渡した毒物は、たしかに、よくきいた。普通の人間なら、息をひき取ったろう」

狂四郎を救ったのは、湯宿のあるじ万助であった。

あわや、玉絵が、狂四郎の胸を突き刺そうとした瞬間、万助がとび込んで来て、これをさえぎったのである。

そして、玉絵に云いふくめて、ひとつの工作をやってのけたのであった。

万助は、二十歳頃までは、市村座附きの顔師であった。

昏睡状態に陥ちた狂四郎の顔を、死人のものに、化粧しておいて、九郎太の到着を待ち受けたのである。

いちかばちかの大芝居であった。

「貴様が、わたしの胸に耳をあてて、鼓動があるかどうか、たしかめなかったのは、不覚というほかはなかった」

「う、うっ！」

九郎太は、ぎりぎりと歯を食いしばった。

「目覚めて、すぐ、あとを追って来たのだが、ひと足おくれた。……よもや、貴様が、この女郎たちをみなごろしにすることまでは、予想がとどかなかった。貴様が、このような残忍を為さねば、そのまま、さきへ行かせたかも知れぬ。……どうやら、ここが、貴様とわたしが、決着をつける場所になったようだな」

久しぶりに、眠狂四郎は、円月殺法の冴えを発揮することになった。

二人が、九尺の間隔を置いて、対峙した折、金八と万助が、そこへ登りついた。

「爺さん、おめえ、まだ、眠の旦那の円月殺法を、おがんだことはねえだろう」

金八が、ささやいた。

「ああ、まだだ」

「とっくりと見物しな。円月殺法を使うには、不足のねえ敵だぜ」

二人は、息をつめて、見まもった。

四半刻の静止睥睨の、長くて短い時刻が、山上に流れた。

と――。

無想正宗が、地摺り下段から、ゆるやかに、円を截ってまわす緒についた。

刀身は、直立した。

九郎太の青眼の構えは、微動だにせぬ。

無想正宗は、ゆるやかに、下向の弧を描きはじめた。

そして……。

切先が、元の地摺りの位置へ還ったかと、見えた刹那、九郎太が、地を蹴って、跳躍した。

二条の白刃が交叉した――とみた刹那、もう、二人の立った地点は入れ代っていた。

のみならず、一間余をへだてて、狂四郎と九郎太は、互いに背中を向け合っていた。
九郎太は、撃ち込んだ一瞬そのままに、まっすぐに、刀身をさしのべていたし、狂四郎は、胸前へそれを横たえていた。
狂四郎が、ゆっくりと向きなおるのと、九郎太が朽木のように仆れるのが、同時であった。
「ど、どうだい、爺さん、旦那の腕の見事さは――」
金八が、小鼻をひくめかした。
「すげえものだのう。……あの世への土産話ができた」
万助は、大きく肩で呼吸をした。
「爺さん――」
狂四郎が、無想正宗を腰にもどしてから、呼んだ。
「へい」
万助が、寄って行くと、
「お世話になった」
「いえ、なんの……」
「面倒だが、ゆきがかりのついでに、この女郎たちを、埋葬してやってもらえるか」
「へい。それはもう、あわれな女子どもでござんすから、ちゃんと、墓をたててやりましょう」
万助は、いたましげに、七つのむくろを眺めやった。
「金八、埋葬を手つだってやれ」
狂四郎は、命じた。
「合点で――」

「では」
狂四郎は、万助に一揖しておいて、歩き出した。
「先生っ、あっしゃ、すぐに、追いつきますぜ」
金八が、その背中へ、叫んだが、返辞はなかった。
万助も、狂四郎の後ろ姿へ、じっと視線を送っていたが、
「なんとも、さびしそうなご様子を、していなさる」
と、呟いた。
「なんだと？　なんと云ったい、爺さん」
「対手がいくら極悪な奴でも、斬り殺した後味はわるいものらしいのう」
「冗談じゃねえや。……眠狂四郎はな、斬っちまったら、もうすぐ忘れていなさらあ。いちいち、後味のわるい思いをしていたら、あの旦那が、今日まで生きていられるものけえ」
「金八、おめえは、もうずいぶん長いあいだ、あの御仁の乾分気取りでいるんだろうが、お心のうちの十分の一も、汲みとってはいないようだな」
万助は、沁々と云ったことだった。

少年覚悟

一

雨もよいの午後であった。

松の並木が、田野の中をまっすぐにつらぬく街道を、黒の着流しの痩身が、ふところ手で、いそぐでもない足どりで、歩いて行く。

沼津の旅籠を朝ややおそく発ち、原宿を通り抜け、吉原がもうすぐそこに近づいていた。

駿河路をついてまわる富士山は、ひくくたれこめた雨雲に、かくれていた。

孤身のかたわらに、金八の姿はなかった。

沼津の旅籠で、狂四郎は、ふと思いついて、金八を夜明けに発足させたのである。

「薩埵峠の下で、待て」

そう命じた。

これは、この男独特のカンであった。

薩埵峠が死地になる待ち伏せが為されているような予感が、ふっと、湧いたのである。

そして、また——。

沼津から由井までの八里半の間にも、意外な襲撃があることは、当然考えられたので、巾着切としての金八の鋭い耳目の働きをたよってみることにしたのである。

「これは、くさい、と感じたら、並木の枝に、呪札でもむすびつけておけ」

「合点でさ」

おのが直感力が役立つことに、金八は、勇躍して、まだ足元が暗いうちに、旅籠をとび出して行ったことであった。

当時——。

民家には、家毎に、門口や檐下に、厄払いの呪札が、貼ってあったのである。

街道上に、ほとんど人影は見当らなかった。

――そうか、今日は、厄日か。
迷信のつよい時代であったので、旅する人も、大凶の日は、旅籠ですごすならわしがあった。
大名行列も、伊勢詣でや富士浅間神社詣での講中も、道中を中止するのであった。
ちなみに――。
講中、というのは、文化年間にできた。
大坂玉造上清水町の綿弓の弦を商う松屋という店の手代源助が、諸方を行商して、いたるところの旅籠が待遇がわるく、飯盛女を無理強いするのに辟易して、宿屋組合を設けて道中の弊風をのぞいたらどうだろう、とあるじに相談した。
あるじ甚四郎は、懇意の江戸の大商人鍋屋と計って、浪花講という宿屋組合をつくった。松屋甚四郎が講元になり、日本全土にわたって加盟者を募集して、各宿駅に、浪花講定宿の看板をかかげさせた。
泊り泊りの宿駅で、道中女を買うのを愉しみにして、伊勢詣でをする江戸っ子連は別として、信仰一途の旅をする人々にとっては、飯盛女をすすめず、心づくしのもてなしをすることを標榜した旅籠ができたことは、大いによろこばれた。
この流行に目をつけた大坂日本橋の河内屋茂左衛門が、江戸馬喰町の苅豆屋茂右衛門と相計って、三都講をつくった。それにつづいて、ぞくぞくと諸講がうまれた。大山詣で、富士詣での講中もできて、一般旅客、巡礼、行商人も、これを利用した。
いわば――。
東海道の道中は、対蹠的な硬軟二派の旅人が行き交うていた。
ただ、共通しているのは、いずれも、大凶の日には、旅籠から出るのを避ける、ということだ

けであった。

一人、吉凶の迷信とは無縁の世界に棲む狂四郎は、うすら寒い風に吹かれ乍ら、街道をひろって行く。

やがて――。

狂四郎は、むこうから、しずしずと、女乗物の道中が進んで来るのをみとめた。

供まわりは、二十数人であった。

遠くからでも、一瞥して、これは、京都禁裏から、江戸へ下向する女官道中であることが、判然とした。

禁裏には、天皇御側附きの女官として、典侍、掌侍、命婦、女蔵人、御差などがある。

このうち、江戸城または上野東叡山などへ、お使いとして遣わされて来るのは、掌侍のかしら、勾当内侍であった。

勾当内侍は、長橋局といい、位は五位。諸方からの献上物を受けとったり、下賜品を渡したりする役目で、一年勤めると千両の役得がある、といわれるくらい威勢があった。

したがって、街道上で、大名行列と出会っても、大名の方が、道をゆずった。

狂四郎は、しかし、べつに、並木へ身を避けもせず、ふところ手のままで、距離を縮めて行った。

二

それは、見事なつくりの女乗物であった。

外装は、金梨子地で、金の紋散らしの唐艸蒔絵、これに金色の金具をうちまわし、左右の腰ま

わりには二つの環をつけてあった。

夢想窓には、紗（しゃ）を張ってあった。

おそらく、内部は、鳥の子に金砂子を蒔き、花鳥の極彩色の絵でも描いてあるに相違ない。

狂四郎は、そのまま、ゆっくりと、脇を通り過ぎようとした。

刹那——。

夢想窓から、飛電の迅さで、一槍が突き出されて、狂四郎を襲った。

狂四郎に、油断はなかった。

身をひねりざま、穂先ちかくの口金（くちがね）のあたりを、むずとつかんだ。

手槍だが、九尺はあった。これをどうして、乗物の中に、かくしていたか？

——柄を、幾段にもたたむ工夫がしてあるのだな。

そうと看て取る余裕は、しかし、次の瞬間、狂四郎は、すてなければならなかった。

二十余の供揃（ともぞろ）いが、一斉に、四方へさっと包囲の布陣をみせるや、片手をかざしたのである。

いずれの手にも、手裏剣がにぎられていた。そして、どの構えも、手練者（てだれ）であることを示していた。

——ここが、死地であったか。

狂四郎は、自嘲（じちょう）の薄ら笑いを、口辺に刷（は）いた。

乗物の扉（と）が開かれ、出現したのは、これは、まさしくこれに乗るにふさわしい、禁裏お使いの長橋局と見まがう美しい上臈（じょうろう）であった。

「眠狂四郎、不覚にも、罠（わな）にかかりましたの」

嫣然（えんぜん）として、云った。

「まことに見事なご挨拶だ、と申し上げよう」
二十数本の手裏剣を、四方から一瞬裡に投げられては、いかに不死身の狂四郎でも、生命を保つことは、おぼつかぬ。
俎の上の鯉にならざるを得なかった。
「そちが身につけている大切な品を、こちらへ渡すがよい」
「あいにくだが、所持せぬ」
「狂四郎！　そちは、いま、生死の境目に立たされていることを、忘れまいぞ」
「死をおそれて、今日まで生きのびた男ではない。面倒なら、屍体にして、さがすがよかろう」
「そうか、相判った」
上臈は、冷たく、冴えた双眸を据えた。
「江戸城内大奥よりぬすんだ絵図面は、脳裡に写しておいて、破棄した、と申すのじゃな？」
「ご明察――」
「そちが向う場所へ、案内するがよい」
上臈が命ずるとともに、四人ばかりが迫って来た。一人が、綱を持っていた。
すると、狂四郎は、にやりとして、
「長橋局に化けたおひとに、申し上げておこう。この眠狂四郎は、ひっくくられて道中する屈辱に堪えるよりは、死をえらぶ男だ。……遠慮なく、片づけて頂こう」
死地に立たされた者の方が、平然として、うそぶいたのである。
上臈は、
「その長持の中で、寝て参ることまでは、こばみはすまい」

と、云った。
「膝栗毛の手間をはぶいて頂くことになり、お礼を申さねばならぬところか」
「どちらまで参るのじゃ？」
「とりあえず、西へ——とだけ、申しておこう」
狂四郎は、自身の方から、無想正宗と脇差を、供の一人へ渡しておいて、乗物のうしろに据えてある長持に入った。
長持の中には、夜具だけが納めてあり、身を横にするには、おあつらえ向きであった。
行列は、西へ向きを転じた。

三

同じ日——。
箱根を降りて、三島宿へ至った巡礼父娘(おやこ)——と見せかけた一組が、いた。
「雨になるかも知れぬ」
菅笠(すげがさ)をあげて、空を仰いだ顔は、佐賀闇斎のものであった。
連れは、いつの間に、大奥から脱出させたのか、小銀であった。
「沼津まで、一里半か。急ぐとするか」
闇斎が、足をはやめようとすると、
「爺様——」
小銀が、呼びとめた。
小銀の表情は、沈んでいた。江戸を発(た)った時からであった。闇斎は、それと気づき乍(なが)ら、娘の

心中によどんでいるものを、わざと無視して来た。
小銀が、自分から闇斎に呼びかけたのは、いまが、はじめてであった。終始沈黙を守っていたのである。
「爺様は、眠狂四郎殿のあとを追うておいでなのでしょう？」
「そうじゃ」
「あの御仁を、味方につけようとなさるのは、おあきらめなされませ」
「いまは、味方につけようなどとは、考えて居らぬ。……殺す」
小銀は、ちょっと間を置いてから、
「わたくしは、江戸を発ってから、毎夜、同じ夢をみます」
と、云った。
「なんの夢だ？」
「……爺様が、眠狂四郎殿に、斬られる悪夢です」
「ふうん——。このわしが、狂四郎にのう……」
「あとを追うのを、あきらめるわけには参りませぬか？」
「たわけ！　今夜、沼津の宿では、わしが、狂四郎を斬る夢をみるがよい」
闇斎は、云いすてた。
小銀は、悲しげに、俯向いた。
その時であった。
松の並木の蔭から、黒い凶器が、異常な唸りを生じて、宙を截って襲って来た。
ぶ、い、い、い、ぶうめらんであった。

「おっ！」
闇斎は、これを、紙一重で、頭上にかわした。
大きく弧を描いて、翔けもどって来た武器を、受けとめたのは、総髪、筒袖に軽衫をはいた男であった。
この男は、この物語のはじめに、狂四郎が、伊豆半島最南端・石室崎で燈台守をしている元岡っ引の佐兵衛を訪ねて行く途中、出会って、いまと同様、ぶらいらんで襲った人物であった。
「ほう、お主、莫邪主馬助か」
闇斎は、その姓名を口にした。
「いつの間に、日本へもぐり込んで居ったぞ？」
莫邪主馬助と呼ばれた人物は、「日本太夫！」と、闇斎を睨み据え、
「おのれは、六十を越えてなお、我欲旺盛とは、見下げはてたぞ！」
と、ののしった。
「ははは……、主馬助。豊臣秀吉はどうじゃ？　徳川家康はいかに？　六十を過ぎたら、無欲恬淡に相成ったかな？」
「日本太夫！　われら一統が、日本へ潜入したからには、太閤遺産は、絶対にお主の手には渡さぬぞ！」
「ふむ！　安南の日本人町頭領莫邪主馬助が、わがものにするか、暹羅の山田長政の後裔日本太夫が、この手につかむか――百万両の行方は、神のみぞ知るて」
「日本太夫！　おのれとわれら一統とは、目的は同じであっても、性根に於て、天地雲壌の差があるぞ。……われらののぞむところは、南方諸洲にちらばる同胞の団結だ。以て、一大軍勢を編

成して、母国へ寄せかけ、幕府に迫って、鎖国の迷妄を打破するのだ。この悲願達成のため、太閤遺産を手に入れて軍用金にしようとするわれら一統と、おのれ一人占めにしようとする我欲の権化と、いずれに神仏の加護があるか、自明の理であろう」

莫邪主馬助が、云いはなった折、にわかにあたりがくらくなり、大粒の雨が降り出して来た。

「主馬助、この雨では、ブウメランは使えまい。出なおすがよい。太閤遺産を狙うのは、お主とわしと二人だけではない。幾多の人間が、血眼になって、さがしまわり、最後に、誰が、その手につかむか――これは、面白い見物でもあるのだ。……今日のところは、別れるといたそう」

佐賀闇斎こと日本太夫は、老獪な落着きぶりを示した。

四

その日、老中水野忠邦は、下城して来ると、居室に武部仙十郎を呼び、

「いかが相成ったか？」

と、問うた。

大奥から下らせたオランダ娘千華が、行方不明になり、眠狂四郎もまた江戸から姿を消した――そのことであった。

「この爺いが、七十余年の生涯に於て、最大の不覚でござる」

忠邦は、この老人がみせるはじめての沈鬱な態度に、

「そちが、狂四郎に裏切られたとはのう」

と、云った。

「狂四郎めが、東海道をまっすぐに歩いて行ったことは、明白でござるゆえ、こころみに、一策

を案じ申したが、はたして、効があったかどうか、疑わしゅうござる」
「狂四郎という男を最もよく知って居るそちが案じた策略ではないか」
「……ではござるが、あやつのことゆえ、それを、身共の策略と看て取ったならば、身共に対する憤りのあまり……」
そこまで云いかけて、老人は、口をつぐんだ。
家中からえらんで、狂四郎のあとを追わせた十一人の少年たちに、
「目的を果せずば、死ね」
と命じたおのれの残忍が、いまにして、胸を疼かせた。
おそらくは、狂四郎は、少年たちを斬りはすまいが、その峰撃ちをくらっただけで、幾人かは、生れもつかぬ不具者になるおそれがあった。
その惨状が、老人の眼裏にうかんでいた。
「爺――、狂四郎がおもむくままに、見すてておいたならば、どうだ?」
「いまは、そうも、考えて居り申すが……」
老人は、ほっと吐息してから、
「というて、すてておけば、狂四郎は、太閤遺産をさがしあてたならば、あのオランダ娘に、のこらず呉れてしまうは、必定」
「狂四郎自身も、この日本を去って、海を渡ってしまうかも知れぬ、と思うか?」
「あるいは――」
主従は、視線を合わせた。
「狂四郎が、それをさがしあてたならば、殺すよりほかはあるまい」

忠邦は、云った。
四十歳になったならば、必ず老中首座に就いてみせる、とおのれにひそかに誓った忠邦である。
その四十歳を、今年迎えた忠邦は、しかしまだ、のぞむ首座を、はるかに遠いものにみていた。
政治の主権をつかむには、やはり、軍資金を必要とした。
百万両を手に入れることは、確実に、政治の主権をつかむ夢を実現させてくれるのだ。
忠邦は、のどから手が出るほど、その軍資金が欲しかった。
「爺、たのむ！」
忠邦は、股肱（ここう）に向って、頭を下げた。
主人の居室を退出した仙十郎は、猫背をさらに一層まるめて、長い廊下を幾まがりかして、家中出入口へ来た。
すると、そこに、おのが役宅の用人が、血相を変えて、待ち受けていた。
あたりをはばかり乍ら、
「一大事にござりまする！」
と、訴えた。
「なんじゃ？」
「留守居添役大野木玄蕃（げんば）殿の嫡男隆市と申す少年が、庭さきにて……」
「いかがいたした？」
「せ、切腹、つ、つかまつりました」
「……！」

仙十郎は、いったん、かっと、皺目蓋をひらいたが、声は出さなかった。
大野木隆市は、討手としてさし向けた十一人の少年の一人であった。
「他の者どもは、いかがした？　立戻って参ったか？」
仙十郎は、役宅へ急いで身をはこび乍ら、用人に、訊ねた。
「それが、わかりませぬ。……大野木殿の子息一人だけが、いきなり、庭へ踏み込んで参り……、止めるいとまもなく、腹を――」
「たわけが！」
老人は、吐き出したが、それは、少年の軽率な振舞いをののしるのではなく、おのれ自身をあざけっているようであった。
木戸を通って、庭さきの有様を一瞥した仙十郎は、ふうっと肩で息をした。
おびただしい血海の中に、少年は、横伏していたが、まだ死にきれず、首をうごめかし、脚をびくびくと痙攣させていた。
しかし、仙十郎が抱き起したとたん、がっくりと、事切れた。
「大野木殿に、お報せいたしましょうか？」
用人が、遠くから云った。
「いや、こちらから、遺骸をはこんでやらずばなるまい」
そうこたえておいて、仙十郎は、血汐に染められた遺書を把りあげた。
それには、かなりの達筆で、討手としてのお役目が果せなかったことを謝罪し、十人の少年たちは、いま、水野家の菩提寺である伊皿子の光明寺方丈に在って、不首尾が許されるかどうか、謹慎している旨、記されてあった。

すなわち。

大野木隆市は、代表者として、立戻って来たのであった。その帰途、自分一人が腹を切って詫びれば、他の十人は、許されるのではなかろうか、とほぞをきめたに相違ない。

仙十郎は、遺書を読み了(お)えると、

「たわけが！」

と、もう一度、おのれをあざける独語をもらした。

そして、あらためて、少年の死顔を視やった。

死顔には、苦痛の色はなかった。それが、老人にとって、せめてもの救いとなった。

敵と味方

一

文字通り暗黒の中にとじこめられて、眠狂四郎は、四肢を折って、痩軀(そうく)を横たえていた。

ただの長持ではなかった。

動く牢獄(ろうごく)として、巧妙に作られていた。内部には、薄い鉄板が、張られてあったし、食事の差入れ口も設けられていたし、夜具の下には、便器もそなえつけてあった。

これを破って、遁(のが)れることは、まず不可能であった。

尤(もっと)も、狂四郎には、脱出する意志はなかった。

どうせ、さまざまの敵が、行手をはばむ道中であるからには、いっそ、虜囚となって、身をは

こんでもらう方が、気楽といえた。
長持が据えられているのは、蒲原（かんばら）の脇本陣と、判っている。富士川の早瀬を、舟渡しされて、ここへ到着したからである。
夕餉（ゆうげ）が差入れられてから、一刻（いっとき）以上が過ぎていた。
——金八は、薩埵峠の下で、おれがこれにとじこめられているとも知らず、行き過ぎさせて、待ちぼうけをくらうことになる。
狂四郎の脳裡（のうり）にうかんだことといえば、それだけであった。
桑名あたりまでは、長持の中で寝て行くつもりの狂四郎であった。
と——。
狂四郎の研（と）ぎ磨（すま）された神経が、急に、働いた。
なんの物音もきこえたわけではなかったが、長持の外で、何事かが起った、と察知した。
——どうやら、寝ていられるのは、ここまでらしい。
狂四郎は、おのれに呟いた。
はたして——。
ひそやかに、長持にかけられた錠前が、はずされ、そっと、蓋があげられた。
とたん、部屋にまかれた臭気が、狂四郎の鼻孔を衝いた。
狂四郎は、目ばかりに覆面した救い手を、一瞥しただけで、
「ほう、お前か」
と、薄ら笑って、身を起した。
「敵である者が、都合によっては、味方になってくれるのか、捨てかまりの弥之助」

長持から出た狂四郎は、毒煙をくらって倒れている二人の見張り番を、眺めやり乍ら、云った。
弥之助は、狂四郎から距離を置いて、うずくまっている。
「弥之助、お前は、お目付下条主膳の手先であった筈だ」
「へい」
「わたしは、この女官道中は、下条主膳が思案した罠と、看たが、そうであれば、お前は、主人を裏切って居る」
「………」
「すなわち、お前は、別に考えるところがあって、お目付の手先になった曲者(くせもの)ということになる」
「………」
「捨てかまりというのは、忍者用語で、要所要所に捨て石のように配備された伏兵の意味だが、甲賀や伊賀では、この用語は、使わぬ。薩摩だけで、忍者がそう称(よ)ばれているのではないのか。……お前は、薩摩から放たれて来た島津家手飼いの忍びであろう。公儀お目付の手先になって、島津家のために、働いて居る――そうではないのか、弥之助？」
「………」
「忍びに、正体を明かせ、と迫る方が、野暮というものか。いずれにしても、お前が、下条主膳を裏切ったことは、疑いない」
「旦那、ともかく、この脇本陣を、ぬけ出して頂きます。それからの相談ということにして、お早く――」
弥之助は、うながした。

「長持から救い出されたのは、わたしにとって、有難迷惑なのだ。しかし、救い出された以上、やむを得ぬから、歩いて行くことになる。しかし、無腰では、恰好がつかぬ。無想正宗をとりもどすゆえ、お前は、ひと足さきに、出て行け」
「へい」
「弥之助――」
「旦那！　この供揃いが、男はもとより女子も、選りすぐった手練者であることを、旦那もすでにご存じじゃありませんか」
「対手がたが、そうだからこそ、尻尾を巻いたていで、こそこそと退散するわけにいかぬのだ。自身の差料をとりもどすとともに、贋女官殿にも、挨拶して参ろう」
「そんな！　みすみす、また――」
「捕えられて、この長持へ、逆戻りすることも、こちらは、一向にいとわぬ」
狂四郎は、そう云いすてておいて、廊下へ出た。

二

奥の一室へ、跫音を消して近づいた狂四郎は、ふっと、眉宇をひそめた。
そこから、小さな悲鳴がもれ出るのを、きき取ったのである。
次の瞬間、狂四郎は、苦笑した。
それは、悲鳴ではなく、きわめて淫靡な、官能の身もだえから吐かれる呻きであった。
狂四郎は、障子を、ほそめに、開けてみた。
褥の上にくりひろげられた光景は、男女の営みではなかった。

禁裏お使いの長橋局に化けた女が、緋の長襦袢も白綸子の二布も、ひきはだけて、肉の盈ちた豊艶な胸、腹、腰をあらわにし、侍女の一人に、ぞんぶんに弄ばせていた。

胸のふたつの隆起は、唇と指に弄ばせ、滑らかに張った蠟色の腹部を、掌で撫でさせていたが、もうそれだけで、官能の疼きに堪えがたい呻きをあげ、顔をゆすり、下肢を曲げたり拡げたりして、腰をうごめかしているのであった。

侍女は、そうするように習練させられているのか、腹部を撫でる掌を、秘部まで、なかなか、下げようとせぬ。

狂四郎の眸子には、柔肌を匍う五本の指の白く嫩かな細長さが、妖しい美しい生きものに映った。

身もだえる贋女官は、ついに、焦れて、侍女の手くびをつかむと、秘部へ下げた。

黒い茂みをわけて、その一指が、濡れた襞にふれるや、贋女官は、われを忘れた叫びを発した。

その時を、待っていたように、狂四郎は、室内へ、すべり込んだ。

贋女官も、侍女も、ひしと目蓋をふさいでいるおかげで、狂四郎は、悠々と自由に行動することができた。

脱ぎすてられた衣裳のわきに、懐剣が置かれているのをみとめて、まず、それを、そっとひろいあげた。

侍女の顔が、贋女官の股間にうずめられて、さらにせわしい喘ぎがたかまるまで待ってから、狂四郎は、ひくく咳払いをした。

反射的に、侍女が、ぱっと顔をあげ、贋女官の豊艶な肢体のうごめきが、ぴたっと停止した。

贋女官が、狂四郎を見出して、はね起きようとした。

「動くな！」
狂四郎は、一喝した。
懐剣を抜きはなっていた。
距離は、五歩以上もあったが、狂四郎が、抜いた懐剣を、手裏剣にして撃つ構えを示しているので、贋女官は、あられもない放恣な寝姿を、掩いかくせなかった。
「男にとって、格別の見世物を馳走して頂いたついでに、こちらも、座興までに、ちょっとした技を、ごらんに入れよう」
狂四郎は、云った。
「技がきまったならば、わたしの差料をかえしてもらう。よろしいな？」
「…………」
贋女官は、眠狂四郎という人物に就いて充分の知識があるとみえて、恐怖の色を双眸に滲ませた。
狂四郎は、冷たく笑って、
「座興の技ゆえ、べつに、おそれることはない」
と、ことわっておいて、侍女に有明を褥裾に近づけさせ、贋女官に、大きく下肢をひろげて、腰を上げるように、要求した。
贋女官は、ちょっとためらっていたが、抵抗しても無駄と知って、目蓋をとじると、命じられるままな肢態をとった。
狂四郎は、酷薄な語気で、
「目をひらいて、こちらの技を、しかと、見とどけて頂こう」

と、云った。
贋女官は、狂四郎を視かえして、
「なにを為そうというのじゃ？」
と、はじめて声音をあげた。
「見て居れば、わかる」
狂四郎は、ゆっくりと、畳へ片膝をついた。
そして、懐剣の鞘をつかんだ右手を、直立させて、贋女官の股間にむき出された剝き身の蛤に似た女陰を、凝視した。
次の刹那——。
鞘は、宙を截って飛び、あやまたず、濡れた女陰へ、ふかぶかと突きささった。
「ああっ！」
贋女官が、悲鳴をほとばしらせるや、狂四郎は、
「動くな！」
と、叱咤し、
「本技は、これからだ」
と、云った。
贋女官は、狂四郎が、懐剣を右手に持ちかえて、構えるのを視て、恐怖の色を、顔面いっぱいにひろげた。
「……ゆるして！」
思わず、ちいさく呟いて、目蓋を閉じた。

「目を閉じてはならぬ！　ひらいて居らぬと、故意に、腹をぐさりと刺すことになろう」
狂四郎は、おどした。
「……ああ！」
贋女官は、ひろげた下肢を、びくびくっと痙攣させた。
懐剣は、狂四郎の右手をはなれた。
一閃の白光となって、飛んだ九寸五分の刃は、見事、女陰に突きささっている鞘に、ぴたりと納まった。
狂四郎は、侍女に、自分の差料を持って来るように、命じた。
侍女は、贋女官を、うかがった。
贋女官は、うなずいてみせた。
狂四郎は、贋女官に近づくと、女陰から、懐剣を抜きとって、その枕もとへ投げた。
侍女が持って来た無想正宗と脇差を、狂四郎が腰に落した時、贋女官は、ようやく、おちつきをとりもどして、
「貴方の男ぶりに、わたくしは、生れてはじめて、目も心もくらみました」
と、云った。
「あとを追って来るのならば、別の策を案じて、襲って来ることだ。但し、こんどは、おとなしゅう、虜囚にならぬかも知れぬが……」
「いえ！　貴方を慕うて、追います」
「この世には、恰度都合よく、男と女の頭数が、半々につくられているにも拘らず、わざと、同性を対手にえらぶような女子を、こちらは、好まぬ」

狂四郎は、云いすてておいて、出て行こうとした。
「待って！」
贋女官は、あわてて、起ちあがると、追って来ようとした。
とたん、狂四郎の凄じいひと睨みが、彼女の足をすくませた。
「わたしが、無想正宗を抜く時は、座興の技では、すまぬぞ！」

三

脇本陣を抜け出して、暗い街道をものの二十歩も進んだ時、背後から、三本ばかり、手裏剣が、飛来した。
その一本は、袂を貫いた。
「旦那！　危のうございます！」
闇の中から、弥之助の声が、かかった。
狂四郎は、後方をうかがおうともせず、黙って、まっすぐに歩いた。
追手は、襲って来なかった。
二町あまり行って、狂四郎は、一軒の居酒屋に入った。
ちょっとおくれて、弥之助が、入って来て、狂四郎の向いに、腰をおろした。
馬子や駕籠舁きが、飲む店で、四十年配のみにくい貌とからだつきの酌婦が一人いるだけであった。
「おどろきました！」
弥之助は、云った。

「てまえも、ずいぶん多勢の度胸のある男たちに出会って居りますが、旦那ほど、自分の生命(いのち)を粗末にする御仁には、はじめて、お目にかかりました」

「…………」

狂四郎は、黙って、猪口(ちょこ)を口にはこぶ。

「てまえは、旦那を、長持から救い出すまでは、まだ、旦那を自分の仕掛けた罠へはめられるかも知れぬ、と甘く考えて居りました。いまは、きれいさっぱり、そんな考えは、すてました。……白状いたします。てまえは、たしかに、薩摩の者でございます。……先程、旦那が仰言(おっしゃ)ったように、捨てかまりというのは、薩摩の忍び衆のことでございます。てまえは、その薩摩忍者の下忍の家に生れました。鹿児島城下から南に三十里ばかりの、木下という村でございます」

「豊臣秀頼の墓所がある、という村だな」

「そうでございます。木下村では、秀頼公が落人(おちうど)として、かくれ住んだことを、疑う者は一人も居りません。みな、かたく信じて居ります」

「…………」

「てまえは、二十歳の頃、村の故老から、秀頼公が、何百万両という莫大な軍用金を、どこかにかくした事実を、きかされました。……で、いつの間にか、てまえは、自分の手で、その軍用金をさがしあてたい、と野心を抱くようになりました。てまえが、家をすてて、薩摩を出奔したのは、そのためでございました。上方(かみがた)では、二年ばかり、かたぎのあきないをして居りましたが、江戸へ出て来ると、薩摩忍者としてならいおぼえた忍びの業を、夜働きに使うようになって居りました。これは、しかし、公儀お目付下条主膳殿に、近づく手段(てだて)でもありました。町奉行所に捕えられれば、獄門になる盗賊も、お目付に、その腕が買われれば、手先にしてもらえるからでご

ざいました。……で、首尾よく、お目付にてまえの腕を買ってもらって、手先になりました。三年前のことでございます」

「…………」

狂四郎は、じっと、弥之助の視線を受けとめている。

「お目付下条主膳殿が、秀頼公のかくした軍用金を、さがしている、ということを、てまえは、偶然かぎつけたからでございます。お目付が、このことを知ったのは、ご同朋(どうぼう)の沼津千阿弥殿が、病気といつわって出仕をやめ、塾をひらいて、お坊主衆を弟子にしたのを、なにか企むところがあるな、と疑って、身辺をさぐっているうちでございました。千阿弥殿が、秀頼公の軍用金を、どこで、知られたか、そこまでは、てまえは、存じません。……てまえは、お目付に命じられて、ご同朋の塾へ、忍び込んで、千阿弥殿が、軍用金のかくし場所を、つきとめるかどうか、地獄耳をたてて居りました。……ところが、千阿弥殿は、軍用金をさがし出すかわりに、あのような凄まじい諌死(かんし)をされてしまいました」

「…………」

「すると、お目付は、千阿弥殿の弟子がたを、片はしから殺しはじめたではございませんか。てまえは、その頃から、お目付を憎むようになりました。軍用金は、どんなことがあっても、下条主膳の手には、渡さぬぞ、と肚(はら)をきめました。これは、嘘いつわりのない、てまえの決心でございました」

「…………」

「旦那は、いつぞや、若年寄のお屋敷に、てまえが忍び込んだところを見つけて、鋭い訊問をなさった挙句、こう仰言(おっしゃ)いました。若年寄小笠原相模守も、お目付下条主膳も、死神九郎太も、そ

して、お前も、同じ道を――欲の道を歩いて居る、と」
「お前は、まだ、その欲の道を歩くのを、止めたわけではあるまい」
狂四郎は、冷やかに、云った。
「旦那！　てまえには、いま、はっきりと、判りました。旦那お一人だけは、軍用金のかくし場所へ向っていなさるが、決して、欲の道を歩いていなさるわけではないと、はっきり、てまえには、お心のうちが読みとれます」
「それは、どうかな。おれも、欲と道連れの一人かも知れぬぞ」
「いいや、そうじゃありません。旦那だけは、ちがっていなさる。無欲だからこそ、今夜のような、途方もなく生命を粗末にする振舞いをみせなさるのだ。……てまえは、旦那のために働きたくなりました。どうか、働かせて下さいますまいか？　お願い申します！」
弥之助は、頭を下げた。
狂四郎の無表情は、動かなかった。
「弥之助――」
「はい」
「あいにくだが、それがお前の本心かどうか――こちらは、看て取っては居らぬ。たとえ、本心であっても、お前を、おれの手先にする存念は、毛頭みじん持たぬ」
「旦那！」
「救い出してくれた礼だけを、云っておこう。……おれの目の前から、消えてくれることだ」
「旦那！　てまえは、信じて頂けなくても、旦那のために、働きとうございます。……どんなことでも、ひとつだけ、お命じになって下さいまし。きっと、やりとげてみせます」

「お前にたのむことなど、何もない」
狂四郎の態度は、あくまで、かわらなかった。
「下条主膳の首を取って来い、とお命じ下さっても、かまいません」
弥之助の方も、執拗に、食いさがった。
「おれは、これまで、降りかかる火の粉は、払って来たが、自分の方から進んで、他人の生命を狙ったことはない。まして、手先を使って、首を取るような卑劣なまねは、性分にあわぬ」
「旦那！ どうしても、てまえを、旦那のために働かせては下さいませんか？」
「くどいぞ、弥之助」
狂四郎は、立つと、居酒屋を出た。
街道を歩き出したが、弥之助は、ついて来る気配をみせなかった。
——ついて来るであろう。
——勝手について来るがいい。
狂四郎は、弥之助の嘆願を、ただ、わずらわしいものにおぼえただけであった。
時刻はもう、三更（午前零時）をまわっていたろう。
行手には、暗闇がたちこめていた。

薩埵(さった)峠

一

眠狂四郎が、鰻(うなぎ)の寝床のように細長い、山と海にはさまれた由井(ゆい)の宿(しゅく)に、姿を現わしたのは、早発ちの旅客が、旅籠(はたご)を出る頃合であった。

蒲原(かんばら)から由井までは、わずか一里足らずで、街道は、大かた町家つづきであった。

狂四郎は、たぶん、塩焼きの浜で、二刻(とき)あまり、睡って来た模様である。

ふところ手で、ゆっくりと、一上一下する四丁余の町すじを通り抜けた狂四郎は、薩埵峠の下に着いた。

興津(おきつ)に至るには、二筋がある。薩埵峠の山路を越えるか、親知らず子知らずの波打際をたどるか、どちらかであった。

明暦年間に、朝鮮国から官使が渡来したのを機会に、波打際に、便路がひらかれた。それまでは、越後国糸魚川(いといがわ)と同様、寄せ引く浪間をうかがって、一人ずつ、嶮岳(けんがく)の下岩のはざまを、駆け抜けていた。

いまは、高い波浪が、おそいかかって来る巌の上に、掛茶屋数軒がならび、客を呼んでいた。

鮮魚や栄螺(さざえ)の壺焼きなどで、一酌を催し乍ら、沖合の風景も賞する一興もあった。

もともと、峠越えは、地下(じげ)の人すらも、「薩埵」という詞(ことば)をきらい、殊に、嫁入りの行列などは、絶対に通らなかったし、遠出をする者も、避けた。

峠越えするのは、時化の日ぐらいのものになっていた。
狂四郎は、おだやかな佳い日和にもかかわらず、あえて峠越えの街道をえらんだ。
峠の入口にある松の枝に、赤い呪札が、むすびつけてあるのをみとめたからであった。
金八のしわざに相違なかった。
ゆっくりと登って行く狂四郎の前後に、旅人の姿はなかった。
坂道は、急勾配であった。
——山の神、さった峠の風景は、三下り半に書きも尽さじ、か。
さったという詞を忌む迷信をわらって、大田蜀山人が、詠んだ一首を、狂四郎は、口のうちで、呟いた。
その時、行手二十歩あまりの地点に、街道を横切って、ぴいんと一本の綱が張られているのを、狂四郎は、みとめた。
予想通りに、なにかの罠が仕掛けられてある、と知って、狂四郎は、そこまで、登り着いた。
綱は、右手の松の幹をひと巻きして、街道に一線を描いて、左方の断崖ぶちへ引っぱってあった。
狂四郎が、その前で足を停めると、
「またぐことは、叶わぬぞ、眠狂四郎！」
その声音が、松の幹の蔭から、かかった。
「…………」
狂四郎が、ふところ手のままで、待っていると、覆面をした武士が、すっと、路上へ立った。
「その綱のはしには、貴公の手下の金八と申す者を、くくって、絶壁に、吊してある。貴公が、

またぐと同時に、こちらの松の幹をひと巻きにして、はしをつかんでいる拙者の配下が、綱をはなす。金八は、ころがり落ちて、岩礁で、五体が砕け散る」
その言葉を合図にして、松の幹の蔭にいる者が、ぎりぎりと、綱を引きしぼった。
すると、断崖ぶちから、金八の首が、現われた。
金八は、苦しげに、その首をねじ曲げて、狂四郎を視ると、
「先生っ！　あっしに、か、かまうことは、ありませんぜ。さっさと、またいでおくんなさい。……水火を辞せず、って、江戸を発つ時に、誓ったんだ、あっしは――」
と、云った。
その顔面は、血の気を失って、蒼白であった。
金八が吊されているのは、常人ならば、そこの断崖ぶちに立てば、足がじいんと鳴って竦む、屏風を立てたような絶壁であった。
「たわけ！　眠狂四郎がまたげば、おのれは、落下するのだぞ。恐怖で全身をふるわせているくせに、つよがりを申すな！」
覆面の武士は、あざけった。
「畜生っ！　江戸っ子だい！　いくらおそろしくったって、生命を惜しんだりするものけえ！……先生、綱をまたいで、そいつを、まっ二つにしておくんねえ！」
金八は、わめいた。

二

狂四郎は、覆面の武士を、正視して、

「わたし自身、いまだ、太閤遺産が、どこに埋蔵されているか、知らぬのだ。もとめて、うろつく者が、行先を教えるわけにいくまい」
「黙れ！　貴公が、大奥内に於て、埋蔵場所を記した古文書を、手に入れたことは、明白なのだ。貴公は、その古文書を、破りすてたか、焼きすてたか、おのれの脳裡にきざみつけて、江戸を発足して来た。ごまかしは、断じて許さぬ！」
「では、わたしが、行先は薩摩だ、と告げれば、お主は、信じるか？」
「眠狂四郎、大小を腰から、すてろ！」
「すてれば、わたしの告げる行先を信じる、というのか？」
「信じてやろう。大小を、その綱を越えて、こちら側へ、投げろ」
「やむを得ぬ」
狂四郎は、まず、しずかに、左手で脇差を鞘ごとに抜きとった。
次の瞬間――狂四郎の為した動作は、目にもとまらぬ素迅さであった。
右手で脇差を抜く、左手で路面に張られた綱をつかむ、そして、白刃を一閃させて、綱を両断する――その三動作を、一瞬裡にやってのけた。
「おのれっ！」

覆面の武士が、抜刀した時には、狂四郎は、すでに、金八の五体を、断崖ぶちへ、曳きあげていた。
「今日のところは、いさぎよく、失敗をみとめて、ひきさがるのだな」
狂四郎は、青眼につけた覆面の武士に、云った。
配下が三人、いずれも白刃を構えて、木立から躍り出て来たが、狂四郎は、目もくれぬ。
対手は、迫るにつれて、すこしずつ、構えを上段に転じた。
「ほう！」
狂四郎は、五歩の面前で、対手が、左拳を額にあてて、切先を天に向って直立させる上段の構えをとるのを視て、双眸をほそめた。
「薩摩自源流か」
狂四郎は、数年前、同じくこの東海道で、薩摩藩が百年の長きに亙って組織し完備した隼人隠密党と称する暗殺団と、死闘したなまなましい記憶を持っている。
その時、狂四郎が、辛うじて、死からまぬがれることができたのは、薩摩隼人の面目にかけて、多剣をもって一刃を襲うことをしなかったからである。
かれらは、一騎打ちを厳法とし、一人が斃れれば、また一人、その屍をのり越えて、挑んで来た。
狂四郎は、鈴鹿峠を、水口側に降りた——田村川沿いの街道上で、この隼人隠密党の鹿児島隊・江戸隊の頭取・副頭取と、つぎつぎに一騎打ちして、十五人まで斬る凄まじい経験を踏んでいた。
「お主、もしかすれば、隼人隠密党の一人ではないのか？」

「………」

対手は、無言であった。

「隼人隠密党ならば、話のつじつまが合う。島津家でも、公儀同様、太閤遺産を狙って居ることが、あきらかになって、こちらを合点させてくれる」

狂四郎の脳裡には、昨夜、蒲原の脇本陣で、自分を救い出してくれた捨てかまりの弥之助のことが、思いうかんでいた。

弥之助は、あくまで、島津家から放たれた忍びの者であることは、白状しなかった。

「但し、お主の張った罠は、卑劣にすぎて、隼人隠密党らしくない。すくなくとも、隼人隠密党は、暗殺団としては、いささかの卑劣な策略も弄せぬ。……お主が、わざと、巾着切一人を捕虜にして、吊す、という卑劣なしわざをみせたのは、隼人隠密党であることを、かくすためではなかったのか。……そう受けとってよいか？」

「たしかに、拙者は、隼人隠密党の隊士であった。三年前まではな」

「脱落者だというのか？」

「左様――、思うところあって、脱落した」

「島津家重臣に、申しふくめられて、故意に、脱落したのではないのか？」

「問答無用！　いまは、お主と一騎打ちするまでだ」

叫ぶ対手に、狂四郎は、冷やかな薄ら笑いをむくいた。

「わたしを斬れば、いよいよ、太閤遺産の行方は、判らなくなる。……ゆきがかり上、虚勢を張っているのであろうが、無駄なことだ。止めておけ」

「うーうむ！」

対手は、頭巾の蔭で、双眼をひき剝いて、眼光から火花を散らした。
狂四郎は、構えた敵を、そのまま、そこに見すてておいて、断崖ぶちに歩いた。
金八は、そこに、落ちた蓑虫のように、倒れていた。
狂四郎が、いましめを解いてやると、
「金八、一生一代の不覚だあ、くそっ！……先生、どうして、あん畜生を、まっ二つにしちゃ下さらねえんで――？」
「おれは、殺人鬼ではない。対手に殺意がないからには、斬る気はせぬ」
すでに、街道上から、覆面の武士とその配下たちの姿は、消え去っていた。
「どうして、殺意がねえ、とお判りになったんで？」
「無数の人命を、あの世へ送った者のみが、いつの間にか、身につけた直感力だろう。……あの男は、わたしが抜いて構えたならば、跳び退って、逃げたろう」
「そいじゃ、あいつ、隼人隠密党じゃねえんですかい？」
「まだ、判らぬ。隼人隠密党だからこそ、わざと、卑劣な罠を仕掛けたり、逃げたりしてみせた、とも考えられる」
「冗談じゃねえや、まったく――。あっしはね、吉原から、あいつらに尾けられているのを、感づいたんでさ。……峠の入口の松の枝に、呪札をむすびつけておいたのは、ごらんなすったんでしょう？」
「うむ、見た」
「ごらんなすったのなら、海辺を往って下さりゃよかったんだ」
「おれは、敵に背中を向けたことのない男だ」

「あっしが、こんなざまになっていることも、お見通しだったので――？」
「そこまでは、見通しては居らなかった」
狂四郎は、金八を連れて、街道へ出ると、
「金八、お前は、ひきかえせ」
と、命じた。
「あっしゃ、こんなこととぐれえで、尻尾を巻くのは、まっぴらごめんでさ。あっしが、とっつかまったら、見すてておいておくんなさい。……どこまでも、お供しますぜ」
「そうではない。こんどは、お前が、尾ける番だ」
「へえ？」
「あの覆面の男は、どこかで、何者かと逢うはずだ。何者と逢うか、それを、お前の目でつきとめて来い。江戸一番の巾着切なら、できるだろう。見つけられて、斬られたならば、自業自得とあきらめて、あの世へ行け」

三

巡礼父娘(おやこ)――と見せかけた佐賀闇斎と小銀が、由井宿に到着したのは、その日の昏(く)れがたであった。
倉沢屋という旅籠に入ると、女中の一人がいそいそと、迎えて、
「お連れ様が、お待ちかねでございます」
と、足洗い桶(おけ)を持って来た。
この宿(しゅく)は、東海道でも、最も無愛想な客あしらいで、有名であった。

その女中は、先に上った客から、よほど心づけをはずんでもらったに相違ない。
闇斎は、二階の部屋に入ると、待っていた武士へ、無表情な顔を向けて、
「みごとに、仕損じた、とみえる」
と、云った。
覆面をはずしていたが、峠で、狂四郎に罠を仕掛けた男にまぎれもなかった。
「眠狂四郎という奴、尋常一様の手段では、虜囚にすることはできぬ、と知り申した」
「いまさら――」
闇斎は、吐きすてると、小銀に、からだをもめと命じて、ながながと寝そべった。
「この上は、闇斎殿のご指示によって、働き申す」
「おのれ一人の思案にある敵、と――あっさり、あきらめすぎるではないか、壬生宗十郎とも
あろう仁がの……」
「おのれを知り、敵を知った上からは、再び襲うのに、万全を期したい」
「それでこそ、隼人隠密党を脱して来た壬生さんだ――と申したいところじゃが……」
闇斎は、重ねた両掌の上へ、頤をのせて、氷のように冷たく鋭い視線で、壬生宗十郎を刺した。
「なんだ、といわれるのだ？」
「壬生さん、あんたは、隼人隠密党を抜けて、わしの味方になってくれて、恰度一年が経つ。そのあいだ、よう働いてもろうた。……よう働いてもろうたが、百のうち一ぐらいの割で、あんたの行動には、怪しいふしが、うかがわれた。他人の目はごまかせても、わしの目をごまかすことはできぬ」

「闇斎殿！　なにを申されるのだ」
「あんたは、まことと、隼人隠密党を脱落したのではない。あんたは、あくまで、島津家の家臣として、働いて居るのだ。そうであろう？」
「ばかなっ！　疑惑を抱くのも、ほどほどにされい！」
「疑惑ではない。事実を云っているのだ。壬生さん、あんたが、今日、眠狂四郎に対して、どんな罠を仕掛けて、つかまえようとしたか知らぬが、おそらく、つかまえることは不可能と知りつつ、仕掛けたのであろう。わしには、ちゃんと、判る。あんたは、眠狂四郎が、どれだけ、こちらの正体を看破する眼力をそなえているか、それをためしてみたにすぎぬのじゃ」
「ちがう！　拙者は、必ず眠狂四郎を捕える自信を持って――」
「やった、と云いきれるかな？　あんたのその顔色は、わしをごまかそうとして居る。わしは、ごまかされぬ」
闇斎は、小銀に、腰を押す指に、もっと力をこめろ、と命じておいて、
「ふふふ……、あんたが、島津家の家臣として働いて居る、としても、それを、わしは、だまされた、と憤っているわけではない。それは、それでよい。一向に、さしつかえはない。……すくなくとも、いままでは、あんたは、わしに十二分に協力してくれたのじゃからな。しかし、今日を限りに、あんたは、わしにとっては、無用の人間になった」
「闇斎殿！」
「弁解はやめにしておけ。さっさと立ち去ってもらいたい」
闇斎は、ぴしりと打ち据えるように、宣告した。

隣りの部屋では、金八が、壁にぴたりと耳をくっつけていた。
この部屋を取るのに、金八は、女中に、二分銀をつかませなければならなかった。
——へっ、仲間割れしてやがる！
金八は、緊張で干いた唇を、舌でひとなめした。
その折、階段を上って来る跫音がひびいて、
「ごめんなさい」
唐紙が、さっとひき開けられ、
「相宿をお願いします」
と、女中が、ちらと顔をのぞけて、すぐ、ひっ込んだ。
「ちょっ！　二分もくれてやったのに——」
金八は、いまいましく、舌打ちした。
入って来たのは、風貌魁偉な、巨軀をそなえた浪人者であった。
「相すまぬ」
正坐すると、対手がかたぎではなさそうな町人であるにもかかわらず、鄭重に、頭を下げた。
「いえ、上んなすったのなら、しようがありませんや。あの欲の皮のつッぱった女中が、悪たれてやがるんでさ」
「実は、身共も、心づけを二分はずんだのだ」
浪人者は、正直に、云った。
「へえ、そうでしたかい。あのくそったれあま、あしたの朝、どうなるか、おぼえていやがれ」
金八は、女中が、きっと重い財布を、肌身につけているに相違ない、と看て取っていた。この

旅籠を出ぎわに、その財布をすり取ってくれる、とほぞをきめたのである。

「身共は、志村源八郎と申す。よろしく」

浪人者は、さきに、名乗った。

金八は、あわてて、挨拶をかえした。

金八の知らぬことであったが、この志村源八郎は、早春の一日、青山の沼津千阿弥家の庭で、刺客として、眠狂四郎と決闘している。

志村源八郎は、二刀を持って、三心刀を使った。

その結果、源八郎は、長剣の方を、無想正宗の鍔を貫かせ、黒羽二重の袖へ縫い込ませていたし、狂四郎は、無想正宗の切先で、源八郎の上唇わきから頬を刺し通したのであった。

その時、仲裁に入ったのが、隣室にいる佐賀闇斎であった。

「旦那は、どちらまで、おいでなんで？」

金八は、隣室に、神経を半分わけ乍ら、訊ねた。

「さあ、どこまで、行くことになるか……」

「ご自分でも、行先がおわかりになっていねえんで……？」

「めざす敵に、再会するまで、道中することに相成る」

源八郎は、こたえておいて、両手を挙げると、大きく背のびをした。

「陽が落ちると、身共は、すぐ睡気を催す。さきに、やすませてもらう」

春雷殺法

一

眠狂四郎は、薩埵(さった)峠を越えると、興津、江尻、府中、そして鞠子(まりこ)まで、休息なしに、歩いた。

金八が、途中から跛(びっこ)をひきはじめたが、無視した。

鞠子では、ひと休みするのだろう、と金八は思っていたが、狂四郎は、町筋四丁を、まっすぐに、通り抜けた。

朝から、五里余を道中して、すでに、陽は西に傾いていた。

——このぶんじゃ、宇都谷(うつのや)峠を、夜通しで、越えちまうのかな。

金八は、立場(たてば)の居酒屋の、跳ね馬を白く染めぬいた紺暖簾(こんのれん)を、うらめしげに、横目で視やり乍ら、通り過ぎた。

やがて——。

陽ざしが、かげって来た頃あい、狂四郎と金八は、峠下に至った。

数十軒の茅屋(ぼうおく)が、左右にならんでいた。いずれも、家ごとに、赤小豆大の十団子(とおだんご)を、麻の緒につないで、売っていた。十粒を一連につなぐので、十団子の名があった。

「先生——」

金八は、こころみに、呼びかけたが、狂四郎は、振りかえりもしなかった。

「旦那、西北は黒雲ですぜ」

腹の虫を鳴らし乍ら、金八は、云った。

当時の天候観測には、次のような言葉があった。

『申子辰の時、降り出さば長し。酉丑の時に、降り出せば晴れる。西北の方、黒雲湧けば雨なり。陽の色、輝けば風なり。陽の暈、朝白く、暮に黒く、赤き色なれば、これも、風強し』

俚諺の『夕焼け濃焼け、あした天気になれ』というのは、古今東西の通則であった。中国にも、『朝霞なれば門を出でず、暮霞なれば千里を行くべし』と、古書が記している。

しかし——。

狂四郎は、空を仰ごうともしなかった。

——勝手にしやがれ！

金八は、あきらめた。

峠道は、狭く、そして、急勾配であった。

いわゆる蔦の細みちで、左右に、山が屹立していた。

峠の頂上に来て、狂四郎は、はじめて、足を停めた。

かたわらに、地蔵堂があった。

「やれやれ——」

金八は、ふうっとひと息ついて、どたりと濡縁に、腰を下ろすと、腰に携げた弁当を、はずして、

「ありついたあ！」

と、本音を吐いた。

あたりは、すっかり昏れなずんでいた。

その折であった。
十数歩のむこうに、ひとつの人影が、宵闇に滲み出た。
「…………」
狂四郎は、黙って、その人影へ、眼眸を向けた。
対手は、数歩の間近まで、寄って来た。
狂四郎は、その容貌には、見覚えがあった。
伊豆の石室崎で、オランダ娘千華の身柄を、こちらへゆだねた人物であった。
狂四郎は、この人物が、江尻を過ぎた頃から、あとを尾けて来ているのを知って、わざと、ここまで、休息なしに、歩きつづけて来たのであった。
「それがし儀、お見忘れでござろうか」
「記憶力はいい方だ、と思って頂こう」
「それがしの素姓を、打ち明け申す。安南日本人町の頭領にて、莫邪主馬助と申す。われらが、母国へ、忍び戻った仔細は……」
「それは、こちらも、およその推測がついて居る」
「貴公ならば、然らんと考えて居り申した。……ご尽力、千万忝のうござった。千華を、江戸城大奥へ上げて頂き、首尾よく、元和の頃、村山長庵の妻の妹が、かくし置いた豊臣家遺金の在処を記した密書を、さがし出して下されしこと、お礼の申し上げようもござらぬ」
莫邪主馬助は、そう云って、頭を下げた。
狂四郎は、沈黙を守って、対手の次の言葉を、待った。
「貴公は、身にかずかずの危険をまねき乍らも、あくまでも、それがしとの約束を守って、一歩

もあとへ退かぬ勇武のほどを示され、まことに、忝のうござった。……ついては、このあたりで、貴公には、手を引いて頂き、安穏の身になって下されい」

莫邪主馬助は、再び、ふかぶかと頭を下げた。

二

「あいにくだが……」

狂四郎が、ようやく、口をひらいた。

「千華という娘を、目的の場所へおもむかせるために、わたしは、囮になっている。囮というものは、目的をはたしたあかつきに、はじめて、役目から解放される。……お手前が、手を引け、と云われても、そうたやすく手を引くわけには参らぬようだ」

「しかし、千華が何処へおもむいたか、その場所をお教え下されば、貴公には、江戸へひきかえして頂いても……」

「左様、こちらも、さっさと、手を引きたいところだが、おそらく、わたしが手を引けば、目的を達成することは、叶うまい」

「いや、それがしが……」

主馬助が、云いかけようとするのを、狂四郎は、おさえて、

「佐賀闇斎という老人を、お手前は、ご存じであろう」

「存じて居り申す。あれは、暹羅の山田長政の苗裔と称する男にて、われらと同様、太閤遺産を手に入れるべく、この日本へ潜入いたしした我欲の徒輩にて、目的は同じ乍ら、性根に於ては……」

「性根の相違など、うかがうまでもない。……闇斎が、わたしを追って、この東海道を道中していることは、すでに、耳にしている。もしかすれば、お手前は、途中、闇斎を襲ったのではないか？　ききたいのは、そのことだ」

主馬助は、推察の通りだ、とこたえた。

「まずい」

狂四郎は、呟いた。

「まずい、とは？」

「これからの行手には闇斎手飼いの者どもが、幾重にも網を張っているはずだ。その者どもは、お手前を見知って居ろう」

「……………」

「お手前自身、わたしと同様に、甚だ危険な道中をしていることになる」

「覚悟の上でござる」

「覚悟はよい。しかし、生き残ってこそ、目的は達成する。お手前とわたしと、千華に出逢うまでに、どちらが、生き残るか、それは、神のみぞ知る。……千華とは、宮の熱田神宮拝殿前で、おちあうことになっている。そこまで到着するあいだに、どちらが生き残るか、ひとつ賭をいたそうか」

「それがしは、たとえ、釜を破り船を沈むとも、必ず――」

「史記が教える通りに、事がはこべば、こちらの出る幕ではないのだが……」

狂四郎は、薄ら笑った。

「熱田神宮にて、再会いたす」

主馬助は、すばやく地蔵堂の前をはなれた。
「なんです、あれア？」
金八が闇に消える姿を、見送って、訊ねた。
「石室崎で、あの男に出会（でくわ）したために、とんだ騒動にまき込まれた」
「つまり、疫病神ってえわけですかい？」
金八の言葉をきいたとたん、狂四郎は、ふっと、ひとつの予感が脳裡をかすめた。
「金八、ひと足さきに行け」
「またですかい？」
「あの男のあとを追って行くのだ。おれは、この地蔵堂で、ひと睡りしてから、あとを追うことにする。地蔵堂は、降りきった坂口に、もうひとつある。お前は、そこで待て」
「へい、合点で——」
狂四郎は、金八を趨（はし）らせておいて、堂内に入った。
手枕で、横になってから、ものの四半刻も過ぎた頃合であった。
不意に、むくっと起き上った狂四郎は、
「お主ら——」
月光のあるおもてへ、声をかけた。
急ぎ足に——しかも、跫音をほとんどたてぬ小鷹（こたか）の術の健歩急行で——一団の虚無僧（こむそう）が、通り過ぎようとしたのである。
渠（かれ）らは、狂四郎が姿をみせるよりも早く、さっと半円の陣形をとった。
扉（とびら）を開いて、階（きざはし）の上に立った狂四郎は、頭数を九個とかぞえて、

「この眠狂四郎を追って来たのであれば、お主らは、ここが、終焉の地になる」

と云った。

刺客――それも、公儀隠密にまぎれもないことは、一斉に、天蓋をすてて、抜きはなった白刃を、地摺りの構えにとったことで明白であった。

切先を地面すれすれにおとして、月闇を肉薄して来るのは、公儀隠密独特の戦法であった。

すなわち、これは、柳生流極意『月陰』から採ったものであった。

柳生但馬守宗矩は、剣禅一如をとなえ、兵法のゆきつくところを『無刀取り』とした。これは、いわば、一種のカモフラージュであった。

但馬守宗矩は、将軍家兵法師範として、三代に仕え、寛永十六年秋には、家光に、剣法奥義の秘書を献じ、その際、

「この上は、ただ御心にて自ら、その妙を得させ給うべし。但し、宗矩、若かりし時、禅僧に結縁し、悟道の要旨を聞いて、とみに兵法の進んだのを覚え申し候」

と、申し述べ、

「その僧を召せ」

と命じられて、沢庵宗彭を薦挙した、とつたえられている。

この逸話は、全くの作りごとである。

それより十年前、沢庵は、家光の忌諱に触れて、出羽国上山に、流されている事実があるからである。

その理由は、沢庵が、家光に謁見を許された際、遠慮することなく、

「柳生道場より、諸国探索の間者を出すのは、御家流を、将軍家ご自身が、けがされて居ること

に相成りましょう」

と、諫言したことによる。

但馬守宗矩が、将軍家兵法師範であったのは、二代秀忠までで、家光が将軍職を継いでからは、柳生道場を、隠密養成所にしたのである。

寛永九年十二月に、宗矩が、水野河内守守信、秋山修理亮重正とともに、諸大名監察の大目付に任じたのが、その証左である。

爾来、柳生家は、公儀隠密の総取締として、つづいている。

三

柳生流極意『月陰』とは――。

日月陰陽のうち、月と陰をえらんだ秘法を謂う。

月は形があって、夜を照らし、陰は形なくして、闇そのものである。そして、月光があってこそ、陰を見得る。たとえば、闇夜に闘う時、敵の形も見えず、わが影も見えぬ。では、何を以て、対手をするか。敵も、おのれも、昏いところに、物を尋ねるごとく、太刀を振って、地を払ってみる。その探る太刀の微かな閃きを、敵味方とも目当てとして、闘うことになる。

当然、構えは、地摺り下段となって、敵から、こちらの向う脛を見込んで、撃ち込んで来るや、その太刀の微かな閃きに合わせて、わが太刀の光を映しかえすとっさの迅業を、つづけさまに、使う。

これを、『月陰』といい、『月陰』は『山陰』という極意に、転化する。陰陽表裏であり、敵の変化に対する自在の動きを、指している。さらに『山陰』は、烈風が海上を吹きまくって、波を

さかまき立てるにたとえた『浦波』という秘術に移るのである。
柳生流が隠密剣である所以である。
狂四郎が、九人の虚無僧の陣形と構えを、一瞥しただけで、
——公儀隠密団だな。
と、さとったのは、これまで、かれらと数多く決闘した経験を持っているためだけではなかった。その構えが、柳生流独特のものだったからである。
この柳生流隠密剣に対する狂四郎の円月殺法は、一刀流より編まれたものであった。
一刀流の極意は、十本の「法形」によって組まれている。
表は、電光、明車、内流れ、浮身、払捨。
裏は、妙剣、絶妙剣、真剣、金翅鳥王剣、独妙剣。
これは、野太刀の刹法から生れたものである。すなわち、五体を進んで、敵陣の刃圏内に容れることによって、十本の法形を、自由自在にふるうのである。
その闘いぶりを、八方散乱、という。
八方とは、四角四隅（角とは「外すみ」のこと、隅とは「内すみ」のこと）。
その四角四隅に、間髪を容れぬ迅さで、身を抜け、転化すれば、いかに敵が多勢であろうとも、その全員を対手と思う必要はなく、敵はただ一人と心得ればよい。
そこに、十本の法形を使い、乱曲、風楊、分身の凄まじい変化の業を発揮する一刀流の面目があるある。
すくなくとも、柳生流とは、全く異なる剣法であった。
狂四郎が、無想正宗を抜いて、地面へ降り立った時、それを待っていたように、厚い雨雲の中

から、春雷が、とどろいた。
次の瞬間、人の形も判じがたくなった暗闇をつんざいて、稲妻がそこに落ちた。
その稲妻に搏たれたごとく、公儀隠密団は、半月の陣形を崩して、二人ばかりが、たたらを踏んだ。
一瞬裡に二人を斬り乍ら、狂四郎の構えは、もとの地摺り下段にもどっていた。
敵がたも、地摺りで、微動だにせぬ。
雨が、ぽつり、ぽつりと、降りはじめた。
雷鳴がひきつづき、そのたびに、稲妻が、あたりを煌として白昼のあかるさに照らした。
敵がたは、稲妻が落ちるたびに、無想正宗が、すこしずつ上げられて、円月を描くのを視た。
「とおっ！」
左端、右端から同時に、懸声がかかり、神速の突きが、狂四郎を襲って来た。
いくたびめかの稲妻が、閃いた刹那、敵がたは、さらに二人の犠牲を出したのをみとめた。
狂四郎は、いつの間にか、無想正宗を、天に直立させていた。
その切先が、落雷を呼んだのであろうか、その直後、凄まじい轟音が、そこに起った。
生き残った敵五人は、反射的に、地面へ身を伏せた。
狂四郎の姿は、もはや、そこにはなかった。
狂四郎は、雨に濡れて、宇都谷峠を降りた。
麓に、頂上と同じ大きさの地蔵堂があった。
「金八――」

呼ぶやいなや、江戸っ子は、とび出して来た。

「先生のカンの鋭さには、いまさら乍ら、あきれけえっちまう」

狂四郎は、堂内に入ってみた。

そこに――。

莫邪主馬助が、仰臥していた。

蠟燭のあかりに浮いた面貌は、死相が濃かった。

「あっしがね、降りた時には、もう、この堂の前に、倒れていたんでさ。胸に、一発くらって……」

金八が、告げた。

主馬助が、目蓋を、微かにふるわせつつ、ひらいた。

じっと見下ろした狂四郎は、

「生き残るのは、わたしの方だったな」

と、云った。

「千華を……、何卒、千華の身を、おまもり、下されたい」

「たのまれたことだ。安南へ送りとどけるところまでは、約束しかねるが、太閤遺産をさがし出して、千華に渡すことは、やれそうな気がしている」

「お、おたのみ、申す」

主馬助は、目蓋を閉じて、しばらく喘ぎをつづけていたが、

「安南には、いまも、なお、八百五十余人……日本人が、先祖のつくった町を、守って、居り申す。……暹羅に住んでいた日本人――二百余人も、安南へ、移って来ている、はずで、ござる。

……日本太夫――佐賀闇斎は、同胞を、裏切って、暹羅の日本人町を、見すてて……、この母国へ、帰って、参ったが……、彼奴(きゃつ)は、江戸の、本石町二丁目の、阿蘭陀屋嘉兵衛と、結託し……、豊臣家遺金を、手に入れようと、暗躍して居り……」

そこまで語って、苦しさに、いったん口をつぐんだ。

狂四郎は、死神がその頭(こうべ)ぎわに立ったのをおぼえ乍ら、

「南洋各処に日本人町があることを、わたしは、風聞によって、知ったが……？」

「さ、左様――、柬埔寨(カンボジヤ)に百二三十人、老檛(ラオス)に百人あまり、東京(トンキン)に二百近く、呂宋(ルソン)には、四つの日本人町があり、あわせて、千三百余人……」

「…………」

「いずれの、国の、日本人町にも、戦国武士の、気概がうけ継がれ、士道の吟味を、きびしく、保ち……、い、いつの日か、母国との、交易が、ひらかれるのを、待って居り、申す――」

「…………」

「されば、それがしらが、百万両にも、及ぶ金銀を、手に入れることは、南洋各国の、日本人町の、面々の願いを……」

そこまで云って、主馬助は、突如、最後の力をふりしぼって、虚空をつかむと、それきり、事切れた。

金八が、小さく呟いた。

「先生が、乗りかかった船は、大きいや。……軍用金ができたら、先生は、海のむこうへ渡って、総大将におなんなさるおつもりですかい？」

「おれは、一軍を指揮する器ではない。しかし、日本人町の面々が、軍船を組んで、押し寄せて

来る図を、想像すると、柄にもなく、この冷えた血汐（ちしお）が、すこし熱くなって来そうだ」

二人の末通女（むすめ）

一

ふしぎであった。
宇都谷峠で、公儀隠密衆と闘ったあと、それきり、眠狂四郎に向って、襲いかかって来る敵は、はたとととだえた。
大井川を渡って、遠江（とおとうみ）に入り、嶋田（しまだ）・金谷（かなや）・新坂（にっさか）・掛川・袋井・見付、そして井上河内守（六万石）の城下浜松を過ぎたが、身辺につきまとう怪しい人影も見当らず、意外の罠（わな）の仕掛けにも、遭（あ）わなかった。
こちらが、昼間の道中を避けたり、間道を通ったり、旅籠ではない宿泊所をえらぶような、油断をせぬ旅をした次第ではなかった。
春の陽ざしに、異相をさらして、松並木の街道を、悠々とふところ手で、歩いて行くにもかかわらず、こちらに鋭い神経を配らせるけはいは、さらに起らなかった。
狂四郎が、要心したことといえば、朝と夕に、解毒剤を、おのれも嚥（の）み、金八にも嚥ませたことだけであった。
尤（もっと）も――。
金八の方は、すれちがう虚無僧や六十六部や、駆け過ぎる馬責めの武士や早駕籠（かご）や、さては、

並木の根かたにうずくまる乞食にまで、目を光らせて、いい加減くたびれた模様であった。

——武部仙十郎は、あきらめるような老人ではない。ただ、こちらが、宝をさがしあてるまでは、そ知らぬふりをすることにきめて、主人にはかり、お目付下条主膳を抑えたかも知れぬ。

しかし、公儀隠密衆以外に、狙って来る敵は、一人や二人ではない筈であった。

佐賀闇斎が、小銀を連れて、あとを追って来ているし、由井の旅籠では、金八が志村源八郎という三心刀使いの刺客と相宿になっている。

捨てかまりの弥之助や闇斎にやとわれていた壬生宗十郎という薩摩の隠密ども、姿をかくし乍ら、ひそかに尾けて来ているに相違ない。

阿蘭陀屋嘉兵衛も、当然、手下を放って来ていることと、考えられる。

いや、下条主膳という人物は、たとえ、老中から抑えられても、すなおにひきさがるお目付ではない。

かぞえてみれば、むらがって来る黄金亡者は、一人のこらず、おそるべき曲者がそろっている。

渠らが、ひそとして影をひそめているのは、かえって、無気味といえる。

狂四郎の肚裡は、その日その日が無事に過ぎるにつれて、むしろ、死地におもむく闘志がたかまっていた。しかし、金八は、どうやら、気疲れもともなって、神経の働きがにぶった様子であった。

新居宿の旅籠に入って、狂四郎が入浴しているあいだに、その油断が、金八をぶっ倒れさせた。

夕餉を待ちかねて、金八は、自分で足をはこんで、銚子を二本ばかり持って来た。その一本を空にした時、急に視界がぐるぐるとまわって、胸苦しくなった。

狂四郎が、部屋へもどって来ると、金八は、おのれの吐物へ顔をうずめて、虫の息になっていた。

解毒剤を嚥(の)まずに、酒を飲んだ罰であった。

いそいで、胃が空になるまで吐かせて、別の強い毒消しを嚥ませた狂四郎は、血の気の失せた寝顔を見下ろし乍ら、

——やはり、つきまとって、狙っていることは、これではっきりしたな。

と、合点した。

こちらは、囮になって、誘っているのである。絶えず狙われていることが、はっきりしているのは、敵がたがいまだ千華を発見していない証左なのであった。

狂四郎は、金八の枕もとに、腕組みして、窓の外を——浜名湖の名物のひとつである湖上を照らす十六夜(いざよい)の月を、眺めやって、一刻をすごした。

と——。

不意に、金八が、身もだえすると、

「……おん、あぼきゃあ、べいろしやなあ、まかもだら、まにはんのま、じんばら、はら、ばりたや——」

と、はっきりした声音で、唱えて、狂四郎の苦笑を呼んだ。

巾着切が、光明真言をおぼえていることに、べつにふしぎはないが、おそらく、毒が総身にまわった瞬間、

——死ぬ！

と、恐怖したに相違なく、意識を喪失した世界で、三途(さんず)の川を渡らされてでもいるのであろう。

神妙に、弘法大師を念じているのが、いささかおかしかった。

行燈のあかりを消して、牀に仰臥した狂四郎は、しばらく、さし込む月の光を、冷たく冴えたものに感じていた。

二

天井板に小孔が、音もなくあけられ、一本の糸が、するするとおろされたのは、狂四郎が目蓋を閉じてから、かなり経った頃合であった。

糸の先端は、狂四郎の口の真上に、二寸ばかりの空間で、停止した。

毒液が、その糸をつたって落ち、あわや、狂四郎の唇へしたたろうとした——刹那。

くるっと一回転した狂四郎の手から、小柄が、天井めがけて、投げられた。

狙った的を、あやまたず刺した、とみとめた狂四郎は、

「おい、天井裏の鼠、その深傷では、遁げられまい。おとなしく、降りて来れば、手当ぐらいは、してやってもよい」

と、呼びかけた。

こちらが、行燈に火を入れた時、張りじまいの天井板が、はずされて、その曲者が、綱にすがって降りて来た。

意外にも、曲者は、女であった。しかも若かった。

緋縮緬の、長襦袢だけをまとい、洗い髪を肩に散らし、白い熟れた胸もとと双腕をあらわにして、片足から血汐をしたたらせ乍ら、宙に浮いた姿は、怪談ものの舞台でも眺めるあんばいであった。

眉目は、艶冶といういうに足りた。切長の眸子の眦のあたりに、男ごころをそそる妖しさが刷かれていた。

蹠を畳につけたが、立つことが叶わぬらしく、崩れた。

その崩れぶりに、なんともいえぬなまめいた風情があった。

顔をそむけて、無言でいる女の肢態を、冷たく見まもり乍ら、狂四郎は、

「傷をみせろ」

と、云った。

女は、微かにわななく手で、長襦袢と水色の湯文字の裾を、そろそろと、たくしあげた。

徐々にあらわにされる下肢の、豊かに肉の盈ちた、滑らかな曲線は、おそらく、この女が最も誇る美しさであろう。

血汐は、太腿の外側から噴いていた。

印籠を把って、近づいて、それをのぞいた狂四郎は、

——これぐらいの傷で、遁げられぬはずはないが……？

その疑念をわかせたが、黙って、手当をしてやった。

薬を塗り、湯文字を裂いて、結え了えると、

「どうする？　自身の部屋へ、もどるか？」

と、訊ねた。

「あたしは、旦那の虜でございます。煮るなと焼くなと、どうにでも、料理なさいまし」

「ばかに、あきらめがいいな？」

「旦那を、憎んで、狙ったわけじゃございません。金欲しさに、やとわれただけで……、尾け狙

っているうちに――旦那、お前様は、女の心を溶かしてしまう魅力をお持ちなのですねえ」
狂四郎は、からみつくような女の眼眸(まなざし)を、受けとめて、
「おれの牀に、寝かせてくれ、というのか？」
「はい。……その気持がなければ、必死になって遁げようと、天井裏を匍(は)いずったに相違ございません。寝かせて下さいまし」
女は、いざって、その牀に寄ると、横臥した。
狂四郎の手が、膝(ひざ)にかけられると、女は、ゆっくりと、仰向けになった。
目蓋を閉じた寝顔に、なにやら稚(おさな)い色が滲(にじ)んでいるようであった。
年歯は、二十代なかばに達している、とみえるにもかかわらず、すすんで肌を与えようとするこの瞬間に、稚い色を滲ませたのを、狂四郎は、いぶからずにはいられなかった。
――莫連をよそおって、人身御供(ひとみごくう)になろうとする女が、いまだ男を知らぬとは……？
処女ではあるまいか、と疑いを抱かせるほど、四肢が本能的に、男を拒否している気色を、ありありと示しているのであった。
――金欲しさに、やとわれた、と云ったが、嘘だ。この女は、生命をすてる覚悟ができている。
――すてたければ、すてるがいい。
女の素姓に、およその推測をつけた狂四郎は、胸底で残忍な独語をもらすと、容赦なく、女の前を捲(まく)った。
こらえかねる痙攣(けいれん)が、白い下肢に生じた。
狂四郎は、かたく合わせた膝を割って、その上に掩(おお)いかぶさると、
「この営みが、そなたにとって、最初で、最後か」

と、ささやいた。
瞬間——女は、大きく眸子をみひらいて、狂四郎の視線を受けた。
「生きたい、と叫んでみたらどうだ？」
そのすすめに対して、女は、ひしと目蓋をとじると、頸をねじった。
大きく変化した男の力が、柔襞の奥へ押し入った刹那、女は、小さな悲鳴をあげた。
——やはり、処女であった。
顔の表情や、四肢の筋肉の示す反応が、はっきりと、そのことを証明した。
突きとどめて、男と女を合致させた狂四郎は、おのれの残忍を棚に上げて、敢えて処女をいけにえにする敵に対して、微かな憤りをおぼえた。

三

天井板が、凄まじい音を立てて破られて、黒い塊が、落下して来たのは、それから、十とかぞえる間もない直後であった。
狂四郎は、間一髪の差で、五体をはね躱した。
黒い塊は、にぶい響きをあげて、女のむき出された下腹部を、押しつぶした。
それは、直径五寸あまりの鋼鉄の円球であった。
狂四郎は、すばやく、無想正宗をひっ携げて、片隅に立つと、天井の暗い穴を、睨みあげて、
「おい！　若い美しい未通女を、無駄に、犠牲にしたな。貴様、捨てかまりの弥之助か、それとも、壬生宗十郎と名のる男か？　いずれにせよ、薩摩の隠密に相違あるまい。……薩摩の女子でなければ、当節、このような無慚ないけにえになど、なりはすまい。せめて、なきがらを鄭重に

葬ってやるがいい」

と云いすてておいて、まだ蘇生せぬ金八を、ひき起し、部屋を出た。

月光の砕け散る湖面を、松並木ごしに望む街道へ出た時、

「待て！　眠狂四郎！」

鋭い呼び声が、背後から追って来た。

予想通りであった。

狂四郎は、金八を、松の根かたへ横たえておいて、向きなおった。

追って出て来たのは、壬生宗十郎であった。

竹竿にすがって、一歩毎に、大きく上半身を傾けていた。

天井裏にひそんでいるところを、狂四郎に小柄を投げられて、膝の皿を貫かれたのである。

傍に忍んでいた女は、壬生宗十郎の替玉となって、自ら太腿を傷つけると、綱にすがって、部屋へ降りたのであった。

「どうする？　手負いの身で、おれと尋常の勝負はできまい」

「勝負は、せぬ。お主には、敗れた」

「…………」

「薩摩隼人たる者、敗れた以上、生き恥をさらすことは、許されて居らぬ」

「…………」

「いさぎよく、ここで、切腹いたすゆえ、しかと見とどけい。それが、勝利者の責務と申すものだ」

「ごめんを蒙る」

「なに！」
「切腹したければ、勝手にするがいい。検分役は、平におことわりだ」
「武士だぞ、お主も！　敗者が自ら命を断つのを、しかと見とどけるのが、士道の吟味ではないか」
「若い美しい未通女を、いけにえにするのは、士道の吟味に叶っている、というのか」
「あれは、身共の妹だ。兄が主命をはたすために、すすんでいけにえとなったのだ」
その言葉をきいた瞬間、狂四郎の五体に冷たくしずまりかえっていた血汐が、かっと熱くなった。
「たわけ！　貴様は、切腹をする資格もない下種だ」
「な、なにっ！」
壬生宗十郎は、するすると進み寄って来る狂四郎を視て、竹竿をすてると、差料の柄へ手をかけた。
狂四郎は、対手に抜刀するいとまも与えず、抜きつけに無想正宗を一閃させた。
壬生宗十郎の首は、胴をはなれて、高く空へ飛び、並木を越えて、湖面へ落ちた。
その水音をききつつ、狂四郎は、ひとつ、身顫いした。
——妹をいけにえにした男と、生命をすてる覚悟をした女を、そうと知りつつ犯した男と、どちらが、下種なのか？

四

新居宿と、浜名湖が海に向って口をひらいた今切れをへだてた舞坂宿の旅籠には、小銀をつれ

た佐賀闇斎が、いた。
夕餉を摂(と)り了えたあと、闇斎は、いつものごとく、俯伏(うつぶ)せになって、小銀に、腰をもませていた。
「小銀――」
「はい」
「お前は、まだ、わしが眠狂四郎に斬り殺される悪夢を、みて居るのかな？」
「…………」
「どうじゃな？　まだ、みつづけているのなら、正直に、そう云うがよい」
「…………」
「小銀！」
闇斎は、首をまわして、俯向いた小銀の顔を、のぞき視た。
「お前は、もしかすると、眠狂四郎に、惚(ほ)れたのではないか？」
「…………」
「わしが、丹精して、男を羽化登仙の恍惚(こうこつ)境にさそい込むからだに仕上げたお前を、最初に試したのが、眠狂四郎であるからな。お前が、忘れられなくなったのも、むりはない」
「いえ――」
小銀は、俯向いたままで、小さくかぶりを振った。
「あの御仁は、わたくしに、ただ指をふれられただけで……」
「契りはせなんだ、というのか？」
「はい」

「ふむ。……すると、お前を抱いた最初の男は、将軍家であったか」

「いえ、上様も……」

「なんじゃと？　将軍家も、お前を、女にしなかった、というのか？」

「……お女中衆には、わたくしによって、不能をなおした、と仰せられて居りましたが、本当は……」

「そうではなかったのか？」

「はい」

「すると、まだ、お前は、未通女（むすめ）のままか」

将軍家に、どのようなもてあそばれかたをしたか、きいてはいないが、小銀が、まだ未通女でいることはまちがいない、と知った闇斎は、急に、小銀に対して、女を感じた。

「小銀、眠狂四郎に対して、想いをかけるのは止（や）めにせい」

「…………」

「今宵から、お前は、わしと、他人ではなくなる」

「え?!」

小銀は、はっと表情を変えた。

「とどのつまり、お前は、わしの女になる運命であったようじゃ。わしは、自身を羽化登仙の恍惚境にさまよわせるために、お前のからだを丹精した、というわけじゃな」

「爺様！」

「爺様と呼ぶのは、止めてもらおう。……よいな、小銀？」

「…………」

「なぜ、返辞をせぬ？」
闇斎は、ふっと、直感が働き、さっと身を起すと、
「小銀！　寝よ」
と、命じた。
小銀は、ためらいの色をみせたが、闇斎に睨み据えられると、目蓋を閉じて、牀へ仰臥した。
闇斎は、容赦なく、下肢を剝き出させると、左右にひらかせた。
蛾が匐ったような薄い恥毛の蔭を、覗いた闇斎は、つと、一指を、梔子のつぼみのようなそれにふれさせた。
「なんとしたことだ、これは？」
闇斎は、呻いた。
小銀のそれは、花弁を開いて、男の指を吸い込むと、ぴたっと閉じて、指の根をかたく締めるはずであった。
ところが――。
花弁は閉じず、指を締めようともしなかった。
「ばかなっ！」
闇斎は、叫んだ。
指を抽き取ると、小銀をひき起し、
「小銀！　お前は、将軍家に、どのような乱暴な振舞いを受けたのだ？　さ、云え！　云わぬか！」
「…………」

小銀は、こたえる代りに、閉じた目蓋の蔭から、泪をわきあがらせた。
「小銀！　云わぬか！」
闇斎は、烈しい平手打ちを、その頬にくらわせた。
しかし、小銀は、ついに、口をひらこうとしなかった。
闇斎は、小銀のからだを突き倒すと、
「役立たずとなったお前のからだなど、生かしておくのは無駄だ」
冷酷な宣告を下した。

比丘尼情炎

一

夜が明けそめた頃あい、眠狂四郎は、ただ一人で、遠州灘七十五里が一望のもとに見渡せる汐見坂を、越えようとしていた。
毒にあてられて腰の抜けた金八は、新居宿の旅籠にのこして来た。癒ってから、あとを追って来るもよし、あるいは江戸へ帰るも勝手、どちらにするか、金八自身の思案にまかせておいた。
汐見坂の頂上には、沖を通る船が目当てとする燈籠堂が、建てられていた。
その前を、往き過ぎ乍ら、
――佐兵衛は、どうしたろう？
伊豆石室崎の燈明台の守をしている元岡っ引のことが、ふっと、思い泛んだ。

佐兵衛は、狂四郎が訪れたために、まきぞえをくらって、右腕を肱（ひじ）から切断されたのであった。

六十三歳の老齢では、あるいは、傷が悪化して、もうこの世にはいないかも知れぬ。

——帰途、もう一度、立ち寄ってみることにしよう。

おのれに呟いた——その折。

燈籠堂に隣接した小屋から、突然、女の悲鳴が、もれた。

——ここにもまた、おれを迎える趣向があるらしい。

狂四郎は、小屋の戸口へ寄って、隙間から覗いてみた。

うしろ手にくくられ、猿ぐつわをかまされようとして、もがいているのは、若い比丘尼であった。

雲助三人が、手ごめにしかかっているのであった。

「じたばたするねえ。女のつとめをさせてやろうという、お慈悲じゃねえか。有難くお受けしな」

よってたかって、尼僧に拝跪（はいき）の姿勢をとらせて、白衣の裾をひきめくった。

「へへ、餅肌（もちはだ）というやつだぜ」

猿臂（えんぴ）をのばして、剝（む）き出された臀部（でんぶ）を撫（な）でる者、五指を、内股（うちまた）の奥へ匍（は）い込ませる者。

「おう、あたたけえや」

爬虫（はちゅう）の甲鱗（こうりん）のように、冷たくざらざらした掌に、臀部のいたるところを弄（もてあそ）ばれた比丘尼は、死にもの狂いに身もだえるが、肩と胴をつかまれ、押えつけられているために、拝跪の姿勢を変えることさえも、叶わぬ。

狂四郎は、すぐに踏み込もうとはしなかった。
「ふふふ……、籤の大当り、お初は、わいだぞうっ」
一人が、赤褌をはずして、はだけた前を、あてがった。
「う、う、う……むっ！」
比丘尼は、おぞましい触感に、瘧のように、全身を痙攣させた。
「よいしょっ！」
雲助は、双腕に力をこめて、臀部を、ひきあげ、床に膝をついている下肢を、大きく押し拡げた。
「なんまいだ、なんまいだあ……」
念仏に合わせて、しきりにゆすっていたが、急に、口をとがらせて、ふうっと吐息した。
瞬間、比丘尼は、加えられた疼痛で、激しく首を振った。
雲助は、再び、「なんまいだ、なんまいだ……」と、となえ乍ら、前を擦り上げ、擦り下ろした。
狂四郎が、板戸を蹴倒したのは、その光景を見とどけてからであった。
「なんだ、てめえ！」
「邪魔ひろぐな、痩浪人め！」
二人の雲助が、すばやく、息杖をつかんだ。
——やとわれているのなら、役割はここまでで、さっさと、遁走するところだが……？
狂四郎は、かれらがそうせず、立ち向って来るのに、ちょっと、不審をおぼえた。
「野郎っ！　失せろい！」

一人が、息杖を、なぐりつけて来た。
狂四郎は、抜く手もみせずに、その胴を薙いだ。
それでも、他の雲助どもは、遁げようとしなかった。かえって、仲間を斬られたことに、かっと逆上して、
「やりやがったな！」
「くそったれっ！」
滅茶滅茶に、息杖をふりまわして、襲いかかって来た。

二

それから、しばらくして、狂四郎は、その比丘尼を連れて、汐見坂を白須賀の方へ下っていた。
三人の雲助を斬りすてておいて、比丘尼へは声もかけずに、小屋を出たのであったが、いつの間にか、あとを慕われていたのである。
比丘尼は、七八歩の距離を置いて、うなだれて、ついて来ている。
狂四郎は、一度も振りかえらず、沈黙を守っていた。
白須賀宿四丁半の、朝のにぎわいを呈している往還を通りぬけて、やがて、遠江と三河の境である境橋にさしかかった時であった。
「あ！　智照尼！」
むこう側の橋袂の立場茶屋から、そう呼んで、三人の比丘尼が、走り出て来た。
とたん――。
狂四郎のうしろで、うなだれていた比丘尼は、なにか言葉にならぬ歓喜の叫びをほとばしらせ

ると、狂四郎のわきをすり抜けて、橋を駆け渡った。
そして、中央の比丘尼に、すがりつくと、わあっ、と慟哭した。
すがりつかれた比丘尼は、他の比丘尼とは別の色の頭巾をかぶり、頭巾の蔭の顔は、初老のものであった。
しかし、その皮膚は、艶やかで、皺ひとつなかった。
「智照尼、どうしました？　さ、泣かずに、仔細を語りなされ。え？　どうしたというのです？」
「院主様っ！」
背中を撫でられた智照尼は、嗚咽をのこし乍ら、襦袢の袖で泪をぬぐった。
狂四郎は、その傍を、黙って、通り過ぎて行こうとした。
「あ、もし！」
それと気づいて、智照尼は、あわてて、狂四郎の袂を、とらえた。
「院主様、わたくしは、この御仁に、救われたのでございます」
「おお、それはそれは——」
初老の比丘尼は、狂四郎の前にまわると、
「わたくしは、このむこうの一里山にある妙法寺の院主妙見と申します。これなる智照が、昨夜より行方知れずになり、案じて、さがしに出て参ったのでございますが……、お救い下された由、忝のう存じます」
ふかぶかと頭を下げてから、顔をあげたが、とたんに、じっと狂四郎の異相へ、視線をこらした。

狂四郎は、口をひきむすんだなり、その視線を受けとめた。
「新也（しんや）さま！」
妙法寺院主の口から、その名が、呟かれた。
新也。
狂四郎が、十五歳まで、その名を持っていたことを知る者は、亡き母のほかは、ほんの数人しかいなかった。
妙見という、見知らぬこの比丘尼は、その数人の一人なのか。
「新也様！　そうでございますね？　ああ、まちがいは、ございませぬ。ちゃんと、俤（おもかげ）がのこっておいででございます」
「貴女（あなた）は、だれなのだ？」
「わたくしは、きちでございます。と申しても、おぼえてはいらっしゃいますまい。貴方様がお母上とおくらしなされた広尾町祥雲寺の住職の兄の娘でございます。……祥雲寺へは、父の使いで、幾度か参じました。そのうちに、お母上とお近づきにならせて頂いたのでございます。わたくしがまだ十七か八の頃で、貴方様はまだ五つか六つでございました」
——三十年もの遠いむかしの稚貌（おさながお）しか記憶にないのに、どうして、おれが、新也の後身と判るのか。
狂四郎は、胸裡で呟いたが、口には出さなかった。
すると、妙見尼は、
「貴方様の眉間（みけん）に、ちょうど十字のかたちに、六つの小さな黒子（ほくろ）があります。それを、わたくし、一瞥（いちべつ）して、はっとなったのでございます。……おなつかしい！　夢のようでございます」

そう云って、衣の袖で、目がしらをそっとおさえた。

一里山の中腹にある尼寺へ、案内された狂四郎は、書院で向い合ってからも、無言をつづけ、院主妙見尼のしゃべるにまかせた。

「……貴方様は、遠いむかしの少童の自分しか知らぬ者が、どうして見分けられたのだ、とさぞかしご不審でございましょう。……申し上げます。貴方様は、わたくしの生涯で、脳裡に焼きついてはなれぬ唯一人の男子なのでございます。貴方様ほど、美しいお子は、世にもたぐいまれでございました。お美しいばかりか、お母上と二人きりのおくらしの、さびしさにじっと堪えておいでの哀しい色が、お顔に滲んで、それはもう、お逢いするたびに、わたくしの胸は、息苦しく、痛んだのでございます。……人の妻になり、子の母になったのであれば、貴方様の面影は、あるいは、うすれたかも知れませぬ。二十歳の春、処女のまま、剃髪得度いたしましたわたくしは、今日まで、貴方様の美しくさびしいお姿を、心に抱きつづけて参りました。……それゆえに、すぐに、ひと目で、新也様と、判ったのでございます」

「…………」

妙見尼は、狂四郎から言葉がかえされぬのを、不満に思う様子など、すこしもみせず、遠い眼眸になって、

「本当に、美しいお子でございました。わずか五つ六つの稚さで、その瞳には、深い愁いの色をおびて居られました。……不幸なお生れであることは、叔父の住職から、ちらときかされて居りましたが、そのご不幸を、あのように、ありありと容子に湛えておいでだったのですもの、眺めやっただけで、胸が熱くなり、泪を催したことでございます。そして、今日が日まで、俤を抱き

つづけたのも、貴方様が、あまりに哀しいお子だったからでございます」
と、くどいばかりに云いつづけてから、しずかに、座を立った。
狂四郎は、四半刻ばかり、一人にして置かれた。
智照尼が、入って来て、
「院主様が、茶室にて、お待ちでございます」
と、告げた。
あのような無慚な暴行に遭い乍ら、仏門に帰依する身は、あきらめがはやいのか、泪の痕を消して、無表情であった。
庭に降り立った時、狂四郎は、はじめて、この若い比丘尼に口をきいた。
「そなた、武家の出か？」
「はい」
「寺に入った理由は？」
「落度があって、父が切腹し、母もあとを追うて自害いたし、孤児に相成りましたので……」

三

手入れのゆきとどいた植木の枝ぶり、幽雅な石組み、竝んだ高麗塔など――廻遊式の露地のたたずまいは、この尼寺の由緒のほどを示していた。
清らかな水の流れに架けられた小さな反橋を渡ると、茶亭があった。
入母屋の端には、
『ひとり静』

と記した扁額が、かかげてあった。

「どうぞ――」

智照尼は、一礼すると、踵をまわして行った。

にじり口の障子を開けた狂四郎は、眉宇をひそめた。

褥が延べられて、院主は、それに身を横たえていた。

――どういうのだ？　婆さん比丘尼が、おのが身を、据膳にして食わせようというのは……？

不審のまま、狂四郎は、茶室に入った。

妙見尼は、狂四郎が座に就くと、目蓋を閉じたなりで、

「新也様に、めぐり逢うのが、わたくしの生涯の夢でございました。……三十年、この夢を抱きつづけて参りました。今日、ようやく、叶いました」

「…………」

「わたくしが、処女のまま剃髪得度したことは、さきほど、申し上げました。……わたくしも、もう今年で、四十七歳に相成ります。でも、このいのち、あと一年か、長くて二年しかありませぬ」

「…………」

「わたくしの腹には、固いしこりが、できて居ります。先代の院主と全く同じ痼なのでございます。先代は、これができてから、三年で、みまかりました。……わたくしは、べつに、いのちが惜しくはありませぬ。いえ、浄土に召されるのを、よろこんでいる次第ではありませぬ。貴方様になら、正直に、申し上げられます。わたくしは、勤行にあけくれる単調なくらしに、あきあきして居るのでございます。仏門に帰依し乍ら、しかも、五十に近くなって、わたくしは、俗世を

ふりかえって居ります。俗世で、泣き笑い、愛し恨み、よろこび悲しむ女の生きかたを、うらやむ気持が、いまになって、抑えきれませぬ。……寿命の尽きたわたくしは、せめて、生涯ただひとつの夢が叶えられたいま、自分が女になってみたいという情念が燃えあがりました」

「…………」

「おわらい下されても、おさげすみになっても、かまいませぬ。五十に手のとどく処女など、いとわしく、おぞましいばかりでございましょう。……これも、なにかの因縁とおぼしめして、わたくしを、せめて、乳母として、おとり扱い下さいますまいか。……契りを結んで頂きたい、などとあつかましいお願いはいたしませぬ。……わたくしの乳房だけでも、お含み下さいますまいか？」

「…………」

「お願い申しまする」

「…………」

狂四郎は、返辞をする代りに、片手を、掛具の下へ、さし入れて、その腹部をさぐった。

白羽二重の上から、掌をあててみると、たしかに、固いしこりがあった。

無言裡に、狂四郎は、比丘尼のかたわらへ、身を入れた。

胸もとをはだけさせると、とうてい初老の女のものとは思われぬ、白桃のようにふっくらとした、肌理（きめ）こまかな隆起が、そこにあった。乳首はごく小さく、象牙（ぞうげ）色をおびて、いっそ可憐（かれん）なものに、目に映った。

狂四郎は、終始無言裡に、片腕を頸へまわし、顔を、乳房へ落した。

「……ああ！」

妙見尼は、乳首が吸われると、たちまち、小さな叫びをあげた。
狂四郎のもうひとつの手は、やおら、下へのびて、白羽二重の前をはぐり、下腹を撫で、茂みを分けた。

四

狂四郎の奉仕は、秘処へ指先をふれさせるところで、訖った。
乳首には、極く強い麻薬が塗られてあったのである。
狂四郎は、顔をあげて、妙見尼を見下ろすと、
「みごとな筋書だ、とほめておこう」
と、云いすてて、身を起した。
無想正宗を杖にして、立ち上ったが、足を踏み出すにいたらず、その場へ崩れ伏した。
妙見尼は、起き上ると、
「これほどまでに、男の魅力をそなえた男が、またとあろうか」
と、呟いた。
「そうさな。眠狂四郎は、男の中の男だ」
にじり口の外で、応える者がいた。
その声は、捨てかまりの弥之助のものにまぎれもなかった。
「妙見さん、法戒を破ったついでに、その御仁が、目をさますまで、抱いていてもかまわないのだぜ。……いや、ぜひ、そうしてもらいたいものだ。抱いて、なめたり、しゃぶったりし乍ら、行先をきいてもらおう。譫言で、本当のことを白状するかも知れないからな」

「覗き見は、ごめん蒙りますよ。いくら、わたくしでも、はずかしい」

「こっちは、その御仁の行先が知りたいだけなのだ。ここで、地獄耳だけを立てている」

妙見尼は、死んだようになっている狂四郎の躰を、褥へもどすと、豊かな肢体をしんなりと掩いかぶせて、口へ唇を合わせ、こんどは、彼女自身、手を下へすべらせて、男のものをさぐる番であった。

みるみるいっぴきのけものと化した比丘尼は、狂四郎の上をずるずると匍い下って、股間へ、顔をうずめた。

激しい息づかいだけが、室内に、しばらくこもった。

と——一瞬。

「おお！」

歓喜の叫びをあげた妙見尼は、無我夢中で、上半身を立てて、両膝を拡げると、馬乗りになった。男のものが、変化をみせたのである。

それを、おのが体内へ容れようとして、せわしく腰をうごめかせる比丘尼の形相は、凄まじいばかりの情炎に焼かれていた。

とたん——。

妙見尼は、大きく、はねとばされて、褥外へころがった。

身を起した狂四郎は、麻薬などみじんも受けつけていない、冷たく冴えた光を双眸から放っていた。

「弥之助、これが、おれのために働きたい、と性根をかえたお前の小細工か」

にじり口の外へ、呼びかけた。

「旦那は、どのあたりで、この罠を看破なさいましたか？」
弥之助は、悪びれずに、問いかえした。
「この婆さんのくどきぶりが、いささか、しつこすぎた」
「それで、看破なさったので？」
「もうひとつ、雲助に犯された若い尼が、おれの問いにこたえて、すらすらと、尼になった理由をこたえた。その返辞が、できすぎていた」
「おそれ入りました。こんどこそ、てまえは、旦那に兜(かぶと)をぬぎました。ひきさがります」
「と云い乍ら、もう次の手を、肚(はら)の裡(うち)で、練っているのではないのか、弥之助？」
狂四郎は、冷笑した。
弥之助の気配は、そこから、消えた。
狂四郎は、壁ぎわから畏怖(いふ)の色をあふらせて仰ぎ見る妙見尼へ、一瞥もくれようとせず、露地へ出た。
陽は、ようやく、高かった。

千両問答

一

某日某刻——誰にも知らせぬ日時を指定して、眠狂四郎は、千華をともなった吉五郎と、宮の熱田神宮拝殿で、落ち合う手筈であった。

宮は、東海道随一のにぎわいを呈している。
草薙の宝剣を祀る古社には、上り下りの旅人が、必ず詣でる。
そしてまた、中仙道とむすぶ宿駅でもあった。京へ上る旅人のうちには、宮を出て、名古屋、清洲、稲葉、萩原、尾越、洲股、大垣を経て、垂井に達し、ここから中仙道筋を辿る者も、すくなくなかった。
東海道を往く者は、ここから、桑名へ海上七里の船渡しをえらぶか、あるいは、船酔いをきらって、岩須賀、石垣、冠守を経て佐屋に至るいわゆる佐屋廻りをえらぶことになる。佐屋廻りも、三里の間は、川舟に乗らねばならなかった。
いずれにしても、宮に集まる旅人の数は、他の宿駅の数倍をかぞえた。
狂四郎は、吉五郎・千華の二人と落ち合う場所を、わざと、雑沓するこの宮と指定したのであった。
ところが――。
熱田神宮の大鳥居の前まで来て、狂四郎は、
――まずい！
と、眉宇をひそめた。
参詣道を、肩がふれ合わんばかりのおびただしい群衆が、いずれも、異常な緊張の色を顔にうかべて、急ぎ足に、進んでいたのである。
今日は別に、古式の盛典をくりひろげる神事の日に当っていない筈であった。
にも拘らず、この大群衆は、歳首の初卯祭にもまさる。
狂四郎は、職人ていの男をつかまえて、今日はなんの行事があるのか、訊ねてみた。

「きいていなさらんのは、あたりまえじゃ。今年から、はじまるのじゃから――」
「熱田神宮が、富籤興行をやるとは、ついぞきいたことがないが……？」
「富じゃなも、富――。千両富ぞな」

当時――。

市井の貧しい人々を熱狂させたのは、富籤興行であった。

神社仏閣に於て、修復費にあてる名目で、富籤興行を催したそのはしりは、享保十五年、京都御室仁和寺であった。

それが、たちまち、江戸に波及し、年々さかんになり、文政年間には、三十箇所で行われるようになっていた。そのうち、谷中の感応寺、目黒の泰叡山、湯島の天神――この三箇所を、江戸の三富といった。

その方法は――。

寺社では、まず、千枚の富札をつくる。木札と紙札が一対となっていて、木札を原牌、紙札を影牌、という。これを、松竹梅とか、十二支とか、春夏秋冬とか、各部にわけて、番号を印す。

売り出されるのは、影牌の方で、原牌は、大きな六方匣の中に納めておく。

影牌は、市中の札屋に、利鞘をとらせて、売りさばかせる。一枚売りがたてまえであったが、割札といって、貧乏人たちは、一枚に何人か乗ることもできた。

江戸の三富の場合、買手が殺到したため、売値よりも高い値段でもとめられた。また、蔭富といって、当籤番号を標準として、輸贏を決する方法も、行われた。

当日は、六方匣を、本堂あるいは、拝殿の広縁に据えつける。

これを充分にゆさぶっておいて、上部に穿った孔へ、錐を突き入れて、原牌を刺して、ひき出

す。これを、富突きという。
万余の庶民は、この富突きに、生涯一度の幸運を祈って、固唾(かたず)をのむことになるのであった。
——尾張家も、熱田神宮で、富籤を催さなければならぬほど、財政窮迫したのか。
狂四郎は、いささかあきれ乍(なが)ら、とんだ日をえらんだものだ、と当惑した。
——この蝟集(いしゅう)ぶりでは、出逢うのはむつかしかろう。
ともあれ、狂四郎は、拝殿へ向って、進むよりほかはなかった。

二

拝殿前は、立錐(りっすい)の余地もないほどの密集ぶりであった。
狂四郎は、ようやく、拝殿の南の神楽殿(かぐらでん)わきまで、進むことができた。そこからは、もう身動きもできなかった。
と——。
狂四郎の背後で、稚い悲鳴があがった。
首をまわした狂四郎は、腰までの背丈の少女が、必死に、富札を握りしめた片手をさしあげて、押しつぶされそうな苦しさに、もがいているのをみとめた。
狂四郎は、周囲の者たちを、押しのけて、少女を、かかえあげた。
それは、巡礼姿の、十歳あまりの少女であった。色白な、眉目(みめ)の整った、いかにも可憐な面立ちであった。
「そなた一人で、ここに来たわけではあるまい。はぐれたのか？」
「わたい、ひとりで、来ました」

「そなたのような稚い子が、富籤をやるというのか？」
「お札を買うたのは、わたいの祖父様です。……祖父様は、ゆんべ、名古屋のご城下の、旅籠で、亡うなりました」
「……？」
狂四郎は、つぶらな双眸に湛えられた泪を、視た。
「祖父様は、亡うなる際に、このお札は、きっと、当る、と申しました。千両札じゃから、お前は、孤児になっても、分限者になれる、というて……」
その遺言を信じて、少女は、ここへ来た、という。
狂四郎は、少女を抱いたまま、興行のおわるのを、待つことにした。
拝殿の階上に設けられた富突場に、神職が現われて、六方匣の上で、賢木を打ち振った。
境内は、とたんに、水を打ったようにしずまった。
いよいよ、富突きが、はじまるのである。
蝟集した万余の顔は、固唾をのんで、錐をつかんだ禰宜の一挙手一投足へ、食いつくような欲深な視線を当てて、待ちかまえた。
匣の孔から、原牌を刺した錐を抜き出して、高らかに、番号が読みあげられるたびに、境内は、どっと、どよめいた。
当り札は、百本であった。したがって、錐は、百回原牌を刺して、抜き出される。百回目が、突き留めといって、最高金額千両であった。
突き留めまで、約一刻の時間が、かかる。
ついに——。

「これより、突き留めえ！」

その高声が懸けられるや、境内は、わああっ、と喚声が渦巻いた。

ひょっとすると、自分の持っている富札が、千両になるかも知れぬのであった。

千両！

これが、どれほどの大金か、具体的に例を挙げれば、納得がゆく。

当時の旅籠の一泊二食入浴附きの代金は、百五十文であった。現代の金にすれば、百五十文は、千五百円にあたる。

豆腐一丁が三十文、醤油一升が百六十文、角下駄一足が四十文、米一石が一両。

一両は、公定価格で四貫文、すなわち四千枚のびた銭であった。一枚の重さを一匁として四貫目、千両箱（一両小判千枚）をそっくり銭に換えれば、四千貫になる。

四千文は、一朱金で十六、一分金で四、そして一両小判となる。

一晩たっぷり飲んで、その代金は二百文にもならぬ時代であったから、いかに、一両がねうちがあったか、明白である。

千石取りの旗本の家計を、例にとってみれば——。

主人の一年の小遣料は十両、用人の給料は八両、近習が五両、中間が三両、女中も三両、というのが相場であった。

すなわち、女中は、月に千文の給料しかもらっていなかった。

さて——。

突き留め、の懸声がかけられるや、ここが熱田の大明神の境内であるにも拘らず、

「南無妙法蓮華経！」

とか、
「南無あみだぶつ！」
とか、あちらこちらから、われを忘れた唱えが起った。
太鼓を持ち込んだ者もあり、どんつくどんつく、と叩きはじめた。
禰宜が、さっと、錐をふりかざした。
とたんに、唱和の声も、太鼓の音も、ぴたりと止んで、しいんと静寂にかえった。
「千両富っ！」
突き手から、原牌を受けとった読み手が、それを高くかかげて、叫んだ。
「梅の、六百六十、九ばあーん！」
三度くりかえしたが、三度目は、もうどよめきで、ききとれなかった。
人々は、自分の持つ札が、はずれたと知るや、きょろきょろと、まわりを睨めまわして、近くに、その幸運者はいないか、とさがした。
どの眼眸も、好奇と羨望と嫉妬で、光っていた。
すぐには、その幸運者は、名のり出なかった。
「こらあっ！　どうした、当った野郎は、どこにいるんじゃ？」
「もったいぶらずに、はよう、出て来てなも！」
「あんまりうれしゅうて、気でも失うたんかなも――」
「わしが、代って、千両箱をかついで行ってやるでえ」
ようやく、人波が崩れて、ぞろぞろと、参詣道を流れはじめた時――。
狂四郎の腕の中にいた少女が、

「小父さん！」

ふるえ声で呼んで、にぎりしめていた影牌を、そうっと、示した。

まさしく――。

影牌には、梅の六百六十九番、と刻印されてあった。

三

人の往き来のせわしい松並木の道中畷を、少女を連れた狂四郎が、一梃の駕籠をしたがえて、ゆっくりと、千浜の鳥居へ向って、歩いて行く。

駕籠の中には、千両箱が据えてあった。

狂四郎は、渡船場から、桑名へ渡るつもりであった。

少女の家は、四日市の小さな紺屋ときいたので、そこへ送ってやることにしたのである。

千浜の鳥居の西方に、宏壮な屋敷が、どっしりとわだかまっていた。西浜御殿と称える尾州家の接待屋敷であった。

いましも、その表門から、出て来たかなり猫背の武士が、まぶしげな表情で、こちらを眺めやった。

狂四郎が、鳥居をくぐろうとすると、武士は、

「あいや！」

と、片手をあげて、呼びかけて来た。

「……？」

黙って、ふところ手のままで、立ち停った狂四郎に向って、武士は、せかせかと、近づいて来

た。

六十とも七十とも受けとれる老人であった。歯がことごとく抜けて、上下の唇が、梅干になっているせいであろう。案外、五十代もなかばの若さかも知れない。

「桑名七里の海渡りは、身の危険。佐屋廻りにしては、如何じゃな、眠狂四郎氏？」

どことなく愛敬のある表情で、もぐもぐ口から、そう云いかけた。

狂四郎は、こちらの素姓を看て取られても、べつに眉宇も動かさず、

「どうして、危険だとお判りか？」

と、訊ねた。

「富札で当てたその千両箱じゃよ」

そう云われて、狂四郎が振りかえるのと、少女が、バタバタと遁げ出すのが、同時であった。

武士は、にやにやして、

「千両箱には、小判の代りに、鉄の塊でも詰めてあるに相違ない。……お主が、こどもに弱いと知った敵が、仕掛けた罠じゃな。船に乗ったならば、あの小娘が、お主に、毒でも一服盛る手筈であろうわさ。……あの小娘、旅芝居の子役、というのが、見当じゃな」

「しかし、富籤興行は、尾州家が催されたのであろうが……」

「左様――。しかし、公儀お目付あたりが、細工をしようとすれば、当藩としても、黙認せざるを得ぬではないか」

――富突きに、カラクリを作ったのが、下条主膳だ、というのか。

「ご老人、お手前は？」

「次席家老麻生頼母」

四半刻(しはんとき)ののち、狂四郎は、尾張藩次席家老麻生頼母にさそわれるまま、西浜御殿の書院に坐っていた。

千両箱は、床の間に据えてあったが、狂四郎は、まだ蓋を開けずにいる。

麻生頼母は、なにかの用事を足していたとみえて、しばらく、狂四郎を待たせた。

猫背をさらにまるめて入って来た時、狂四郎は、ふっと、その姿が、武部仙十郎に似かよっているのに、気づいた。

「いや、待たせて、わるかった。貧乏ひまなしでな」

座に就いた頼母を、じっと見据えた狂四郎は、

「ご家老は、わたしを眠狂四郎と、どうしてご存じであった？」

と、訊ねた。

「わしは、二年前までは、ずっと、江戸にいた。お主の顔を見知って居るのじゃよ。……お主という人物、一度、会ったら、忘れられぬ」

「下条主膳という公儀目付が、富籤にカラクリをするのを、黙認しておいて、わたしを救おうとしたのは、如何(いか)なる理由か、うかがいたい」

「お目付より、お主の方に、好意を持って居る、とでも申しておこうかな」

「それでは、理由にならぬ」

「まあ、よいではないか。わしが、お主を好きなことは、いつわりではない」

「ご家老**！**」

狂四郎は、口辺に薄ら笑みを刷(は)いた。

「貴方は、もしや、水野越州家の側用人と縁者ではないのか？」
「………」
「たとえば、貴方は、武部仙十郎の実弟とか、あるいはまた、従兄弟とか……」
「他人の空似ということもあるし、七十過ぎれば、どれも同じ顔つき、背恰好になるものじゃが
――」
「かくされたところで、この眠狂四郎の目をごまかすことはできぬ」
「ふっふっふ……、それもそうじゃな」
麻生頼母は、急に、ひきしまった表情になり、
「お主、どうして、武部仙十郎を敵にまわすはめになったのじゃな？」
と、問うた。
「なりゆき、と申し上げておこう」
「いかんな！　いかん！」
頼母は、かぶりを振った。
「わたしの方から、すすんで、楯ついた次第ではない。老人が、欲張ったために、斯様な仕儀に相成った」
「欲張った、というのは、語弊があろう。武部仙十郎は、主人のため、公儀のため、ひいては、天下のために、よかれ、と考えて、働く側用人ではないかな。生涯、妻もめとらず、一文たりとも私腹せず、公事に専念した人物じゃ。その老人をお主が裏切るとはのう」
「ご家老、貴方は、武部老人から、たのまれて、わたしを、ここへつれて参られたのか？」
「たのまれたとか、たのまれぬとか、そんなことはさておき、わしは、お主に、身命を弊履にせ

ぬよう、たのみたいのじゃよ」
「主人持ちの身ではないし、妻子があるわけでもなく、おのが身をどのように扱おうと、勝手にさせて頂こう」
「さ、それじゃ。お主のそういう不敵さを、わしは、高く買う。武部仙十郎も、その点を見込んで、これまで、お主を、さまざまな危険な場所へ送ったのであろうが、このたびのことは、どう考えても、お主の態度に非があるようじゃ。……安南から渡って来たオランダ娘に味方して、長年のつきあいの武部仙十郎までを敵にまわしたのは、納得しがたい振舞いと云わねばなるまい。そうではないかな、眠狂四郎？」
「わたしは、武部老人に、恩をきせても、きせられたことは一度もない。これは、はっきりさせておきたい。わたしが、おのれの行動を、武部老人の思案によって、しばられる義理はない」
「そう申しては、身も蓋もないが……、どうであろうな、ここはひとつ、歩み寄りということで、手を打っては——？」
「……………」
「つまり、武部仙十郎にも協力させて、お主は、宝をさがしあてる」
「それで……？」
「その宝じゃが、十万両か、百万両か知らぬが、公儀とオランダ娘と、折半という約束をする」
「……………」
「不服かな、この歩み寄りは？」
「折半ということは、考えられぬ」
「どうしてかな？」

「ご家老——、かりに、その千両箱に、小判千枚が入っていたとする。貴方は、わたしと、折半されるか？」

「……む！」

「尾州家次席家老としては、面目上も、素浪人風情と、折半することはできまい。……浮世のしくみは、その立場立場によって、妥協の余地のないように、つくられていることを、よもや、貴方がご存じないとは、云わせぬ」

「…………」

「これは、わたしの直感だが、その千両箱には、まぎれもなく、小判千枚が入っているに相違ない。下条主膳は、この眠狂四郎を生捕るために、富籤にカラクリをほどこし、千両箱には、鉄の塊でも詰める、と云ったろうが、実は、一石二鳥を狙ったのではあるまいか。わたしを生捕るとともに、尾張藩からも千両せしめる。公儀目付というものは、それぐらいの悪智慧を働かせて、当然の職務なのだ」

「ふむ！」

頼母は、唸った。

「その千両箱の蓋をひらいてみられるがいい。……小判千枚が詰められていたならば、わたしと折半されるか？」

狂四郎は、返辞をきかずして、やおら、座を立っていた。

参宮道

一

桑名から四日市まで三里八丁。四日市から、五つの橋を渡って、日永(ひなが)村に至る。ここに、伊勢神宮遥拝所(ようはいじょ)の鳥居がある。

旅をいそぐ者が、神宮参詣を略して、ここで、はるかに拝むのである。

日永の鳥居は、桑名七里の渡し口の鳥居、関の追分の鳥居とともに、参宮街道の三大鳥居とうたわれている。

すなわち。

日永の追分で、東海道は、伊勢街道（参宮道）と岐(わか)れる。

追分から神戸(かんべ)まで二里三十丁。神戸から、白子(しろこ)、上野を経て、津まで五里半。松坂を通って、山田に至る道順である。

眠狂四郎は、夏に衣がえをしようとしているその伊勢街道を、まっすぐに、ふところ手で、歩いて行く。

薄雲の散る空を、椋鳥(むくどり)の大群が、南をさして渡っていたし、並木の梢(こずえ)では、大瑠璃(おおるり)が、その美しい瑠璃色の羽を陽光にきらめかせ乍ら、美しいさえずりをきかせていた。

狂四郎の前後には、お伊勢講の一行が、幾組も、列をなしていて、御世泰平ののどかな風景であった。

神戸宿の手前の高丘川に架けられた細長い橋を渡りかけた時であった。

——尾(つ)けて来ている。

その直感が、働いた。

橋を渡った狂四郎は、街道をそれて、ゆっくりと、南土手へ向った。

そこが、いわゆる「女人堤防」であった。

神戸藩領の汲川原(くみがわら)は、鈴鹿(すずか)川と安楽川の合流点にあたり、むかしから、毎年のように水害になやまされていた。

享和二年の夏には、堤防が決壊し、家屋流失百五十戸、死傷行方不明三百余人の大きな被害を出した。

そこで、汲川原の庄屋は、藩主に、護岸工事の許可を乞うた。しかし、対岸の神戸城下への影響をおもんぱかってか、許可が下りず、かえって、強い禁圧の態度を示された。やむなく、村民は、非合法裡に、工事を敢行することにした。工事完成のあかつきには、それに従事した者は、咎(とが)を蒙(こうむ)ることは目に見えていたので、庄屋の裁断で、女ばかりが築堤にかかった。

六箇年の歳月を費やして、ついに堤防が完成した。

藩庁では、その完成を待っていて、工事に従った女子二百余人に対して、斬首の厳命を下した。

立派に成った堤防上に、ずらりと老若の女子が居竝(いなら)んで、いよいよ、打首が行われようとした寸前、処刑中止の使者が、馬をとばして到着した。

藩庁では、処刑ははじめから行うつもりはなく、藩の威信を示したのであった。

狂四郎は、女子どもの手によってつくられ、その後一度も決壊したことのない堤防の上に立っ

て、やおら、向きなおった。
饅頭笠で顔をかくした雲水が三人、十歩の後方に、立っていた。
狂四郎は、突いている杖を、仕込みと看てとり乍ら、
「お主らが、この眠狂四郎を襲うには、此処女人堤防は、いかにもふさわしい場所だ」
と、云った。
どの敵から派遣されて来た討手か知らぬし、知ろうとも思わない狂四郎であった。
「この堤防は、享和年間に成った、ときいた。文化、文政を経て、どうやら、見渡したところ、そろそろ崩れそうなけはいが感じられる。女人二百余人が、一命をすてる覚悟で、築いた堤防ゆえ、決壊させたくはない。お主ら三人に、ひとつ、人柱になってもらい、崩れるのをふせいで頂こう」
薄ら笑いつつ、そう宣告した。
贋雲水たちは、無言で、一斉に、仕込杖から、白刃を抜きはなった。
街道上から、この光景を眺めた参詣人たちが、どっと騒ぎたてた。
——おれが、参宮道に入ったのを知ると、行先を突きとめるまでもなく、斬れ、と使令したのは、千華もまた参宮道に入ると確信した上でのことに相違ない。
その決断をみせたのは、佐賀闇斎か、下条主膳か、それとも島津家の隠密の頭領であろうか。
狂四郎は、しずかに、無想正宗を、鞘からすべり出させた。

二

叫ぶ者、固唾をのむ者、私語かわす者——それぞれが、街道上に、足を釘づけされて、堤防で

行われようとする決闘を、見まもっている。
その中に、沈黙を守って、じっと、狂四郎の姿を凝視する男女二人連れがいた。
七十を越えた、いかにも老いさらばえた下級の藩士ていと、お高祖頭巾で目ばかりに顔を包んだ、その孫娘らしい姿と——。
吉五郎と千華にまぎれもなかった。
二人は、海路をぶじに、桑名へ着いて、宮までひきかえし、狂四郎と落ち合おうとしたのであったが、その日、熱田神宮では、富籤興行が催されていて、拝殿前は立錐の余地もない蝟集ぶりであったので、あきらめて、まっすぐ、志摩をめざすことにしたのであった。
途中で、必ず狂四郎とめぐり逢うに相違ない、と信じていたし、たしかにその通りであったが、三人の刺客に迫られている光景を目撃して、ここまでの道中、さまざまの危難を脱して来たであろうことが、容易に想像できた。
囮となって、敵の目をおのれ一身に集めた狂四郎の不敵さが、いまさら乍ら、吉五郎と千華の胸にこたえた。
地摺り下段にとった狂四郎に対して、雲水に化けた刺客たちは、三者一体となって、襲うべく、微塵の差もない、全く同じ構え——やや上段に近い青眼につけている。
対峙は、つづく。
四半刻の間に、堤防上で動いたものといえば、殺気におびえてあわただしく飛び立った幾羽かの旅鳥だけであった。
街道から見物する人々は、明るい陽ざしの中で、微動だにせぬ四つの人影が、そのまま、永遠に石像と化すような錯覚に陥りそうであった。

しかし、その固着状態に苛立って、叫んだり、歩き出したりする者は、一人もいなかった。

と――ようやく。

刺客たちが、同時に、同じ動きを示した。

――やるぞ！

人々は、自分自身も、不動の束縛から解放されたように、表情を動かし、目を光らせた。

刺客たちは、やや猫背になり、切先を寸のびさせた。

剣法を知らぬ者には判らぬことであったが、それは、必殺の突きを放つ――ただ一手の予告であった。

失敗すれば、おのれがまちがいなく斬られる、と知って、敢えてえらんだ一手であった。のみならず、味方三人のうち、一人だけが、狂四郎の臓腑を刺し貫くことを期し、あとの二人は捨て石となる、文字通り必死の戦法であった。

刺客たちは、その構えで、すこしずつ、間隔をひらいた。

狂四郎は、依然として、地摺り下段のまま、動かぬ。

見まもる吉五郎は、息苦しくなり、ぐっと生唾をのみ下した。

千華の方は、われ知らずに、胸で十字を切った。

汐合がきわまったのを、吉五郎も千華も、そして、数百人の見物人も、感じた。

刺客たちの姿勢が、さらにひくくなった。

その時、はじめて、狂四郎は、無想正宗を、地摺りから、ゆるやかに、宙を移しはじめた。

いつになく、描く円月の速度は、早かった。

その切先が、天を指した刹那、陽光を撥ねて、きらっと振動した。

同時に――。
三人の刺客は、狂四郎めがけて、一直線の突きを放った。
見物の群れは、そこまでの動きしか、目の裡にのこし得なかった。
狂四郎が、三刀の突きを、どうかわし、斬りかえしたか、誰も見とどけることは不可能であった。
双方、全くの無言裡に迅業を使い、そしてまた、ただの一合も、刃と刃を噛む音を立てなかった。
三人が突き、狂四郎がぱっと白刃を閃かせた――と見た、次の瞬間には、血煙りがあがり、三つの人影はくさむらに沈み、狂四郎の姿だけが、そこに立ち残った。
千華が、片手を帯の吉弥結びの蔭へまわしたのは、その折であった。
それにかくしていたぶうめらんを、つかみとりざま、千華は、堤防の斜面の一点めがけて、放った。
その飛道具が、くさむらに吸い込まれるとともに、そこから、銃声が起った。
狂四郎が、こちらを視た。
「やんなすった！」
吉五郎は、溜めていた熱い息を吐いた。
狂四郎は、ただ一人で、足早に、神戸を通り抜けて、白子（寺家村）に入ると、むかしから、波濤の音が、鼓のようにきこえる、と云い伝えられている鼓ヶ浦へ出た。
右方に、伊勢順礼の札所十六番目の白子観音寺の堂宇が、空にそびえていた。

狂四郎は、視線をまわして、山門下に、吉五郎の姿があるのをみとめた。

狂四郎が、境内に入ってみると、千華は、一年を通じて花が咲くという白子七不思議のひとつ不断桜の竹囲いわきに、佇(たたず)んでいた。

近づいた狂四郎は、なつかしさをこめた眼眸を、冷たく受けとめて、

「そなたが、ぶうめらんを使ったのは、まずかった」

と、云った。

千華が、その飛道具を使わなければ、あるいは、狂四郎は、忍び寄った伏敵に、撃たれていたかも知れなかった。

その礼を云う代りに、余計な手出し、と責めたのである。

千華は、顔を伏せた。

「われわれの周囲には、絶え間なく、敵の目が光っている、と考えてよい。そなたが、ぶうめらんを使うのを見とどけた敵が、いるに相違ない」

「申しわけありませぬ」

「吉五郎――」

「へい」

「別の変装を、思案してもらおう」

「へい、承知いたしました」

「ただちに、だ」

「それア……？」

吉五郎は、ちょっと、当惑した。

狂四郎は、多くの言葉は口にせず、二人から、すぐはなれた。

三

同じ日の夕刻。
公儀お目付下条主膳の姿が、四日市の脇本陣に現われていた。
部屋に入って、袴もとらぬうちに、廊下から、名を告げる配下の隠密の声がした。
「入れ」
主膳は、平伏した腹心に、
「眠狂四郎が、参宮道に入った、という報告は、桑名で、きいた」
と、云い、
「土肥、風早、多治見の三名を、追跡させたが、いかがした？」
と、訊ねた。
「三名とも、相果てました」
「強いの、眠狂四郎という奴」
主膳は、拳でおのが肩を叩き乍ら、云った。
「この上は、二十名以上をもって、一挙に襲撃させては、如何かと存じます」
「いたずらに、手飼いの頭数を減らすだけだな」
「眠狂四郎とても、人間でありますからには、絶対に不死身とは申せませぬ」
「あせるな、後藤」
「は――」

「狂四郎を、目的地まで往かせるのも、よかろう」

「千華と申すオランダ娘が、眠狂四郎と相前後して、参宮道を進んでいることは、疑う余地はありませぬ」

腹心の後藤は、狂四郎に三名が討たれた際、もう一人、身をひそめて、鉄砲で狙った榊原(さかきばら)三十郎が、奇妙な飛道具で、首を刎(は)ねられたことを、報告した。

「鎌倉の切通しで、オランダ娘に、その飛道具で、一人、殺(や)られて居りますゆえ、このたびも、彼女の仕業に相違ありませぬ」

「ふむ」

「その場にいた参詣人どもにあたりましたところ、娘は、どうやら武家娘ていになって居る様子でありますれば、津まで至らぬうちに、捕えられるかと存じます」

「たわけ！」

「は——？」

「眠狂四郎が、すぐに、装(なり)を変えさせたに相違ない。いま頃は、順礼姿にでもなって居ろう」

「…………」

主膳は、腹心の顔がゆがむのを、冷然と見やり乍ら、

「娘も、目的地まで、往かせてみよう」

と、云った。

「は——」

「行先は、伊勢か、志摩か、紀伊か。それとも、わざと、方角ちがいの土地へ、われわれをひき寄せようと、いたして居るのか。いや、そうではあるまい。彼奴(きゃっ)、囮となって、道中して参った

のだからな。……娘が、飛道具を使ってくれたのは、こちらにとって、物怪(もっけ)の幸いであった。狂四郎め、さぞや、あわてたであろう。やはり、目的地へ向って、進んで居るに相違ない」

「誓って、変装した娘を、津のあたりで、発見いたします」

「それよりも、後藤――、弥之助が、わしを裏切って居るぞ。あれは、やはり、薩摩の密偵であったな」

「その儀は、ご承知の上で、お使いになっていた、と存じますが……」

「半信半疑、というところであったが、このたびで、明白となった。消さねばなるまい」

「かしこまりました」

「風のようにすばやい奴ゆえ、手こずるぞ」

「手前に、おまかせ下さいますよう――」

「もう一人、消さねばならぬ男が居る」

「……？」

「佐賀闇斎だ」

「帰化いたした琉球人普天間親雲上(ふてまばいきん)でありますか？」

「あれは、琉球人ではない。暹羅(シャム)からやって来た、れっきとした日本人だ。暹羅では日本太夫、と名乗って居った、山田長政の苗裔(びょうえい)と称する男だ。……わしは、とっくに、その素姓をあばいていたが、わざと、そ知らぬふりをして、その動静を眺めていた。沼津千阿弥が切腹した直後から、穴から匍(は)い出て来居った。……目下、眠狂四郎のあとを追って来て居る。今宵あたり、この四日市に到着して居るかも知れぬ」

「それは！」

「これも、一筋縄ではいかぬ曲者だ。ぞろぞろと手下を率いて、道中するような、間抜けたまねはして居らぬが、目に見えぬ警備の網を、身のまわりに張りめぐらしているに相違ない。また、東海道を上って来る途中、いくどか、眠狂四郎を生捕ろうとして居る。……この男も、わしにとって、大いに邪魔になって来た」

「…………」

「闇斎は、阿蘭陀屋嘉兵衛と、手を組んで居る。……阿蘭陀屋嘉兵衛は、わしに内密で、わしの上司に、ごまを擂って居る」

「若年寄様に、でございますか？」

「そうだ。相模守殿は、この下条主膳に、全幅の信頼を置いている、とみせかけ乍ら、実は、わしを出し抜こうとしているふしが、うかがわれる。あるいは、闇斎は、ひそかに、阿蘭陀屋を介して、若年寄に、密約をとりつけたかも知れぬ」

主膳の語気には、断定に近いひびきがあった。

下条主膳の直感は、中っていた。

佐賀闇斎は、同じ四日市のごく目立たない旅籠に、草鞋をぬいでいた。

主膳と同様、部屋に入ると程なく、闇斎は、行商人ていの男を、前に坐らせていた。

眠狂四郎が、参宮道に入った、という報告をきいた闇斎は、にやりとして、

「どうやら、行先の見当がついたわい」

と、云った。

闇斎は、下条主膳よりも、太閤遺産の埋蔵場所へ近づく手蔓をつかんでいる模様であった。

「お館（やかた）――」

男は、闇斎を、古風な呼びかたをして、

「四日市あたりから、くれぐれも、身辺の警戒を怠らぬように、おたのみ申します」

と、忠告した。

「わしの生命を狙う者が、いるというのか？」

「お目付下条主膳が、脇本陣に泊って居ります」

「ほう、あの人物がのう、いよいよ、出馬して参ったか。これは、要心せずばなるまい。……まともに、勝負できぬ対手（あいて）じゃでのう」

闇斎もまた、主膳の配下とおぼしい隠密から、身辺をかぎまわられたことを、さとっていたのである。

「ところで、眠狂四郎だが、オランダ娘と、桑名あたりで落ち合った形跡はないか？」

「そこまでは、つきとめて居りませんが……、眠狂四郎が、下条主膳の放った隠密らしい者どもを、神戸の堤防で、斬った、という報（しら）せは、入って居ります」

「主膳が、それを命じた、ということは、行先をつきとめた、というわけかな？」

闇斎は、ちょっと小首をかしげたが、

「そうか。オランダ娘もまた参宮道に入った、と知ったからか。そうだとすると、こっちは、下条主膳に、一手打つのがおくれたことに相成るのう。……加平次、明日中にも、オランダ娘を、さがし出せ。お目付側に生捕られては、これまでの苦労が、水の泡（あわ）になる」

「早速に、手配りをいたします」

「いそがねばならなくなったぞ。眠狂四郎の行先は、すぐ目近に近づいて居るわい。……まさに、

天王山じゃ」

闇斎は、そう云いすてて、俯伏せに寝そべった。

その瞬間、闇斎は、ふっと、別の表情になった。

こうして俯伏せると、いつも腰をもんでくれる小銀が、もはや、永遠に、そばから消えたことを、思い出したからである。

獄門橋

一

眠狂四郎は、津の城下に入った。

藤堂高虎によってつくられたこの市は、当時商家一千五百余軒、長さ七十二町。綟子肩衣、さらし木綿、鋳物、鐘、鍋、釜、文函、片口、酒、煎茶など、名物はかぞえきれなかった。

湊口は遠浅であったが、干満の差が大きく、満潮に乗れば、大船の出入自在であったので、ここから、桑名をはじめ、多くの航路を蜘蛛の巣のように開いていた。伊勢は津で持つ、津は伊勢で持つとうたわれている所以であった。

殷賑の湊である上に、参宮道の中点に位置しているため、当然、街道の左右は、旅籠と茶屋が、無数に檐をつらねていた。

伊勢詣での男たちの愉しみが、道中女を買うことであることは、さきに述べた。その証拠は、参宮道に、茶屋と名づけられた地名が、十指に近いのでも、明らかであった。

三軒茶屋、白子茶屋、塔世（とうせ）茶屋、六軒茶屋、土羽茶屋、新茶屋など――。

いわば、茶屋は、現代のモーテルにあたる。

街道上でひろった門付や巡礼を連れ込んだり、あるいは、茶屋の女中に命じて、町家の後家や浪人者の妻女などを呼んでもらったりするしくみは、むかしもいまも、変りはなかった。

そして、女郎屋は小格子から黄色な声をかけて来たし、旅籠は留女（とめおんな）が袖をつかんでひっぱり、津湊は、市中すべてが、売春の光景を呈していた。

一人、ふところ手で、通り過ぎて行く狂四郎に対してだけは、女どもは、一瞥（いちべつ）しただけで、その異相と痩身（そうしん）が湛（たた）える死神の雰囲気（ふんいき）に、はっと息をひそめて、身をすくませた。

三十間の橋が架けられた岩田川へ来た折であった。

橋袂（はしだもと）の腰掛茶店から、出て来た六十六部が、狂四郎のそばへ、近づいた。

狂四郎は、べつに、一瞥もくれようとせず、橋板を踏んだ。

肩をならべた六十六部は、

「囮道中は、まだ、しばらく、つづくわけでござるか、眠狂四郎殿？」

と、訊ねた。

口はほとんどひらかず、すれちがう通行人の耳にはとどかぬ忍び声であった。

「武部老人から、遣わされて来たのか、お主は？」

狂四郎は、云いあてた。

「竜堂寺鉄馬と申す」

「役目は、わたしを殺すことか？」

「いや、護衛でござる」

「武部老人は、いまだ曽て、わたしに助人をつけたことはない。まして、敵にまわった今、考えられぬことだ」
「お目付下条主膳が、配下数十名をひきつれて、この参宮街道を来て居り申す。その他にも、貴殿は、ご自身を、さまざまの敵に、尾け狙わせておいでござる」
「こちらが、のぞんで、そうしているのだ。こんたんありげな助勢は、ことわる」
「貴殿の身辺護衛は、身共の勝手、ということにして頂きとうござる」
六十六部は、そう云うと、足をはやめて、狂四郎より数歩さきに出た。
橋のちょうど中央に、夫婦らしい、むさくるしい老いた男女の乞食が、坐っていた。
乞食は、参宮道の名物のひとつであった。
津の城下へ入るあたりから、数が増え、松坂、山田までの沿道いたるところで、手を合わせ、頭を下げている。
参宮道沿いの民家の構えの特長は、雨だれが、のれんのように設けられていることだが、その雨だれを支える腕木を、乞食もたれ、と呼んだ。いかに乞食が多かったか、それでわかる。
狂四郎は、その前にさしかかって、咳払いをきき、ちらと、乞食夫婦へ目をくれて、
——うまく化けた。
と、感服した。
吉五郎と千華であった。
どう見ても、七十を越えた老爺老婆であった。膝に置いた千華の両手など、どう細工したか、皺だらけであった。
狂四郎は、そ知らぬふりで、そのまま、通り過ぎて行った。

岩田橋を渡ると、岩田見付といい、番所があった。
番所を抜けた時、狂四郎の行手から、六十六部——竜堂寺鉄馬の姿は、かき消えていた。
街道は、伊予町、立合町、八幡町、藤枝南、垂水、小森上野とつづき、そこからゆるやかな坂道になった。

二

その台地を桜茶屋といい、また、台地にあるので、高茶屋とも称んでいた。
桜茶屋から下る道は、左右が人の背丈ほどの絶壁の切通しになった。
中程まで下った時、狂四郎の四肢が、ひきしまった。
背後から、一頭の牛が、凄まじい勢いで、疾駆して来たのである。
——絶壁上へ跳躍すれば、そこに鉄砲か矢の伏勢がある、ということか。
狂四郎は、とっさに、そう判断した。
道幅が狭くなって居り、絶壁へ身をこすりつけて、牛を避けるのは、むつかしかった。
やむなく——。
脳裡にわいた戦法をそのまま実行すべく、猛牛が、眼前へ来た瞬間、狂四郎は、五体を沈めざま、無想正宗を抜きつけに一閃させた。
前脚二本を両断された牛は、狂四郎の上を飛んで、巨体を路面へたたきつけられた。
身を起した狂四郎は、下肢の半分を喪い乍ら、なおはね起きようと、みじめにもがく家畜が、やがて、あきらめて、しずかになるさまを、見まもった。
牛の目には、静かなあきらめの色があった。

伏勢が絶壁の上に、現われる気配はなかった。
——ただ、牛をけしたてて、襲わせてみただけのことか？
狂四郎が、疑惑をのこして、歩き出そうとすると、坂の上から、叫び声をあげて、農夫が一人、駆け降りて来た。
狂四郎を視て、立ちすくんだが、すぐに、
「くろ！」
と、呼んで、倒れた牛のそばへ、走り寄った。
狂四郎は、合掌する農夫を眺めて、
「お前の持牛か？」
と、訊ねた。
「へい。田植えの手伝いをたのまれて、志摩から曳いて来たんじゃが、……これも、さだめじゃろ」
意外にあきらめのはやい顔つきであった。
「どんな男に、牛の暴走をたのまれた？」
「ちがうぞな。わしは、むりやりに、取りあげられただけじゃ。……そりゃ、代金をはずんでもろうたけど。……お前様を襲うことなど、わしゃ知らなんだ。……なにに使うんじゃろう、とついて来てみたら、焼酎をのませて、荒れ狂わせて……、すまんことでした。かんにんして下されのう」
「べつに、お前が、わたしにあやまることはない」
「おさむらい様、くろをもろうて行っても、ええかな？」

「うむ」

狂四郎が、うなずくと、農夫は、牛へ跼(かが)みかかって、みひらいた目を撫(な)でてやり乍ら、小声で、なにかぶつぶつと、となえた。

「……………？」

狂四郎は、その独語を、ききとがめた。

耳にしたのが、余人ならぬ、眠狂四郎であった。

その独語の中に、「あんめんじんす」という文句が交ったのに、狂四郎は、はっとなったのである。

あんめんじんす——すなわち、切支丹信者の唱言(おらしょ)のひとつ、ああめんが転訛(てんか)したものである。

——この百姓は、隠れ切支丹か。

露見すれば磔刑(たっけい)に処せられると知りつつ、遠い先祖からの信仰を享(う)け継いでいるうちに、その祈り文句も、次第に転訛して、一種奇妙な呪文(じゅもん)のようになってしまっているが、しかし、元の唱言は残されている。

あんめんとか、でうす様とか、丸や様とか、あきらかに、切支丹の唱言として、伝承されているのだ。

狂四郎は、知っていた。

洗礼、家祓(いえはらえ)、仏経を消す方法、種蒔(たねま)き、病気を治すため、などに、それぞれ、隠れ切支丹には、異なる唱言があることを——。

洗礼の場合は、水役という者が、細竹で十文字(クルス)を造り、これを水に浸(つ)けて、洗礼者の額にあて、

「浮きぐるす、浮きぐるす、水に浮いたる浮きぐるす、あんめんじんす、丸や様」

と、唱えるのであった。

「おい――」

狂四郎は、農夫を呼んだ。

「へえ？」

「志摩だ、といったな、お前の村は？」

「へい、そうでごぜえます」

「志摩のどのあたりだ？」

「志摩の突っ端の、賢島（かしこじま）というところで――へい」

狂四郎の顔に、微笑がうかんだ。

江戸城大奥の万年厠（かわや）から盗み出した小函（こばこ）の中には、鉄製の蟬（せみ）とともに、一枚の詩箋（しせん）が入っていたが、それには、

『輪廻（りんね）生死、空蟬（うつせみ）に魂を入れたくば、志摩国賢島なる磯館（いそやかた）の女神像に祈るべし』

と、記してあったのである。

この秘文は、生きていた豊臣秀頼によってしたためられ、長崎奉行村山東庵の次男長庵の手に託（たく）された。

村山東庵父子は、切支丹信徒であった。長庵は、父とともに、捕えられて、処刑されたが、捕縛寸前に、江戸城大奥で、お手つき中﨟（ちゅうろう）となっている義妹梅路に、秘文をあずけた。

――太閤遺産は、隠れ切支丹によって守られている、というわけか。

「賢島には、磯館という旧家がある、ときいたことがあるが……」

狂四郎は、農夫に、さぐりを入れてみた。

「ごぜえます」
農夫は、返辞をためらわなかった。
しかし、その目つきには、暗い翳(かげ)を刷(は)いている浪人者に対する警戒の色があった。
「それは、落人館(おちうど)か？」
「さあ、わしらは、よく存じましねえ。古い、古いお屋敷というだけで、そのほかのことは……。ごめん下せえ。わしは、くろを乗せる荷車を取って来ねばならねえので……」
農夫は、いそぎ足に、そこをはなれて行った。

三

津から四里を歩いて、松坂に至る。
松坂は、天正十二年、蒲生氏郷(がもううじさと)によって作られた。その頃は、四五百(よい)の森と呼ばれていたが、氏郷が、近くの松ヶ島というところから、城を移したので、松坂という地名ができた。
松坂の城下を繁栄させたのは、松坂から、京大坂、江戸へ出て行った商人である。
『日本六十余州長者鑑(かがみ)』に、三井八郎兵衛をはじめ、殿村三平、小津与右衛門、長谷川治郎兵衛など、松坂商人が名をつらねている。
西鶴の『日本永代蔵』では、越後家（三井家）は、
「大商人の手本なるべし」
と、評されている。
そうした大商人を出した松坂の城下は、津とちがって、静かな、おちついた雰囲気を持っていた。

六軒茶屋などの茶屋町も、津のそれとちがって、客の呼び込み、送り出しに、みやびやか、といってもいい風情があった。

狂四郎が、松坂大橋にさしかかると、そこに、いつの間にか、竜堂寺鉄馬の六十六部姿があった。

「眠殿、あの農夫、飼い牛の屍体を、村へ持ちかえって、どうするか、ご存じか？」

肩をならべて歩き出すと、鉄馬は、問うた。

「葬るのではないのか？」

「村一同で、ひそかに、焼いたり、煮たりして、食うのでござる」

「お主！」

狂四郎は、前方へ眼眸を置いたまま、云った。

「牛を取りあげて、わたしに、けしかけたのは、お主の仕業だったのか」

「こころみに――」

「なんのこころみだ？」

「貴殿が、よもや、牛ごときに、蹴殺されるはずはないゆえ、こころみに、奔馳せしめたのでござる。あの農夫が、牛の屍体を、どうするか？……予測たがわず、村まで、持ちかえり申した。食うことは、まちがいござらぬ」

「…………」

「眠殿は、こういう話をご存じでござろうか。文化年間に、天草には、いまだ、隠れ切支丹が残存する、という噂が立ち、公事方奉行の松平兵庫頭の下知のもとで、ひそかに探索したところ、大江、崎津、今富、高浜の諸村で、牛を殺して、その肉を食っている事実が明らかになり申した。

すなわち、四村の総人数一万七百余人のうち、その半数が、宗門心得ちがいの者でござった」
「お主は、あの農夫が、どうして、隠れ切支丹と、看破った？」
「田をたがやし乍ら、ぶつくさと唱えていた――その文句を、ききとがめ申した」
鉄馬は、こたえた。
「隠れ切支丹と看て取って、その牛を取りあげて、わたしを襲わせた。そのこころみの成功が、お主に、どういう思案を生ませた？」
「いや、いまは、それだけのことで、べつに、なんの思案も生んでは居り申さぬ」
「いまさら、しらばくれても、はじまるまい。……お主は、武部老人から、くわしく、きかされているに相違ないのだ」
「眠殿、貴殿は、このたびのことでは、あくまで、武部殿をも、敵にまわされる肚でござろうか。まず、その儀を、きかせて頂きたい」
「好んで、敵にまわしたわけではない。しかし、目的を異にすれば、敵たらざるを得ぬ」
「強気なことでござる」
「お主――」
狂四郎は、口辺に冷たい薄ら笑いを刷いて、云った。
「お主は、老人から、眠狂四郎が太閤遺産をさがしあてたならば、暗殺せよ、と命じられているのであろう？」
「滅相もない。ただ、護衛せよ、と命じられただけでござる」
「暗殺者が、正直に口を割るわけはないが、ぬけぬけと近づいて来たのは、いい度胸だと、ほめておこう」

「眠殿――、囮道中も、ここらあたりから、一歩一歩が死地になり申す。身共の護衛は、絶対に必要でござる」

「暗殺者を、助勢させて、旅するのも、わるくはない」

「では、身共は、いったん、姿を消し申す」

竜堂寺鉄馬は、津城下でそうしたように、足をはやめて、みるみる先へ往った。

四

同じ日。

狂四郎より小半刻おくれて、旅の薬売りらしい装をした男が、菅笠で顔をかくして、とっとと、松坂城下に入って来た。

大橋を渡って、中町、日野町、平生町、愛宕町と、足早に通り抜け、城下への出入りを監視する黒門をくぐった。

黒門を出てから、男は、後をふりかえった。菅笠の下の双眸は、鋭く光っていた。

捨てかまりの弥之助に、まぎれもなかった。

自分を尾けて来ている者のないことを、たしかめてから、再び、弥之助は、急ぎ足になった。

青雲橋、金剛橋と、ふたつの橋を渡ると、街道は、東南に向きかわって、四つ叉へ出る。

四方ひろびろとした野で、四つ叉の辻には、常夜燈が一基、建っていた。

ここは、むかし、罪人の首を晒した場所であったので、村人が供養のために、寄進した常夜燈であった。

街道を、小川が横切って居り、これに架けられたのを、獄門橋といった。

弥之助の足が、その獄門橋にかかった――その刹那。
常夜燈の蔭(かげ)から、銃声がとどろいた。
弥之助は、橋上を、くるっと一回転した。
傷ついたとは見えぬ敏捷(びんしょう)な動きであった。
常夜燈の蔭から躍り出たのは、下条主膳の腹心後藤某であった。
「弥之助！　ここらあたりで、年貢を納めろ――」
きめつけざま、第二弾を撃とうと、狙いつけた。
弥之助は、おそれ気もなく、橋上に坐って、頭を立てた。
「後藤さん、てまえを、有無(うむ)を云わせず、殺してしまうのは、軽率じゃありませんかね」
「遁(のが)れる隙をうかがうのか、この期(ご)に及んで――」
「なに、立ち上れぬほどの深傷(ふかで)を負いましたよ。悪あがきはいたしません」
「お目付を裏切ったことが、明白になった以上、観念しろ」
「せっかく、ここまで、やって来て、くたばるのは、無念ですが、しかたがねえ」
「遺言代りに、何が云いたい？」
「てまえは、眠狂四郎の行先を、ちゃんと、突きとめて居ります」
「吐くから、殺さないで欲しい、と乞うのか？」
「この深傷じゃ、もう……」
不意に、弥之助は、激しく咳込んだ。
と――、片掌(かたて)を口にあてたが、みるみる唇を朱色に塗って、指のあいだから、たらたらと、したたらせた。

後藤が、思わず、

「おいっ！」

と、近寄ろうとした。

瞬間——。

胸を押えていた方の片手が、はねあがって、白い閃光をとばした。

後藤の不覚であった。

手裏剣を、ふかぶかと胸に刺されて、後藤はよろめいて、常夜燈に凭りかかった。

弥之助は、ゆっくりと起つと、冷やかに、

「こっちが、捨てかまりであることを、忘れたようだな、後藤さん」

と、云った。

後藤は喘ぎつつ、銃口を挙げようとしたが、もはや、その力はなかった。

「それじゃ、後藤さん、お先にごめん——」

そう云いすてておいて、弥之助は、橋を渡って、遠ざかって行った。

その跡には、点々と血汐が、地面を染めていた。

伊勢音頭

一

眠狂四郎は、宮川を渡ると、外宮神前の町——山田まで、三十町を、まっすぐに、歩いた。

参詣人の数は、宮川の渡し口からいよいよ増し、渡し船は、昼夜をわかたず往復するにぎやかさであった。

清盛堤と称ばれる宮川の堤にも、大世古（おおぜこ）、尼辻（あまつじ）、月夜見宮（つきよみのみや）を経て山田に入る街道上にも、数歩の隙間もない行列がつづいていた。

ここまで来ると、狂四郎を狙う刺客といえども、一応、殺意をすてざるを得まい。

狂四郎自身も、どれが尾行者か、待ち伏せの敵か、見分けのつかぬ雑沓（ざっとう）の中で、べつに、神経を配ろうとしなかった。

山田に入ると、狂四郎は、立場（たてば）茶屋で休憩しようともせず、外宮へ向った。

伊勢神宮には、内宮と外宮があり、内宮にはいうまでもなく天照大神が祀（まつ）られ、外宮には豊受大神（とようけのおおかみ）という、もと伊勢の地神が祀られてある。

参詣の順序は、外宮から内宮へまわることになる。

神仏に対して一片の信仰心も抱かぬ、疎外された異端者が、なんの目的で参拝するのか？

尾け狙う者たちは、その疑惑を、わかせているに相違なかった。

狂四郎の参拝ぶりは、きわめて神妙であった。

外宮の参拝をすませると、順序通りに一の鳥居から、岡本の里の内宮往来の直道を、歩いて行った。

狂四郎が、ちょっと、足を停めたのは、宇治橋を渡りかけて、五十鈴（いすず）川の清らかな流れを見下ろした時だけであった。

内宮一の鳥居をくぐると、参詣人のすべてがそうするのにならって、狂四郎も、五十鈴川の流れる手水場（ちょうず）で、手をきよめた。

その時、狂四郎と三四人へだてて、流れへ踞(かが)みかかっている六十六部がいた。武部仙十郎から遣わされた隠密・竜堂寺鉄馬であった。

狂四郎は、そ知らぬふりで、祓所(はらいどころ)の石壇前を通り過ぎ、二の鳥居をくぐり、冠木(かぶき)の鳥居、第四御門を過ぎた。

第三の鳥居をくぐって、玉串(たまぐし)御門に至ると、狂四郎は、そのまま、すうっと、滑るように奥へ——瑞垣(みずがき)御門の内へ入ってしまった。

もとより、玉串御門から内へは、一般参拝者は、入るのを禁じられていた。

狂四郎は、敢えて、その禁を犯した。

「しまった！」

尾けて来た竜堂寺鉄馬は、舌打ちした。

狂四郎が、よもや、内宮正殿のある瑞垣御門の中へ、姿を消すとは、予想していなかったことである。

流石(さすが)に、竜堂寺鉄馬は、おのれの六十六部姿に気づいて、狂四郎のあとを追うのをためらった。

その時、商人ていの男を先頭にして、三人の武士が、急ぎ足に、門前へ来た。

鉄馬は、踏み込もうとする四人の前を、すばやくさえぎった。

「お主ら、眠狂四郎を追うなら、無駄だな」

「なに?!」

「ここは、武家屋敷とはちがう。お主ら、正殿のまわりがどうなっているか、勝手を知るまい。……東宝殿にかくれたか、西宝殿にひそんだか、それとも、垣を越えて、末社へもぐったか。末社は八十ある。ひとたび、末社へもぐったならば、軍勢を以(もっ)て包囲しても、さがし出すことは、

むつかしい。……いや、こう申しているあいだに、あの男は、正殿を奔り抜けて、裏御門をくぐって居るかも知れぬ」

鉄馬に述べたてられた四人の刺客は、身をひるがえした。

狂四郎は、裏御門へ抜けたに相違ない、と直感したものであったろう。

二

狂四郎は、不敵にも、正殿の薄暗い板敷きに佇立していた。

『日本書紀』によれば、この伊勢神宮は、垂仁天皇の二十六年、天照大神の意を承けた皇女倭姫が、神代よりつたわる三種の神器（八咫鏡、天叢雲剣、八坂瓊曲玉）をおさめる宮所をもとめて、諸方遍歴をかさねた挙句、この伊勢に辿りついて、宇治郷五十鈴川の辺に、建てた、とある。

——もとより——。

この口伝が、史実とは信じがたい。

『日本書紀』にしても、『古事記』にしても、倭国家の権力が確立した奈良時代（八世紀）に編集されたものである。時の権力を神聖なものとするために、それ以前の歴史を巧みに脚色し、過去の系譜を、英雄的な物語でうめる例は、古今東西の国家が示している。

崇神・垂仁時代は、倭の創生時代であって、伊勢まで勢力をのばしていたはずはないのである。

伊勢神宮が、日本の最高神になったのは、壬申の乱以後である。

壬申の乱は、皇位継承をめぐる陰惨な骨肉の争いであった。

乱は、貴族全体をまき込む内乱となり、大海人皇子（天武天皇）の勝利となって、結末をつげた。

その時、大海人皇子の手足となって働いたのが、伊勢・尾張・美濃の兵力であった。

やがて、天武帝をたたえて、

「大君は神にしませば赤駒の、はらばふ田井を京（みやこ）となしつ」

と、天皇を現人神（あらひとがみ）としての絶対的な地位にまつりあげて、伊勢神宮を最高神にしたのであった。

狂四郎としては、天照大神が神武天皇皇統連綿の鼻祖として、つくりあげられたか否か、全く興味のないことであった。

さりとて――。

正殿に忍び入って、その静謐（せいひつ）の中に身を置いてみても、西行法師のように、「何事のおはしますかはしらねどもかたじけなさに涙こぼるる」気分になれそうもなかった。

ただ――。

闇に包まれた祭壇を凝視するうちに、狂四郎の脳裡（のうり）に、ひとつの直感がひらめいていた。

――太閤遺産は、どこかの山中の土の中に埋蔵されているのではなく、このような、人が踏み込むことを許さぬ神聖犯すべからざる場所がえらばれて、かくされているのではあるまいか？

それであった。

三

同じ時刻――。

佐賀闇斎は、古市（ふるいち）の廓（くるわ）にいた。

古市は、江戸の吉原、京の島原と比肩するほど、繁栄をきわめた廓であった。

古市の三大妓楼は、杉本屋、備前屋、油屋であったが、その一軒だけで、芸妓、女郎を合わせ

て六十人以上を抱えていた。

古市には、芝居小屋が二場所もあり、大坂・江戸の千両役者が、一年中入れ替り立ち替り、興行を打っていた。

その芝居を、備前屋・杉本屋・油屋の三大妓楼では、外題がかわる毎に、女郎衆に惣見物（そうけんぶつ）させるので、有名であった。

惣見物の日には、舞台の手前に、その店の定紋入りの紅提灯（べにぢょうちん）をならべてつるし、美しく着飾った女郎衆がずらりと居竝（いなら）ぶ景色は、芝居よりも、それを見物したい客を集めた。

闇斎の登楼したのは、油屋であった。

油屋は、『伊勢音頭恋寝刃（こいのねたば）』で、日本全土に知られている。

闇斎は、座敷に通ると、笑い乍ら、

「この油屋で一番売れている茶汲（ちゃく）みを、たのもうかな。そうじゃ。おかや、という女が、抜群ときいたな。その女をたのむ。但し、ちょいと顔を出して、すぐ別の座敷へ行かれては、わしも、妬刃（ねたば）をふるうかも知れぬぞ」

と、仲居に云った。

『伊勢音頭恋寝刃』として脚色された油屋騒動は、次のようなものであった。

寛政八年五月四日、九つ半（午後一時）頃、一人の若い医師が、登楼した。

宇治浦田町の神官藤波三位元の家に食客になっている孫福斎（ひとし）という男であった。

十六歳の茶汲みおこんが、接待に出た。油屋随一の美女であった。

斎とおこんは、深い馴染（なじみ）であった。おこんが、痘病（とうびょう）に罹（かか）った時、斎の治療で癒（なお）ったのをきっかけにして、好き合う仲になっていた。

斎は、おこんを女房にする肚をきめていた。

油屋あたりの女郎衆は、美しく、気品もあり、芸事はじめ、家事一切を仕込んであった。

古市の女郎には、女衒の手で、遠くから売られて来る娘は、いなかった。伊勢・志摩の農村や漁村から、旱魃・不漁の年に、その父親が、手をひいて、小さな娘を売りに来たのである。

楼主が親替りになって、育ててやったので、売る方では、出世奉公といった。苦界に身を沈めさせる、という悲惨な気持は、全くなかった。

俗に年子という、十年間の年期で、売られる娘は、十歳前後であった。

その十年間に、行儀作法、芸事など仕込まれた。そして、客を取る前に、松坂あたりの相当な分限者に、養女として貰われる例も、珍しくなかった。勿論、請け出されて、大商人の妾になるのも、出世奉公といえた。

孫福斎が、おこんを女房にしようと思いきめていたとしても、べつにあやしむに足りなかった。

おこんが、斎の座敷にいたのは、四半刻ばかりで、すぐ別の座敷に呼ばれて行った。

そこには、阿波の若い商人三人がいた。陽気で、金ばなれがよく、おこんのほかに、おきし、おしかという女を、それぞれ敵娼にして、はなさなくなった。

にぎやかな伊勢音頭をきかされ乍ら、一人手酌で飲んでいた斎は、いくら催促しても、仲居がおこんを呼んで来てくれぬのに、しだいに腹を立てた。斎は、酒癖がよくなかった。

憤って呶鳴りはじめた斎を、仲居が、なだめすかして、ひとまず、帰そうと、預かっていた脇差を渡したのが、いけなかった。

斎は、いきなりその仲居へ一太刀あびせ、悲鳴をきいてとび込んで来た下男と仲居をも斬り、さらに、奥の間に踏み込んで、油屋のあるじの母親をも、斬り殺した。

その騒動で、阿波商人三人と、おきし、おしか、おこんも、座敷から走り出て来た。斎は、阿波商人の一人を即死させ、一人に重傷を負わせ、おきしも絶命させ、おしかの顔をふた目と見られぬものにした。

かんじんのおこんは、他の召使いたちと逃げて、いのちびろいをした。斎は、鳥羽へ遁走し、十日後に舞い戻って、居候していた藤波家の板間で、切腹して果てた。

その最期は、見事であった、という。

四

闇斎に指名されて敵娼として、座敷に入って来たおかやという女は、二十歳あまりの、眸子の美しい、色白の面高な茶汲みであった。

「ほう、これは、噂通り際立った美しさだな。うむ！」

かたわらに坐ると、闇斎は、その手を把って、撫で乍ら、

「ひとつ、わしが、そなたの生れたところを、当ててみせようかな」

と、云った。

「はい」

「伊勢ではあるまい。もっと南であろう？」

「はい」

おかやは、にこりと、うなずいた。

「志摩も、熊野灘に面した――左様、大王崎あたりかな」

「大王崎に、近うございます」

「ほほう、あたったか。阿呉郡の、なんという村かな？」
「鵜方という村でござりまする」
「御座湾の中にある村じゃな？」
「旦那様は、ようご存じでござりまするな？」
「知って居るとも。わしは、むかしは、廻船問屋をやって居って、熊野灘で大時化をくらって、御座湾へ逃げ込んだこともある」
　闇斎は、いかにも好々爺らしくよそおい乍ら、
「ところで、あの崎志摩から、浜崎、磯部にかけての阿呉郡一帯には、落人村がちらばっていると、きいたが……、そなたの美しい容子をながめると、どうしても、これは、先祖代々の水呑み百姓や漁民ではないようじゃな。由緒ある家柄のように思えるが、どうかな？」
　と、訊ねた。
「いいえ、わたくしの家は、ただの百姓でござりまする」
「かくすな、かくすな。……その貌の気品は、名もない農家からつくられるものではないぞ」
「忝のう存じます」
「どうじゃな、さかのぼれば清和源氏か嵯峨源氏か、それとも村上源氏かな。いや、そこまで、さかのぼらずとも、関ヶ原役あるいは大坂役で滅んだ大名の末裔とか……。当節、その素姓をあきらかにしても、べつだん、公儀のお咎めを蒙ることもあるまい。……これ、白状しなさい」
「旦那様は、こんな茶汲みを、おだてなさるのが、ほんにお上手でござります」
「なんの、おだてて居るのではないぞ。この年になって、廓でもてようなどという料簡はみじんもないわさ。……わしはの、大時化をくらって、御座湾に逃げ込んだ時、きいたことがあるのじ

や。落人村の家は、それぞれ由緒ある家柄ばかりだとな」

「………」

「そうだ、思い出したぞ。元和年間に、長崎奉行をつとめていた村山東庵という傑物が、切支丹の疑いをかけられて、江戸の品川湾の丘で、火あぶりの刑に遭うたが、その一族が、阿呉郡に、かくれひそんだ、ということをきいた。そなたも、故老から、きかされたことはないかな？」

「いいえ、きいたことはございませぬ」

「ふふふ……、もしかすると、そなたは、村山東庵の末裔かも知れぬぞ。東庵は、絶世の美男子であったそうじゃからな」

「とんでもございませぬ。わたくしなど、粟と稗だけで育った、三反百姓のむすめでございまする。そんな立派な家柄なら、女郎になど売られはいたしませぬぞえ」

この時代の農民は、きわめて、悲惨なくらしをしていた。

たとえば——。

田地五反歩ほど持った百姓ならば、一年中寒暑にめげず働きづめに働いて、さいわい水害旱害をまぬがれれば、米七石、麦七石がとれた。

その米の半分を年貢に納め、残りの三石を売って、次の一年間の雑費にあてた。当時の値段で、一石一両——つまり、三両になった。

その三両から、衣類、農具、世帯道具をこしらえ、法事、弔い、嫁取り、聟入りの祝儀などを出す。三度の主食は、麦であるが、麦は早く腹が空くから、一日に一人一升を喰べなくてはならぬ。

家族七人いれば、七石の麦では不足する。また、三両のまかないでは、とうていやってゆけぬ

から、麦も半分は、売ることになる。したがって、粟や稗や芋を主食にする家が多かった。
もし、飢饉に遭うか、病気にでもなると、臨時の物入りで、たちまち、飢えてしまう。銭百文の支出は、百姓にとって、骨髄のあぶらをしぼりとられるほどの苦しさであった。
それが、家康によって、「生かさず殺さず」にされた農民のくらしぶりであった。
「では、そなたの家は、ただの百姓としよう。……どうじゃな、そなたの国に、村山東庵の末裔らしい構えを、いまだとどめて居る家があるかな？」
闇斎は、問うた。
「はあ……？」
おかやは、あいまいな表情になった。
と――。
闇斎の眼光が、急に鋭いものになって、おかやの顔を刺した。
「つまり、志摩に住む隠れ切支丹の長の屋敷だ」
「…………」
おかやの表情が、一変した。
闇斎は、にやりとして、
「そなたも、隠れ切支丹であろうな」
「そ、そんな……」
「かくさずともよい。実はな――」
闇斎は、おかやの耳に口を寄せて、
「わしも、隠れ切支丹なのじゃ」

「……？」

おかやは、警戒の色を滲ませて、闇斎を瞶めかえした。

「わしは、天草の庄屋の一人じゃ。……当世に於ては、日本には、隠れ切支丹の住む土地は、五箇処しかない。天草と生月島と五島と志摩と、それから能登と——」

「……」

「わしは、この五箇処の隠れ切支丹衆を、糸でつなぐ役目をひき受けた。どうしても、志摩の隠れ切支丹の長と、会わねばならぬ。……なんという家か、そなたに、教えてもらわねばならぬ」

「わたくしは、隠れ切支丹ではございませぬ」

「そなた自身は、そう思っているであろう。しかし、そなたは、幼い頃、村の宿老から、水で額に十文字を書いてもらう、お洗いをほどこしてもらった記憶があろう？」

「……」

「あるな？」

「は、はい」

「そのお授け役の家のことを、わしは、きいている」

「……」

「そなたが教えてくれれば、わしは、今日にも、身請して、村へ連れかえってやろう。約束しよう」

長い沈黙があった。

ようやく、おかやが決心して、口をひらこうとした——その時。

闇斎が、なにを察知したか、懐中から、さっと、短銃をひき抜いて、立ち上った。

障子を開けはなちざま、十坪あまりの中庭の縁側近くの蹲踞めがけて、引金を引いた。
男が一人、よろめき出て、地面へのめり伏した。
と——同時に。
樹木や井筒伽藍石や織部燈籠の蔭から、一斉に、覆面をした男たちが、出現した。
それに応えて、闇斎が立つ座敷の左右の部屋からも、酔客とみせかけた男どもが、縁側へ奔り出た。
お目付下条主膳の配下と、佐賀闇斎の手の者との対決が、いま、はじめて、なされようとした。

鳥羽秘聞

一

その宵——。
古市の三大妓楼のひとつ、油屋の屋内外でくりひろげられた血みどろの集団決闘は、惨烈をきわめ、寛政八年の孫福斎の刃傷事件とは、とうてい比べもならなかった。
しかし——。
孫福斎の刃傷事件が、『伊勢音頭恋寝刃』という芝居になって、日本中に知られたのにひきかえ、このたびの異変は、世間の噂になることなく、闇の中に葬られた。
古市界隈で、ひそかに、
「油屋でまた、なにか、大変な騒動があったらしい」

と、ささやかれたが、誰も、真相をさぐる由もなかった。
油屋の使用人たちも、その宵登楼していた客連中も、かたく口をつぐんで、目撃したことを、一語もしゃべらなかったからである。
かたく口どめされたことは、疑うべくもなかった。
かりに、目撃者たちが、その厳命を破ろうとしても、争闘の光景を、口にするのが、もどかしく、聞き手を納得させることはできなかったであろう。
速影がかすめ、白煙筒が炸裂し、手裏剣が飛び、銃声がとどろいたが、絶鳴は全くあがらず、争闘が終った時、死体も負傷者も、かき消えていたのである。なお、店の使用人も登楼客も、一人も傷つかなかった。
なにがなんだか、わからないうちに、静寂がもどり、目撃者一同は、伊勢音頭の踊りの間に、集合させられた。
一人の武士が、配下数名をしたがえて、入って来て、舞台に上った。
眦が切れ、鼻梁の高い、堂々たる美丈夫であった。
「身共は、公儀目付・下条主膳である」
そう名のって、
「今宵、当楼で起った異変については、一切口外無用。たとえ親兄弟に対しても、告げてはならぬ。もし、しゃべったことが判ったならば、その者の生命はない。公儀目付の身共が申し渡すのである。よいな！」
その厳命をのこして、さっと去って行った。
一同は、狐狸にでも化かされたような思いであった。修羅場裡に、幾人かが斃れたに相違なか

った。しかし、死傷者は、ことごとくはこび去られ、争闘の形跡が、柱や襖（ふすま）や、石燈籠や地面に、残されていただけである。

油屋の主人は、大安（旅籠）（はたご）から、そこの番頭に案内させて、登楼して来た佐賀闇斎という老人が、襲撃されたのだ、とほぼ推測できた。しかし、殺されたか、遁走したか、いずれとも判らなかった。その姿は、かき消えてしまっていた。

敵娼（あいかた）になった茶汲みのおかやを、そっと呼んで、訊ねてみたが、彼女自身も、どうなったか見とどけてはいなかった。

公儀お目付、といえば、鬼よりも恐ろしい存在であった。

「忘れるに越したことはない」

主人は、使用人たちに吩（い）いきかせたことだった。

二

その夜、眠狂四郎は、何処で睡（ねむ）ったか、淡々（あわあわ）と明けそめた時刻には、伊勢と志摩との国境を越えていた。

美しく植えられて、大きく育った檜（ひのき）の密林を横切っている街道であった。

密林が切れた地点から、志摩国になった。

ゆるやかな斜面に、合歓木（ねむのき）がひろがっていた。これも、栽植されたものであろう。

またしても――。

合歓木の蔭から、すっと出現して、狂四郎の行手をさえぎったのは、竜堂寺鉄馬であった。

「眠殿は、昨夜、古市の女郎屋油屋で起った騒動を、ご存じござるまい」

「………」
「お目付下条主膳の配下が、登楼中の佐賀闇斎を、夜襲いたした。ところが、闇斎の方も、ぬかりはなく、手の者を身辺に伏せておいて、邀え撃ち申した」
「闇斎は、殺されたか？」
「どうやら、悪運つよく生きのびた模様。ただ、互いに、手練者の部下を、多く喪ったのは、こちらの好都合と申すもの」
それをきくと、狂四郎は、うすら笑った。
「お主が、闇斎が油屋にいることを、下条主膳に、密報して、双方を食み合せる工作をしたのではないのか」
「ははは……。それは、まあどうでもよろしいことでござる。ところで、このさき、数町の地域に、臨時の関所が設けられて居り申す。通行止めでござる」
「…………？」
「鳥羽城主稲垣摂津守の御国御前が、小浜の湊を見下ろす岬の台地で、野点を催される由——」
「間道をさがしてある、とでもいうのか？」
「なんの、貴殿には、そのまま、関所を通って頂きたい」
「どういうのだ？」
「眠狂四郎と名のれば、通してくれるように、通告しておき申した」
「お主、また、何か企むところがあるようだな」
「そのお疑いはご尤も——。べつに、身に危険をおよぼすような仕掛けがなされている次第ではござらぬゆえ、ご安心のほどを……」

竜堂寺鉄馬は、そう云いのこして、すぐ姿をかくした。
——面妖(おか)しな男だ。
武部仙十郎から遣わされて来た刺客に相違ない、と看て取りつつも、狂四郎は、この男に対して、すこしも嫌悪をおぼえなかった。いや、好意らしい気持もわいていた。
いずれにしても、つきまとって来る多勢の敵の中では、斬りたくない男であった。
三町あまり辿(たど)って、朝霧の中に、うっすらと海原が彼方(かなた)にひろがる地点に出ると、そこに、はたして、臨時の関所が、白い丸太の冠木門を浮きあげていた。
狂四郎は、ふところ手のまま、ゆっくりと近づいた。
番士が、大声をあげた。
「正午まで、街道は、通行止めでござるゆえ、ひきかえして、待たれい」
狂四郎は、無表情で、
「眠狂四郎と名のれば、通してくれる、と教えてくれた男がいたので、足を停めずに参った」
と、云った。
すると、番士は、あらかじめ、その旨を申しつけられていたとみえて、
「ご貴殿が、眠狂四郎殿?!」
と、あらためて、異相を視なおした。
べつの容姿を想像していたものであったろう。
番士は、あわただしく、彼方へ——幔幕(まんまく)をめぐらした野点場へ、奔って行ったが、すぐにひきかえして来た。
「ご案内つかまつる」

幔幕の中は、芝の平地になって居り、緋毛氈(ひもうせん)が敷き延べてあった。
屛風(びょうぶ)をまわした内に、長柄傘が立ててあった。

狂四郎は、屛風わきに、座を示されて、

「わたしは、ただの通行人ゆえ、ここにとどめ置かれるおぼえはないが……」

と、云った。

「ご指示でござる」

「稲垣侯の御国御前の、か？」

「左様でござる」

大名は、正妻を江戸屋敷に置き、准妻を国許(くにもと)に置いた。准妻は、御国御前と称ばれ、いわゆるお手つきの側妾(そくしょう)とはちがって、正妻と対等の位とみなされていた。

尤も、小さな大名は、そうした格式を持った准妻を、国許には置いていなかった。

稲垣家は、三万石の小大名である。譜代ではあるが、さしたる家門ではない。

その先祖は、伊勢国の住人であった。文明年間、三州牛窪(うしくぼ)に移ったが、赫々(かっかく)たる武功を史上にのこした者は一人もいなかった。平右衛門長茂の代になって、それまで牧野右馬亮(うまのすけ)康成の老臣であったのを辞めて、徳川家の家人となった。下総(しもうさ)国に、三千石をもらっていたが、長茂が逝(ゆ)く時は、上州伊勢崎で一万石を領していた。

その嫡子摂津守重綱が、元和年間に大坂の城番になったことが、記録にとどめられているぐらいで、きわめて目立たない小大名であった。鳥羽城主になったのは、享保(きょうほう)年間である。

——御国御前を置くほどの大名ではないが……？

疑念を抱き乍ら、狂四郎は、待ってみることにした。

行列が、そこへ到着したのは、それから約半刻後——朝陽が眩しく、海原を照らして、岬の景色を鮮やかなものにした頃あいであった。
かつぎ込まれた打揚腰黒の乗物が、狂四郎の面前で据えられた。
立ち現われたのは、裾より褄にかけて山水の模様を描いてあるが、ごく地味な地黒の衣裳に、透綾の被布をまとった女性で、顔は頭巾で包んで、目ばかりあらわしていた。
その年歯のほどは、しずしずと歩む肢態から、推測するだけであった。
——三十に近かろう。
狂四郎は、そう看てとった。

三

やがて、腰元が、狂四郎を、屏風の内に、誘った。
野点の道具は、そろっていたが、ごく簡素なしつらいで、松坂あたりの商人の方が、もっと派手な野点をやるに相違ない、と思われた。
客は、他に一人もいなかった。
馳走といえば、東にひらけた海景色だけであった。
この小浜は、鳥羽湾の北西部にあたり、半島状の頸部にあたっていた。前方に、答志島が、浮島その他の小島をはべらせて、岬との間の水道に、激しい潮流の白い波頭を、無数にちらばせていた。
初夏の風が、潮騒を運んで来ている。
狂四郎は、端然と正坐した御国御前に、かるく頭を下げてから、

「この素浪人を、風流の席に招かれたのは、なにかの存念があってのことと存ずる。うかがいたい」

と、訊ねた。

「一服、進ぜましょう」

御国御前は、返辞にならぬ返辞をした。

「作法を心得ぬ者と、お思い頂こう」

しかし、御国御前は、かまわず、点前(てまえ)をした。

膝(ひざ)の前に、黒茶碗をすすめられて、狂四郎は、やむなく、手に把った。

黙ってそれを返すと、御国御前は、もう一服いかが、とすすめた。狂四郎は、ことわった。

御国御前は、海へ向けて眼眸(まなざし)を置き、

「さる御仁の報(しら)せにより、其許(そこもと)が、この志摩国に、なにか重大な目的をもって、入って参られた由、きき及びました」

と、云った。

狂四郎は、無言で、瞶めかえしている。

「其許は、無数の人命を断ち、多くの女人を犯した不敵者とか……、当家としては、そのような者を、みだりに入国させるわけには参りませぬ。とは申すものの、御老中水野越州様のお使者が、黙許されるように、と申されるゆえ、ひとつだけ条件をつけて、許しまする」

「………………」

「その条件と申すのは——」

御国御前は、そこでいったん言葉を切って、はじめて、狂四郎へ視線を移した。

「其許の無頼の行状を、ただいま、この場にて、役立てて欲しゅう存じます」
「どういうことをやれ、と云われる？」
「わたくしを、なぶりものにして下さるまいか？」
御国御前は、途方もないことを、狂四郎に求めた。
「なぶりものに？」
「左様です。この肌をぞんぶんにもてあそんで、わたくしを狂おしいばかりに身もだえさせて欲しい」
「公然と姦夫姦婦になることを、所望される理由を、うかがおう」
いつか、どこかで、これとそっくりの驕慢な身分のある女性から、全く同じ求めかたをされたような経験が、曽てあった——そんな意識をわかせ乍ら、狂四郎は、頭巾の蔭の切長な美しい双眸へ、視線を合わせた。
「当家の御前には、ほどなく、ここへおみえになります」
「…………」
「わたくしが其許になぶられるさまを、御前にお見せいたしたく存じます」
「稲垣家のご当代は、老いぼれて、もはや、男子として不能になっている、といわれる？」
「ちがいまする。御前は、いまだ十六歳でありますれば……」
「たわけた話だ。元服したばかりの若者に、淫靡な景色をのぞき視させて、いったい、どうしようというのか？」
「御前は、野鳥の餌づけや、卵をかえさせることにばかり夢中になられて、城主としてのご自覚に乏しく、ご正室をお迎えになることをおすすめしても、すこしも耳をかしては下さいませぬ。

……それで、わたくしが、思いきって――」

「失礼乍ら、貴女(あなた)は、すでに三十路(みそじ)にかかっておいでのようだ。十六歳の城主の御国御前としては、いささか、年を取りすぎておいでらしい」

「これは、元和の頃よりの稲垣家の慣習になって居ります。元服なされたご嫡子重綱様に、十歳年上の女子を、御国御前として伽(とぎ)をするよう、始祖の長茂様がおきめになり、それが、代々の慣習になりました。……わたくしは、一昨年までは、伊勢神宮の巫女(みこ)をつとめて居り、そのために婚期を逸して居りましたが、望まれて当家の御国御前となりました。なれど、御前には、いまも申した通り、女子に対する情感をみじんも動かそうとされませぬ。……御前を男子にしてさしあげるのは、わたくしのつとめでありますれば、かような非常の手段(てだて)も、やむを得ませぬ」

おのれの肌を、無頼の浪人者にもてあそばせて、それを若い当主にのぞき視させて春情を催させる――この計画は、大真面目であればあるだけ、滑稽感をともなっている。

――罠(わな)かも知れぬ。

その疑惑もあった。

四

狂四郎は、しばらく沈黙を置いてから、

「貴女は、もはや、未通女(むすめ)ではなかろう。いや、すでに、充分、男の味をおぼえて居るに相違ない」

と、云った。

御国御前は、俯向(うつむ)いて、禰宜(ねぎ)の一人と、数年間、関係があった旨を、自白した。

「成程、そうでなければ、このような企てを思いつきはすまい。……貴女は、どうやら、この一両年、男に飢えていた。城主に春情を催させる、という大義名分をもって、ひとつ思いきり、身もだえしてみたい、と思いついた。これは、貴女が淫婦であることの証(あかし)だ」
「いいえ、そんな……」
「ちがうとは、云わせぬ。男の味をおぼえた女が、身もだえしたくなるのはあたりまえのことだ。淫乱にならぬ例外はない。実際に行う、行わぬは別としてだ。……名分が立てば、実父であれ、兄弟であれ、肌身を許すのが、女という生きものだ」
狂四郎が、そう云いきった時、人声と跫音(あしおと)が近づいて来た。
「わしに、どうせよと申すのだ？」
少年の声音が、きこえた。
腰元のひそやかなささやきがして、
「なに、わしに、この屏風の中を、のぞけ、と申すのか？　何故だ？　どうして、のぞかねばならぬのだ？」
しきりにいぶかる声音が、高かった。
と——。
御国御前が、すばやく、狂四郎のそばへにじり寄って、
「おねがい申します！」
と、すがりついて来た。
狂四郎は、女の膝から、衣裳の前を左右に分けた。
白綸子(りんず)の腰巻が、狂四郎の手をかりるまでもなく、下肢から、滑り落ちた。

女の顔は、狂四郎の腕の中で仰向き、目蓋(まぶた)を閉じた。

朝陽の中に、下腹を匐(は)う黒い茂みが浮きあがった。

一瞬――。

「あっ！」

狂四郎は、女の肢体をそこに横たえさせると、非常な素早さで、動いた。

悲鳴をあげて、遁(に)げようとする少年を、つかまえた狂四郎は、ひきずるようにして、女のそばへもどった。

「ご城主――、お手前様に男になってもらおうと、この御国御前が、羞恥(しゅうち)をすてて、このざまをさらしている。契られるがよろしかろう」

「な、なにをする！　は、はなせ！」

少年は、必死にもがいた。

「お手前様の女房ではないか。抱くのに、なんの不都合があろう。……男であるからには――」

そこまで、云いかけて、狂四郎は、はっとなった。

自身の言葉によって、ある直感が、脳裡にひらめいたのである。

狂四郎は、矢庭に、その場へ、若い鳥羽城主をねじ伏せると、袴(はかま)の裾から、股間(こかん)へ、片手をさぐり入れた。

次の瞬間、狂四郎は、すっと、はなれた。

「そうであったか。これでは、女を抱けぬ道理だ」

半刻後――。

狂四郎は、鳥羽城下を通り抜けて、南へ向う山道をひろっていた。
「眠殿、如何(いかが)でござったか？」
合歓木の蔭から、竜堂寺鉄馬の声が、問うた。
「お主、鳥羽城主が半陰陽(ふたなり)であることを知っていて、小細工をしたのか？」
「ではなかろうか、という噂があるので、眠殿に、たしかめて頂いたのでござる」
その返辞に、狂四郎は、苦笑した。
「公儀の権威も失われたものだ。城主が双成り(ふたなり)であることを、たしかめることさえも、できなくなっているとは――」
「それを知ったおかげで、この志摩国に於(お)ける貴殿の行動は、きわめて自由なものになり申したな」
「おい！」
狂四郎は、合歓木の蔭へ、鋭い視線を送った。
「わたしにつきまとうのは、ここまでにしてもらおう。これ以上、つきまとうと、お主の生命を、もらわねばならなくなる。……二度とは云わぬ。つきまとうな！」

磯(いそ)館(やかた)

一

眠狂四郎は、眩しい陽盛りの中を、鳥羽から、まっすぐに、南へ下った。

磯部村上之郷という里に降りて、村の中央の三叉辻に出た。

左折すれば、阿呉郡に入り、目ざす御座湾内の賢島は、指呼の間にあった。右折すれば、逢坂峠を越えて、宇治内宮に至る。直進すれば、五箇所湾へ出る。

狂四郎は、鍬をかついだ農夫が一人、近づいて来たのを、呼びとめた。

「ここから、阿呉浦まで、どのくらいある？」

「へえ……、三里少々ございまする」

「地下の者のくせに、どうして距離を知らぬ？」

「……へい」

「阿呉浦までは、二里足らずだ」

薄ら笑った狂四郎めがけて、農夫は、鍬の柄から、白刃を抜きざま、斬りつけて来た。

抜く手もみせず、その胴を薙いでおいて、狂四郎は、辻を右折した。

目的地とは反対方角の逢坂峠へ向って、痩身をはこんで行く。

尾行して来る敵がたに、こちらの目的地は、逢坂山と合点させるためであった。

理由があった。

逢坂山には、頂上近くに、水穴・風穴と呼ばれる二つの洞があった。

水穴は、滝祭窩と名づけられ、奇石重畳して、洞門は、猛獣がくゎっと口を開いたさまに似ていた。奥から、清流が淙々と奔出して来ていた。暗黒の奥に、瀑布があるのであった。

風穴は、水穴と反対側の谷にあり、岩石の状は水穴とほぼ同じで、北面に向って口をひらいていた。入ると、洞中に、いくつかの支洞があり、あるいは狭く、あるいは広く、延長三百余尺といわれていた。鍾乳洞にまぎれもなかった。

地下人たちは、水穴・風穴に、さまざまな迷妄の伝説をつくって居り、おそれて、洞内に入る者はなかった。

いかにも、太閤遺産――百万両の金銀を、隠匿するにふさわしい場所であった。

狂四郎は、尾けて来る敵がたに、

「そうか！　豊臣家軍用金は、大坂城から、この志摩の逢坂山の水穴・風穴に、はこばれたのだな」

そう思い込ませようとしたのである。

はたして――。

恵利原という部落を過ぎた頃、狂四郎は、敵の気配が後方にあるのを、察知した。

こちらは、尾行を断つ態度を示さねばならなかった。

峠の頂上まで一町の地点で、狂四郎は、さっと、密林の中に、身をひそめた。

あとを追って来たのは、修験者に化けた十数名であった。

狂四郎が姿を消した、と知るや、たちまち、正体をむき出して、そこへ殺到して来た。

錫杖に仕込んだ白刃を抜きはなつ者、法螺にひそめた手裏剣をつかみしめる者、おろした笈から、短銃を把り出す者――それぞれの得物に、ものいわせようと、密林へ踏み込んだ。

すでに、陽は、西の山の端に落ちかかった頃合であった。

躍起の捜索にもかかわらず、狂四郎の姿は、見当らなかった。

空が残照に燃えはじめて、追跡者は、いよいよ、あせった。

狂四郎が、あらかじめ、この山中で、身をひそめる場所を、調べておいたことは、明白であった。

「ここらあたりから、水穴か風穴に至る抜け穴があるのではないか？」

一人が、そう云い、他の者たちも、

——あるいは？

と、うなずいた。

ついに、山は宵闇に包まれた。

一同は、捜索をうちきって、水穴・風穴に向って、急ごうとした。

道に出て、先頭の者が、ものの十歩も進まぬところで、闇に滲む黒影を見わけて、「いたぞ！」と叫ぼうとしたが、叫ぶいとまもなく、唐竹割りに、斬り下げられた。

常ならば、そのまま、敵が襲いかかって来るのを待ってから、身を翻転させつつ、一人また一人と斃してゆく狂四郎であったが、今宵ばかりは、初太刀を放った刹那から、疾風を起して、息つく間もない凄まじい攻撃にうって出た。

暗夜とはいえ、刺客たちは、闇に利く目をそなえていたのである。こちらが動きを、一瞬でも停止すれば、手裏剣と短銃の狙い撃ちをあびることになる。

迅業から迅業に継続させて、あっという間に、闘いを終らせる——速決の一閃必殺戦法だけが、おのれを救う道であった。

もし、敵がたが、多勢と得物の利を、最大限に発揮すべく、路面上に一列になり、その間隔を充分にとるだけの、とっさの余裕ある思慮を働かせていたならば、狂四郎といえども、無傷のまま、無想正宗を一閃毎に衂らせることはできなかったであろう。

不意を衝かれた余裕のなさで、唯一人を討ちとる常法通りに、包囲の陣を布こうとしたところに、敵がたの誤算があった。

二

奔る音、躍る音、そして、骨と肉が断たれる音が、つづけさまに、起った。
流石は、えらばれた刺客だけあって、生命を喪う瞬間、微かな呻きひとつ残さなかった。
一陣の旋風が吹きぬけるに似て、疾駆するのと斬るのを一如のものにして、敵陣を突破した狂四郎が、一瞬、動きを止めた――それを狙って、銃声がとどろいた。
身を沈めた狂四郎は、左腕上膊を擦過した傷の痛みをおぼえつつ、次に飛来する弾丸か手裏剣に、備えた。
「眠狂四郎！」
闇の中から、咆哮するような高声が、ひびいた。
「生き残ったのは、身共一人だ。尋常の一騎打ちせい！」
「…………」
「公儀御先手組・神宮寺要」
「下条主膳の配下に、御先手が入っているのか？」
旗本番方のうち、御先手といえば、将軍出陣の際、その先鋒をつとめる役であった。
弓組と鉄砲組があり、平時は用がないので、その組頭が火付盗賊改めを兼ねた。加役という言葉は、それから、起っている。
火付盗賊改めを兼ねるので、暴動異変が起った場合、まず、最初に警備を命じられるのが、定例であった。
いわば、帝国陸軍の憲兵のような存在であり、武士はもとより町人も職人も、御先手組火付盗

賊改めを、鬼のようにおそれた。

「若年寄小笠原相模守様の密命により、お目付支配の隠密と相成った。……眠狂四郎、勝負っ！」

「一人だけ生き残ったのであれば、江戸へ帰って、若年寄に報告する任務を果したらどうだ？」

「おめおめと、敗北を報告する役目など、死んでもことわる」

「報告するのは、わたしに敗北したことではない。下条主膳が、若年寄をも裏切ろうとしている、ということだ」

「その手には乗らぬぞ」

「それでは、こう云いかえて報告するがよかろう。若年寄が、佐賀閑斎を味方につけたことを、下条主膳はすでに看破いたして居ります、と」

返辞の代りに、第二弾がとどろいた。

狂四郎は、しかし、すでに、その地点に伏せてはいなかった。

「眠狂四郎！　勝負せい！　勝負っ！」

神宮寺要は、躍起になって、叫んだ。

その時、近くの場所から、

「神宮寺、あきらめろ！　彼奴（きゃっ）は、もう、遠くへ遁（に）げたに相違ない」

と、なだめる声がひびいた。

生き残ったのは、神宮寺要一人だけではなかった。

とたん、

「神宮寺要、この眠狂四郎をだまそうとしても、そうは問屋がおろさぬ」

まっ向から、その言葉があびせられた。

「おのれっ！」

「くそっ！」

二人の刺客は、猛然と、闇の中にひそむのはここか、と見当をつけざま、短銃の引金を引き、手裏剣を放った。

次の刹那、神宮寺要は袈裟（けさ）がけに斬り下げられ、もう一人は胴を薙（な）ぎ払われて、地面へ崩れ落ちた。

夜が明けそめた頃合、狂四郎は、上之郷、鵜方（うかた）の村を通り抜けて、御座湾の浜辺に立っていた。

御座湾は、崎志摩と呼ばれる半島に抱き込まれたようなかたちになり、熊野灘の荒浪を避けて、湖水のような静かな形勝を浮きあげていた。

湾内には、いくつかの小さな島が、点在していたが、賢島はそのひとつに相違なかった。

狂四郎が立った浜辺は、御座湾でも、最も奥の入江であった。

小さな岬（みさき）や島嶼（とうしょ）や岩礁（がんしょう）が、海面をさえぎり、御座湾でもさらに、視界がせばまった場所のようであった。

左右は、鬱蒼（うっそう）たる石崖（いしがけ）が屏風状に渚（なぎさ）から切り立ち、白砂を撫でる小波（さざなみ）は、音もたてぬひそやかさであった。

漁師の小屋のある浜辺を、わざと避けたので、人気のない此処（ここ）に佇立（ちょりつ）しただけでは、海を渡るすべはなかった。

しかし、この男の生来の直感力は、秀れていた、といえる。

小さな岬をまわって、こちらへ、漕ぎ進められて来る小舟が、見出された。
「吉五郎だな」
狂四郎は、呟いた。
漕ぎ手がそれで、舳先にうずくまる人影は、千華に相違なかった。

三

小舟は、渚に着いた。
「どうぞ、お乗んなすって——」
吉五郎は、あらかじめ、この浜辺で落ち合う約束でもしていたように、狂四郎を促した。
狂四郎もまた、当然のことのように、無表情で、舟の人となった。
千華が、黙って、ふかぶかと頭を下げた。感謝の意を、その眸子に湛えていた。
入江から出た時、狂四郎は、はじめて、口をひらいた。
「どこから、舟で来たのだ？」
「へい。二見浦から、ぐるっと、まわって参りました。昼間は、あぶないので、人目のつかぬ断崖下の岩蔭にかくれて居りましてね、夜だけ、漕いで参りましたが、……ちょうど、いいあんばいに、旦那と、ぶっつかったもので——、これも、このお娘御の一念が神に通じたのでござんしょうか」
「安堵するのは、まだ早かろう。どの岬の突っ鼻から、敵が、遠眼鏡で、われわれを眺めているかも知れぬ。……勝負は、これからだ」
「旦那と一緒なら、一蓮托生、死んでも悔いはありませんや」

「いや、ここまで来て、犬死するのは、つまらぬ。頂くものは、頂くとしよう」
「それアもう……、ここまでの道中、旦那が、どんなにご苦労なすったか、想像しただけでも、よくぞ生きていなすった、と思いまさ」
「おい、吉五郎、あの釣舟に、賢島は、どれか、たずねてみろ」
「へい、合点で——」
漁師に指さされた島へ向って、吉五郎は、舳先を転じた。
「千華、あの島にある磯館という家は、どうやら、隠れ切支丹の長らしい」
狂四郎が、告げた。
「まことでありましょうか？」
「うむ。おそらく、まちがいはあるまい」
「村山東庵父子も、熱烈な切支丹信者であった、とときき及びます。東庵父子が、豊臣秀頼公からおあずかりした軍用金を、きっと、その館にかくしたに相違ありませぬ」
「そう断定もできまいが、秘文にあった磯館の女神像とは、まちがいなく、聖母まりあであろう」
「ああ！」
千華は、胸で十字を切った。
その島の南端の台地に、古びた屋敷が、いくつかの屋根を重ねたように、どっしりとした構えを、浮きたたせていた。
台地から、えぐりとられたように、浜辺まで、絶壁となり、館は小規模な城郭ともみえた。
小舟は、その絶壁に沿うてまわった。
波にあらわれる石段が、切通しの坂になって、館内へ通じていた。

小舟を、そこに着ける吉五郎は、油断のない視線を、海面に配った。
「追手らしい舟影は、見当りません」
「蠅は、いくらはらっても、食物がある限り、また、たかって来る」
狂四郎は、べつに、警戒もせず、石段をのぼって行った。
石段をのぼりきったところに、深い濠がめぐらされ、桔橋があげられたままになっていた。
棟門は、古く、岩乗で、堂々としていた。
吊ってある鎖が錆びついているのをみとめて、狂四郎は、絶えておろされたことがないのを知った。
「これア、相当な要心堅固ぶりでござんすねえ」
吉五郎も、小首をかしげた。
「どうやって、この桔橋を、おろさせるかだな」
「裏手へまわってみましょうか？」
「いや、無理に押し入ったり、忍び込んだりする屋敷ではない。むこうに門扉をひらかせなければ、用件ははたせまい」
狂四郎は、ちょっと思案していたが、千華をふりかえった。
「そなたに、元の貌にもどってもらおうか」
吉五郎と千華は、乞食姿からは還っていたが、どう眺めても、土のにおいのしみついた五十年配の百姓夫婦に化けていた。
「あっしが、きれいにしてさしあげます」
吉五郎は、千華をともなって、石段を降りて行った。

狂四郎は、二人が戻って来るあいだ、黙然として、そこに立っていた。案内を乞おうともしなかった。

門内に、人の気配がうごくのを、察知しても、狂四郎の口はひらかなかった。

やがて、石段をのぼって来た千華は、白磁さながらの肌をとりもどし、名工の手に成ったような、優美な彫のふかい端整な美貌を、惜しみなく朝陽にさらしていた。

狂四郎は、門内から、いくつかの視線が、千華にそそがれるのを、感じ取り乍ら、はじめて、案内を乞うた。

「これなる異邦の女人が、御当家の御主人に、必死の願いをすべく、はるばる罷り越した、とお思い頂こう」

応ずる声は、なかった。

もの四半刻も、待ったろうか。

急に、轣る音がひびいて、拮橋が、ゆっくりとおろされて来た。

四

——慶長以前の構えのようだった。

拮橋を渡って、棟門をくぐった狂四郎は、そう看た。

館は、まさしく、城砦のつくりであった。門から母屋の玄関まで、石垣が枡形をつくって、砂利道を迂回させていたし、塗籠の築地の内側は、倉をならべた多聞塀になっていた。

二つの木戸が、さえぎり、木戸脇には、蔀櫓ともみえる建物があった。

狂四郎たちを案内したのは、手織木綿の布子をつけた中年の男であったが、物腰に、武芸のた

しなみがあるように感じられた。
通された母屋の書院は、板敷きで、花頭窓の障子だけが、ま新しく、壁も天井も柱も、床の間も、すべてがくすんだ時代色をおびて、幾百年のむかしから、この島に、隠然として居を構え、時の政権の盛衰興亡とかかわりなく、家門を守りつづけた威厳が、来訪者の胸に迫った。
現われた主人は、しかし、古びた館にふさわしからぬ、三十前後の、若い眉目の持主であった。
「当家あるじ治左衛門にございます」
鄭重な、決して冷やかではない挨拶を受けて、狂四郎は、自分は公儀とはなんのかかわりのない、市井無頼の素浪人である旨をことわり、
「これは、安南より密入国して参った娘にて、千華と申す」
と、告げた。
「当家に、どのような御用がおありなので——？」
「まず、これを、ごらん頂こう」
狂四郎は、一枚の詩箋を、さし出した。
『輪廻生死、空蟬に魂を入れたくば、志摩国賢島なる磯館の女神像に祈るべし』
黙読した治左衛門は、怪訝の面持で、狂四郎と千華を、視かえした。
狂四郎は、この詩箋を入手した経緯を、包まず、語った。
きき了えた治左衛門は、
「すると、当家の屋敷内に、太閤秀吉公の遺された金銀が、隠匿されてある、と申されますので——？」
「か、どうかは、判らぬが、この詩箋の文句を信じるとすれば、御当家所蔵の女神像に祈らせて

頂くことになる」

「女神像と申されても、そのような掛物など、所蔵いたして居りませぬが……」

「御当家に、聖母まりあ像が、秘蔵されているとしても、べつに、ふしぎではあるまい、と存ずる」

狂四郎は、ずばりと云ってのけた。

流石に、治左衛門は、さっと顔色を変えた。

狂四郎は、つづけた。

「ここへ参る途中、飼い牛を殺された農夫が、何やら祈りの言葉を、口にするのを、耳にいたした。それは、あきらかに、切支丹信徒の唱言（おらしょ）であった。……農夫が、この賢島の住民ときけば、ご当家が切支丹宗門の長（おさ）であると、およその見当がつくと申すもの」

「…………」

「こちらは、公儀法度（はっと）を犯して、密入国して来た娘を、ともなった者。お手前が隠れ切支丹であったことは、かえって、さいわいであった、として、願いを叶（かな）えられる希望を抱いて居る。……この娘を、女神像に祈らせて頂けまいか。おたのみ申す」

聖母像

一

長い沈黙が、書院を占めていた。

眠狂四郎は、腕を組んで、待っている。こうした場合、対手の返辞を待つ忍耐には、馴れている男であった。

対手がたが、ひたがくしにしている秘密を、単刀直入にあばいておいて、さて、どう出て来るか、冷然として待つ。これが、狂四郎の最も得意とするやり口であった。

この磯館が、隠れ切支丹の長であることを、ずばりとあばいた狂四郎の舌頭の鋭さと呼吸の巧みさは、あるじ治左衛門に、とっさにごまかす余地を与えなかった。

沈黙は、それが事実であることを、みとめる結果となった。

尤も——。

隠れ切支丹とはいえ、幕府初期に於て、言語に絶する迫害と拷問と殺戮に耐えて、宣教師の教えるがままに、天界へ行けると信じて、殉教の道をえらんだような純粋な信徒など、もはや、いまでは、一人もいないに相違ない。

拷問や斬首や磔刑などに遭うて、その痛苦を逆に法悦にすりかえて、疑いもなく天国と煉獄の存在を感得していた二百年前の信仰心は、すでに地を払っている、と思われる。

当代の隠れ切支丹は、もはや、それを切支丹とは称べないほど、いちじるしい変貌をとげて、仏教や神道や地下迷信と混り合った、奇妙な行事的な色彩の濃いものになっていることは、想像に難くない。

げんに——。

文化年間に、天草各村から、「宗門心得違い」の容疑をかけられた者が、ぞくぞくと現われて、騒動になったが、五千余の容疑者のうち、自分が、切支丹信徒である自覚を持っている者は、ほとんど、いなかった、という。

牛を殺して、その肉を喰べるとか、魚を霊前に供えるとか、先祖伝来の異仏本尊の掛物に初穂を供えるとか、一年を通じて、朔日から七日目毎に、種を蒔かず、女は針を取らぬとか、死人を埋葬する時、東向きにするとか——そのような慣習を、百姓たちは、ただ先祖から伝えられたものとして、くりかえしているに過ぎなかった。

吟味を受けて——。

でうす様というのは、お天道様のことだと思って、毎朝、天を拝んでいた、とある百姓は、こたえたし、またある漁民は、博奕好きで、ある者から、「身はさんたまるや様にあずけます、あんめんじんす」と唱えれば、必ず勝つ、と教えられて、せっせと唱えたが、一向にききめがないので、十年このかた唱えもしない、とこたえている。

この志摩国の隠れ切支丹も、たぶん、天草のそれと、大同小異であろう。

ただ——。

この磯館のあるじ治左衛門は、細胞組織の頭であり、すべての行事をつかさどる伴天連代理であるからには、はっきりと、切支丹信仰心を持っているに相違ない。

こちらが、千華を、素顔に還して、門前に立たせると、その貌から、さんたまりあ像を連想して、桔橋をおろしたのが、その証左である。

ようやく——。

苦渋の表情を解いた治左衛門が、口をひらこうとした——その折であった。

あわただしく、庭へ駆け込んで来た一人の若者が、

「お館様、見馴れぬ舟が、八艘も、島へ進んで参りますぞな」

と、告げた。

「遠目鏡で、乗り手を、眺めるがよい」
「わたしに、眺めさせて頂こう。たぶん、わたしのあとを追って来た者と思われる」
狂四郎が、座を立った。
「騒動に相成りますか？」
「迷惑をおかけすることになるかも知れぬ」
狂四郎が案内されたのは、隠し櫓(やぐら)とでもいうべき、多聞塀端の高処(たかみ)であった。
美しく凪(な)いだ海面を、八艘の舟が、横列に竝(なら)んで、すべって来ていた。
遠目鏡を目にあてた狂四郎は、右端の舟の舳先に、佐賀闇斎の顔を、みとめた。
「あれは、やはり、貴方がたの追手なので――？」
「われわれと同様、太閤遺産を狙っている者の一人。暹羅(シャムロ)からやって来た、山田長政の後裔(こうえい)と称する男だ」
「どうなされます？」
「一足さきにやって来たというだけで、われわれの方に、味方してくれ、とたのむのは、いささか虫がよすぎるようだ」
「これは、いいお言葉でございます。……ひとつだけ、うかがっておきますが、この安南のお娘御と、暹羅の山田長政の後裔殿とやらと、いずれに、名分があると、お考えでございましょう」
「娘の方に肩入れしているわたしが、こちらに分際があると云うのは、当然だが、贔負目(ひいきめ)ではなく、我欲の旺盛(おうせい)さは、むこうがたにある、と思って頂こう」
「お娘御が、秀吉公の金銀を入手されたならば、どう相成りましょう？」
「南方の諸国にちらばって居る日本人町の面々が、軍団を編んで、母国へ押し寄せ、開国を迫る

「判りました」
——その軍用金に、あてられるはずだ」

二

賢島めざして、漕ぎ寄せられる八艘の舟には、それぞれ、三人ずつ乗り組んでいた。
そして、いずれの手にも、鉄砲が握りしめられていた。その鉄砲は、三匁玉筒とか二匁五分玉筒のような古めかしい種子島（たねがしま）銃ではなかった。阿蘭陀製の燧石（ひうちいし）銃——当時、欧羅巴（ヨーロッパ）で、ナポレオン型と称されている、最も新式の鉄砲であった。
この二十四梃（ちょう）の燧石銃の前には、いかに眠狂四郎といえども、沈黙して、降伏せざるを得まい、と闇斎は、満々たる自信で胸を張っていた。
闇斎は、島の樹木、建物がこまかく見分けられる距離に迫ると、片手を挙げて合図した。
「よし！　一度、おどしてみしょう」
二十四梃の銃口から、一斉に、火が噴き、轟音（ごうおん）がその威力のほどを示した。
闇斎は、にやりとした。
隠れ切支丹の磯館に、よもや、反抗の武器が具備されているとは、思われなかった。敵は、眠狂四郎只一人と考えてよかった。
磯館の主人が、眠狂四郎に味方する理由はないのである。狂四郎が説得しようとしても、それは不可能であろう。
追手が来たのを見れば、狂四郎に、すみやかに退散して欲しい、とのぞむだけであろう。
二十四梃の燧石銃に、威嚇されて、ふるえあがらぬはずはないのだ。

闇斎は、舳先に、突っ立つと、
「眠狂四郎に、物申す！」
と、呼ばわった。
「よいか、眠狂四郎、敵わぬとさとった上は、いたずらに、島民を死傷させまいぞ。……舟で早早に退散いたすのであれば、看過してくれる。……去れ、眠狂四郎！」
これは、狂四郎に、というよりも、磯館の主人に向って投げる忠告であった。
「判ったか、眠狂四郎！」
しかし、その忠告に対して、館内は、なんの反応も示さなかった。
ひそ、として、しずまりかえっているばかりである。
闇斎は、ふっと、その静寂を、薄気味わるいものに、おぼえた。
しかし、不吉な予感がわいたことが、進むのを中止する理由にはならなかった。
闇斎は、部下一同に、それだけ叫んだ。
「油断すな！」
八艘の舟は、島の南端へ向って、急速に迫った。
館の建つ台地から、浜辺まで、えぐりとられたように絶壁となっていることは、狂四郎たちが近づいた時に、すでに述べてある。
その絶壁の数箇処が、不意に崩れて、黒い穴を開けた。
「待て！　あれは――」
闇斎が、ぎくっとなって、眸子をこらした――その瞬間。
それらの穴から、鋭い発射音とともに、白く煌めく矢が、とび出した。

矢――それに、まちがいはなかった。しかし、ただの矢ではなかった。

棒火矢――日本独特の火砲であった。

棒火矢は、元和年間に、播州三木の住人・三木茂太夫が発明した、と伝えられている。

尖端に科薬――主に焼夷薬を包んだ矢型の弾丸を、発射するものであるが、発射されると、長さ三尺あまりの（ちょうど、現代のロケットに酷似した形の）棒火矢は、火の尾を曳いて飛び、目的物に中ると同時に、炸裂する仕掛けになっていた。

抱え撃ちと台撃ちの二種にわかれ、射程距離は普通二十町（二、一八二米）といわれている。

寛文、延宝以後は、砲術各流ともに、この棒火矢が取り入れられて、重要な砲術の一科目になっていた。

しかし――。

闇斎とその部下たちは、母国に、このような見事な火器があることを、知らなかった。

「おっ！」

「あっ！」

愕然となった渠らに、海中へ身を躍らせるいとまを与えず、棒火矢は、絶壁の穴から、つづけさまに発射されるや、紅蓮の尾を曳いて、八艘の舟に、吸い込まれるように、中った。

狙いは正確であった。海中に落ちたのは、一発もなかった。

凄まじい炸裂音と、黒煙と火花と、悲鳴と怒号が、凪いだ海面を、生地獄と化した。

火だるまになって、つぎつぎと海中へとび込んだ者どもも、飛沫をあげてのたうつ時間は、短かった。

隠し櫓の上で、狂四郎が覗く遠目鏡の中でも、闇斎の姿は、火焰にまみれて、舟上から消えた。

——あの爺さんが、あのまま、海の藻屑になるとは思われぬが……。
狂四郎は、治左衛門をふりかえると、
「この館は、天草あたりの隠れ切支丹とちがって、要心堅固ぶりは、あっぱれなものだ」
と、云った。
「魚を多量に水揚げするために、漁民どもに、火器の使いかたを教えている、と申し上げても、信じては下さいますまい」
治左衛門は、笑い乍ら、こたえた。
「この賢島を中心とする崎志摩一円の漁民の先祖は、大坂城から落ちのびた豊臣家の残党であった、と云われれば、信じてもよいが……」
「いまさら、先祖の素姓詮議などされますのは、甚だ迷惑と申すもの。……お、左様、ご返辞がおくれて居りました。当家に、聖母まりあ像などという異仏は、秘蔵されては居りませぬが、それに似たものが、文庫蔵の壁に、描かれて居ります」
「ご案内願おう」
「かしこまりました。どうぞ——」
治左衛門は、先に立って、隠し櫓を降りた。

三

その文庫蔵は、母屋からはなれて、奥庭に面して建てられていたが、母屋とは屋根でつなぎ、通路の三和土には、簀子が敷いてあり、足袋跣で行けるようになっていた。
その造りから推測して、島民が、文庫蔵に集合することが、しばしばあるに相違なかった。

治左衛門は、大きな鍵で錠前をはずすと、一尺もの厚さを持った扉を、開いた。

内には、さらに金網戸が閉めてあり、これにも、鍵がかけられていた。

ついて来た使用人の一人が、手燭を、治左衛門に、渡した。

内部の一階には、左右の壁ぎわに、長持や櫃がならべられてあったが、中央はひろびろと空けられていた。

治左衛門は、階段を登って行く。

狂四郎が、そのあとを登り、千華がつづいた。

二階は畳敷きであった。調度は何ひとつ置かれてはいなかった。

——百人は、坐れるな。

そう看てとりつつ、狂四郎の視線は、正面へそそがれた。

障子がたてきられて、しろじろと浮きあがっていた。

治左衛門が、そこへ進んで、障子を開いた。

障子のむこうは、壁であった。

壁には、極彩色の花鳥が、いちめんに描かれてあった。

ちょうど、中央に、古木らしい百日紅が描かれ、いまを盛りに咲きほこっていた。

そして——。

その蔭に、赤児を抱いた一人の女人の佇む姿があった。

しかし、その顔は、百日紅の花にかくれていた。

衣裳は、平安期の袿に似た、窠文の白地をまとい、近づけば、肌が透けて見えるようであった。

「顔が、かくれているのが、にくい」
狂四郎は、呟いた。
歩み寄った狂四郎は、その美人の足もとに、純白の大輪の花が、ひらいているのをみとめた。甘い芳香をただよい出しているような美しさであった。
「この花は――？」
狂四郎は、かたわらに立った千華に、指さして、訊ねた。
「月下美人、と申します。日没からほころびはじめ、夜半に満開になり、ほどなく、しぼみまする」
「百日も咲きつづける花の下に、たった一夜だけ咲く薄命の花を描いたところが、なにやら、意味ありげだ」
「はい――」
千華は、うなずいた。
それにしても、百日紅の花に、顔をかくした女人を、女神像とは、受けとりがたかった。
赤児を抱いたところは、聖母まりあ像に似ているが、おごそかさ、けだかさは、さらに感じられぬ。
「どうであろう？　これを、そなたは、女神像と看るか？」
狂四郎は、千華に問うてみた。
「…………」
千華は、とまどった表情で、返辞をためらっている。
その時、治左衛門が、微笑し乍ら、

「この月下美人に、こういう歌があるのを、ご存じでございますか。

　大いなる花開きたりしづしづと
　かがやく天女いますごとくに

いかがなもので——？」

と、云った。

「すると、やはり、これが、女神像ということになるのか。……千華、そなたは、この女神像に、祈らねばなるまい」

「はい」

千華は、ひざまずくと、胸で十字を切り、両手を組んで、俯向いた。

一念こめて祈る千華のうしろで、狂四郎と治左衛門は、しばらく微動もせずにいた。

奇蹟（きせき）の起る気配は、なかった。

手燭の炎が、ゆれているばかりで、この静けさは、三人が動いたり口を開いたりせぬかぎり、何ものからも、破られそうもなかった。

と——。

狂四郎は、暑さをおぼえたとたん、

——そうか。

と、ひとつの直感を、脳裡（のうり）にひらめかせた。

壁に描いてあるのは、百日紅をはじめ、いずれも、夏の花であった。

「千華——」

狂四郎は、呼んだ。

「はい」
千華は、頭をあげて、ふりかえった。
「あの小函の中には、詩箋のほかに、鉄づくりの蟬が入れてあったな」
「はい」
千華が、ふところから、その小函をとり出して、さし出した。
狂四郎は、蟬を掌へのせた。
いまにも飛び立ちそうなほど精巧につくられたこの蟬は、何を意味しているのか？
詩箋には、
『輪廻生死、空蟬に魂を入れたくば、志摩国賢島なる磯館の女神像に祈るべし』
と、記されている。
「空蟬に、魂を入れたくば、か」
狂四郎は、呟いてみた。
千華も、治左衛門も、息をつめて、狂四郎の鋭くひきしまった表情を、見まもった。
急に、狂四郎が、薄ら笑った。
「この蟬をとまらせるのは、この百日紅の幹か」
そう云った。
二歩踏み出した狂四郎は、百日紅の幹を、丹念に、調べはじめた。
やがて、胸の高さのところに、幹には、小さな孔が六つ、あけられているのを、さがしあてた
狂四郎は、
「これだな」

と、まず、蟬の前足四本を、四つの孔へ、ぐいとさし込み、それから、後足二本を、二つの孔へ、はめた。
とたん――。
女人像の顔をかくしていた百日紅の花びらが、ひらひらと散りはじめた。
「おお！」
治左衛門が、驚きの叫びをあげて、膝を折った。
吹きはらわれるように、花びらが散りはてたあとに、女姓の貌が、現われた。
まさしく、それは、聖母のけだかさを湛えた、神秘な美しさであった。
こんどこそ、千華は、声をあげて、祈りの言葉を唱えた。
――しかし、これだけでは、どうということもない。
狂四郎は、その貌を凝視し乍ら、疑った。
壁が回転して、その奥に、千両箱が山と積まれているのではなかろうか、といった期待は、裏切られたのである。
こころみに、壁を押してみたが、ビクともしなかった。
――空蟬は、百日紅の花びらを散らせて、聖母に顔をあらわさせた。さて、それから、どうなる、というのか？
狂四郎は、あらためて、聖母の貌へ、眼眸を近づけた。
――これか？
狂四郎は、赤児の可愛い片手が、聖母の頰までさしのばされていて、それが、小指のさきほどの小さな犬をにぎっているのに、目をとめた。

犬は、描かれているのではなく、土をこねて作った玩具だったのである。
狂四郎は、その玩具犬を、つまみ取った。

おらしょ

一

「夏だな、もう……」
凪いだ海原へ、双眼をほそめて、呟いたのは、捨てかまりの弥之助であった。
顔面は、土色に沈み、頰は殺げ落ちて、別人のように、やつれはてていた。
松坂城下はずれで、下条主膳の腹心後藤某に、短銃で腹部を撃ち抜かれ、捨てかまりのしぶとさで、手当をしつづけ乍ら、ここ志摩郡の西の果てまで辿りついた弥之助であった。
英虞湾（御座湾）を抱き込む崎志摩（御座半島）を一海里半へだてて、御座岬を彼方にのぞむ浜島という漁村まで、辿りついて、弥之助は、とある小さな崖ぶちに、腰を据えると、もう動く気がしなくなった。
この浜島は、熊野灘から、時化をくらった船が、逃げ込んで来るのに恰好の津であった。
水深十仞、凄まじい風濤の日であっても、浜島の入江は、泊り船の転覆をふせぐ地形になっていた。
——わしの故郷に似ている。
弥之助は、薩摩の片隅にある小さな湾を、思い泛べた。

暗礁がちらばっているらしく、白い逆浪が、綿をちぎって撒いたように眺められるのも、故郷の海に似ていた。

——故郷をなつかしむようになるとは、わしの寿命も尽きた証拠だな。

自嘲の嗤いが、弥之助の頬に刷かれた。

人の気配が、近づいた。

弥之助は、振りかえる気力もなかった。

「静かな景色だな」

そう云われて、弥之助は、視線を移した。

堂々たる体軀の、風貌も魁偉な浪人者が、そこに立っていた。弥之助には、見覚えのない男であった。

「ここに、腰を下ろしてもよいか」

「どうぞ、ご随意に——」

浪人者は、どっかと胡坐をかくと、双腕をのばして、胸を張り、深呼吸した。

「人間は、時折は、こうして、ぼんやりと、痴呆のひとときをすごすのは、いいものだな」

「左様で——」

「尤も、お主は、病み疲れて、動けなくなっているのであろうが……」

「…………」

弥之助は、警戒の目を光らせた。

「かくさんでもよいぞ、捨てかまりの弥之助」

浪人者は、弥之助を知っていた。

「どなたなので、お手前様は——？」

「志村源八郎、と申しても、お主には、判るまい。刺客だ。眠狂四郎を討つようにたのまれた。二十両でな」

「…………」

「尾け狙って、ここまでやって来たが、……どうやら、討ちとれそうもない」

「てまえを、どうして、ご存じで——？」

「刺客を稼業にしてみると、妙なものだな。自分が尾け狙っている敵を、同様に、尾け狙っている同業者がいることが、見えて来る」

「…………」

「お主も、どうやら、眠狂四郎という男を、討ちとるのは不可能だ、と思うようになっているのではないのか？」

「てまえは、べつに、眠狂四郎の生命を狙っていたのじゃございません」

「あの男の行先を、つきとめようとしただけだ、と云いたいのか？」

「まあ、そんなところで——」

「しかし、つきとめかねて、途中から、姿を見失った。さがしあぐねて、この志摩郡の西の果てまでやって来て、病み疲れている」

「旦那——、旦那はただの刺客じゃありませんね？」

「弥之助、この世を去るに臨んで、なにか、遺言することはないか」

「…………」

「いや、わしが、お主を斬る、という予告ではない。すておいても、お主は、死ぬ。……死相

が、その顔に出て居る」
志村源八郎は、そう云い乍ら、眼眸（まなざし）を、海面の一箇処へ、注いでいた。
人の頭が、波間に浮いていた。木材らしいものにすがって、流れているのであった。
「生きているようだな」
源八郎の言葉に、弥之助は、その視線を追った。
「助けてやろうか」
源八郎は、崖を跳んで、渚（なぎさ）へ降り立った。
——何者なのだ、あの浪人は？
弥之助は、衣服大小をすてて海へ入って行く源八郎を見送り乍ら、小首をかしげた。

二

源八郎に、救われたのは、佐賀闇斎であった。
全身いたるところに火傷（やけど）を負うた闇斎もまた、どうやら、死神が間近なところにやって来ているようであった。
砂地へひきあげられて、仰臥（ぎょうが）させられると、いくたびか、深い喘（あえ）ぎをやって息を整えると、
「……忝（かたじけ）ない。どなたか、存ぜぬが、このお礼は、いずれ……」
と、云った。
「佐賀闇斎殿、どこで、眠狂四郎を襲撃したのだ？」
源八郎は、訊（たず）ねた。
闇斎は、大きく双眼をみひらいて、源八郎を仰いだ。

「あ、あんたは――？」

「お主と同じく、眠狂四郎を追って、江戸からやって来た刺客だ」

「公儀の隠密衆か？」

「ちがう。やとわれ刺客だ。やとったのは、お主の知らぬ人だ。……闇斎殿、お主もまた、眠狂四郎には、勝てなかったな」

「あんたは……、この春、青山の沼津千阿弥の屋敷で、眠狂四郎と、立ち合うた御仁だな」

「あの時、お主が、仲裁に入らなければ、眠か身共か、いずれかが、斃（たお）れていた」

「…………」

闇斎は、目蓋（まぶた）を閉じた。

「崖の上には、もう一人、眠を尾け狙った者が、死を直前にして居る。……その者に、遺言はないか、ときいている時に、お主を海の中に発見した。同じ問いをさせてもらいたい」

「…………」

闇斎は、しばらくこたえようとしなかった。

やがて、「ふふふ……」と、ひくい笑い声を、もらした。

「嘘で、かためた、わしの生涯が、このように終るのも、罰か。……琉球人普天間親雲上（ふてまばいきん）――琉球国王の叔父、というのも、嘘。……暹羅（シャム）の山田長政の苗裔（びょうえい）――日本太夫、というのも、真っ赤ないつわり。……わしの、まことの素姓は……、ふふふ、この期に及んで、打ち明けても、はじまらぬ。……なにもかも、嘘でかためた老賊が、最後の大仕事に、敗れて、死んで行く。それだけのことじゃな」

「…………」

源八郎は、闇斎のおもてが、穏やかな色を湛えるのを、じっと、見まもった。
「あんたも、眠狂四郎と、勝負するのは、あきらめるがよい」
「いや、あきらめぬ」
「勝てぬよ。あの男は、たしかに、不死身じゃよ。……あんたが、負けるに、きまって居る」
「勝負してみなければ、どちらが勝つか、判るまい」
「いいや、判って居る。あんたも、あの男には、勝てぬ」
「それが、遺言か？」
「そうじゃ。……あの男を殺すのは、病だけであろうな」
「身共の剣だ、と信じて居る」
「ばかな――。嘘も我欲も、剝ぎ落したわしが、いまわの際に、忠告するのだ。……止めるがよい。……あきらめるのだ。百万両を、さがすのは、眠狂四郎に、まかせて――、あんたが、何者か、知らぬが、江戸へひきかえすがよい」
「眠狂四郎は、いま、どこにいる？　近くに相違あるまい。どこだ？」
「きいて、そこへ、おもむけば、あんたが、死ぬ」
「闇斎殿、教えてもらおう。たのむ！　どこに、いるのだ、眠狂四郎は――？」
闇斎は、しかし、かすかに、かぶりを振ると、しずかに、事切れた。
崖の上では、弥之助が、同じ場所にうずくまって、源八郎が戻って来るのを、待っていた。
「お主よりひと足さきに、佐賀闇斎という老人が、逝ったぞ」
源八郎が、告げると、弥之助は、
「てまえは、まだこれで、すぐにくたばるつもりはありません。……貴方様から、死相が出てい

る、と云われて、急に、猛然と、生きのびる気力が、わきました」

と、云った。

「しかし、眺めたところ、依然として、死相は、出て居る。気力だけで、死相は消せぬぞ」

「てまえのことよりも、そちら様のことだ。……旦那が何者か、なんとなく、見当がついて来ましたよ」

「あててみるか」

「口に出しますまい。……てまえにとって、べつに、貴方様が、何者であろうが、かまわぬことだ。それより、佐賀闇斎は、眠狂四郎が、どこにいるか、教えましたかい？」

「教えれば、このわしが死ぬ、と申して、亡くなった」

「てまえも、そう思いますよ」

「弥之助――」

「へい」

「百万両などという、莫大な太閤遺産が、どこかにかくされている、というお伽噺を、お主は、信じて居るのか？」

「信じて、それを手に入れる夢をみていた方が、生甲斐になるじゃありませんか」

「心中どこかに、一分の否定をいたして居ろう」

「それはまあ、いたしかたがありますまい」

「わしは、そのような夢物語など、信じては居らぬ。眠狂四郎と勝負して、これに勝ち、礼金として二十両をもらう――それだけのことに、一命を賭けて居る」

「おやりなさることですな」

「では、これで、別れる」
源八郎の遠ざかる跫音に、じっと耳を傾けていた弥之助は、その跫音が消えた時、急に、悲痛な面持になった。
「わしは、まだ、死にたくはない。……百万両の金子を、この目で見たならば、その時は、死んでもいい。それまでは、石にかじりついても、死なぬ！」
そう独語し乍らも、弥之助は、腹の患部に、堪えきれぬ激痛が来て、みるみる顔面に、あぶら汗をにじませた。

三

磯館の書院には、再び、長い重苦しい沈黙がつづいていた。
こんどは、眠狂四郎が、あるじ治左衛門の返辞を待つ沈黙ではなかった。
一箇の小さな玩具犬を、中央に置いて、これが、何を意味するのか、見当もつかぬままの苛立たしい時間が、いたずらに過ぎていた。
袱紗の上にのせられた玩具犬は、土をこねてかため、自然に乾燥させて、胡粉着色したものであった。
雲母粉で磨き、さいごに文様彩色を施し、ちょっと見たところ、ただのつまらぬ玩具であったが、これは、かなり長い日時を要した、丹念な作りであった。
顔を仰むけた犬の姿は、いかにも、稚拙美があって、ほほえましさをおぼえる。
これは、文庫蔵の壁に描かれてある聖母像に抱かれた赤児が、にぎっていた玩具であった。
この小犬だけが、描かれる代り、土をこねて作られ、はめ込まれていたことに、なにか意味が

あるもの、と推測できた。
小犬は、聖母と赤児の顔とともに、百日紅の花で、かくされていたのである。そして、鉄製の蟬を、百日紅の幹にとまらせると、花びらが散って、現われたのである。この仕掛けが、決して面白半分の工夫とは、考えられなかった。
ようやく、狂四郎が、沈黙を破った。
「隠れ切支丹には、このような小犬の玩具を、大切にするならわしがあるのであろうか？」
「いえ、そのようなならわしなど、ありませぬな」
治左衛門は、かぶりを振った。
「しかし、幼いぜずす・きりすとが持っていたのであれば、切支丹宗門とは全く無縁の玩具とは考えられぬ」
狂四郎は、あらためて、治左衛門にむかって、この賢島の隠れ切支丹が、ひそかに合掌する「異仏」を、見せてもらえまいか、とたのんだ。
治左衛門は、もはや、自分たちが隠れ切支丹であることを、かくそうとはしなかった。
「かしこまりました」
やがて——。
三方の上に、掌大の銅製の異仏がのせられて、狂四郎の前に置かれた。
「これは、当地では、くるぎと申して居ります」
その表には、聖母まりあが右手で子を抱いた像、裏には、十字架にかけられたぜずす・きりすと像が、彫ってあった。
狂四郎は、曽て、これと同じような「異仏」を眺めたことがあり、べつに、それを手に把った

時、なんの直感も、脳裡(のうり)にひらめきはしなかった。
治左衛門は、ついでに、数珠その他の法具も、見せたが、狂四郎にとっては、なんの参考にもならなかった。
狂四郎は、ふと思いついて、
「隠れ切支丹が、拝む方位は、戌亥(いぬい)（乾）ではなかったか？」
と、訊ねた。
もし、戌亥ならば、小犬はその方角を意味しているのかも知れず、館の北西部をさがしてみることも、無駄ではあるまい。
治左衛門の返辞は、しかし、狂四郎を失望させた。
「いえ、拝む方位は、巽(たつみ)でございます」
狂四郎は、腕を組んだ。
ややあって、
「この島では、牛を殺して、その肉を食う由だが……」
狂四郎は、訊ねた。
「はい。まず、牛の肉を、持仏様（ぜずす・きりすと）にお供えして、喰(た)べさせて頂きます。なんでも、さんた・まりあ様が、お産をなさいましたのが、牛小屋とかで、その際、牛がことのほかあばれたそうでございます。それで、この宗門では、牛を殺して、その肉を喰べるならわしができたとか……、仏教とは全く逆でございます」
「犬はどうであろう。たとえば、牛とは反対に、犬が、聖母やきりすとのために働いた、といった話は、申し伝えられていないのであろうか？」

「さあ、ついぞ、そのようなお話は、耳にしたおぼえがありませぬ」

狂四郎は、つづけて、治左衛門に、いくつかの唱言（おらしよ）を、口誦（こうしよう）してみてくれるように、たのんだ。

治左衛門は、合掌すると、となえはじめた。

「天地のでうす様、作神と奉り、あんめんじんす、あんめんじんす」

「さんとめ（聖トマスの意？）さんとめ道のさんとめ、不慮のわずらい、頓死の咎（とが）、悪事災難これなくよう、ひとえに願い奉りそろ」

次に、となえた祈り文句は、狂四郎たちには、とうてい不可解な、呪文（じゆもん）めいたものであった。

「あめまるや、からさべんのう、どうまんべえこ、えれんこ、つうや、えれむりえりむり、えれすべ、えんつう、ふりつう、べんつう、つふえのじんぞう、さんたあまりあ、まあてるまあてる……」

治左衛門は、おしまいに、

「おらしょのほかに、十戒というのがございます」

と、云った。

「うかがおう」

「第一、御一体でうすうやまいたっとみ奉る。

第二、尊き御名にかけ、むなしきちかい申すまじ。

第三、どみんごを忌み日とし、つとめまもるべし。

第四、父母に孝行すべし。

第五、人を殺（あや）むべからず。

第六、邪淫を犯すべからず。
第七、偸盗すべからず。
第八、人をざん言すべからず。
第九、他の妻を恋すべからず。
第十、他の物を、みだりに望むべからず。

下座にひかえていた吉五郎が、この十戒をきいて、

「なるほど！　切支丹宗門も、仏教と、すこしも変りはしませんねえ。その十戒をうかがうと、そっくり、お寺の坊さんが、在家の信者に説教する五戒が、ふくまれて居るじゃありませんか。殺生戒とか偸盗戒とか邪淫戒とか……、まるで、五戒からぬすんだみたいだ。人間が守ることは、どこの国でも、同じというわけですかねえ」

と、云った。

その独語めいた喋りを耳にした瞬間、狂四郎は、はっとなった。

「そうか！　切支丹も仏教も、信仰の形式はほぼ同じか」

「旦那、なにか、ピンと来ましたかい？」

吉五郎が、首を突き出した。

千華も、必死で、固唾をのんで、狂四郎を見まもっている。

「まだ、判らぬ。しかし、遠くに、微光が見えて来たような気がする」

狂四郎は、治左衛門にむかい、

「この磯館は、南北朝の頃、志摩一円を征服した九鬼大和守隆次によって、砦として築かれた、と云われたな？」

と、たしかめた。
「左様でございます」
「当家が、切支丹宗門に帰依したのは、おそらく、織田信長に九鬼家が随身した天正年間と思われるが、それ以前の宗旨は、なんであったか、ご存じか？」
「さあ、それは、てまえも、よく存じませんが、天文年間に、館の娘の一人が、信仰深く、とうとう、尼になった、という事実もあるそうでございますから、宗旨は何であったか、一族が熱心な信徒であったことには、まちがいございますまい」
「ふむ！」
狂四郎は、微笑して、うなずいた。五里霧中の中にとらえた微光が、不意にぱっと明るくなったに相違なかった。
「吉五郎――」
「へい」
「お前は、ここへやって来たと同様、千華をともなって、海路をまわって、堺（さかい）へ行け。堺に、わたしの親しい知己がいるから、そこに身を寄せて、待っていてもらおう」
「旦那は、どちらへ――？」
「伊賀を通って、奈良へ入る」

落葉

一

眠狂四郎が、賢島の磯館を去って十日、どの街道上にも、その姿を見受けた通行人は、いなかった。

昼を避けて、夜道をひろったからである。辿る道も、表街道ではなく、野径（のみち）や杣道（そま）であったに相違ない。

ねぐらも、旅籠（はたご）ではなく、路傍の阿弥陀堂（あみだ）とか観音堂とか稲荷（いなり）の祠（ほこら）とか、時には木の下蔭（したかげ）にしたものであったろう。

忽然（こつぜん）として、狂四郎が出現したのは、古市の廓（くるわ）であった。

しかし、登楼したのは、杉本屋とか備前屋とか油屋といった大店（おおだな）ではなかった。

裏通りの端に、小さな構えをみせた女郎屋であった。

古市の妓楼は、七十軒余あったが、そのうちでも最も下等な女郎屋であった。

はしりがねと称（よ）ばれる船女郎（江戸で謂（い）う船まんじゅう）が、店の部屋を、半刻（はんとき）いくらで借りて、商売をしているのであった。

船女郎（はしりがね）は、街道筋をうろつき乍ら、客を物色し、鼠泣きで口説きおとして、店へともなって来るのである。

手拭いを吹き流しにかぶったその船女郎が、狂四郎を見つけたのは、古市の小高い山の頂上で

あった。
桃山と称ばれている、寛永年間からの桃の名所であった。その季節になると、宇治・川崎、山田あたりの大町人が、古市の芸妓連をつれて来て、花見の宴を催した。
全山に緋毛氈が敷きつめられ、紅白の幕が張りめぐらされて、飲めや唄え、踊り狂う歓楽が、終日くりひろげられるのであった。
夏を迎えた桃山は、ひっそりとして、人の気配はなく、花見の四阿が、此処彼処に、涼風を吹きぬけさせていた。
眠狂四郎は、その四阿のひとつに、身を横たえていたのである。
二更（午後十時）をまわった頃あいであった。客にあぶれたらしい船女郎が、ふらふらと登って来て、ふと、月明りに、その寝姿をみとめて、
「あら、おさむらいだよ。……ちょいと、旦那、賭場でおけらになって、ここを宿にしておいでなんですか？」
と、声をかけて来た。
「当ったな。つきに見はなされて、このていたらくだ」
「可哀そうに――。……旦那、あたしが、つきをとりもどして進ぜましょうかえ？」
「どうやって、とりもどす？」
「あたたかい寝牀の中ですよ。あたしを、抱けば、きっとつきがもどります。代金は、要りませんよ」
狂四郎は、起き上って、月光をあびた女の顔を、視た。
――最下等の船女郎にしては、眉目が整いすぎているようだ。

しかし、狂四郎は、黙って、女のあとをついて、桃山を降りると、その店に入ったのであった。

その道すがら、狂四郎は、大和国へ入るには、いくつの道筋があるか、訊ねた。女は、気軽に高須ノ峯越えは険しいから、津へ出て、そこから青山峠を越えて行くがよい、と教えた。

女が、緋縮緬の長襦袢姿で、牀の中へ、すべり込んで来た時、狂四郎は、

「お前の昨日までのなりわいは、なんであった？」

と、訊ねた。

「あたしは、ただの後家ですよ。亭主が、無職者で、縄張り争いの喧嘩で殺されたあと、借金を山と残していたものだから、あたしは、泣く泣く……、そんなこと、もうどうでもいい。過ぎ去ったことだから——」

女は、すがりついて来た。

「女郎の作り話としては、上出来な方だな」

「作り話だなんて、ほんとですよ、と云いはりたいところだけど、旦那は、信じないんですね。眼力だねえ。亭主が、借金を山と残した、というのは真っ赤な嘘。やくざの後家というのは、いつわりじゃありません。亭主が亭主だったものだから、あたしも、いつの間にか、博奕好きになってしまったんです。これが、本当の話。……莫連でごめんなさい。でも、あたしは、旦那のような、暗い翳を持った殿御が、好きなんです。ね、ためしてごらんなさい。……狂うから——」

女は、言葉通りに、狂四郎の指の動きだけで、たちまち、濡れて、小さな呻きをあげた。

事がおわったあと、しばらく、女は死んだようになっていたが、やがて、のろのろと起き上っ

て、

「旦那、ひと風呂あびなさいな。背中を流してさしあげます」

とすすめた。

「お前、さきに入って来るがいい」

「だって――」

「おれは、ひと睡りして、そのあとで、入る」

「じゃ、失礼して、おさきに……」

女が、もどって来た時、寝牀は、もぬけの殻になっていた。

「おや、厠かしら」

小首をかしげた女は、枕の上に、小判が一枚のせてあるのをみとめた。

「まあ！　なんだって、こんなに、たくさん置いて行ったんだろう？」

女は、二朱女郎だったのである。

狂四郎の方は、内宮と外宮をむすぶ直道の、間の坂を越え乍ら、

――おれの早合点であったかも知れぬ。

と、胸の裡で、呟いていた。

女が、敵の手先であったか否か、ということであった。

かりに、敵の手先であったとしても、肌を燃やし、柔襞をしとどに濡らしたことは、事実であり、女が湯殿に行くまでは、何事も起らなかったのである。

敵の手先であって、その敵が襲撃して来ていたならば、女も斬る結果になっていたかも知れない。

客と女郎という、ただそれだけの状態で、店を立ち去ることができたのを、狂四郎は、ひそかによろこぶ気持があった。

道中、仕掛けられてある罠が、多すぎたのである。自分に近づいて来た者を、疑いの目で看るようになっているのは、やむを得なかった。

女が敵の手先でなかったとして、二朱の枕代ではひきあわぬ勤めぶりに、支払った小判一枚は、むしろ、安いものに思えていたのである。

——あの一両をにぎって、賭場へ乗り込み、勝ちまくることができたら、ということだ。

狂四郎は、おのれが甘い男になっていることに、一種の気軽さをおぼえていた。

二

松坂城下を通り抜けて、津に至るまで、勿論、夜道だけをひろったが、敵影は、行手をさえぎらなかった。

狂四郎は、津の手前の六軒茶屋で、左折した。

伊賀国に入り、名張を越えて、奈良に向う道順をえらんだのである。

野道を辿るあいだは、闇の中であった。

山ふところに入って、ようやく、しらじらと、明けそめた。

小さな渓流に沿うて登る山道であった。

狂四郎は、清冽な流れの上を、仲間からはぐれて、迷ったように飛ぶいっぴきの螢を、見出した。山気の澄んだ夜明けのあかるさの中で、その光は、いかにも弱々しかった。

——はぐれた、と思うのは、人間の勝手な感情で、実は、孤独を愉しんで、飛んでいるのかも

知れぬ。
ひとり、苦笑を、口辺に刷いた——とたん、狂四郎は、心気がひきしまって、視線をあげた。
二十歩あまりのむこうが、平地になり、赤松の疎林を背負うて、古びた地蔵堂が建っていた。
堂の左右には、巨大な男根の形をした石や、見猿・言わ猿・聞か猿などが竝べられ、どうやら道祖神と猿田彦が、地蔵信仰と合して、疫鬼を払ったり、安産させたり、小児を守ったり、そして、人の往来の安全を保障したりする役割をはたしている御堂のようであった。
階の上には、いちめんに、小石が積まれてあった。
こちらを凝視する眼光が、黒髪と御幣をいちめんにむすびつけた格子戸の内に、あると直感した。
常人ならば、堂前まで近づいて、はじめて、その気配が神経につたわって来るところであったろう。
無数の死地をくぐって来た者のみの、殺意をひそめた伏敵の存在を、距離をへだてて察知する一種の霊感、といえる第六感の働きは、狂四郎独特のものであった。
その働きのおかげで、今日まで、生きのびて来た。
伏せている敵が、どの程度の力の所有者か、ほぼ見当がつくのも、われ乍ら、ふしぎであった。人に語っても理解されぬ微妙な直感力といえた。
闘いは、それと察知した瞬間から、開始された。
飛矢あるいは銃弾に対する五体の備えも、その瞬間から、意識が命じるまでもなく、できていた。
態度は、そのまま——ふところ手のまま、死地への一歩一歩を、正しく、踏んで、近づいて行った。

った。

狂四郎が、堂の前に立つのと、格子戸が、軋り乍ら観音開きになるのが、ほとんど同時であった。

階上の小石を蹴散らして、すっと、姿を現わしたのは、三心刀の正剣を使う志村源八郎であった。

「眠殿、雌雄を決する秋が、参った。ここにて、いずれかが、無縁仏に相成り申す」

源八郎は、明るい笑顔をみせた。

六尺の巨軀に、いかにも、生気が満ちあふれていた。

「わずか二十両のために、はるばる、ここまで、尾けて来た、というわけか」

「二十両欲しさだけではござらぬ。貴殿の円月殺法を破る——これこそは、この志村源八郎が生涯最高のよろこびと申すもの」

「わたしは、志摩の南の果てから、逢坂峠を越えて来たが、夜のみ、道も脇道をえらぶ要心を怠らなかった。また、尾けられている気配も、おぼえなかった。……お主、どうして、わたしを、ここで待ち伏せた？」

「貴殿という人物、尾行いたせば、必ず、感づくに相違ござらぬ。……左様、身共もまた、貴殿を追って、英虞湾の海辺まで、足をのばし申した。身共自身が、貴殿の行先を見当つけた次第ではなく、身共をやとったさる人物より、早飛脚で、貴殿が志摩へ行く模様、と報せられたからです。……身共は、貴殿の姿をみとめる距離には、絶対に近づかぬようにして、江戸から道中して参った。……貴殿と雌雄を決するのは宿運、と信じたゆえです。宿運であれば、必ず、相逢うて闘う日時と場所が、おのずから、身共に与えられると、信じ申した。まさに、その通りでござっ

た」

「…………」

「身共は、一昨夜、貴殿が、古市の廓の一軒から、出て来るのを、偶然、見受けたのです」

源八郎は、狂四郎を尾行することをせず、こころみに、その店にあがって、狂四郎の敵娼となった女郎に会って、どこへむかったか、きかなかったか、と訊ねた。女は、なんでも大和国へ行くと仰言っていました、とこたえた。

「その女郎、貴殿に、青山峠を越えるように教えた、と申したので、身共は、ここに先廻りして、待ち受けた次第でござる」

三

対話は、終った。

夜明けの静寂の山気に包まれて、両者は、不動の静止相を保った。

両者の地歩の利は、いうまでもなく、源八郎にあった。

狂四郎は、磧のように凸凹面のはなはだしい地上にいたし、源八郎は、狂四郎の帯の高さの堂の階上に立っている。

距離は、二間余あった。

業が互角ならば、狂四郎に、勝目はなかった。

いや――。

剣の修業に於ては、源八郎の方が、青春期をすべて、それに傾けているに相違なく、業は、あるいは、狂四郎にまさっているかも知れなかった。

さらに――。

狂四郎は、源八郎の三心刀が正剣であり、おのれの円月殺法が邪剣であることを、すでに、みとめていた。

「参る！」

源八郎は、一声を発して、二刀を抜いた。大刀を左手に、脇差を右手に――尋常の二刀流とは逆に二刀をつかみ、脇差の方を頭上へ直立させる陽剣とし、大刀の方を左方へ水平にさしのべる陰剣とする三心刀の構えをとって、眼光鋭く、狂四郎を睨みおろした。

狂四郎は、それより一拍子おくれて、無想正宗を鞘走らせた。

しかし、敵より三尺下の地歩に立たされた以上、地摺り下段の受太刀を構えるわけにいかなかった。

このおそるべき三心刀の使い手との最初の闘いで、狂四郎は、その長剣が無拍子を生んだのを、見とどけている。

その場面でも、述べたが、無拍子とは、敵と一合も撃ち合わず、電光のごとく、音もなく白刃を走らせる極意剣であった。

すなわち、突きの一手であった。

狂四郎は、その無拍子の突きに対して、円月殺法の突きをもって、むくいたのであった。

結果は、源八郎の長剣が、狂四郎の無想正宗の鍔を貫き、無想正宗は、源八郎の上唇わきから頬を刺し通して、切先を耳朶までとどかせたのであった。

その傷痕を、源八郎は、顔面にのこしている。

と――。

中段やや高めに構えた狂四郎が、ゆっくりと、位置を移動した。
それを待っていたように、狂四郎の後方——東の山端から、朝陽が、渓流の上を斜めに横切って、ここへそそいだ。
そして、その陽光は、まっすぐに、源八郎の顔を搏(う)った。
ここに於て、地歩の利の差は失われた。
立つ位置の高低の利不利を、陽光が後背にあたることによって、とりのぞいたのである。
いや——。
むしろ、朝陽をまともにあびた源八郎の方が、やや不利かとみえた。
宙を躍って、無拍子の突きを襲わせることを、封じられたからである。
源八郎は、この地蔵堂の階上から、猛禽(もうきん)が獲物を狙って、一直線に翔(か)けるに似た戦法こそ、円月殺法を破る三心刀無拍子の絶妙の発揮と、案じたものであったろう。
陽光を顔面にあびることまでは、計算に入れていなかったのである。
さいわい、距離は二間余あった。階上から地面へ跳ぶ余裕がなくはなかった。
しかし、それは、源八郎の剣客としての誇りが許さなかった。
自らがえらんだ地歩であった。そこから、仕太刀を放つのが、剣客としての面目であった。
陽光に染められて、視力を半減させられ、二間余をへだてる地上の狂四郎が、影となって溶けるのを、睨みつけつつ、源八郎は、微動もしようとしなかった。
狂四郎は、誘うがごとく、無想正宗を、徐々に地摺りにおとした。
一瞬——。
陽光をまともにあびた不利の条件を、源八郎が、とっさに、有利なものにかえたのは、流石(さすが)で

あった。
源八郎は、左方水平にさしのべた大刀を、わずかに動かした。
とたん、その白刃の煌めきが、狂四郎の双眸を晦ませた。
と同時に――。
源八郎は、頭上にかざしていた脇差を、狂四郎めがけて、びゅっと投げ撃った。
刃金が刃金をはじく、鋭い金属音が、こだまを呼んだ時、源八郎は、その隙をとらえて、階を蹴った。
猛禽さながらに、その大刀を、飛矢の迅さで、一直線に、狂四郎の胸もとめがけて、突入させた。
まさに、無拍子の電光の迅業であった。
狂四郎が、襲いかかった凄まじいその切先を、かわすいとまもなく、鍔で、受けとめたのは、本能の働きであった。
再び――。
源八郎の剣は、無想正宗の鍔を、ぐさと貫いた。
しかし、こんどは、力点にへだたりがあった。
源八郎は突いて居り、狂四郎は受けていた。
源八郎には、渾身の気力を聚めて、さらにひと押ししておいて、切先を鍔から抜きざま、第二撃の突きを放つ業が残されていた。
源八郎が、他流の使い手ならば、狂四郎には、その突きを払うことができるであろう。
源八郎は、三心刀無拍子の極意の会得者であった。

……狂四郎の敗北は、ほぼ決定したか、と思われた。
あきらかに、源八郎の面貌には、勝利を確信する表情が、生れた。
その確信は、いささか、早すぎた。
突然、宙をひらひらと舞って、掌大の栃の青葉が、幾枚も、落ちて来たのである。
そして、その一枚が、源八郎の額へあたって、するりと鼻梁をすべった。
源八郎は一瞬、視界を消されて盲目となった。
それが、勝敗の岐れ路となった。
狂四郎が、敵の切先を、鍔からはずしざま、きえーっと、刃音を生みつつ、源八郎の脇を奔り抜けた。
源八郎は、仆れなかった。
大刀を、まっすぐに、突き出したなりの姿勢を、みじんも崩してはいなかった。しかし、柄をにぎり締めた左手の方は、手くびから両断されていた。
源八郎が、地面に膝を折って、ひくい呻きをもらしたのは、かなりの時間を置いてからであった。
狂四郎の方は、源八郎より七八歩はなれた地点に立っていて、地蔵堂の屋根を、仰いでいた。
屋根はしに、一人の男が、うずくまっていた。その男が、栃の葉を降らせたに相違なかった。
「わたしに、なぜ味方した、捨てかまりの弥之助？」
狂四郎の問いに応えて、苦しげにあげた顔は、遠目にもありありと死相を呈していた。
「お詫びのしるしに……、この世の置土産に、ひとつぐらいは、あと味のいい振舞いをしておこうと、考えました」

どうやら、弥之助は、文字通り死力をふりしぼって、志村源八郎のあとを追って来た模様であった。

狂四郎は、弥之助が、がっくりと落ち入るさまを見とどけておいて、視線をめぐらした。

源八郎は、片手を喪い乍らも、不屈の気力によって、よろめく足どりで、数十歩のむこうにいた。

忍者の里

一

「ほう！　この眺めは、同じ伊賀でも、上野より、こちらの方が、忍者の里らしいの」

公儀お目付下条主膳が、配下五名をひきつれて、台地に立って、見下ろす盆地は、名張の町であった。

三方から、なだらかな山裾がひろがった、一瞥いかにものどかな伊賀山中の盆地であった。

中央に、長い土塀をめぐらした殿館が、どっしりと居すわって、高低大小の棟をならべ、正門の構えもひときわ大きく、名張藤堂家の住居であった。その周囲に、武家屋敷が整然とならんでいた。町家は、ややはなれて、彼処此処に聚落をつくって居り、かなり広い田園をへだてて、農家が山麓にちらばり、初夏の眩しい陽光の中で、二百年の平和を保っている小藩のたたずまいには、殷賑からほど遠いだけに、かえって美しさがあった。

そしてまた、その静寂ぶりから、領民が土に根をふかくおろしたたたしかさが、感じられた。

名張藤堂氏は、津の城主藤堂高虎の養子高吉に、はじまる。
高吉は、近江国佐和山五万石の城主丹羽長秀の三男であった。三歳の時、豊臣秀吉の実弟羽柴秀長の養子となった。
秀吉が、丹羽長秀の三男を、実弟の養子に迎えたのは、強豪丹羽氏を手なずける政略であった。
秀吉は、丹羽長秀を家臣の列に加えると、たちまち、てのひらをかえすように、高吉を追い出して、羽柴秀長の養子に、甥の秀俊を迎えようとした。
養父秀長は、高吉を愛して、容易に手ばなそうとしなかったが、秀吉の厳命により、やむなく、離縁した。
その頃、羽柴秀長の部下に、藤堂高虎がいた。まだ一万石の小大名にすぎなかった。
高虎は、三十二歳になっていたが、子がなかったので、秀吉に乞うて、高吉を養嗣子にした。
天正十六年、高吉は、九歳であった。
慶長六年、高虎は、四十四歳で、はじめて、実子をもうけた。高次であった。
その時から、高吉は、藤堂家にとって邪魔な存在になった。
藤堂高虎は、青年期には勇猛の武名が高く、壮年を過ぎると、慈仁・寛厚にして雅量に富む名君とうたわれた武将であった。
しかし、中年過ぎてから実子をもうけた高虎は、やはり、盲愛の親でしかなかった。養嗣子高吉を、日々うとんじた。
慶長九年、高虎と隣国松山城主加藤左馬介のあいだに、兵を出して争う事変が起った。原因は、家臣同士の喧嘩であった、といわれる。

幕府は、両者の代表を、江戸へ呼んで、吟味裁決することにした。
その時、藤堂家を代表して、出頭したのが、二十五歳の高吉であった。
高吉の雄弁は抜群であり、理路整然、加藤家代表の国家老を、沈黙せしめた。閣老の裁断は、加藤左馬介の譴責であった。
しかし、高虎は、公儀をはばかって、帰国した高吉に、蟄居を命じた。
高吉は、一言もさからわず、大洲近郊の野村というところに、幽閉された。
三年を経て、このことが、家康の耳に入った。
「功のあった者を蟄居せしめるとは、古来その例をきかぬことである」
家康の声がかりで、高吉は蟄居を解かれた。そのうえ、家康から一万石を加増され（前に、羽柴秀長から、離縁されるにあたって、養育料の名目で、一万石をもらっていたので）二万石の大名となった。
慶長十三年、藤堂高虎は、伊予今治から、伊勢・伊賀に転封となり、津城主となった。
高吉も、当然養父に従いて行くべきであったが、家康の命令により、今治に残り、越智郡の領主となった。
大坂冬・夏の陣には、今治から、伊賀上野に馳せ参じ、養父の軍に合流して、目ざましい働きをした。
寛永七年十月、高虎が、江戸柳原の屋敷で、七十四歳で逝った。その訃を今治できいた高吉は、急いで、出府すべく、近江国水口まで至った時、津から藤堂家の家臣がやって来て、
「家督は、大学頭（高次）様が継がれましたゆえ、もはや、出府なさるに及びませぬ」
と、申し伝えた。

高吉は、悄然として、今治に引返した。
この時、高吉は五十一歳、高次は二十九歳。高次は、あきらかに、高吉に対して、感情的な敵意を抱いていた。高吉の人望があまりに高すぎたからである。
高吉の方は、高次に対して、みじんも対立意識をおぼえてはいなかった。高次が生れた時、高吉は、自らすすんで、養父高虎に、藤堂家は実子が継ぐべきであります、とすすめて、自身は客分の列にあまんじたのである。
高吉が、伊勢に転封になったのは、寛永十二年、五十六歳の時であった。高吉は、多気郡の新領地に住むつもりであったが、高次から、
「名張に、殿館を構えるがよろしかろう」
と、すすめられて、領地二万石のうち、五千石を名張に替えられた。
高吉は、なんの不服もとなえず、それにしたがった。
名張は、天正九年、織田信長の伊賀攻めで、焦土と化して以来、五十年を経て、いまだ荒廃したままであった。

二

高吉が、殿館を構えてから二百年、名張は、美しい静かな、伝統を持った町になっていた。
いま、当主は長徳で、まだ二十歳の若年であった。この年は、江戸に在った。
その留守殿館の正門前に、下条主膳が立った時、ちょうど正午で、門内から、太鼓が打ち出された。領民が、正門を太鼓門と呼んでいる所以であった。
公儀お目付の来訪は、それまでひっそりとしていた邸内を、にわかに、さわがしいものにし

た。

下条主膳は、家老鎌田将監(しょうげん)・小野三左衛門に、門前まで出迎えを受けて、太鼓門をくぐった。

敷地は広く、五千坪以上はあろう。

十間四方ほどの広場を過ぎて、大玄関に至り、主膳は、表書院に案内された。

六十畳以上もあり、上ノ間、下ノ間にわかれ、附書院もあり、帳台構えも設けられていた。

前時代の主殿造りの遺風をとどめる構えで、表書院には、大広間がつづき、大広間と白砂の広場をへだてて、能舞台も設けられていた。

「一万五千石にしては、まことに立派な御殿でござるな」

主膳は、二人の家老に、皮肉を云った。

名張藤堂家は、二代長正の時、三人の弟たちに五千石を分配して、一万五千石に減っていたのである。

二人の家老の顔面は、硬直してしまっていた。

公儀お目付が、なんの前ぶれもなく、来訪するなど、いまだ曽(かつ)てないことであった。

なにか重大な用件があるに相違ないと、留守居する家臣一同は、胸がさわがずにはいられなかった。

主膳は、わざと、その来訪目的をすぐにきり出さず、といってべつに藩政査察とも思われぬ様子をみせた。

口にする言葉には内容がなかったが、はしばしに鋭い皮肉を含めているのが、受ける側には、無気味であった。

半刻ばかり置いて、主膳が、不意に、唐突な質問をした。

「ところで、ご当家は、まだ、間兵を養って居られるか？」
忍者と云わず、間兵という耳馴れない呼びかたを、主膳はした。
伊賀国と忍者は、切っても切りはなせぬ間柄にある。
忍びの術とは、間諜の術である。中国の兵法書『孫子』の用間篇に、その源流がある。
その兵法は、仏教とともに、わが国に伝わり、聖徳太子は、その〝用間〟に着目して、伊賀の住人大伴息人を、志能便として側近に置いた、という。
忍者第一号であった。
忍びの術を発達させたのは、修験道の山伏であった。かれらの子孫が、伊賀・甲賀の山峡に、土着して、その術を、鍛錬修業して売るようになった。
戦国時代に於ける伊賀の頭領株（上忍）は、三名いた。
百地三太夫・藤林長門守・服部半蔵。
その三名の下に、それぞれ、数百人の下忍がいて、諸侯にやとわれて、働いた。石川五右衛門も、下忍の一人であった。
「当家には、間兵と称ぶような忍びの術の手練者は、居りませせぬ」
「はたして、そうかな」
主膳は、うすら笑った。
藤堂高虎が、伊賀に入るや、上野に城下町をつくるとともに、忍者を調査登録して、その主だった者を、武士にとりたて、また、無足人（郷士）の制度をつくって、かれらを村郷に住まわせた。さらに、上野城下には、忍町を設けて、忍者の住宅地とした。
名張藤堂家も、それにならって、山峡に住む百地三太夫らを、無足人としたことは、疑いもな

い事実であった。

しかし――。

この時代には、伊賀者は、江戸城添番の下にいる三十俵何人扶持という軽い武士としてしか存在しなくなっていた。伊賀者は、もはや、伊賀国にはいない、というのが常識であった。

そして、忍びの術を修練した隠密（庭番）は、外桜田の公儀御用屋敷に住んでいるだけで、諸国の大名衆は、一人の忍者も擁していない、ということになっている。

「はたしてそうかな」

下条主膳は、うすら笑い乍ら、

「ご当家には、寛永年間から、組外之衆、母衣（ほろ）組衆、鉄砲頭衆、留守居衆、忍之衆（しのび）と、各部署がきめられて、日夜調練にはげんで、今日にいたっている事実は、まぎれもない。公儀より禁じられている爆薬の製法などにも、無足人鉄砲目付が、はげんで居ることは、すでに、つきとめてある。……毎年正月、領主臨席の下に、爆薬の実地演習が行われているのも、明白なる秘密。先年、柳生飛騨守（ひだのかみ）領分の郷士が、それをぬすみ視ようとして、暗殺された事実も、調べずみである。……ご当家に、忍之衆が、百名以上もいることを、いまさら、かくしても、はじまるまい」

そう云いはなって、二人の家老を、睨み据えた。

三

鎌田将監と小野三左衛門は、戦慄（せんりつ）した。

――このお目付は、わが藩を、とりつぶしにやって来たのか？

そう疑わずにはいられなかった。

とたん——、主膳は、高い笑い声をたてた。

「ご当家が、忍之衆を多勢、やしなって居られるのは、むりもない事情と、お察しいたす。……つまり、宗家の津城主に対抗するためでござるな。そうでござろう。この下条主膳は、享保年度に起った騒動を、承知して居り申す」

享保騒動とは——。

享保元年、五代を継いだ名張藤堂の当主長熙(ながひろ)は、豪毅(ごうき)の性情の持主であった。始祖高吉以来、名張藤堂家が、津藤堂家の家従のごとき状態に置かれているのが、大いに不服であった。

その始祖を比べてみても、禄高とは逆に、家格に大きな差があった。高吉は、桓武帝の後裔(こうえい)丹羽氏の直系であり、高虎は、江州の一介の地侍の伜(せがれ)にすぎなかった。

高吉は、高虎の養嗣子にされたばかりに、生涯臣従させられてしまったのである。

高虎は、実子高次に家督を継がせるとともに、将軍職が家康から秀忠に代るどさくさにまぎれて、高吉の直領地二万石も、自身の領地のように書きかえてしまったのである。高吉は、名実ともに、家臣の格に落されたのであった。

五代長熙は、家格をとりもどし、完全なる独立大名になろうとほぞをかため、江戸詰めの聞番(ききばん)役七条喜兵衛に命じ、本家丹羽家に働きかけ、あるいは、公儀用人大久保源次郎らを通じ、幕府評定所に、この議がはかられるように、奔走せしめた。名張からは、横田太右衛門、鎌田新兵衛、小沢宇右衛門ら重臣を、出府せしめて、大いに働かせた。

目的貫徹の見通しも、ほぼついた享保二十年正月、突如、上野城代の代理として、上野から、藤堂修理が、手勢を引具して、名張へやって来た。

「宗家をだし抜いて、家格を上げようとする企みが為(な)されている風聞があるが、真相は如何(いかん)？」

長煕は、その詰問に対して、「自分はただ、将軍家へお目見(めみえ)したい、と人に話しただけだ」と、こたえた。

藤堂修理は、いったんひきあげて行ったが、いつの間にか、要所要所に見張番をたてて、名張を包囲する臨戦態勢を布(し)いた。

名張家中では、急使をしたてて江戸表へ訴え出、宗家と一戦を交えるもやむなし、と硬論がわいた。

上野城代藤堂玄蕃(げんば)からは、長煕に、至急上野城へ登城するように、と云って寄越した。長煕は、眼病を口実に、ことわった。

津からは、藤堂隼人(はやと)ら重臣はじめ、用人、奉行らも出張して来たし、藤堂兵庫らは、手勢を国境に陣取らせた。

名張からは、鎌田新兵衛、山崎太郎左衛門が使者として、上野城へおもむき、宗家側藤堂玄蕃、藤堂隼人と、はげしく応酬した。

応酬の挙句、宗家側は、主人が眼病ならばしいて登城を求めぬが、家老三名、用人三名、そして江戸聞番役を出頭させよ、と迫った。

そこで、名張家老鎌田将監・小沢宇右衛門・鹿道左近衛門、用人小沢藤右衛門、給人山崎太郎左衛門、奉行横田太右衛門、江戸聞番役七条喜兵衛の七名が、主君長煕に別れを告げて、上野城に向った。生きて還らぬ覚悟であった。

七名は、宗家重臣連から、厳重な取調べを受けた。

しかし、一同かたく口を緘(と)じて、主家に不利になるようなことは、一切しゃべらなかった。

やがて、家老小沢、用人横田、聞番役七条が、進み出て、

「このたびの儀、責任はことごとく、われら三名にあり、主家のあずかり知らぬところでござる」

と、云いきり、三名とも切腹して相果てた。

長煕は隠居して、家督を、嫡子長美にゆずり、騒動は、けりがついた。

この騒動があってから、名張藤堂家に対する宗家の警戒は、きわめてきびしいものになった。家臣が旅をするのにも、宗家藩庁の許可を必要として、名張家中から他家へ使者をたてる時はもとより、他家からの客を受ける時も、いちいち上野城へ届け出なければならなくなった。経済上でも、宗家は、圧迫したし、諸儀式の使者に対する慣例なども、以前の鄭重(ていちょう)さとは、うってかわり、冷遇をきわめたものになった。

宗家では、名張藤堂家の領主を、本藩家臣や領民が、「殿様」と呼ぶことさえ、きつい達しをもって、止めさせたくらいである。

津藤堂家のこうした苛酷なやりかたに対して、名張藤堂家が、

——いつかは、目にものみせてくれる！

と、怨念(おんねん)を燃やしつづけて来たことは、想像に難くない。

怨念をこめて、父子相継いでひそかに鍛錬修業して来た忍者たちが、いかに役に立つか——それに、下条主膳は、目をつけたのである。

「実は、ほかでもない、ご当家がやしなって居られる一騎当千の無足忍之衆を、この下条主膳に、貸して頂きたい」

公儀お目付は、はじめて本音を吐いた。

「どうなさいますので？」
「眠狂四郎という仮名を持つ浪人者が、今明日中に、当地を通るはずでござる。そやつを、生捕り申す」

四

眠狂四郎が志摩からひきかえし、古市に現われ、そこからまた姿を消し、二日後、六軒茶屋から左折して伊賀国に入った模様である、という急報を、四日市で受けた下条主膳は、急遽（きゅうきょ）、亀山（かめやま）から鈴鹿（すずか）を越えて、伊賀国に入り、上野を通って、名張に至ったのであった。

上野・名張には、すでに、かなり前から、配下を二名ずつ、待ち伏せさせていた。

狂四郎は、まだ、どちらの町にも、入って来た気配がなかった。

主膳は、そう見当をつけたのである。

「青山峠あたりに、身をひそめているに相違ない」

狂四郎が、志摩国へ入ったのは、尾行者どもを、わざとひきまわすだけのためではなく、行先があったに相違ない。その行先を、配下がつきとめられず、狂四郎の姿を見失ったことは、主膳を激怒させたものであった。

狂四郎は、その行先で、何を為し、何を得たか、ひきかえして来たのである。

こんどこそ、主膳は、いかなる手段にうったえても、狂四郎を捕縛して、泥を吐かせる決意をしていた。そのためには、秀れた手練（てだれ）者をそろえなければならなかった。

名張藤堂家の無足忍之衆こそ、狂四郎の敵として立ちむかわせるにふさわしい面々であった。

下条主膳の推測は、あたっていた。

眠狂四郎は、青山峠の山中にいた。

峠の頂上の地蔵堂前で、捨てかまりの弥之助が、屋根から栃の葉を降らせてくれたおかげで、志村源八郎の片手を両断した狂四郎は、弥之助の遺骸を屋根からおろし、堂内に安置しておいて、立ち去ろうとした。

その行手を、木樵（きこり）ていの男が、さえぎって、声をかけて来たのである。

「相変らず、見事な業前（わざまえ）でござるの、眠狂四郎氏（うじ）は――」

初老の男は、微笑し乍ら、云いかけて来た。志村源八郎との決闘を、木立の蔭から、目撃していたのである。

「お主も、敵か？」

「四年前まではな」

「こちらに、おぼえはないが……」

男は、微笑をつづけ乍ら、黙って右手をさし出した。その小指の爪が、漆黒であった。

「黒指党の生き残りか」

公儀隠密集団に、黒指党という、白河楽翁（しらかわらくおう）（松平定信）によって、旗本八万騎の子弟からえらばれて二十余年の異常な修練を積んだ徒党がいた。

その黒指党は、徳川家の嫡流を誇る風魔一族と、双方合わせて八十余名が、激突し、血みどろの修羅場をくりひろげて、敵味方とも一人残らず、全滅したのであった。四年前の出来事であった。

ところが、黒指党員が、一人だけ、生き残って、この伊賀山中に、かくれ棲（す）んでいたのである。

死地志願

一

伊賀をはさんで、大和と伊勢をむすぶ代表的な街道を、初瀬(はせ)街道という。

大和初瀬から、宇陀(うだ)川沿いに屹立(きつりつ)した奇怪な岩石ばかりの山岳の裏手唐懸(からかけ)坂を通って、鹿高(しかたか)へ出、そこから丈六(じょうろく)、長屋という小さな聚落を経て、名張に入り、小波田(おばた)を過ぎ、七見峠を越えて、羽根という村へ抜け、伊賀と伊勢をへだてる青山峠を越える街道であった。

伊勢詣(もう)での人や、商人の往来がしきりの街道であった。

名張の盆地を、西方に遠望する七見峠の上に、一軒だけ、腰掛茶屋があった。

上りの旅人も下りの旅人も、名張の町で、憩(いこ)うことにしているので、七見峠では、さっさと膝栗毛(ひざくりげ)をいそがせることになる。

あきないにならぬ茶屋のようであったが、店で立ち働く、赤襷(あかだすき)に赤前掛の十六七の小娘は、くったくなく、唄っている。

　年は十七、お酌に出たら、
　ひとつ、肴(さかな)を好まれて、
　歌をうたうに、種がなし、
　一の谷こえ、二の谷こえて、
　三の谷目のその奥へ、

　千なりなすびを植えおいて、
　空飛ぶ鳥の雁や鶴、
　磯べを伝う鯉や鮒、
　それを肴に、召上がれ

その鄙歌を、茶屋のうしろに建っている草庵で、眠狂四郎は、きいていた。
志波十兵衛という、公儀隠密集団黒指党の生き残りが、余生を送るためにひらいている茶屋なのであった。
狂四郎は、案内されるままに、この草庵で、一泊していた。
志波十兵衛は、昨日の宵、出て行ったきり、いまだ、戻って来ていなかった。
昨日の昼、草庵で対坐してから、狂四郎と十兵衛のあいだには、次のような会話が、交わされていた。
「眠氏は、いまもまた、降りかかる火の粉をはらい乍ら、旅をされて居られるか？」
十兵衛は、訊ねた。
「まず、そんなところだ」
「十日あまり前から、この茶屋にも、公儀隠密らしい御仁が、三度ばかり現われて、お手前の風姿を説明して、すでに通ったか、まだか、尋ねて居り申す。……もし、おさしつかえなければ、事情をお打ち明け下され。それがし、なにかのお役に立てようかと存ずる」
「お主は、生き残ったのをさいわいに、しずかな余生を送っている身ではないのか」
黒指党というのは、傾いた幕政の支柱たるべく、白河楽翁によって、旗本八万騎の内より特にえりすぐられて、ひそかに組織された集団であった。

元服とともに、組み入れられ、まず、甲賀・伊賀の里で、十年の修業を重ねた挙句、日本全土をひと巡りした後、正式に党員に加えられた、意志と体力と武芸がほぼ完全に充実している人によって、組織されていた。

しかも、この秘密組織を知る者は、公儀中にも、ごくわずかであった。いや、党員自身も、どれだけの頭数をもって組織されているのか、知らなかった。ひとつの目的を遂行するために集められる場合、常にきわめて限られた頭数であり、互いにその姓名さえも知らず、十指のうち、同じ指の爪を黒く染めているのをみとめて、同じ任務を命じられた、とさとるばかりであった。

かれら黒指党が、公儀に尽したかげの働きは、しかし、記録に残されてはいない。

おそらく人間ばなれした心身の力の極限までの働きをしたのち、その殆どが、死に絶えたに相違ない。

徳川家正統を主張する風魔一族と闘った黒指党四十余名が、ことごとく地面に屍となって横たわった一例をみても、あきらかである。

志波十兵衛は、もしかすれば、何百名かの黒指党員のうち、生き残った唯一人かも知れなかった。

「左様——、生き残ったのは、奇蹟と申せるこの貴重な生命をいたわって、平穏無事にすごす気持は、つい十日前まで、つづいて居り申した。……ところが、公儀隠密衆が、お手前をさがしもとめている、と知った時から、それがしの体内の奥底にねむっていた黒指党員の闘志が、にわかに、目ざめたのでござる」

「………」

「元服の年から、生きることとは闘うことだと教えられ、日常坐臥の一瞬裡にも、それを忘れず、

修業にはげみ、そして、闘って参った二十五年の歳月は、それがしを、いかに飼い馴らそうとしても、所詮、家畜にはなれぬ狼にして居り申す」

「………」

「四年前の正月元日、風魔一族の志村原館に、一党四十六名をもって斬り込んだ際、それがしは、重傷を負うて倒れ、そのまま事切れるべき身が、どうした次第か、息をふきかえして、生き残り申した。……それがしは、意識をとりもどして、刀を杖にして門前へ出た時、敵の軍師風魔右門が――これも、それがし同様、重傷を負うて、血まみれ姿になって居り申したが――、館の下僕どもに命じて、駕籠に乗ろうとしているのを、見出したのでござる」

十兵衛は、そのあとを尾けた。

元日の朝であったので、往還に人影はなく、よろめき進む十兵衛は、見とがめられず、また、駕籠をかついでいる四人の下僕が、いずれも七十越えた老爺どもであったので、歩みがのろく、見失わずに、行先をつきとめることができた。

二

「風魔右門が、訪れたさきは、お手前の住宅でござった」

十兵衛に云われて、狂四郎は、その日の光景を、脳裡によみがえらせた。

白衣白袴を、蘇芳色に染め、全身いたるところを斬られて、すでに体力の竭きた身を、風魔一族最後の一人にふさわしい死処を得ようとする意志のみで、そこまではこんで来た風魔右門と、狂四郎は、対決したのであった。

狂四郎が、瀕死の敵に対して、円月殺法を用いたのは、その時が、はじめてであった。

そして、狂四郎は、思いがけなくも、おのが編んだ殺法が、慈悲の剣になるのを、知ったのであった。

年始の明るい陽光の中の空間を、ゆっくりと円を描いた無想正宗は、しずかに、対手を死出の旅へ送ってやる剣となったのである。

はじめは、かっと瞠かれ、凄まじい眼光をはなっていた右門の双眸も、まわる切先を追いつづけるうちに、徐々に、細められた。五体から、みなぎっていた鬼気は去り、顔面は、いっそなごやかな催眠の色を刷いた。

白刃が、完全に円を描きおわった時、右門は、目蓋をふさぎ、朽木が倒れるように、霜が溶けはじめた土の上へ、横たわったのであった。

「それがしは、その光景を、物蔭から、目撃していたのでござる。……お手前の姿が、それがしには、慈悲忍辱を修めた高僧よりも、はるかに、貴いものに仰がれたのを、忘れ申さぬ」

十兵衛は、そう語って、「お手前のお役に立って、ひと働きしてみとうござるゆえ、事情をお打ち明け下され」と、頭を下げたのである。

狂四郎は、その瞬間、

——この人物と出逢ったのは、幸運といえるのかも知れぬ。

そう感じたのであった。

志波十兵衛のたすけがなければ、伊賀国を通り抜けられぬ、という予感が、狂四郎に、口をひらかせて、このたびの騒動のいきさつを、語らせた。

ききおわった時、十兵衛は、

「因縁でござる。……下条主膳は、黒指党幹部の一人でござった。いつの間に、お目付に出世い

たしたものか」
と、云った。
「そうか。黒指党幹部であったのか。それで、判った。配下に、わたしを襲わせる方法が、ただのお目付らしくない巧妙さであった」
「対手が下条主膳ならば、お手前が、この初瀬街道を往くのを、看通したに相違ござらぬ。……今日は、ここにとどまられて、お待ち頂きたい。それがしが、名張までおもむいて、様子を調べて参り申す」
十兵衛は、採りためた漆を、問屋へ持参するとみせかけて、昨夕、店を出て行ったのである。
狂四郎は、その戻りを、待っている。
「お客様――」
店から、草庵へ入って来た小娘が、声をかけて来た。
「もうすぐ、お午になります。竹の子飯でもおたきしましょうか、それとも、鱒でも焼きましょうか？」
「茶漬けでよい」
「山家の古漬け大根など、お口に合いますまいに……」
さわいと呼ばれている小娘は、大人びた口をきいた。
ただのやとわれ茶汲みではないようであった。
「わたしには、それが、馳走になる」
「そうでございますか。では、すぐに――」
ひらと身をひるがえして、店へ出て行くのを、見やって、狂四郎は、身ごなしの軽さに、忍び

の術の心得があると、看た。

十兵衛が、安心して留守をまかせていられるのは、ただの娘ではないからに相違なかった。

狂四郎は、膳部をはこんで来たさわに、

「いましがた、跫音をしのばせるようにして、通って行った一行があったが――？」

と、訊ねた。

「はい、お館の無足忍之衆（しのびのしゅう）が五人あまり、東へ行かれました」

さわは、茶碗へご飯をよそい乍ら、こたえた。

「そなたも、もしかすれば、無足忍之衆の家に生れたのではないのか？」

「おわかりですか、お客様」

さわは、にこりとした。

「うむ。なんとなくな」

「わたしは、この伊賀の上忍の一人――百地家のむすめでございます」

「すると、百地三太夫の末裔というわけか」

「そうでございますよ。それじゃけに、女子（おなご）といえども、容赦せず、物心ついた頃から、忍びの術を習わせられました。きついことでございました」

云ったとたん、さわは、坐ったなりで、片手をとんと畳に突き立てた。すると、重量のない物体のように、ふわりと宙に飛びあがり、一回転して、裏庭へひょいと降り立った。

「なにをして居る！」

いつの間にか、十兵衛が戻って来ていて、木立の中から姿を現わした。

三

十兵衛は、狂四郎の前に坐ると、
「容易ならぬことに相成り申した」
と、云った。
「下条主膳が、名張に来ているのか？」
「お手前が、津の六軒茶屋から、初瀬街道に入った、という急報を受けたお目付は、四日市から、馬をとばして、名張に到着いたした。昨日のことでござる」
「邀撃されることには、なれている」
「いや、名張に於ける邀撃は、お手前を確実に死に追い込み申す。……お目付は、名張藤堂家の家老たちを、おどして、無足忍之衆百名を借り申した。……今朝がた、まず、忍之衆五人ずつが、初瀬街道はじめ、上野街道、薦生街道、笠間街道、その他の間道、杣道に、ちらばり申した。網は張られたのでござる。お手前が、百歩も歩けば、すぐに、発見され申す」
「やむを得ぬ。これまで、かぞえきれぬほど、死地をくぐり抜けて来ているし、これからも、そうする宿運を背負うている男なのだ。……あぶないところにのぼらねば、熟柿は食えまい」
「眠氏、われら黒指党に、術をさずけてくれたのは伊賀・甲賀の無足忍之衆でござる。かれらが、どれほどの凄まじい忍びの業をそなえているか、お手前といえども、ご存じござるまい」
「……………」
狂四郎は、たったいま、さわが、坐ったままで、片手突きで、宙返りして、庭へ跳び降りるのを、見物させられている。十六七の小娘でさえ、あれだけの技を、かるがるとやってのけてみせ

るのである。

名張の無足忍之衆が、いかに、おそるべき強敵であるか、戦慄するに足りる。

十人や二十人ではないのである。百人が、おのれ一人めがけて襲いかかって来るのである。

「眠氏、事情をうかがえば、お手前は、奈良に入って、太閤遺産を、手に入れるまでは、死んではならぬ身でござろう。……好んで、死地に入る無謀は、お避け下され」

「お主の力をかりれば、この伊賀を脱出できる、というのか？」

「手段（てだて）は、ひとつだけござる」

「うかがおうか」

「それがしは、さいわい、お手前と、からだつきが、似て居り申す。替玉となることができると存ずる。遠目ならば、お手前とみせかける貌（かお）に、作る術も心得て居り申す」

「ことわる」

狂四郎は、言下に拒絶した。

「替玉になるとは、その生命をすてることだ。わたしは、これまで、他人をおのれの替玉として死なせるような卑怯（ひきょう）な振舞いをしたことがない」

「眠氏、これには、条件がござる」

「……？」

「さわをつれて行って頂きたい。しかるべき若者を見つけて、嫁がせて頂ければ、と存ずる。……それがしは、いま、さわが幸せになることだけを、願って居り申す。何故ならば、さわは、それがしの娘だからでござる」

「………」

「それがしは、二十五年前、この伊賀国に入って、黒指党員たるために、修業を積み申したが……、ふとしたはずみから、百地家の娘と相通じ、孕ませ申した。しかし、娘が身二つになるのを、見とどけ得ず、名張を去ったのでござる」

「…………」

「それがしが、この七見峠に、掛茶屋をひらいたのは、しずかに余生を送るためでござったが、ひとつには、わが子とくらすためでもござった。……生き残って、十七年ぶりに、おとずれてみると、さわは、母と生き写しで、すくすくと育って居り申した。……それがしは、百地家に乞うて、さわをもらい受け、この掛茶屋をひらいたのでござる。……それがしは、父と名のらず、さわもまた、それがしを、実父とは知り申さぬ」

「…………」

「眠氏、何卒、さわをお引き受け下さるまいか。公儀隠密のなれの果てが、父親として、お手前に、お願いつかまつる。……左様、黒指党の生き残りとしては、せめて、最後は、それらしい死にざまをいたしたい、という気持も強いのでござる」

四

それは、木樵も猟師も知らぬ、けものみちであった。

狂四郎の前に立って、灌木を押しわけて進むさわだけが、知っていた。

けものみちは、辿れば必ず、渓流に至る。しかし、その渓流に沿うて、街道乃至間道がつくられているので、流れの音がきこえるあたりで、密林をくぐらなければ、危険であった。

その歩行は、難渋をきわめた。

狂四郎は、さわの身軽さと方角を見失わぬカンのたしかさに、舌をまいた。

進めば、確実に、次のけものみちに出ることができた。

陽が、沈みかかった頃あい、さわは、

「ちょっと待って下され」

と、ことわって、檜(ひのき)の幹を、するすると、のぼって行った。

すぐに降りて来ると、

「もう安心じゃ。赤目滝が、すぐそこゆえ、見張りの目から、はずれました」

と、告げた。

「赤目滝というのは？」

「役小角(えんのおづぬ)がひらかれたという、修験道の霊場です。大きな滝や小さな滝が、たくさん落ちていて、それはもう、眺めの美しい谷でございます。わたしは、子供の頃、流れにとび込んで、大きな山椒魚(さんしょううお)を、幾尾も、つかまえました。……赤目滝は、霊場ですから、忍之衆は、近づきませぬ。ご安心なされませ」

さらに一里あまり進んで、山中が昏(く)れなずむと、狂四郎とさわは、巨巌の蔭で、休憩した。

――いま頃は、もはや、十兵衛は、死骸となっているかも知れぬ。

この想像は、狂四郎に、名状し難い苦痛を与えた。

「小父様――」

さわが、呼んだ。

「小父様は、十兵衛殿から、わたしの身柄をお預かりなされましたが、その時、十兵衛殿は、わたしとは、父娘(おやこ)じゃ、と申したのでございましょう？」

「ぬすみぎきしていたのか？」

「はい」

「そなたの父親は、そなたのために、わたしの替玉になった」

「ちがいます」

「ちがう、とは——？」

「小父様は、十兵衛殿に、だまされました。……わたしは、十兵衛殿のむすめではございません」

「……？」

「ただの養女でございます。……十兵衛殿は、わたしが実の娘といえば、小父様が、納得される、と考えたのです」

「……………」

「十兵衛殿は、あのような茶店のおやじとして、死ぬのが、おもしろくなかったのでございます。……忍びの達人らしゅう、はなばなしい働きをして、さいごを飾りたかったのじゃと思います」

「そうか。そうであったのか」

狂四郎は、十六歳の小娘に教えられて、おのれの暗愚を、自嘲した。

「十兵衛殿は、別れのきわに、そっと、わたしに申しました。……眠狂四郎氏に、決して惚れてはならぬぞ。あの御仁は、女子を不幸にするのだ。奈良に入ったら、すぐ別れるのじゃ、と」

「その通りだ。尤も、まだ、そなたは、恋慕の情をおぼえるには、稚なすぎるが……」

「いいえ、小父様。わたしは、ここまで、貴方様をご案内するあいだに、なにやら、好きになって参りました。不幸になってもいいから、どこまでも、ついて行きとうなりました」

「ばかなことを云わぬがよい」
眠狂四郎が、十六歳の小娘の前で、狼狽をおぼえたのは、はじめてのことであった。

救い手

一

赤目滝。
名張南方の渓谷がつくる大小四十八の瀑布の美しさは、当時はまだ、一般の庶民に、知られていなかった。
名張の儒者鎌田梁洲が、『観瀑図誌』を著わして、その景勝を世間にひろめたのは、ずっと後年――文久年間であった。
この頃は、文人墨客の来遊は、まだみられなかった。
修験道の霊場として、地下の者も、四十八滝を、つぶさに眺めた者は、ほとんどいなかった。
名張藤堂家の当主さえも、赤目滝の入口にある延寿院という、不動明王を本尊とする天台宗の古刹に、たまさか、詣でるだけで、奥へは、足を入れなかった。
尤も――。
修験者でさえも、一人では、とうてい入ることが叶わぬくらい、岩を越え、流れを渉るのは危険であった。
四十八の瀑布は、およそ一里の渓谷にちらばって居り、すべて姿態を異にしていた。

深い甌穴（滝壺）を持った瀑布をつなぐ、早瀬・急湍・淵・瀞も、同じ眺めのものは、ひとつもなかった。

水と岩石がつくった文字通りの絶勝であった。

前澗と後澗に分れ、名瀑は前者に多かった。

巨巌の間を流れる行者滝、山の峰に高く懸る銚子滝、柱状の巌壁を鋭くあらわした霊蛇瀑。

前澗の最後は、赤目滝の中で最も豪壮な不動滝であった。高いなめらかな岩壁から、流れ落ちる水音は、ごうごうと耳をつんざき、飛散する水滴が霧のようにただよう下に、神秘な蒼く黒い水面がひろがっていた。岩と樹木にかこまれた甌穴は、昼もなお暗かった。

不動滝から、巨巌の肩をよじのぼって、進むうちに、突如として、石の磧に至る。そこには、大小の奇怪な形状をもった石が、るいるいとちらばっている。数人乃至十数人が坐すことのできる平面を持った石もあった。

石の磧の緩流部を過ぎると、やがて大段階をなす地形に接する。

古木が枝を交叉させた下を、枝状となって落ちる千手滝、磨きあげたようななめらかな巌肌に、布を懸けたような布曳滝。

布曳滝の上流百歩ばかりの地点に、渓谷の岩盤に生じた自然の井戸があって、その深さを測り得ない。

ここで、前澗をおわり、後澗に入ると、早瀬、急流が目まぐるしくなり、その間に、百人以上も坐すことができる巨大な岩もある。

まさに——。

仏道行法の徒が、瀑布に打たれ、岩上に結跏趺坐するに、うってつけの渓谷であった。

役小角が開いた、という伝説のもとに、ここに建てられた赤目寺（延寿院の前身）は、鎌倉・室町時代に至って、大いに栄え、山岳宗教とむすびつき、修験道の道場となった。

また、伊賀一国の納経所にもなって、牛王宝印を発行して、塔頭に八坊を有った。

天正九年、織田信長によって、赤目寺は、あとかたもなく焼きはらわれて、辛うじて八坊の一である円寿坊だけが焼けのこって、延寿院となったが、修験道の霊場としての伝統は、存続した。

津藤堂家では、赤目滝を含む付近一帯の広大な山地を、延寿院に寄進したし、名張藤堂家もまた、家中及び地下の者たちが入るのを禁じて、行者の自由な修練苦行にまかせた。

眠狂四郎とさわという小娘は、その霊地に、ひそかに、踏み入ったのであった。

二

赤目滝後澗の最も奥の瀑布は、荷担滝という。

赤目渓谷の本流と、南方から流れる山淑谷川の合流点にあたり、自然の堰堤がつくられて、深潭をなし、水は、堰堤となる巌の肩を左右に分れて、落ちていた。

「小父様、ここから、赤目滝でございます。行者に見つからぬように参りましょう」

さわは、そう告げておき乍らも、裾をたくしあげて、二流の瀑布が落ち込む滝壺へ、じゃぶじゃぶと入って行き、

「ああ、いい気持！」

と、にっこりした。

狂四郎は、巌の上から、その姿を眺め下ろし乍ら、

——修験道の霊場を、素浪人と娘が通るのを、かれらが、はたして、許すかどうか？

その疑いをわかせていた。

修験道は、山岳をはなれては、成り立たぬ。行者にとって、山は、唯一の修行の道場である。世間を俗塵（ぞくじん）の葛藤（かっとう）場とみなして、山谷にわけ入り、あるいは、閑寂な洞窟（どうくつ）に入って是仏の観法を凝らし、あるいは白雲去来する峰の岩上に坐して、護摩の火焔（かえん）に対し、即心即仏を観念し、さらには、山嶺（さんれい）の絶壁をよじのぼったり、轟々（ごうごう）と落下する瀑布に打たれたりする威圧と危険の下で、法悦を知るのが、修験道である。

それゆえに、行者にとって、山岳はただ崇高とか森厳というとらえかたではなく、神秘な宗教的情操を基礎として行法をなす、けがれのない霊地でなければならなかった。

天候の激変に堪えるとともに、山中にある悪気毒気の魔障を祓除（ふつじょ）し、幽鬼妖怪（ようかい）のたぐいを慴伏（しょうふく）する精神が、強く働いている。

とすれば、俗世間を代表するような素浪人や娘が、入り込んで来るのを、行者が、許す道理がない。

狂四郎のこの不吉な予感は、やがて的中した。

さわが、狂四郎をみちびいたのは、大小奇態の石が磊々（らいらい）と横たわっている石の磧であった。

彼処此処（かしこここ）の岩上に、坐している行者の白衣姿が、見受けられた。

さいわいに、かれらは、目蓋を閉じているので、跫音（あしおと）だけを消せば、発見されずに、岩蔭（いわかげ）から岩蔭へ、移ることができた。

木立の中には、小さな庵（いおり）が幾棟も建てられていた。

さわは、無人の庵を見つけて、狂四郎を、さしまねいた。

「ここに、三日ばかり、ひそんでいれば、大丈夫、奈良へ行くことができます」

さわは、云った。

赤目滝下流の出入口である延寿院付近、また、上流の椿谷から、曽爾街道へ出るあたりには、無足忍之衆が、伏せているに相違なかった。

かりに、そこを突破できたとしても、通報は矢の早さで、名張の殿館へもたらされ、ものの二里も趨らぬうちに、追跡包囲されるのは、目にみえていた。

「この庵に、三日もひそんでいられるかな。せいぜい、一泊できれば、さいわいとせねばなるまい」

狂四郎は、そう云った。

「誰にもまだ、見つかっては居りません。わたしが、こっそり、魚を獲って来て、焼いてさしあげます。……糒はまだ四日分ございます」

さわは、充分自信ありげだった。

狂四郎は、さわの働きにまかせて、じっとしているよりほかに、為すすべはなさそうであった。

庵内が、昏れなずんだ頃あいであった。

さわが、半刻ばかりどこかへ出かけていたが、音もたてずに、忍び戻って来た。その手には、鮎を通した笹を携げていた。

ふところからは、自然薯と竹の子をとり出してみせ、

「小父様、お腹が空いておいででございましょうが、夜にならねば、煮たり焼いたりできませんから、あとしばらくがまんして下され」

と、云った。

「一日ぐらい、何も食わずにいることは、べつに苦痛ではない」

狂四郎がこたえると、さわは、急に真剣な面持になり、居ずまいを正して、
「小父様。わたしを、女にして下さりませ」
と、唐突に、意外な言葉を口にした。
「……………？」
「わたしは、小父様のために、働きとうございます。いのちをすてても、小父様を、奈良へ行かせてさしあげとうございます。……そのために、死んでも、悔いのないように、貴方様から、女にして頂ければ、わたしは、どんな働きでもできます」
「……………」
「小父様。お願いでございます！」
さわは、平伏した。
「そなた、女になるということを――男女が契るとは、どういう行為か、知識があるのか？」
「存じません。……ただ、殿御に抱かれて、なにやら、非常にはずかしいことをされることじゃ、ときいているだけでございます」
「その行為は、そなたは、そなたの良人になる男から、されなければならぬ」
「いいえ！」
さわは、きっぱりとかぶりを振った。
「わたしは、貴方様によって、女にされて……、いのちをすてる働きをしとうございます。女子は、肌身をゆるした男子のために死ねる、と申します。他人の貴方様のためには、死ねませぬ！」
「わたしは、どんな女でも、平気で抱ける男だが、そなただけは、かんべんしてもらおう」

「なぜでございますか？」
「そなたを、死なせたくないからだ」
「死ぬとはかぎりませぬ。大丈夫です。ご心配なされますな。……貴方様を、ぶじに奈良まで、お行かせして、その時、このさわもちゃんと生きて居ります」
狂四郎は、だだをこねるならここで別れる、と云いきかせたかった。しかし、さわの手びきがない以上、伊賀国を通り抜けるのは、不可能事であった。また、さわも、絶対に、はなれはすまい。
狂四郎は、当惑した。
無頼の徒である。十六歳の処女を、抱くことに、倫理上のためらいはない。破瓜（はか）とは、十六歳と解する説もある。十六歳で非処女になるのを、隣邦支那では、常識とした。そういう知識も、狂四郎には、あった。
ただ——。
非処女にすれば、この娘は、おれのために必ず生命を落すことになろう、という予感が、狂四郎の心中にあったのである。

三

「小父様、お願いでございます！」
さわは、いざって、狂四郎に迫ると、膝（ひざ）へ手を置いた。
狂四郎は、腕を拱（こまね）いたなりで、動かぬ。
さわは、つと、その膝へ、頬を重ねた。

「……女になりとうございます、さわは——」

「…………」

「駄目でございますか？」

「…………」

狂四郎は、黙って、腕を解くと、さわを起きあがらせた。

そうした近さで、ようやく、顔が見分けられるくらいに、闇が満ちていた。

狂四郎が、なにか云いきかせようとした——その折であった。

多勢の跫音が、ひびいて、この庵に近づいた。

「あっ！」

はね起とうとするさわを抑えて、

「うろたえるな。なるようにしかならぬ」

と、狂四郎は云った。

松明のあかりとともに、

「庵にひそむ者どもに、物申す！」

大声が、つらぬいた。

「きけ！　当赤目渓谷は、金胎両部の浄刹、無作本有の曼荼にして、森々たる嶺岳は金剛九会の円壇、鬱々たる巌洞は胎蔵八葉の蓮台、山川草木は遮那の直体、嶺風瀑音は法身の説法。……この釈尊常在説法の霊地を、無断にて、穢れ果てたる土足でけがすとは、何ごとぞ！　出い！　仏罰が、いかにおそろしいものか、目にものみせてくれようず！」

まことに、大袈裟な文句をつらねると、一斉に、念誦読経の唱和をはじめた。

なにしろ、修験道の行者は、不動明王が悪魔降伏の大忿怒（ふんぬ）の相をもって理想としている。
考えようによっては、敵にまわせば、無足忍之衆よりも、おそろしい集団であった。
狂四郎は、立って、松明のあかりの中に姿をさらした。
「道に迷った者とお思い頂こう」
「黙らっしゃい！　当霊地は、いかなる街道、間道よりも、迷い込む方角に位置して居らぬ。……おそらくは、罪を犯し、追手に追われて、故意に、かくれ場所として、えらんだに相違ない。されば、猛獣、毒蛇、霊鬼と同様とみなしても、いささかもさしつかえなし。仏罰のほど、思い知らせてくれる。覚悟せい」
先達が、ぱっと錫杖（しゃくじょう）をふりかぶるや、他の面々も、それにならった。
そうするあいだにも、続々と、行者たちが、集まって来た。
——数百人が、こもって居るようだな。
そうみた狂四郎は、
「どうすれば、仏罰からまぬがれるのか、お教え頂ければ、したがおう」
と、云った。
「おのが身にとって、最も大切な品を残して、即刻、立ち去れ」
先達は、命じた。
「大切な品など、身につけて居らぬが……」
「武士にとって、最も大切な品といえば、刀にきまって居ろう」
「あいにくだが、これは竹刀だ」
狂四郎は、いつわっておいて、財布をとり出すと、

「路銀として、二十両あまり所持いたして居る。これを、置いて参ろう」
　と、申し入れた。
「よし！」
　先達は、意外にあっさりと許した。
　狂四郎は、庵内をふりかえって、
「さわ、参ろう」
　と、うながした。
　とたん、
「小娘は、行かせること罷りならぬ！」
　一喝が、とんだ。
「何故だ？　修験道の修行に、女人は必要あるまい」
「その小娘は、霊地の魚を盗んだ！　火あぶりの刑をもって、罪をあがなわしめるであろう」
「魚一尾獲ったただけで、火あぶりにするのか。……山伏の掟は、公儀の法度よりも、きびしいとみえる。……あいにくだが、この娘を、残してゆくよりは、御辺らを幾人か斬って、おのれもこの場で相果てる方を、えらばせて頂こう」
「なにっ?!　竹刀だなどといつわり居って、貴様は、やはり只の浪人者ではなかったな」
　先達は、行者たちを見まわすと、
「ご一同、この曲者を退治いたすことも、十界修行のひとつと、思われよ」
　と、云った。
　わあっ、と雷同の喚声が、あげられた。

——やむを得ぬ！　斬れるだけ斬って、血路をひらいてくれる！

狂四郎は、ほぞをかためた。

「さわ、習った忍びの術が、役立つ時だ。わたしよりひと足さきに、逃げろ」

ささやいておいて、包囲陣のどこを突破しようか、と冷たい眼眸（まなざし）をめぐらした。

「小父様、わたしにはかまわず、立ち去って下され！」

さわが、云った。

「そなたの案内がなくては、大和へ入ることは、叶わぬ」

「いいえ！　こんなところで、犬死されてはなりませぬ。お一人で、お行きなされ！」

狂四郎を必死で押しやろうとしたさわが、一瞬、悲鳴をほとばしらせて、その場へ、崩れ落ちた。

「さわ！」

抱き起した狂四郎は、その頸根（くびね）へ、ふかぶかと手裏剣が、突き刺さっているのを、みとめた。

手裏剣は、忍者の使うものであった。

狂四郎は、頭をあげた。

庵の屋根に、黒影がうずくまっていた。

狂四郎が仰ぐのと同時に、身を躍らせて、地上へ降りたった。

「行者衆——、霊場の魚を盗んだふとどき者は、成敗いたしました。……この浪人の身柄を、身共にお渡し下され」

「何者だ？」

「名張藤堂家の無足忍之衆でござる」

狂四郎は、無限につづくかと思われる竹藪の中を、無足忍之衆の先導で、一夜を歩き通した。
百地三郎兵衛と名のったその無足人は、
「参られい」
と、うながして、先に立って歩き出し、それきり、一言も口をきこうとしなかった。
狂四郎は、囚人になった気分で、百地三郎兵衛のあとにしたがったのであった。
夜がしらじらと明けそめた時、二人は、とある谿間に降り立っていた。
崎嶇という形容そのままの巌石の絶壁が、左右に屹立していた。
百地三郎兵衛は、足を停めて、狂四郎をふりかえると、
「この渓流に沿うて杣道を辿れば、女人高野——室生寺に、到着いたす」
と、告げ、
「身共が、室生寺まで案内つかまつる」
と、頭を下げた。
「うかがいたいが、わたしを追っている無足忍之衆が、どうして、遁してくれるのか？」
「身共は、志波十兵衛と二十年来の友にて、十兵衛から、お手前様の身の安全を、たのまれ申した」
「それだけの理由で、下条主膳を裏切るのか？」
「いや、名張無足人として、公儀お目付の虎の威を借りる狐のあまりに傲慢な態度に、肚を据えかねたのでござる。申さば、伊賀の忍びの心意気でござる」
本家津藤堂家から、ありとあらゆる威圧を蒙っている名張藤堂家の家中が、強権に対する反抗

心を根深くひそめていることを、下条主膳が、意識に加えなかったのは、公儀お目付として大いなる不覚といえた。

それにしても、さわを殺したこの無足忍之衆が、百地を名のっているのが、狂四郎には、気になった。

「お手前は、もしや、あのさわという娘と縁者ではあるまいか？」

「身共は、さわの父親でござる」

「父親！」

狂四郎は、息をのんだ。

「志波十兵衛は、おん身を遁すために、生命をすて申した。十兵衛にたのまれた身共が、娘一人を犠牲にするぐらい、なんでもござらぬ。……この香落渓（こおちだに）は、身共が警備地でござれば、貴殿を襲撃する者は他に居り申さぬ。ご安心下され。案内いたす」

百地三郎兵衛は、再び、先に立って、歩き出した。

淡々として、一切の感情をおもてにみじんもあらわさぬ、忍者らしい忍者であった。狂四郎の記憶に、永くとどまる人物の一人であった。

忍者割腹

一

眠狂四郎が百地三郎兵衛に先導されて辿った香落渓は、左右に岩石を削り落したような山岳が

屹立している深く長い紆余曲折の谿谷であった。

紅紫が、碧流に映り、その水が噛んでいる巌に、猿が憩うている流域に、道はなかった。

この奇勝が、行遊の地になったのは、百年も後のことになる。

百地三郎兵衛は、岩から岩へ跳び、樹枝や蔦などにつかまって、進んだが、その身軽さに、狂四郎は、おくれ勝ちになった。

奇勝を過ぎて、河内川の左右に、小さな野がひらけた時、三郎兵衛は、ちょっと、思慮の時間を持ったが、狂四郎をふりかえり、

「この曽爾の村を、通るのは、いささか、危険でござるが、貴殿は、べつに忍びの術を修得されて居らぬゆえ、あの兜岳の裏手の密林を抜けるのは、難渋でござろう」

と、云った。

右方に、兜岳という名称にふさわしいかたちの山が、野から突兀として、そびえていた。

名張忍之衆が、その曽爾谷の村落に、配備されているおそれは、充分にあった。

衝突を避けるためには、兜岳の裏をまわるべきであった。

「お手前が、裏切者として糾弾される厄に遭うのでなければ、わたしの方は、一向にさしつかえない」

狂四郎は、云った。

「身共は、かまわぬのでござる」

二人は、曽爾谷の聚落を、通り抜けることにした。

さいわいに、待ち伏せはなかった。

尾根道に入ると、三郎兵衛は、

「ここからは、もう、心配ご無用でござる。一刻も歩けば、室生寺に到着いたす」

と、告げた。

緊張を解いたその様子をみた狂四郎は、

「伊賀の無足人というのは、奉公の心がまえがちがって居るように、お見受けするが……?」

と訊ねた。

「左様でござる。伊賀無足人は、他国の郷士とは、いささかおもむきを異にして居り申す」

三郎兵衛は、こたえた。

郷士というのは、城下に住む一般武士に対して、郷村に居住する武士を、総称している。

藤堂藩に於ては、この郷士を、無足人と呼んでいた。

無足人という呼称は、鎌倉・室町時代に、すでにあった。所領や禄高のない武士の意味であった。

藤堂家では、この無足人に、特殊な内容を持たせ、ひとつの制度とした。

『実国史』の「職品」で、無足人を、次のように、規定している。

「農兵なり。俗に謂う無俸禄にて、公用に供するを無足となす。村里有名の家。報官、一副の甲冑、一根の長槍を自製す。すなわち、帯刀両口刀を許可する別衆戸。これを呼んで無足人という」

伊賀の無足人は、藤堂家が支配する以前には、国衆（土豪）であった。

天正九年に、織田信長が、攻め込むまでは、伊賀国は、兵火の外に平和を保っていた。戦乱の風雲に乗ずる守護大名がいなかったからである。

伊賀国は、東大寺と伊勢神宮の所領であった。その荘園支配が崩れるとともに、群小土豪が割

拠することになった。すなわち、国衆であった。
この国衆が、競うて修練したのが、忍びの術であった。土豪同士が、互いの小さな土地を奪い合うために、必死の手段として、忍びの術を発達させたのである。
やがて、天正九年に、織田勢の侵略を受けて、群小の土豪は結束して、これを邀撃(ようげき)し、国衆の主だった者たちの大半は、討死し、生き残った者も追放され、あるいは、亡命したのであった。
そして、その配下の武士は、帰農した。
藤堂家は、こうした郷士を、無足人としたのである。
したがって――。
伊賀の無足人は、藤堂家の家来であって、家来ではなかった。かたちは、家来であったが、俸禄をもらったわけではなく、先祖から受け継いだ土豪の精神を消さず、あくまでも、一匹狼(おおかみ)の誇りを持ちつづけていたのである。
藤堂家の方も、「村里有名の家」の土豪・国衆の生き残りが、新領主に対してあきらかな反抗態度を示したので、これを懐柔するために、無足人制度をつくったのである。
藤堂高虎が新領主として、入国した時、伊賀の帰農武士は、田畑の目録帳・水帳その他の記録類の提出を、頑として拒否し、抵抗したものであった。また、大坂夏の陣に出兵不在中に、波野田の一党が、藤堂家城代があずかる上野城を焼き打ちしようと企てたこともあった。
藤堂高虎は、この〝伊賀頑民〟を、弾圧するかわりに、かれらの誇りを生かして、無足人制度をつくり、巧みに支配機構の有力な支柱に組み入れたのであった。

二

「……つまり、身共らは、天正のむかしと同様に、忍びの者として、藤堂家からなんの束縛も受けずに、自由にくらして居り申す。たしかに、無足忍之衆は、藤堂家の母衣(ほろ)組衆や鉄砲頭衆や留守居衆と同格の守備隊でござるが、その性根は、忠義一途の家臣ではござらぬ。われらは、藤堂家入国以前からの国衆である、という矜持(きょうじ)を持って居り申す。……鎌田将監・小野三左衛門二人のご家老は、公儀お目付殿からおどかされて、ひたすらお家大事、とおそれおののいて、無足忍之衆百名を、貸したのでござろうが、われらは、べつに、公儀お目付など、いささかも、おそれてなど、居り申さぬ」

忠義よりも、むしろ義俠(ぎきょう)を重んじて、敢えて、実の娘を殺してまでも、捕えよと命じられた浪人者を、逆に、落ちのびさせようとしている――そのことに、誇らかさをおぼえている、と百地三太夫の末裔(まつえい)は、微笑してみせた。

「お手前は、そうであろうが、無足人全員が、お手前と同じ誇りを持っているとは限らぬ、と思えるが……」

「疑いぶかい御仁でござるのう。名張の無足人には、同衆をさしおいて、藤堂家に忠勤をはげむような小利巧者は、一人も居り申さぬ」

三郎兵衛は、自信を持って、明言した。

しかし、三郎兵衛の確信は、一刻後に、崩れ落ちなければならなかった。

室生川に沿うて下り、やがて、女人高野として名高い室生寺に入る朱塗りの反橋(そりばし)を、右手に眺めて通り過ぎようとした時であった。

「三郎兵衛!」

鋭い呼び声が、反橋のむこう袂(たもと)から、かかった。

無足忍之衆、と一瞥で判る武士が五名、横列にならんで橋上へ進んで来た。
いずれの顔面にも、冷たい表情が敵意を含んでいた。
「三郎兵衛、お主がともなって居るのは、眠狂四郎氏であろう？」
「いかにも、その通りじゃ」
「遁すために、ここまで、ともなったか？」
「お主ら、わしの行動をはばむのか」
「三郎兵衛――」
年配の一人が、一歩出た。
「お主が、その浪人者を遁そうとするのであったならば、見とがめられる場所を、避けるべきであった」
「なに？」
「お主らは、曽爾谷を通った。――曽爾谷にいたご家老鎌田将監殿の小者が、偶然、お主らの姿を見かけて、一目散に、名張まで、注進に及んだのだ。お目付下条主膳殿は、無足忍之衆の一人が裏切った、と知って激怒された。……眠狂四郎を生捕ってもどらねば、名張藤堂家に、どのような災厄がふりかかるかも知れぬ、と覚悟せよ、とな」
そこで、えらばれた五名が、名張から、この室生寺へ、先まわりして、待ち受けていたのである。
名張から、名張川沿いに奔って、大野口より、室生川をさかのぼって、室生寺に至る道程は、香落渓を通って、曽爾谷を過ぎ、室生川を下る道程の三分の一であった。ついやす時間は、後者が道なき渓谷を辿るために、五分の一の短さであった。

曽爾谷から注進に及んだ小者は、もちろん歩行困難の香落渓を通らず、椿井峠越えして、青蓮寺へ出る街道を疾駆したに相違あるまいが、その注進に及ぶ時間を加えても、忍之衆五名が、室生寺に到着した時刻は、三郎兵衛と狂四郎が、そこに至るのより半刻も前であった、と思われる。

——所詮、闘いは、回避できなかったようだ。

狂四郎は、ほぞをきめた。

三郎兵衛が、不意に、その場へ、土下座した。

「たのむ！　看のがしてくれい！　たのむ！」

両手を、地べたについて、頭を下げた。

「三郎兵衛、看のがせることと、看のがせぬことがある」

「わしは二十年来の友を死なせ、実の娘を殺してまでも、この浪人衆を、遁そうとして居るのだ。たのむ！」

「三郎兵衛、このことばかりは、肯き入れられぬぞ。われら五名が、空手で戻れば、無足人全員が、名張から、追放されるのだ」

「出会わなかったことにしてくれい！」

「そうは、いかぬ。三郎兵衛、引け！」

その言葉に合わせて、狂四郎が、口をひらいた。

「そうだ、百地さん、引くことだ」

狂四郎は、ゆっくりと、三郎兵衛の前へ出た。

橋上の五名に向って、

「お手前ら、この眠狂四郎を生捕って来るように、命じられているらしいが、それは、どうやら

不可能事だ。……手にあまれば、殺してもよい、と命じられては居らぬのか？」
　と、訊ねた。
「たとえ、四肢を刎ねて、虫の息にしても、殺してはならぬ、と命じられて居り申す」
「できぬ相談だな」
　狂四郎は、薄ら笑った。
「わたしは、生きるか死ぬか、いずれかをえらぶ。すなわち、お手前ら五人を斬るか、わたしが、殺されるかだ」
「いや、必ず、生捕ってみせる！」
　一人が、云いはなち、他の者たちも、その決意を、全身で示した。
「くどいようだが、お手前らは、わたしを殺すことはできても、生捕りにはできぬ」
「できるっ！　断じて、生捕るぞ！」
　一番年少の、二十歳あまりの青年が、叫んだ。
「眠氏！」
　最年長の、五十あまりの人物が、かわいた声音で、
「われらの働きは、藤堂家のためではなく、無足人とその家族合わせて二百七十余人が路頭に迷うか否かをきめるものでござる。……殺すよりは、看のがせ、ともとめられても、それは、肯くわけには参らぬのだ」
　と、云った。
「あいにくだが、わたしは、お手前らを斬ることの方に、分を置いている」
　その言葉を、不遜ときいて、五名の無足忍之衆は、顔を見合せた。

三

次の瞬間、かれらは、狂四郎へ向って、まっすぐに、橋板を踏んで、進んで来はじめた。
と——。
どうしたわけか、ものの五歩も進まぬうちに、かれらの足が、ぴたりと停止した。
狂四郎は、はっとなって、振りかえった。
いつの間にか、三郎兵衛が、上半身はだかになって、小刀を抜きはなっていた。
阻止するいとまはなかった。
「ええいっ！」
懸声凄まじく、左脇腹へ切先を突き刺し、右へぎりぎりと切りまわす光景を、目撃し乍ら、狂四郎は、今年一月二十七日、鎌倉鶴岡八幡宮境内の神楽殿で、同朋沼津千阿弥が割腹自決を遂げた姿を、脳裡によみがえらせずには、いられなかった。
三郎兵衛もまた、古式に則った十文字腹を切った。
鳩尾から臍の下まで、縦に切り下げた三郎兵衛は、衂られた小刀をひき抜くや、鞘に納めて、前へ置いた。
流石は、忍びの者だけあって、千阿弥とはちがい、体力と気力に、充分の余裕を示した。
わななきもせぬ手で、十文字に切った腹を、前を合わせてかくすと、
「たのむ！」
と、云って、両手をつかえた。
それから、徐々に俯伏した。

その終始を見とどけておいて、敵にまわった無足忍之衆の一人が、ひくく、
「三郎兵衛、無駄死ぞ！」
と、吐き出した。
かれらは、百地三郎兵衛の壮絶な死を目撃し乍らも、意志を更えようとはしなかった。
三郎兵衛の義侠の行為に、感動をおぼえたことと、名張無足人全員の安泰をはかることとは、別であった。
五名の忍者は、忍び刀を、抜きはなった。
――やむを得ぬ！
狂四郎は――狂四郎もまた、この素浪人一人の生命とひきかえに、忍之衆とその家族を救えるものなら、縛につくことは、なんの苦痛でもなかったが、この場合、百地三郎兵衛の死を無駄にはできなかった。
無想正宗は、まだ鞘走らせず、ふところの手を、抜き出しただけで、橋袂まで、ゆっくりと、進んだ。
双方ともに、殺気を抑えていた。遠目には、五つの人物と一つの人影が、しずかに近づく、ただそれだけの光景でしかなかった。
しかし、街道側と寺域側に、固唾をのんで見まもる善男善女の群れは、そのしずかな光景が、次の瞬間、どのような凄まじい修羅場に一変するか、想像しただけで、身の毛がよだつ思いであったろう。げんに、一人が、割腹して、地面を血の海にして俯伏しているのであった。
きこえるものといえば、室生川の清流の河鹿の音だけであった。
双方の距離が、七八歩にせばまった。

その折であった。
反橋正面の本坊正門から、一人の僧侶が、足早に出て来た。片手に、閼伽桶を、携げていた。
いささかもおそれる気色もなく、すたすたと、橋を渡って、無足忍之衆の背に近づいて来た。
いきなり――。
閼伽桶の水を、五人めがけて、ばっとあびせかけて、
「霊地をけがす不埒者ども！」
と、一喝した。
忍者たちは、水をあびた刹那、左右の欄干ぎわへ跳びかわしていたが、僧侶の叱咤に、あきらかに、闘志を殺がれた迷惑の色を示した。
僧侶は、誦経できたえた張りのある声音で、
「この決闘は、室生寺住職が、あずかる」
と、云った。

狂四郎は、庫裏の一室で、室生寺住職と対坐した。
「愚衲は、御辺を見知って居る」
住職は、幾年か前、雲水となって諸国を回遊した際、出会った旨を、狂四郎に、云った。
出会った時、こちらがどのような無頼の振舞いをするのを目撃したか、そのことは口にせず、
「この世に、御辺ほど、業の深い御仁は、見たことがない」
それだけ云った。
「恐れ入る」

「まー―ともあれ、一人だけの犠牲で済んだのは、せめてものことでござる。あとのしまつは、愚衲におまかせあれ」

住職は、名張忍之衆から、決闘の理由をきき、自分が名張へおもむいて、お目付下条主膳に面談しよう、ときめたのである。

室生寺住職ともなると、公儀お目付といえども、一目を置かねばならぬ。

室生寺は、五代将軍綱吉の生母桂昌院の庇護によって、女人高野と称されるようになり、爾来、将軍家御台所が、必ず一度は参詣するならわしができていた。

江戸城大奥の御台所とその女中たちが、渇仰し、その参詣を生涯の愉しみにしている名刹ともなると、公儀お目付も、これにさからうわけにいかないはずであった。

住職は、下条主膳をなだめて、名張から立ち去らせる自信が、充分あったのである。

「御辺がおもむくところ、必ず修羅場が現出する模様じゃが、その業は、肩に重くはござらぬかな？」

「重くない、と申せば、嘘になりましょう」

「いかがじゃな。当山で、しばらく、樹蔭の涼風を入れられては――？」

「片づけねばならぬ用件を、ひとつ、持って居ります」

そうこたえた時、狂四郎は、ふと、思いついて、

「ごらん頂きたいものがあります」

と云って、ふところから、小さな玩具をとり出した。

住職は、それを、掌に受けとって、

「この御守犬が、どういたしたかな」

と、狂四郎を、見かえした。
「やはり、これは、御守でしたか。およその見当をつけて、奈良あたりの古刹が、頒つ品と存じ、たずねて参ろうとしているのです。どこの寺が、つくっている御守か、ご存じならば、お教え頂きたい」
「これは、法華寺の御守犬でござるよ。開基光明皇后が、一千座の護摩供養を行わせられて、その灰を、清浄な山土に混ぜて、お手ずからお作りなされ、諸衆の病苦災厄難産などを除く御守として、結縁の者どもに、授けられたに、はじまって居り申すな。……代々の門主が、この相伝を継ぎ、尼僧たちが、余暇に、むかし乍らの方法で、作って居り申すよ。……愚衲も、法華寺から頒けてもらって、大奥の女中衆へ、贈ったことがござる。これを作るのは、丹念に、長い日時を費やし、いわば、門主はじめ尼僧たちの精進念仏の結晶と申すべきもので、出来上ったのを本尊に供えて、祈願の上、一般の人に、授けられるのでござる。……この御守犬に、なにか、因縁でもまつわって居る、といわれるか？」
「もしかすれば、これが、百万両のねらちのものかも知れぬのです」
「ほほう、それは、興味のあることじゃな」
しかし、住職は、微笑して、そう云っただけで、座を立った。
「では、これから名張へ、出かけることにいたそう」
おもてには、五名の名張忍之衆を、待たせていたのである。

南都の一隅で

一

次の日――。

眠狂四郎は、暑気が、黄昏(たそがれ)の空に遠のいた野道を、ゆっくりとひろっていた。

都跡(みあと)村の大字六条から五条へ通じている道――そのむかしの右京七条三坊と五条三坊をむすぶ道であった。

わかりやすくいえば、薬師寺から唐招提寺(とうしょうだいじ)に至る道であった。

狂四郎は、法華寺に行くのに、奈良の町を避けて、郡山(こおりやま)城下を抜けたのである。

――男子禁制の尼寺を、まともに訪れても、どうにもなるまい。

ふところ手の孤影を、はこび乍ら、念頭にあるのは、そのことであった。

室生寺住職から、きかされたところでは、法華寺は、光明皇后が創建した唯一の総国分尼寺である、という。

ただの尼寺ではなかった。

いわゆる比丘尼(びくに)御所十五箇寺のひとつであった。

天皇御直宮――即ち皇女が門跡になるのは、

　大聖寺（御寺御所）

　宝鏡寺（百々(どど)御所）

曇華院（竹御所）
光照院（常磐御所）
この四箇寺であり、これにつづいて、宮家あるいは五摂家の姫君でなければ、門跡になれぬ七箇寺があった。
霊鑑寺（谷御殿）
円照寺（山村御所）
林丘寺（音羽御所）
中宮寺（斑鳩御所）
三時知恩寺（入江御所）
瑞竜寺（村雲御所）
法華寺
皇族貴族の姫君が、門跡を相続して一千余年、女人修道の根本道場としての法燈連綿たる名刹ともなると、素浪人ふぜいが、押しかけてみたところで、門前払いをくらうのは、目に見えている。
もとより、無断で忍び込むのは、狂四郎にとって手馴れたことであった。
しかし——。
御守犬いっぴきを懐中にして、侵入して、さて、どこをどうさがせばよいのか。
大名屋敷ならば、まだ、勝手がわかるが、市井無頼の徒には、比丘尼御所の内部など、どんな構造になっているのか、見当もつかぬのである。
門跡に面謁を許され、

「百万両の金銀が、当寺のどこかに隠匿されて居り申すゆえ、さがさせて頂きたい」
と、たのむことができれば、これに越したことはないのである。
これが、できるのは、老中か若年寄か、それより下っても、京都所司代ぐらいまでであろう。
狂四郎は、
——忍び込む以外に、すべはあるまい。
と、ほぞをきめてはいるものの、たとえ尼僧たちに発見されずに、山内を歩きまわれたとしても、目的の物をさがしあてるのは、まず不可能であろう、と思われるのであった。
「眠殿——」
不意に、傍の松の樹蔭から、呼びかける者があった。
狂四郎は、足を停めなかった。
道へ出て来たのは、竜堂寺鉄馬であった。
武部仙十郎から遣わされた刺客であるこの男には、津の城下から、つきまとわれて来た狂四郎である。
竜堂寺鉄馬は、相変らずの六十六部姿であった。
「眠殿——、身共のカンは、まさに的中つかまつった。貴殿は、必ず南都へまわられる、と予感がいたして、お待ち申していた次第でござる」
いかにも得意気なその言葉をきいて、狂四郎は、かすかな嫌悪感を催した。
面妖しな男だ、と思いすてるだけでは、すまされぬいまであった。
参宮街道を通っているあいだは、つきまとわれ乍らも、狂四郎は、好意らしい気持をわかせていたし、狙って来る敵の中では、斬りたくない例外の男であった。

しかし、いまは、つきまとわれるのは、迷惑であった。

しきりに喋りかけて来る背後の鉄馬の饒舌を、狂四郎は、さえぎった。

「鳥羽城下はずれで、わたしにこれ以上つきまとうと、お主の生命を、もらうことになる、と云ったはずだが——」

「眠殿、貴殿は、誤解されて居るのでござる。身共は、決して、刺客ではござらぬ。……身共は、これまで、貴殿の身辺護衛を、いたして参り申したが、これからも、是非そうさせて頂きたく存ずるものでござる」

二

宵闇が来た路上で、狂四郎は、ぱっと鉄馬に向きなおった。

他の刺客ならば、その殺気をあびて、反射的に跳び退ったところである。鉄馬は、その場を、動かなかった。

「斬られてもかまわぬのか、お主？」

狂四郎は、訊ねた。

「貴殿は、決して、身共を斬ることはなさらぬ、と信じて居り申す」

鉄馬は、こたえた。

「奇妙な人間だな、お主は——」

狂四郎は、口にせざるを得なかった。

「身共には、貴殿の生命を狙う気持が、みじんもないからでござろう。そういう人間を、貴殿は、決して、斬りはなさらぬ」

狂四郎は、黙って、踵をまわして、歩き出した。
唐招提寺裏手に、腰掛茶屋があるのをみとめて、狂四郎は、その灯に近づいた。
瞬間――。
闇を截って、手裏剣が飛来した。
身を沈めつつ、狂四郎の神経は、背後の鉄馬の動きに、配られていた。
鉄馬は、狂四郎とともに、手裏剣をかわしただけであった。
「お主の仲間か？」
狂四郎が問うと、鉄馬は、
「とんでもござらぬ！」
と、否定した。
「それならば……、わたしの護衛ならば、わたしに代って、片づけてもらおう」
「いや、身共は、人を殺すのは、好みませんな」
「敵にまわった者を斬る気持がなくて、どうして、わたしの護衛がつとまる？」
「危険を報せるのが、身共の役目。……斬るのは、貴殿の役目でござる」
狂四郎は、苦笑した。やはり、憎めぬ男なのである。
狂四郎は、しずかな足どりで、茶屋の前に立った。
落間の床几に、手裏剣を投げた者は、腰かけたままでいた。
それは、志村源八郎であった。
青山峠で、三心刀の正剣を、円月殺法で破られたこの剣客は、片手を喪い乍らも、いつの間に

か、ここで、待ち伏せていたのである。
「お主か――」
幽鬼とも受けとれる悽愴な面相を、見やり乍ら、狂四郎は、かまわず、落間に入って、隣りの床几に、就いた。
鉄馬は、入って来なかった。
「いいかげんで、執念をすてたらどうなのだ？」
狂四郎は、はこばれて来た茶碗酒を空けてから、云った。
「執念は、すでに、すてて居り申す」
「では、待ち伏せて、手裏剣を放って来たのは、どういうのだ？」
「偶然、貴殿の姿を見かけて、胸底の無念が、とっさに、そうさせたまででござる」
「偶然だ、というのか？」
「左様――」
「あいにくだが、こういう場合、わたしという男は、ひどく疑い深い」
「…………」
「おもてに立っている男が、わたしのあとを歩いて来、お主が、この茶店にいた。……どうも、偶然とは、思われぬ」
「…………」
「そういえば、あの男とお主は、貌も声音も、似て居る」
「…………」
「これも、偶然か？」

その言葉の終らぬうちに、源八郎の片手薙ぎが、胴を襲って来た。
狂四郎は、その凄まじい一撃を、脇差で受けとめざま、無想正宗を一閃させた。
肩から袈裟がけに、胸まで割りつけられた源八郎は、絶鳴すらもらさずに、床几から崩れ落ちた。
狂四郎は、衂られた無想正宗を、携げて、往還へ出た。
「おい、志村源八郎は、お主の兄か？」
「その通りでござる」
鉄馬は、みとめた。
「兄が手裏剣を放つのに合わせて、背後から、わたしを襲う手筈だったのだろう。なぜ、襲わなかった？」
「貴殿には、隙がなかったのでござる」
「それは、いいわけにはならぬ」
「…………」
「わたしは、お主の兄を、面前で、斬った。弟として、当然、刀を抜くべきだろう。……本体を見せたのだ。刺客ならば、ここらあたりで、雌雄を決してもよかろう」
鉄馬は、しかし、なお、薄明りの中に立ちつくして、沈黙をつづけていた。
「なぜ、抜かぬ？　刀を抜かぬ者を、この眠狂四郎は斬らぬ、と小ずるく考えて居るのか？」
狂四郎は、一歩迫った。
「眠殿――」
鉄馬は、口をひらいた。

「貴殿は、兄弟をお持ちではござるまい。まして、智能も性情も武芸も、すべての点に秀れた兄を持って、物心ついた頃から、劣等感にさいなまされた弟の立場に置かれたおぼえはござるまい」

「………」

「わが家は、三河譜代の御家人でござった。……兄は、衆に抜きん出た力をそなえ乍ら、立身の希望が皆無な日々を、無念やるかたなくすごして居り申した。たまたま、若年寄小笠原相模守殿に召されて、隠密の役目を申しつけられ、首尾よく任務をはたした上は、大番入りを約束しようと云われ、狂喜いたしたのでござる。貴殿を討つのも、その任務のひとつでござった。……身共は、兄が、必ず大番入りをする、と思い申した。身共は、兄を心底から憎み申した。……つまり身共が、武部仙十郎殿の依頼によって、貴殿の討手を引き受け申したのは、兄に、貴殿を討たせたくないためでござった。これは、断じて、いつわりではござらぬ！　……この心懐は、貴殿のように、自由に生きて居られる御仁には、とうてい理解頂けまい。しかし、いつわりではござらぬ」

それゆえに、兄源八郎から、手裏剣を放った刹那、背後から斬りつけよ、と命じられ乍らも、鉄馬は、敢えて、そうしなかったのである。

兄源八郎は、はじめて、弟から裏切られ、火のような憤怒を、胸中に燃えたたせたに相違なかった。

鉄馬の云う通り、俊才の兄に対する劣等の弟の憎悪など、狂四郎の理解の外にあった。

狂四郎は、無想正宗を、腰に納めると、歩き出した。

三

法華寺から数町はなれた小さな聚落に、うすぎたない旅籠が、あった。
狂四郎は、ひとまず、そこにあがることにした。
鉄馬は、
「相部屋を、お許し下さるか？」
と、たのんだ。
狂四郎は、べつに拒絶しなかった。
夕餉ののち、狂四郎は、ふとひとつの思慮を働かせて、懐中から、一箇の御守犬を、とり出した。
「これは、この南都のさる寺院で頒けているしろものだが、お主には、わかるか？」
わざと、訊ねた。
鉄馬は、掌にのせてみて、すぐ、
「あ、これは、ついそこの法華寺の尼僧が作っている御守犬でござるな」
と、云いあてた。
「お主に、この謎を解いてもらおう」
「………？」
狂四郎は、志摩の賢島にある切支丹館から、これを得たいきさつを、包まず語った。
「……はたして、聖母に抱かれていた小児の手に握られていたこの玩具が、太閤遺金の隠匿場所を教えるものか、どうか、こちらも判らぬ。……法華寺に忍び込めば、あるいは、手がかりが得

られるか、と思って、ここまで来たのだが……、お主の智慧を、借りたい」
「眠殿――」
鉄馬は、じっと、狂四郎を見かえした。
「身共をどうして信用して下さるのか、それをおうかがいいたしたい」
「わたしは、伴天連であった父親を殺した男だ。お主も、わたしに、似かようた立場にある。うまが合うことにしよう」
「いまこそ、打ち明け申すが……、身共は、兄よりさきに、是が非でも、貴殿を討ちとりたい、と必死の念願をした者でござる。貴殿は、すでに、身共を刺客と看破されて居られたに相違ござらぬ。……ただ、似かようた境遇、というだけで、信用して下さるのは、どうも、合点いたしがたい」
「ことわっておく。信じるか信じないか、それは、おのれ自身に対する責任なのだ。わたしが、お主を信じてみよう、と思うのは、お主の知ったことではない。……わたしが、お主を信用したからと申して、お主がわたしを信じる必要はない。信用してもらったからというて、裏切ってはならぬ、と自身を縛る必要もない。……わたしは、ただ、お主の智慧を、借りたいまでのことだ」
狂四郎は、冷然として、云った。
「百万両の隠匿場所が判明すれば、身共が、貴殿をだし抜いて、先取りしてもかまわぬ、と申されるか？」
「結構だ。……お主とわたしの間に、友誼はない。敵同士と考えてもらってよい」
「さてさて……」

鉄馬は、かぶりを振った。
「貴殿という御仁は、なんとも、名状しがたい心情をお持ちでござる」
「実は、意外なお人好しかも知れぬ」
狂四郎は、薄ら笑った。
鉄馬は、しばらく、御守犬を、ためつすがめつしていたが、
「ひとつ――これを、毀してみては、如何でござろう」
と、云った。
「やってもらおう」
「では――」
鉄馬は、床の間から香炉を取って来て、御守犬を、入れると、小柄で、注意ぶかく、くだきはじめた。
狂四郎は、腕組みして、見まもっていた。
ついに、御守犬は、こなごなに砕かれた。
御守犬の中には、何もかくされてはいなかった。
鉄馬は、狂四郎へ視線をかえして、
「判り申さぬ」
と、かぶりを振った。
狂四郎は、しずかに、無想正宗を把って、立ち上った。
「お主とは、ここで、別れよう」
「……………?」

「わたしは、これから、法華寺に忍び込む。但し、お主を連れにするのは、ことわる」
「しかし、身共を信用して頂くのなら、お連れ下されば、なにかの役に立つ、と存じますが……」
「こういう仕事は、いつも、わたしは、一人でやることにしている。……わたしが、失敗したならば、次に、お主に、やってもらおう」
「眠殿！　身共は、貴殿につきまとっているうちに、心から、惚れ申した」
「勝手だな、それは——。わたしも、お主に好意らしいものをおぼえたことがあるが、ただそれだけのことで……、もし太閤遺金を発見したならば、その場で、お主を、斬ることになる。それを、避けたい」

四

律宗尼寺、法華寺は、南都佐保村にあった。
門前東方の法蓮より東大寺景清門に通じる一径は、左京一条南路であり、南方佐保川に沿う田径は、左京一坊大路であった。
華やかな文化がくり展げられた天平時代には、この法華寺は、平城宮の境内に属していたものであろう。
聖武帝が、東大寺を総国分僧寺と為したのに準じて、その皇后光明子は、女人のために、総国分尼寺として、法華滅罪寺を創建したのである。
天平勝宝八年、聖武帝崩御ののちは、光明子は、法華寺を日常の住いとし、尼僧の仏学研修をすすめ、また挿花の法を指導した。おかげで、皇后の芳躅を慕うて、入寺を求める高貴の姫君は、

四百人を越すにいたった、という。
当初の堂塔伽藍（がらん）は、おそらく、平城宮内に、東大寺に劣らぬ構えをそびえさせていたに相違ない。天平勝宝元年には、墾田一千町歩が施入されている事実から推しても、その宏壮が想像できる。
都が、京都へ移されてから、しだいに、寺運は衰えたが、鎌倉時代に入ってもなお、百数十人の尼僧が、修道していた、という記録がある。
室町時代以降、堂宇は次第に失われて、荒廃していたのを、大坂城の淀君（よどぎみ）の寄進によって、堂塔が再興された。
すなわち。
いまの法華寺が、皇族貴族の姫君を門跡に迎えて、常時数十人の尼僧が修道していられるのは、淀君のおかげなのであった。
とすれば——。
豊臣秀頼が、父からのこされた莫大な金銀を、この尼寺にかくしたとしても、ふしぎではないのである。
狂四郎は、室生寺住職から、法華寺が、淀君の寄進によって、再建修築された、ときかされた時、
——そこに、太閤遺金は在る、と信じてもよかろう。
と、自信を持ったことであった。
丑刻（うしのこく）（午前二時）——。
狂四郎は、南門わきの塀（へい）を、越えて、忍び入った。

月はなく、満天に星がちらばっている夜であった。

暮夜孤愁

一

伊豆の山に、晩秋の暮色があった。
半島最南端の石室崎(いろう)へ至る一上一下の坂道を、相変らずのふところ手に、素足で、無想正宗を落し差した孤単の姿が、辿って行く。
ふと——。
中天に、昼から、かかっている上弦の月があった。
狂四郎は、空を仰いだ。
——あの折と同じだな。
狂四郎は、呟(つぶや)いた。
下方に棚引(たなび)いた雲の光冠を、鮮やかに白く彩っているのも、そのままであった。
あの折は、早春であったが、いまは晩秋である。半年の月日が、過ぎていた。
狂四郎は、視線を、岬(みさき)の彼方(かなた)に移した。
——あの日は、漁火(いさりび)が二つ三つかがやいていたが……。
今日は、ひとつも見当らなかった。
影を濃くした樹々が、紅葉しているのも、ちがっていた。

半年ぶりに、狂四郎は、石室崎燈明台の守(もり)をしている元岡っ引の老人を、たずねようとしていたが、はたして、まだ、佐兵衛が健在かどうか、わからなかった。

佐兵衛は、狂四郎を襲った敵に、まきぞえをくらって、右腕を、肱(ひじ)から両断されたのである。

六十四歳の老齢では、はたして、傷口が癒(い)えて、健康をとりもどしたかどうか。

もし、守小屋に別の男が住んでいたならば、狂四郎の失望は、深いものになる。

――生きていてくれ。

狂四郎の心には、その祈りがあった。

やがて――。

ゆっくりと回転する反射鏡から、沖あいへ、光を送っている燈明台を、むこうに見出して、狂四郎の出足は、その祈りと反対に、重くなった。

――もし、別人であったら……？

小屋をのぞかずに、ひきかえしたい衝動が起っていた。

その時、小屋の板戸が、開けられた。

燈明台へ、菜種油をつぎ足しに行こうとしている守の姿が、佐兵衛にまぎれもないのをみとめて、狂四郎は、思わず、

「おい！」

と、よろこびの声をあげた。

こちらをすかし視た佐兵衛の方が、かえって、

「旦那ですかい」

と、おちついた応答をした。

囲炉裏端で、さし向うと、佐兵衛は、この前と同様に、濁酒をすすめ乍ら、にこにこと、

「旦那は、きっと、立ち寄って下さるものと思って居りました」

と、云った。

「おれが歩いたあとには、また、たくさんの死屍が横たわった」

「人間は、生れた時から、運の強い者と、運の悪い者とに、ふた通りにわかれているようでございますな」

「うむ」

狂四郎は、茶碗を口にはこんだ。

「あの時の南蛮娘は、どうなさいました？」

佐兵衛は、訊ねた。

「長崎出島のオランダ商館まで、送りとどけた。ぶじに、安南まで帰る、と思うが……」

「それは、上首尾でございました。……ひとつ、おうかがいしても、よろしゅうございますか？　思い出したくない、と仰言るのでございますれば、ご遠慮申し上げますが――」

「あれから、どういう出来事が起ったか、ということか？」

「はい」

「佐兵衛さん、わたしは、あの娘と一緒に、宝さがしをやったのだ。柄にもないまねをしなければならぬので、いささか苦労した」

「どんな宝を――？」

「太閤秀吉が、伜の秀頼に遺したという黄金だった。それを欲しがる人間どもが、まんじ巴となったことだ」

「それは、それは――」
「ひとつ、きかせようか」
狂四郎は、南都法華寺に忍び入るまでの経緯を、手短かに語ってきかせてから、
「お前さんは、岡っ引稼業を四十年もやった男だ……黄金が、その尼寺のどこにかくされてあったか、推測できるか？」
と、訊ねた。
「さあ？」
佐兵衛は、首をかしげた。
狂四郎は、微笑し乍ら、云った。
「人間には盲点があり、場所には死角がある。……あとから考えれば、なんだ、ということとも、その前には、容易に思いつかぬものだ。……太閤遺産をかくした者は、盲点をつき、死角をえらんでいた」

二

狂四郎は、法華寺本堂の床下、そして客殿の天井裏に、三昼夜ひそんだのであった。
さがすのは、夜半に限られていたので、これは異常な忍耐力を必要とした。
本堂、鐘楼、客殿、横笛堂、から風呂、そして庭園と、くまなく、さがしまわったことであった。
横笛堂というのは、珍しい紙子の像をまつった堂宇であった。むかし、建礼門院の雑司をつとめていた横笛が、禁裏御所のさむらい滝口入道時頼と、相思の仲になったが、ついにむすばれず、女は心の傷手に堪えかねて、当寺に入り、剃髪得度した、と『平家物語』に伝えられている。横

笛は、修道のなかにあって、悟りの文を綴っていたが、発心して、文を書きつらねた紙で、自像を作った。

狂四郎は、蠟燭のあかりの中に浮きあがった、どこやら哀愁をおびた小さな紙子の坐像に、しばらく、見惚れたものであった。

から風呂というのは、蒸風呂の意味である。小さな建物だが、瓦葺きのしっかりした構造であった。光明皇后が、千人の貧者、病人の垢を流すという誓願をして、建てた浴室であった。

光明子は、九百九十九人の垢を流し終えられたが、最後に来た一人が、癩病人で、全身崩れて、その臭気は、浴室にたちこめた。

流石の光明子も、この癩病人には、いささか辟易された。しかし、この一人の垢を流さなければ、誓願は達せられぬ、と自らに吩いきかせて、そばへ寄られた。

すると、病人は、

「この業病をなおすには、他人に膿を吸ってもらわねばなりませぬ」

と、泣いて訴えた。

皇后は、しばしためらってから、非常の決意をされ、

「吸うてあげますゆえ、このこと、他言してはなりませぬ」

と、申しきかせておいて、頸根の膿へ、唇をあてられた。

すると、病人の身体は、みるみる美しくなり、光明を放った。

それは、癩患者に化けた阿閦仏であった。

から風呂は、皇后の由緒を伝えているが、建物は、どうやら室町時代に建てなおされたもののようであった。

から風呂わきに、大きな井戸があった。狂四郎は、その井戸にも、降りてみた。
庭園は、五百坪に及ぶ広大さであった。細長い池に沿うて、低目の灌木がうずくまり、椿とか橿とか山茶花の高生垣が、背景となっていた。
池の東寄りに、への字形の土橋が架けられ、土橋の西は、大きな蓮池になっていた。
狂四郎は、池畔にちらばる大小の石の下を掘ってみたり、池に沈んで、調べてもみた。
さがしあぐねて、
——門跡を、寝所に襲うか？
とまで、あせった。
四夜目を迎えて、本堂の床下にひそんでいる時、
——隠匿しようとする者は、当然、人の盲点をつき、死角となった場所をえらぶに相違ないのだが……？
と、考えているうちに、狂四郎は、竜堂寺鉄馬が、平気で御守犬を打ちくだいたのを、ふっと、思い出した。
——そうだ！　御守犬も、仏像も、人間が作って、人間がありがたがっているしろものなのだ。
天啓のごとく、ひとつの直感がひらめいた。
この法華寺内で、人目に絶対にふれぬところ——それは、須弥壇の中央の本尊を安置した厨子の中である。
狂四郎は、室生寺住職から、法華寺の本尊は、光明皇后が蓮池を渡られている姿をうつした十一面観世音菩薩で、高さ三尺三寸の白檀の一木彫と、きかされていた。
秘仏としてまつられた本尊は、住職といえども、生涯に一度か二度しか、扉を開かぬのが、常

識とされていた。

金仏でさえも、そうであってみれば、木仏ともなると、虫の食うのをおそれて、何百年間も、厨子の中に安置されたまま、人目にふれずにいると考えられる。

――淀君が、法華寺を再建修築した際、本堂の厨子の扉は、一度だけ開かれた。その後は、今日まで、閉じられたまま、代々の門主も、拝んだことはない、とすると、これほど、隠匿に好都合の場所はない、ということだ。

法華寺本堂が、慶長六年に再建されたことは、廻り縁勾欄(こうらん)の擬宝珠や、内陣須弥壇の擬宝珠にある銘文によって、明白であった。

『慶長六年辛巳(じんみ)九月吉日、法華滅罪寺講堂御建立、秀頼公御母堂豊臣氏女、奉行片桐市正(いちのかみ)
且元』

と、刻んである。

厨子も仏具も、おそらく、慶長六年に、あらたにつくられたに相違ない。

夜半を待って、狂四郎は、床下から内陣へ、身を移した。

あらためて、蠟燭のあかりで照らしてみると、あきらかに、須弥壇も厨子も、天平のむかしの古さではなかった。

三

――おれは、忍び込んで、まずはじめに、厨子の扉をひらいて、本尊をみるべきであったのだ。

狂四郎は、おのれを嗤(わら)って、扉に手をかけた。

厨子の中には、十一面観世音菩薩像が、安置されてあった。

一瞥した瞬間、狂四郎は、おのれの直感が、あやまりであった、と思った。像は、素地のままで、美しい木目がうかがわれたからである。
——まつられていたのは、やはり、本尊だったのか。
狂四郎は、がっかりしつつ、像を見まもった。
薄絹のような衣文を透かして、豊満な肉体が、腰のあたりをやや右へねじり、右手は長くたれて天衣の端をつまみ、左手は直角に曲げて宝瓶を携げ、その立姿に流れる曲線美は、まさしく、女性のものであった。
光明子が蓮池をわたられている姿を写した、と伝えられている通り、動から静への一瞬をとらえた写実の作品といえた。
狂四郎は、失望の裡にも、その美しさに、さらに蠟燭を近づけてみた。
——はてな？
狂四郎は、眉宇をひそめた。
胸や腕や腰や足の優美で自然な流れに比して、その顔は、どうしたのか、神秘さが乏しいようであった。
これだけ自然な、女性美の極致といえる肢体を彫りあげ乍ら、どうして、顔にだけ、森厳さがないのか？
十一面観音は、善悪一切の衆生を済度する菩薩である。当然、その顔は、拝する者の心に、しずかに迫る森厳さ、神秘さをそなえていなければならない。
——贋だからだ！
狂四郎は、確信した。

小柄(こづか)を抜いた狂四郎は、右足の、先をかるくはねている拇指(おやゆび)を、ひと削りした。
手ごたえがあり、削りあとは、さんぜんと山吹色が光った。
白檀の一木彫とみせかけた、金無垢(きんむく)像であった。
つまり、ほんものをそっくり模した金製の十一面観音であった。
贋であることは、その顔に示されていた。いかに巧妙に模したところで、表情の森厳さ神秘さまではぬすみ得なかった。
——これが、太閤遺金か！
丹念に調べてみると、光背の蓮の蕾(つぼみ)や葉も、そして立っている台座も、すべて金無垢であった。
狂四郎は、ほんものの方は、古い厨子とともに、別の場所に移されたに相違ない、と推測した。
——太閤遺金が、菩薩像に化けていたとは、こいつは、文字通り、お釈迦(しゃか)様でも気がつかぬところだった。
狂四郎は、苦笑せざるを得なかった。
「ほんものは、客殿の奥の、上の御方と呼ばれる奥書院に、なにげなく、古い厨子の中に安置されてあった。……金無垢の贋像を盗み出すのは、なにさま重いので、ひと苦労をした」
「よく、おやりなさいました」
「盗み出して、堺まで、運んだが、それにも、かなり苦労した」
「そうでございましょう」
堺には、千華と吉五郎が、待っていた。
狂四郎は、贋の光明子像を、千華に渡し、吉五郎を護衛させて、海路を、長崎に行かせたので

あった。

狂四郎は、陸路を、長崎へおもむいた。

長崎出島のオランダ商館に、千華と像を送り込むのに成功するまでは、多く語るべき苦難があったが、狂四郎は、それを口にしなかった。

「佐兵衛さん、わたしがこの前、ここへやって来た時、お前さんは、海でくらしている生きものの話をしてくれたな」

「左様でしたか」

「海底の岩にくっついているうにやあわびやなまこ、ひとでなど、じっと動かずにくらしている生きものと、くらげのように、定まったすまいもなく、浪の間に間に浮いて流れている生きものと――」

「へい」

「お前さんは、あの時、わたしが、途方もない危難の道へ踏み出そうとしているのを、予感したのだな？」

「まあ、そういうことでございました」

「くらげとちがって、腰に兇器を持ったわたしが、生きて還れたのは、たしかに、ふしぎだな」

「いえ、あっしは、旦那が、きっとおもどりになる、と信じて居りました」

「わたしの業力は、よほど強いようだ」

狂四郎は、珍しく、皓(しろ)い歯をみせた。

四

三日後――。
狂四郎は、本丸老中水野忠邦の上屋敷に入り、表長屋の側用人宅の書院に、坐っていた。
武部仙十郎は、狂四郎を半刻あまり待たせて、表御殿から、もどって来た。
脚をなげ出して、腿を撫でさすり乍ら、老人は、何気ない語気で、
「こんどばかりは、お主に、してやられたわい」
と、云った。
「百万両の太閤遺産などとは、誇大妄想とはいわぬまでも、いささか大袈裟すぎた、と申し上げておく」
「判金法馬が、あるにはあったのじゃな？」
「三尺あまりの菩薩像に化けて、奈良の法華寺に、安置されてあった、と打ち明けておこう」
「ほう！　菩薩像にのう。……お主が、打ち明けるからには、もう、日本には、ないのであろうな？」
「いまごろは、安南に到着しているだろうと思って頂こう」
「やれやれ、殿は、さぞ、がっかりなさるじゃろう」
「ご老人、貴方が、わたしを殺す刺客としてえらんだ男は、めがねちがいであった。あの男は、わたしを殺す度胸を持っては居らなんだ」
「ふふふ……、わしは、お主を殺す気は、毛頭なかったわい」
「どうであろうかな」

狂四郎は、冷やかに薄ら笑った。

「いや、まことじゃ。……わしも、はじめは、お主を憎んだ。憎んだあまり、お主の弱いところを狙って、十五歳以下の少童たちを、家中からえらんで、あとを追わせる愚策もやってみた。その一人が、帰って来て、この家の庭で、切腹し居った。それを目撃させられて、わしは、考えを変えたのだ。どうだな、竜堂寺鉄馬は、すこしは、役に立ったであろうが……」

老人は、そう云って、にやりとしてみせた。

「貴方は、主君の為に、是が非でも、太閤遺金を、手に入れなければならなかったのではないのか？」

「奉公を忘れたわけではない。しかし、わしは、切腹した十四歳の少童を抱いた時、生きれば、わしの年齢まで――あと五十年も、この世に在ったであろうに、と思うた。思ったとたん、わしは、お主の働きを阻止して、こちらに、金を奪う気持がなくなったのだ」

狂四郎は、その言葉をきいて、かるく頭を下げておいて、座を立った。

「眠――」

見上げた仙十郎は、

「お目付下条主膳は、帰府すると、切腹して、相果てた」

と、告げた。

狂四郎は、黙って、書院を出た。

麻布新堀端、三之橋ぎわにある肥後殿茶屋に、狂四郎は、しばらくのあいだ、居候することにきめていた。

水野邸からまっすぐに、三之橋へ帰って来ると、茶屋の前に、一人の虚無僧が立って、嘹々（りょうりょう）と吹き鳴らしていた。

狂四郎は、それが尺八ではなく、一節切（ひとよぎり）であるのをみとめると、そばへ寄って、

「わたしに会いたくて、毎日、ここへ来ていたのか？」

と、訊（たず）ねた。

「はい」

虚無僧に化けていたのは、沼津千阿弥の門下のお坊主であった。

「幾人、生き残った？」

「わずか六人、生き残りました」

六十七人のお坊主衆は、佃島（つくだじま）のかくれ船とともに、散りはてたのである。

「お主らを、日本から脱出させて、安南へおもむかせるてだてがあるが、行くか？」

「参ります」

お坊主は、こたえた。

「明日、いまの時刻に、ここへ六人そろって来てもらおう」

そう云いのこして、狂四郎は、茶屋に入った。

二階に上って、座敷にごろりと仰臥（ぎょうが）して、目蓋を閉じた。

——あのお坊主らを、安南へ送ってやれば、これで、一件落着か。

胸中で呟いた狂四郎は、しかし、脳裡によみがえって来た沼津千阿弥の壮絶な死にざまを、はらいのけられないまま、冷たい宵闇の底で、身じろぎもしなかった。

解説

尾崎秀樹

眠狂四郎は戦後の時代小説が生み出したヒーローたちの中でも主要な地位をしめ、多くのすぐれた大衆文学の主人公と同じく、作者の手から離れて大衆の中を一人あるきする存在と化している。大衆が作中人物の魅力にとらえられると、作者を抜きにしてそのヒーローやヒロインたちと結びつき、自由にイメージが増殖されてアイドル化してゆく傾向は、大衆文学の一般的な現象であり、そうなってはじめてその作品が大衆の中に根を下すわけだが、眠狂四郎の場合もこのようなケースの一典型をなしていることはたしかだ。

柴田錬三郎は随筆集『どうでもいい事ばかり』の中に、「眠狂四郎について」と題して、つぎのような経験を書きとめている。

「眠狂四郎」が明治座で舞台化されたおり、演出を手がけた彼は、初日に客席に坐った。前の席でおしゃべりしていたうちの一人が、「眠狂四郎というのは、なんちゅう小説家が書いたのじゃろう？」と言うと、となりの小母さんが「さあ、誰なんじゃろう？」と首をかしげ、「有吉佐和子かなあ」と、もう一人がつぶやいた、というのである。

「私は、いささか大げさだが、ぎょっとなった。

私は、十七年間も書きつづけているうちに、眠狂四郎の作者はシバレンだ、と世間の人々が知っているのがあたりまえだ、といつの間にか、錯覚を起していた自分のおろかさを、その時、思

い知らされた。

狂四郎をつくり出したのが、誰であろうと、世間では、どうでもいい事なのであった。テレビのクイズ番組の解答者にでもならぬ限り、それを知っていなければならぬ必要はないわけである」

柴田錬三郎はそれにつづいて、作者の努力のむなしさについてふれているが、しかし考えると、それらの人たちはシバレンを知らなくても眠狂四郎は知っており、その芝居のおもしろさを味わうために観にきたのであって、眠狂四郎の人気の何よりの証明だともいえる。おそらく文学とは無縁の人々の間にも、その人気が浸透していることの一例が、そこにしめされているのだ。

「作者の名前や個性はどうでもよいので、問題は主人公になる人間だ。これが、大衆小説にたいする大衆的読者層の、もっとも特徴的な態度の一つである。大衆文学のヒーローたちは、いったん大衆の知的生活のなかに入りこんでしまうと、その〈文学的な〉出生をはなれて、れっきとした歴史上の人物になってしまう。誕生から死まで、かれらの全生涯が興味をひく。……大衆読者のなかには、過去の歴史の実際の世界と、空想の世界とを区別できない人びとがある。かれらは、まるでかつて生きた人物について論じるように、作中の登場人物について論じるであろう。しかし、それは、空想の世界が、大衆の知的生活のなかで、特殊的寓話(ぐうわ)的な具体性を獲得することを理解するための、比喩(ひゆ)的な方法なのである」

イタリアの思想家で革命家だったグラムシは、『大衆文学論』の中でこう述べたが、眠狂四郎というヒーローを創造した柴田錬三郎は、作者のむなしさを嘆く前に、狂四郎が大衆の中で一人あるきをはじめたことを、作家冥利(みょうり)としておおいに喜んでいいと思う。だがもちろん、彼はそうした作家の宿命を充分に理解した上で、その仕事に精魂をうちこみ、虚構のおもしろさを追究し

つづけたのであり、むなしさを嘆いてみせるのは、彼の近代意識にもとづくテレの一種だともいえるのではなかろうか。

昭和三十一年五月から「週刊新潮」誌上に登場した眠狂四郎のシリーズは、圧倒的な好評に応えて『無頼控』が百話まで連載され、『続三十話』が書きつがれた後、『独歩行』五十話、『殺法帖』五十話、『孤剣五十三次』五十五話とつづくが、さらに第五作『虚無日誌』、第六作『無情控』、第七作『異端状』になると、読切連載よりも長篇としての構想がつよまる。ほかにも週刊誌の連載と別に発表した狂四郎ものがあり、それらをあわせると、約二十年にわたって書かれたこのシリーズは、量においても戦後の大衆文学史上で大きな部分をしめている。

眠狂四郎と同様に、週刊誌や雑誌に連作形式で書きつがれ、その虚構の主人公が大衆の中に根を下したものといえば、笹沢左保の木枯し紋次郎や、池波正太郎の鬼平、梅安、秋山父子などがあるが、眠狂四郎はそれらより一歩先んじて登場し、そのスタイルを定着させながら、戦後状況を反映した独特なニヒル剣士として活躍した。ニヒル剣士という点では、戦前の中里介山『大菩薩峠』の机竜之助と比べられることが多いが、読切連作の形で出発し、長篇に移行し、ひとつの総合的な作品世界をつくりあげたことからいえば、大佛次郎の『鞍馬天狗』が思い浮かぶ。

大佛次郎は大正十三年に博文館の月刊雑誌「ポケット」に『鬼面の老女』を発表して以来、昭和三十四年までに長短篇あわせて三十数本の鞍馬天狗ものを書いたが、その三十年あまりの交友について、つぎのように述べている。

「どんなに仲がよい友人関係にも、不和は生じる。私たちの間柄でも、それであった。……私も我が友、鞍馬天狗があまり疲れることを知らず明るいのに、反感を抱いた。幾度か、もう書くまいと思った。……一時、彼は屈託の多い男となって、行動的な力を失くした時期がある。……鞍

馬天狗なんて死んじまえ。私は私で、こう思っていた時である」

これと対応されるのは『柴錬巷談』の「時代小説について」という文章の中のつぎの言葉である。

「眠狂四郎とは、もう十数年のつきあいだが、時として、うんざりして、いいかげんで、絶交したくなる。……この男の口のききかたや、挙措動作、そして事件の渦中に於ける行動など、私は知りつくしてしまっている。

知りつくしてしまっている人物を、さらにまた紙面に出現させて、動かすのは、なんともやりきれぬ話である」

鞍馬天狗と眠狂四郎は、その性格や立場は違っているが、いずれもすぐれた剣の使い手で、それなりの自我をもって活躍する点では共通しているといえよう。そうした主人公が作者にとって、ときには手に負えなくなることを、この二つの文章はあらわしているようだ。そして大衆の中で一人あるきをはじめた虚構のヒーローたちに、読者の期待を裏切らない活躍をつづけさせるのはなみなみでない苦心を要することも、そこから推察されるのだ。

すでに述べたように、『眠狂四郎無情控』は狂四郎シリーズの第六作であり、「週刊新潮」の昭和四十六年一月二日号から十二月二十五日号まで連載された。この作品では、狂四郎は太閤遺金をめぐる争奪戦にまきこまれ、それまで彼にさまざまな危険な仕事を依頼してきた水野越前守忠邦の側用人武部仙十郎にたいして、はじめて反抗的な行動をとることになる。

韮山代官の江川太郎左衛門に招かれたついでに、狂四郎が伊豆の石室崎で燈明台の守をする元岡っ引の佐兵衛老人を訪ねてゆくと、途中で何者かにふしぎな武器による襲撃を受け、ついで佐兵衛も右腕を切断される。まもなく彼は異邦の美女・千華と出会い、重要な使命をもって海外か

ら来たらしい彼女を、江戸へ連れてゆくことになるが、こうしたできごとを発端として、彼が事件の渦中に身をおくようになる経過は、武部仙十郎の依頼によって動きはじめるこれまでのケースと、ややことなっている。

さらに狂四郎は、鎌倉八幡宮で将軍家代参が行われる当日、江戸城本丸同朋・沼津千阿弥が、邪曲の時世を告発する檄文を掲げ、凄絶な切腹をする場面に立ち会う。ちょうどこの作品の連載がはじまる前年の十一月、三島由紀夫が楯の会のメンバーとともに自決する事件があり、千阿弥の死と、それにたいする狂四郎の感懐には、この事件が投影されていると思われる。

千阿弥の開いていた陽明塾の門弟たちが、師のあとを追おうとして公儀庭番に斬殺されるできごとなどを目撃する一方、千華が誘拐され、狂四郎自身も執拗な尾行や刺客にねらわれ、それらの動きの背景をつきとめようと努力した結果、太閤遺産の百万両をめぐって、各種の勢力や人物の暗躍を知るのだ。

大坂落城後の秀頼の生存説にからむこの黄金さがしには、若年寄の小笠原相模守や目付の下条主膳をはじめ、阿蘭陀屋嘉兵衛、山田長政の裔と称する佐賀闇斎、薩摩の隠密、そして千阿弥の門弟たちや、千華を日本へ送った安南日本人町の人々のほかに、水野越前守の意を受けた武部仙十郎までが加わり、その中で千華の一党や千阿弥の門弟たちの立場にたつ狂四郎は、さまざまな攻撃にさらされることになる。

やがて江戸城大奥から百万両の秘文を手に入れた狂四郎は、幾重にもはりめぐらされた罠を突破して西へ向い、志摩の賢島を訪れ、さらに伊賀を抜けて奈良へ到る。その間、何度も死闘をくり返し、多くの敵を倒した後、ようやく目的を達するのだが、黄金さがしという従来からの素材をたくみに処理して、狂四郎の活躍ぶりをたっぷりと味わせてくれるのは、やはり作者の腕のた

しかさという以外にない。
　物語が江戸を起点にして、道中記がそれに加わるといった運びも、それまでの作品と共通するし、おなじみの脇役や彼を慕う女性たち、またそれぞれ個性をもった刺客や剣客など、多彩な人物群像の登場することも変らないが、読んでいてあきさせないのは、その都度こまかな工夫がこらされているからであろう。秀頼生存説にまつわる村山東庵（とうあん）の事蹟（じせき）を述べたくだりなど、歴史推理のおもしろさがあり、作者のゆたかな空想力は、そういった面にもしめされているようだ。
　虚無の翳（かげ）をやどした痩軀（そうく）異相の浪人、眠狂四郎の像は、すでに大衆の中に定着しているが、しかしその活躍舞台は柴田錬三郎の筆がうみ出す華麗な装置の中にしかないのである。

（昭和五十六年一月）

この作品は昭和四十七年六月新潮社より刊行された。

文字づかいについて

新潮文庫の日本文学の文字表記については、なるべく原文を尊重するという見地に立ち、次のように方針を定めた。

一、口語文の作品は、旧仮名づかいで書かれているものは現代仮名づかいに改める。
二、文語文の作品は旧仮名づかいのままとする。
三、一般には当用漢字以外の漢字も使用し、音訓表以外の音訓も使用する。
四、難読と思われる漢字には振仮名をつける。
五、送り仮名はなるべく原文を重んじて、みだりに送らない。
六、極端な宛て字と思われるもの及び代名詞、副詞、接続詞等のうち、仮名にしても原文を損うおそれが少ないと思われるものを仮名に改める。

眠狂四郎無情控

新潮文庫　し-5-23

昭和五十六年二月二十五日 発行
平成十年四月三十日 二十刷

著者　柴田錬三郎

発行者　佐藤隆信

発行所　株式会社新潮社

郵便番号　一六二―八七一一
東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部（〇三）三二六六―五四四〇
　　　読者係（〇三）三二六六―五一一一
振替　〇〇一四〇―五―八〇八

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社　製本・錦明印刷株式会社

ISBN4-10-115023-0 C0193